明治四十三年十月八日印刷
明治四十三年十二月二十日第三版發行

明治四十三年十月十一日發行
明治四十四年二月十二日第四版發行

明治四十三年十二月五日再版發行
明治四十四年四月五日第五版發行

（定價金八拾五錢）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十一番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

大賣捌所　三省堂書店
東京市神田區裏神保町一番地

同　三宅莊藏書店
大阪市東區南本町四丁目

ワ

北窗瑣談索引　終

ナ

テ

ト

チ

ツ

ス

セ

コ

サ

キ

北窓瑣談索引

（語句の排列はすべて表音式假名遣による）

東西遊記索引　終

テ

ト

チ

ツ

シ

ク

キ

オ、ヲ

カ

ウ

エ、ヱ

東西遊記索引

（語句の排列はすべて表音式假名遣による）

ア

イ、ヰ

北窻瑣談跋

嗚呼先生之於醫、發蒙解惑、以利後世者、其高論至言著述備焉。先生嘗自以爲、宏博未足、東西漫遊、以弘聞見。其趾所歷、勝區陳跡、異物奇事、莫不筆記。而斯編其最晚成者矣。先生之於學、該通精研、不苟守腐說、故其所發確乎有據、炳然可觀。所以游覽之際從容之談有益於人也。諺曰、叩一知萬。觀斯編者、其必有以知於先生之濫矣。

門人 阿州 橘春菴 謹識

に面目を失ひたりといふ、唯にしよの音なしすゐ也

托ー原本詫に作る

實著ー原本じっちよと訓ず

打かゝりて、醫書だにすこし讀ば、療治は忽に出來るやうに思ふ者なり。名高き大儒先生物徂徠齋必簡のごとき人も斯ありしと思はる。余も弱冠の頃は左思ひしなり。是は客氣ある故なり。醫術ほど精細微妙なるものはあらず。其極を言はゞ、其人忠恕の二字を解し、氣膽人に勝れ、又其心愼謹丁寧にて、扨世榮を屑とせず、且日夜心を醫事に用ひ、數年の工夫を歴るにあらざれば、此道の奥妙に至ること叶ふべからず。余も此むづかしき事を知て後は、儒書を讀ことをやめ、其外詩歌風詠の事といへどもふかく心を移さず、造次顚沛にも必ず心を醫事に置て、是を我分上の仁なりと思ふ。又是我心術の本領にして、おのづから實著の地、三十以後我見識の術高くなりしなり。客氣ある間は分外の事のみを言ひて、我見識の高下を誤り居るものなり。

一天明の平安の大火に、是まで狂を病る人の、此騷動によりて、狂の平愈したる有し。此おどろきにて新に狂人になりしは多かりしが、平愈したるは珍しきことなり。都ての事に大なる害をなすものには、又大なる利も有ものなり。

范雎—戰國時代の魏の人嘗て須賀に從て齊に使し還りて須賀の爲に魏王の告をうけ笞擊殆ど死に至り厠中に置かれ纔に逃れて名を張祿と改め秦に入りて昭王に信ぜられく丞相となる後須賀秦に使するに及び先の范雎の丞相たるを見て大

死生を托すべき人は稀なり。むかしには劣りて醫學する人もなくなりぬれば、術も拙きなり。唯子のみ文學をも好めり。死生は命なり。ひたすらに賴むなりといはれしかは、三英きゝて、先生昔をゆかしがり給ふ。殊に明の代は醫も多し。明人の中にていはゞ誰ごときものを得て、先生の死生を托し給ふべき。試にいひ給へ。徂徠しばらく思案して、薛立齋が如き者を得ば可なりと。其時三英思はず手を打て大にわらひ、先生は誠に天下の豪傑にて、學問文才誰あつてかよく當らん。されど、深く學び給はざる事にはおろかなりといふべし。三英不才なりといへども、立齋がごときには讓るべからず。薛氏がごときにて足りとし給はゞ、當今の世といへども其人に乏しからず。何ぞ醫なきを憂へん。先生の見給ふ所ひくしとて笑ひぬとぞ。この事は望月の著述の書の中にても見たりし事ありき。嗚呼徂徠先生豪邁の才を以て博く學問し、殊に醫の子として其學にも頗涉り、醫方小言などいふ著述もあり。素問の評などは見識中中醫師の及ぶ所にあらず。然れども世俗にいはゆる火燵兵法畠水練とかいふものは用に立がたきものなり。

一世間おほく、少し儒學の力ある者の心には、醫學を甚心易き事に思ひ、纔に一兩月

の時呉の季札出でゝ使して徐の君を過る徐の君季札の劔を好す季札心に其意を知ると雖も上國に使するを以て獻ぜず歸途之を獻ぜんとて到れば徐の君已に死せり季札卽ち劔を其の墓の樹にかけて去る此に貴意は樹をかけていへる也

「みかの原をや過て來つらん。」西行津の國に行脚の時、尼の手づから板屋根をさし居けるを見て、「賤が板屋をふきぞ煩ふ」といひけるに、其尼、「月は洩れ雨はとまれと思ふにぞ、」と附たり。宗祇の伊勢行脚の時、小兒の木に登るを見て、「つる〳〵と猿より輕く木に登り、」といひしに、小兒見かへりて、「犬のやうなる法師來れば」と附たる。其外、義家、貞任の衣川の連歌、又、梶原、賴朝の鞠子川の連歌など、卽時の妙皆其才の秀しを見るべし。近世萬治の禁裏炎上の時、公卿皆迯迷ひ給ひし中に、清水谷殿、風早殿を呼かけて、「風早と聞も恐ろしけふの火に、」と宣ひしに、「清水谷とて燒も殘らず。」とつけ給ひし。郡山侯、今より二三代以前の侯にや、近衞殿の御歌の御門人なりければ、ある時上京のついでに參られけるに、折ふし雨降ければ、「五月雨にやうこそきたれみのゝ守、」と遊ばしけるに、取あへず、「あの江この江を探る鵜づかひ、」と附られたる。是等の類みな連歌の狂體なり。

一徂徠先生病甚しき時にいたり、諸醫手をつかねしかば、望月三英を招かれしに、三英診し畢りて、先生の病既に篤し、我儕拙工のよくする所にあらずと辭せしかば、徂徠も打うなづき、今都下の醫師數千萬を以てかぞふるといへども、危き時に臨みて

といふもの の墨を禁裡に獻ずるを見て月ならで雲の上にぞすみのぼる是はいかなるゆゑんなるらんと詠じて油煙齋（一に由緣齋）の號を賜はれり享保二十年八月歿年八十一

四方赤良—太田南畝即ち蜀山人の事也

季札—春秋

に、狂歌は無心體を貴ぶ。理窟體は狂歌の惡道なり。古人、壽老人の贊に、

つく〴〵と見れば短きあたまかな、己が齡のたけにくらべて。

などいひしは、彼理窟體なり。

長かれと何思ひけん此あたま、いきて見するは命なりけり。

など作らばよかるべしと云れし。げにとぞ思ひし。此星池の狂歌多く聞しが、今は忘れたり。其一二首に、詠史といふ題にて數十首有し中に、

御所望の心を季札拜見し、戻りに墓の貴意にかけらる。

雪隱の壺皿を出るさいなれば、范睢で負けちやう祿で勝。

其家の下僕脇差を唯一腰盜取て出奔しける朝、

今よりは何をか思ひたつ田山、人の心の奥のしらなみ。

人の火災に逢て暫かり住居しける見廻に、

やがて家を御立烏帽子かり住居、しばしはこゝにすまのうら店。

一古昔は連歌にて狂せし事多し。畫本大和比事に出たる、和州の僧の、飛鳥香味噌を大臣殿に奉るとて「きのふ出てけふもて參るあすか味噌」と申せしに、大臣殿とりあへず、

十餘編に至る

曉月—連歌の名家にて名を冷泉爲守といへり嘉暦三年卒す

貞柳—榎並貞柳狂歌と書法とを善くし信乗と稱し又二世信海ともいふ松井和泉

ともすれば二條の后ずれさがり。

其ねだはよしやれ〳〵と最明寺。

是等の類彼集に多し。

一狂歌は昔より有る事にて、

曉月に毛のむく〳〵とはえよりし、さる歌よみと人に呼れん。

又、貧しくて年の暮に成ければ、米一石を京極黄門の許へ借りにやるとて、

曉月が師走のはての空印地、とし打こさんいし一ッたべ。

黄門米五斗を使に與へて、返しに、

定家が力のほどを見せんとて、石をふたつに割てこそやれ。

など、草紙に見えたり。近世浪花の貞柳、墨の狂歌より由縁齋の名を得て、狂歌の名大に世に鳴る。其後浪花に芙蓉花あり。近來江戸盛になりて、四方赤良などをはじめ、狂歌の名家甚多し。江戸の人の作なりとて人の語りし中に、

ふむどしの延候といふこゝろは、われに夜這のふたりくるかも。

一笑を發すべし。京にも余が友に星池といふ人有りて、妙に狂歌をよくす。此人の物語

苦惱―原本若腦に作る

一種の發句―世に川柳と稱するもの、柳樽は明和二年に初編の板行ありて爾來續刊し百五

一余十九歳にして郷國を出、糊口の事に苦しみ、且老母に仕へて母の心勞し給はん事を恐れ、又家貧しければ書を求る事能はず、師に從ふ事あたはず。其後は天下に漫遊すること前後四度にして、都合五年餘、それより京に歸りても、日夜治療に奔走し、教授に罷勞し、學問のいとまなく、著述の功を缺けり。殊に幼少より甚多病にして、痩たる事は主家なき犬のごとく、死に近き痢病患ふること四度、時疫傷寒各一度、其外一月二月枕に臥す。輕病は毎年病ざる事も無く、三十八九才よりは重き喘息の病にかかりて、筆硯讀書の事を廢絶す。此喘息の苦惱の爲に學問の志も、青雲の志も皆消し盡て、ひたすらに世事を遁れ、生を養ふことのみには成り下れり。人生纔に百年に足らざる中に、何事も心のまゝには成がたきものなり。

一江戸に一種の發句あり、其集を柳樽と名附く。甚卑俗にして文雅の人の弄ぶべきものにあらずといへども、よく人情の委曲に通じ、世態の變化を述る事妙に入りて、しかもをかしみを帶、その句をよめばいかなる憂鬱の時も顏を不解といふことなし。一兩句を擧るに、

居候こげがすきぢやとたんと喰ひ。

惠南―支那宋時代の高僧

蘭奢待―奈良の正倉院御藏の黄熟香に天武天皇が東大寺の三字を入れて附けられたる名

道策―綱吉將軍の頃の人にて幕府の碁所に奉仕す元祿十六年三月病歿

りしも奇なり。又余が知れる人にも鰻鱺をよく食しわけて、一國の中のうなぎにても、纔に川筋異なればよく辨別して、違ふ事無し。惠南が蘭奢待の香を聞知り、播州の瞽者が蕎麥店の殺伐の聲を聞知り、東谷が仲獻の顏色を望み辨じ、祐菴が車下の鯉を食しわくるがごとき、眼耳鼻口皆各性の長ずる所有と云べし。

一道策本因坊は近世圍碁の名人と云。察元亦其頃の妙手にして、道策と碁を圍むに、勝負たがひにして、其優劣を見る事なし。但碁盤を四面寄並べて一面として圍む時は、察元遙に劣りて一番も勝事能はず。是盤面廣くなれば、察元が眼力行屆きて見る事能はざる故なり。是人才の庶人たる時は格別常人に異なることあらざるに、擧て用る時は大に其巧をあらはすがごとし。

一鐵砲の術近世段々精妙に至れり。余が親しく交りし紀州の士野呂氏、三拾目の鐵砲强藥にして、角的に最初より中りの分附を約し置、一日に千發せり。七八百發の頃より耳の底痛みて堪がたく覺しが、千發後は一方の耳聾たり。鼓膜弛みしなるべし。大筒の一日千發は珍敷事なり。又同國小田氏の嫡子は、三百目にて拾八町の遠町一日に百發して、十八町の町數壹ツも附ざるものなし。是余が彼藩に遊びし時の事なり。

車下―淀河の水車のある下流をいふ水車は淀の城郭の附近に在りしなり

淄澠の水を辨ず―淮南子云、易牙淄澠之水合者嘗一哈而甘苦知矣

き物夥敷集り寄合て水のごとく流るゝを、巨大の人有りて唯水なりとおもひ居るに、傍より顯微鏡にて此水は丸きものゝ集り寄合て流るゝなりと沙汰し居る所無しともいふべからず。此天地間に日月星辰名山大川鯨鯢龍象の類あるを、一滴の清水の中に有る牛のごとく、鯛のごとく、蛇のごとく、鼈の如くなるものと見る人なしともいふべからず。是を論ずれば、佛の天眼を以て清水を見れば、水中の生類漉せども不盡との給ふも實に近し。鄒衍が赤縣神州の如きもの九ツなどいへるは、器量の小なるを思ふべし。余折々此説を談じて、小智の輩の膽を破る。

一江州堅田の祐菴は名高き茶人なり。味をよく辨じて、淀侯の座にて車下の鯉なりとて饗し給ひしを、食し試て、車下にあらざる事を辨ぜしなど、人口にある事なり。又常に水を選みて、下僕に湖中それ〴〵の所の水よしとて毎日汲せけるに、下僕遠く汲事をむづかしく思ひて、近きあたりにて汲み、湖中それの所の水なりと欺くに、祐菴其水を飲て、是は湖中の水にあらずと下僕を叱す。下僕恐れて欺く事あたはず。これ常の事なりしとぞ。實に淄澠の水を辨するの舌といふべし。又京師もつかふやが、官廳にて、三味の丸藥と五味の散藥を嘗て、それ〴〵の藥種なりと辨ぜしに、少しも違ざ

ことなしと
也

運行常に東より西に轉じ左旋して不息。如此なる天地の中に生ずる物皆左旋せざる事を不得、金銀の蔓も東西に延び、都ての蔓草、牽牛草、葡萄、忍冬の類、皆左旋し、人の陰莖までも左旋の姿あり。

一内經の說によれば、人の一晝夜の呼吸一萬三千五百息（一呼一吸ヲ合セテ息ト云フ）是を三百六十合せて人の一年の呼吸四百八十六萬息なり。人一生を百年にして一生の呼吸八千六百萬息也。されば天地は一年に纔に一息、一萬三千五百年を天地の一晝夜とすべし　一萬三千五百年を三百六十合せて天地の一年とし、是を又百合せて天地の一生とすべし。されば天地の壽命は四億八千六百萬年となるべし。奇論一笑を發すべし。

一礬製の至精の顯微鏡にて見る時は、油は丸き物の寄合たるなり。水は三角なる物の寄合たるなり。又一滴の清水を針の先につけて顯微鏡にて見るに、其水中に種々無量の生類ありて、牛の如きものもあり、鯛のごときものも有り、蛇の如き者もあり、鼈のごときものも有りて、皆各水中に遊行すと云。是等の事を思へば、至微の事人智の考へ測るべからざる所有り。猶此顯微鏡の力の不及所に其奥も有べし。されば至大なる所にも亦如此に人智の考へ測がたき所も有るべし。今此天地は丸き物なり。此丸

成而不恃云云―老子第二章及第十章に生而不有爲而不恃とあるを云へるならん聖人は萬物の生ずるに任せて己がものとせず萬物の爲すに任せて己が智を恃む

莊と並べ稱すれども、其意の歸する所異にして、余是を好まず。唯文章の稽古には莊子を讀て益有やうに覺ゆれども、全體の見解は死物にして、物の用に立事なし。老子は變化自在にして、我聖人の道、又釋氏の敎も、其本意は一也と思はる。其中老子は手近く行ひ易く、解し易く、體し易し。余が一生世に處するの心得は、老子の中にも、成而不レ恃生而不レ有といふ句を守る。此句を守れば、我が功にも誇らず、功に誇らざれば人の恨を買ふ事もなし。自然に志も大に成り、勉も怠らぬやうに成ものなり。此句の功德甚大なり。後世に同志の人有らば味ひ考ふべし。

一天地の氣は一年にして一呼吸す。夏至より冬至まで、百八十日の間、北極氣北より推して南に行。故に常に西北の風吹き、日輪も其氣に推れて段々南に移る。總て物皆隨うて推移さる。是天地の一呼なり。此突く息百八十日にして盡れば、引息と成。冬至より夏至まで百八十日の間、南極氣南より推して北に行。故に常に東南の風吹き、日輪も其氣に推れて段々北に移る。すべて物皆隨うて推移さる。是天地の一吸なり。此引息又百八十日にして盡く。都合三百六十日にして一年となり、天地の一呼吸そなはる。如此に南北より強く推す事故に、丸き天地左右より推れて遂に轉ず。故に天の

ては僧侶も盗賊の難に罹ることありといふを袖にかゝる白浪にとりなして歌へる也

長老なり―長老となるに要するの意

鹿名草―萩の異名

語り傳へ、皆々感心して、又京の人寄り合、長老なりの金子京都にて勸進して、終に長老と成り歸國せり。餘り遠からぬ事とて、人の物語りし。其僧の名も忘れたり。

一余が家にて詩歌の會せし時に、戲に難題を出してよみ合けるに、韓信跨をくゞるといふことを、學丹居士、

末終に海となるべき山水は、かねて木葉の下くゞりけん。

世の敎にも成りて、よき歌と座中稱しき。此居士和歌の達者にて、一日に千首の歌心安くよみ、一題百首などよく類せぬやうによむ人なり。和歌の體少し今の風とは異にして、巧なる多し。其中に、

花咲と見しは夢野の鹿鳴草。うつゝに露の置枯すらん。

など詠しは、聞え易くよき歌なり。

一泉州岸和田より二三里許奥の山に、鹽の湧出る谷川有り。奥州會津の山中など、海より三十里も隔りたる地に鹽井ありて、鹽を得ると云。唐土にも北地の海遠き國に鹽井有る事を聞けり。泉州のものは海に甚遠からずして、鹽出るといふ。

一余若年の時より甚老子を好みて數十遍讀み、嘗て註解をも著し置けり。莊子は古今老

諸事切迫にして温雅の氣無くて惡しし。高貴の人のあやまち有りて直に諫がたきにも、詩に作れば云がたき事も穩に述られ、父子の嚴重なる間に男女戀々のわりなき人情も、和歌に詠ずれば障なく通ず。又旅中のつれ〴〵なる折にも、一首の詩を賦して旅情を慰し、又憂憤愁傷の長き夜にも、和歌を案ずれば袖を乾かすたよりとも成る。和漢古の英雄豪傑武夫勇士、詩歌の迹多し。されば道學を本として詩歌風流をもかねたるをよしとすべし。

一關東の一禪僧、長老になるとて、檀越に金子若干を勸進して京へ上りける途中にて盜賊に逢ひ、其金子を奪はれ、いたづらに逗留し居けるに、國許へのいひわけもなくて歸國もならず、無用ながら京へ上り著て、いたづらに逗留し居けるに、京にて、人の、いかなる用事にて久敷京に逗留する事ぞと尋けるに、彼僧答へて、しか〴〵の事なり。其時に和歌一首をよめり。是にて心をなぐさむるばかりにて、歸國の面目も無く、在京の費用も足らずといふ。京の人問て、其歌は何とありしといへば、

苦みの海をわたれば、墨染の袖にもかゝる沖つしら浪。

といひけるにぞ、京の人大に感じて、いとあはれなる事なりとて、心安き人に此事を

しら浪―盜賊の異稱、俗界に在り

すゞみ、ててはてゝらにめは二布してしと歌へるを慶滋頃の連歌師道歌者流の唱へかへたるものなるべし

火宅僧―三界の火宅などいふ語より出て現世の俗慾を離脱する能はざる僧として肉食妻帶の教旨を侮るなるべし

兎角世外に仙を學ぶにはしかずとぞ思はる。

一釋氏の學、近き頃は本願寺宗の僧最よく勉む。他宗に勝るゝこと甚し。是は所謂衣食足而後知二禮節一といふに類して、本願寺宗は女犯肉食隨意にして、世の中の事に心滿足し、其上本寺の學寮甚盛なる事にて、御門主の御世話甚行屆き、且は他宗より火宅僧とてあなどる事を常に中心に思ひ居る故に、其宗の教は一向一心念佛三昧なれども、反て學問を勉る事他に勝るゝなり。

一人は本業をよく勤めて後に、他の事に及ぶをよしとす。少し器量ある人は、我分外の事を志して、本業を守らず。才氣ある人は、他の枝葉の事に流れて、本業を忘る。如此人は、たとひ豪傑なるも、才子なるも、徳を失ふの人にして、事を成就すること能はず。世に益有ること無し。人は其分々有ることなれば、何にても我本業を先よく勉め達して他に及ぶべし。もし本業其心に不好事ならば、速に業を轉ずべし。不好事に居ておろそかにすべからず。然れども、又一生の間に毎度業を轉ずるは迷の甚しきなり。

一詩歌風流の道は無用の物とて、道學者よりは忌嫌へども、一向に風流の心無き人は、

族天に生るゝの語を信じて、父母たる者の天道に生れん事を欲して、其子のいまだ道心も起らず、佛法をも信心せざる者を、無理に剃髪出家せしめ、僧と成すより、成長の後にはやむことを不得法衣を著し、寺院に住職すれども、最初より合點にて出家したるにあらざれば、女犯肉食の人情やみがたく、ひそかに妾を貯へ魚肉を食ふ事なり。是初に父母おのれが欲にて無理を行ひし故に、終に其子に官の罪を蒙らしめ、佛法には破戒の罪に陷らしむ。歎くべく、憐むべく、不便のことなり。

一人生識ㇾ字憂患始とは東坡の言葉なるが、誠に名言といふべし。少しにても智有ればそれ程憂も多し。深山絶海の漁父樵者の無念無想にして一生を終るは、人間の仙境ともいふべし。

一萬葉集に、

樂は夕顏棚の下涼み、爺はてゝらに妻はふたのして。

此歌誠にたのしみの眞境を得たり。又余が友備後の菅禮卿が癸丑孟冬遊二水山山中一作に、兩日山遊遺二俗紛一、轉知佔畢讓二耕耘一、射ㇾ欒籬畔厨皆富、煨ㇾ栗巖頭鑪亦芬、牛跡縱横連二石棧一、機鳴斷續咽二峯雲一、荊公既敗溫公罷、此事村氓總未ㇾ聞。此詩感慨餘あり。

堵庵—京都の人、天明六年二月歿年六十九

道二—中澤道二とて京都の心學者にて後に江戸に下りて心學を弘めし人也享和三年六月歿年七十九

樂は夕顏棚の—萬葉集の歌にあらず、木下長嘯子の「思ひ出はひさごの下の夕

心學—一に道學ともいひ平易なる言語と通俗なる譬喩とを以て善心を啓發し道念を誘導するを目的とする一種の敎義也

石田勘平—梅巖といひ丹波の儒者にて京都に出でて心學を創唱せり延享元年九月歿年六十

假初にも戯れがたき者に成下れり。

一近き年心學といふ事行れて、其講釋には聽衆甚多く、三百人五百人に及べり。最初を石田勘平といふ。此人の時はいまだ甚しからず。其弟子を堵菴といふ、俗稱を手島嘉右衛門といふ。此堵菴の時より大に行はれ、門人も甚多く、諸所に出て講釋す。余も二席其講釋を聽り。甚殊勝の事にて、世に益有る講說なり。堵菴の弟子を道二というて、此人また其師に勝りて大に行はる。三都ともに、其學館を開きて、常に心法を學ぶ。其學館を某舍々々と名附く。京にも四五箇所も其學舍有り。婦人小兒などの耳にも入り易く說聞せて、孝弟忠信の事より、家業商賣家產儉約農業耕作の事に到るまで、手近く敎ふる故に、是にて中惡き家內も、此講を聞しより、家屬むつまじくなり、わんぱくなりし小兒も、父母を尊敬する事を知りて、手習を精出すやうになり、酒興に耽りし手代も、俄に篤實謹厚の行になりし事、余常に甚多く見及べり。但其高弟に敎ふるには、禪學の頓悟に似たる事有りて、少し奇僻の筋にも入るにや。唯一通りの講釋は、平穩正當にて、大に世敎を助け、人間に益有る學なり。

一近世出家の不如法甚多し。官よりも嚴敷罰し給へども猶不止。是は一子出家すれば九

り退て、一時ばかり心を靜め、眼をひらき見しに、家内の人の顏常體のかほにて少しも奇怪の事なし。初に異形に見えしは、終日の勤勞に、殊に炎熱の時なりしかば、心熱上逹して斯見えしにや。其時に女房を手打にせば狂人の名をとるべかりしを、よく思ひかへせり。他の人も亦かゝる事の有べければ愼むべしと、久兵衞のちに人に語られき。

一加茂川の西岸三條邊に冬の頃暫住し事の有しに、夜は川千鳥甚多く啼く。久敷京に住ながら、かく千鳥の多き事を始て知りたり。

一むかしは高貴の御方々も、島原の妓館へ成らせ給ひ、諸侯にても吉原などへ通ひ給ひしとぞ。高貴の御方にもかゝる花やかなる事有しに、後世奢侈超過したりといへども、遊里などの遊は衰へたるにや。妓女にも、其頃のごとき才色兼たる妓女は、三都ともに一人も聞及ばず。余などが見及たる纔に二三十年に不過に、妓女才藝のおとろへ、卑賤の風に落たる事甚し。昔は西行、一休、賴朝、爲兼などいへる人々も、遊女の戲有し事、野史に頻に見えたるに、今にては遊女は上品なるも、下品なるも、一統に皆黴毒なきは無く、一度交れば、其人鼻落、目盲、耳聾る事なれば、中人以上の

磨、大硯には甚便利なり。殊に其石多く產して、價も下直にて得やすく、世間に甚益ある石なり。嵯峨石は多けれども甚下品にして用るに堪へず。

一唐土にて諸の貨物を三段にわけ、最上の物を西洋貨と稱して、唐土より西の國々に渡す。天竺、意機利私、イスハンヤ、阿蘭陀など、何にても價の高く上品なるを悅ぶ故なり。中品は唐土にて商ひ、最下品を東洋貨と稱して日本へ渡すと云。日本は唯價の下直なる物を悅ぶ故なりとぞ。

一小堀某公の家中に何の久兵衞といへる人あり、炎暑の頃役所に出て政ありしが、終日の勤勞に、夏日の事なれば倦つかれて心地もあしく、夕かた漸々家に歸れり。さらば終日のつかれを休んと座につきたるに、我妻の顏牛のごとし。久兵衞大に驚き拔打にせんと思ひしに、傍の下女の顏又赤馬のごとし。我子の顏は鬼のごとし。家內の者一人として異形ならざるはなし。扨は大かたならざる怪異なり。かゝる時に仕損じて、武士の名も恥かしと思ひかへして、直に其座を立て奧の居間にいり、襖をさし切て枕により、眼を閉て物をもいはず休みたり。女房あやしみ、夫の顏色の常ならざるに、詞もなくふしたれば、傍によりて心地いかゞと色々問しかど、久兵衞眼をも開かず叱

故に、後に傳はれかしと思ふ事は記す。但古人の褒貶成敗の議論等は、古書有れば、見る人の心に其取捨は有べきなれば筆を勞するに不及。東坡抔さばかりの才子なりしかど、兎角に古人を評議する事を好めり。後世より評すればいかやうにも議せらるゝものなり。あまり世に益有るやうにも覺えられぬものなり。

一唐土の硯石は眼と云事有りて、石に星の有るを珍重す。眼にも死眼活眼涙眼などいふ事有りて、星に光澤有り、周囘きつぱりとしたるを寶とす。日本の硯石には眼を珍重する事を聞かず。それ故日本の石の硯に眼あるを見たる事なし。但石王寺石など、黑き石に白き筋有りて石王寺の妙とす。然れども、その白筋の所は別段に堅くして、墨を磨の妨に成なり。近來は石王寺の石の白筋無きを最珍重する事になりたり。唐石の眼も實は石の瑕といふべし。

一硯材は薩州屋久島石を第一とすべし。石密にしてしかも墨能おり、又墨澄む事なし。其次は山城の石王寺、若狹の鳳足、甲斐の飴畑、土佐の青石、美作の高田など、硯石の上品なり。赤馬關は上品なれども堅きに過て墨澄むの難あり。加茂川石又甚堅くして、赤馬より甚しく、大硯には用ひがたし。近江の高島は其石下品なれどもよく墨を

石王寺石—丹波國の石王寺山より出づる一種の石、次に山城のとある同國にて加工して世に出しゝにや

祖冲之―支那南北朝時代の人、博學暦法に精通するを以て世に稱せらる

北窓瑣談 後編 巻之四

一算術本邦近世段々精密に到れり。享保に中根氏有り。其後關氏出て大に精妙を加ふ。又久留米侯、諸侯の御身として算學に長じ給ひ、著書多しと云。近年京師に小西傳右衛門、村井中漸、文學の力有りて兼て算法に精し。正木瀬平、三木善右衛門、又算術の名高し。三木翁などは、余毎度律算を論ぜしに、席上にて新に法を作り出して算を布く。其達者なること目を驚せり。唐土は祖冲之が密率より算法精密に入るといへども、圓法に到りては遂に算し極むる事能はず。今に到り三一六或は三一四と色々に論ずれども、猶極めがたき所あり。是圓は陽にして動く物故、算數にかゝらざるものなるべし。

一目前に見聞事は珍敷事もさのみ奇とせず、忠臣孝子異能奇才有りても、唯一座の談話にのみ聞流して、當時皆人の知れる事なれば、別に記録するに不及として年月過る程に、人も我も皆忘れはて、つひに世に残り傳らぬやうになるものなり。余是を惜むが

は宅磨爲氏等一家をいふか

啓書記―名は祥啓、雪溪と號す鎌倉建長寺の書記たり人呼びて啓書記といへり巨勢宅磨についで漢畫風を以て世に名高き人也貞和元年歿す

馬遠―宋の畫家山水花鳥風月すべて妙を得たりといふ

石、諸葛鑑、范古、熊斐、大雅堂、蕪村、鶴亭、梅窓、蕭白、俊明、柳里恭、祇南海、林閬苑、宮筠圃、淺圖南の輩、皆所謂唐畫にて各一家の風有り。今は皆古人と成れり。然れども其畫甚多く、世人のよく知る所なり。是より狩野土佐などの和畫家大に衰へ、弄ぶ人稀なり。其後、應擧、出て、畫風又一變し、近來唐畫家も和畫家も、皆其風味を自然にまじふる樣に成りたり。當今の畫家は、谷文晁、董九如、僧月仙、僧玉鱗、月溪、岸駒、在中父子、蘆雪、呑響、稻嶺、源琦、納言、東洲、竹堂、南岳、僧維明、蘭洲、孝敬、芝山、鬬山、豐彥、義董、應瑞、應受、文鳴、素絢、白猷、義篤、夙夜、探索父子、索道、春甫、五岳、春岳、熊岳、杏堂、武禪、關月、愛石、周山、方中、奉時、祖仙、米山人、桑嗣粲の輩、三都及び侯國の畫家數百千家、指を屈するにいとまあらず。近時にいたり、畫家最盛なりといふべし。

四十六
南郭―徂徠門下の詩人服部南郭、寶暦九年六月歿年七十七
王漁洋―清朝の詩人、其詩神韻を主とす康熙五十年歿年七十八
宅間―畫家に宅間式部太夫といふものあれど金岡と並稱すべきもの

一本邦の畫、源氏物語などにも名手乏しからず見ゆ。されば、古昔も畫無きにはあらざりしに、いかなる事にや、今の世に絕て見ることなきは殘念の事にて、いといぶかし。但金岡宅間の二畫、希に佛畫に殘れり。然れども多からざれば巧拙を論ずる事能はず。其後遙におくれて、啓書記、相藝の二阿彌、僧明兆など畫名あり。其後足利氏の末に狩野元信出て、馬遠が畫風を法とし、引續き狩野氏代々其風を守り、遂に家を成す。是纔に二百年許此かたの事なり。土佐の家古しといへども、中興は狩野氏の前後にて、是亦一家を成せり。雪舟は宋人の畫風を學びて、雲谷數代一家を成す。然れども格別古き事にあらず。されば本邦に畫の事盛になりて、今慥に見て論ずべきは二百年ばかりの事なり。唐土の畫は反て唐宋の畫も多く本邦に傳りて、今に見る事をも得るなり。燈臺もと暗しの諺にも似たるにや。
一本邦の畫變、狩野一家を成す。探幽又別に一家をなして、狩野古代の風大に變じ、今に到り探幽の風なり。土佐一家、雪舟一家、其外は相阿彌、蛇足、宗達、各少しづゝ畫風異なり。近世百川出て明人の畫風を法とし、是より唐畫といふ名目出來て、和畫唐畫の二道と成る。雪溪、鶴山、玉熷の徒は、唐和の間を畫くものなり。其後、宋紫

有譽、徐中行、吳國倫等が風體の詩をいふ

大潮萬菴―東都芝浦東禪寺の僧にて徂徠門下の諸子と交り詩名高し著書江陵詩集四卷あり

元政―原本玄政に作る京都深草の瑞光寺に住す詩歌を善くし持律亦嚴也寛文八年二月寂年

人の重寶する事なり。和歌もよき歌多く、手迹も見事なり。蒿溪の評に、百拙和尙は僧の詩の上手なるなり。大潮萬菴等は詩人の衣著たるなりと。尤の評なり。

一深草の元政上人は袁中郎の詩集を求め、二十遍くりかへし讀て燒すて、其後は一生詩集を見ず、隨意に詩を作られしとぞ。

一南郭を近世の詩の上手なりと誰人も稱して、今に論定れり。余先年其集を一覽せしに、超凡の氣なく、風流の趣に乏し。唯無難に作り得しといふばかりなり。小兒輩の作りならひに、手本とするにはよし。詩の上手とはいひがたかるべし。

一王漁洋の七言絶句甚淡泊にして、遠韻有り。余甚是を愛す。

一醫書の文、傷寒論は平穩にして力有り。奇妙の作、儒書の中にも甚比稀なり。素問の文は玉石混雜せり。然れども、其全體他の醫書の及ぶ所にあらず、拔群に勝れたり。是を讀ば、他の儒書を不讀とも、いかなる文章にても書事自由なるべし。其外後世の醫書は、和漢ともに甚不文なるものにて、文章の手本などには成ものなし。本邦の醫書はわけて文盲不文なり。但賀川子玄の產論、畑柳安の醫學院學範の二書、文章甚佳也。本邦醫書中の第一の文章とすべし。其外の醫書は唐土などへは渡しがたし。

小遺に作る

沈存中―沈括字は存中紹聖元年歿年六十五、夢溪は別業の名也

七子體の詩―明の古文辭學派の七子、李攀龍、王世貞、謝榛、宋臣、梁

一諸侯の國武を勵み野卑なるは、上によき人出給ひて導き教ば、いかやうにも成べし。

一旦文弱の風行れて、菲薄の風俗に流れたる國は、富國强兵の術施しがたし。

一諺に、下子は槌で使へといふ事あり。誠に下賤のものを使ふには、諸事法により、正路に使ふべし。聊にても法外に慈惠を施せば、心附上りして、後には罰せざればやまざるやうに成る者なり。聊の恩惠反てあだと成こと多し。上たる人心得て、下賤の者の罪に陷らぬやうにすべき事なり。國家の夷狄を御するも亦かくの如くなるべし。

一宋の沈存中が夢溪筆談に、宦者陰莖なし。故に髭生ぜず。女子も陰莖なき故に鬚なし。是男子は腎氣外にめぐりて鬚と陰毛生ず。鬚と陰毛とは腎氣の主る所なりといへり。沈存中も東坡などと同じく、儒にして醫のことを言ことを好み、彼畠水練の徒なり。其論はとるにたらず。然れども陰莖をきればひげ絶るものにや。今日本に宦者なき故に其事をしらず。これ等も醫理の一の考にも備ふべき事なりき。

一百拙和尚は道德の僧なり。又詩歌に巧なり。其身享保前後に生れ、海内七子體の詩を珍重する時に、少しも時好を不追、吾思ふ所を作り居られし。今にては詩も新敷見え、

してこそ後々は此寺などの住職とも成べけれ。汝がごとくにては小庵の一ツも得ることは覺束なしと叱られけるを、澄月傍に聞居て、住持の和尚に向ひ、唯今の御異見こそいと心得がたく覺え候。某が朝も早く起き、夜も寢もやらで學問致すことは、天下の高德とも仰がれ、衆生を濟度する程に成べしと志し侍る故なり。かくのごとく出精して、纔に此寺程の住職すべき事は、いと本意なき事に候といひしに、和尚驚きて、汝はをこの者なりとうち笑ひてさし置きぬ。それより澄月思ふやう、迚もかゝる俗僧に從ひ居ては、志は達する事叶ふまじ。京都比叡山は天台の本山にて、碩學高德の僧も多かるべし。いざや登らんとて、玉島の寺を出奔して、十三の年初て叡山に登りしに、路金に盡て困窮甚しきに、其上知る人もなく、受合の世話人もなければ、叡山の寺々一宿をも許さず、國元の師匠或は俗緣親類の賴の上に差置べしとて追出され、行べき方なく、其間に早夕暮に成ければ、難儀甚しかりしを、下部の男見かねて、ひそかに一宿せしめ、かの男の親しき寺をやう〳〵賴みて、山上に留まる事にはなりぬ。其後普く高德碩學の僧を求るに、思ひしよりは其人なかりしかば、本山の衰へ、宗門の末になりしを歎息して、終に風流の道に流れ、歌人とはなりけるとぞ。

澄月―天台宗の僧にて一旦叡山に學びしが志を變じて和歌を學び遂に其妙所に至れり寛政十一年五月歿年八十五

大愚―慈延の號也天台の僧なりしが冷泉爲村の門に和歌を學べり文化二年七月歿

陰德、小使―原本隱德

の浙江蕭山の人、世に學者西河先生と稱す康煕四十六年歿年八十五西河合者は歿後門人の編するもの四百餘卷あり

七兩二步―七圓五十錢

伴蒿溪―京都の國學者也閑田子と號す文章和歌に秀づ文化三年七月歿年七十四

一伴蒿溪、近年奇人傳を撰著して、大に世に行る。三熊海棠又奇人傳後編を草して、いまだ不畢して死しぬ。其遺言に、蒿溪に成就せん事を賴みしによりて、蒿溪また是を修飾して世に弘む。此書出しによりて、近世の人物不朽に傳はる事にはなりぬ。蒿溪陰德の盛擧といふべし。

一當今京師地下の和歌四天王と世に稱するは、澄月、蘆菴、大愚、蒿溪なり。皆各其和歌の風體大に異にして一樣ならず。澄月は老輩にて先達なり。蘆菴は才氣秀發古體今體自由にて、詠歌の上手此人の上に出る者なし。大愚は新敷面白くよみて、歌學に漢學を兼備へて、實に此道の宗匠なり。蒿溪は澹泊を專一にして、言外の餘情を志す、高上の風體なり。又和文をよくして、當今第一と稱す。

一澄月は備中の產なり。幼少より出家剃髮して、同國玉島の天台宗の大地に弟子となり居られしが、或時其寺の若僧懈怠の行有りける時、住持大に怒りて、汝は年も長じたる事なるに、諸行懈怠して何の役にも立べくは見えず。あの澄月沙彌を見よ、いまだ十三の幼年なれども、朝も疾く起、夜も遲く寢て、誦經學問手習等まで殘る所なく出精し、其上に寺中の掃除、臺所の小使までまめやかによく勤む。あの澄月がごとく

文徵明―明の書家字を徵仲といふ嘉靖三十八年卒年九十著はす所甫田集三十五卷あり

銀十八匁―三十錢

二百疋―五十錢

毛奇齡―淸

一近年世上に珍書を好む人多く、無用の書にても、希なる書は甚高價に求ることなり。それ故、僞書なども世に多く出る事になりぬ。寛政巳年には、唐土よりも寫本の珍書を渡し、猶いまだ渡らざる珍書は、目錄ばかりを渡し、高價ならば持渡るべしと云こせしとて、余も其目錄を見たり。多くは僞書と思はる。諸侯にも天下第一の藏書家といふあり。其庫中になき書は價を不論して求め給ふ。是も其寛政巳年の事なりしが、文徵明の甫田集唯一帙のものにて、本數も少き物を、書林最初は銀十八匁にて買たるが、二百疋に成り、一兩になり、三兩五兩と賣買して、終に三十五兩にて求給ひし諸侯あり。庶人にては備前の鴻本氏など、甚書に富りと云。是も家になき書は何にても募り求む。諸國かゝる人多き故、格別珍奇ならぬ書も高價なり。舊き唐書なども、近き年までは三四兩の價なりしが、五十金七十金など云。萬曆板の十七史なども二百金などいふ事になりぬ。其外毛奇齡の西河合集なども、百金二百金と云。近き頃、靈臺儀象志に、儀象考、成曆象考成を添て、寫本にて百金に求め給ひし國もあり。余十年許以前に、靈臺儀象志の板本を七兩二歩にて人の買しを見及たり。纔の年數に、段々珍奇の書は人の爭ひ求る事になりて、高價にもなりけらし。

もあまりに不案内ならず、俳文なども別に一體を成して、淡泊平穏に書たるに、自然に力量ありて、發句よりも文章の方其長ずる所と見ゆ。

一京師の儒は徳行に乏しく、稍もすれば金錢を貪る心見えて、卑劣の情多し。田舍の儒は徳行の聞え多く、廉潔の風有り。是目にも見、又世人のいふ所の論なり。余もかくのごとくなりと思ひ居しが、年歴てつくぐ\傍より見居るに、田舍の先生徳行の聞えも有るが、後に京に移り住して二三年をも歴ると、いつとなく金錢を貪ること、元來の京儒よりも甚し。是京師は衣食の事甚艱嶮にて、油斷なくすれば、飢渴も身に迫り來り、妻子をも離散するやうに成る事速なる故、雅俗貴賤ともに、京師の人は節儉を守り、微細の利をも積て糊口の手だてとする事なり。田舍は是に代りて、住所と食とは大かた祖先より有り來り、衣服は制禁あれば美なるを用るに不及、微細の利を追に及ばざれば、おのづから心のどやかにて、廉潔なるやうに見ゆるなり。地を替ば、京師の儒は其煆煉をへたれば田舍には勝るべし。

一今の麻上下は、大紋の袖を切り去りたるなり。半上下は又其裾を切り去りたるなり。

一古の人鎧に直垂を著せしは、いかなる製の直垂にや。

蝶夢法師—京都の俳人也、寛政四年十二月歿年六十四

歴る—原本へると訓ず

油斷なくすればーなどすれば若しはすれば、の誤なるべし

煆煉—鍛煉の誤か

蕪村―與謝蕪村、谷口蕪村ともいふ、天明三年十二月歿年六十八

嘯山―江戸の俳人三宅嘯山也、享和元年四月歿

一御所の御築地、前方の囘祿の後、御築地も半は崩れたりしかば、新に造り改められしに、其古き崩れ殘りの築地を取拂に、中々容易ならず、甚堅くして人夫夥敷入り、受合の日雇方損失せし事ありしといひ傳ふ。洛西涼安寺の築地も甚丈夫にして、其作りし初、土を大釜にてよく煮、其土を鹽のニガリを以て解きて築地に作りしと云。土を煮る事は、土の生氣を斷絶せしめ、草木の生ざる爲なり。鹽のニガリにて解は、年年に土堅まり、且は螻蟻蚯蚓などの住居なりがたき爲なり。それゆゑに、今に到り石のごとく見ゆ。

一近來蕪村が俳諧才氣秀拔、其作皆人意の外に出づ。學びて到らるべきの事にあらず。其人天然の才なり。畫亦妙品。其中能出來たる山水などは、近世前後に並ぶ人なし。存生の間さのみ畫名の高からざりしは、俳諧に掩はれたると、眞の眼目有る人の世になきとによるなるべし。

一嘯山が俳諧古選は、俳諧諸集の中の最第一の撰なり。其人識鑒に長じて、自運には甚拙し。耳に留れる發句一句も聞し事なし。

一蝶夢法師余親しく交りしが、其人尋常の俳諧者流にはあらず、氣象高逸、且和文の學

阿諛―原本阿愉に作る

赫連勃々―夏主第一世武烈皇帝をいふ

人は謙遜なるかたよし。

一唐土秦の始皇帝の築しめ給ひし萬里長城は、いかなる制度のものにや、書籍にも委しくは見えず、人に問ども知れるひと無し。要害に成る程のものなれば、大なる物と思はる。數千年の今に其まゝ存在すれば、甚丈夫なる者と思はる。長城の東の限遼東の海中に出たる所を書しるしたる書を見し事の有しに、東海に夥敷鐵を入れて長城の根脚として築上たりといふ事見えし。されば淸盛の兵庫の築島に百倍したる念の入りたる事なり。始皇帝は暴惡の天子なりしかど、長城は萬世の利を興し、後世是によりて北狄の患なしと、唐土にても稱せし文まゝ見えたり。今の淸朝に到りて、又此長城にならびて、遼東より東北の地數百里に長城を築かれたり。是を新長城といふ。

一唐土赫連勃々が城を築し時、築地など甚丈夫にて、錐をさして入る事一寸なれば、其作りし人を斬しとぞ。夫故後迄も殘りしや。唐朝の詩などにも赫連臺などいふ事見えたり。淸盛兵庫の築島の時、潮來りて作り上たる島を崩せば、其作りし人を海中へ沈め殺せしとぞ。是を人柱を入れたりといひ傳へり。實に格別むづかしく大なる普請をするには、それ程の殘忍の事をも行ひ嚴敷せざれば、成就しがたかるべし。

を、太閤其容色を聞及び給ひ、召入れらるべかりしを、利休不承知にて、一旦嫁し遣せし女、いかに君命なればとて出しがたし、且は太閤の御勢によりて町人を思替たりと云れんも口惜と、目前の富貴權勢を義の爲に顧ざる所、大丈夫の氣象といふべし。

一細川幽齋其頃風流の聞え高し。二代とも引續き茶道までも一流を成す程なりし。或時蒲生氏郷、細川の茶道具に富給ひしを聞及ばれ、御道具拜見致したし、何れの日に參り候べしと約して、其日に行れしに、細川家に名物名作の武具鎧太刀鎗などに到るまで飾り附て見せられしかば、蒲生驚き、所望致せしは御茶具の事なりといはれしかば、細川答に、道具と承り候へば武具とこそ心得候へ。茶具もいと易き御事なりとて、夫より茶器數種見せ給ひしとぞ。是も皆人のよく語り傳へたる事ながら、本業を忘却せざる、樂めども淫せずといふにも近かるべきにや。すべて其頃の名高き茶人は、大かた勝れたる人にて、今時の俗情甚しき茶人とは大に異なり。但禪僧の其頃茶味禪味同じ事とて、深く耽りしは如何とぞ思はる。

一謙遜なるは阿諛に近し、豪邁なるは放蕩に似たり。むしろ阿諛のそしりを得るとも、

り成る

二代―幽齋及び其の子忠興をいふ忠興は三齋と號す

易き―原本安きに作る

樂めども淫せず―論語八佾に子曰關雎樂而不淫とあるに據る

一角―ウニコール、前出

仲景―張仲景とて傷寒論の著者也

駿臺雜話―室鳩巢の隨筆也五卷よ

は格別なるものなり。

一鯨の牙歯はなはだ一角に似たり。西國北國の海にある鯨魚には歯といふものなし。唯紀州熊野浦より出る鯨には歯有り。鯨の中にても品類の異なるべし。

一肥後の海中に早魚といふものの吻啄、外は鮫の皮のごとし、質は甚鹿角に似たり。魚に有べき物とは見えず。是を以て見れば、一角の魚吻なる事も知べからず。

一醫者たるものの持べき書籍は、内經、本草、傷寒論の三部なり。此三部は生涯讀べき書なり。古今の醫、是を外にしては醫學といふ事なし。扨餘財もあらば千金方貯へ持べし。方を知に便なり。手近くは方彙、古方選の二部を藏るもよし。溫疫論の一書は、傷寒論の外傳ともいふべし。仲景の意を會したる所多し。其外古今の醫書、汗牛充棟かぞへ盡すべからず。大かたは古今の抜書の如きものなり。たま〳〵一見解ある書も、わづかに古人の一斑をうかゞひ得たりといふべし。一遍は眼を觸るゝもよし。讀ざるも亦妨なし。

一利休の臨終のありさまを、駿臺雜話に稱美せられしが、臨終のみならず、利休は卓然たる人物、中々茶人を以て評すべき人にあらず。利休の娘の萬代屋が方に嫁し居たる

前田玄以法印—秀吉五奉行の一人慶長七年五月卒年六十四

わさび颪—正しくはわさび卸に作る、颪は同訓なるまゝに借字したるものなるべし

其細密になりて—甚細密になりての誤にはあらじか

事成ものなり。外に寫しおきぬ。

一人の利鈍賢愚を知の考にもと、鳥獸の死せるを解てあまねく見し事の有しに、牛の胃中には屠兒の方言に、千枚といふものと、蜂巢といふものあり。蜂巢といふものは蜂の巣のごとく、穴のあきたる皮膜のやうなるものなり。千枚といふは皮膜を數十枚重ねて、その皮膜鮫魚皮のごとく、わさび颪のごとくなる物なり。此二物は牛の草を食して胃中にいり、件の蜂巢を一遍透して此草を化し、再千枚を透して細密に化する胃中の道具なり。かくの如く、色々の所を數遍透る故に、生の草を食ふといへども能化して、肛門より出る時は、其細密になりて、能化したる糞なり。馬には蜂巢千枚といふ物なし。唯廣腸といふもの有。又芭蕉腸とも名く。甚廣く大なる腸なり。此所に食せるものを數日留めて、陽氣にて薫蒸し、化して糞にする故に、馬糞は鞕くして疎なり。されば牛などは生草を食すべきやうに天より生ぜしめしものなり。若是に飯餅魚肉の類を食せしめば、粘著して件の蜂巢千枚通りがたく、胃中鬱滯して死すべし。人の腸胃のごときは、唯竹の筒のごとくなれば、粘脂膏粱にあらざれば養ひがたし。生草などを食せば忽ち瀉下して死すべし。皆おの〳〵少しづゝの機關の仕かけ

明の萬暦の天子―神宗皇帝をいふ

て後に人も信ずるものなり。然れどもたゞいたづらに大言を吐ことは誰人もよくすれども、中心靜に省て、自信ずる事は修行の功よく積りたる慥なる事にあらずしては信じがたきものなり。釋氏諸宗の祖師たちの其修行よく足り、扨自ら信ずることの厚きを見るべし。さればこそ一宗をも建立し衆生をも濟度せしぞかし。

一春暉醫を學ぶ事廿餘年、醫學に於ては和漢古今に讓らずと竊に獨思ふ。其他の技藝、年若きより多端にわたりて學び弄ぶ。しかれども何一事人並にも到れる事なし。是は修行の功足らざる故なるべし。未熟の藝にて、時にふれよく出來たる時、人の稱美を得れば、虛なることとは知りながらも、何とやら嬉しき心地す。人の毀を聞ては悅しからざる心地す。但醫學の事を他人の評するにはよしと稱せられても嬉しくもあらず、惡しとそしられても怒り腹立つ心聊もなし。是はみづから安身立命し居る故なり。道義を合點する事もかくのごときの地位に到らば、寵辱も、毀譽も、名利も、心を亂る事は有まじと思はる。古の聖賢は如此なるべし。

一明の萬暦の天子より、前田玄以法印を都督僉事の官に擧たりし勅書を、搢紳家に珍藏し給ひしを拜見せしに、唐紙の大なるやうなる紙にて、四邊に畫欄あり、手迹も甚見

といへども多くは得やすからざる歌なり。豪傑の士、天下の細事何事かならざらん。

一室新助先生の和歌に、忠臣無二の心を、

ならはじなこのでがしはのふたおもて、身は葛の葉のうらみ有とも。

其體は後世の風なれども、詞調ひ、義理穏にて、面白くよく讀おほせたる歌なり。漢學の力何事にもよく通ず。

室新助―室鳩巣幕府の學職となり世に駿臺先生と稱せらる享保十九年八月歿年七十七

一薩摩大隅の田間に、疱瘡をやむ家、粥を多く煮て、其粥の汁を病兒に多く強飲せしめ、殘の粥は家内の者食ひて、なほ餘あればほし飯となす。唯ひたすらに多く食せしむるを上策とす。痘中に數斗の米を煮事なり。唯米を多く煮たるを養生の行とゞきたりとして、富家には數斗に及ぶことなり。故に病人は反つて飲食停滯の患ありて、害を起すこともまゝ有なり。又屋久の島、徳の島、大島邊には、出産の家かならず多くみだりに火を燒事なり。晝夜とも莫大の薪を集めて、唯ひたすら火を多く燒を養生の第一といふ。ゆゑに、富家には一七日の間に、數百束の薪をたき盡す事なり。如此して、上逆の患多からざるも不思議なり。産倚鎭帶の事はむかしよりなしといふ。

一自ら正敷て後に人も亦其命令にも從ひ、みづから守りて後に人も守り、みづから信じ

片輪―充字振假名ともに穩ならずかたはの發音より誤りたるものなるべし

新蒙求―明の李廷機の校輯せる書、一卷あり

に勝れたりと思ふより、後に到り平常の人にだも不及やうに成なり。其父母少しも譽ることなく、隨分才藝德行拔群に勝れたる師に從しめ、其小兒の心にも、仰ぎても其師に何事も不及やうに思はしめ、嚴敷修行せしめば、長年の後なども人に勝れざらめや。余も昔は小兒の奇才を驚き譽しが、其後は才有りといふ小兒には、猶々教訓を加へ、其小兒をして大成せしめんと希へり。其外にも座頭の學問、婦人の書畫、詩文、いか程に名高くても恐るゝに不足ものなり。身體具足の男子の才藝に比すれば、片輪ほどの不足は見ゆるものなり。

一諺に奢の長ぜしを、餅の皮をむくといふ事有り。唐土にも似たる事有りて、新蒙求に、客に餅を出せしに、餅緣を去て食ひしかば、主人怒りて、足下いまだ不飢とて、餅を引取しといふ事有り。餅緣とは餅の少し日を歷て緣の堅くなりたる所なりや。

一吉益東洞翁豪邁の氣象は世のゆるす所なり。但文雅風流の事は聞も及ばざりしが、近き頃人の物語に、東洞翁詩經の詩を題にて、

　やつが原やつれし鹿の聲すなり、妻や戀らん子や思ふらん。

一時戲の詠なりとぞ。其體雄渾、近時の人の及ぶべからざるのみならず、古の作家

て張て柿澁を引けり。傍に口火の穴有り。地に居置て、石などを玉として放つものと見ゆ。昔覺えられて珍敷ものなり。

一宇治橋の南詰より黄檗山の南に連れる山々を見れば、宛然たる荷葉皺の畫法なり。國所々によりて、山々の皺も異なるものなり。

荷葉皺の畫法—山の重疊せる狀を描くに用ふる畫法の一にして荷葉の筋に似たるより云ふ、宋代の畫に靑綠にて畫けるもの多し

一余が家に藏る書畫も、最初に得たる時打見たるに、餘に能出來たりと思はざりし物、月を越え、年を經て後、漸々によき所見えて、今にては甚珍重の物とする物多し。梅窓が山水圖など、最初には甚不滿なりしが、甚妙絶の物にて、祕藏す。書畫は一二幅を數日壁頭にかけ置て、よく〳〵其意を見得て、後に評すべき事なり。數百幅の展觀或は寺院の蟲拂又は開帳の時など見たるは、其書畫の妙所は見えがたしと知るべし。都て是は書畫のみに限らず、詩歌にてもかくのごとし。打見たる時面白く覺え、耳目新敷は眞のよき物にては無し。

一小兒の間に書畫をよくし、詩歌に巧なる、皆人の稱美する事なれども、多くは年長じて後何の勝れたる事も無くなるものなり。其父母或は他人よりも、小兒の事なれば行末頼母しく、奇に思ひて、甚譽る故、自然に小兒の心に油斷を生じ、早是にても世間

植ろ—原本うえると訓ず

一芥子花を書きたる屏風は、古昔不淨所に立たる物なれば、古き屏風に芥子花畫きたるは、座敷には引まじきものとぞ。何の書に出たる事にや。

一土中より掘出す神代の舊物に、曲玉といふものあり。青玉にて作り、形豆莢の如く、もとの方に穴有り。大小一樣ならず。神代の衣裳の飾也といへり。其玉に造れる玉石、今も出雲國に有り。其山に玉造明神の社有り。神代に其地に玉を造りて商ひし人住りと思はる。

一竹は暖國によく、寒國には生ぜず。京師庭園に植る竹も、其根皆西南に向ふ。故に薩摩大隅の邊種々の竹有り。三叉、五叉の竹、或は四角なる竹など、最奇品なり。又京師武井元立家に藏る竹の花生、甚奇品なり。其節斜に纒うて連屬す。螺のごとし。故に竹理も斜なり。近衛家熈公の御作の御花生なりしを、武井元立拜領せるものと云。

一角倉氏の家來兒玉吉右衛門家に、大坂陣中に用ひし竹の鐵砲を寶とし傳へたり。吉右衛門先祖是を放て力戰せし物と云傳ふ。其製廻一尺二三寸許の大竹を三四尺程に切り、本の處には松木にて臺を附、竹には鐵の輪六ツを入れ、猶麻絲にて卷立、紙に

啼盡して、皆死するなり。初生の間に啼出て止ざれば、皆々必死と定むるなり。此症彼地はなはだ多し。小兒第一の難症とするなり。他國にはなし。余すこしく考へし事あれば、方を與へて歸りぬ。其後はいかゞ有しや。

一肥後邊は、下賤の人に、片足ふとく腫て柱のごとくなる病多し。京都などはなき病なり。西國の生の乞食に、稀に此足あるを見ることあり。此病は詩經にいふ瘇といふ疾にや。

瘇—詩經に既微且瘇といふ、足腫見えたるをいふ。瘇ハ足腫ルヽ病也

一肥後の球磨といふ所には、腹痛はなはだ多し。生涯腹痛を患ふる人、余が見し所にも數十人あり。地氣のしからしむる事にして、他國にはなき事なり。東にては越中富山に、亦腹痛甚多し。しかれども、其病因はすこし異なるやうに思はる。

一伏見小倉の湖は、古名を巨掠の入江といひて、淀川に水通ひ、大なる湖水なり。此中に一丈に餘れる大鯉魚二頭住り。此邊の漁者此鯉を鳥羽殿と呼て、此湖中の神靈とす。此鯉出て遊行する時は、鳥羽殿出られたりとて、其あたりには網を下し釣をたれず。余も初は虚談なるべしと思ひ居しが、後に親しく交りし其あたりの事を司る人に聞しに、其人も見たりと語りき。此頃はたえて不出と聞ゆ。

山中の人は云々ー福壽全書に深山幽谷人、多高年者、嗜慾少故也など見えたり當時醫學界に最も普通の思想なりしが如し

北窗瑣談　後編　巻之三

一山中の人は長壽なり。海邊の人は短命なり。すべて肉食の、片よる者は、たとへば燈火をかゝげて明らかなりといへども、油のはやく盡るが如し。天年をはやくかゝげ盡すが故に、壽ならずとぞ思はる。廣く天下の人を見るに、蠻人など皆短命にて五十ばかりにて死するを、日本の七八十歳にて死する者のごとく、長壽を得たるといふとぞ。

一筑前福岡邊には、小兒の瀉下の病多して、救ひがたき難症とす。龜井道哉これを名づけて、暴瀉病といふ。他國にはなき一種の病なり。慢驚風などには似ず。然れども、此病はなはだ治しがたしと龜井子かたられし。

一薩摩には初生の兒、二三歳あるひは四五歳の時に、故無して俄に啼事あり。腹痛のやうに見ゆるなり。何の故とも慥には知れがたし。此病發すれば、一晝夜或は二三日も

元を作りでの意

れ、嫡子の妻となしたりとぞ。佐野の家衰へたれども、今も猶其子孫續きたりと聞り。

圍―數寄屋をいふ

著居―原本付居に作る

親取して―相當なる親

ば、先程よりも遠慮致し居候へども、餘に雨も晴かね候ひぬ。圍に幸ひ釜も煮え居候へば、不苦思召候はゞしばらくかなたへ入らせ給ひて、薄茶にても召上られ候ひなんやといひしに、榮菴もとより好む茶道の事なれば、圍の模樣も見まほしく、然らば御免を蒙るべしとて内に入。懸物より、風呂釜の取合せまで、心有りげに見なして、座に著居たるに、あるじの女出て挨拶す。容色の美麗なるはいふもさらなり、言葉の放氣高して、しかもいさゝか驕慢の色なし。世にはかゝる女も有る物にやと思ひ居たるに、やがてみづから茶を點じて出す。手前さへ拙からず。一しほに風味よく覺えて、程よく飮み、雨も晴たれば一禮して歸りぬ。榮菴歸りて後も猶いぶかしく、けふは誠に仙家に遊びし心地したり。さるにてもかゝる茶人あらば聞及ばざる事や有べき。是は狐にたぶらかされしなるべしと、心中安からず、頻に手代下部などに尋問ひて、彼家見て來よ、名字をも聞て來よと責ければ、手代せんかたなく白狀して、實は若旦那の御妾宅なり。彼婦人は島原の吉野太夫なるを、近き頃受出し給ひて彼所にかこひ置給へるなりといひければ、榮菴大に驚き、我子の心亂れけるも道理なり。我さへも心動けり。かゝる女妻に具したりとて恥辱にあらずとて、やがて親取して表向に迎へ入

廣東―支那の南京福建廣東等より渡りたる絹織物の名、廣東絹紬の略なるべし

筑前學士
貝原氏による

右の文章唯一時出るまゝのいたづら書なれども、其才氣も見るべし、今に到り、吉野が夜具の廣東の切を吉野廣東と稱し、名物となり、茶入の袋にもなしてもてはやし、全盛の太夫の口實とするもゆゑんなきにはあらず。

一佐野榮菴が家は、其頃京都にて人に名を知られたる富家なりしが、其嫡子酒宴遊興を好み、日夜島原祇園町の遊に長じて、家業の事をも忘れければ、毎度親屬異見の上、最早此上は、勘當をもといひし頃、父榮菴北野へ參詣せし事の有しに、途中俄の夕立に逢、とある軒端に雨宿して居たりしに、しばしすれども雨晴かねければ、内より十二三歳ばかりなる奇麗の小女出て、軒淺くて雨もかゝり候はんまゝ、しばしこなたに入らせ給ひて、晴をも待せ給ふべしとて、切戸を開き内に入れ、腰かけに圓座煙草盆など、取そへて出しければ、榮菴悦び、圓座打しき、煙草などのみて、露路のやうすを見るに、燈籠飛石の構、樹木の植やうわざとめかず、物靜にて見所多し。誰人の住家にやと主ゆかしく覺え居けるに、又暫して、前の小女出て、あるじは女のみに候へ

鷄冠雄黄石—鷄冠石の事にて砒と硫黄との化合物也永く空氣に觸れば雄黄となる故に鷄冠雄黄石といへる也

貝原先生—貝原益軒福岡藩の學職也正德四年歿年八十五

ば、世の中に格別の奇石珍玉は無きものといひし。此物語甚實意に覺えし。

一加島屋源太兵衛所藏に、雞冠雄黄石の見事なるあり。其大サ拳二ツ合せたるばかり有りて、色珊瑚のごとく光潤にて、無瑕なり。珍奇の品なり。

一筑前の貝原先生京都遊學の時、いまだ年若く居給ひしかば、折々は島原の靑樓に遊びて、小紫といふ太夫に契りしが、遊學の年限みちて歸國の時、小紫別を惜み、己が姿を繪に寫し、

姿こそ繪にはうつせど中々に、通ふ心は筆に及ばじ。

と一首の歌を詠じ、書附て、貝原に贈らんとするを、小紫が姉女郎吉野見て、先生は尋常の人にあらず、みづからも一言を贈らんとて、繪の上に、

玉琴のひく手あまたの浮れ女に、誠有りと心を盡す人こそあはれにもまたをかし。すべて男ほど淺々しきものはあらじと我のみ思ふかもしらず。古の佛刀自、靜なんど、實なしと云人もやぼらし。實あだし野の露消なむ命、我もしらず、人もしらず。遊ばば遊べ、西へ東へ。

いくたりの目に鹽こぼす糸櫻　　都の遊女　よし野

て一刀平五千ともいふ
やう〳〵ー原本よふよふに作る

め貯る名高し。其外にも三都の中の好事家、侯國の逸人、藏石の名に高き人近年夥し。余も諸家の奇石を見しに、皆一家の藏る所三千五千種に到る。五日十日の力を盡してやう〳〵眼をふることを得るなり。其多き中にも、格別に目を驚す程の珍奇の物は無きものなり。源太兵衛物語に、過し年、北國より人ありて、拳の大さの夜光の玉ありよく一室を照らす、よき價あらば賣んといひしかば、即座に其人に托して、其玉求めたし、暗夜に其玉の入たる箱の内計白きやうに見えば金五十兩に求べし、又其玉にて暗夜に大なる文字一字にても讀得られなば金百兩に求むべし、又其玉にて書狀を讀程ならば三百金、いよ〳〵一室を照らさば我身代不殘の力を盡して求べし。急ぎ媒して給はるべしと云やりしが、其後何の便もなくてやみぬ。空言にて有しと思はる。又紀州より、水晶の中に水有りて、其水中に小魚の遊行せる玉ありと云人有りければ、是も數百金の價を出さんといひやりつるに、取落して其玉破れたりといひこせし。是も僞と思はれぬ。又大和國に、掛目の重さに輕重有る石ありといひしかば、求んと思ひて取寄せ衡りて見しに、少しも輕重する事なし。唯手にて提見るに、輕く覺ゆる日と、重く覺ゆる日ありと、賣る人のいひければ、興さめて戻しやりぬ。是にて見れ

見及びたる中にも、乾元重寶の大錢一文を金七十五兩にて求し人有り。又聞及びしには、得一元寶一文を銀四貫目にて買しといふ。又皇祐元寶を金百兩にて得たりと云。一文の錢金百金に到れるも甚しといふべし。錯刀などは、有らば數百金の物なれども、海内に眞物なしといふ。いかゞなりや。

一寛政七八年の頃、俗に唐たちばなと云草大に世に行れ、もてはやす事になりぬ。其實色白く、葉の緣白く、或は葉長く、大なるもの一本を五十兩百兩にて競ひ求めけるを、耳も驚く事と思ひしに、江州參州邊に一本の價千金に及べる物有りといへり。況や二三百金のものは、植木屋の少し手廻る家には皆貯へたり。奇中の怪事といふべし。是は商賈の輩利を射るが爲に、彼家のたちばなを此家に買、此方のたちばなを彼方に賣などするたび毎に、段々其價相增して、終に如此に到れるなり。是までにも蘭の奇品、牡丹の名花など、價百金に到るもの有りと人の物語にのみ聞居しが、百金の外に出し草はいまだ聞も及ばざりしに、世上利を貪る心甚しきより、かゝる怪事も出來るものにぞ。

一江州山田の浦の木之内古繁、伊勢の山中甚作、浪花の加島屋源太兵衛など、奇石を集

乾元重寶—唐肅宗乾元年間に鑄造したるものにて大中小三種あり

得一元寶—燕の子思明の東都に在りて鑄造せしもの、大錢也

皇祐元寶—北宋の仁宋皇祐年間に鑄造せし貨幣也

錯刀—王莽の鑄造せしめし貨幣に

高かりし人也

段々ーずたずたなどいふに同じ

中心ー刀心（こみ）とて刀の本の欄の中に入る處をいふ

とて、其人より祕傳を得て、寛政の初より刀鍛冶となる。此傳銅鐵きたひとて、鐵に銅を多く入れて鍛ふ事にて、他の鍛冶の法とは別流なりとぞ。其刀よく鐵を切る、名作の兜の鉢或は鎧の札等を切こと泥のごとし。六寸釘などを切るに段々となる。其人の說に、戰場に用ふる刀劒、鐵を切らざれは益なし。燒刄中心などの上手下手見事不見事を論ずるは無益の事なり。燒刄などは細工物なればいかやうにも出來るものなり。燒刄見事なりとて、切れ味の爲にはならずとて、中心のヤスリ目などいふことも無く燒刄甚不見事なりとぞ。他の鍛冶とは其法大に異なり。論も大に異なり。他の鍛冶より云ば、鐵には銅の和せぬものなり。金などを入れ、銅を入るゝなどと人を欺くの事なりといふ。左も有べく思はる。但し黑田が法は別に祕傳有りといふべし。北史藝術傳曰、綦母懷文傳曰、懷文造二宿鐵刀一、其法燒二生鐵精一、以重二柔鋌一數宿則成二剛鐵一。以二柔鐵一爲レ刀、脊浴以二五牲之溺一、淬以二五牲之脂一。斬二甲過三十札一云々。是によりて見れば、黑田が法もなき事にはあらずかし。

一近き年古錢を弄び貯ふ事行れて、好事家競ひ誇る事なり。諸侯にも數萬金の古錢を貯へ給ふ御方も多しとぞ。其外三都の富豪侯國の諸士などにも、其名高き人多し。余が

讀ても、佛性の見を磨かずんば、此文ほどの事も解しがたかるべし。

是とてもかかりそめならぬ、わかれてはかたみとも見よ水茎の跡。

一文湖洲竹詩一字至十字爲句

竹、竹、森寒、潔綠、湘江頭、渭水曲、帷幔翠錦戈矛蒼玉、心虛異衆草、節勁踰凡木、化龍枝入仙坡、呼鳳律鳴神谷、月娥巾帔靜苒々、風女笙竿淸籁々、林間飲酒碎影搖罇、石上圍棊輕陰覆局、屈太夫逐去徒悅椒蘭、陶先生歸來但尋松菊、若論檀欒操無敵於君、欲圖瀟灑之姿莫賢於僕。

一東武の官庫に、三條宗近、相州正宗等、刀劔極意傳授の祕書有しを、此まゝ官庫に祕し置れんは益なし、鍛冶の堪能を選み借し與へられて修行せしめ然るべしとの御沙汰有りて、刀劔鑒定の達人神田白龍子に命ぜられ、寛政丙辰年白龍子の吹擧に依て、因幡壽格を遠く東武に召れ、彼祕書を借し與へられし。壽格今度の選に逢しこと鍛冶の身にとりて規模の事なり。

一寛政年間京都二條新地二王門通に黑田傳兵衞といへる刀鍛冶有り。此人もとは庖丁菜刀の類の鍛冶なりしが、さる人の目利にて、後々修行せば刀鍛冶の名人にも成るべし

堪能―原本例のたんのうと訓ず

選―原本例の撰に作る

神田白龍子―江戸の兵學家にて軍談に長じ一時東都に名

鬆黄色如蒲黄、其堅凝如石者名石中黄云々。俗に岩壺といふ。鍾乳石の酸化鐵を含みたる如き物也

龍骨車―水を田に注ぐ器械

といふ類にや。薩摩のギチには其品大に異なり。〇穴の中には金を掘る者の外に、穴の崩るべき所に木にてわくを作りて諸所に入るゝ大工あり。又底深く入りたる時には水多く出て掘りがたき故、水をかへ出す役目の人足あり。其水をかへ出す道具、龍骨車の如きもの品々有り。以上の物語みな島川生の物語なりき。

一一休和尚の母君、末期に一休和尚へ贈り遣さるゝ文の寫とて、學丹翁の持傳へ居られけるを借りて記す。其文云、

我等娑婆の緣盡き無爲の都に赴候。御身よき出家に成り給ひ、佛性の見を磨き、其眼より我等地獄に落るか、落ざるか、不斷添か不添かを見給ふべし。釋迦達磨をも奴となし給ふほどの人に成り給ひ候はゞ、俗にても不苦候。佛四十餘年說法し給ひ、終りに一字不說と宣し上は、我と見我と悟るが肝要に候。何事も莫妄想。あなかしこ。

九月上旬　　　　不生不死身

千菊丸どのへ

かへすがへす、方便の說のみを守る人は糞蟲と同じ事に候。八萬の諸聖敎をそらに

のびると訓ぜり・・

三寶荒神―佛法僧の三寶を守護する神の名、竈を居處とするより竈の神として祭る

禹餘糧石、黄―三才圖會云、生池澤及山島、石中細粉如

ケダへと云。ケダへする所より奥に入れば、人の呼吸も絶て死す、故に入る事叶はず。もし金多く有りて、強て入らんと欲すれば、重ね土器とて、燈心草を格別多く入れて、土器二枚に火を點し、火氣と火氣相接してともるやうにするなり。又三寶荒神といひて、一ッ土器に火を三ッともし、火氣相接するやうにする事有り。是にて暫は深く入るべし、然れども強て深くは入がたし。故になるたけは上に向うて井のごとく穴を穿ちて煙を通し、或は横さまに隣の穴に掘りぬきて氣を通ぜしむ。又最初より隣の方に穴も無く、山も高くして上にも穴を穿ちがたき時は、添煙と名附て、穴二ッ並べて掘り入る。ソヘケブリとは添煙出しと云略言なるべし。○穴の中に入る燈火、昔はサヾイ殻に火をともして入りしが、今はいかやうに振廻しても自由になりて油のこぼれざる土器に、竹の柄を附て持入るなり。燈心草は凡三四十筋も入る也。○山氣の病人には甚温補の藥を忌む、もし人參などにても用る時は、早く死するとぞ。○金を掘りし古穴、年久敷なれば岩間より黄泥流れ出て滴り、落かたまりて禹餘糧のごとく、石中黄のごとくに成る。是を佐渡にてはスホウ石といふ。スホウとは蘇木といふ事なり。赤き石と云心にてかく云とぞ。然ども、其石の色は黄褐色なり。薩摩國にてケイチン

牛を操に與へ杯を以て屋上に擲つ鳥の飛ぶに似たりといふ

微恙—原本びちつと訓ずれど、恙にちつの音なし

延る—原本

病をヘッペと云、其咳嗽の聲ヘッペといふがごとし。故に名とすとぞ。諸國ともに、金銀銅錫ともに掘る者には皆此病有り。是燈火の油烟外に散らず。其人の呼吸に引れて鼻より入り、肺臟の穴に其油烟粘著する故に發する事なり。如此に此業をする人は必死の病の發する事を知る故、賃錢給金を高直に貪り取り、其金錢にて大酒淫亂喧嘩口論等を恐れ憚らず、頭分の人の命令をも用ひず、無頼の悪少年手に合がたき者計とぞ、いたましき事なり。余多年此病を治するの方を考るに、近頃薩摩國より一方を得たり。別に醫話に記す。○又金を掘る穴を佐渡にてマブと云。穴中の働く場所をシキと云。其マブに色々の名あり。當今盛に掘る穴を青盤マブと云。また鳥越マブと云もあり。是よりも金出るなり。佐渡の方言に青石の大なるを盤と云。青盤マブとは青岩の穴なる故なり。その青盤マブ甚深し。曉に穴に入りて奥に到り、其まゝ歸り出るに暮に及ぶと云。されば穴の深さ半日程有りと思はる。○金の蔓は根深く入有るものなり。銀の蔓は淺く浮上りて有ものなり。金の蔓は白き石なり。此蔓に掘當れは其つるを傳ひて金ある所に到るべし。此蔓東西に引ものにして、南北に引事無しとぞ。是は天の運行に引れて延るもの故なるべし。○穴深く入れば、風氣絶て燈火滅す。是を彼地にて

釣針、釣體、釣上─原本鈎針、鈎體鈎上に作る

左慈─三國時代の人、五經に明かに兼ねて星氣に通ず或時曹操之を殺さんとし僞に酒を設く慈簪を以て杯を畫す酒中斷す其左を飲み其

を釣體をなせしに、頓て三寸許の鮒を釣上たり、是ばかりにては酒の肴に不足なり、何ぞ青物を作り出すべしとて、かの重箱の水を捨て、其中に砂を入れ、菜種を取寄せ、重箱の中に蒔て、又重箱を三方の上におき、風呂敷をかけて、しばらくして最早生出べしとて重箱の蓋を開くに、件の砂中に二葉の青菜十分に生出たり。是をつみ取りて吸物にすべしと命ず。又紙をもみて掌中に握れば雀の玉子となる。其玉子を暫掌中に暖むれば、忽雀と成りて飛出づ。其外奇妙の術數々目を驚せり。委しく聞にみな手づまにて、幻術の類にはあらずと也。唐土の左慈が盃を飛しける術も奇とするにたらずと見ゆ。

一 一とせ佐渡の國金山の役人島川氏上京せし頃、微恙ありて診察せしついで、金山の事を聞しに、金を掘事を業とする者は、必其後病を發して死す。早きは三年五年、遲きは七八年、十年を不過して死せざるは無しとなり。其病を彼國にてヤマケといふ。其病はじめは咳嗽出て、面色青くなり、氣急の氣味有りて、登り坂などは黄胖病のごとく、息遠しく堪がたく、常の歩行も健にはなりがたし。如此なること半年或一年許にて、段々羸瘦して死に至る。此病發する者一人も癒ることなしとぞ。薩摩の金山にては此

壺―原本坪に作る

載せ―原本乘せに作る

一寛政の初に、長崎に每度渡り來りし孟涵九といふ唐人は、日本のかなをよく書覺え、和歌俳諧狂歌の類をも少しづゝは作り覺えたり。和書をも讀覺え、和語をも大抵はよくす。日本へ渡り來らざる者にも、南京邊には好事家に和學を好み、和書を多く貯へたる人も有りとぞ。奥州の漂流人寛政八年南京に久敷逗留せし折節、彼地にて振舞に招かれ、膳椀壺平燒物皿まで、器物料理皆日本流にて馳走せし人有しといふ。されば近來にてはいかなるかな書にても、唐土にて吟味せば讀ざる事はあるべからず。既に二十年許も以前に何とかいひし唐本を見し事の有しに、其中に年號を論ずる所に、寶曆は日本の年號なり、日本馬場信武が著す周易指南抄に見えたりと引たる文有りし。二三十年も以前に信武の指南抄唐土に渡り居て、彼方にて讀たりしと見えたり。二十年許前さへかくのごとし、況や近年萬國ともに太平日久敷、文運月々日々に開けたるに於てをや。

一余江戸に在し頃、去る諸侯の座にて、手づま、品だまといふ藝者を召れしを拜見せし事の有しが、甚上手にて、目を驚かす事多かりし。重箱を持出、三方に載せ、内を改め、扨水を取寄、其水を重箱の内に入れ、短き竹に釣針を附てかの重箱に下し、魚

京都法藏寺の開祖にて詩歌茶事丹青に名あり寛延二年二月寂年八十三

地金のけつこう—原本けつかうとあれど結構なるべしとて改めたり

れたり。價五百金のよしにて、地金のけつこうは云に不及、彫物の丁寧長常一生の精力を盡して造り、裏に大日本越前大掾長常と金の象眼銘を入れ贈れりとぞ。其象眼もチキリ象眼とて、年を歴ても抜落ざる手際の細工に入れたりとぞ。是等は面目の事なり。

一日本の戸障子疊など、萬國に勝れて勝手よき仕方なり。安永天明の間に長崎へ來り居し阿蘭陀のカピタン役イサアカテツシンキと云へるは、甚本邦の製を慕ひ、阿蘭陀館のカピタン部屋を日本流に作りて住りとぞ。其頃の阿蘭陀大通事役吉雄幸左衛門家は、又阿蘭陀を學びて一座敷を別に敷瓦にし、其二階は板敷にして、青漆塗の楷子欄干等を設たり。余も吉雄家に尋しに、さながら阿蘭陀館に入りたるごとく有し。されど疊なければ主客皆曲彔に腰をかけ、茶酒の類の獻酬其外の飲食も甚不自由なる事なりし。

一カピタン役イサアカテツシンキは好事の男にて、學問は兎角唐土の文字便利にて微細なりとて、支那學をし、少しづゝ漢文を作る事も出來、唐土の書籍を讀事はよく讀りとぞ。

澤庵和尚—武藏國品川東海寺の開祖、正保二年十二月寂年七十三

道歌—修身道德の意を說きたる歌

初音の僧正—興福寺の別當花林院の僧正永縁

百拙和尚—

金七十五兩にてうれたりといへり。今は何人の手に入りしにや。

一寛政十年戊午の年正月、大隅國の人池田甚兵衛上京して余が家に逗留し、余が爲に木の下の琵琶を寫して新に琵琶一面を作り贈らる。始て都に上り造りたりとて、其琵琶の銘を美耶古と名附し。余が家の寶とす。

一澤庵和尚は道義の外、唯茶事などにのみ其名高く、折ふし和歌も見ゆれど、道歌やうのものにて、茶人のもてはやす計にやと思ひ居しに、さはなくて和歌の道よく心得居られし。烏丸光廣卿御點の百首も有りとぞ。其中面白き歌多きに、わきて杜鵑の歌。

　老らくの耳にはうとき時鳥、思ひ出るぞ初音なりける。

光廣卿も殊に感じ給ひ、脇書に、初音の僧正同日の談にあらずと賞美し給ひけるとぞ。

近き頃百拙和尚の百首の詠草、烏丸光榮卿の御點有るを見しが、是にも面白き歌多し。誠に卓越の才有る人は、瑣末の小技何事か出來ざらん。

一安永年間、或諸侯へ朝鮮國より頼みて、乾隆帝へ朝鮮王より獻上の物のよしにて、京都御幸町の彫物師長常へ、赤銅の手爐の火屋に、八重菊のすかしを至極丁寧に申附ら

潔齋―原本潔齋に作る

七番 左 大唐花 右 御前 右強キ持
八番 左 三日月 右 小唐花 右強キ持
九番 左 白龍 右 新白象 左勝
十番 左 犬引 右 毛長丈 左勝
十一番 左 渭橋 右 大紫檀 左勝
十二番 左 耳道 右 元興寺 右強キ持
十三番 左 玄象 右 牧馬 格別之靈物不及勝負之沙汰也

一延喜の御物に名物の御琵琶十七面あり。今の菊亭家に御所持の巖といふ琵琶は、此十七面の内なりとぞ。

一當今伏見宮の御祕藏の第一の御琵琶を大虎と云。今は甲離れ有りと云。先年拜見を願ひしに、花園帝の勅封にて、七日潔齋して拜見すべきよし、宮にも御潔齋有りて、御開封のよしにて、其願をやめたり。それより次の御琵琶にも孔雀などいふ名物多しとぞ。

一村菊といふ琵琶、甲ばかり離れて、伊勢山田古道具やに有り。草書にて村菊と甲の裏に見えたれば、おきくと讀て、古道具の會、たび毎にあなたこなた纔に四匁三分づゝにて買とり、一三年も有しが、後に尾張の人買去りて村菊なる事を知り、其後江戸の方へ

臺は最高しとなり。

一熊野は東西甚長く、百里に近し。然れども南北甚狹く、海濱より北に入る事纔に五六里六七里なれば、大和國吉野郡なり。半より東にては伊勢國なり。雄鷲の山奥には聊の平地もなく、六七里の間も民家なし。木の本は山奥に百ヶ村許も有りて、一里半里には必民家有り。聊づゝの平地ある故なり。しかれども四五町と打開きたる平地は絕てなし。

一承久二年三月朔日御琵琶合有り。其記錄卷物にて判の詞等詳なり。奧書に「西園寺相國公相公御自筆の本を以て書寫す。持明院三位宗時卿許可門人井上光美書」と見えたり。

琵琶合十三番

番	左	右	判
一番	末濃	井手	持
二番	木繪	小琵琶	持
三番	花園	狗犬	左勝
四番	賢圓	三等	右勝
五番	十二時	新御前	右勝
六番	大鳥	黃菊	右勝

憲廟―德川五代將軍常憲院殿綱吉

有德廟―德川八代將軍吉宗

神息―刀工年代未考

六代御前―平維盛の嫡子後に妙覺と改めて高雄にありしが二十六歲の時源賴家の爲に斬らる

り。形牝狗のごとく、毛色茶褐にて、細微の雜毛有り。四足の爪甚鋭にて、鷲の爪に似たり。面長く目ほそし。見る人其名を知る事なし。其後下總の旅人に語りしに、彼國にてマミと云ものなるべしと云へりとぞ。伊勢山中にはコアミと云獸有り。狸の大なるものに似たり。彼井中に落たるは其コアミにもあらずと、我友人櫛田の奥田太民物語なりき。

一熊野海濱にて三大邑あり、木の本、雄鷲、長島と云。皆千軒の所なり。其地狹隘なれども、頗富饒の地なり。雄鷲木の本邊より浪花へ出るに、間道の近道あり。嶮岨を越て、大和國吉野郡上市村に出る。壯者は二日にて上市に達す。浪花まで四日路にて達す。春の日は、至て壯者は三日にても達すと云。此道を姥ケ峯越と云。王臺山の一里西を歷て行。其地を王臺が辻といふ。姥ケ峯の南の方に道二筋あり。一筋を池の嶺通といふ。高山の嶺に池有り。其池中に神靈あり。又池水の中に浮木といふ物有りて、折々此浮木水上に遊行す。其時は必大風大雨等有りとなり。

一王臺山は熊野の奥に當りて、和州吉野郡の深山中の高山なり。伊勢の宮川、熊野の新宮川、紀州の紀の川、此三川の水源なり。中王臺、南王臺、北王臺の三峯あり。中王

一河内國坪井宮の社務多田修理は、石川源氏の後胤なり。古器物多く所持せり。八幡太郎の弓も有り。楯無しの鎧も有り。神功皇后の鉾もあり。其鉾長刀の如にして、ひぢ坪のごとき金物有りて、柄の傍に身を附たるものなり。憲廟、有徳廟の御時にも、上覽に入りしものとぞ。

一伊勢山田外宮の宮崎の御文庫に、俵藤太秀鄕の太刀有り。有徳廟の御時上覽にも入、本阿彌鑑定を歷しとぞ。其時身を磨しめ、宮より白鞘を賜りしなり。作は神息と云。然ども銘はなし。長二尺三四寸許直燒なり。柄と身と同鐵にて連りたるものなり。頭の紐を拔去り、金物を取れば鍔頭の方へ拔くるなり。柄の鐵厚サ三分許、元來の鞘は木綿にて包み澁を塗たるごとくに見ゆ。奇製の物なり。

一伊勢松坂の西三里許に日川といふ所有り。此所に五輪の石塔百餘有り。中に一ッ自然石に唯有二一乘法一といふ五字を彫たる石あり。其外には文字有る塔なし。傳へ云、平家六代御前の石塔なりと。又文覺上人の碑も有りといふ。日川といふ村は、堀坂山の麓、矢下村の隣村なりといふ。六代御前の舊跡といふこと、いぶかしき事なり。

一寛政九年丁巳九月、伊勢國櫛田にて異獸を得たり。民家の井の中に落たりしを捕得た

十月殁年六十

岳武穆―宋の岳飛、武穆は其諡也

石川源氏―源義家の第五子義基の嫡子義兼河内國石川郡を領して始めて石川氏を名乘る其後裔を石川源氏といふ

ひぢ坪―戸の開閉の料として柱又は戸に設くる金具

十四

半夏—三白草科に屬する植物にて根は藥用にす

黃蓮—毛莨科に屬する植物にて根は藥用に供す。

茯苓—黑松の林中に產する菌類の一種にて藥用に供す

淺見絅齋先生—山崎派の朱子學者也正德元年

浪花の藤田氏所持の藥園、攝州中山の近邊にあり。其藥園の尾林村に產する半夏と、木之部村に產する半夏、纔に二村の間三里許を隔てたるに、木の部村の產は格別上品にて、同じ升目にても重さに甚不同有りと、藤田氏物語なり。是にても名醫別錄の半夏の量の今と符合せざるを知べし。黃連茯苓も、日本の產萬國に勝れりとぞ。

一淺見絅齋先生赤心報國といふ四字を彫附たる刀を常に帶せられしと聞居しが、浪花の藤田仲達此刀を傳へ得て所持せり。余藤田氏にて見る事を得たり。伊賀守金道が作にて、長二尺三寸、幅一寸三分、かさね四分。深き匕有り。殊の外の大物なり。はゞき赤銅の一枚はゞきにて、其はゞきの裏表に、赤心報國の字置上に見えたり。楷書なり。絅齋先生自筆のよし、西依成齋先生審定の添書に見えたり。鍔は鐵のすかしの角鍔甚厚し。緣頭は鐵にて、唐草を金象眼に少し入れたり。柄は元結卷なり。赤心報國の四字は、岳武穆の脊中に黥し居給ひし文字なりとぞ。

一浪花の松本周助奉時道人と號する人の家に、三足の蝦蟇の乾物あり。諸名家の詩文有りて、實に奇品なり。其後の物語に、近年又六脚の蝦蟇を得たりと。天地間無き物はあらずといふべし。

といふ意に説くを常とす

伶倫家—音樂家

大德寺—山城國愛宕郡大宮村（紫野）に在り臨濟宗大德派の本山也

白隱—駿河國原驛松蔭寺の住職にて高德の譽ありし僧也明和五年十一月寂年八

てて十一月の律とす。故に十月の律は上無律に當る。是に依て十月を上無月といふなり。

一紀州和歌山より二里ばかり東に岡田といふ所有り。其地に桑原角之進といふ人有り。桑原彈正少弼の後胤にして、舊家なり。其家に昔より青山の琵琶を持傳へたり。今に到り珍藏せりと、其家の聟浪花河内屋三右衛門物語なり。

一宋の卽耕和尙、大德寺の祖南浦を送る語に云、相送當門有二脩竹一、爲レ君葉々起二清風一。白隱和尙此語を讀て、喜で曰、得二言語三昧一。その後、白隱和尙僧徒に佛法を說示すに、自由を得られしとぞ。

一淮南子に、文王十五歲にして武王を生むとしるせり。聖人は天地の秀氣を得たるものなれば、其陰陽の氣も又充る事の早きにや

一砭の法はいかなる物にや、和漢ともに古の法の絶ぬる事こそ殘念なれ。外科大成などにいふ所の砭の法は笑ふべきの甚しき事なり。

一半夏は日本のもの、萬國に勝れて上品なり。唐土の產など、日本の半夏には似もよらずといふ。同じ日本の內にても甚甲乙あり。一國の中にても其地の差別ありとなり。

座禪觀法—靜坐して是非得失の境を離れ一向に眞理を觀念すること

神無月—神は鳴神にて雷鳴なき月

ひ傳ふ。印記はなし。又藤樹書院所藏の釋祭の式を書る卷物を見るに、其說には、十哲に、曾子、有子、子思、孟子と記せり。此卷物は明末の物と見ゆ。此說東涯の說に異なり。いづれか是なるべきや。

一薩摩に一士人あり。若き頃より常人に異なりて、深く佛道を修し、みづから無人相菩薩と稱し、世事を意とせず、奇異の人なり。佛畫をよくし、多く畫けり。又經文の文字を細書にして、おのづから佛像になるやうに畫き、信心の人には附與す。雲水の行脚などは多く彼國にいたり、此人を拜す。此菩薩、或時別府藤藏へ物語りせられしは、夜更人靜まりて座禪觀法の折節にても、若き女の聲して三味線を彈き、端歌を艶に高くうたふを遙に聞ば、何となく心動くものなり。まのあたり美人を見るにも勝れり。我だもかくのごとし。足下など年若き人は深く恐れ愼むべき事にこそと、しみ〴〵と告られしと、藤藏余に語りき。藤藏は薩摩の人にて、余彼國に在りし頃殊に親しく交りし人なり。

一本邦の俗十月を神無月といふ。和書を說人、種々の異說有れども、皆牽强附會の說にして信ずるに足らず。余考るに、本邦伶倫家用る律呂の配當、壹越律を黄鐘律に當

て有名なる畫家也安永五年四月歿年五十四

東坡—蘇東坡

戚南塘—繼光字元敬、嘉靖中の人也

杏壇—學問を敎授する所、講堂

李仲和—元時代の畫家

給ひし諸侯ありとぞ。近世の書畫にてかゝる高料は聞も及ばず。大雅堂の書畫の秀し故にや、又當今都鄙ともに書畫流行ゆゑにや。彼畫幅もとより紙表具なりしとぞ。

一肥後國八ッ代の士西垣氏、寛政六年長崎にて古琴を得たり。宋調の琴にて、東坡所持の物なりしよし。西垣みづから記を作り、其圖樣を摸せり。余も人より傳へて其圖は見し。眞物なりやいかゞ。

一伊勢國榊原の湯の南に、小倭鄕中佐田村といふ所に、紀貫之の塚有り。いかなるいはれにや。

一紀效新書は明の戚南塘の著す所にして、兵家有益の書なり。又此同人の作に、練兵諸書といへる書一帙あり。余南紀の小田氏の家にて此書を一見せり。珍書なり。然れども疑ふらくは、戚南塘の武名を借りて、明末の人僞撰せるものならんか。紀效新書の眞なるがごとくなるにはあらじと見ゆ。

一唐土にて諸國に祭る所の孔夫子の像杏壇の圖多きに、侍立の弟子十四人あり。東涯の說には、十哲に曾子、有子、子張、子羔をかきたるならんかと云れしとぞ。近き頃、近江國小川村藤樹書院所藏の杏壇の圖を見しに、亦十四人あり、李仲和の畫なりとい

南龍院殿—紀州の藩主德川頼宣

宇多國次—文明年間の鍛冶にて越中の住人也

大雅堂—池野大雅堂と

聊は日本の面目にもや。

一紀國南龍院殿は名だたる武將にておはせしと聞に、今度余彼國に遊びて見るに、和歌浦邊の堂塔の模樣、又は橋、築島のやうす、風流を盡されたり。又城下より和歌浦へ出る道にも、大石に大書して文字を彫附られたり。朝鮮の李梅溪が書なり。又和歌浦の向うなる苫の島にも、石面諸所に李梅溪が大書を彫附られたり。風流の事なり。誠に名高き大將は文事にも疎からずましませし。

一余が友紀伊の家中に野呂何某祕藏の脇差有り。金の象眼銘にて、眞田左衛門帶之の字あり。上に泛塵の二字、是も象眼にて入れたり。眞田の銘せしにや。作は宇多國次にて、一條國廣あげたりといふ事も象眼にて入れたり。眞田幸村は武略のみと思ひしに、泛塵の二字風流の銘なり。今時の武夫のごときにはあらず。此脇差高野山より出て、傳來正しき寶刀なり。

一紀州の士小田何某、近き頃鎧一領を得たり。其鎧の寸法皆白石先生の著されし軍器考中の楠公の鎧に寸法露違はず。小田子祕藏して愛翫たゞならず。

一大雅堂の畫、蘭亭、歸去來、西園雅集、皆小楷贊辭あり。此三幅を今年七十五金に求

志村藤藏―東藏に作るを可とすべし號は東嶼享保二年五月歿す年五十一

明主にして、在位も久しく、寛政丁巳、彼國にては景光五十六年とぞ。景光は安南國の年號なり。

一是も寛政七年冬、唐土蘇州海濱の獵船難風にあひて吹流され、奥州仙臺の領分の海濱に漂著せり。丙辰の春、船中の漁人七八人、仙臺城下に召寄られ、關東へも御伺有り。其御沙汰の間、百日許も唐人ども皆々仙臺城下に逗留せり。其懸の役人は志村藤藏とて、先年諸國漫遊して京師にも久しく逗留せし學者なり。仙臺侯の儒員なり。奥州に唐人の逗留せる事は珍らしき事なれば、諸人見物に行、墨迹を乞、又はこなたより詩を寄せなどせしに、元來漁夫の事なれば甚文盲にて、手跡も見苦しく、詩も讀を得ず難儀せしに、藤藏敎へて手本などを與へ、諸人の乞に應じて、一行物或は扇面などを書しめ、又逗留の間閑暇なれば詩作をも敎けるに、後には相應に手跡も上達し、詩を作り覺え、其内二三人も絶句などはかなりに作るやうに成れり。江戸の御下知有て後、長崎へ送り遣されける時も、藤藏、送の役人たり。途中にて聯句なども有り、又絶句なども數首作りたり。藝州の知音より、余が方へも其途中の作竝聯句等を書寫して贈れり。彼國に歸り、日本にて手習學問せしことを物語らば、彼國の人奇とすべし。

先考先妣—亡父亡母をいふ

以羊代牛の章—所謂牽牛の章也、孟子梁惠王上篇に出づ

賜り、長崎へ渡り來る唐人の持たるを、京にも取傳へて、醫學院にて見せられし事あり。抄出して外に記す。

一、春暉七八歳の時、或夜父母の傍に在し折節、先考孟子を讀居給ひしを見て、其見給ふ本には何事かしるしあると尋奉りしに、先考汝にも讀で聞すべしとて、以レ羊代レ牛の章を講じ聞せ給ひしに、堪がたくあはれに覺えて泣居たりしかば、先妣も見給ひて又落涙し給ひぬ。是より先考に願ひ奉りて、折々孟子を聞、また論語にも及びて、學問に志す事とはなりぬ。此頃子弟輩の彼章を講ずるを聞て、三十五六年の昔を今のやうに思ひ出し、父母の恩義の深きをも新なるやうに覺えし。

一香川太仲若かりし時、治療の爲に奔走せしに、つひに途中にて小水を便ぜし事無し。門人いかなる故とぞ問しに、我家に歸り便所へ便すれば、百姓の耕作を利する事なり。奈何ぞ途中無用に便しすてんやと答へられしとぞ、太仲元來豪放の氣質なれども、志す所は深切にて殊勝の事なり。

一寛政八年丙辰、奥州南部の船漂流して安南國に到りしを、彼國より唐土へ送り、午年の春長崎へ送り戻されたり。難風に逢しより三年にして日本に歸れりとぞ。安南國王

歸化して黄檗山第五世の住職となりし人也

乾隆帝—清の第六世高宗皇帝をいふ

弟子大隨和尚傍に見居て、是も見苦し、これも見苦しとて、八十四枚に及べる時、大隨便事に立り。高泉あまりに書なやみて、少し憤を起し、今度は大隨に驚しめんと筆を放つて書終れる所に、大隨歸り來りて、是を見るより大に賞し、是にてこそ山門を鎭ずべきものなりと、手を打て悦しとぞ。此額は高泉和尚書改ること八十五枚にして成就せしものにて、彼山中にては今に口碑に殘る事と物語せり。

一伊勢國一志郡小川村の郷士小川縫右衛門家に、昔より古き陣太鼓一ツを所持せり。寛政丙辰の春、人して京に上し余に見せしむ。實に五六百年以上の古物と見ゆ。胴は桐木にて横木に用ひ、八ツを合せて胴とす。皮は片面なり。鼓面に龍を畫く。鼓の徑、表にて一尺五寸三分、深四寸、裏の方にて、徑一尺四寸五分。鋲の頭、徑四五分づゝ、鋲裏に不透。胴の桐木の厚四分。或人の說には、唐土の物なるべしともいひし。

一寛政八年丙辰春、唐土乾隆帝在位六十一年にして、皇太子に讓位あり。今年正月元日より皇太子卽位、年號を嘉慶と改めらる。六十一年にして讓位ありしは、康熙帝在位の年數に越ゆる事を憚り給ひしにや、又は一甲子を歷給ひしゆゑにや。何にもあれ希代の盛事なり。其節の上諭あり。乾隆帝よりの上諭と見えて、板行にして唐土普く頒

蠡尻―書名
本書六一頁
及び九五頁
に出づ

高泉禪師―
明末の僧に
て寛文元年

如此に候と申せしかば、兩將其議に從ひ定められしとぞ。此時信雄は大河内に在り、信包は津に在りしと、蠡尻にのせたり。

一寛政の初に、和泉國貝塚の人岩橋善兵衛、日月星辰を見るべき望遠鏡を自身の工夫思慮を以て作り出せし。其望遠鏡出て後二三年へて、阿蘭陀よりナクトケイキルといふ日月星辰を見る望遠鏡を渡せり。浪花の人此ナクトケイキルを求め得て、余が朋友も一覽せり。其見る所の日月星辰の眞象、蠻製の目鏡と善兵衛製せし目鏡と、符節を合せるがごとくなりとぞ。善兵衛作は長大なる故に、一しほ明白にて勝れりと云。余が家にも善兵衛製作の望遠鏡は所持して、其精妙なる事を知る。蠻製の物はいまだ見ず。先年より蠻製の望遠鏡諸所に有りと唱れども、皆虚說にて、余天下に歷遊して尋しかども、誰人所持といふ事を聞ること無りしに、善兵衛日本にて始て作り出す頃に、また紅毛國よりも渡り來れるは、時運の開くる時節といふもの、奇妙なることなり。

一余宇治に行たび每に、高泉禪師の書れし黃檗山の山門上に掛たる第一義の額を感じ、其見事なる事を逢人ごとに語れるに、松寠道人聞て、高泉和尙此額を書し時、高泉の

魯仲連―支那戰國時代の齊の人

北畠―原本北畑に作る

伊　壹越　巾　斷金

又中空の調といふあり。

第一 黄鐘　二 壹越　三 平調　四 勝絶　五 黄鐘　六 盤渉　七 神仙　八 平調　九 勝絶　十 黄鐘　斗 盤渉

伊　神仙　巾 平調

一元の詩人陳孚安南に使して、其國の事を作りし中に、鼻飮如二瓴滴一、頭飛似二轆轤一云々。近年本邦にも、安南國の事、物語委しく傳ふれども、ろくろ首ある事を聞かず。陳孚が見しはいかなる轆轤首なりしや、鼻飮は天竺にも昔よりあることにて、釋門の徒養生の術なりとて、今も鼻より冷水を飮む人あり。

一魯仲連曰、貴ブ二於天下之士一者ハ、爲レ人ニ排二患難一解二紛亂一而無レ取也。卽有レ取者ハ是商賈之事ナリ矣。浪花などの男立といふ者此氣象あり。實に男子のすべき事なり、況や、學文有りて、道を踏へて此事を行はば、大丈夫といふべし。

一北畠信雄と上野介信包と信長舍弟相議して、南伊勢北伊勢と界を改んとして、雲出川を其界にせんとせられしに、或老人曰、當國南北の界は、古歌に、

風早の池の流のしたゝりは、阿濃と一志の界なりけり。

組—箏曲の組歌をいふ

北窗瑣談 後編 巻之二

一八橋検校筑紫箏をよく彈じ、今の組といふものを作る。表裏十三曲を古組といふ。表組とは、蕗、梅がえ、心盡、薄雪、天下太平、雪朝、雲上、此七曲をいふ。裏組とは、薄衣、桐壺、須磨、四季曲、扇曲、此六曲をいふ。初は如此に表裏と二等に分ち有しを、後に四等に分ち、新曲手事など色々を加ふとぞ。調子は組を彈ずるに、一越の律を宮に立てて合せば、誰人の聲にも相應ずるゆゑ、多く一越を用ふ。箏は二の絃宮なり。

第一絃黄鐘 二壹越 三平調 四勝絶 五黄鐘 六鸞鏡 七壹越 八平調 九勝絶 十黄鐘 斗鸞鏡

伊壹越 巾平調

此調子等の常のしらべなり。又雲井調といふ有り。

第一黄鐘 二壹越 三斷金 四雙調 五黄鐘 六鸞鏡 七壹越 八斷金 九雙調 十黄鐘 斗鸞鏡

春日局ー將軍家光の乳母

其眞を得たりー此行の次に遍照心院什物の平板調及び律管の圖あれど省きたり

とて、其頃音律の堪能なり。俗氏は伶人家の舍弟なりしが、出家して恩德院に住せるなり。焉空は遙に後の人にて、春日局の舍弟、又恩德院の住持なり。春日局の肉弟故、國初の頃には甚勢有し人なり。慶長元和の頃の人なり。乙卯の年十月十七日、春暉再び東儀出雲守、林日向守、林雅樂大允同道して、遍照心院塔中實本院にいたり、律管を見、終日吹合して試み、其眞を得たり。

一伶人家、近年は奏樂の時、聲音の大なるを貴む事になりしより、段々律を低く調べて、近來にては古律に一律をたがふ程に成りたり。余唐土太古の聖作の律を、史紀、國語、漢書等にて考ふるに、當今の律より一律許高く見ゆ。余が著す所の古律考、樂彙通言に委しく記せり。しかれども、伶工家は其家の事なれば、余などが說は取用ふることなかりしが、近年に到り、聖上聰明にましく〱、殊更樂律の事には妙に達せさせ給ひて、段々御校正有て、漸々伶工家も其律高くなり、余が考ふる聖人の古律と同じ程に成たり。遍照心院詮藝の律を聞に、余が考る律と同じければ、享德の頃迄は古聲を失はず有しと見ゆ。早くも元龜の頃に到りては、其律今のごとく低く成り下りしと聞ゆ。後代の考にもと委數記するものなり

谷重遠—泰山と號す土佐の和學者也享保三年六月歿年五十六

六孫王—源經基

律管—調子笛

此愚詠もとより陳腐にして、詞も調ひかね、論ずるにたらざる歌ながら、堂上地下の風格差別明白に見ゆるが故しるし侍る。實に彼殿の御説のごとく、ゆくべき所をゆかずして七八分目に詠たるは、詩歌ともに最上なり。長高き體、幽玄なる體、皆其中より出づ。然れども力無くて初より七八分目なるはいかゞ。

一土佐の谷重遠が泰山集を見し時に、東寺の寶藏中に古代の十二律管有り、又唐土より傳來の平調の板有りといふ事を載せたりしを、見まほしく覺え居しが、甲寅の冬見ることを得たり。東寺にはあらで、六孫王を祭れる尼寺遍照心院の寶藏なり。律管は詮藝焉空兩僧作の十二律數種有り。其管舌無く、竹の筒なり。紅の絲にて組たるも有り。淺黄の絲にて組たるも有り。詮藝作の律管は平調の板にて寫されたりと見えて、平調を宮となし、其管より始めたる有り。其管は享徳の年號ありて、圖鐘移二平調一と書附たり。余が所持の律管に吹合せて試るに、よく協ひて甲乙無し。焉空の律も大體に同律にて、よく協へり。當今世に行るゝ伶人家の律よりは大體一律程高し。兩僧の律管ともに甚短し。切りて多くは半律を用ひたり。勿論音聲のみを寫して切りたるものにて、法に依りて切りたる管にはあらず。詮藝は體源抄にも出て、恩徳院の詮藝

代の詩人王維、字は摩詰、乾元二年歿年六十一

申べしとて、それより段々いひ入て、社人また兩三輩出て神前に祝言を奉り、其後松の一枝を切り、持出て、是に和歌を供じ給へとて、其事嚴重にぞ計らひける。松の枝を文臺に用ること殊勝の事に覺しと、伊集院氏の物語しとぞ。古き宮居には古實も多く殘れる事有り。何れの社にても、途中などにて臨時に和歌奉納の時などは、是に似よりたるはからひもよろしかるべきにや。

一乙卯の春、去る御方へ參れる事の有しに、折節當座和歌の御會なりければ、春暉にも御題をわかち賜りて、春月幽といふを探り得たり。二首の内一首は、

花鳥は霞つくして暮るゝ夜に、殘りて懸るはるの夕月。

と詠出しければ、其殿の評に、歌はあまりに趣向過たるはあしし。行べき所をゆかずして七八分目に詠たるよし。此歌なども暮る夜の月影さへぞほのかなりけるなど有らばゆるやかなるべし、上の句に力過たれば、是にても下のかけ合よろしからねど、此下の句の趣に今一きは按ぜばいかほども有べし。又夕月といふ事も尋常の月を詠に、夕月殘月等は同じくはよろしからずと宣ひし。春暉其御家の門人にあらざれば強て引直させ給はざりし。家に歸りて後考ふるに、此場所堂上地下の風格の異なる差別なり。

選取—原本撰取に作る

家隆卿の集中云々—定家は諸體具はり家隆は然らざるをいへり

杜少陵—唐代の詩人杜甫、字は子美、大曆五年歿年五十九

王輞川—唐

思ひ、且は大なるよみそんじ無きやうと思ふ時には、引かゝる詞を取てよむべし。早く出來て、しかも歌の一體を得たるやうに聞ゆるなり。されどよき歌にはあらずと知るべし。

一定家卿は、父の卿も定家は歌よみなり、家隆は歌人なりと評し給ひしよし、人の語りき。誠に風流の氣少なし。されど其力餘有りて、實に和歌の大家といふべし。集中に諸體具足し、選取らば彼卿にはいかなる歌も有べし。家隆卿の集中には、定家卿は有べからず。定家卿の集中には家隆卿も有べし。詩人にたとはば、定家卿は杜少陵のごとし、家隆卿は王輞川のごとし、唐土にても子美摩詰の優劣を論ぜし人の、杜甫は大家なり、王維は名家なり。杜中に王は有るべし、王中に杜は無しと評しき。的論なり。

一寛政の初薩摩の士伊集院俊性といふ人、彼國の京留守居役たりし頃、住吉宮に和歌奉納の志願有りて、一とせ彼地に詣で、しか〴〵のよしを云ひて社人に文臺を乞しに、社人答へて、當社に於て、連歌には文臺を用ふ、和歌には是無し。但し和歌奉納の式神祕の事なれども、御所望ももだしがたければ、頭役の者へも申達し、やがて御差圖

躬恒—延喜時代の歌人凡河内躬恒
後頼—鳥羽帝の時の歌人源俊頼
理窟—原本理窟或は理屈に作りて一定せず
絲によるー絲によるものならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな

無きにあらず。躬恒の
　山里は秋こそことに侘しけれ、鹿の鳴音に目を覺しつゝ
など詠るは、古拙にして力有り。後世の人の及ぶべきにあらず。貫之はむかしも今も人丸赤人に次て和歌の聖ともてはやすとも、後世理窟歌の鼻祖ともいふべき歌多し。
　櫻散る木の下風はさむからで、空にしられぬ雪ぞ降ける。
　人はいさ心もしらず、故郷は花ぞむかしの香に匂ひける。
是等最人口に膾炙したるものなれども、皆理窟より出る歌にて、超凡の氣無し。絲による歌は理窟中に餘情有りて、超凡の境に近し。古今集に、いかで此歌を歌くづとは名に立てし。
一和歌の第一の病は理窟なり。理くつは議論なり、和歌にはあらず。いかで餘情を感ずるに到らんや。第二の病は引かけたる詞なり。こぬ人をまつとかけ、燒やもしほといひてこがるゝと結たる、言葉躁しく、心つまり、賤し。男の物を爭ふに似たり。よき歌にかけたる詞は無し。當座などに人によみおくれて、何ともあれ早くよみ出さんと

続後撰集—寶治二年七月後深草院の勅を奉じて、藤原爲家の撰したる和歌集也二十巻より成る
久方の—作者紀友則
由良の—作者曾禰好忠
結ぶ手—作者紀貫之
住吉の—作者凡河内躬恒
大方は—作者在原業平

枯はてて言の葉もなき眞葛原、何を恨の野邊の秋風。

自らもよみおほせたりと覺え、外よりも秀逸なりともてはやすは、大かたかゝる歌の風調なり。誠に言葉とゝのひ、一首の姿も賤しからず、扨面白くよみおほせたる歌なり。春暉も強てよき歌よみ出さんと深くあんじ入たる時には、知らずして此境に入る事なり。扨古の眞の秀逸といふは、かゝるものかとかへり見るに、

久方の光り長閑き春の日に、しづ心なく花のちるらん。

由良の戸を渡る舟人かぢをたえ、行末もしらぬ戀の道哉。

結ぶ手の雫に濁る山の井の、あかでも人に別れぬるかな。

住吉の松を秋風吹からに、こゑ打添る沖津しら浪。

大かたは月をもめでじ是ぞこの、つもれば人の老となるもの。

是等の歌は初より面白くよみて譽をとらんと巧み出したる工夫の痕なし。實に超凡の作といふべし。されば眞の秀逸は強て勤めて得べきものにあらず。修行足り、力及びて、扨其人の見識高きによるべし。

一貫之躬恒の優劣を人の問しに、俊頼の、躬恒は及び易からずと答へしとぞ。俊頼眼力

大平―宣長の門人にて後に其養子となる天保四年九月歿年七十八

範永―一條天皇頃の歌人藤原範永

淸輔―平安末葉の歌人藤原淸輔治承元年歿

得べき―原本えべきと訓ぜり

字の音聲にて傳來し、久楚とは書誤れるなるべし。殊に祭禮に用るとあれば、空桑琴なること疑あるべからず。我國にも、千餘年の古物にはかゝる事も傳り居けるにこそ。

一伊勢本居宣長の門人に、稻掛大平といふ人あり。よみ歌は師に勝れりと世上評す。常によみ出す所は古體なるが、折節は新古今集の體をもよめり。其中に朝落花といふ題にて、

宿りせし山櫻戸の朝ぼらけ、きのふの花も春の夜の夢。

其行狀殊に勝れたる人にて、唯和歌の上手なるのみにあらず。

一「尋ねぬる宿は霞に埋れて、谷の鶯一聲ぞする」此歌は範永朝臣の一生の秀逸とて、自讃せられしに、其頃さして感ずる人もなかりしを、後に淸輔朝臣の獨彼歌主の意に通ぜりとしるし置れし。春暉按ずるに、一聲の一の字凡作にあらず、誠に秀逸、容易に得べき和歌にあらず。然るに、當時の評論にさせる譽も無りしは、歌聞く事のよむことよりも難き故にや。

一續後撰集、西園寺殿の歌に、

怜悧｜原本伶利に作る

菅丞相｜菅原右大臣道眞

余心に思ふに、病に惱みて他念なく臥居る故、如此なるにやと心得居たりしが、其後日數へて、痢疾癒え、飮食常のごとくなるに到りては、鼻の香臭を聞ことも、常に異ならず、耳も以前のごとくに成て、中々盲人法師の箏の律を聞分るごとくに精密なることあたはず。是は全く數日絶食して經絡空虚し、血液淸稀になりし故、神の走り怜悧になりて、鼻へも耳へも達せし故なり。是を以て思へば、仙人道士の穀を避け、草根木皮のみを食して、血液淸淡になれば、神氣靈通して奇妙なること有るもむべなり。

一菅丞相の裔孫某殿の家に、菅公の神靈を祭る時の神樂に用ふる樂器數多傳へられたり。

○磬 雲形 有衡柱　○反尾 有撥 有巴青海波　○木鼓 内ニ動ク 柱アリ

○楷鼓 大鼓ニ似テ胴長ク シラベ八ツアリ　○銅拍子 撥一文字ナリ　○編佐々羅 十六枚 拍板ナルカ

○籥 六音 五穴尻トモニ　○久楚 六絃或用七絃臺有リ七絃琴ノ如シ 六絃ハ神樂ニ用七絃ハ尋常ノ用也

右八種の樂器の書附、彼家より書寫し賜りしまゝなり。春暉按ずるに久楚は空桑の文字なるべし。琴經久敷世に隱れ居し故、空桑の文字の事をも知れる人稀にして、唯文

和名抄―和名類聚抄二十卷源順の著にて事物の和名を聚めて考證したるもの、一種の辭書也

稱二大夫一、倭國之極南海也。光武賜以二印綬一云々。然れば、今穿出せる金印は、光武賜ふ處の物か。中元二年は日本垂仁天皇八十六年に當る。今の天明四年まで千七百十餘年に及ぶ。委奴國は日本の惣號にあらず。古昔筑紫に有りし里名なり。魏志に見えたる伊都國即是なり。和名抄に、筑紫に怡土郡あり、又同國宗像郡にも怡土といふ里あり。漢に通ぜし委奴國主が本居なるべし。又伊都津彦伊都縣主等の號併見るべしと云々。秋成の考いと明白に見ゆ。

一寛政の初余暫伏見に在ける頃、痢疾をやみて久しく臥居けるが、百度に近き痢にて、後には飲食も絶て數日に及び、傍より見れば大に危き體なりしかど、余が心には神精少しも疲れず、唯身の極勞せるのみなりしが、數日絶食の後は自ら手足をだも動す事を得ず、ひたすら蓐上にのみ臥居たりしが、耳と鼻は殊の外さとくなりて、厨下には座敷二ツ三ツも隔てたるに、芋大根の類の物に到りても、けふは何を羹る、今は何を料理すると、其香臭を委細に聞知れり。常には聊も匂なき物をもよく聞得、鼻を穿つ程に覺えて難儀せり。又人に座敷を隔てて琴を彈せしめて側に、其律委細に分れて、今の調は八高し、今の曲は七低しなど、盲人法師の律を聞わくる程に分れり。

左に記す—原本かくあれど仲景像の縮寫圖あるのみにて考はなし

へは鶴出ることなし。官にも聞えたる事にて、先年鶴の死せし時にも役人下向有りて、仔細を改め、羽毛は悉く官へ納れりとぞ。土俗の云傳には、秦の徐福富士山に來り、仙藥を求めけるが、遂に秦に歸らず、此所に住して、後に鶴に化しけるなりとぞ。此事甲斐國[illegible]村の僧聞因師物語なりき。

一張仲景眞像、漢長沙大守服章進賢冠兩梁

皂紗單衣　中衣白　袴袜白　青綬　劔　笏

後漢輿服志云、進賢冠古緇布冠也、文儒之服也。前高七寸、後三寸、長八寸、公侯三梁中二千石以下至博士。兩梁

進賢冠仲景像、佐野山陰先生考あり。左に記す。

一天明四年甲辰、筑前國那珂郡志加島にて、農夫地を穿ちて金印を得たり。方八分許、高サ三分。蟠鈕高四分、重二十九箋。文曰漢委奴國王。五字ともに小篆なり。余も其印の押たるを見し。其頃專ら評して、漢朝より日本の天子を封じたる金印なりと云へり。篆刻家などの説にも、其製眞に漢朝の制度に叶へり、僞物には有まじと云へり。

浪華の上田秋成考ニ云、後漢書東夷傳、光武（今本光誤作建）中元二年倭奴國奉貢朝賀、使ﾋ久自

代の人、名繼盛といふ時の吏部尙書嚴嵩の十大罪を彈劾し世宗の怒に觸れ遂に棄市せらる時に嘉靖三十四年十月朔、年四十

皆川—皆川淇園

鶴の郡—今は都留郡に作る

醫論の時に此事を引て、神氣の體を離るゝ證とすることなり。此頃見し鱠餘雜錄にも似し事の有れば書出しぬ。

一本邦の學者、作文に奇語僻字を用る時には、多く漢土の人の文中に見えたる例に依りて用ることとなり。世の人多く、此語は何の書出處なり、此字は何書出處なりといふ。皆川の史記助字法凡例などにも、是を出處と書り。元來出處といふは、士の朝に出て仕ふると、家に處て隱るゝとの事なり。然るに何の書の出處なりといふ事、無覺束事と思ひしに、佐野少進物語に、老學庵筆記に、今人解二杜詩一但尋二出處一不レ知二少陵之意一初不レ如レ是云々。又來處と云事あり。通鑑註云、作レ文不レ可レ無二來處一云々。又野客叢書、劉禹錫曰、詩用二僻字一須レ有二來處一云々。是等の事、近世の人のいふ出處に近し。又關谷子のいひしは、出所と云んよりは、所出といふかた勝るべしと。げにとぞ思ひし。

一甲斐國鶴の郡に二千餘年の鶴有り。從來三羽有りけるが、元祿年間其一羽死せり。二羽のみ殘りありけるに、寛政五年何方へ去りけるや見えず。土俗の說には、昇天し去れりと云。此鶴の郡は富士山の麓にて、湖水も多く、衆山連り聳え、奇妙の僻地なりとぞ。鶴の郡と名附し事も此鶴居る故なり。鶴の鬭などいふ所もありて、其山より外

江漢、文政元年十月歿年七十二

小松内府―小松内大臣平重盛

印旛沼―原本因場沼に作る

惺窩先生―藤原惺窩、元和五年九月歿年五十九

楊椒山―明

松浦が輩又此事をいひて、北海へ湖水を落さんことを謀れども、其事ならず。又東國印旛沼といふ湖を切落し新田にせんとて、先年其普請有りしかども、其後其事十分には成らざりしと聞し。但神代の頃、肥後國阿蘇の湖水を今の川尻へ切り落し、現に今二萬石の田地と成れりと云。余先年其地理を見しに、人力を以て切落せし事疑ふべくなく、其跡見ゆ。是のみ其功成れりと見えし。唐土にも宋の王荆公政を執り、大に天下の水利を興せし時、太湖の水を切落し、新田を開かんといふ策を獻ぜし人ありしと、五雜俎に見えたり。和漢古今人情は遠からざる物なり。

一鱠餘雜錄は紀州の善齋道慶の著述なり。善齋は惺窩先生の門人なり。其書中に云、孤樹裒談に、菽園雜記を引て、明英宗時、嘗有レ人、臨レ刑以三三覆奏一得レ免。或問、當二此時一自覺二心神如何一云、既昏然無レ所レ之、但記身座二屋背上一、下見二一人面二縛我一、妻子親戚皆在レ傍、少頃報至才得レ下レ屋云々。春暉さきに明人の書の中にて見し事の有しに、人笞打るゝ事有しに、後に友人問て、痛苦堪がたくや有けんと云ひしに、始の程は痛苦を覺えしが、後には唯我身の笞打るゝを遙の下の方に見しばかりにて、少しも痛苦を覺えざりしと答へし。楊椒山先生嚴嵩を彈劾せし時の事にや有しと、さだかに覺えず。

閩中ー閩州の中といふことにて閩州は福州の前名也

阿育王ー佛滅百年後に摩竭陀國に君臨せし王にて八萬四千の佛塔を建立せる信者也

江漢ー洋畫家の祖司馬

杮の熟するを待て、一山一村の人言合せて、一日の間に皆杮を取盡す事なり。此事五雜俎にも見えて、閩中の茘支、人一度取れば鳥獸集りて防ぐべからずとぞ。

一安永年間の事なりし。城州八幡の邊の野外に、猫の死したるを食ふ獸あり。其形甚大ならず、大抵猫程にして、猫にあらず、犬にあらず。土人立寄て見るに、人を恐れず、猫を食ひ畢りて淀の方へ去りしに、道にて犬多く群り來りて咬かゝりけるに、此獸の一咬にて、犬皆立所に死せり。人の沙汰せしは、黑眚といふ獸にてもや有べきといひし。余が家の僕貞助八幡の產にて、此事を見しといふ。

一近江國日野より一里許の山中に、石塔寺村といふ所あり。其所に大なる石塔有り。世に是を阿育王の八萬四千の寶塔の一ッなりといひ傳ふ。江漢が筆記には、其邊の山中には、寶塔の石の崩れ倒れたるが夥しく有り。今にても取集め組建ば、阿育塔いくつも建べしと書り。何れの代何れの人か、かゝる事を造り置しにや。京都にも程近き地なれども、日本に記錄乏しければしれがたし。

一平淸盛相國小松内府に命じ、近江國琵琶湖を北海へ切落し、新田を開かんとし、敦賀へ越る道中、鹽津の山中深坂といふ所に、其切開きかゝりし迹今に殘れり。近來河村

巻より成る和漢書籍及び文學の事を記す

福州－支那の福建省福州府の地也

りといふ事を、浪花の蒹葭堂の主に物語しに、彼ぬしも先年かの大清會典を所持せしが、其後或諸侯に奉りし。其書十六帙有りて、甚美麗の書の仕立なりと。蒹葭堂のぬしは、かの清和源氏の事さらに見及ばざりしとぞ。さらば疑らくは、虚説にて、神代氏幼少の時のことゆゑ見誤りけるにこそ。其書は今に其侯の所藏なりとぞ。

一先年讃岐國小豆島海中より引上たりし龍骨甚大なる物にて、奇異の物なるを、近來の物産學者象骨なりといひて、色々の諸説あれども、五雜俎に司徒馬恭敏、治河日、於淮濟間得一龍蛻、長數丈、鱗爪鬐角畢具、其骨堅白如玉云々。かくのごとき事もあれば、廣き天地間龍のなしともいふべからず。

一余が後園に、福州種の鴨脂稷を植たりし事の有しに、よく實のりて、一二本は既に色附熟したりしかば、一日其熟したりし穗を唯二穗刈り取しに、其日雀夥しく集り來りて、滿園の稷一粒も殘らず啄み盡せり。すべて禽獸ともに人の手さゝぬ間は盜ざるものなり。伊勢の南方の山中、紀州熊野の東北の山中など、皆柹を夥しく植て産業とす。其邊猿多きに、人いまだ取らざる間は猿盜むことなし。もし一ツにても人取を見る時は、數百千の猿來りて、一二日の間に滿山の柹を盜み盡す。人追ども防ぎ得ず。故に、

大清會典―清の高宗皇帝の勅によつて成れる政書也百卷より成る

新安手簡―新井白石と安積澹泊との贈答の手簡を載せたるもの、三

るとも恨なし。筆記の事に附ては、初より一命を差出して錄することなり。世間高貴の人の惡は憚りてよきに取なし、賤き人の善事は稱美する人稀にして、遂には世に埋るゝこと歎息すべきの至なり。足下くれ〴〵筆を執りては、何事によらず遠慮し給ふべからずと、繰返し云はれし。誠に翁の志毅然として奪ふべからず。古の良史の風有る人なりき。

一往年唐土より大淸會典といふ書を關東へ獻ぜし事の有し。其中に、今の清朝は清和源氏の流にして、源義經の末裔なる事を載せたり。然れば、唐土日本因緣なき國にもあらず。此書官より差戻されたり。其副本一部を長崎の唐通事神代氏殘し留めて家に藏たるを、神代の子息太仲常は見たりしが、其書白紙摺にして、二枚重ねにて、甚美麗なる書なりしをと、太仲京へ登り居て、余と同街の時物語なりき。此事は白石先生の頃金史別本に載たりとて、色々沙汰ありし事なり。白石も半は信ぜられしよし、新安手簡の中にやらん見えたり。其後も年久敷諸方にて珍奇の話と成居れる事なれども、畢竟は浮說なるべし。然るに、神代子實に見たりしとは、奇中の又奇なることなり。

一其後程へて、我邦の淸和源氏唐土の祖先なりといふこと、大淸會典といふ書に出た

阮籍―世に晉の竹林の七賢といはれしものの一人也

式部―源氏物語の作者紫式部

神澤杜口―雜學者也其蜩と號す寬政七年三月歿年八十六

と名附る書四五十卷を著せり。皆近世の實錄にて、上王公より下庶民に到るまでの雜事を錄せり。此杜口齡八十四歲の時、余始て知る人になりて、時々尋て、隔意なく物語せり。溫厚柔和の質にて、隱居せし後は、世事を經營すること露ばかりも無し。實に世外の眞隱なりき。老後は耳聾て、物語皆筆談也。或時余彼庵に尋て、例の筆談の中、余が著述の中にも遠慮なき事多く記して、世間廣くは出しがたき事も有りなど云けるに、翁色を正して、足下はいまだ壯年の事なれば、猶此後著書も多かるべし。平常の事は隨分柔和にて遠慮がちなるよし。但筆を執りては、聊も遠慮の心を起すべからず。遠慮して世間に憚りては、實を失ふ事多し。翁が著す書には、天子將軍の御事にても、聊遠慮することなく、實事のまゝ直筆に記す。是までも親類朋友每度諫めて、いかに寫本なればとて、いかにして世間に洩出まじきにてもなし。いかなる忌諱の事にか觸れて罪を得まじきものにあらず。高貴の御事は遠慮し給ふべしといへど、此一事は親類朋友の諫に從ひがたく、强て申切て居れり。翁が實錄は後世にも傳ふべく思へば、善惡ともに侵せしは其人の過なれば、たとへ高貴の御人の事にても、少しも枉て實を覆ふ事を欲せず。此實錄の事に附て罪を得ば、八十の老翁の白髮首刎らる

野となりて」と打出したるに、一座皆秀逸を驚歎せり。長慶座中に向ひ、今見給ふごとく早使來りて、舍弟實休泉州に於て唯今打死仕り終れり。味方敗北に及べりとの事なり。長慶此所より直に出陣いたし候也。されば今生の御いとまにも成り候べければ、此句扛て申受て仕り候なりといひ捨て、直に出陣せられしとぞ。

一和泉國岸和田領熊取谷といふ所に、四ツ子を產す。泉州成田左近物語なり。寛政七年乙卯春のことなり。

一余嘗て源氏物語を見る時に、源氏の君の琴をよくし給ひて、廣陵散の曲を彈じ給へりといふことあるに、此曲は晉の阮籍にて絕たるものを、源氏の彈じ給ふべきよしやある。いかに寓言なればとて、不審の事なりと思ひしが、其後琴經を讀けるに、唐の顧況廣陵散の記を引て、唐瑯琊王淹女未笄彈二此曲一云々。されば唐の世までも廣陵散の曲を傳へたりと思はる。本邦の藝事唐調を學ぶこと古代の風なれば、式部が頃も實に此曲を彈ぜし人なしともいひがたきにや。

一翁草といふ書は、　京都の士神澤何某、致仕の後、杜口と名乘て市中に隱れ住ける時の作なり。翁草二百卷成就して後、猶近年の奇事多ければ筆を留めがたしとて、塵泥

らぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため

きのふけふ―つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふけふとは思はざりしを

京極黄門―藤原定家

早打―早馬と同じく急飛脚をいふ

金馬門に隱れ―幇間の如き行ありしなどいふ

忠仁公―藤原良房の諡

原本ただひとと訓讀すれど誤也

三尺五寸云云―咲く花の下にかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかげかも

千代もと―世の中にさ

子を位に卽け奉り給ひけるに、唐土ならば義兵をもあげ、首陽山にも遁るべきを、本朝の事勢、いかなる事ありても、さる事はなりまじければ、業平金枝玉葉の身をもつて、其位纔に中將に在て、維喬の御子の北山の雪をも訪ひ奉り、三尺五寸の藤の花にも述懷の和歌を詠じつる心の内、思ひ知るべし。又千代もと祈るの歌、きのふけふとはの歌など、唯ひたすらの放蕩遊冶の人のよみ得べき歌かは。其人品尊ぶべし。然るに、京極黄門をはじめ、千歳の後までも、唯ひたすらの遊冶好色の人とのみ思ひ居るは、いと本意なきことなり。汝はいかに思ふぞやと語り給ひし。此卿も自ら憤ることの有りて、穢行の聞えあるを感じて、業平の事を語り給へるにや。

一楠正行軍功によりて官女を賜りしを辭し奉りて、

とても世に、ながらふべくもあらぬ身の、假の契をいかで結ばん。

さすが楠公の子なりける。千歳の後も是を唫ずればなみだ止めがたし。

一三好長慶、京都某殿の連歌の會にありけるに「薄に交る蘆の一もと」といふ句出て、難句なれば一座附煩ひて有けるをり節、早打の使來りて、長慶に文を出す。長慶見終りて下におき、此附句枉て某が中受仕り候べしと、暫思案して、「古沼の淺き方より

庭に居合せし内藤なりとぞ。

一同福山の人、夜中にあやまちて蝦蟇を踏殺せしに、其蝦蟇潰るゝ時に、一方の足の内踝の所に蝦蟇の息かゝりて、其あつき事熱湯をそゝぐが如くなりしが、それより其所次第に腫て痛む事限なし。寒熱甚しくして數日惱しが、色々治療を加へて漸に癒たり。其翌年、其時節に到りて、其人故無して頓死せり。蝦蟇の毒發せしなるべし。是も其時の物語なりき。

一絲を以て鼠の肛門を縫塞ぎ放ち去らしむれば、其鼠發狂して、其家内の鼠は不殘咬殺すものとぞ。就中大にして强き鼠よしと云。然れども、其鼠人をも咬ものなり。人咬るゝ時は死に到るものも有り。恐るべし。

一或日去る御卿の御物語に、むかし或人定家卿に、伊勢物語は事實淫奔の事多きに、いかなれば世上にかくまでは珍重せるにやと尋しに、黄門答へて、かゝるものは、唯文章の美なると歌の勝れたるを愛する事なり、事實は置て論ぜざる事なりといはれしはいと無念の事なり。業平朝臣當時にありて不平の事有るが故に、自ら行を穢して金馬門に隱れたるにや。維喬の御子御位に卽給ふを、外戚の忠仁公勢に依りて、維仁の御

黄門―中納言の唐名、定家は中納言なりしかば官名をいひて其人をさす也

珍らしくしかも的切に形容せし、誠に世の詩人の奇字を競ひ用ふるも、故なきにはあらず。

一備後福山の家中内藤何某といふ人、或時庭に出たりしに、烏蛇を見附たりしかば、杖もて強く打けるに、其まゝ走りて草中に入りければ、草の上より頻に打て尋求けれどもつひに見失ひぬ。暫程へて奴僕見當りて草中に蛇死し居れりと告しかば、内藤出て杖もてかきのけんとしける時、其蛇頭をあげ内藤に向ひ、烟草の煙のごときものを吹かけゝるが、其烟内藤が左の目に當りて、蛇は其まゝ倒れ死しける。内藤が眼俄に痛てはれあがり、寒熱出て苦惱言んかたなし。既に命も失ふべく見えし程に、内藤煙草のやにの蛇に毒なることを思ひ出して、煙管のやにを眼中に入れしに、漸々に腫消し、痛やはらぎて、一日許に苦惱退き、眼赤きばかりなりしかば、日々にやにを入れたるに、五六日して全く癒たり。其翌年、其時節又眼痛出したるに、色々の眼科醫の治療を施しけれども癒ざりしかば、蛇毒の事を思ひ出し、又煙管のやにを入れしに忽愈たり。一二三年も其時節には必眼目痛ければ、いつも其後はやにを入れて癒ぬ。此事村上彦峻物語なりき。又云、蛇を打し人は助左衞門と云人にて、毒に當りし人は其

榮花物語―宇多天皇の寛平年間より堀河天皇の寛治六年に至る約二百餘年間の雜史也四十一卷より成る著者未詳

蘭嵎先生―紀州藩の儒者にて、仁齋の第五子也安永七年三月歿年八十六

とは見えず。又狹き座敷に懸物をかけたる上に、亦花をも生たるは興なきものなり。掛物か、花か一方なる、いと見やすし。

一 榮花物語を見れば、圓融院の御物とて、後に藤原氏に傳りし小野道風筆の萬葉集、貫之自筆の古今集など見えたり。然るに、今の代にも、古筆を弄ぶ人の、貫之自筆の古今集の片紙は所持せる人多し。余が親き人の家にも是を藏めたり。榮花物語の頃より希代の珍物なれば、今の世片紙といへども無雙の重寶なり。

一 蘭嵎先生中年を過る頃までの書は、余每度見及びしが、大に其父兄には劣れり。然るに、人の物語に、蘭嵎晩年の物語に、學問は父兄に及ばず、但書は兄に少し勝れりと覺ゆといはれしとぞ。いかなりや。

一 肥後秋玉山の洗竹の詩に「世上風塵事、何嘗至此間。欲窮飛鳥處、洗竹出前山。」其後藪茂二郎洗竹の詩に「洗竹見青山、青山露半規、不見山猶可、唯恨月出遲、寄言山中抱琴客、來踏林間初月白」。藪茂二郎作り勝れるに似たり。然れども、玉山の詩、絕て日本の風味無し。

一 元の謝宗可の詠物の詩に、釜の煮音を瓶笙と作れり。松風蟹眼などいひ古したるを、

植ろ—原本うゆろと訓ず

琴—琴のことの略にて七絃也

二重切—竹の二節切をいふ

くなるべし。此一段人の甚難んずる所にして、世間に扁鵲なきゆゑんなり。

一五雜俎曰、鵲卽鶴也。漢黃鵲下二建章一、而歌則曰二黃鶴一。

一梓　和名アヅサ、書籍を彫を梓にちりばむるといひ、又梓木を以て棺に作り、墓に植るなど、日本にもむかしは多きものとみゆ。然るに今にては眞の梓木といふもの、甚知人稀なり。余も久しく人に尋問ども、眞の梓といふものいまだ見ず。俗にキサヽゲ又アカメガシハなどいふものも、本草物產の學者に問に、眞の梓にはあらずといふ。平松殿琴の裏板の用にとて、美濃國梓山の梓の木を求られし。其葉の形はいかなりや、余も其板は見たりしかども葉は知らず。後に五雜俎を讀たりしとき、梓也、椅也、檟也、楸也、豫章也、一木而數名者也云々。唐土にても辨別しがたき木にて、同種類の物と思はる。さればキサヽゲもアカメガシハもあづさといひて誤にはあらざるべし。

一前の松前侯書を善くす。其印章に毛夷惣鎭と彫れるあり。又北門鎖鑰と彫れるも有り。實に他の人の用られざる印章なり。

一二重切の花生、今の世には何方にも用ふれども、無風流の物にて、いと見苦し。利休の頃は、勝手物にて花のいけ、ために用ひしもののよし。床へ出し、人に見すべき物

淨瑠璃—原本淨瑠理に作る

扁鵲—支那戰國時代の名醫也委しくは史記の扁鵲倉公列傳に見ゆ

一因幡の河田八助周易新疏を著して後、折ふしの物語に、我技倆にてよくも是程の作の出來たりし、いといぶかしきやうなりといはれしとぞ。眞實の語と思はる。

一近き頃太閤眞顯記といふ寫本あり、甚大部にて數百卷に及べり。太閤時代の軍物語を委細に記して、俗耳を悅しむる書なり。世上に實錄なりともてはやす。是は大坂の淨瑠璃本の作者近松並木等が流、そら言を面白く作り連ねたるなり。近年淨瑠璃芝居流行せざるゆゑ、作者も仕業なきやうになり、色々の敵打騷動事又は軍物語の作りかへ等を面白く作り出して、俗人を悅しめ、利を得しなり。淨瑠璃本は婦女子迄も初よりそらごとなる事をよく知り居て害なけれども、それに違ひ、是等は皆實錄體に作りたるものなれば、俗人婦女は眞實の事とおもひ、少し物知れる人といへども、數百年の後は眞僞分りがたく、人の迷を生じ、よき人をもあしく書傳へ、惡しき人をもよく云傳へんこと無念の事にて、作者は大なる罪なるべし。されば憎むべく、歎くべき事なり。

一醫術の妙に至れる者は扁鵲なり。丈夫にして醫をなさば扁鵲がごとくなるべし。醫を以て衣食を計るものは、術の妙に至る事叶ふべからず。されば身の境界も扁鵲がごと

北窻瑣談　後編　卷之一

藪茂二郎―熊本藩の學職孤山と號す

中井善太―朱子學派の儒者竹山、文化元年二月歿年七十五

一肥後の藪茂二郎先生、大坂の中井善太先生を初て訪ひし時、冬なりしが、薄羽織を著たり。中井怪しみて、いかなれば先生には夏衣を著給ふと問しに、茂二郎答へて、國許を夏出候ひしかばといひし。

一丹後の田邊城下より三里許田舍の溝尻といふ所より、醫生來り學びし事の有りしが、其物語に、在所にて紙鳶といふものを見ず、今年京に上りて初て見たり。又正月の門松も初て見たり。又麻上下といふものも甚珍らしといひし。誠に京離るゝこと僅に廿四五里の地にてさへ、其質朴かくのごとし。又日向國高岡といふ所は薩摩領にて、鄕士の七八百軒も集り住せる都城にて、頗る繁華の土地なるに、謠といふものなくて、婚禮などの宴席の事にて、興に乘ずれば、鹿兒島の侍踊の唄をうたふ事とぞ。是等にても都鄙の違を見、又人氣の厚薄をもおもひやるべし。

り。

一寛政甲寅春、備中國檜物屋の女子松といへるは、一夜發熱して、變じて男子となる、年十七八歳なり。松之助と改名したるを、京都の人中山元倫折節備中に下り居て見しと物語なり。

畠中觀齋—京都の人にて狂詩を能くし綽名を銅脈と號せり

ほめきて—熱して

五雜俎—明の謝肇淛の撰、天地人物事の五類に分ちて異聞雜事を記す十六卷より成る

れたる也。其佛像の腹に穴ありて、里人佛像の腹中に落入たりしなり。其大なる事甚し。庄屋など寄合て、かゝる物を掘出さば、官所に訴などして一村の騒動なるべし。此まゝに埋置て事なきには不如とて、件の穴の所には厚き板を當て、もとのごとく埋終れりとぞ。畠中觀齋方へ東國より申來りしとて物がたりなりき。

一伊勢國八知村太郎生村邊の山中にホメキといふ草あり。人もし是を食へば、身體ほめきて堪がたし。

一近き頃京師に一老男子ありて、婦人の乳汁を飲事を好み、初産の婦人の乳房堅くて乳汁出がたきものを吸出して、乳汁の道を通ずといふにより、新産の婦人は皆此老人をまねきて乳を吸出さしむ。此老人日夜諸方に招かれて乳汁のみを飲て、他の飲食せずといふ。五雜俎に穰城の人年二百四十歲、他の飲食を斷じて、唯乳汁のみ食用して壯健なりと。京師の老人も長壽を得べきにや。奇事なり。

一阿波國勝瑞村は德島より程近き所にて、余が門人橘春菴住居の地なり。其隣村定方村に綱といへる女、十五六歲の時、變じて男子と成る。則名を綱平と改む、綱平今年寛政六年甲寅三十四五歲なり。壯實長大の男にて、妻をも具せり。春菴常々見る所な

に數年留り、後に又土佐より漂流の人ありて、其船を取つくろひ、辛うじて無事に歸國せし事ありしに、彼島逗留の中の食に大成鳥ありて、人を見しらず、人を恐れず、手捕にすべき物にて、多く得て肉を食居しと云。其鳥冬は南方に去て見えず、春夏秋のみ島に來り住。島に住る時は羽毛の色白く、海中へ出たるときは羽毛黒く變ずとなり。卵の大さ五六合を入るゝ德利のごとし。薩摩人其卵を携へて歸れりとぞ。此鳥かのアネコ鳥にや。

一武藏國上野界の地に、往來の街道に、人踏めば甚響く所あり。其あたりの人久しく怪しみ居たりしに、今年寛政甲寅の春、里人寄合て掘穿て試しに、やがて金石の如く堅く響く所に掘當れり。すはやとて大勢集りて掘たりしに、土中に空虚ありて里人一人落入たり。人々驚きあはてゝ迯のきたりしに、土中よりはるかに其人の聲して、助けくれよと呼はるにぞ、扨は未だ死せざりしとて、皆々集り、繩を下して引上たり。其人に内はいかなるやうにやと尋しに、何ともしれず底には土なく唯金石のごとくに堅く、四方甚だ廣く、眞暗にして唯恐ろしかりしかば、動も得せざりしといふにぞ、さらば猶々掘とて、其あたり廣く掘たりしに、大なる佛像の横さまになりて土中に埋

詰りたり

もあり。又三白の圖といふことありて、雪中河邊鷺を畫く。又月霜海を畫くもあり。

一安永三年甲午五月廿七日より廿九日まで、尼ヶ崎海中より小き蟹夥しく上り、浪華の川々兩岸皆蟹と成、淀川をさして上れり。余其頃浪花伏見堀に住て、川邊なりしが、手して川の水を汲に、一掬の中に蟹數十を得べし。其蟹の大さ豆のごとく、色白く透明なり。

一同六月廿三日大風、屋上の瓦飛で木の葉のごとし。大坂近邊の海も大浪起りて、溺死の人數萬といひし。其翌廿四日の夜半、大坂町中に訛言起り、津浪出來りて大坂町々海となると言罵り、男女老弱東をさして迯迷ふ。皆々或は金銀を携へ、飯を持などして、其騷動いふ許なし。大坂中殘らず如此にて、騷動せざる町無し。誰いひふらしたりといふこともしれず、不思議の事なりき。余は母を護して家に在き。夜明頃に成て靜まりし。

一貧は諸道の妨とは、曾我物語に出たる語なり。

一伊勢山田の海中、大風雨の後に來る鳥あり。アネコ鳥といふ。甚大にして羽を張ば六七尺、色黑し。近年薩摩の人、無人島の南海に吹流されて、一ツの島に流れ著。其島

内國南河内郡古市村に在り蘇我稻目の創立せる向原寺のかく改れるなりといふ

論衡―漢の王充の撰三十卷八十五篇より成る物類の異同を釋き時俗の嫌疑を正し百氏の浮虛を訂し九流の拘誕を

傳へたり。余先年是を見しに、三合許も入るべき碗なり。假水精の潔白なるものにて造りたるなり。硝子玉の潔白にて眞の水精のごとくなるは、此四五十年許此かた、紅毛國にて新に造り初たる物にて、日本にて器物にもてはやすも澤山なるは近年の事なり。唐土にても、日本にても、いまだ白色の硝子玉は造ること能はず。然るに安閑天皇の時分、既に此硝子玉ありしはいと不審なる事なり。西域に通船ありて、舶來の物なりや。又は日本にて、良工ありて其頃は造り得しや。是にても時代に古今無き事を知べし。人物の大さも古今同じく、智慧情欲も同じ事、古も今の如し。

一論衡曰、周成王時、倭人獻錫といふ文見えたり。往古より諸國の通船は有しなるべし。

一論衡曰、漢建初五年、湘水去泉陵城七里、水上聚石、曰燕室丘。臨水有俠山。其下巖淦、水深不測。二黃龍見、長出十六丈身大於馬。擧頭顧望、狀如圖中畫龍。燕室丘民皆觀見之。去龍可數十步、又見狀如駒馬。小大凡六、出水遨戲陵上、蓋二龍之子也。並二龍爲八。出移一時乃入云々。

一漢土の畫家、福祿壽の圖に陶朱公周文王南極老人を用ふ。又蝙蝠鹿龜の三物を畫く

淮南子―漢の淮南王劉安の撰二十一篇より成る道德を論じたる書にて其説老子に近し

筑紫箏―今日普通俗曲に用ふる十三絃の箏の一名也

西琳寺―河

一淮南子曰、乞火不若取燧、寄汲不若鑿井。世間學問のみならず、何事も人に寄りて事を成就せんとし、又人を羨み眞似て功を立んと思ふ。如此して人に勝るゝ事は無きものなり。他はともかくもあれ、唯我を勤めて身にさへ求れば、おのづから何事も成就し、人より我を羨みまねぶやうになるものなり。

一淮南子曰、古琴五絃至周有上伊則爲七絃云々。今の筑紫箏の第十一絃を止と名づけ、第十二絃を伊と名づけ、第十三絃を巾と名づく。其名義解しがたく、諸家の說紛紛なり。止伊は淮南子に見えたる上伊なるべし、止の字淮南子に一畫を失うて上の字に誤りたるなるべし。

一降眞香は雷よけの香なりといふ。又雷にうたれて身の黒くなりたる者に、降眞香にて薰ずれば、蘇生して其黑みたる煙除き去るといふ。今世間に降眞香といふものは、紫藤香といふ物にて降眞香にはあらず。余前年鼠色の降眞香を見たり。是眞物なりと聞しかど、いまだ實に眞物なりやしらず。其後諸方を尋求れども眞なるもの甚得がたし。

一河内國にて安閑天皇の陵をあばきし時、其中より取出せし玉碗今に西琳寺の什物とし

まゝ行に、又人聲聞ゆ。又ふりかへり見れども人なし。如此すること數度に及び、あまりに不思議にてうしろを遙に見るに、半町許も隔たりて、羽織著たる町人と、天蓋を上にぬぎかけたる虚無僧と同道して物語し來るあり。此虚無僧の顏を見るに、塵がみにて作りたる顏のごとし。不思議に思ひながら行に、耳もとの噺聲頻なり。山寺氏思ふに、此虚無僧定て妖怪なるべし。一太刀に切んものをと心に思ひ、しづみ行、うしろ間近く來るとおもふ時、きつとふりかへり見るに、わつとさけびて抱きつく。急に押へて見れば、彼町人なり。何者ぞと問に、扨々恐ろしき事なり。唯今まで同道いたし來りし虚無僧、そなた樣のうしろ御覽なさるゝと其まゝ消失候ひぬ。あまりの恐ろしさに取附まゐらせしなりといふ。何事を語り合來りしといふに、我は遠國の者なり。當地の案内をしらず、旅宿すべき町は何所ぞと申候ひし故、某答へて、幸ひ長町に住候ひて、其業仕り候へば。今宵は御宿進らせ申べしと語り合て來りし折節なりといふ。山寺氏の氣妖怪に徹して、迯去りしなるべし。

一紙燭に上品の燒酎をぬりて火をともせば、青き火燃去て紙燭恙なしとぞ。小兒の戲にする事といふ。然りや否や。

と思はる
寛政甲寅—
寛政六年也
安永甲午—
安永三年也

なり。

一寛政甲寅の春、伊豫國道後溫泉の傍に畑ありて、古昔より土民いひ傳へ不淨を忌む。もし此畑を穢すときは忽祟を得て、寒熱を發す。今年松山の士某の考にて、此土中に必聖德太子の溫泉の碑有べしとて、人して掘しめしに、果して大なる碑石を掘出せり。さればこそとて、いまだ全く出終らざる前より、水にて洗ひなどして見たりしに、聖德太子其むかし溫泉にめされし時の御文章にて、其時に隨從の人の姓名を載たり。稀代の珍物なりとて悅び掘たりしに、溫泉のあたり近き土地を掘穿しゆゑに、溫泉の中に濁水出たりしかば、所の人大に驚き、もし溫泉に別條ある時は、此里の人民數百人饑渇にもおよぶべし、此碑掘る事無用なりとて、いましめ止めたりしかば、餘儀なくて又其まゝに埋みたり。いと殘り多き事なりきと、彼あたりの人の語りき。

一飛驒國小坂村谷川の傍に井あり。其水黄赤色にて、味五味を調たるがごとし。是に浴して病を治す。但し冷水故薪もて溫めて浴する事なりとぞ。

一大坂の土山寺何某といふ人有しが、安永甲午三年十月晦日、眞田山の邊を過しに、耳もとにて何か喧しく人の噺聲聞ゆる故、ふりかへり見れどもうしろに人無し。其

なり。長門の作は近江より多しといふ。後にまた人のいひしは、長門はよく鳴りて、近江春定よりも大に勝れりと。余多く見ざれば何れが勝れる、いまだ優劣をしらず。

一笙は志貴の來尊の作を最上とす。來尊の作の中にも、二ッ帯といふ笙殊に名作なり。

一梨花鎗とて、鎗の柄に竹にて造りたる鳥銃を附て、敵陣へ鎗を入れんとする時、其鳥銃を一放しづゝ打出して、其勢に乘じ鎗を入るれば、味方に百倍の勢を得るといふ。又紙を張ぬきにして一放しの鳥銃の作りやうあり。又鎗に不附とても、竹にて鳥銃を作るの法あり。明の金幼孜、干謙などいふ人、皆此器にて大に利を得し事あり。金幼孜は永樂年間の人にて、北征記といふ著述あり。歴代小史に此北征記を載たり。又經國雄略にも是等の器物の事を載たり。

一寛政甲寅春三月八日、伊勢國津領垂水村藤潟村の邊よりはじめて大に鹿狩をなし、次第に西に狩もて行て、伊賀大和の國堺太郎生村石名原村邊に到る。其間七八里より十里に及べる狩なれば、三四日の間毎日狩行しに、八知山にて四耳の鹿を得たり。四ッ耳ある鹿は甚稀の物にて、土俗是を常鹿と名附て神物なりとし、獵人も打取事なし。此鹿四季ともに啼故常住の鹿といふ意にて、じやうしかとはいふなりとぞ。奇異の獸

八知山ー伊勢國壹志郡八知附近の山をいへり

ふ人の、あながちに云合せて、欲がましきはさして苦しからず。それさへ他事に就て、其人の心ざま見ゆるものなり。まして代の末にも傳へ、上の御物までになりて重寶といはれん類を、いかに賣る人不知して唯もくれ賣べくなんどいふを言消て、其物の代よりも賤しく買取り、又いたづらに唯人に所望して、嬉しく賜ひたるとは云はで、目きかぬ人なり、世にほうけたる人なんどいひて、我徳をいふ人あり。あさましきわざなり。殊に笛笙なんどには、竹に價のしつけても無き物にて、唯音聲のいかめしきを上中下の品として世に賣も買もするものなり。誠に勝れたる物を買とりて、家の重寶にすべきは高名なり。もし身の程もありて、價を限らず引出物をもし侍らば、其器の名譽なるべし。もし身の徳もなくば、其主に心中をいひ聞せ、一期生の間其恩を忘るべからざるなり。如此の心あれば、家に冥加あり。道に至つても不慮の高名も有べし。萬に心ざまの悠に無理ならざるを見習ふべし。他人はともあれ、子孫の者必如此事に心遣ひ、正直に事をなすべしと云々。統秋が教訓も難有事なり。

一　等の名匠に近江春定といふあり。近古の名作なり。京にも近江の作の等を持たる人は甚稀なり。其近江にも數代ある中に、かの春定最上なりとぞ。近江につぎて長門名作

伶人—雅樂を奏する人

り及び候へば、御遠慮なく歸り給へ。茶の湯は又の日ぞ申入候べしと告て入るべし。己が智計作略を人に見せんとて、人を待わづらはせて、幾許の辛苦を與へし事、不仁の至なり。茶道の主意には大にもとれりと云へり。道に近き評判と云べし。

一伶人時元が物語に、武吉が許に賤き女舌無き笙を持來りて賣けるに、武吉其價を尋るに、知らずといふ。唯此笙にあたらん程賜はるべしとて打任せたるに、武吉絹二疋を與へて笙を買とり、つく〴〵と見るに、無雙の笙なりければ、價を增し加へんとて彼女を呼たれば、女笙を返さんとするぞと心得て、命を限り迯けるを、やう〳〵にして召返しければ、女恨て、上﨟は思ひ返しはせぬものをといひければ、武吉聞て、返さん爲にはあらず笙のあまりに良ければ價を增ん爲なりとて、今三疋を增與へぬ。女悅てかへりぬ。扨笙に舌を附て吹試るに、雙無き名笙なりければ、後には上の御物となり、傳りて今は院に有とぞ。此事を豊原統秋が體源抄に載て、此事末代に有がたき人の心ざまなり。今の世にはかゝる物をたやすく買取ては、我高名にいひて悅事頻なり。大かた誰も世にあれば利潤は大切なるものなり。自然衣食の類は久しく不用ものなれば、よくいひ取るも心あさし。または庭の草花なんど、鳥獸好みて飼

申入候へども―原本申入候得どもに作る

憚りて、主人今や出迎ふる、一刻も早く對面して辭し去らばやと、一刻の間も千とせふる心地して待居しに、程へて主人にじり上りの戸をしとやかに開て出來る。兩人嬉しく立向へば、主人一禮して、扨今日は初て兩君を申請たりしに、折あしく火事の沙汰聞え候により、元より兩君の公用ある事も粗承り居候へば、急に人して兩君の御宿所の安否を尋させ、且又、火事裝束を持て唯今手代中來らるべしと申入、すなはち御羽織笠迄も用意有て、御兩家ともに手代衆中下部ともに、此方の玄關にひかへ居られ候なり。麁末ながら握り飯を調へて玄關に出し置候ひぬ。殘念には候へども、急變の事なれば、茶の湯は又の日申入候べし。今日は玄關にて裝束し給ひて、是より御屋敷へは程近く候へば、直に御出候へ。麻上下にて取急ぎ往來し給はんは見苦しかるべく、且は手間取て御用も遲々に及び申べければ、かくははからひ申せしなりといひて入りぬ。其時兩人の嬉しさいはん方なし。教のごとくして、他の人よりはいち早く屋敷へも出たりければ、兩人ともに丹下が茶事の功者なることを終身感じ語り合けり。此事を近來速水宗達評して、丹下は茶事の道は心得ぬ人なり。もしかゝる事有ならば、速に出迎へて、せつかく申入候へども、折悪敷火事の沙汰なり。皆公用のつとめも有よしを承

御制禁—原本御製禁に作る

立入り—常に出入をなし居りての意

にても、印章にても、彫刻心のまゝになるなり。鹿兒島の增田直次郎此事をよくすと、河原十左衛門語りき。

一贋藥種は公儀御制禁の事なるに、奸猾の商人有りて、價貴き藥種は贋作僞造の物多し。手近くは人參熊膽テリアカヲクリカンキリの類、贋物ならざるは稀なり。人皆病危きの時に當りては、家を破りても高金を出し、是等の藥を買求めて用るに、眞物ならざれば何のしるしも無くて、家をも破り、命をも落す。實にいたはしきの至なり。藥種を僞る者は、憎むべき第一なり。其外の書畫古器物の類を僞作して人を欺くは、あしき事とは云ながらも、唯翫弄の物にて、人の目を悅しむれば足ることなれば、眞に逼りて似たらましかば、贋作にても妨なしとぞ思はる。

一三谷丹下、茶湯に、辻何某、助松屋何某を初て招きしに、兩人路次に入り、待合に到る折節、早鐘きびしく聞えて東西に奔違ふ人夥し。辻は加州屋敷へ立入り、助松屋は所司代へ立入て、非常の時は兩人とも早々にかけ附べき身なれば、心そらに成て、丹下出迎へば、對面して斷をのべ罷出べしと待に、程へても主人出來らず。餘りに堪かねて、最早斷なく出去るべきやとも思へども、初ての招請の事なれば、失禮を

中暑—暑氣あたり
下痢—原本下利に作る
不可思議—原本不可思儀に作る

水大に漲り出て、利根川を押下り、其末江戸迄も水勢衝たり。其水筋數十里の間人民の死亡數萬人に及べり。淺間山の燃る音京都迄も聞えたり。唐土にても山崩れ、川涸るゝは、凶事と云ならはしぬるに、海中新に島々を湧出せる事は國の增たりとも言ん歟。其年雲仙嶽破れて後は、地下の鬱陽大に發達せしゆゑにや、夏に到り氣候甚順にして、五穀の豐熟近年に見ざる程なり。氣候和順なる故にや、脚氣中暑下痢等の病無く、人民堅固にて、例の夏に異なり。されば吉凶禍福は相隨ふ物にて、九州の死亡程は天下にて有餘有けるにや。造化の手なみ不可思議のものなり。

一肥後國山中に、方言ドウタウといふ草あり。煙草の葉に似たり。甚毒草にて、是を食ば發狂して、三日許はさめずといふ。ドウタウとは莨菪の事にや。

一近き頃薩摩に、何か祕書を得て、玉を切事を覺えり。其形◎如此に香道具の火あじのごとく鐵にて作り、其鍔の廻に藥を附て、燃火にてあぶり乾かし、水精をきしるに、甚柔にして、暫時に何事にても彫るゝなり。其鍔に大なるも有り、小成も有り。又錐の先に彼藥を附て水精をもみて穴を穿ち、針がねを彼穴に通し、ぬきさしして動す時は、暫時に其穴大になりて、いか程にても細工を施すべきなり。水精の器物に、彫物

安永己亥—安永八年

天明年中云々—天明三年の出來事也

同時に島原海中よりも火燃出、津浪山のごとく湧上り來り、島原城下の町々、其外島原領の村々、佐嘉領の南海に臨める村々、肥後國の西面に臨める村々、天草島の海濱にある民屋、皆同時に沒溺し、島原にて死亡の人凡三萬餘、肥後にても二萬餘人といへり。その外諸國皆それに準じて夥しき死亡なり。其夜海中に小き島七八十も出現したりとぞ。去年霜月頃より雲仙嶽鳴動して、春に到ります〳〵甚しく、夜分には地中より火の玉出、或は火柱などの立たる事毎度なりとぞ。二三月頃には九州惣體地震甚しく、肥前は別して強く、一日の間に四十六度震ひし事も有ける。四月朔日大破の時節は、島原の地甚熱し、草履にては歩行なりがたく有しが、頓て山破れ火出しとぞ。其前に島原近邊の草木、一夜の間に何れの木も俄に花咲みだれ、人皆見物に出し程なりき。安永己亥の冬十月朔日より、薩摩國櫻島山大に燃て、十月十日には伊勢、尾張、志摩、三河邊までも、其灰降たり。其後天明年中に信州淺間嶽大に燃、又今度の雲仙嶽なり。櫻島山の時は大隅國の海中に新島七ツ出現せり。余も親しく見及びたり。海中津浪は今度のごとく甚しからず。但大燃の後數日して、山上より大水漲り下り、其水筋の民家皆流れ、死亡の人甚だ多かりし。淺間山大燃の後も、數日して山中より泥

離魂病—神經病の一種にて睡眠中に無意識に起き出て諸方を彷徨する病氣

臘月—十二月の異稱

陪臣—またもの、家來のまた家來

正しく轆轤首を見けるもいと奇怪の事なりける。余此事を後につくぐ考ふるに、妖怪にては無く、病の然らしむる事なるべし。痰多き人は陽氣頭上にこぞみ、其氣形を結んで首より上に出るなるべし。其人の寢たるを見ば、正眞の首は其儘身に附て有べし。離魂病の類なるべし。彼下女は屏風の内に寢たる事なれば、首は身に附居しや、無りしや、見ざりしと妻女語りき。

一寛政辛亥臘月江戸下谷の火災に、久居侯の臣福北三太夫大に働きしに、其後官より侯へ達せられて、三太夫儀此頃火災の節、比類なき働消口數ヶ所を取り、殊更足輕の引廻し方行屆候段、上聞に達し、奇特に思し召るゝの間、主人より褒美し然るべしとぞ。誠に微賤の陪臣の功をも斯様に賞せらるゝこと、士氣を勵ますの策なるべし。有がたき御代なりき。

一元の謝宗可の茶筅の詩とて、朱文公家禮の註に見えし。

此君一節瑩無レ瑕、夜聽二松風一漱二玉華一、萬縷引レ風歸二蟹眼一、半瓶飛雪起二龍牙一。

一寛政四年壬子二月肥前國雲仙嶽大に火燃て、數日地震夥しかりし。同四月朔日の夜戌刻過、雲仙嶽の下の前山といへるが、島原城の上に當りたる山二ツに破れ火出て、

に抱ながら起出て、燧をうち、有明の燈火を點じ、下女がいねたる次の間の障子を開きたるに、下女が枕もとの小屏風の下に何か丸きもの動きて見えければ、何やらんと有明の燈火をふり向見るに、下女が首引結髪のまゝにて屏風の下に引添ひ、一二尺づつ屏風へ登り附ては落ち、登り附ては落する程に、妻も見るより膽消魂飛で氣絶もすべく覺しが、小兒を抱き居ければ驚ん事を恐れ、右の手に小兒をかゝへ、左の手に有明の燈火をさげて其儘に居すわり、暫は物も云はで有けるが、彼首毎度屏風へ登り附ては落々して、つひに屏風を越えて内に入り、又下女がうめきおそはるゝ聲聞えし。妻は下女をも起し得ずして、其儘に障子引たて、又我閨に入りて夜明るまで目も合はず、蒲とんを引被き居て、夜明るを待かねて、里方の大坂屋方へ人して、急に兄の長三郎を呼び、しか〳〵の事をかたり、何となく他の事に寄て下女にいとまやりぬ。此下女仁右衛門留守中ばかりやとひたる事にて、近き町の者なりければ、世上の評説を恐れて此事深く祕し、今一人の初より居る下女へも聞しめず、唯京に居ける夫仁右衛門へ此事告來るついでに、余が多年親しき事なれば文して委しく申來れり。後に其妻も京に上り住ければ、余も直に猶委しく聞けり。夢幻などの事にては無く、

一スランガステインといふ石は蠻物にて、蠻人たま〳〵持渡る。よく膿たる腫物の口潰たる時に、此石を瘡口に當ればよく膿汁を吸ふ。膿盡れば石おのづから落るなり。其石を水中に入るれば、吸たる膿をこと〴〵く水中に吐出すなり。其後石をさめ置て幾度も用るに、腫物の膿を吸ふ事ベントウザに勝れりとぞ。石の色甚黒く光りて、聊針眼あり。近來は僞物甚多く、舌に附事は眞物にも劣らぬ程なり。如意道人東遊のとき、和産に此石ある事を聞て、一塊を持歸り、余にも贈れり。遠州掛川の近在サイゴウ村蛇ばみといふ處に産す。其地の方言に舌附石と云ふ。石の色青く、砥石に似たり。よく舌につく。形狀は大に蠻産に異なり。

一越前國敦賀原仁右衞門といへるは、余が多年格別懇意の人なり。此人用の事ありて數月京へ上り居し留守の事なりしが、其妻千代といへるが、二歳になる岩助といふ小兒を養育し、下婢一人召遣ひ居けるに、主人旅行の留守なれば、外に男子もなければ淋しとて、又一人廿六七才許なる下婢をやとひ留守を守り居けり。寛政元年酉十月の事なりし、夜更て彼下女殊の外にうめきければ、妻も目覺て、持病に痰强き下女なれば、又痰や發れる、尋ばやと思ひしに、枕もとに有ける有明の燈火消居ければ、小兒を懐

今は散佚して僅に百巻を残せり享保十八年九月歿す年七十三

多賀社—犬上郡多賀村に在り

漢雜笈或問ともいふ。元祿年間の作なり。其說甚奇僻にして、多くは牽强附會の說と思はる。其引所の書も皆珍奇の名にて、世間にあらざる書なり。其中の一說に曰、韻鏡の學は梵僧より傳來して、唐土に興れりといへども、此說は大に非なり。韻鏡の學は漢の李紳より始れる成べし。其李紳が說を天竺に傳へて、其後又天竺より漢土へ傳りしにや。漢の李紳周易の六十四卦を考へて音韻の學を發明せしが、其學甚微々にして世に行れがたく、遙の後宋朝にいたりてやう／＼知りたる者有りしとなり。此說は印板の唐本にもなく、余が父明の舜水先生より口授し給ひて、其說を又余が傳授せるなり。韻鏡の反しやう、周易の六十四卦に有る事、望む人あらば合せて見すべし。別して日本の人は夢にも知らざる大祕說なりと云々。春暉按ずるに、近來皆川先生音韻の學を唱へて、易の六十四卦をもつて文字の義を解し、音を知るといふ。皆川も彼祕說を聞きしにや。又は自己の發明にや。唐土にも書傳なき漢代の事を、舜水明末に生れて傳來せりといふも奇にして信じがたき事なり。

一江州多賀社より三里程の山奥に洞穴あり。其穴の中に鐘乳石多く產せり。山田の浦の人木內古繁此穴に遊べりと聞り。

汐尻—汐濱の砂の塚の如くもりあげたるものをいふ

天野信景—尾張の藩士にて博覽強記を以て名高し隨筆汐尻はもと千卷に近きものなりしが

り得たり。其石の上を少し窪め掘り、其中に潮にても酒にても酢にてもいれ置ば、四方へも下へも自然に滴り出る。酒などを試しに、實に清水に成れり。然れども甚少しづゝ出て、中々數斗の水を漉すべき急用には立がたしと。伊良子長門守見及びたりと語りき。

一佐野山陰、淡路國福良といふ所の豪農坂東徳之助といふ人の家に遊びしことのありしに、其家の庭にて鹽を燒ければ、もし此あたりに汐尻といふものやあると尋しかば、是なりと出し見せたり。潮を打たる砂をあつめて、潮を漉す時に、其砂の上に潮を汲入るゝに、其砂の亂れざる爲に、藁にて前狹く末廣くあみたる物をあてて、其上に潮を汲入るゝ事なり。此藁にて編たる物を汐尻といふなりと敎たり。諸國にて方言違ふことなれば、他の國にても如此物を汐尻といふやしらずと語りし。尾張國の天野信景著述の書の名を汐尻と名附しは、其書の最初に汐尻の說有るゆゑとぞ。其說はいかなる說にや、余いまだ汐尻の初卷を見ず。常に人の覺しは、擂盆の事をしほじりといふ。いづれか是なるや。

一珍書考といふ書は水戶の儒官鵜飼信興の著述にて、かな物百枚許の寫本なり。一名和

給ひしかば、火災の時もみづから携へて出給ひつるにぞ、稀代の名器今に存在せり。卿數奇人にて、其行昔めき、堪能の名高かりしも實とぞ思はる。

一下野國烏山の邊に雷獸といふものあり。其形鼠に似て、大さ鼬より大なり。四足の爪甚鋭なり。夏の頃其邊の山諸方に自然に穴あき、其穴よりかの雷獸首を出し、空を見居るに、夕立の雲興り來る時、其雲にも獸の乘らるべき雲と乘りがたき雲有るを、雷獸能見わけて、乘らるべき雲來れば忽ち雲中に飛入て去る。此もの雲に入れば必雷鳴るにもあらず、唯雷になるとのみ云傳へたり。又其邊にては春の頃雪をわけて、此雷獸を獵る事なり。何故といふに、雪多き國ゆゑに冬作はなしがたく、春になりて山畑に芋を種る事なるに、此雷獸芋種を掘り喰ふ事甚しきゆゑ、百姓にくみて獵る事とぞ。是漢土の書には雷鼠と出たりと、塘雨語りし。

一蠻人大海中に乘出したる時、水乏しきゆゑ、奇妙の石を所持して海潮を其石にて漉すに、海水忽に淸水となる。潮のみに限らず、酒にても、酢にても、其水漉石にて漉す時は、無味潔白の淸水となること也。日本にも伊豆國三島にそれに似たる石ありとぞ。伏見御香宮の神主三木伊豆守は、三島に緣家ありて、一尺餘の水漉石を三島よ

種る—原本うゑると訓ぜり

も猶世間たんのうと讀むものあれど堪には勿論たんの音なく古くは又必ずかんのうと音讀せり

み思召、毎度彼亭に到り、乞ひて彈じ給ひしに、一しほ望ましく成ければ、暫時借り度よしを仰られしかど、彼卿をしみ給ひて、拜領の品家久敷持傳へ侍る重寶、門外へは出しがたきよしを斷り給ひければ、卿もちからなく歸り給ひぬれど、猶其琵琶のゆかしく忘れがたくて、北野の社に卿みづから徒跣にて日參して、何とぞ彼琵琶を暫の間借り得んことを祈り申されける。風吹日も、雨降日も、怠ことなく、位高き人の、供人をも召連ながら、白晝に徒跣にて數月參り給ひければ、其頃町家にてもいと物狂しき人なりと沙汰にもなり給ひぬ。彼卿此事を傳へ聞給ひ、始の程は誠とも思ひとらで居給ひしが、後には深く感心し給ひ、さるにても殊勝の事なり。かほどに執心の人にいかで借で有べきとて、卿を招き給ひ、しか〴〵の事聞侍る。御志の難有さに、彼琵琶借し進らすべし。明日にても人して取にこし給へと宣ひければ、卿いと嬉しくて、其上は明日とは申がたし。今こそと乞出して、みづから狩衣の袖の上に抱きてぞ歸り給ひぬ。其後彼御家の重寶の名箏を暫の間代とて彼亭へ贈り借し給ひしに、寶永の火災に彼亭の土藏燒失て、彼箏もうせぬ。琵琶の代の箏うせぬれば、いつまでもかへすべき年なくて、今に巖の琵琶は彼御家に傳はれり。卿常に身を放たず愛し居

信西入道ー藤原通憲の法名鳥羽崇徳近衞後白河の四朝に歴事し平治の亂に藤原信頼等の爲に殺さる

堪能ー原本たんのふと音讀す今日

一橋本肥後守所藏に、信西入道の眞跡の舞樂の圖の卷物の寫有り。樂曲數多あり。其中に含笙とて吹居る圖を見るに、今のごとく顔に正直には當てず、斜にそむけて吹り。是古昔の笙の吹やうと思はる。又今樂家に手近く吹曲にも、其舞の姿甚卑劣にて、今の俗間にある太神樂、獅子舞、手づま、輕業などのごときもの多し。雅樂は古代の物にて、殊に唐土の事なれば、今のごとき章雅無き事にては、世俗の淫樂とは格別の物にて、天地霄壤の違あるもののやうに人皆思ひ居れども、人情は古今同じものなれば、其舞には今の俗人の悅ぶやうなる事も多かるべきことなり。

一京都千本通下立賣に燧を賣老翁あり、吉久といふ、寛政八年丙辰百十歳にて壯健なり。鍛冶の職をもよく勤め、毎日自身に燧を諸方に出て賣。歩行も甚だ健なり。故一條殿下より鐵石軒といふ號を賜ふ。其外王侯貴人爭ひ召て壽の字などを書しめ給ふ。燧をも老翁みづから鍛ひて、鐵石軒吉久と銘して賣。其妻九十七歳亦甚壯健なり。夫婦とも此上猶數十年の壽を保つべく見ゆ。いと珍らしく目出度生なり。

一寶永年間〔　　〕大納言殿は管絃の達人なりしが、殊更に琵琶の堪能にておはせし。御同列の御家に、延喜御物の名琵琶巖といへるを昔より持傳へ給へるを、卿羨

月有遠恨　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宵柏　牡丹花

おもふらし櫻かざして宮人の、かつらを折ぬ月のうらみは。

山家燈　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　親當　蜷川新左衛門

暮てこそ人住庵もしられける、かた山蔭の窻のともし火。

曉神樂　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　冬康　安宅攝津守

うたふ夜の曉深く聲更て、神代ながらの鈴の音かな。

河五月雨　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　氏眞　今川

よし野川瀬々のしら波岩こえて、梢にかゝる五月雨の空。

寄枕戀　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　昌叱　里村

あはれともうしとも今はなれをしも、知る人にせん小夜の手枕。

江邊寒月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　政一　小堀遠江守

かぜさえてよせ來る波の跡もなし、氷る入江の冬の夜の月。

月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貞德　松永

雲と見えば今宵の月にうからまし、よしや吉野の櫻なりとも。

松間花　　晴信　武田大膳太夫

立並ぶかひこそなけれ山ざくら、松に千年の色はならはで。

寄松祝　　氏政　北條

守れ猶君にひかれて住よしの、松の千年の萬代のはる。

山家初冬　　尙證　惣社坂本

山賤の朝けの煙打しめり、時雨し空に冬は來にけり。

月思往事　　長嘯　東山若狹少將

世々の人の月は詠めしかたみぞと、思へば〳〵ぬるゝ袖かな。

關月　　宗祇　連歌師

淸見潟まだ明やらぬ關の戶を、誰がゆるしてや月の越ゆらん。

月前述懷　　心敬　僧都連歌師

こしかたも歸る處もしらぬ身を、おもへば空に見する月かな。

荻聲驚夢　　基佐　櫻井越前

淋しさの種をぞ植し、宵々に夢驚かす庭の荻はら。

待花　昌俊　佐川田喜六

よし野山花まつ頃は朝なく〳〵、心にかゝる峯のしら雲。

佛名夕　紹巴　連歌師

ゆふべ〳〵佛の御名をとなへつゝ、罪も消けり衣手の露。

初冬時雨　宗牧　連歌師

けふ終に秋の時雨のあらましを、空ごとにせぬ冬は來にけり。

田鹿　玄旨　細川

さすがまた小田守賤も鹿の音の、遠ざかるをば慕ひてや聞く。

行路時雨　心前　連歌師

かへり見る跡の山風吹しより、やがて時雨の雨いそぐらし。（イ道）

柳　元就　毛利大膳太夫

青柳の絲くりかへすそのかみは、誰が小手卷の初なるらむ。

閑居　氏康　北條左京太夫

中々に淸めぬ庭は塵もなし、風にまかする山の下庵

浦擣衣　兼栽　猪苗氏 仙臺連歌師

秋深くなる尾の浦の海士人は、しほたれ衣今やうつらむ。

冬野　道灌　太田

から衣すそ野の草の花薄、ほの見しかげもしも枯にけり。

寒蘆風　長慶　三好修理太夫

難波風入江にわたる音さえて、あしの枯葉の蔭ぞさむけき。

旅宿霰　宗養　連歌師

風まぜにあられたばしる笹枕、夢もむすばぬ旅寐わびしき。

關雪　政宗　伊達中納言

さゝずとも誰かは越えん、逢坂の關の戸うづむ夜半の白雪。

梅香留袖　兼與　猪苗氏 兼栽ノ子

誰袖に匂をふれて散のころ、色香すくなき庭の梅枝。

遠村鷄　玄陳　里村 花下先祖

をちかたにゆふつけ鳥の聲す也、いざ其里にやどりとらまし。

残春　津守國豊　住吉社務　信長時代ノ人歟

よしの山ところせきまで見し人の、ちりぐ\になるはなの古さと。

山月入簾　淨通尼　光隆院殿後室

秋の夜の露の玉だれひまをあらみ、もりくるものは山端の月。

春祝言　宗長　後柏原院御宇　連歌師

青柳のなびくを人の心にて、道ある御代のはるぞ長閑き。

寄舟戀　宗碩　連歌師

こがれ行舟流したる思して、よらむかた無き君ぞつれなき。

月前雁　宗閑　能登

きゝ初る雲井の鴈の聲よりも、驚かれぬる月の影かな。

曙雪　正徹　徹書記　招月庵

白鷺の雲井はるかに飛消て、おのが羽こぼす雪のあけぼの。

初逢戀　正廣　世ゝ日頃ノ正廣ト云

鉤簾の外にひとりや月の更ぬらん、日頃の袖のなみだ尋ねて。

る心得雜話等を記したる書也二卷より成る

集外歌仙─後水尾院の御撰にて當代前後の歌仙三十六人の詠一首づつを集めたるもの也

の古鐘はむかし紛失して、其後音律を知らざる人の、外の鐘をもて補ひたるなるべし。僧徒の古鐘なりといふは、此寺の寳物の一ッなるを失たりといはんもいかゞなりとて、僞りて人を誣るなり。但黄鐘の古鐘の失たりしは惜き事の限なり。其後年へて浪華の古き事よく知れる人に聞しに、今の鐘は二百年前芥五郎右衛門といふ鑄物師の新に鑄て、六時堂の前に懸たるなりとぞ。其芥五郎右衛門と云人は、京都の大佛殿の鐘をも鑄たる人にて、官より三十人扶持を賜り、今に相續して播州姫路に其家有とぞ。又徒然草に出たる淨金剛院の鐘、今洛西の妙心寺に有と聞て尋しに、此鐘を撞時は寺に凶事ありとて、土藏中に納置しに、近來卓見の僧出て、何條さる事やあらんとて又出して撞たりしに、折悪くも凶事ありければ、一山恐れて、今にては又土藏中に深く納めしといひし。虚實いかなりや、いぶかし。

一集外歌仙は、狩野蓮長に命ぜられ、圖畫を添られたりとぞ。

峯炭竈　　平常緣（千葉介常胤六男東六郎胤頼末）

立のぼる烟ならずば炭竈を、そこともいさやみねのしら雪。

松永貞徳—京都の歌人にて又俳諧を善くし一道の宗匠と仰がれ花の本の號を賜はる承應二年十一月歿年八十三其の戴恩記は歌道に關す

北窻瑣談　巻之四

一蔦葛朝顔瓜の類、すべて蔓草の纏ふ事、皆左に巻ものなり。天地の自然に任すれば左巻なり。是は日夜天の左旋するゆゑに、天の氣に引れて左にまとふなり。

一松永貞徳の著述の書に戴恩記といふありて、貞徳生涯恩義を蒙りし事を載られたりとぞ。余いまだ其書を見ざれども、其書の主意今時の風と違ひ、古人徳行の風儀難有心ばへなり。

一大坂天王寺六時堂の前の鐘は聖徳太子の舊物にて、眞の黄鐘律なりといふこと兼好が徒然草に出てより、今に到り世の人皆名鐘なりと思へり。余も往年天王寺に到り、其かねを聞に。其律黄鐘には似も寄らず甚低く、世間普通尋常の鐘の如し。其形も又二三百年より古き物とは見えず。怪しみて寺僧に問に、太子傳來の古鐘なりといふ。猶怪しみて其樂人に問に、實に律は黄鐘には非ずと云。余ひそかに思ふに、太子傳來

所物語りき。

穴に管あり。管の長サ七寸五分、周七寸。穴内外に透れり。其律一越の清律なり。甚高き律故、他の尋常の鐘の音には格別異なりと聞ゆ。銘なし。余考ふるに、梁武帝の時の物にやと思はる。梁朝は日本往來甚多し。貨物も來れりと見ゆ。其律一越の清聲なること、本邦伶人家傳來に、古の黃鐘律を今の律管の一越に當ること、いはれ有事にや。徂徠の說にて、古の黃鐘律今の黃鐘律に當ること明白なれども、此鐘一越律なるにも深き故有べしと思はる。

一泉州堺の東六七町ばかりに、仁德天皇の陵あり。俗に大仙陵といふ。甚大にして、南北に長し。其長さ三四五町許もあり。周廻に池有。陵は北の方高く、南の方低し。樹木夥敷生茂れり。其大なる事天造の岡山のごとく、人作のやうには見えず。今も樹木を切り下草を刈ことを官より禁じ、雜人の入る事をゆるさず。天下の陵の大なるもの、此陵を第一とすべし。

一但馬國竹田といふ所に、民家の娘ひそかに通ずる男ありけるが、程へて終に懷姙し、平產しけるに、四ッ子を產せり。其形に種々有りて、頭は人にて、手足狐なるもあり。首は狐にて、手足人なるもあり。狐の男に化して姦通せしにこそありけめと、伊藤東

伊藤東所｜東涯の長子也文化元年七月歿年七十七

府中―今の靜岡市をいふ、人町といふ事不明或は人宿町をいへるか

其後諸國遊行し、伊豆國三島に住し、學校を建立し、自身の庵室をも構へ、年七十餘にて三島にて終れりとぞ。

一唐土の醫は文勝て質少なし。日本の醫は質にして文なし。

一藥の效は診察にあり。人を診するは難うして、みづから診するは易し。余醫にこゝろざしてより、いかなる大病の時といへども、他人の藥を服せし事なし。人を診察するにも、自ら察する程に明らかに有たきものなり。

一駿河國府中七間町挽物屋長左衛門は、天文の心得も有る人にて、北極星を測り見るに、府中の人町にて測ると富士山の八合目にて測るとは、凡三度半を差りとなり。富士山にては三十九度に及べりと語りけると、如意道人物語りき。

一尾張の國名古屋の入り口に、前津といふ處有り。此所の人に白翁といへるが、古鏡を多く所藏せりとぞ。余も其所持の神代鏡などの墨に摺りたるを五ッ六ッ見たり。

一播州加古川の驛の南半里に、刀田山鶴林寺といふ古寺有。聖德太子の建立の寺にて、其時分の堂宇今に殘れる有。此寺の鐘古物にて、音聲格別に妙なり。其形は尾上の鐘に似て小さし。高サ二尺四寸、徑一尺七寸五分、厚サ二寸。龍頭の傍に穴あり。其

なひかと訓じたれど世人大方なみかはといふ按ずるになみかと訓ずべきものゝ如し

門丹波より山城國鳥羽村へ出て米商をなせり。五一郎勘助いまだ幼き時に、近所の人に頼みて四書の素讀を學ばせけるに、或時論語の我黨に身を直するものありといふ章を讀を聞て、是は怪しき事なり。子として父の悪事をあらはす事、何として直しといふべきやといひけるに、やがて次の孔子の御言葉を聞て、かく有べきはずの事なり。孔子は難有人なりと云はれしとぞ。彌右衛門は文盲無學の人にて、四書の素讀をも始て聞程の人なりしかど、其見る所かくのごとし。五一郎勘助の父といふべし。此事其子孫並河清助物語なりき。

一並河勘助は天民といひて、五一郎の弟なり。二十歳の時仁齋先生に従ひて、廿六歳の時仁齋の經義に不審ありて、一日大に論じ、其後は自身の發明の見識有しとぞ。然ども仁齋先生一生は師恩を敬する事淺からず。我子孫へも遺言して、伊藤家を麁略にすまじといましめられしとぞ。天民豪傑の質にて、頼母敷人なりしが、四十にて死せり。其兄を五一郎といふ。五畿内志を撰述せんことを願ひしに、願とてはむづかし、公儀より仰附らるゝよしにて御聞届有て、五畿内何方へも御觸ありて、五一郎巡行し、神社佛閣及び諸家の祕記祕物をも一覧して、五畿内志成就し、寫本にて官へも獻上せり。

しおそく下らば一命をも失れんを、猶此上の祟もおそろしとて、俄に樹木に神酒を備へ、罪を謝し、過をわびて、其日の賃錢さへ取らで迯歸れり。其三ツまたの所は甚清淨にて琢たるやうに有ける。何さま神物の久しく住ける處にやと、善左衞門も恐れて、此銀杏樹を敬しける。此事善左衞門親類の嘉右衞門物語なりき。

一泉州境の醫に半井宗珠といへる人あり。三四代ばかり前の宗珠、名醫の名高かりし。或夜一老婆來りて、某村の者に候。我子の病氣に候故參り候なりといひしかば、宗珠呼入れて逢ぬ。扨如何なる病ぞと問に、彼婆聲をひそめ、我子盜賊のくせありて難儀に候なり。あはれ君の御藥を與へ賜りて、此くせ治し候やうにと餘儀なく頼みければ、宗珠暫思案して、心得たりとて藥を多く與へけり。跡にて弟子なる者ども、怪しみて、病もあらぬ者に先生の藥を與へ給ふは如何にといふに、宗珠答へて、我は醫案の附たれば藥を與へたり。汝等も稽古の爲に考へ見よといはれしかど、皆思ひよるべくもあらず。ひたすらに乞問ければ、さればとよ、我は肺臟を乾かす藥を與へたり。もし常々に咳嗽出ば、盜人の業は叶ふまじといはれし。頓智の答なり。

並河一原本

一並河五一郎、同勘助の父を、並河彌右衞門といひて、丹波國並河村の人なり。彌右衞

松永彈正―松永久秀をいふ久秀は丹波國三好氏の臣なりしが三好氏に叛きて之を滅し織田信長に從ひ又叛して天正三年十月信忠に圍まれて自殺す年六十八

一明の屠長卿が作の山中一夕話といへる書に、天狗の字出て、日本の天狗の事に類せる事あり。

一松永彈正志貴山落城の時、常々祕藏の平蜘蛛の釜を敵の手に渡さんことを無念に思ひて、火中に投じて碎しを、傍の人ひそかに拾ひとつて迯れしが、今に伊勢國何がしの家に祕藏せりとぞ。其記を滄洲翁に賴めりと、彼翁物語なりき。眞の物なりや、いぶかし。

一寛政四年壬子四月の事なりし。山城國淀の北横大路といふ里あり。其村の庄屋を善左衛門といふ。其家の裏の藪際に土藏あり。土藏の傍に大なる銀杏樹あり。近年大風などふく度に、土藏の瓦を下枝にて拂ひ落しければ、善左衛門杣をやとひ下枝を切拂はせけるに、段々下より切りもてゆきけるに、やう／＼上に登り、三ツまたの所に到りて、件の三ツまたに成たる枝を切んとせしに、俄に陰風吹來り、杣が首筋を何やら物ありてつかむやうに覺えて、身の毛ぞつと立ければ、杣大いに恐れて、急に迯下り見るに、首筋元の毛一つかみほど引ぬきて、顏色土のごとくに成たり。善左衛門も怪みて何事にやといふに、杣恐れて、天狗の住給ふ所を切かゝりし故にとぞ思はる。今少

八荒譯史ー前に八紘譯史とあるに同じ

一天文の一技は西洋を宇宙第一とすべし。推歩測量の精妙言語に絶せり。其書は靈臺儀象志、崇禎曆書、最全備の書にて、天文曆學の人は無くて叶はざる書なり。大西の天學者には、利馬竇、南懷仁、湯若望、艾儒略等、高名の人多し。又地理の書には、職方外記、八荒譯史、虞初新志、坤輿外記等、其外かず多し。

一秦の趙高が言葉に「斷而敢行鬼神避之」と。此八字實に豪傑事を成す人の語といふべし。中心一疑を生ずるより種々の妖魔起りて、萬の妨は出來るものなり。

一凡士たる者、常々無事閑暇の時に、萬の事を學び習ひ、如何程も疑を起し、切磋琢磨し置て、大事にもあれ、小事にもあれ、事を行ふ時には、中心聊も疑を挾むべからず。疑ふ事はならず。事に逢て斷然として行んが爲に、居常平素心得置ことなり。

一王陽明先生宸濠の賊を伐し時、反間を放しに、あまりに淺き謀なれば、彼必信ずべからずといひし人の有しに、聊も疑ひ用心する事も有まじきやといはれしかば、其人答て、淺き謀にて詐とはしれだれども、萬々一反間のごとくなれば、一大事の儀なればすこしは疑ひて要心すべしといひしにぞ、王陽明悅びて、若賊の一疑をなし得ば、我事成んといはれし。

東野州常緣―東下野守常緣とて古今傳授を以て名高き歌人なり將軍足利義尙も師事せりといはる

大にはらを立、もし賊僧を追ふ事ならずんば、衆僧一人も殘らず退散すべしといひしに、禪師笑ひて、退散したくば勝手たるべし。悟道善行の僧は教るに及ばず。此結制も左樣なる惡心の者を敎へさとさん爲なれば、惡僧なればとてみだりに追放すべからずといはれしにぞ、衆僧大に感じ服しぬ。彼賊僧も是を傳へ聞て大に感悟し、座中に出て賊をなせし事どもをみづからざんげして、前非を改め、德行堅固の僧となりしとぞ。

一屈景山先生の書れしかな書の書の中に、今俗間に男女私に相通じて心中死することを、唐土にて女棚といふとぞ。

一同書の中に、東野州常緣、古今集の箱の上に「天地一馬古今一豁雪風花扼攘千古」と書れしとぞ。世に是を箱傳と云。是を野州より宗祇法師へ傳へられしなり。

一嶴の字、近き頃唐土人の多く用る字なり。鮑氏知不足齋叢書の中、孝經跋の所に、日本に長崎嶴ありといふ事見えたり。又兵垣といふ書の中、殷都が日本考に、其地九州居㆑西爲㆑首、陸嶴居㆑東爲㆑尾云々。嶴の字見えたり。兵垣は明の唐順之等輯る書なり。

一周行備覽といふ書は、唐本にて、小本五六册あり。唐土の行程記なり。驛々、名所、古跡、茶店等の事まで委くのせたり。

結制―僧侶のする修行の一種、夏安居冬安居如き卽是也

ひて筆をとられしに、何とかしけん件の罫紙見えざりければ、弟子して捜し求しめらるゝに見えず。さがし倦て其日も暮ぬ。醫も賴みかゝりける事なれば其夜も逗留して、又明日朝より弟子打より罫紙を求るに、とかく見えず。又其夜も過ぬ。醫も數日の逗留に迷惑しけれど、今更打すてゝも歸られず、又次の日も捜し求れども見えず。弟子もつかれて纔の罫紙新に作り奉らん事容易の事なりと毎度申せしかども、禪師聞かず、唯心靜に捜求べしといひて待居られき。又其次の日に到りても猶弟子大勢さがし求めけるに、棚の奥よりぞ求め出しぬ。禪師是を見て、よし〳〵、汝等もよく見よ。萬の修業底は如此ものなりと。醫も是を聞て感心し、此間數日の逗留の益ありしと悦びて歸りぬ。

一盤溪禪師播磨にて結制の時、僧徒數百人來り集り居たりしに、其中に賊僧ありて、誰も銀子を失ひし、何某も衣服を盗れしなど、毎日紛失物ありて難儀に及びしが、後には賊をなせる僧大體に知れければ、衆僧一統に禪師に申て賊僧を追放せん事を願ひけるに、禪師聞屆けて、其まゝに捨置れしかば、數日の後衆僧又此事を禪師に訴ふ。禪師猶も其まゝまた捨置れし。如此事三四度に及びて、猶其まゝなりければ、衆僧

に、少しも腐爛せず、今新に打出せる刀のごとし。それより刀劒の事よく知れる人に見せけるに、是は聞傳へし事あり。能登守敎經所持のサクウ丸と云太刀の銘なり。扨は敎經の刀にてや有べきと、彼酒屋甚だ珍重して、今に其家に傳へりとぞ。是も播磨の滄洲翁物語なりき。

一明の雲棲大師の作に、竹窻漫筆といふ書あり。禪僧ながら文字をも廢せず、面白き書なり。又彼大師の警世四絶有。

畏レ寒時欲レ暑、苦レ暑復思レ冬、忘想能ク消滅、安身處々同。

忖得翻成レ失、欲レ東仍復タ西、未來杳無レ定、何ゾ必豫ニ勞思一。

蠶出桑抽レ葉、蜂饑樹結レ花、有レ人斯有レ祿、貧者不レ須レ嗟カラク。

草食勝ニ空腹一、茅屋過ニ露居一、人世解ニ知足一、煩惱一時ニ除。

一播磨の盤溪禪師、每度人のもとめに應じて、法名を書て與られしに、いつも文字ゆがみ見苦しかりければ、弟子罫紙を作りて進らせ、是を下にしきて書給へといひしに、それよりはそのごとくせられてゆがまざりしに、或時明石の醫何某、かねて禪師を信じて、每度行て敎をも受しが、人より法名の事を賴まれて禪師に乞しに、禪師うけが

あり。

體源抄―豊原純秋の著にて古樂器の來歴を記したる書にて二十巻より成る

滄洲―赤松滄洲とて赤穂の儒員より家老職に至りし人、享和元年歿年八十一

り。多く傳寫して弘まらば、作者の悦にも有らんと思ひし。

一天明年間にや、備前國犀戴寺村の海中にて、漁人の網に鼎一ツを得たり。篆書の銘あり。唐土元の世の聖堂祭器に用ひける舊物なる事、其文にて見えたりきと、滄洲翁物語なりき。

一今より百年も前つかたの事にや、備中玉島の海にて、棒の形の物に貝多く附たるを、漁夫ども網にて引上たり。面白き形の物なり。此邊の酒屋何某は、珍敷ものを好める人なれば、いざや彼處に持行て、酒にかへて飲べしとて、漁夫どもやがて彼酒屋へ持行て、酒二升にかへん事を乞しに、酒屋の手代笑うて、かゝる無用の物酒にかふることやあらんとうけがはず。彼是論じ合てありしを、亭主聞て、何事にやと出て見に、件の貝の附たる長き物を持てり。實面白きものなり。何にもあれ、よしや酒二升は漁夫ども是まで持來れる勞にも施すべしとて、頓て酒を與へて、件の物を取り、居間の庭前に建置しに、數日へて雨の後、彼物より流れ落る雨水に鐵氣見えければ、内に何か有べしとて、貝を打砕き見るに、中より刀の身を取出せり。さればこそとて、備前岡山の研屋へ頼み研をかけしに、友成といふ銘見えて、見事に研上たり。久しく海中に有し

ふ卽ち久我廣幡、三條西園寺、德大寺、花山院、大炊御門、今出川、醍醐の九軒を稱す

加藤景範—大阪の和學者にて竹里と號せり

小忌衣—袍の上に著るもの白布の青摺にして形は狩衣に似たり

樂道類聚—寫本三十卷

一浪花の加藤景範は、和歌の上手にて、歌學にも委しゝとて、京師にても稱譽する人なり。近年は色々の歌書著述も多し。此頃、余彼人の著述の和歌濱土產といふものを見しに、初心の人、和歌の會などに携ふるに、重寶有益の書なり。其中に小忌衣を註して、大嘗會、新嘗會などの時、禁庭にて舞人の著する服なりと見えたり。纔に數里なれども、浪華は京に隔りぬれば、かゝる手近き事をも、さばかりの歌學者の考へ誤れり。京の人は無學の人も知れることなり。小忌衣は祭服なるが爲に、大嘗祭、新嘗祭、其外神祭の時は、其禮に預る人は貴賤の差別なく、文官武官のわかちなく、皆小忌衣を著する事なり。若其節に舞樂あれば、舞人も著して舞ふ事なり。ひとへに舞人の著する服と限りて覺悟するはあしゝ。

一浪華天王寺の樂人秦正名著述の書に、樂道類聚といへる書あり。古樂の名をよく考へし書にて、其外にも樂にあづかる事は夥しく書集めしものにて、珍書なりといふ事を、山陰先生物語なりしが、其後浪華にて一覽せり。席上にて一覽せし事故委しくは讀得ざりしが、大抵は人の聞知り居る事を多く載せたり。卷數は多きものなり。體源抄などと類したるもののやうに思はる。其家久しく祕したるよしにて、世間に甚だ稀な

事論なし

清亮、殊更に音高くしてよく遠く聞ゆ。國造名は幸成、姓無く、官位無く、神孫にて、神代より今に相續せり。詩歌をも好みて、交廣き人なりき。

一佐渡の國にかまいたちにかけらるゝといふ事ありて、其氣の中るところ大にきれて傷る。此時に金瘡の如く縫、亦は膏藥など附れば、皆こと〴〵く死するなり。唯石菖根一味煎じて洗ふべしとなり。又其まゝに捨おく時は數日にして愈るとぞ。佐渡の外科本多勇伯余に語り侍りし。

一常陸國鹿島の神庫にも驛路の鈴ありとて、其繪圖をみたりしに、山伏の持てる錫杖の形のごとく長き物なりし。異製の鈴にや。又天明年間河内國より掘出したりとて、青き銅の鷄の形したる鈴、京へ持上りて賣し人の有けるに、並河氏伏見の宮に御覽に入奉りしに、是は我家に無くて叶はざるものとて、價を下されて召れしとぞ。並河氏後に物語なりき。宮には何の御用にか有らん。

清華―三公となり得べき家柄をいふ

一清華といふ事、今官家の名家九軒をいふ。淸華とは北齊の顏之推が家訓に出たる字にて、六朝の頃名高き家柄をいへり。

國造ーくにつこ又はくにのみやつこと訓じ上古の地方長官也、こゝに云へるは其子孫なる

長、雖ニ長編大作一亦援レ筆立成。自負ニ才氣一少レ所レ推。然而於ニ赤壁一賦一則極レ口賞レ之。今聞ニ伯虎論一亦如レ此。

一泰山集といふは、土佐谷丹三郎重遠江戸の澁川春海に從ひ學ぶの日、其師の語を多く錄せる雜誌なり。其中に、人一晝夜之息凡二萬五千許、古人曰一萬三千五百息、可レ疑也云々。春暉前年太田松之助といふ幼年の人の三十三間堂の半堂矢數を見し事の有しが、其時の一晝夜の惣矢數一萬二千許。前夜の暮六ッ時より射始して、翌日の夕申刻前に終れり。其間に飮食二便のいとまあり。又矢の出るを我呼吸に合せ見るに、一息の間に矢一筋の早さには不過。是をもつて按るに、誠に二萬五千息の方近かるべし。

一並河誠輔所藏に、古き鈴あり。其質は鐵と見え、大さは橘の大さなるもの程にて、全體丸き中に隱々として八角の稜あり。下に普通の鈴のごとき長き音穴あり。又肩の所に赤小豆程の小穴を左右に穿てり。今の製とは頗る古質也。

一隱岐國造の家に、昔より傳へ持てる驛路の鈴あり。國造在京の時は、余も親しく交りしかば其鈴をも見たり。平に四角にて、隱々として八角の稜あり。下の方に音穴長く、普通のごとし。平面に驛鈴の二字有。銅の古色愛すべし。實に數千年の物なり。其音

いかが異本にや

北史―唐の李延壽の撰にて北朝の事を錄す百卷より成る二十四史の一也

胡琴教錄―著者未詳、琵琶の故實作法に關する書にて二卷より成る

傳二日本一之多、實有レ故也。

一北史馮跋傳曰、跋飲レ酒至二一石一不レ亂。

一北史藝術傳信都芳傳曰、齊神武之丞相倉曹祖珽謂レ芳曰、律管吹灰術甚微妙、絕來既久。吾思所レ不レ至、卿試思レ之。芳留レ意十數日、便報レ珽曰、吾得レ之矣。然終須二河內葭莩灰一、祖對試レ之無レ驗。後得二河內灰一用レ術應レ節便飛。餘灰卽不レ動也云々。

一琵琶の書に、三五要錄といふ書あり。又三五中錄といふ書もあり。胡琴教錄などは世間に折々見ゆれども、此二書は稀々の物なり。或人の說に、三五要錄初の所二卷は眞の古書にて、他の全部十二卷は僞書なり。三五中錄も古書は絕て、今有ものは僞書なりとぞ。いかゞなりや。伏見の宮には二書ともに眞の物を御所藏なれども、深く祕し給ひて人間に洩したまはずとぞ。

一瑣語云、唐伯虎曰、東坡赤壁二賦一洗二萬古一、欲レ髣二髴其一語一、畢レ世不レ可レ得也。伯虎亦英才、而推奬如レ此。其必有レ以也。近世文人、至レ非レ之曰二何等狗賦一。可レ謂二大言不一レ慚矣。余意、赤壁卽自二風賦一來者非耶云々。春暉曰、亡友奥田仲獻、嘗曰、東坡文才絕倫、如二其赤壁賦一、學レ之竭二終身力一不レ可レ得二其髣髴一也。仲獻爲レ人豪放、於二詩文一最其所レ

通鑑記事本末―宋の袁樞の編述せるもの、四十二卷より成る、本文九十八卷云云とあるは

是鶴滿寺の鐘と同じく北燕の馮跋大平四年壬子の作の鐘なり。智證大師入唐は季唐の時にて、唐の青龍寺より將來し給しことなれども、青龍寺北燕の時よりの寺にて、唐に殘り居しなるべし。此年六月十七日門人辻三淸、森本隼人、松本六郎三士に命じ、三井寺に到りて鐘を見せしむるに、微妙寺にはあらで、前年開帳の時に出せしは本坊寶藏中の鐘なりとぞ。其鐘今に本坊金堂の傍の寶藏に納めり。此寶藏の鍵預を財遷坊といふ。役者を財林坊と云。寶藏の封は一山の封にて、常に開く事を許さず。三士鐘を不見して空しく歸る。財遷坊の物語に、鐘の長二尺、徑一尺六寸五分、厚サ一寸三分半、龍頭高サ五寸五分。唐青龍寺の鐘にて、智證大師歸朝の時携へ歸り給ひし物とぞ。此鐘も亦黃鐘律なりや、いまだ其音を聞かざれば論じがたし。

一北燕太平元年北魏の永興元年なり、晉の義熈五年なり。通鑑紀事本末九十八卷、馮跋滅後燕篇云、褚匡言於燕王跋曰、陛下龍飛遼碣。舊邦族黨、傾首朝陽。以日爲歲、請往迎之。跋曰、道路數千里、復隔異國、如何可致。匡曰、章武臨海、舟楫可通、出於遼西臨渝不爲難也。跋許之云々。春暉按、高勾麗、爲北燕屬國、馮氏之滅、二世馮弘奔高勾麗、男女老幼八十餘萬人皆隨。此時三韓既爲日本屬國、則北燕貨物

蒙齋—廣瀬蒙齋とて江戸の儒者也文政十二年二月歿年六十二

其後其寺廢して、此鐘久しく土中に埋れ有しを、今より二百年許以前に、長門國にて堤普請ありし時掘出して、國守に納め置れしを、國守此鶴滿寺建立の時鐘をも寄附ありしとなり。今此寺大坂大和屋といふ家の有となりて、萬大和屋の扶持なりと、住持の僧の物語なり。

一過し年、三井寺塔中徽妙寺開帳の時、古鐘有。芙蓉蒙齋兩子到り見て、其銘を打し來る。寛政七年乙卯五月蒙齋より其打せる本を借り見る。

大平四年壬子ハ日本允恭天皇四年也晉安帝義照八年也

大平四年壬子十二月日青八元大寺
鐘百七十斤大匠作金慶則棟
梁允爲十四金長沈賢等

智證大師—延暦寺第五世の座主寛平七年四月寂年七十八

一漢土律呂家黄鐘の律を論ずる事は勿論也。本邦兼好が徒然草に黄鐘律の釣鐘を論ぜしより後、まゝ此事をいふ人あれども、眞の黄鐘律を聽得ること難く、又其律の釣鐘を鑄ることは人力の及ぶべからざることのごとくにしてさし置り。余天下に漫遊して數多の鐘を聞くに、黄鐘律に近き鐘だに稀なり。唯鶴滿寺の鐘古物なりと聞て、寛政四年壬子の春彼寺に到り見る。其寺大坂天滿の北半里許、長柄村の隣村國分寺といへる小村の禪院にあり。其音眞の黄鐘律也。大サ口の徑、曲尺にて一尺九寸五分、厚サ一寸五分。龍頭の傍に管ありて、穴内外に透れり。銘文二ツあり。一ツは鑄銘也。一ツは彫銘なり。鑄銘は、

太平十年二月日○寺棟梁元○○
○金鐘入三百斤　長二尺四寸二○

如此也。五六字は滅して見えず。此銘によれば、北燕の馮跋太平十年戊午の鐘なり。漢土南北朝の時分にして、古律もいまだ亡びざる時の物、實に希代の珍物なり。此銘、一説に、太の字を天とよみて、聖武天皇の時の物といへども、此鐘と同作の鐘三井寺にもありて、智證大師唐土青龍寺より將來の物といへば、漢土の物たる事明なり。彫銘は六七百年前長門國にて彫たるものにて、長門の國の寺の名も見えたり。

て足利時代末葉の歌人也

國語—春秋の世の八國の事を記せる雜史也、左丘明の撰といひ二十一卷より成る

短册寸法、貴人は長サ一尺壹寸八分、幅二寸、平人は長サ一尺一寸五分、幅一寸八分よしとなり。

一御神樂の次第

一庭燎　二榊木 元末　三韓神 元末
四早神 元末舞アリ　五薦枕 元末　六篠波 元末
七千歳 元末　八早歌 元末五ツ舞アリ　九星 三首
吉々利々 元末　得錢子 元末　木綿作 元末
十朝倉　其駒 元末舞アリ

一國語に載せたる、周景王の鑄給ひし無射律の鐘、唐の孔穎達の說に、此鐘在王城、鑄之、敬王居洛陽。蓋移就之也。秦滅周、其鐘徙於長安。歷漢魏晉、常在長安。及劉裕滅姚泓、又移於江東。歷宋齊梁陳時、鐘猶在。魏使魏收聘梁。收作聘遊賦云、珍此淫器、無射在縣、是也。及開皇九年平陳、又還於西京置太常寺。時人悉得見之。至十五年、勅毀之云々。春暉曰、是固淫器、然而考古律之法物無過之者。勅毀之、可惜之至也。而又怪、晉荀勗考古律、不言及此鐘。不知孔說果是否。

鐵砲—原本例の鐵炮に作る

背割具足—腹巻に同じ

郎等—家來

夜鶴庭訓—夜鶴庭訓抄とて管絃の祕事心得等を記したるもの、著者未詳

三光院殿—三條實枝と

のなり。

一備前の儒士湯淺子祥が常山紀談といふ書に、加藤淸正寒天に朝鮮渡海の事をいひし註に、王正美が詩を引て「風勢面疑裂、凍粘髭有聲」といふに近しと書しが、余が賀州手取川の風雪に遇て「飛霰堅如鐵、寒風利似刀」と作りしに思合せし。

一同書に、浮田直家備前高城にての軍に、其從兵馬場十助鐵砲にて右の膝より臀へかけて打通されけれども、猶あたらずといひて進みけるに、又背割具足の右の肩かいより骨の中を臂まで打ぬかれ、目くらみて倒れぬ。郎等來りたすけて引取ぬ。其後全快して十助語りけるは、鐵砲にあたりたる時、大木にて袋を突通すがごとく覺え、物の色皆牽牛花の色に見えたりと。後に隱遁して農となり、七十七歲にて病死せり。

一箏もむかしは義爪なしに彈ぜし事にや。夜鶴庭訓に、齋宮女御箏を彈給ふに、右の御手の爪をたしなみ給ひ、常には左の御手勝に彈せ給ひける故に、後には御くせになりし。又大鏡に、芹川行幸、箏をひく人は別に爪作りて指にさし入れてひくことにて侍りと云々。是等の事にても思合すべし。

一三光院殿御說、色紙寸法、大は竪六寸四分、小は竪六寸なり。横は大小とも五寸六分。

和聲—諧音 Harmony
順八—音樂上に所謂五音を加ふること
下無—十二律の中の呂の調也
鳬鐘—同上
一越—同上

の中に上十五日は東へさし、下十五日は西へさすと。是も亦奇中の最奇なる事なり。松前の渡り口の海の潮は、常に大河のごとく、三筋の急流海中にありて、東へのみ落るといふ。是も又奇なり。

一徒然草に、伶人龍秋横笛を論じて、五の穴は聊いぶかし。干の穴より皆穴ごとに律を隔てて一律づゝをぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子をもたずして、しかも間をくばることひとしきゆゑ、其聲不快なり。されば、此穴を吹時は必のくべし。のけあへぬ時は物に合はず、吹得ること難しといひし事を載たり。是龍秋が律學にくらき故、和聲といふことを知らざる故なり。横笛は雙調より調を起して、順八に和聲を求めて、下無に到りて止む。もし五上の穴の間に一律をぬすみて、鳬鐘を穿たば、横笛一管の調子法無して、樂器とは成べからず。又中六の穴の間に二律をぬすめりとて、六の穴を含みて吹かば、よく一越の眞聲を得んや。龍秋が考誠に荒凉のことなり。又景茂が呂律の物に叶はざるは人のとがなり、器の失にあらずといひしも、律呂の事は露學ざりし妄言なり。唯龍秋をそしらんとて、向上らしき論をいひ出して、人を欺しなり。其業に居て其事にくらく、しかもみづから足れりとして、人を侮り欺くは憎きも

有職者―故實を明かにするもの

蒹葭堂―木村巽齋とて大阪の人博學多藝書畫を善くし詩にも長じたりとぞ享和二年歿年六十七

信景往年玉帶を見たりしに、其色白くして、水精のごとく透明にはあらず、霞を隔て空を望むが如し。其美なることたとへんにものなし。有職者云、是はゴクといふものにて、其紋は色々あり。鬼形、獅子、唐草、唐花等なりとぞ。

春暉いふ、外々の珠玉は日本にも多く產すれども、ゴクは日本に產する所なしと。蒹葭堂など物語なりき。京都の官家には、玉帶皆此ゴクを用らる。大家には甚見事なるあり。去る御家に長サ六七寸幅四五寸許にて、其質も甚美に、其龍を彫たる、眞に精密を極めたるを毎度拜見したり。何方に有も、玉帶に用ひたるは、彫刻の細工精密を極めたるもの也。實に玉を切事泥のごとくならざれば、此細工は施しがたしと見ゆ。皆唐土の物なりといひ傳へり。何の代の細工なりしや。

一 鹽尻に、海潮の滿干國々異なり。大阪より備後の白石の泊まで、凡五十餘里、其間の潮上へさす。それより周防のさらしに到りて、四十里海潮上へさして甚烈し。是より筑前の山・エの岬まで四拾里、潮下へ滿つ。是より西肥前の樺島に及びて八十餘里、潮又上へ滿つ。又長門のもろ津の鼻よりは、潮北の方へのみさす也と。春暉按ずるに、大洋に出ても、潮の東西南北すること諸國にてかはり有。唐土瓊海の潮などは、一月

なり

鹽尻―天野信景の隨筆百卷より成る

園太暦―原本園大暦に作る、中園公賢の撰にて南朝衰微の有様當時の狀況等を錄し三十三卷より成る

一人は天地の益になることをすべし。世間少し文字有人は醫をなすことを賤しめども、今太平の御代に生れて、匹夫の身醫業を外にして何事をなして人の憂を救ふ事あらんとぞ思ふ。

一鹽尻に園太暦の十八卷を引て云、兼好法師觀應元年二月病にかゝる。上皇聞召、典藥頭和氣淸元をして、伊賀國に越て療治せしめ、米穀三千石を賜ふ。伊賀守橘成忠使をして奏す。二月七日也。兼好法師生死無常の急なるは桑門の悅ぶ處なりとて、藥を不服。米穀は近村の民に施せり云々。二條良基公年來の和歌の友なりしかば、病を問んが爲に、ひそかに伊賀國に越給ふ。二月十五日兼好伊賀國國見山の麓田井の庄に寂せり。　上皇主上濕勅云々。同二十五日米穀五千石鳥目二千貫を賜ひ、田井庄に墓を築き、遍照寺の僧に命じ、伊賀國分寺に葬事を勤しむ。同廿七日權僧都を贈らる。春暉思ふに、兼好はもと吉田の祠官にて格別の貴人にもあらず、又其頃は戰國の時にて騷騷敷時節なれば、病にかゝりて後の事あまりに過分の事にもや。其虛實いぶかし。後に人にも尋しに、園太暦は怪しむべきこと少からずと云し。さることも有りや。

一又鹽尻に、玉は格別の物なり。水精、珊瑚、瑪瑙、瑠璃の如きは眞の玉にはあらず。

秋玉山ー肥後藩の文學者、寶暦十三年歿年六十二

二王ー王羲之と其第七子王獻之をいふ

烏石ー廣澤の門人にて葛烏石といひ一家を成したる書家也安永元年歿年八十

智永ー隋の僧にて王羲之の七代の孫に當る人

其極に到れりといふべし。此以後といへども其右に出る時はあらじとぞ覺ゆ。

一近き頃秋玉山が筆跡を見るに、明人の區域を出る事あたはずといへども、其雅趣徂徠後の一人なるべし。

一書は古今二王をもて至極とすること復嘴を容るゝべからず。然るに近世唯向上の論を吐て、宋明をも奴隷のごとくに輕んじ、學ぶ所二王以下に降るべからずとて、日夜辛苦して十七帖或は聖教序等を摸擬する人多し。今其人の書を見るに、形は誠に墨本の十七帖聖教序にも似たれども、神彩氣骨風韻に至りては、地を拂うて見ること無く、其活氣近來の烏石廣澤の輩にだに不及事萬々なれば、何ぞ明人を望んや。義子智永などは邈矣。唐人の書は深く學ばば取附べき道筋絶て無ともいふべからざれども、中々得易き事にあらず。宋人の氣骨は近來たま〳〵髣髴と其區域を窺ふに似たる人有るをも見る。然れども、是も甚かたきの地にして、虎を畫て狗に類するもの多し。唯明人は時運降れる故にや。時代近き故にや。徴仲、枝山、瑞圖、解紳、玄宰など、其體は各格別なれども、今時の人も學びば皆到りつべし。余も亦甚明人に不滿なれども、みづから造る所の字つひに明人の區域を出ること能はず。

世に鳴り、明代の書風時運に叶ひて行はれし折節にも、徂徠獨時運にも引れずして、一家を成す。其天狗説などの墨帖、よく出來たりといふものにては非ざれども、唐土の墨帖の中に交へて恥ることなし。其本質は甚の拙書にして、かゝることは、唯韻致の勝れる故なり。仁齋先生亦氣韻あり。東涯先生書材餘ありて、其趣も亦甚あしからず。腹中の墨ある故なるべし。其他近世甚書に乏し。近き頃の芙蓉篆隷の二體は一種の風韻ありてまた得易からず。

一印章篆刻の一技、近來妙に至る人多し。其雅趣氣韻ほとんど秦漢の古印にも恥ざるべし。文雅の技の漢土の古代にも追步すべき事は、唯篆刻の一技のみなり。其他書畫詩文は明淸にも猶世界を隔てたり。

一本邦の詩享保以後の作家、本邦の古昔に勝れること萬々、此以後はしらず、是までにては開闢以來の盛なる時といふべし。秋玉山など五絕の一體は吾こそ日本開闢の一人也と自負せられしとぞ。誠に他人より見るにも其如くにて、過言にはあらざるべし。和歌は近き頃別して貴賤とも弄び盛なる事なれども、古人には及ぶべくも見えず。此上一變すとも、なほ道に到るの域には遠かるべし。俳諧は芭蕉の時を實に盛にして、

名の書家也細井廣澤の師事せし人元祿十年十月歿す

惇信—平林靜齋の事にて是又有名の書家也寳曆三年八月歿年五十八

廣澤—細井廣澤の事にて上述せり

芙蓉—高芙蓉篆刻を善くし印聖といはる天明四年四月歿年六十三

し事も、取あつめて思ひ出らるれ、富貴なる人の常に傍に侍るものゝ多ききはは、この境は知らず居給ふべし。

一安藝國廣島城下邊に、パタ〳〵といふものありて、神異の物なり。むかしより何者たるを知る人なし。夜陰人家窻外緣先などに來りて、甚だ近くパタ〳〵と音す。其處を窺うて急に戸を開き見れば、五六町も遙の遠方と聞えて、パタ〳〵といふおと聞ゆ。いつも如此にて、つひに何物たるを知ることなしと、彼國の人壽安物語なりき。

一余天下を漫遊して、あまねく諸國の名山を見る。僻遠の地に奇絕の山も多ければ、皆記を作りて世の同好の人にもしらせばやと思ひしが、既に古賢の記を作れる山々も多ければ、先諸家の詩文集に就て山々の記を擇り出し集めて、猶足らざる山あらば自らも記せんものをと、近き頃見當りたるに從ひて少々集めぬるに、又人のいふを聞ば、東武澁井平左衞門此志有て、既に多く集めたりといふにぞ、余が集ることはやめたり。近き年、其澁井子も、其主人に從ひて浪花に來り、病にて死せりとぞ。其名山記は如何なりしや。

一徂徠の書、其超凡の趣、近世他の書家の及ぶ所にあらず。其頃雪山、惇信、廣澤など

緣先―原本椽先に作る

雪山―北島雪山とて有

つぐみて―原本つゞめてに作る

一古人源氏物語に於ては、其文章口をつぐみて稱美せざる人無きに、其中の歌は無下に拙しとそしれる人多し。余思ふに、此物語の歌は又別に一體の風ありて、淡泊悠長成をむねとし、風流の氣象ありて餘情甚し。殊に其歌多くは臨時當座の卽詠に仕立たるものなれば、かく有べき事なり。此物語の歌を他の撰集などの心もて論ぜんは、類をしらずといふべし。

地力―基礎となるべき力

一漢學の文章は、才有りといへども、學問の力薄くては書がたし。是は書にても、畫にても、詩にても、手薄くては久しく見るに足ざると同じ理にて、其手厚く作る事全體の地力なくては出來がたきことなり。文章は別して甚し。但し少し心得べき事は、全篇をも、一句をも、短く書べし。其上なりたけは助字を惜みて、金玉のごとく用ふべし。汪道昆の文は助字少し。漢書も多からず。すべて拙き文章の助字多きは、極て用ひ誤り多く、見苦し。論語など格別に助字多きも、是は言語應對の模樣を傍より其まゝに書記したる體制なれば、手爾波多きなり。是は文章の變體にて、常法にはあらずと心得べし。同じ類の書にても、孟子などは文章の正格とすべし。

一夜更て物靜なる窻に、獨月に對したる折節ぞ、年ごろ有し嬉しかりし事も、悲しかり

先の祭絶ざるは、誰人の庇蔭なりや。古主君の庇蔭なり。我身何れの處に學び、何れの人を師として筆硯にも親しむやうになりしや。古主君の臣酉山先生を師とし、米穀を食て、幼年の時心のまゝに修學せしゆゑなり。又古主君の庇蔭なり。かく思ひつゞくれば、古主君の厚恩、我身生涯は更なり、子孫までも忘却すまじき事なり。書しるすも事新敷聞ゆれど、子孫の心得にもとかくは記するなり。

一漢の代などには租税を取るに、粟米四六の法といふ事有り。故に漢の嘉量などは、一斛入の桝と六斗入の桝と、一ッ桝にてかねて作りたるものなり。四六の法とは、兵粮用意米など久しく貯ふる米は、粟米にて取なり。其時は一斛なり。又當分の扶持米などは米に磨りて取るなり。其時は六斗なり。これ粟一斛をすれば米六斗になる故なり。日本も王代の頃は其法を用ひられしにや、今も禁裡主殿寮の官人の下行米を其知行所よりとるに、一石といふ處へ米五斗九升を納むるなり。是六斗なれども、一升は雜費に、引ことなりとぞ。余も相知る人に、主殿寮の下司南山城みかの原村より米をとるに、其如しと語れり。近時武家には一石といふ處へ米四斗を渡すことなり。是を四ッ物成といふ。國々にて少しづゝの多少あり。後世の苛法といふべし。

主殿寮―宮内省に屬する寮にて昔時は供御酒掃燈燭等の事を掌りしもの
物成―土地の産物といふ意

人始あらざる事云々―詩經大雅に靡不有初鮮克有終と見ゆ

北窻瑣談 巻之三

一人のあしき事は語るべからざることなり。書しるし置はさらなり、惡聲一たび世に流布しては取かへしがたきものなり。善事を云ひふらすは盛德の事にて、少し過譽ありとて強て害もあらじと思ひ居しが、鈴鹿の孝子のごとき、幼年の時は其名高く、公よりも褒美し給ひけるが、年長じて後は穢行多く、又博奕などさへ好みて、萬の常人にだも其行及びがたければ、其里の庄屋など公の咎を恐れて、とかく異見を加へけれども、更に聞入れずと風說有しが、いかゞなりしや。是等の事につきて思へば、善事を稱譽する事だもみだりにしがたし。人始あらざる事なし、よく終ある事すくなしといふ古語も思ひ合されし。

一我父母終身安穩にして衣食の勞無りしは、誰が庇蔭なりしや。古主君の庇蔭なり。我身何れの地より出て、何れの家に成長せしや。古主君の庇蔭なり。我親屬安穩にて祖

り縫べしと言傳ふとぞ。

一「それかなきか思ひわかずよ郭公、いつならはしの月の落方」とよみたるは、我故友佐佐木長春の父の長昌なり。長昌此歌詠たるとき、歎息して、我も其時に生れたらば、新古今集に此歌などか入らざるべけんや。世おくれ時過ぬれば、此歌も我ほねとともに朽果ぬべし。いと無念のことなりといひしを、長春幼き時聞居たりと語りき。誠に姿詞ともに秀逸の詠なり。

一寛政五年入貢の阿蘭陀持渡に、人面皮のほし乾したる有しと。何の藥に用ふるにや。奇僻の甚しといふべし。

やまいぬ―やまひいぬの約、狂犬をいふ

りしが、數月すぎて後、鬢髪ことごとく脱落たり。眼中なども色變り、さながら癩病の如くなり、今年に至り、いろいろ療治すれどもいまだ不愈と、相良千里かたりき。火毒の肉中に殘りし故にや。其後いかゞなりし、きかず。

一安永の頃余伏見に在けるが、一とせ雷おびたゞしく鳴て、所々へ落ける事の有しに、豐後橋の南の畑の中に稻などをかりいるゝ一ッ家のありけるに、耕作の者十人あまり逃いりて、雨と雷をさけ居けるに、不幸にも其小屋のうへに雷落て、集りをる人のまん中へ透りぬ。是が爲にうたるゝ者數人、手足をれ、腹破れて卽死す。其餘も大方は卒倒氣絶す。中に一兩人何の事もなかりし者もありて、其絶氣したる者を介抱し歸りて、皆それぞれに藥をあたへ、保養して平愈しけるが、後二箇月ほど過て、にはかに寒熱暴發して、一二日の間にみなみな死せり。雷の毒の發せしと見えたり。其病體病犬などの毒の發せるに類して、數日過て發し死せるも亦奇とすべし。

一矢疵つらぬき透りたるときには、矢の羽をさりて先の方へ靜にぬくべし。入たる方へは拔べからず。又急卒に拔ことを忌なり。必ず死するなり。靜に拔て、其あとを急に指にて蓋すべし。其疵口より氣もれて卽死するなり。しばらく蓋してのちに、指をさ

寛政丑年―寛政五年也

鐵砲、瘡腫―原本鐵炮瘡種に作る

一雲仙嶽もえて山崩れ、或は地震甚しく、或は山鳴りなどして變異しきりなりし折節島原城下に一人の盲人有けるが、殊に恐れて、我は盲人なれば、此上大變起りて天地覆らんときにも、人なみ〳〵には迯去る事叶ふまじければとて、杖草鞋抔晝夜身をはなたず有しが、其後津浪町々を漂沒せし時、かの座頭すはやとて北をさして迯出、終に長崎まで二三十里にげたりしが、島原中の人多く溺れ死しけるに、彼座頭のみ無事に迯のびたりしは、常々一途に心がけ深く、恐れ居し故なりけらし。

一寛政丑年七月十五日、江戸小雨降て、其中に毛を降らせり。丸の内邊は別して多かりしとぞ。多くは色白く、長さ五六寸、殊に長きは一尺二三寸もあり。色赤きもたまたま有しとぞ。京へも親しき人より拾とりし毛を送り越せしが、馬の尾のふとさの毛なり。江戸中にあまねく降りし事、何獸の毛にて、幾萬疋の毛なりや。いと不審の事なりき。

一筑後の國の山中の一男子、獵人の鐵砲のそれ玉に當り、左の肩先の所より入り、肩の下の所にいたり、其玉皮肉のあひだに留れり。三十日ほど過て、瘡腫の如く破れ潰れて、肩の下肘の上の所より出たり。筋骨は傷らざりしや、手臂のはたらきに別儀なか

烏頭ー双鸞菊の根塊をいふ、薬用に供する毒草也

タヽラー足にて踏みて空氣を吹き送る大なるふいがう

寛政壬子ー寛政四年也

病有りて後無病の時の安樂なるを知べし。

一蝦夷地の烏頭は格別に猛烈にて、極熱辛辣なりとぞ。是は蝦夷地北方極寒の地ゆゑ、天地間の陽氣其寒氣のために追籠られて行所なく、もとより熱を貯ふる烏頭の中へより集り來る故なり。エレキテイルにて陽氣を生ずるに、夏月炎熱の時節には、天地間の陽氣世界に散滿せるゆゑに、一所に器中に寄集り來ることなりがたきなり。又磁石の氣力弱きを強くするに、大なる磁石を法を以て其氣を追ひ寄せ、段々碎き去りて、小き磁石と成す時は、大なる磁石に散り居たる氣力小き所へ集るゆゑ、磁石の氣力強くなるなり。是等皆天地陰陽の理を知るべし。又鐵にて大釜を鑄る者に聞に、タヽラにて鐵をわかすに、冬の夜寒氣強き夜は炭少くても鐵よく湯となる、少し暖氣なる日は炭五俵も十俵も多く入りて、猶鐵の熟しやう十分ならぬとぞ。皆同理なり。

一寛政壬子の春、肥前國雲仙嶽の崩れの前、數日空中に帆かけ船多く往來するを、人々見たりしとぞ。是嶽より登り出る氣に、其近邊の海上の船の影うつれるなるべし。往年松前の津浪の前には、空中に佛神の姿飛行せるを人々見たりしも、蝦夷地の人畜うつれるなるべし。

ことゝて、燒酎に醉たる時には火燵を遠ざけりとぞ。

一李根白皮の白からざるは、畿内の李樹多くは桃の木に接木せしものゆゑ赤しとなり。生來の李樹は根も白しとなり。

一今の住吉内記の父内記、往年義家の像を畫きけることの有けるに、或人見て、畫はいとよく出來たれど、顏色義家には不相應にやといひしに、内記笑て、そこには武者粧といふことを知り給はずといひしとぞ。我友學丹翁の先人聞て、内記は古實をも知れりと感ぜられしと、學丹の物語なりき。古昔は武者粧とて、大將は顏をつくりて威をしめし、且は敵に見覺えられぬやうの用意ありけるとぞ。

一余が初め伏見にありける頃は、指月の森、誠に唐畫のやう心ありしが、寛政のはじめの大風に椎の古木多く折れて、子丑の年の頃はいとさう／＼敷見えて、尋常の森にもあまりかはることなし。桑田碧海の歎すくなからず。

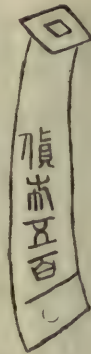
一常に都に住る時は、靜なる山住もがなと、世の塵いとはしくも思ひぬれど、又都遠き鄙にいたりぬる時は、都の空ばかり戀しきものはなし。此心は遠き旅路に遊びたる人にあらでは知らず。常に都に住て其心しらざるは、病無き人の安樂成ことをしらず、

十七年十月寂年六十七

燒酎—原本例の燒酒に作る

子丑の年—子年丑年の意にて寛政四年五年に當れり

さう／＼敷—原本そうそう敷に作る、さびしくの義

一飛騨國下岡本村コセン小十郎、花里石が谷に孫十郎、淨見寺野におみつと云狐有り。皆名狐なり、孫十郎みづから云、吾天竺に在し時、文珠キシンといへりと。いと奇怪の談也。

是蒙城古刀。宋宣和五年、郭僎爲二豪州蒙城令一。村人得二之田中一。柄端有二方寸匕三字一、彷二佛隷書一。背有二方孔一不レ透。身形如レ刀。文曰貨布五百。疑王莽所レ鑄。

一唐書に、玄宗開元廿八年冬米一斛直三錢。

一寛政二年庚戌二月十四日晝未刻、一天に雲無くして雷鳴る。只一聲也。門人林仙藏吉田俊卿ともに見る。其後に聞くに、近江丹波攝津聞く事同じと云。或人のいふ、南方の天に大なる火出て飛たるなりと。

一佛祖疏記、天台智者傳曰、南岳造二金字般若一、命レ師代講。手持二如意一、臨レ席讃レ之曰、可レ謂法附二法臣一法王無事。

一九州の俗好んで燒酎を多く飲む事なり。肥後に一婦人大に燒酎をのみて、火を強くし火燵に醉ふしたるに、忽口中より煙出てふすぼり死したり。小兒などにはまゝ多き

智者―隋代の僧智者大師、天台大師ともいふ、天台宗四代の祖也開皇

備前少將殿
ー岡山の藩
主池田光政
天和二年五
月卒年七十
四
中院內府公
ー歌人中院
通村をいふ
が

下界の事を聞くとぞ。

一備前少將殿學問を好み給ひ、殊に雅樂をもよくし給ひ、常に吹給ふ笛をいかゞ名附ん
と中院內府公に問給ひしに、蘆田鶴と名附られたり。是は

　そらに翔り澤にとしへて、幾度か霜の蘆田鶴聲ふけぬらん。

といふ和歌の心にとり給へると也。後に此笛を京都の辻山城守に與へ給ひしに、山城
守　天子へ御笛を敎へ奉りしにより、彼笛をも　內へ奉りしとぞ。

一宋沈存中が夢溪筆談に曰、二聲合爲二一字一者、不可爲レ亘、何不爲レ盍、如是爲レ爾、而已
爲レ耳、之乎爲レ諸。

一同書曰、灸一壯者以二壯人一爲レ度。

一同書曰、唐開元錢重二銖四參。今蜀郡亦以二十參一爲二一銖一。參乃古之絫字。

一同書曰、毗陵郡士人家有二一女一、姓李氏、年十六、能レ詩、拾二得破錢一詩云、半輪殘月掩二塵
埃一、依稀猶有開元字、想得淸光未レ破時、買盡人間不平事。

一說鈴の中に、南粤有二銅鼓一、其制高可二三四尺一。有二上面一而無二下底一。其聲亦不二甚大一、名曰二
諸葛鼓一。猺人謂二是孔明所一レ造。

孛星—彗星の類也

有斐齋劄記—隨筆にて四卷より成る

西遊記—作者未詳明代の小說中の傑作、全篇一百回より成る

ものとぞ。六七十年前京都の大雷の時も、滿天此雲ありしとぞ。

一天夕方に赤くなりて血のごとく、家の中にも照り入り、人の顏などまでも朱のごとく見ゆれば、必洪水あるものとぞ。

一戊子の年、五月晦日より閏六月を歷て七月朔日まで雨降らず。湖水減ずる事一丈六尺。此年五月三日より孛星出づ。

一枇杷の花多く附時は、其年麥作必豐熟なりといふ。

一淇園先生有斐齋劄記に、野狐最鈍、其次氣狐、其次空狐、其次天狐。氣狐以上皆已無其形。而空狐其靈變更信於氣狐。至天狐則神化不可測。人有爲物所役頃刻行千里外者、乃皆空狐之所爲、大抵離地七丈五尺彼乃得攝之行。如天狐乃不復爲人害。此說善幻者話云。

一若狹國山谷の間に無足の燕あり。常燕に比すれば稍大也。其所の人は風鳥といふ。木曾山中にも亦有りといふ。木曾にては大燕といふ。是皆胡燕なり。

一千里眼といふ神と、順風耳といふ神を、唐船には皆祭れり。西遊記に、天上に上聖玉帝ましくて、其臣に千里眼順風耳あり。千里眼はよく下界の事を見、順風耳はよく

撈海一得—鈴木煥卿の著、和漢古今の雜事を記せる隨筆にて二卷より成る

狩野主馬助尙信—木挽町狩野派開祖の畫家にて慶安三年四月歿年四十四

黑毛有リ足爪トモニ黑　○蒼カモカハラゲ　○驪カツクロ　鐵驄ハアラミドリ鐵馬、眞黑　○駩白ツキゲ
○駁赤ツキゲ　○騢サハツキゲ虎月毛　○騡シロツキゲトモニ白ク爪バカリ黑シ　泥ウス白髮尾　○䮝白黑雜色ナリ灰色爪口黑シ
○驒レンセンアシゲ虎アシゲ　ホンアシゲキアシゲ　○驄アシゲ白アシゲ　○駅アヲ白雜毛　○澇驄ゴミアシゲゴマアシゲ
○駰クロアシゲ　○驗　○騹ヒメカウジ黑栗毛　ゴンダシハ栗毛　紅梅栗毛　○騵ハヲ白　○騮カゲ赤身黑
鬣ウス黃色シロカゲ　黑カゲ　○騝ヒバリゲ背ノ毛黃色　ミヅヒバリゲ　○騅黑身白鬣　○驋　○額白　○騅
○駒　○䮃黑白毛

一季緖が相馬經といふ書二卷あり。明の正德年間の作也。又穆公相馬經といふ書もあり。日本にも百馬の圖あり。是は正保年中に、御命にて、狩野主馬助尙信畫、林家の贊なりとぞ。此圖は今に到り、狩野家の祕する所とぞ。

一往古　机の高さ寸法を考へし人のありしに、古法は其用ふべき人々座して足を延し、足先を立て、其足首の高さなりと言ひし人のありしよし。

一日の入りの時に、雲紫黑になりて、中に飛紅霞數十條を交ふれば、其翌日必大雷ある

孔雀樓先生—儒者清田絢をいふ天明四年九月歿年七十八

東涯先生—伊藤東涯、元文元年歿年六十七

秉燭談—古今の雜事を考證せる書五卷より成る

長崎夜話—西川忠英の撰にて長崎古來の雜事を錄し五卷より成る

雀樓先生も書置れたり。大の字、横の一畫二十九丈、薪を燃す穴十九。左の畫四十九丈二尺、穴三十一。右の畫四十一丈七尺八寸、穴二十一。其穴相距ること各七歩づゝ、余も如意嶽に登りて其穴を見しが、廣く大なるもの也。

一東涯先生の秉燭談に、甲斐國の斐の字、㞛に作る。續字彙補㞛字註曰音裴、日本有甲㞛州。又見平壤錄亦作甲㞛。

一秉燭談に、中華の諺に、一日喫蛇咬三年怕草索。

一長崎夜話といふ草紙に、「見れば危き舟の上かな」といふ連歌に、「なれゆけばあだ浪さわぐ世はしらで」といふ附を稱せり。誠に世上の人を警すべし。

一撈海一得といふ書に曰、田汝成が委巷叢談を引て、杭州人一日吃三十丈木頭。以三十萬家爲率、大約毎十家吃擂槌一分、合而計之則三十丈也。

一又云、唐土の茶店には色々の煎湯を賣ることなり。茶もあり、甘草湯も有り、砂糖湯もあり、橘皮湯もあり。故に本草甘草の集解に、唯貨湯家に是を用ふと云語あり。貨湯家とは湯を賣る店なり。

一馬の名種々あり○獁サメウマ眼瞳外有日輪　○白馬殊騵唇黑　○駱カハラゲ黄白尾髮クロシ栗色ト白毛交ル爪黑尾ノ通リニ

ければ、又嵯峨邊に奇妙の占ありと聞て、二人行て見せけるに、同じく二人ともに死する人なり。外にいふべきことなしとて他の事をいはざれば、力落て歸りぬ。其六月果して利助勞咳の病にてうせぬ。七右衛門も今もやと待やうにして居たりしが、何の異變もなくて其年も暮ぬ。壬子の春にいたりても恙なかりしが、九月の末の頃に至り、飲食減じ、遠方の歩行心あしきやうに覺えて、外に何事もなけれども、去年の春の見透しがいひし事もあればとて、又余が家に來りて藥を乞ふ。余七右衛門が色脈を診するに、死すべき症候一ッも無し。唯飲食のすゝむやうとの藥を與へけるが、とみにもしるしなくて程過、其後は藥も怠りしが、其後の事いかゞあらん、きかまほしく、しばらく記して他日を待つ。

一右等のこと折ふしは有ることなり。仲獻いまだ壯健なりし時、東谷見て、死近きにありといひけるが、後に果して臀癰出て死せり。佛鑑禪師を孤月と清典が相せしこと、是等皆余も治療に預りて、心中に技術の優劣を比せし事なり。別に醫話にくはしく記しつればこゝに略す。

一東山の七月十六日の夜に立つる大文字の火は壯觀なり。唐土にも無きことのよし、孔

寛政辛亥—寛政三年也
勞瘵—勞咳とあるもおなじく肺病をいふ

一長崎に遊びし日、唐人六十人ばかりと崇福寺にて終日會集して、酒飯同席にせしに、情は互によく通ずれども、言語は一向に通ぜず。其頃は程赤城、程養拙、張秋谷など來りし時也。

一深草村の瓦師與次兵衛弟に利助といふもの、二十五六歳にて、寛政辛亥の春、ふと風の心地にて病み出しけるが、とかく愈かねければ治療を頼みけるに、痰咳出て脈も數有りければ、末の程は勞瘵にもや到らん、五十日も百日も服藥せでは愈べからずとて藥を與へつるに、思の外に心よくなりて、大抵に愈ければ服藥も怠りにけるを、余諫めて、藥怠るの日にもあらず、病全くいまだ不愈といひしかど、とかくして怠りけるに、果して又少し咳出て、熱の往來見えぬれば、驚きて又余が家に來り藥を乞ふ。此度は脈殊にあしければ、ひそかに親類を招きて必死の病なる事を告げ、余が力に及ばざるを云て辭しぬ。其後利助其家の僕七右衛門同道して東山に遊びしに、誓願寺の内に見透し占といふ者有ければ、二人ともに入りて問に、見透しの占者、見るより、利助なるは六月に死すべし。七右衛門も六月危く、十月までには死すべし。外に見る事なしといひければ、二人ともに力なくて歸りぬ。其後何となく心にかゝりやみがた

自省不疚―論語に內省不疚夫何憂何懼とあるをいふにや
愼獨―大學に君子必愼其獨也とあるをいふ

ものとぞ。人家に養ひてさへかゝる命なれば、山野にあるは百年も保つべし。金鷄も二三十年は養はるゝとぞ。鳥飼ふ人の語りき。

一余四十に今一ッ足らぬといふ年に、一人の男子をまうけぬ。上は皆女子にて、男子は始なり。早くも成長せよかし。なに教へん。何になすべきなど色々に思ひつゞくるにぞ、我身ながらいと程遠き事を、かくおろかにも思ひとれるよと、獨り笑を催して、

おのが身の老行ことは忘られて、ひととなる子の末ぞ待るゝ。

とよみぬ。人も子を思ふことはかく有るものにや。

一安永の頃、京師に藤村檢校といふ瞽師あり。此檢校つねぐ\申せしは、人の前にて三絃を彈に、其座の聞人に色々の心あれば、面白くひきて譽られんとするは過なり。かなたの人の心に叶へば、こなたの人の心にかなはず。されば我はいつにても、何人の聞給ふ前にても、我持前の藝を器量一ぱいに彈て、いつも其座の人に聞せんとは思ず、唯神明へ奉納する也と心得て彈ると語りし。誠に有がたき檢校の心がけ、上手の名高かりしもむなしからず。何の藝にても、かく心得べき事にこそ。聖人の自省不疚と宣ひ、又愼獨といふことも、此心得に外ならず。

野史—私撰の歴史

替ろ—原本かゆると訓ず其外何れもかゆるに作る

の傳ふる所眞ならざるにや。

一寛政壬子浪花の火災に、鴻池某家も燒たりしかば、改め造るとて、其土を深さ三尺掘捨て、新なる土を入れ替ふべしといふに、番頭某諫てきかず。主人いふは、三尺の土を入ること何程の費か有らん。猫鼠の死したる穢もあれば、子孫に傳ふべき家宅清淨にすべし。聊の儉約をいふべからずと再三あらそふに、番頭とかく聞かず。此分限にて三尺の土を替ること、誠に聊の費なれども、土をかふるといふ事は高貴の人の御事にて、町人のすべき事にあらず。子孫に奢をしめすは、穢を傳ふるよりも不吉なり。某が居らん間は其事叶ふべからずといふにぞ、主人怒りて、家來の身として、是ばかりの事を主人の意を背く事やあると氣色を損じけれど、番頭とかく聞かず。猶諫爭ひて後、我家に歸り自殺してうせぬ。主人其事を聞て悔い感じ、土をかふることを思ひ留りけり。纔商賈の家にても、名に立し富豪ほどありて、かゝる忠臣をも扶持し居けり。數百萬石を領し給ふ諸侯の家にも、恥かしき事ならずや。

一孔雀を養ふに、生れて四年ばかりして羽毛皆揃ふものにて、二三年の間は雌雄もはきとはわかれがたき程に羽毛生ひ揃はざるものとぞ。孔雀は長命にて、四五十年も保つ

報ず後吳王夫差を諫めて殺さる

縱—原本晉に作る

心掛る—原本心がけると訓ぜり

芝山殿—柴山鳳來をいふか

鎌倉右大臣—源實朝をいふ承久元年正月姪公曉の爲に刺されて薨ず年二十八

跡のみ學びば、必生を盜み、恥を忘るゝの不忠不孝人となるべし。世間に不才凡庸の人は百人にして九十四五人にて、才智勝れ豪傑の質なるは數百千人の中に纔に一二人を得べし。されば一統士たる者の心がけは、馬前に討死の事を第一とすべし。此一段儒者文人口にては容易の事のやうにいへども、平素國風正しく士風義氣なくては、俄には出來がたき事なり。唐土の柔弱にて反覆二心の臣多きは、君臣の義平素に正しからざるゆゑなるべし。

一芝山殿の

榮えよと子を見る今の身にしめて、親の惠みし昔をぞ思ふ。

實に孝子の情、有がたき御詠なり。西洞院殿の火災の御歌と當今忠孝の對といふべし。

一鎌倉右大臣の

ものゝふの矢なみつくろふこての上に、霰たばしる那須の篠原。

又

箱根路をわれこえくれば伊豆の海や、沖の小島に浪のよる見ゆ。

皆悲壯、今時の菲弱なるに似ず。然るに其人の父の風に似ず有しは如何。もしや野史

程嬰杵臼―支那戰國時代の趙氏の客にて趙の孤兒を奉じて敵を滅し趙氏の後を全からしめたる忠臣也
伍尙、伍子胥―兄弟也尙、父奢と共に楚の平王に殺さる子胥吳に奔り吳を導きて楚を伐ち遂に平王の尸を得て之を鞭ち仇を

ず。唐土の人はかしこければ、恥をも忍び、憤をも抑へて、死すべき命をもいかやうにもしてながらへ存し、幾年かゝりてなりとも其ことをなしおほせて功を建る人多し。程嬰、杵臼、伍尙、伍子胥などのことにても思ひ合すべしといへども、余此二途を深く考へ見るに、儒者文人の論甚誤てり。かゝる論の出るよりぞ、學問行るゝ國は文弱の風起りて士風衰へ、後には生をむさぼり、利を全うする事のみを心にかけて、恥をも知らず、商賈のごとくなりゆくこと多し。誠に馬前に討死する事ばかりは匹夫の義に似たりといへども、其君の祿をはみて其君の事に死する、縱其君の事は正にもあれ不正にもあれ、一命をもつて其君の恩に報ぜば、其身一分の君臣の義には違ふことあるべからず。又一命をさへ奉る程ならば、其餘の事はいかなることにても、其人々の智略の程々に忠勤を盡すことに麁略は有べからず。されば士たる者は、生れ出るより、唯ひたすらに萬一の事あらば君の馬前に命を棄べしと心掛ること、第一義なり。此場の心掛たしかに立て後に、始て學問して色々の忠義の盡しやうをも知るべし。誠に伍子胥などのごとくなるはあしきにてにはなく、狗死するより見れば勝ること萬々なれども、其身才智に富、豪傑の質ならば尤の事なり。もし不才柔弱の人にして、伍子胥の

字伯淳、世に明道先生と稱す、元豐八年卒年五十四

張横渠—宋代の學者張載、字は子厚、世に横渠先生と稱す程明道と同代也

禮儀—原本禮義に作る

他の技藝に耽り、或は酒色を放にし、或は出處の正不正を不論して利祿をむさぼる輩に此語を聞しめば、當羞死すべし。

一張横渠曰、人多言安於貧賤。其實唯是計窮力屈才短不能營畫耳。若稍動得恐未肯安之云々。余今の世の寒儒を見るに、皆此語に洩るゝことなし。

一又曰、天下事大患唯是畏人非笑。今の世の人少しく才も有志も有る者、生涯の功も立ことなく、草木とともに朽果るは皆小事に人の非笑せんことを畏るゝゆゑなり。豪傑の士は賢者の非笑を畏れて、世俗の非笑を畏るゝ事なかるべし。

一朱舜水先生、水戸にて、家中の士の纔に一僕を召つかふ人にても、主人家來の禮儀嚴然たるを見て、日本君臣の義正しき事を甚だ感心して、唐土もかくのごとき風儀ならば、明もかく不甲斐なく亡びまじきものをと歎かれしとぞ。

一日本の武士常々の心がけに、萬一の事あらば君の馬前に討死すべしと、只管に一命を君に奉らんとのみ思ひ込み、敵に勝んことを考へ、國を保んことを希ひ、君を善道にみちびかんことを思ふなど、眞實に君を愛するの行を顧る者なし。此事を、當今の儒者文人笑ひそしりて、日本の武士は愚にして犬死をのみ悦び、君に忠する道を知ら

—有名なる兵衛家也寛永十七年七月歿年七十九

衣食足て云云—管子に倉廩實則知禮節衣食足則知榮辱とあり

程明道—宋代の大儒顥

へられし器量、戰國とは云ながら、今時の人の及ぶべきにあらず。又是を受て過分也と思はざりし勘兵衛が器量、實に豪傑の士といふべし。後に聊の言の合ざりしによりて辭し去れり。二萬石捨る事わらぐつを脱がごとし。

一衣食足て禮節を知るとは、覇者の言といへども感ずる事こそ多けれ。余醫をなして貧家の病人を治するに、其家の父或は母の年老たるが病るには、其子たる者のいふに、老人も久敷病候ひぬ。かくては傍の者も難儀に候ひぬ。且は其身も苦惱に候へば、早く往生せられ候へば、ゆく人も殘る者もたすかり申事に候に、かくいづれともかた附申さでは、すても置れ候はねば治療を賴み申なりといふ。格別の貧家、格別の不孝の子にあらぬも、余かくのごとき言葉を聞こと常々のことなり。是人の子たるものの、かりそめにも思ひよりて云出すべき言葉ならんや。醫も此詞を聞ては、治療を施すべき情もたえはて、力を盡さんと思ふ心も無くなりぬ。噫呼親子の間は恩愛實情の至なれば、貧富をもて厚薄あるべきにあらねども、衣食を給するの急なるより、かく殘忍の情とも成はつるなりけらし。

一程明道曰、內重則可以勝外之輕、得深則可以見誘之小。誠に學者の安逸を欲し、或は

覽强記を以て鳴る永元中歿

秦舞陽—燕より秦に遣はしたる刺客の一人也事は史記刺客傳に見ゆ

莫耶—干將といへる名工の作りし雌劒也、莫耶はもと干將の妻の名なるを劒の名とせし也

渡邊勘兵衛

かりを離るれば見えずと聞ゆ。これを思へば、日本は高山多き國なり。富士山、白山、立山、其外諸州の名高き山々は、皆數十百里を隔つといへどもよく見ゆ。

一秦舞陽といひし人は、其里にありしとき、人を殺して物の數ともせず、後ただにかへり見ずといふ程の人なりしかば、一國こぞりて皆勇者なりといひしかど、秦國の階を昇りし時は顏の色變りぬ。あまりに常々に猛くいさみて見ゆる人は、大事に臨みて必心おくれするものなり。松柏の雪に堪るも、常に異やうなるものかは。すべて人も事無き時に情深くなみだもろきこそよけれ。莫耶の劍も常に物を割ざるをもて利とぞ。

一海邊にて月見る殊によし。湖水は水氣立て海の眺には劣れり。

一春秋はさらなり、夏もまた山陰の淺き流に足さしひたして暑さをわすれたる、冬は更し夜の寢覺に、それと聞ゆる田鶴の聲、またたぐふべきなし。

一みめかたち勝れてよき人は、必禍も多きものなり。高明の家は鬼神これをにくみ、林に秀る喬木は風必これを碎き、土くれ岸に出れば水これを崩すの類人のみにあらず。

一國初の頃、或諸侯、渡邊勘兵衛を二萬石の祿もて召抱られし。匹夫を直に二萬石を與

遣はし、療治せしめられしに、醫師さつそく山中に入、大なる疵は縫けるに、小兒などにても少しも痛むことなし。此地鹽をくらはざる故にや。又狼のかみたるゆゑ、疵口に毒集り居ていたみ覺えざる事にや。最不思議なりしと其醫余に語られき。

一深草檢校は、享保年間に、京都にて三絃の妙手とて、其名大かたならず人々感じあへり。老年に及びて、或時人に語りけるは、天地の調子は三百六十あるものなり。やうやう此頃此調子あることを知りたりと。其說の當否はしばらく論ぜず、何にもあれ常なみの瞽者にてはあらざりし。

一天明戊申の禁裏炎上に、小澤蘆菴、

今朝見れば燒野の原となりにけり、こゝやきのふの玉敷の庭。

感慨のあまりあり。又西洞院殿の

立迷ふ煙の中に思ふぞよ、けふの御幸の恙なかれと。

忠愛の詠、杜子美、白樂天に讓らず。尋常の和歌者流を以て論ずべからず。

一王充が論衡に、大山の高き、天に交り、雲に入る。これを去ること百里にして堆塊を見ずといへり。唐土の里程は纔に日本の五六町に當ることなれば、日本道にて十里ば

不思議—原本不思儀に作る

西洞院殿—歌人西洞院時名、入道して風月と號せり

王充—漢代の人、斑彪に師事し博

澤角—一に澤住に作る訓讀すべき也

挾箱—昔時衣服を入れ棒を通して僕に擔はしむるに用ひし箱

東山殿—足利八代の將軍義政にて延德二年正月薨年五十六

とも知がたし。蕃椒も慶長十年渡れり。西瓜は寛永年中琉球國より渡れり。甘藷は元祿の頃琉球國より來れり。榅桲は寛永の頃蠻國より來る。三絃は永祿年中來る。慶長の頃澤角といふ盲人專ら彈て名人の名ありし。鐵砲は弘治元年南蠻國より來る。鎗は楠正成より始れり、挾箱は信長時代より、傘は天正年中より、蠟燭は文祿年中より、伽羅油は正保慶安の頃より、乘物は東山殿の頃より始れりとぞ。

一楠正成に從ひし武士の中に、大塔宮芳野の奥の御戰に食に飢給ひて御難儀なりしといひしを嘲りて、一命をすてゝ戰に臨む武夫の、たとへ二日三日食せざればとて、何程の事かあらん、いと柔弱なる宮かなといひければ、正成後を顧て、かの武士をにくみ、おのれは朝飯の遲きをくひたる事も無き、榮耀に生育てる男なり。事に臨む者の腹中空虛にては働きがたきをしらぬ馬鹿者なり。供の中には叶はずと勘當せられしとぞ。

一肥後豐後日向のあひだに當れる極山中に、五箇村、那須村、椎葉山、齋宮谷などいへる所は、けしからざる山中なり。右の那須椎葉山邊に、安永のころ病狼夥しく出て人を害せしに、不日に數十百人疵を蒙りける。領主聞給ひて、是をあはれみ、醫師を

海北友松—狩野永德の門人にて後宋人梁楷の筆意を學びて一派をなしたる畫工なり慶長二十年六月歿年八十三

をさとれり。世の金銀を實に愛して富をいたすものは、錢を費して美服を著することなく、錢を費して家宅をいとなむ事なく、錢を費して珍味を貪ることなし。而後に皆よく富をいたす。余が常に富を欲する故は、金銀を得て是を用ひ、志のまゝ何事をも自由せんが爲なり。もし志をもとげずして不自由にあらんには、初より金銀なくて心づかひ少きにはしかず。是蘭を植、花を見ざるに似たらずや。

一海北友松が畫ける源平の軍の圖を見しに、鎗を持たる士一人も無し、皆長刀ばかりなり。又兜を打落されたる者の頭に烏帽子殘れり。昔物語の畫を寫さんには、畫工も心得すべきことなり。鎗の多く用ひられたるは足利の末、信玄謙信の頃よりの事なりや。

一後世ほど段々諸國の通路ひらけ、産物器物等迄も多くなれり。或人の話に、煙草は慶長十年南蠻國より種を渡せり。漢土へ渡れるも大抵同じ頃とぞ。始の程は火災のおそれありとて、官よりも禁ぜられしかど、其禁終に破れて、今にては飮食につぐものとなれり。漢土も始は禁ぜしに、其禁破れたりとぞ。味の美なるにもあらず、醉て面白きにもあらず、腹滿るにもあらず。何の事無きに、かくまで人の好めるはいかなる故

まめやかに—眞實に
沙彌—僧行の未だ熟せざる初心の僧

たり。

一物よく書人は筆硯をまめやかに愛す。物よく讀人は書籍をおろそかにせず。浮屠氏の經卷を尊むこと、沙彌小僧といへども讀ときは必先いたゞき、置時は机にす。それに習ひて、婦女老婆も經卷とだにいへば尊み敬ふ。今時の書生の聖經をも臥ながらよみ、賢典をも足ふく具とするはいかなる心なりけるにや。

一伊勢の津の人に龜井金八といへる人あり。小鼓をよく打、謠曲をよくうたふ。聲律の事に妙に到れり。其家に鶲と云小鳥を飼て囀らせ樂しみしが、多年の後金八鶲の律を聞知て、其調に合せて謠曲をうたへば鶲忽囀り出す。金八調を變ずれば鶲囀事能はず。常に以て樂とせりと大知氏語られき。

一余世間に蘭を植て樂しむ者を見るに、鉢にうゑ、寒氣を避、根には養を入れ、常々怠らず手入して、偖花咲時にいたれば、其花を摘捨て咲しむる事なし。いかなるゆゑに花を摘捨ることにや。花の香を愛せんが爲にこそ、常々かくまでも養ひ土かふことにあらずやと問しに、其人答へて、花を多く咲しむれば其蘭瘦いたみて衰ふる事甚し、故に眞實に蘭を愛する者は花を開しむる事なしといへり。余これを聞て、余が家の貧

寛政子年―
寛政四年也

一寛政子年小澤蘆菴重き病に臥て、久しく悩み居たりしに、富家何某等一統に、かねて和歌の門人なりしかど、其病の時に、みづから一度も尋ざりしかば、蘆庵病愈て後此事を深く恨み憤り、何某は世に聞えし富家なり、物習ふ師の病重しと聞ば、みづからも來り訪ひ、又數多き男女の事なれば、腰許女一兩人は介抱の爲に附置てもよかるべし。しかるに一度も尋ざるは、人心なきものなりとて、文をおくり、いたく責怒り、以來の交を絶ち、其文の奥に一首の和歌を添たり。

人の世の富は草葉におく露の、風をまつ間の光成けり。

と、誠に少し心短くはしたなくは聞ゆれど、其憤れるいはれ無きにもあらずかし。

一人々星見るとて打集り、クワタラントなどもてはやしぬるに、はては夜更て屋の上にのぼりつゝ、其星は此分野などと匍りあひぬれば、近きあたりの人や怪しうも思ひ、何事ぞと咎めんも恐あればとて、制して下しぬ。

一曉近きまで友人の家に語りて歸るさ、月西山に落かゝり、星の色さへ少し白み渡りたるに、朝嵐身にしみたれば、過し年旅路遠く出んとて、朝とく起立たりし折節に似て、人々にしばしの別を告つゝ心細かりしこと、今さらのやうに思ひ出て、涙ほろ〳〵と落

出して彈しむ。道成ほめて、扨も羨しき箏を所持し給ふことかなといふ。蘆菴、少しもあしく心にかゝる所はなきにやと問。道成、何いつはるべきといふ。實さらば此箏君にまゐらすべし。失禮はゆるし給へ。そこ程の上手によき箏一面もたせざるは恨なれば、贈申なりといふ。道成も思ひかけねば驚きて、再三辭せしかども、其志の厚かりしかば、悦びてもらひ、其日みづから携へて歸れり。

一何某の宮、久しく小澤蘆菴が和歌に長じぬることを、聞召及ばれ、毎度御使して召れけれども固く辭して參らざりければ、隱者の事、殊に老人の事なり、風雅の事に强て此方へ呼んことも失禮に似たれば、來らざるも道理なり。こなたよりこそ尋ぬべけれとて、其頃蘆庵天明の火災に家を失ひて、太秦の地藏堂に假居せし草菴へ、宮わざと訪はせ給ひしに、蘆庵も有がたくて、始て御目見え申上、其翌日宮へ御禮に出て、其後より折々は宮へ參り上りけり。蘆庵も世上の俗人の肩を聳して權貴富豪の家に屬しへつらひ仕ふるとは格別にして、近世には珍らしき人品なり。宮にもさばかりの尊貴を風雅のために屈し給ひて、三里に近き所を尋訪はせ給ふこと、古人の風ありていと有がたき御心ばへなりけり。

うひ〳〵しげ―原本うい〳〵しげに作る初心らしき様子

丙午―天明六年也

小澤蘆菴―京都の歌人也萬葉派に對して清新の調を唱へしもの、享和元年七月歿年七十九

起ろ―原本おきろと訓す

身の、そゞろ心に行末定めず成きて、あやしのふせやに世をさへ忍び、さすが手馴ぬ事とて世渡るわざもしどけなく、下ざまの交に心置がちにてうひ〳〵しげに、昔の身の上も恥て得語りもいでず、長き夜の寢ざめがちなるに、過し年月ども思ひつゞけたるさまいと力なし。

一我友源子和が家に常に用ふる茶碗あり。管を吹て雙調にいたれば茶碗おのづから鳴る。子和が父長昌、此茶碗を雙調々々と呼し。

一丙午のとし小澤蘆菴よき箏を求め出して、みづから彈じ試るに、姿にも似ず其音さやかならず、よて樂人某に見せたりしに、樂人も彈見るに誠に響あしく、是は古き器にて、しかも木理も見事に、今時の得がたき箏なれど、かく鳴らでは何かせんとて戻しぬ。蘆菴聞て、いかにもよき箏なり。すこし手を入れなばよく鳴りなん。其時をしみ悔給ひそとて、家貧しき中より五兩の金子をわきまへて買求つゝ、箏の上下の裏の穴より、砥石もて甲の裏を磨りたり。寢にも、起るにも、人と對話するまも、暫もやまで磨る程に、數十日ひまなくすりて、緒糸をかけて彈試るに、果して奇妙の音出て、勝れたる名器と成りぬ。皆人も感じ羨みたりしに、或日中島道成來りしかば、此箏を

かじか—蛙の一種にて溪流などに棲み、聲うるはしく鳴く蟲也

五合を得るといふ。是北國は米大粒にて皮薄く、中國は小粒にて皮厚き故なるべきか。

一かじかといふもの、近き頃人の稀々に養ひ樂しむもの也。聲さやかにて、駒鳥に似、廣き座敷などに飼置てよきものなり。形は小き蛙に似て色黒く痩たり。北山、矢瀬、小原邊の谷河の流清き所に住とぞ。「谷河にかじか鳴なるゆふまぐれ、小石流るゝ水の落合」といふ古歌ありといふ。誰人の歌にや。

一山に登るは秋の日よし。川に遊ぶは春の日よし。霞わたりて岸根の草萠出たるに、柳の陰より舟さし出たる、又なく心よし。高きより低きを見るには、煙なく晴渡りて、こゝは何がしの國、かしこは誰人の里など、指さし合たるもをかし。

一世の人鬱氣の病とて、打も臥ねど何となく心地樂しからず、顏の色あしくて、氣力とぼしく痩ゆくが、若き頃此なやみ無き人は大かたは愚なりと知べし。此病にて死ゆかんもまたおろかなり。唯危けれど、とかくして生延來たらんこそよけれと、朝山貞伯が常に語りし。實とぞ思ひし。

一渡し守の、向ひにありて呼ども來らぬは物うき限なり。歩行しても渡りなんやと思はる。

一昔は都何がしの御内、あるはいづれの國、何れの里にて誰殿などいひもてはやさるゝ

北窻瑣談　巻之二

一日向國高千穗峯といふは、彼國に二所あり。一は霧島山をいふ、又一は高千穗といふ山ありて、豐後より日向へ越ゆる道なり。余考ふるに、神代よりいふ所の高千穗峯は、今の霧島山なり。諸書に多く霧島山にはあらずといへども、是は彼地に至らずして臆斷せる故なり。昔より日向國高千穗二上峯と稱すれば、其山二峯有るに因て名附ぬること明なり。今の霧島山東西に峯ありて相對す。天逆鉾あるは東の峯なり。殊に九州第一の高山にて、他山の比すべきにあらず。今の高千穗といふ山は、衆山の中にありて、是と秀たる山にはあらず。殊に二峯あるにもあらず。彼地へいたり見る人は、高千穗の霧島なること論をまたずして知べし。

一粟一升をしらげて米六合を得は、漢の時分よりの法也。今日本にても、諸國にて聞に、北國にては粟一升を磨りて六合を得るといふ。畿内の地にては半磨と稱して一升より

妙知音にあらざればいひがたし。徠翁は唯東武の三絃のみを聞て評せし誤にぞ。何事にも其道に深からざれば其事は議しがたき事にこそ。

徠翁―原本又來翁に作る徂徠の事也

初夜—午後八時
重陽—陰曆九月九日
徂徠—原本但來に作る

つ珍らしがりき。

一其月の末の頃より滿天紅にして人の顏に映す。東より北南にも及べり。初夜近き頃までも左ありき。

一滋賀へ越る山中の峠は、都近きにての風景の地とて、我友中村氏なりける人の、重陽の日に同志誘ひつゝ行て、湖水打ながめ、わり子打くひて、峠より又歸り來りにし。道行人は滋賀へや越ると見るに、直に歸り來ぬれば、たはれ人とやは見にし、目を側て行過しとぞ。其事のをかしかりしとて我に語り出て笑ひ合しに、其後此事人に語れば、少し風景好るきはは、皆行て見る所なりといひき。

一徂徠の翁の古樂の事を歎美して、三絃などの類は殊に品くだりて聞處もなし、甲の聲をうたへば甲の糸を鼓し、乙の聲なれば乙の糸を鼓すると書れし。是はよき三絃を聞給はざりし故にぞ。誠に三絃をもて古樂の雅聲に比すべきにはあらざれども、今の樂は猶古の樂なり。人情を融和するは何ぞわかたんや。余も糸竹の事は性の好める所にして、多く聞しに、三絃は浪花の音を天下第一とすべし。甲の糸を調べて乙の聲し、甲の聲にて乙の糸を合す。或はうたゆるくして絃繁く、絃疎にして曲苦しむの類、其

長月―陰暦九月

後にはひよ鳥來りて餌をはこび喰せたり。いかなるゆゑにや。かゝる事はいまだ聞ざることにて、不思議なる限とて、人々みなあやしめり。

一山城國笠置邊の山に、秋の初の頃、彼邊にて日ぐらしといふ蟲あり。聲甚だ大にして、しかもさやかにおもしろきものなり。他の國にてあまり聞ざる蟲なり。其形はいかなりや見ず。人家の庭近くも、山ある所にてはまゝ其聲聞ゆ。

一天明癸卯の仲秋伏見へ行事のありしに、四方打曇りてさながら春の日の霞籠たるがごとくにて、それよりも甚し。雨近きやと見れば、雲あるにはあらず。音羽山三ッの峯も見えず、大佛殿の棟も唯思ひやるばかりにて、程近き梢も少し黑みわたりたるばかりにて、松杉もわからねば、怪しう思ひつゝ、肩輿のすだれ打あげて詠めゆくに、道行人も怪しみて、土降なりといひはやすに心附ば、げにさることなりけらしと思はる。其次の日、又其次の日も同じけはひにて、日輪も光なく、唯月を望むが如くなり。板敷などには灰の積りたるやうにて、拂集むべし。猶しも人々に問に、土降にてぞ有ける。三日ばかりして空晴たり。

一同じき長月の半の頃は、夕日光なく、唯朱よりも赤く、童などは暮ごとに立つどひつ

本書訓讀したれど音讀すべきものなるべし

目しひ―原本目しゐ目しひ一定せず

由が「萍やけふはあちらの岸に咲」といひしには無下に劣れり。實に萍の句は世の中の變遷常なきをよくいひ盡せり。此人の胸懐おもひやらる。

一支唐禪師は源子和が父の方外の友なり。諸國行脚の時、出羽國に同宗の寺ありしかば、しばし逗留ありしに、庭前に椎の木の大なるが朽て半より折れ殘りたり。一日住持此木を人して掘り取らせけるに、朽たるうつろより雌雄の梟二羽出て飛去りぬ。其跡をひらき見るに、ふくろふの形を土もて造りたるが三ッあり。其中一ッは早くも毛少し生ひて翼足ともにそなはり、少し生氣もあるやうなり。三ッともに大きさは親鳥程なり。住持ことに怪しみけるに、禪師の、是は聞及びたる事なりしが、まのあたり見るはいと珍らし。古歌に「ふくろふの暖め土に毛がはえて、昔のなさけ今のあだなり」と、此事をいひけるものなるべし。梟鳥は皆土をつくねて子とするものなりと。住持も禪師の博物を感ぜり。

一唐禪師信濃に逗留の折ふし、庭前の木にカッポ鳥といふが來りて數日啼居て去らず、別に人を恐るゝ體もなければ、近寄て見るに目しひたり。かくのごとき事數日に及べども、目しひ鳥なれば餌を啄むこともあたはず、唯終日梢に啼居るばかりなりしに、

我子なら云云―江戸の俳人立羽不角の作「我子なら供につれじ夜の雪」といへるをいふか

乙由―中川乙由とて芭蕉の門人也

成長せる人は其よき事をもしらず、猶山海の珍味を貪り求るは奢ともいふべし。

一山水おもしろき地に庵結びて、世を逃れ住たらんは、いかばかり心樂しからん。但親しき友に遠ざかりて、往來うとからんには又思ひかへがたし。

一「我子ならよそへはやらじ、夜の雪」と作りしは、俳諧の正聲ともいふべし。其人の情おもひやりぬべし。又雪の興に乘し、小僕に酒をかはしむる俤、風流をも失はず。

一伏見にて交りし盲人の醫、尾藤意俊といひしが、或時の發句に、「手にとれば紙の音する蜻蛉哉」身にとりて實境なり。

一太宰春臺の、俳諧の事殊に譏りて、詩歌などには似もやらぬやうにいひなしぬれど、それは此道を知らざればなるべし。人情の委曲に通じ、一唱して三嘆せしむるは此道に多し。

一其角が讀琵琶行」といふ題にて「十五から酒を飲出てけふの月」と唫ぜし、十五に春情きざせるをいひ取り、酒に全盛を盡し、けふの月の五文字に零落の姿をうつす。絶妙の作といふべし。白樂天の數百言を費せし、是を聞ば恥べし。

一同人の作に「稻妻やきのふは東けふは西」といひし、下の五文字無くても有なん。乙

地は皆濁酒なり。唐土なども濁酒多しと聞ゆ。殊に日本は米穀萬國に勝れて精實なれば、酒も一しほに味厚く、醉ことも甚しといふ。長崎へ渡り來る唐人の、彼國の人に勝れたるといふ上戸も、此國へわたり來り、日本の酒にては、彼國の三が一も飲得ず酩酊すといふ。毎度渡り來りし程赤城といへる唐人、年六十に過つれは、彼國の親類諫めて、もはや年老たり、數百千里の大海を越て日本の商、今はよき程なり、やめ候ひて然るべしといへるに從ひ、二三年も彼國にて隱居してありしに、飲食のことに堪がたくて、又近年としごとに渡り來ぬ。いかなることぞといふに、第一日本の飯を食し馴ては、彼國の飯は食しがたく、第二酒、第三味噌汁なく、香の物なし。是等の事日用の事にて、程赤城は二十歳ばかりの頃より六十餘に及ぶまで、年々渡り來て、日本に馴ぬれば堪がたく、渡海せし頃も日本の米味噌の類を取よせ食せしかど、久しく渡海せざれば、別段に食味に奢をなすやうに人目の憚もありて、常々にも日本の物のみは用ひがたく、唯商の爲に渡海するといへば、其歸るさに一年半年の食物を携へ歸りて用ふるに、人目にも立ずよければ、死せん迄は日本に通ふべしとて、又再度近年引續き渡海せるとぞ。誠に米、味噌、酒、香の物の類、日用の物なるに、我國に

一心の内には常に人に勝らんことのみを志すべけれども、人に交りては勝らんと爭ふべからず。其身さへ才藝長じなば、あらそはずとも、などか人のうやまはざらんや。

一たまさかに相見る中には、やはらぎて交るべし。夜となく晝となく行かば、心置なくしたしみ睦ぶ中には、禮儀みだれぬやう、常に心につゝしむべし。

一つま子などの死したる後にて、其夫父などのありし事どもいひつゞけ、見る人ごとに誇るは、さることとは思ひながらも、事さめて覺ゆ。唯何となく打しほれて悲しみ居たらんは、あはれも一しほならん。

一僧、山伏、醫師、神主などの、祭芝居などに打出て、我顏なる、いとにくし。女の聖人の道の事などいひならぶる、又にくし。其身ばかりに心得居ても有なん。

一司空圖が詩に「解吟僧亦俗、習舞鶴偏痴」と。誠に今時の僧侶、無學凡愚なるは論なし、少し文字ある僧も、唯輕薄の風のみにて、世に衒ふの徒のみなり。實學實行の僧は希也。司空氏も是をにくめるにや。此句六如上人の室に書附置れしを、平野氏なる人見來りて、余に語りき。今にては僧のみにもあらじとおもふ。

一酒の今のごとく淸酒になりしは、纔に百四五十年此かたの事とぞ。今にても西國の偏

やはらぐ―原本やわらぐに作る

司空圖―唐の景福頃の詩人、字は表聖、耐辱居士と號せり

有輔一併名なれば音讀すべきかと思はるれど原本のまゝに訓讀せり

いろの珍敷事共物語せり。大石の契りし妓を夕霧といひし。其夕霧に大石より贈りし三絃もあり。又唐製の硯もあり。又二階ざしきの鴨居の上のランマに、山科より伏見までの道筋の山の姿を寫し、彫て附たるもあり。又大石旣に江戸へ下らんとせし前に、此樓上にて、酩酊の上天井の板に感慨の辭を書附しも、墨迹淋漓として、其天井其まゝに殘れり。天明の頃に到り、此天井は取放し、屛風のごとく造りなして諸國に見世物に出せしが、今程は誰人の所藏になれるや。其後淸右衞門も死失せ、撞木町も年々に衰へ、笹屋の樓も段々に毀ち賣り、つひには撞木町不殘草原となれり。笹屋に有し硯三絃なども、皆散々に賣拂ひぬ。靑樓ながらも大石のゆかり殘り居て、笹屋の樓上に登れば懷古の情淺からざりしに、笹屋の子孫さへ今は絕はてゝ、撞木町も一軒も不殘亡び失ひ、靑草の荒原となりし。見るがうちに移り變れる、歎ずるにもあまりあり。其後寬政年間にいたり、誠に賤しき靑樓纔に二三家、誰人にや建立せしかど、昔の俤にもあらず。笹屋はよほどの大家にて、二階のはしごの幅一間半餘もありて、三四人も手を携へながら飲食の物にても持登るべき程なりし。余が初に伏見に住し頃は、皆全かりし。

桃花蘂葉―一條兼良の撰にて一條家の用ふべき裝束冠帽の事及書狀文書の事を記したる書一卷あり

俳諧、俳名―原本誹諧誹名に作る

令十卷　贈太政大臣藤原不比等奉勅撰　律十卷　同上
弘仁格十卷　大納言藤原冬嗣等奉勅撰　弘仁式三十卷　同上
延喜格十一卷　左大臣藤原時平等奉勅撰　延喜式五十卷　同上
貞觀格十二卷　左大臣氏宗等奉勅撰　貞觀式二十卷　同上

右等の書は本邦政事の書なり。法曹指要抄は明法博士坂上兼明撰なり。桃花蘂葉には、令は我朝の法度也、律は我朝の刑書なり、格は臨時の處分なりとあり。

一伏見撞木町の青樓は、大石內藏介山科に在りし頃折々行通ひし所なり。安永の末つ頃までは、いまだ數家殘り居て、賤しけれども妓女も數十人在りし。余が初伏見に來り住し頃は、大石の行通し笹屋清右衛門といへる青樓撞木町第一の大家にて、大石の時のまゝにて、家居廣く、昔のありさま思ひ出されたり。亭主の清右衛門も七十餘の老人なりしが、俳諧を好みて、俳名を有輔といひ、余も心やすく申せし。此清右衛門母の若かりし時の事にて、大石をも母はよく見覺て、文なども多く此家に所持せり。大石俳名をウキといひしとて、文に見ゆるは皆ウキとしるせり。其外の義士も大石とともに來り遊びし人々の文ども多く殘れり。母の物語なりとて、清右衛門余に毎度いろ

> 半下衆―御局衆の召仕女、雜仕

> 水帳―昔時土地段別の圖に持主の名及年貢の高などを記して民部省に備へ置きたる帳簿

又重編應仁記に弘治三年五月廿三日より八月九日迄天下大ニ旱ス、今年金壹兩を以て米五斗を交易す、前代未聞の事と記せり。又秋齋閑語に室町殿日記を引ける文有、曰、御局衆半下衆切米二十石賣拂可レ申由被仰越候、此頃兵庫之賣買一斛六匁三分五厘之由吹田屋新左衛門申候、御得心可レ在レ之候との文にて、是は天文九年の事なり。又草廬雜談を見れば、古田兵部の米を賣て請取を書しに、十文目に附一斛替なりとの文にて、是は慶長四年卯月十五日兵部判とあり。又太平記の評を見れば、楠の米を買ひ、山門に寄附し、軍餉にも備ふ、米一千二百餘石を黄金百兩にて買得られたる事を記せり。又三代實錄に、貞觀九年四月辛卯東西始置二常平所一出二官米一而糶レ之、米一升直新錢八文、京邑ノ之人來買者如レ雲、是時穀價騰踴内外飢饉、米一斛直新錢一千四百、由レ是ニ官糶以救二俗弊一焉と見えたり。

一本朝當今の田制、三百坪を以て一反とし、三千坪をもつて一町とす。水帳の高、所々によりて不同ありといへども、大抵一反を一石五斗、或は一石六斗、又は一石三斗とす。

一本邦法令題目の書、法曹指要抄に擧る目錄、

ひたるなり。後世あぢはひの字に從ひ來るは、是もあやまりなりとぞ。內膳司濱島氏の物語なりき。

一是も濱島氏物語に、漿とひとへにいふは、今の飯の湯のことなり。豉のこと延喜式に其造り法くはし。丹波氏にも又別の造り法を傳へたり。是は後世の事と見ゆるとぞ。

一舊事記古事記等に出る所の、景行天皇御身長一丈二寸、日本武尊御身長一丈、仲哀天皇御身長十尺と見えたり。此時に用ひられし尺は、いづれの世の尺にや。周漢の古尺のやうに思はる。

一讃岐國の人森長見著述の忘貝といへる假名文を見しに、其中に米價の事を載せて、日本紀に顯宗天皇二年歲比登稔、百姓殷富、稻一斛銀錢一文とあり。又續日本紀に元明天皇和銅四年錢一文に米穀六升とあり。又三代實錄に淸和天皇貞觀八年二月大政官處分定。左右京白米一升直錢四十文、前二十文今加二十四文、黑米三十文、前十八文今加二十二文。是歲穀價騰踴、東西津頭白米一斛七貫二百文、黑米四貫百文、由是增定京邑估價とあり。又百煉鈔に、後堀河院寬喜二年六月二十四日甲申定米價、斛一貫文とあり。又太平記に元亨元年夏大旱、此年錢三百文を以て粟一斗を價とあり。

糯米などの炒りたるを交へ鹽を加へて製したるもの、金山寺味噌の如きもの也

內膳司—昔時天皇の食膳の事を司りしもの

延喜式—藤原時平等の撰にて朝廷の儀式百官の作法諸國の定例などを記したる書、五十卷より成る

さゝふ—原本さそふに作る

つぎ〳〵しく—つき〳〵しくの誤にて物事のよく釣りあひたるをいふ

内の御膳—内裏の御膳

ひしほ—小麦の飯に豆

ものなり。たくみにして狹きはあしく、人目遠き所にもよき衣きたる、ゆかしと見ゆ。女などの髮かたちつくろはざる、下ざまには多くあるならひなれど、こゝろさめて覺ゆ。

一酒といふものこそ萬の誤をも引出すものなり。人の志をもくじき、行をもそこなふ、酒より出ること多し。三十近きまでは愼むべきものにや。されど月の夕花のあしたはさらなり、親しき友に打向ひ、しめやかに物語などする折ふしは、此物なくてや有べき。

一人の子をそだてんに、君に忠ありし昔物語、親に孝ある世の噂など、常々にかたり聞すべし。其子に益あるのみにあらず、其身もをさまらずしては、まことなる道は語りも出られぬものなり。

一味噌汁は甚だ後世のものなり。唐土には今になしといふ。日本も應仁の頃より以後にもやあらん。それゆゑ、内の御膳に、儀式にては味噌汁を用ひらるゝことなし。但し、汁にせず、味噌のまゝにて食用にせることは昔よりあることなり。今のひしほのごとく、其まゝ食せるものなり。味の字往古は味醬と書て、上の畫を長くし、末の字に從

君ならで云々ー延喜時代の歌人紀友則の作也

南留別志ー荻生徂徠の随筆にて五巻より成るなるべしと訓ずるを正しとす

ず。

一余が幼きとき、家の東表なる所に、矢箆竹多く生ひ居たりしに、月さし出る頃は窗に影うつりて、畫けるがごとくなりしを面白く覺えて、何方に住侍るとも、東の窗には必此竹植べしと思ひしが、年長じて後は世の中に交りて其心さへ遂げず。折ふしは此事思ひ出て風塵もうとまし。

一花は山櫻のあはれ深き、又たぐふべきものも覺えず。唐土人は目に見ねばさも有べし。此國の人、牡丹の色菊の香なんどに心うつすは、情しらぬとやいふべき。

一「君ならで誰にか見せん梅の花、色をも香をも知る人ぞしる」。世の中の嬉しさも悲しさも、唯此歌にこそ知べけれと、南留別志にもしるされたり。少し其さまはつたなきに似れど、げにとぞ思はる。まことの言の葉はうるはしからずとも聞えし。思ふ人のおこせたりける文などの、あまりによくいひかなへて花やかにをかしきは、心淺くぞ思はる。

一月見るは打晴たる高樓より、木あらば高きよし、低き木の影さゝふるはあしゝ。

一食物は腹にみちなば足りなん。家居はつぎ〳〵しく所廣く作りなせる、誠に心のぶる

朝時代の人にて當時和歌の四天王の一人といはれたる人也

大石火矢ー昔時に用ひたる大砲の類をいへど此は大砲の事なるべし

子ー夜の十二時

一日向國都の城邊は井を掘こと尤深し。三十尋に及ぶものあり。至て深きときは、井の底より白晝に星を見るといふ。

一阿蘭陀船長崎の湊に出入る時は、必ず大石火矢をつらね放つ。其ひゞき山嶽を動す。和漢の人皆出て見ることなり。或時余が友唐人に向ひ、通事もて、今の石火矢の音はいかゞいふぞと尋しに、ピイーンといふと答へり。和人の耳にはドヲーンと聞ゆるに、聞人によりて其形容の違格別なること、誠にあやしむべし。

一市中に閑を得るは子過る後にあり。夏深き頃など、家人も皆寝定り、邊の家も物音靜りて後、我獨り寝もやらず、軒近く端居して、落殘る月に對し、西行兼好などの在し跡など思ひつゞけたる、塵の中に染る身にも、しばしはこゝろのどけし。

一花の頃、紅葉の時は、何れの地にか心留らざらん。されど一年高尾山に遊びしが、紅葉は誠に他に勝れてめでたけれども、其地は見所も無く、宿しむべしとも覺えず。古人はいかなる所に心留りてかくは名に立しや。

一余が十餘歳の時常に思ひしは、平なる地の方一町ばかりもある所に、紅葉ひまなく植つめて、其中に庵結びて住たらば、いか許嬉しかるべからんと。今にても此心は替ら

前後の俳文を集めたる書、十巻より成る

翁—芭蕉翁

孟山人—唐の孟東野をいふか

鴨長明が道の記—源光行の著海道記のことを世誤つて長明の著といふ也

草庵集—頓阿の家集也

頓阿は南北

骨をぬけたり。詩人にたとはゞ孟山人に近し。

一鴨長明が道の記讀たりし頃思ひしは、名に高きに似もやらずいと拙し。讀も終べからず。是程の才にて其頃鳴りしは、少しばかりの漢學に、世の人驚きてもてはやしぬるなり。又は後人の僞撰なりやといといぶかしく、人にも問ひ語りしが、其後年へて何とかいひし書讀たりしに、長明は道の記出て其名くだりしとぞ。誠に當時にも世の人に眼無きにはあらざりし。

一頓阿が草庵集は近世の人殊にたふとみ、和歌の正路のやうにも心得たれど、讀て見れば、一首として凡骨ならざるはなし。此道筋より學び入りぬれば、つひに名人の位にはいたること得べからず。

一吉野の何院とやらんに、後醍醐天皇御製の和歌あまた傳へたる中に、

　大かたにおもふゆゑかと立歸り、治らぬ世をこゝろにぞ問ふ。

　身にかへて思ふとだにもしらせばや、民の心のをさめがたさに。

此二首は殊に耳とまりて聞ゆと、佐々木のぬしの物語せる、誠に英明の聖主、其時代の事ども此歌にておもひやられぬ

の居住せし地方

テグス—テグス蟲の腹中より引出して製したる絲

如月—陰暦二月

羅浮山—廣東省惠州府博羅縣の西北に在り東晉の葛洪が仙術を得たりといはるる處

風俗文選—森川許六の編にて元祿

先にて直に篦を川ふ。羽は黒くして鴨の類と見ゆ。羽の長三寸五分、四ツ羽にはぐ。是は水中を射るが爲なり。根を仕込たる所は獸の筋を以て卷く。テグスのごとし。羽の木は櫻皮をもて卷く。根鏃筈三所ともに筋にて卷く。造かた麁略甚し。是にても鼷などを射るに足ることにや、いぶかし。

一櫻は遲くて少し葉あるもまたよし。桃の時をおくれて咲、又は雨などに色うつろひて青葉交れるは、いとうとまし。

一伏見に住せし頃は、梅山いと程近かりしかば、日毎に書生打具して遊びぬ。年ごとに如月の中旬盛なり。月もよき頃なれば、夜も大かたは梅山にのみ遊びし。月下の梅花互に白くて、銀世界の心地す。殊に夜は匂一しほにこまやかにて、他の花の及ぶべきにあらず。唐土の羅浮山などはかくやある。我國にて梅花多き地もあれど、かく清雅なる梅山はあらず。

一或日風俗文選讀たりしに、翁はいふべからず、支考が才の秀たる、此道に取りては前後に人なしといふべし。許六は其中にて劣りて見ゆ。

一和歌は西行拔群の名家なり。あしき歌は殊にあしけれども、よきはすぐれてよく、凡

ほるゝまで―ぼんやりするまで

びいどろ―ホルトガル語ヴイトロの訛、玻璃

肅愼―今の松花江烏蘇里江黑龍江の流域にて通古斯民族

なるにあらず、かの腹さくるまで飯打くひ、心ほるゝまで宵の間よりいねたらんには、などか人に劣らでや。

一何事も趣を解すると解せずとに其妙味は在ることなり。たとへば杜鵑の聲のおもしろしといふものにはあらざれども、唯其啼折の、夜ふけ雨しめやかなる五月の空に、ほのかなる一聲他の鳥に比すべきものなし。ゆゑにむかしより、杜鵑の一聲は鶯の初音よりも人々の待わぶることなり。此境を會せざれば、歌の心も通ずべからざるがごとし。

一蠻國の人は、假玉もて日輪の火を取り煙草を喫するなり。日本の人の日輪の火にては恐多しといふを、いかなるゆゑと不審せるとぞ。又日本の人の月を面白しといふを聞て、珍しからざる月輪のいかなれば面白きにやと怪しめりとぞ。是等のこと、理窟の上よりいへば蠻人の方其理あれども、日本の人の其趣を會したるとは、賢愚の違天壤より甚し。

一肅愼の矢なりとて、松前より取り歸れるを、塘雨が方より見せ侍りし。其長さ都て一尺四寸三分、篦は楊の木と見ゆ。先に獸の脛骨をもて三角に削り、長三寸二分の根有。其根の先に又竹の鏃あり、長一寸五分、窪かなる所ありて毒を納るべし。筈は篦の

王元美―明の太倉の人名は世貞、弇洲山人と號す古文辭を唱へて世に名高し萬曆十八年卒年六十五

汪道昆―明末の文章家

馬矢―馬糞の義也

美を祖とす。其四部稿の中、面白く覺ゆる文章二十卷を手寫して、點を加へ、評語を下す。其手寫の本二十卷今現に余が家に藏す。其外汪道昆の太函集全部、前漢書全部、文章記臆の爲に手寫す。其外手寫の本甚多し。皆評語を加ふ。漢書、四部稿、太函集の三部計にても、一遍讀得る人だも少なし。況や手づから書寫して、且評語を加ふる事、其つとめ常人の及ぶ所にあらず。京に遊びし頃、一名家先生に請ひ、題を出さしめて、七言律詩一日百首を作らんと云しが、其事はたさずしてなくなりぬ。をしむべし。但其才をたのんで酒を使ひ、行を不愼、遂に病を引出して身を喪ひし。歎くべく悲しむべきの至なり。

一薩摩領日向國高岡の鄕に牛糞姓の人あり。國初に忠久に從ひて鎌倉より來りし人十家許ある中の一家也といふ。珍敷き姓なり。太宰春臺の漫筆に、往昔鎌倉の頃に牛糞氏あり。漢土の馬矢姓相似たる事なりと見えたり。此も彼牛糞氏なるべし。

一百里を志す人の、一日に十里づゝ行たらんには十日をへぬべし。人よりも名所も多く見、早くも到りつかんと思はば、一日に十五里も十八里もゆくべし。よろづ學の道もかくのごとくなるべし。人にも手足あり、五臟あり。我も手足多きにあらず、五臟異

鶉の衣—褞などの破れ裂けたる衣服

一我友保田某浪花より住吉へ詣し時、雪降風烈しかりければ、途中より雲助駕籠といふものに乗りぬ。二人とも袖もなく膝もあらはなる繻絆のひとへなるを肩に打かけ、物思ひげなる色もなくかきもてゆくほどに、保田限なくあはれに思ひて、鶉の衣の肌さへ覆ひかねたる、人心地もなく堪がたきことにこそと尋しに、我ふところにもやどる風のあるなればと答し。いかばかり心の内安かりけん。

一初めて西遊思ひ立し頃、仲獻も伴んとて、はや近き日には打立ぬべしと、旅裝せし日、平子虎來りて留別の詩やあると尋しに、いまだなしといふ。いかなればといへば、今にても作るべしとて筆を取り「方寸之心六尺身、飄々二十六年春、家添二短劔一成二雙口一、跡歷二群邦一閲二幾人一、洛下名流投レ刺罷、江南風物寄レ懐新、自レ今誓使三遊行作二字々風霜句神一」と思ひ煩へる色もなく打出せし。仲獻今年二十六歳、其頃俄に我母世を去給ひ、仲獻もつゞきて泉下の鬼となりければ、其年の遊行はやめたり。次の年余獨漫遊して、二年をへて恙なく歸り來て、其時の事を思へば魂も消す。

一仲獻名を世文といひ、俗稱を奥田周之進といふ。尾張の人、甚文才有り。殊に詩文章をよくす。詩は七言歌行長篇其長ずる所なり。絶句は長ずる所にあらず。文章は王元

華表―陵墓祠堂などの前に立つる鳥居の如きもの、我國人直に鳥居とするは稍誤れり

候へば―原本候得ばに作る

さみする―貶する

文、久容不レ堪卑濕地、一年分半蚤兼レ蚊一書附て見せたりしが、誠に伏見の地蚤蚊多く、水濁りて、京師の人はさも思ひ苦しみぬらし。今は其人もなくなりて、其詩のみ墨の色もかはらず。

一某卿のもとへ、尾張より鳥井の銘を乞奉りし時、文人多くは、鳥井の事を華表と書るを見れど、華表も何とやら不相當のやうにも覺ゆ。そこにはいかゞ思へると尋給ひしに、春暉答へて、仰の通り華表とは格別のものにも候半が鳥井は神代の門と承り候へば、唯神門と遊ばされんことはいかゞ候はんと申侍りしに、卿も尤と仰られき。

一同じ卿に土佐國の松山寺の紀貫之の碑文を乞奉りし人の有りける時、卿の、人は皆貫之々々と書るも、淺官の人なりとて、古賢の事なれば名を稱せんことくわんたいにもや。余は此度の碑文に紀子と書りと仰られき。

一佛の道强てあなどりさみするは、おろかなる人のわざ也。

一心地常ならず、たれこめて打ふしたる折ぞ、人情世態の委曲にも通じ、物のあはれも知るべし。一生涯枕を取たることなく無病壯健の人は、すぐれたる賢者にあらでは、少し心强き方にや落らん。

野分―暴風雨、正しくは野わきといふ

猿丸太夫―歌人にて時代未詳元慶頃の人かといふ

つれ〴〵に―徒然なるに

泉下の客―世になき人

醫に隱れ―醫を業として俗世間に遠ざかる

一野分せしあした、朝山貞伯が宅へ尋しに、奴出て和歌仕りぬといふ。人々驚き、いかゞよみ出しと問へば、「紅葉散り、ゆふべの風に今朝起て、庭はきよする竹ばうき」。猿丸太夫の紅葉の歌にならひ、きの字にて留め候ひぬといひて、ほゝゑみて退く。志のやさしきとて、どよめきて笑ひぬ。今ははやはた年に過て、貞伯も身まかりしと聞く。ふと思出て書附ぬ。

一五月雨のつれ〴〵に、反古ども取出し見るに、今は無き人の筆の跡こそ殊に目とまりて覺ゆ。貞伯が知識、奥田仲獻が文才、村山伯宣が篤實、川端草溪が溫柔、皆得がたきの器なり。天何の心ぞや。はやくもことぶきを奪ひて、泉下の客となれる。思ひ出るも胸つぶる。殊に貞伯は、我十三四歲の頃より十八九の頃までも交りて、齡も十餘年長じ、才も德も世に珍らしく、書し事、いひし事、皆耳に殘りて益者なりけるに。噫。

一伏見にて詩社を結びし頃、三宅圓藏といへる人、もとは京師の人なるが、聊ゆゑありて伏見に來り、醫に隱れ居けるが、或時の詩に、夏日偶成と題して「城居煩熱憶南薰、却望西山簇暮雲、索句書窻成獺祭、爲醫塵陌墮鷄群、功名何說歸鄕錦、詩社空懷會友

調度―手まはりの道具

ことやうにわびたる―異様にものさびたる

つい立て―原本つゐ立てに作る

の道に叶へり、強て學び給へともすゝめがたし。此上はいかやうとも足下の心次第なるべしといはれしにぞ、病に托して其後は老人へ面會もせざりし。幾程なく老人も死失て、飛行の術誰人の傳授したりといふも聞ずなりぬ。かゝる人や神仙のたぐひなりけん。今にいたりてもあやしく思ふなりと、左仲老ての後語られしと、大川滄洲翁物語なりき。

一無益の事には、螻蟻の小蟲といへども殺生すまじき事也。況や我なぐさみに好で物の命を害し傷ひやぶることは、不仁の甚しきなり。

一調度やうの物、大かたは漆ぬりて蒔繪したるよし。わざとことやうにわびたるもの、年ふりたるものあしゝ。又唐めきたる物も多くはいかゞと見ゆ。さればとて、貧しき家に分を越て淸らをつくしたるは猶あしゝ。

一夜更ていぬる頃、藏鎖せといへば、婢女答てつい立て行ぬ。やゝありて歸り來ぬ。いかなるゆゑにおそかりつるやと思へど尋もせで、さて次のあした出て見るに、さしもに重く大なる土の戸きびしくさし堅めてぞありし。おろか成ものはをかしくもまたあはれなり。

覺え—原本覺へに作る
選び—原本撰びに作る

侍れば、世の中に久數ながらへ申べしとも覺え侍らず、されば某が年來覺え居候一術の候に、某限にて世に絶なんも殘多候へば、御門人の多き中に、實貞なる性質の人御見當り候はゞこし給へ、其術を傳へ申べしといはれしにぞ、三省其後左仲を呼て、此頃かゝる事を聞り。何事かは足下行て學びてんやと語られしにより、三省の添翰を得て、彼老人の宅に行しに、老人見て、三省の選びこされし人なれば麁略なることは有まじ、まことに其術傳へ申べければ、いつ〳〵の日には來りたまへと約しぬ。扨左仲老人に向ひ、先以御傳授を蒙るべきこと、難有事なり。さるにても其術と申はいかなる術にて侍るやと問しに、老人答て、他のことにあらず、某が學び得てし術と申は、此身虚空を飛行し、一日須臾の間にも、數百千里を往來する術なりといひしにぞ、左仲も驚き、さてはたやすきことにもあらずとて、其日を約して歸りぬ。左仲道すがら思ふに、兎角に奇怪のことなり。いかなる心の人とも知ざるに、學び得てよしともあしとも定めがたければとて、三省の宅にいたり、老人傳授の事と申はかゝる事なり。かゝること聖人の道にも叶へることにや。さもなくて妖人外道の術ならば身の汚るゝわざなり。やめ申べし。いかゞにやと尋しに、三省も驚き、誠に奇怪の事なり。聖人

は、かゝる事を風流なりと思ひて、人の耳目を驚かさんとするも多かりける。

一七月七日八日の頃は、我家の戸障子なども鳴はためきぬ。東山の鳴動するなど人々驚きあひぬれど、さる事有まじ、越の立山などこそ燃出しならんといひしが、程へて聞しに、信濃なる淺間が嶽のもえけるにてぞ有ける。余が言のあたりぬるは、過し年薩摩の櫻島燃し時、程遠き國は何となく地震のやうに障子など鳴はためきけると、兼て人の詞に聞つたへ居つればなり。

一琉球へ文やるとて、表書に琉球國某殿としるしぬれば、筆の勢やみがたく、日本の橘としるしぬ。いとをこがましき所書なりき。

一寛政四年辛亥秋、備後國芦田郡常村の農夫、八十餘歳にして額に一ツの角を生じ、翌年壬子正月十七日解脱せり。同二月備中鴨方村西山拙齋より文して申來る。唐土にも漢の景帝の時膠東下密の人、年七十餘、角を生ずといふこと見えぬれば、古今耆老の人にまゝ有事にや。

一京師の谷左仲先生、年若き時に、柳川三省先生に從ひ學ばれし。其頃三省翁折々心安く往來せられし大佛邊に住る一老人有り。或時老人三省翁に向ひ、某も殊の外に年老

三才―天地人

檜垣の女―筑紫白河の遊女にて歌を善くせしもの、家集あり、檜垣嫗集、西遊記二百一頁参照

の後は、むかしのごとくならず。

一無くなりし友の仲獻語りしは、伏見の地は三才の中にて、天地は餘あれども人足らずと。實とぞ思ひし。

一伏見には花木の地多し。方五拾町にあまれる蓮沼あり。六七月の頃は紅白の花池面に見えて色香また類なし。曉天に小舟に棹さして、花間に漕めぐる、いと涼し。かく蓮花多き處は、他國にてはいまだ見及ばず。

一隱居の上人に。檜垣の女の圖見せたりしに、今より千餘年前つかたは、衣紋ことやうにて、えりといふもなく、袖長くて、後の方へかへれりと、物知れる人に聞しが、此圖こそ其詞のごとくなりと語られき。

一月はくまなく花は盛なるをのみ見るものかはと。兼好はまことに風流の道にはいと深かりぬ。すべて徒然草の一書其才氣の絶倫なるを見るべし。此法師と打向ひて物語せば、人をして心醉せしむべし。

一安永の頃都に住る人の、書畫の道に賢しとて、鄙の果までも其名高かりしが、人に招かれて畫どもかきたるに、其日始て著たりし衣にて筆おしぬぐひ汚しける。今の世に

北窻瑣談　巻之一

梅華仙史橘春暉　著

米南宮―宋代の畫家米芾をいふ南宮は其號也大觀元年歿す年五十七
王叔明―元代の畫家にて名を蒙といひ黄鶴山樵と號す趙子昂の外孫也

一草花の黄色なる、靜に見えていとよし。たそがれのゆふがはなど、白きもまたあしからず。

一もろこしの畫の法は眞を摸すること多し。都にても、音羽山は米南宮に似たり。如意嶽は王叔明に似たり。

一伏見の桃山の觀月臺は俗に宇治見臺と云山水眺望の地なり。余諸州の名勝を見たれど、かくのごとく明媚にしてしかも艶なる風景はなし。世の人近きを鄙んで遠を貴るとて、此地の風景の名高からざるは悲し。

一花は皆散過たる頃、御幸町より北を望めば、仙洞の木立ものふりて、若葉の梢青みわたりたる景色、見るたびにおもしろし。姉小路より西の方を見たるもよし。天明火災

かりになむ。

文政乙酉の秋

大隅目　菅原長詔

にはうつしとゞめて、先師身まかりたまひし後も、折ふしごとに物しつれば、此ほどはとありし、さるころはかく有しなど、むかししのばしく、或はゐまれ、あるはうちなきもしつるを、こたび嗣子桃仙ぬし、文星のあるじがねもごろにもとむるがいなみがたしとて、そのみつよつをさぐりいでて、さくら木にゐらせられしは、かの父の君のとし月のいさををおほかたの人々に見せもきかせもの志の淺からぬがうれしく、またこの册を見む人々、大人の世にいませし日にけにつとめたまひしむかしを、今にまのあたりみもしきゝもしたらむがごとおもひあふがば、苔の下にもなどかおのが心にたがへりとつぶやきたまふらむや。中々にあさからずしもおぼしたまふらめと、長留が心にけふはたゞ打ゐまるゝば

北窻瑣談序

春の花のあした、秋の月の夕さり、なにくれと見もし、きゝもし、はた心にうかぶ事を、やがてかいつけて、年經て後にみれば、立歸りその折のこゝちせられて、ひとりゑまれもし、打なきもせらるゝは、隨筆といふものにぞあると、心しれる翁のかたられし。廿とせ餘りのむかし、南谿のうし、年月のいたつきをものしてむとて、ふしみ山のふもとに庵しめたまへりし比、見もし、きゝもし、はた思ひよせたることども、こゝらつどへしるしつゝ、北窻瑣談となむ名附て、おのれに見せたまへり。されどおほす處あなれば、大かたの人には見すまじなどきこえたまひしを、おのれが家

筆中以爲雞肋者。讀者幸恕。于時文政乙酉仲秋、書于浪華客居

橘春德識

北窗瑣談序

余頃日客居于浪華。一日書賈某、袖寫本一部而來、告以上木之由。取而視之、則余先考隨筆中北窗瑣談者是也。余曰、夫東西遊記災梓於世、先考嘗既噬臍。今復謀此舉、恐重寃地下。豈不大悖子爲父隱之旨乎哉。請辭焉。書賈曰、雖然竊以爲、其書博物宏義、見之卓、論之確、讀者足以供三餘之一樂。如夫再刖獻璞之與獨祕諸帳中、其志何啻霄壤。百方回說不輟。余不能拒其請之切、且憾其全部愆僞頗多、因出原本、校讎筆削、以還之。爾聊塞其責了。編中往々有圖畫者、書賈所增入、非原本之眞。且此編也、先考隨

北窻瑣談

むらば、誠に思ひがけなき災なるに、無難なりしは天幸といふべし。

手を負ふ―負傷するをいふ

る。かぢとりも猶あらがひて、船のあつかひ素人のしることにあるべきや。やかましき乘合かなと雜言に及ぶにぞ、旅合羽著せし男大にいかり、慮外なるかぢ取かな、きやつ引のけよと呼はるに、かぢ取も大にいかり、此男はのり合船に我儘なり抔、たがひに惡口に及びしが、氣短なるかぢ取二尺餘の大脇差をひらりとぬき、月影にかゞやきて稻妻のごとくなりけるが、彼男を目がけ飛でかゝる。彼男も刀おつ取立上る。船中湯のわくがごとく騷動して、女童は泣まどふ。されどもひしとのり組たる船なれば、いづくへにぐべき便もなし。船頭二人すかさず中にかけへだたり、ふとんを刀に打かける。乘合の者も皆々折重なり、終にかぢとりをおさへける故に、雙方怪我なく、騷動しづまりたり。しかるに風はますく急にして、船は矢を射るがごとく岸に著たり。騷動の間ふねをあやどる者もなかりしかども、不思議につゝがなくて著きたりしは神助ありともいふべし。兩人ほどちかく居より居たらましかば、たがひに切むすびて手をも負ふべかりしを、程へだてたればこそ大なるあやまちもなく取押へたり。まことにあやふき事のかぎりなりき。船よりあがりて後、彼男尙いかりて梶取を手打にもすべしとかまへしを、年老たる船頭いろくと詫誤りて、無難に事すませり。余などがごとき旅の身、若手疵にてもかう

州鹿島郡谷山村、安行は行安の誤か、本文に據れば安行が行安と改めたるやうに思はるれども改名の事は詳かならず
たはぶる—原本たわぶるに作る
天氣變る—原本天氣替に作る

て、道三が荒井の海のためしもあれば、醫者とても海上に益なしとはいふべからず。殊更此袋には種々の藥品所持致せば、猪苓澤瀉はよく水をおひ、防風桂枝はよく風をさむ。いかなる風波にあふとても、山伏殿にやおとるべきと、おのがさま〴〵身に生ふることをたはぶるゝに、船中手を打てみな〳〵笑ひどよめく。いかにも山伏の奇特にや、丑の刻過より、山々の峯に雲出て、北風大に吹起る。船頭悦びて心地よきはなしとて、よき風をむかへたりとて順風に眞帆をあげてはしるほどに、暫が間に五六里ばかりのり出たり。然るに風いよ〳〵はげしくなり來りて、大浪頻に逆まき、後には風の方角さへやゝかはり、何となく胸騖くばかりなるに、帆ばしらのもとに居たる年老たる船頭いふは、天氣變ると見たり、風もいかにや吹かはるらん。梶とり油斷すべからずと高らかによぶ。かぢとり居ける男は、年若くて頬髭別れ、宵よりもたけ〴〵敷ものなるが、此風の替るやうやあらん。大海のうへに世をわたるわれなるに、梶のさし圖無用なりとて、かるしめ居るを、船頭いよ〳〵氣遣ひて、海上は大事のものなり。ことに人は多くのせたり。いかに功者なればとてあなどることあるべからずといふにぞ、船中のもの皆々おそろしく覺束なく成りて、船頭が言葉尤なり、かぢとり社にくき奴かなと口々にのゝし

に聳ゆ
勸むる—原本進むるに作る
熊若—太平記などには阿新に作る日野資朝の一子也
堂の間—胴の間也、和船の中央の室をいふ
谷山の安行—谷山は薩

て甚だ賑やかなるに、頴娃郡の女五六人其中に有しかば、傍の人口々に西目うた面白し。女ども謳ひきかせよと勸むるに、はじめのほどは恥かしげにいなみ居たりしが、後には和し來りて、「頴娃郡の海門が嶽はうけつな嶽よ、雲の帶してによき〱と」同音に謠ふ。邊鄙の音聲ふしをかしく、目さむる心地す。夫より燒酎など買來りて、船中一同にさゞめきたのしむ。しかるに漸々夜ふけて潮さし來れども、風なくして舟の出しがたきに皆皆退屈して、風もがなと待わぶるに、乘合の中に一人山伏ありしが、いふやうは、かゝる海上にてはいかなる智惠も勇氣も施しがたきものなるが、我道とする修驗こそむかしよりいちじるしきこともあり。熊若を救ひし山伏ははしれる舟を祈り戻し、武藏坊辨慶は大物の浦にて知盛の幽靈をいのり退く。こよひ北風を祈り出して見せ申さんやとをこがましく打出るに、堂の間にのり居し男、年の頃四十許にて鼠色の旅合羽を著たるが、長き刀のちり打はらひ、是は谷山の安行の鍛ひたる一腰也。むかし海上を過る人の難風に逢ける頃、安行が作のかたなにて打入浪をはらひしに、忽ち波風靜りしかば、其奇特より波の平の行安といふ名を得しとかや。今此刀を所持致せば、いかなる逆浪起るとも、人々御氣遣あるべからずと同じくたはぶれ出たれば、余もこと〲しくこわづくりし

推て—原本押てに作る

霧島山—始艮郡に屬し隅日の國界

に出來る故に、其氣象もかはらざるなり。琉球は南方へ寄たる國にて、雪氷の類もなき國とも云ふべし。されば熱氣はよく物を柔らかにする理にて、其氣象までも和らか也。紅毛は大に北へよりたる國故に、夏なき國ともいふべし。寒はよく物をかたむる理にて、其氣象も強きに過たり。されば東西は數千萬里隔てたれども、寒暖の氣たがふことなければ、萬物大方同じやうに生じ、南北は四五百里以上より千里も違へば氣候大きに異なりて、天地陰陽の蒸かげん格別なるゆゑ、萬物皆其樣子違ひて、人の氣象も夫に應じて異なりと見えたり。纔に一二百里の違ある日本の地の內にても、南國と北國とは草木も格別にて、人の心もやゝ異なり。まして況や、世界の廣さにて、大に千萬里を隔たるをや。此理を推て見る時は、居ながらにして世界の氣象も產物も大抵は知るべし。

○劒の舞

霧島山の歸路、大隅の國新川といふ所より便船ありとて、すぐに乘り移りしが、其夜は風なく、殊に潮引て船出がたしとて、潮みち風出るを待居たり。船中二十五人の乘合に

召使—原本召遣に作る

考へおふせざる事は、其子に繼て考へ、其子にして考へ得ざるむづかしき工夫事は、又其孫にも讓り繼て、二代三代も考へて造り出すゆゑ、奇妙の道具をつくりはじむるなり。其人物をみるに、日本とは格別に異なり。其氣象も尖くして人におくれず。纔の人數にて數千里の大海を隔て萬國に渡海す。其召使黑スといふものあり。またマタロスといふものも有。是は外國の人のよしなるが、阿蘭陀人召使の爲に、此もの共を一生買切にて抱へ來れるなり。よく水に入、又よく帆柱に登る。成程世にいふごとく總身黑し。然れども漆を塗たる如くには非ず。すべて異國の人をみるに、唐土の人は衣服言語違たる計にて、唯情と其趣は日本に少しも替る事なし。もし此方の衣服を著せ、此方の言葉を習はしめば、此方の國に打交へたりとも分つべからず。琉球は衣服も日本に似、詞も能通ずるなり。然れども其性溫柔に過て、日本の人には似も寄ず。阿蘭陀は剛強にて少しも溫和の風みえず、立まじはれば日本の人は殊にぬるきやうに見ゆ。其違を案ずれば、土地寒暖の氣によりて其生ずるものおの〱差別ありと見たり。唐土は北極星地を出ること三十五六度の國にして、日本に同じく、四季の氣備はれば、唐土日本ともに人物鳥獸草木までも皆同じ蒸加減

彼紅毛國は、日本へ通ずる國の中にて、第一に遠き國なり、行程一萬里の餘にして、西北の方に當れり。日本へわたり來る彼國の頭役のものをカピタンといふ。今まで居たりしカピタン、其名をイサアテツシンキといふを、ヘンテレキカスフルロンヘルゲといふカピタン、今年交代して來れり。彼國の人唯肉食を專にして、五穀を食せず、蕎麥の粉を少しづゝ食す。五穀生ぜざる故なるべし。夫故にや壽命も日本とは短く、四五十位を老年と云。新にものをしる事を第一の手柄とす。其故に天文などにても、右のごとく道具を作りて、現在に見屆、終には意に通じて萬國に勝れたり。地理もまた舟を至極丈夫につくり、大海にのり出て、世界中を廻りて、現在に世界殘らず見屆たり。故に其委しき事又萬國に勝れたり。余も長崎にて、阿蘭陀持來りし萬國の圖をみるに、此あたりにて持はやす板行の圖とは格別にして、萬國ともに至て委しき事なり。いかゞして圖を作り得たるものにやいぶかし。東西は天地を一めぐりして、東より出船して西より歸國せりといふ。唯南北のはては、寒暑の氣格別にして命保ちがたきゆゑに、至りみる事叶はず。夫ゆゑ南極星の下と、北極星の下の國とは、圖を略せり。又彼國にて細工ごとを工夫するに、其身一生にて

三ツ引の紋―三箇の横線を引きたる紋模樣

信ぜざる事なれども、現在見る人ありといへば餘儀なし。かゝるうへは、又此眼鏡の及ばざる細密の所に世界をなして住もの有やしるべからず。されば細密なる事には、いかばかりといふかぎりもあらず。此理を押せば、また大なることにも限あるべからず。此人の住る一天地、一滴の水の如くにして、斯る天地幾萬億重なり居て、又その外より蟲眼鏡を以てみるもの有べからずともいひがたし。されば此肉眼のおよばざる所を論ずる時は、又此肉身の智惠のはかりしる所にあらざるべし。然るに蠻人道具を造り出して、天より此身に受得たる分量の外にいたる、誠に奇妙といふべし。又望遠鏡とて、日月星辰迄力の屆く遠眼鏡ありて、日月の眞象を見分ち、星も太白星をみれば、月の如く盈虧あり、木星をみれば、三ツ引の紋の如く横に帶あり、土星をみれば斜に輪まとひて、星の形長くみゆ。其外銀河の白き所をみれば、小き星夥敷聚りたるにて、其小星よくわかりて數へつべし。近き頃泉州の人岩橋善兵衞此望遠鏡を作り出して、阿蘭陀渡の望遠鏡よりもよくみゆ。余が家にも所持す。又隣日鏡とて高塀を打越して隣をみる眼鏡あり。又暗夜に遠方をみる眼鏡あり。猶この外にも種々の奇器、人の耳目を驚かすもの年々にわたり來れり。まのあたりみざる人には、語りても信じがたきこと也。

エレキテイル―Electricity の誤

電氣

曲彔―原本曲錄に作る椅子の一種也

蟲眼鏡―原本虫目鏡に作る、顯微鏡

天眼―肉眼を超越して事物を洞見する所謂神通眼

細工の微妙なる事は、世界の内阿蘭陀に勝る國なし。二三十年以前エレキテイルといふ器物を日本にわたす。是人の身より火をとる道具なりといふ。大さ三尺ばかりの箱の中に車を仕かけ、其箱の中より鐵のくさりを出し、長さ二三間にして曲彔の手につなぎ、人を其曲彔にのらせ、置箱の車をめぐらせば、其氣くさりを傳うて曲彔にいたり、其人に應ず。紙をこまかに切て其人の手に近づくれば、其紙おのれと動き舞ふ。又外の人の手を此人の手に近づくれば、油のはしるがごとき音ありて、火出る心地す。其奇妙なる事まのあたり見るにあらざれば信ずるものなし。又蟲眼鏡のいたりて細微なるは、わづか一滴の水を針の先に附て見るに、清淨水の中に種々異形異類の蟲ありて、いまだ世界に見ざる處の生類遊行したり。又潮を見れば、六角成物の集りたるなり。油は丸きもののあつまりたるなり。水は三角なるものの集りたるなり。其外、酒酢などには色々夥敷蟲あり。一たび是を見る時は、酒酢水とも、いづれも飲がたきほどにみゆるなり。誠に華嚴經の中にや佛の水をこして飲べしと仰出されしかど、天眼にてみる時は、いかほど漉といへどもかぎりなき故に、唯俗眼の及ぶばかりをこし去てのめよとみえし。是らの蟲眼鏡は佛の天眼にもかへつべし。また一滴の清淨水に種々の生類有べしとは、誰人も

足—船に積みたる貨物を陸に上ぐる人夫

穢を—原本穢のをに作る

風儀—原本風義に作る

けるに、折節余風の心地なりしかば、駕籠の戸障子さしかためてありしを、小あげの人足見て、最早約束は致しつれども人足には出申まじといふ。駕籠のもの怒りて、いかなれば今に至りて變改はするぞといふに、彼もの答へて、御駕籠の内は疱瘡の御人とこそ見ゆれといふ。駕籠の者笑うて、是は御醫者なり、疱瘡人には非ず。疑しくば戸を明て見すべしといへば、疱瘡を療治に行給ひたるにはあらずやといふ。余もをかしくて、戸をひらき立出て、近き頃疱瘡はみたる事もなしといひけるにぞ、漸々安心して小あげの人足には出たり。斯の如く忌きらへば、妻子といへども山中へ送る事空言にもあらじと覺えし。また安藝國嚴島など、神地なる故、穢を殊更忌なり。此島の女産に臨む時は、急に舟に乘て藝州の地方に送り、嚴島にてむかしより産する事なし。少し腹痛むや否や、舟に乘する事なり。輕き時は濱端にても安産するもあり、又船中にて産するもあり。かく産前に動ずる事危きことなれども、格別の難産もなく、又産後の病も起らず。所々の風儀とて、をかしき事どもなり。

○奇器

疱瘡はやらせし事―原本疱瘡はやらし候事に作る

小あげの人

多く煮て、介抱の叮嚀なりし様にいふことなり。貧しき家も、五合一升の粥を毎日煮ざるはなし。斯のごとく、無理に强て小兒に飲しむる故に、皆食滯或は嘔吐の患起りて、疱瘡の外の病を引出す事あり。されども土地の習はしなれば、醫者の詞を用ひず。是又他國に無き珍敷事なり。彼島方には、今に至り一向に疱瘡無き地もありとぞ。薩摩大隅の邊鄙にも、近き世まではなかりしかど、他所へ出るもの年老て後も疱瘡する事ありて、老後疱瘡すれば殊に重く、多くは死す。是全く疱瘡無き憂なりとて、他所より疱瘡人を多く取よせ、疱瘡はやらせし事あり。其始ての時は大流行にて、老若皆一同に疱瘡して死するものもおびたゞしかりしが、其後は世間並に疱瘡行れて、今にては陸つゞきの所には疱瘡なき所もなしとなり。前は疱瘡の人たま〳〵あれば殊の外に忌嫌ひ、父子夫婦の間にても是を病時は必ず遠き野山に小屋をかけ、飲食を添て、其所に送り捨て、全快してみづから歸り來るまではおとづれもせずして置たりしを、近き世にいたりて、國の守より咎させ給ひ、世間並の介抱する事となりたりとかや。都近くても、熊野の山中など疱瘡を甚忌み恐て、若疱瘡するものあれば、山中へ別に小屋をかまへて送り出す事とぞ。余が通行せし時も、小雲鳥といへる峠のこなたにて、駕籠の者、小あげの人足をやとひ

恐るゝ―原本恐れろに作る

すわりて―原本すはりてに作る

取上婆―原本取上婆々に作る

○産婦

小琉球徳の島の邊は、婦人皆産すれば、其産屋の邊にて、一七日が間晝夜火を燒ことなり。家富る者は何百束燒るとて、薪を多く燒たるを手柄とす。貧しき者までも皆夫々に燒なり。夜も白晝の如し。其故に、其家は格別暖氣にて汗も出る程の事なり。上方などの産婦は、唯逆上する事のみを恐るゝ故、燒火をみる事などはこのまず。況や其ごとく晝夜夥敷燒て、火氣にせめられては、必ず穩なる産婦にても逆上の憂起るべし。上方にては忌べき事を、彼地にては却つて養生に成と思へり。むかしよりのならはしは不思議のものなり。元より邊國は腹帶といふ事たえてなし。椅子の中にすわりて、横寢せずといふ事もなき事なり。産後は心よく横に伏て氣血を納る事なり。邊土には醫者も取上婆もなけれども、皆安産して、難産は甚稀なり。又薩州のはし〴〵の風儀にて、小兒疱瘡する時に、初より終まで白粥をゆるく煑て、夥敷しひくはしむ。晝夜是を進めて其粥の汁ばかりにても飮しめ、其底の堅き處は、家内の人喰盡さゞれば干飯となし貯ふ。其干飯夥敷出來て、一人の疱瘡人あれば何斗といふ干飯出來るなり。家富るものは粥を

の太宗を始め王維楊貴妃などの作あれど何れも櫻桃の事也

詩客何ぞ是を愛せざらん。彼國の詩文に、桐花楝花の類の數にも入らぬものだにも、ことごと敷吟哦を費しぬ。唐土人も目なきものにはあらず、櫻あらば桃李のみなんぞ春の名に立ん。されば櫻は我國のみのものにして、唐土人はみる事を得ざるものなり。いろいろの證據を取て、彼國にも櫻ありといふは僻說といふべし。舜擧が畫のさくらも、此方より渡りゆきし櫻の圖によりて摸寫せしものにや。唯唐土人に見せたきものは紅葉さくらの二種なり。

大綱―原本大繩に作る

○綱引

薩州鹿兒島、八月十五日、太き腕の如き長さ半町一町にも及べる大綱を作り、大道の眞中に引渡し、小兒夥敷集りて左右に別れ、其綱を引合ふ事なり。後には夜の事なれば若きをのこ皆出て引く。其賑やかなる事祭の神輿のわたるが如し。是を綱引といふ。古代には上方にも有しと聞しが、今邊土にのみ殘れり。彼國は、すべて此十五夜には、家家多く門に出て三味線を引き、酒を酌て遊ぶ。甚賑やかなり。余も此時彼町見物し歩行て、夜更るまでたのしめり。

錢舜擧―元代初葉の畫家

王荊公―王安石の事、櫻の詩は唐

は唐土にての最上の品なるべし。然れども、唯詠に興ずるには、日本の楓遙に勝れり。我國のをこそ愛すべし。又或説に、日本には楓なし。されば日本にては唯紅葉、或は機樹、鷄冠木などと稱すべし、楓とは稱すべからずといへるも、僻說なり。日本にいふ處のものも楓の外なるものにはあらず。唯楓の同類異種なれば、紅葉を楓と稱して當らずとはいふべからず。又余が霧島山の奥に入し時、種々の奇樹異草數々見し中に、彼楓に甚よく似たるもの有りき。余元來本草物產の學に疎ければ、其當否はしらず。しばらくしるして後の博識者をまつ。

○唐畫の櫻

大隅國加治木といふ所に、曾木何某といふ士あり。此家の祖先の人軍中に手柄の事有て、其君より錢舜擧が畫ける櫻の圖を賜りて、今に曾木氏代々傳へて家の重寶とす。其花形艶美にして、今世にある櫻に異ならずといふ。然れば、唐土にも櫻花ありて、舜擧是を畫けるや。まことに奇代の珍物なり。按ずるに、唐土に櫻の沙汰ある事、宋の王荆公が詩なども見ゆれど、此國の櫻のやうにも思はれず。此國のごとき櫻あらば、代々の文人

西遊記續編卷之五

○楓樹

唐土の楓の事は、過し年唐土へ仰遣されて、三本渡れりとぞ。其中一本は枯て、今日本に唯二本のみ有りしになり。余も其樹の葉とて見し事のありけるが、大さ掌の如く、三ツ股にて、殊に厚し。實は楓球とて、栗のいがに似たり。秋ふかくなれば、其葉黃色に變ぜり。日本の紅葉とは大に異なり。日本の如く艶美なるものにはあらず。又頃日我友關谷氏、長崎の御藥園の楓樹の種なりとて、二本需得、携へ上りて、余が家園に植しに、葉の形は三ツまたにて、初のものに似たれど、其木の小き故にや、葉薄くして小し。唯三ツ股といふばかりなり。此國の紅葉に甚だ相似たり。其實をとへば、此國の如く、蜻蛉の小なるがごとしといふ。されば球にはあらず。たゞ此國の紅葉と同類異種といふべし。されど關谷氏が携へ上りしも、唐土より將來の木に違ふ事は非ず。是を以て考れば、日本の紅葉にも異種數百種あるが如く、彼國にてもいろ〳〵の楓あるべし。前に召れし

携へ上りー原本携へ登りに作る

瓊海―廣東省瓊州府瓊山縣の沿海をいふ

り西は潮西に行、東は東に落。これは入海なればさもあるべけれど、大洋の中にても、潮の東西に流れ、南北に分るゝ事あり。阿蘭陀人の舟路の圖に委敷圖したり。日本近邊にても、伊豆の沖百三四十里南へ出て無人島へわたる海に、黒潮といふ所ありて、數十里が間大河のごとく唯一筋水逆巻て流るゝ所有となり。又東南のかた、安房上總の沖に遠く出れば、潮唯東の方へのみ落て、船なども夫よりひがしへ落されては又かへることなしと。これらは理を以ては知りがたき事なり。又唐土瓊海の潮は、十五日より前は東へ落、十五日の後は西へ流れて、一月に唯東西へ流るゝのみにて、晝夜のさし引なしと也。奇の又奇なることなり。

歩行しがたく、洪水のごとし。國主よりも色々堤などを築て潮の防あれども、全體の海高く成たる事なれば、いかんともしがたし。大隅の國加治木の近邊の濱手の村は、潮に引取られたる所もあり、又潮にたへかねて、一村引はらひ、高き地面に移り住る村もあり。かゝる大海の水の、五尺も一丈も全體の高くなれる事、いかなる故ともしる人なし。まことにさくら島の燒し事は大變なりしかども、海の埋れて水のたかくなる理もあるまじ。七ツの新島を出現せしかども、大海の中にとりては增減するほどの事にはあらじ。彼邊の人の一說には、櫻島の峯やけて土中より夥敷土砂を吹出しぬれば、薩摩大隅二ヶ國の地中の土砂を吹上げて、此二國の土地低く成りたる故に、潮高く上り來るなりといふ。これもあまり廣大なる說なり。いづれ此入海ばかりの水、櫻島燒の後よりたかく成たるは奇異のことなり。

潮の滿干は天地の脈動なり。然れどもまた土地によりて少しづゝの違あり。北海の潮はさし引わづかに二三寸の間なり。南海は滿干多く、ことに藝州嚴島、備後の三原、攝州住吉、伊勢の唐洲などは、潮の引こと二丈三丈にも及ぶなり。都て南海の南面の海は滿干高し。又土地の樣子によりて潮の流れ方違ふなり。備後の鞆の邊よ

難儀―原本難義に作る

の人々には皆我那須の名字を譲りあたへ、此ものらは己が家族也と披露し、其身も年久敷此あたりに留まり住けり。其後は鎌倉よりも吟味なく、平家の人々も恙なく一生を過し給ふ。其後平家の人の子孫も連綿として相連れり。那須の子孫も繁茂して、二家ともに那須氏を名乘來れり。此地元來地名もなき深山を、此人々はじめて人住地となせり。されば其人々の名字を稱して、其儘に那須といふと也。此那須に隣りて、齋谷、椎葉山などいふ所有。皆むかしの落人の隱家の跡なりとぞ。

○海水增減

鹿兒島の海は入うみなり。西の岸は薩摩、東の岸は大隅なり。南北凡二十里餘、東西十三里にあまれり。此海の眞中にさくら島有。廻り七里なり。此海南海の事なれば、潮の滿干常に多し。然るに、安永年中さくら島大燒の以後、此海の水五六尺高くなれり。所によりては一丈餘も高し。鹿兒島の城下も、下町築町といふ邊は、月の十五六日潮の高く滿る時には、近年海水町に溢れ上り、甚難儀に及べり。余が旅宿せし小山幸右衛門宅などの庭の中に潮みち來り、常々難儀せり。十四五日の頃潮高ければ、町中高下駄にても

入部―入國といふに同じ

○那須

前に出せる肥後國五ケ村の南に連りて、那須といふ所有。これも同じく平家の人々のかくれ家にて、五ケ村同樣の所也。熊本よりは甚遠く、求麻よりは近し。凡十八九里廿里ばかりも有べしやと、城下の人のいへり。求麻の城下よりは東北の方に當る。余が求麻に有し時、彼家中に那須何某といふ人有、殊に親しく交りしが、其人の先祖も此那須の名家たりしに、五百年前此地の君の御祖先求麻に御入部ありしより、那須も出て、御客分の列に成りて、久敷城下にありしが、數代御厚恩を蒙りしにより、終に其家臣に入らん事を願ひて、今の何某にいたるまで數十代恙なく仕へ來るなり。夫故平家より相傳の寶劔なども今に所持あり。此地を那須と名附し由來は、平家赤間ケ關沒落の後、山中にかくれ住るより、鎌倉にもれ聞えしかば、頼朝卿より那須與市宗高が舍弟何某といふに命じ給ひ、平家の與黨追伐の爲に肥後に下し給ふ。那須某此地に下り吟味せしかど、平家の人々いと幽なる體にて、再び事を起すべき氣色もあらざれば、那須も哀の心生じ、數ならぬ雜人の首少々切上せて、平家の餘類殘らず追伐し了ぬと鎌倉へは披露し、平家

滇中―滇國の中、滇は今の雲南地方をいへど其邊一帶を漠然と呼べる也、緬甸を其中に在りとしたるも此故なるべし

津―安濃郡今の津市也

石ありて、庭の飛石などにして雪霜の積らざりし事ありしと云を聞傳へ侍る。又唐土の滇中に緬甸と云所ありて、それより緬鈴といふ物を出す。其大さ龍眼肉程ありて、人の肌の溫氣を得れば自然と動きて止ず。彼地の淫婦これを以て樂しみとす。近き年京都にも何方よりか此緬鈴賣物に出て、あなたこなた取はやし、おのれと動く名玉なりとて如意寶珠といひふらし、おそれ多くも王公貴人の御手にまでふれさせ給ひてめでさせ給ひける。誰一人緬鈴といふものにて、不淨のものとは知らざりし。其果はいづかたへ買取けるや、行方もしらずなりぬ。余も唯其噂のみを聞て、其物を見ざりき。彼龍玉もかゝるたぐひにてあらざりしや。其後伊勢國津の城下に遊びし時、余も緬鈴を見たり。大さ二三十匁の鐵砲の玉のごとく、重さ纔に七八匁、唐金にて作りたるものゝやうにて、内に鳴り響くものあり。掌中に握りて少し動かせば、其玉大に響きうごきて、掌をふるはす。蠻夷の房中陰具奇妙の細工なり。此玉、津より五里ばかり西の方小倭鄕佐田村彌兵衞といふ百姓の家に數百年持傳へて、鳴玉と名附け、不淨の物なる事をしらず、無上の寶玉のやうに珍重せり。

通詞、通事ーおなじ、今いふ通辯也

やごとなきーやんごとなき、貴き

はず。斯無年貢の地を與へて、此風俗を立置るゝ事、薩摩の廣きをしるべし。薩摩の朝鮮通詞は此村の人つとむ。當村にて平生は大方和語に馴たりといへども、又よく朝鮮の言葉を用ふるものありて、通事役をつとむる也。都て薩摩は異國の船毎度漂著する故、諸異國の通詞役人有。此村の人の朝鮮通詞を勤るは尤の事なり。

○龍の玉

薩州にて、近き年龍玉といふもの有。鷄卵ばかりの大さにて、常に少しあたゝかにて、手の内に握れば、いかなる寒中といへども自然に暖氣有て、手爐の替になれるとぞ。龍蛇は寒氣を恐るゝもの故、常に此玉を掌中に握るといふ。此故に繪に書る龍には、かならず其手に玉を握らしむ。希代の珍物ゆゑに、彼國のやごとなき人へ獻ぜりとぞ。又一ッ城下の寺の什物として有となり。余彼地に有し日、親しく交りし人、此玉を所持する寺主と懇意成故に、かねて噂して、余をも同道して彼寺に行て一見させんといひしに、彼人ことに繁用なる人にて、終に其事果さざりぬ。今にして思へば殘多き事なり。余寡聞にして、いまだ斯の如き奇玉世にある事を聞ず。誠に石には暖石とてあたゝかなる

見へずとあれど誤なるべしとて改めたり

うく〳〵黑燒の中の上品の小猪口を得たり。これも予が遠國もの故に、內密にて得させたる也。携へ歸りて今に祕藏す。其外は下品にて質厚く、色も薄黑く、烈火にかけても破るゝことなし。故に下品は土瓶などに多く造り出す。これは夥敷賣買して、薩隅日の三州は大方民間にも此土瓶を用ふ。猶大坂までもとり來りて、薩摩燒と稱して重寶とす。薩摩にてはノシロコ燒のチョカといふ。チョカとは茶家の心にて、土瓶の事なり。薩摩の方言なり。土瓶といひては知ものなし。扨夫より一鄉中所々方々見物し終りて歸路に赴く。都て此ノシロコの風俗、皆惣髮にて、額の上に集めてゆひたり。京の女の櫛卷などいふ髮の如し。禮儀の時は頭にまんきんといふものをいたゞく。馬の尾にて網のごとく組て、底なく、耳の上に錫或は眞鍮にて木の葉の形の金物を左右に附。巾は額より後の方へ廻し、當るもの也。高き巾有、低き巾あり。高きは高幔巾といふ、上官也。衣服は花色の絹にて袖廣く、法衣のごとく、上裾分れたり。先裳を著て、又衣を著す。上には桃色の細き丸き帶を結ぶ。下著は日本流の服なり。身幅袖はゞとも廣く、帶は多く前結なり。女の髮は、禮儀の時は髻を三ツに分て、平生はくし卷のごとくなり。斯のごとくの風俗にて、馬を追ひ耕すを見るに、實に此身唐土に有心地して、更に日本の地とは思

人別帳―戸籍簿

見ず―原本

唯何となく折節に附ては故郷床しきやうに思ひ出候ひて、今にても歸國の事ゆるし給ふほどならば、厚恩を忘れたるには非ず候へども、歸國致し度心地すといへるにぞ、余も哀とぞおもひし。扨又庄屋をつとめ給へば、村の人別帳有べければ、其名前ども見せ給へと望みければ、則帳面取出し見す。庄屋五人組を初め、一郷中みな金慶山白孝基などいへる名なり。いとめづらしく、くりかへしみる。其中に解しがたき名も多し。土民の事なれば、文盲なるゆゑなるべし。兎角して黄昏にも及びければ、案内のもの來りて、客屋といふに導き行。客屋の主は朴養眞といふ。其子を朴養安といふ。妻をロレンといふ、文字はなしとなり。誠に土民にて人品質朴なり。其餘五人組などといひて、伸守吟といふもの挨拶の爲に旅宿に來る。暫留めてものがたりす。珍敷事ども數々有。翌日案内のもの來りて、高麗燒の細工場、並に竈を見物す。仰山なる事どもなり。此村半分は皆燒物師なり。朝鮮より傳へ來りし法を以て燒故に、白燒などは實に高麗渡りの如くにて、誠に見事なり。日本にて燒たるものとは見えず。夫故に上品の燒物は太守よりの御用ものばかりにて、賣買を嚴敷禁ぜらる。これによりて平人の手に入事なく、他國にてももてはやせることを見ず。予も案内者に賴みて求めけれども、白燒は得る事あたはず、や

故郷忘じ難し―狂言などにも見えて古き諺也禮記に吁人而忍忘故郷耶など云へるもの〻飜案か

也。殊に伸といふは唐土にもうけ給はり及ばず、朝鮮元來の御姓にやといへば、其事にて候。これは日本にわたりて後に改候也。元來は申と申候を、先祖のもの此國に渡り上りし頃、太守へ御目見えの時、披露の役人衆猿と某を披露申されぬ。其場にて爭ふべきにあらざれば、其儘に拜禮し終りぬ。是は申といふ字十二支の猿とよむ字なれば、帳面の名を斯よみ誤りて披露あられし也。其明年の年始拜禮の時も、披露の役人また猿なにがしと披露あり。跡にて某が姓は申とよみ申也と斷り置しかど、其役人替れば、また明年も猿と披露あり。とかく人の聞えもあしければ、申とよめざるやうに、人扁を附て伸の字に改めぬるなりと答ふ。其由來も珍敷、手を打て笑ふ。さて日本へ渡り給ひてより何代になり給ふにやと問へば、既に五代に成れり。此村中にも、長壽にて續きたりしは四代なるもあり。又はやく替れる家は八代にも及べるありといふ。然らば、朝鮮は古鄕ながらにも、數代を經給へば、彼地の事は思ひも出し給ふまじといへば、故鄕忘じがたしとは誰人のいひ置る事にや、唯今にてはもはや二百年にも近く、此國の厚恩を蒙り、詞までもいつしか習ひて、此國の人にことならず、衣類と髮とのみ朝鮮の風俗にて、外には彼地の風儀も殘り申さず、絕て消息も承らざる事に候へば、打忘るべきことに候へども、

ノシロコ—苗代川と書く日置郡下伊集院村の大字にて別に壺屋の名あり今も陶工甚だ多しと也

り聚り來り、何の譯といふ事終にしれず。怪しかりし事也と、今泉の人余にかたられし。

○高麗の子孫

薩州鹿兒島城下より七里西の方ノシロコといふ所は、一郷皆高麗人なり。往昔太閤秀吉朝鮮國御征伐の時、此國の先君彼國の一郷の男女老若とりことなして歸り給ひ、薩州にて彼朝鮮のものどもに一郷の土地を賜ひ、永く此國に住せしめ給ふ。今に至り、其子孫打つゞき、朝鮮の風俗の儘にして、衣服言語も皆朝鮮人にて、日を追て繁茂し、數百家となれり。初とらはれ來りし姓氏十七氏、所謂、伸、李、朴、卞、林、鄭、車、姜、陳、崔、盧、沈、金、白、丁、何、朱なり。余久敷其地に遊ばん事を心がけ居たりしが、元來異國の種類、其上旅宿すべき定の宿もなければ、便なくて行んこともあしかるべしと人々の諫によりて、遊ぶ折もがなと見合せ有しに、程經て、ノシロコの司する人にゆかり出來て、夫より添狀を乞得て彼地にいたりぬ、頭よりの賓客なれば、ノシロコの庄屋禮儀を正しく出迎ひたり。則庄屋の家に入り、酒飯等のもてなしを受て、初て對面して名をとへば、シンボウチユンと答ふ。其文字をとへば伸倖屯と書といふ。さても珍敷御名

行て見ざりつるは今に殘多き事なり。其他尾國には半田の瀧とて大なる瀧も有といふ。又鏡の池といふありて、池の中に時々鏡みゆるよし。二ツ見ゆるときも有り、三ツ見ゆる時もあり。又日によりて太刀の見ゆるときもありとぞ。神變不思議なりといひ傳ふ。又此地の大庄屋は源の賴光の子孫なりとて、賴光大江山入の時の笈を所持せらるゝよしなり。肥後の人々これらの事を語りしに、一しほに見おとせし事こそ殘多けれ。

今泉—揖宿郡今和泉をいふ

○豆腐怪

薩州今泉といふ所に、或朝此辻彼門いづれの町々にも豆腐夥敷有て、或は十丁二十丁づゝうづ高く街道に捨たり。其數凡數百丁の豆腐なり。始のほどは人々我門にのみと思ひて、いかなるものゝいたづら事なせしなどつぶやきしが、後にはこゝにもかしこにもと言騷ぐより、けしからぬ事なりとあやしみいぶかりて、狐狸の人を迷はすにやと忌怖れて手をふるゝ人もなかりしが、晝になり、暮に成ても、何事も無き豆腐にて、外に疑はしきこともなかりしかば、家々に取入て打喰ひけれど、何のたゝりもあらざりし。其後近鄕の豆腐屋などもたづね試しに、其日格別に多く賣たる家もなし。何れの所よ

あれば、又國の沈み入る事も有べし。何事も小智にては計りしるべからず。

○肥後の毒水

チクニー尾國又小國に作る阿蘇郡に在り毒水は南小國村の東に在りて寒地獄と稱し硫黄泉也

肥後の國チクニといふ所は深山にて、豐後に隣る地なりといふ。いろ〳〵珍敷事も多しときけば、余も其地に遊ばんことを欲せしかども、道の都合あしくてやみぬ。村井氏の語られしは、此尾國の近きかたはらに毒水あり。少き谷川の流なり。諸の禽獸此流を飲ば卽死す。鳥獸の枯骨數多此傍に有とぞ。然るに人には曾て毒せず。此ながれの下に村里も有て、人皆汲て用ふれども、終に毒にあたれる者なし。犬もまた死せずとぞ。都て常に鹽氣のものを喰ものには、此水の毒あたらず。村井氏も自ら行て試みられしに、何の奇妙もなかりしとぞ、いと珍敷事なり。然れども知る人稀なり。那須野の殺生石などは殊に名高きに、斯の如く世に顯るゝと顯はれざるとの幸不幸は有けり。高野山の玉川の水は世に毒水といへども、これは實の毒水にてはなきといふ。其外、余も諸國に遊びしかども、未だ毒ある水を見ず。都て毒は皆極熱のものゆゑに、たとへ何の毒に當れるにも、冷水を呑ば必ず解す。其故に、冷水の中に毒の生ずる事はいたつて珍敷事なり。

上り來れるー原本登り來れるに作る、かゝる類多し

養老二年云云ー地理纂考に其訛傳なる事を辨じたり

近き頃は鳥多く島に附けり。鳥附けば草生ず。草生ずれば樹木も追々に生ず。樹木生ずれば水湧く。水あれば人民の居住も出來て、耕作の事もなれるといひし。其後京に歸り、年過て彼國の人の上り來れるに聞けば、近年は樹木も多く生ひ茂り、潔白の水湧て、人も住るゝやうに成りぬれば、隅州より新島に宮居を建て宮守を置、參詣の人もありといへり。いと早きもの也。此大地の中に國土を生ぜし事をまのあたり見たることも、不思議あまりあり。此日本國なども、神代のむかし湧出たるなどいふ物がたりは、唯うはのそらに聞てまことゝも覺えず有けるが、かゝる事をまのあたりみれば、空言にてはあらざりしと思はる。もと櫻島も、養老二年此海大にもえて天地晦冥し、一夜の間に七里餘廻りの高山湧出て、さくら島と名附し事とぞ。櫻島は比叡山よりも遙に高く大なるに、人民多く、田畑豐饒にして繁昌の島なり。又櫻島のほかに二ツの小島あり。沖小島、小波島と名附く。この島は文治年中に出來たりといひ傳ふ。これらの事唐土人などに聞しめば、空ごとにて唯怪談のやうに思ひ信ずべからざる事なれど、廣く世界の事を聞けば、阿蘭陀より日本へ來る海中には、日本より廣き一大國過し年海中にくぼみ入りて、今にては唯其國にありし高山の巓ばかり所々海面に出沒せりといふ。新に島の生ずることも

ひ枝の皮なるを桂枝といふ也

巴豆—木は灌木也、實の殼内に二三子ありその仁を藥用とし又油を採る

一里七合—一里と十分の七

土より來るものも上品少きゆゑ、和産の桂を多く取用ふ。藥種屋にて薩摩桂といふもの、よほどよく見ゆ。誠に薩摩、土佐抔は、極南方なれば、桂も生ずべし。又近き頃熊野の雄鷲といふ所の山に、桂數千株を植附たりといふ。雄鷲など別して暖氣の地なれば、繁茂疑有べからず。數十年の後には何卒して和産の桂多きやうにあらせたきものなり。熊野などに植しことは國益はもとより、海内のためといふべし。巴豆、檳榔子の類も、暖國をえらみて植たきものなり。

○出來島

過し年薩州櫻島大燒の後、其海中時々沸騰して、海水煮えあがり、海面に火もえ出て、大海の水皆熱湯と成り、海中の魚類大小の差別なく皆死せり。其海の沸騰する勢に、百尋に餘れる海底より土砂沸上り、新に七ツの島を生ぜり。第一に大なるは一里七合廻り、其外一里半、或は一里など、大小色々あり。其後海中糞えしづまりて、彼島堅まり、國土と成れり。余が彼地に遊びし頃は、彼島出來てやうやう四五年にもや成らん。ほどちかき事なれば、島の上に草木もなく、唯白砂の島なりき。其あたりの人の物語れるは、

白の廬山瀑布の詩に日照香爐生紫烟遙看瀑布掛長川飛流直下三千尺疑是銀河落九天といへるが有り

桂—熱帶產の大木にして其根幹の皮の厚き處を取りたるをば桂とい

にさも有べきやと思はる。又近き頃、備後の國より申こせしは、彼國三次郡布野の西三里ばかりに、常淸が瀧一名を作木の瀧といへる有て、高四十二丈といふ。又同國奴可郡西城の北三里ばかりに尺田といふ所有。其山に熊野の瀧一名那智のたきといふは高六十餘丈有りといふ。又同國惠蘇郡南村に南村の瀧とて高十丈高八丈の瀧二ツありといふ。又同國門平村に高六十丈の瀧有りと也。此事慥なる便に申來れども、余いまだ見ざれば知らず。一國の中にかくの如く瀧多くある事おほくは聞ざる事なり。まのあたり見たりせば、實にかくありなんや、いかゞあらん。奧州會津の山奧に大なる瀧多く有りといひし人もあり。是は極深山のことなれば、人知らぬ瀧も有りやせん。されど何國にもあれ、那智より大ならば、世に聞えずや有べきと思はる。

○桂林

桂は藥物の上品にて、肉桂、桂枝、桂心、桂實などとて、唐土より渡るものなり。日本にはなし。其種類あれども香氣薄く、辛み少く、藥用に入がたし。唐土にも南方暖國ならでは生じがたきゆゑに、交趾、東京などいふ地より出るを上品とす。然るに近年は唐

廬山—江西省に在り李

もあり。但し遠方よりは、此石壁樹木の梢に出て全く見ゆれども、近く寄りて、瀧みるあたりにては、兩方に程よく大木の杉多く有りて、石壁の横廣くはみえず。空はまことに天より落る心地すれども、水の幅は殊の外に狹く、大抵幅一間ばかりにみゆれども、廣く高き所なれば、實は二三間もあるべし。高さは直下五六十間に見ゆ。上の方暫は水筋通りてみゆれども、それより下にては、石面に水碎け、色白く、霧の如くに散りて、其見事いひつくすべからず。下には大石多く有りて、瀧壺といふべき淵はなし。其音も格別甚しからず。瀧近くよりても、神氣の遠々敷なるやうにはあらず。文覺上人の荒行も虚言にはあらじと見ゆ。皆人の高さは二百間幅は三十間などいふは、ぎやうさんに實をうしなうていへるなるべし。此瀧のみに限らず、都てのもの賞美に過て實を失ふこと多しとぞ覺ゆ。されど余も京の大佛を大なりと聞居、越中の立山を高しと聞居たりしが、初て大佛を拜し、立山を望みたりし時に、さのみ大なりとも高しとも思はざりしに、日をへて見るたびに大に成り高く成しが如く、此瀧もいく度も見ば、高くも廣くもなるべきにや。瀧の幅の廣きばかりを論ぜば、大隅國の瀧などは是よりも廣けれども、那智は全體の奇にして美なる事言語に絶せり。唐土の廬山の瀧よりも遙に勝れりと云傳ふるも、實

西遊記續編卷之四

たゝずまひ
—趣、樣子

○那智の瀑布

余年久敷那智山の瀧を見まほしく心がけ居たりしが、漸々近き頃彼地に遊びて、心よく一見せり。誠に天下無雙、目を驚す瀧なり。其瀧のあたり山のたゝずまひより、堂宇の設、樹木の生ひやうまで、他山には勝れて、神仙の境界といふべし。此瀧の事は幼き時より聞居て、かうやうにも有べしと思ひしには似もよらず、格別に異なり。初に思ひ居しは、ふところのやうに山の抱へたる所に、巖石峨々と聳え、其中に大河を切落したるやうに水逆まき落て、水煙一二町にも飛ちり、雨の降如く、一山鳴響き、其音遠く三十町五十町の所迄も聞ゆべし。其瀧の全體の趣を譬へ云はゞ、力士の荒れたるが如く怖しくて、目留て久敷は見事もなるまじ。予が如き虛弱の者は、神氣も遠々敷なるべしと思ひ居しに、左はなくて、瀧の全體の趣をたとへいはゞ、美人の薄衣を著て立たる如きもの也。瀧の落る所は、一枚の岩にて壁を作りたるが如き所なり。其石壁の横の廣さ五町も十町

備前物—備前の刀工の作をいふ

相州物—相摸の刀工の作をいふ

彼石にて鍛ふ故にや、又は水土の故にや、又は傳來の良法有るゆゑにや、備前物は打見るより他國の作に異りて、別段に見ゆ。今の祐定なども、初は格別の聞えも無りしが、後に薩州の奥の元平に從ひ學び、伊勢守祐平と銘して、殊に見事にて世上に珍重す。己が家の名高きを藝道の爲に屈して、二三百里の遠路をいとはず、師に從ひて上達を求む。誠に殊勝の志なり。近來丹波守吉道も伊豫に行て國輝に學べりと云。誠に修行はかくのごとく有たきものなり。己が家にのみ誇、拙き才藝を以て下問を恥、一生下手の名を取るは愚の至也。醫たる者など殊に心得べき事也。近來此外にも京以西の鍛冶夥敷聞ゆるに、余が遊びし道筋にては、薩摩の正良、同國元平、大隅の貞宗、肥前の忠義、伊豫の國輝、播磨の氏繁など數ふるにいとまあらず。就中、正良、元平など、世上に名高し。正良は俗稱を伊知地平角といふ。余も彼國にて親しく交り、別るゝ時小刀を打て贈らる。相州物の風あり。又近年因幡の壽格上手の聞えありて、東武に選ばる。都て新刀は慥にて實用に勝れりとて、近き頃は人々別て珍重するより、自然に價も貴く成り、鍛も念を入るゝより、國々上手多く出る事にこそ。

くりやうを見るに、他の國とは違ひて多くは眞直に作りたり。元來山國なれば、直には附がたき道を、山に登り、谷に下りて、無理に近道に作りなせり。余かねて聞居しは、日本の道路は其始大かた行基菩薩の差圖なりしといふ事なりしが、いづれの國の道も、山あれば其裾を通りまはりて谷をつたひ行き、なるたけは山地を登り下らず、平坦の所をかよふ樣に附たるもの也。唯藝州に成ては、まはり道なく、大方直に行やうに、山谷も厭はず登り下りて道を附たり。他の國の道をひらく心とは格別のやうにみゆれば、これかならず平相國淸盛の改め給ひしか、又ちかき頃の福島正則か、何れ豪雄の氣象の人のなす事なるべしとおもひしが、其後此隱戸の瀨戸の事を聞て、彼陸地も平相國の手なるべしと思ひし。

長船—邑久郡今の行幸村の内に在り

○鍛冶祐定

余諸國に遊ぶに、何に寄ず才藝勝たる方には、必尋て其論說を聞、醫術の心得にせるに、備前にては名高き長船の里に入りて、長光、祐定などいふ鍛冶の家を問ふ。其刀劍を鍛ふを見るに、他國の鍛冶に異りて、石を以て鐵を鍛ふ。何れの家も皆繁昌して賑なり。

○隱戸の瀨戸

安藝の國隱戸の瀨戸といふ海あり。此所は國の南の山遙に突出て、六七里海上に出たり。其山の陸地に連る所甚だ細ければ、海へ出たる所程を、山をほり穿て切通して、舟のかよふ海路を新に造りしなり。其所人力を以て切明たりし事なれば、兩方の岸せまり居て、其間の潮行甚急にして、舟人の恐るゝ所なり。何人の切通せし事にやと尋るに、むかし平清盛安藝守にて此國に居給ひし時、舟にて毎度往來に此所に至り、出崎の山にさへられて、遙の南の方へ廻りて十里餘も海路遠くなれば、此所を通り給ふ度毎にいかりて、此出崎の山を切通し、舟を眞直に遣べしと下知し給ふ。人皆其事は人力の及ぶ所にあらざるべしと恐れしかども、淸盛の下知やみがたくて、數萬人の力を以て、終に陸路に連る所を斷切て、舟の通ふ海を造りなせり。其後は數百年の後も、其恩をかうむりて、上り下りの舟路近く行事を得るなりとぞ。余兵庫に遊びし時、築島を見て、淸盛の志の大にして豪邁なる事を感じ驚きしが、又此事を聞て、一世に威をふるひ給ひしも其故なきにあらざりしと、其世の事までを思ひやりし。又藝州の陸地を通りし時、其大道のつ

隱戸の瀨戸―安藝灘より吳灣に通ずる水道をいふ

かうむる―原本かふむるに作る

しに作る
なまじひに—原本なまじいに作る
つひに—原本ついにに作る

此袋に一升ばかりは貯も候へば、二人ともに心置ず食し給へと強たりしに、老人のいふやうは、御志は忘れがたく忝く候へども、今宵此飯をたべ候ひても、明日よりの食物なし。さすればなまじひに食して苦しみを永くする道理なり。たゞ一日もはやく死行んことこそ今日の望なれ。娘はまだ年若き身なれば、明日にもせよ、萬々一殿樣より御惠の事にてもあらば、命たすかる事もや有べき。少しにても食し、一日にても活のびよかし。老人ははや思ひ殘す事もなし。女房悴のはやく死行し事こそ羨ましう候へとて、更に兩人ともに食する氣色も見えず。見るに、聞に、哀まさりて、飯くふべくもおぼえず。强ていひなぐさめ、むすめに飯少し喰せ、猶袋に殘り有し用意の米を與て立出たり。多年廻國修行いたし候へど、つひに斯まで哀なる事にはゆき逢ひ申さざりしと語れり。誠に甚敷事どもなり。これらのことをおもへば、常に白米を飽までに食して、猶汁菜の事に奢を極むるは、冥加をもしらざるものといふべし。卯の年斯の如く、猶京へのぼりて後、辰の年春夏殊更ききん甚敷、東國など別して哀なる事多しといへり。余は西國にて目のあたり見及びし事なれば、一入に歎かはしく思ひやれり。夫に附ても、一國の君少し慈悲の心おはしまさば、其恩澤忽ち下にうるほひて、哀なる際には及ばざるべきや。

六十六部ーもと行脚僧の六十六部の法華經を六十六國の靈地に納むるをいひしが、後には一般に順禮と同義に用ひらる

飯を食しー原本食を食

猶遲し。其上近き頃は皆々空腹がちなれば、力もなくて道もあゆみ得ずといふ。其すみらいかほど取來るといへば、家内二日の食に足らずといふ。さても朝の夜より暮の夜まで十六里の難所を通ひ、三日三夜責て、漸々に咽に下りかぬるものをほり來りて露の命をつなぐ事、哀といふも更なり。中にも大なる家だに斯の如し。ましていはんや、貧民の、しかも老人、小兒、又は後家やもめなどは、いかゞして命をつなぐ事やらんと思ひやれば、むねふさがる。又或時一人の六十六部に行つれしに、此六部涙を流して余に語れるには、此間山中に行暮て、とある民家に入て宿を求めしに、老人娘と二人居たりしが、宿をゆるさず、強て乞しかば、食物なしといふ。米はこなたに貯へたりというて、強て内に入たるに、二人ともにいとちからなく、久しく病るやうなれば、いかゞし給ふやととふに、二人とも涙を流し、近きほどは一かうに食せず、女房は十日ばかり以前既に餓死せり。悴も四五日以前にうゑにつかれ死せり。親なりといふ我等は、少しづゝ食をあたへくれしゆゑ、今までは生のびらひぬといふに、興さめて驚き、さても哀なる事を承るかな、嘸かし悲しく候はん。先此燒たる飯を食し給へと出せるに、老人と娘互に讓り合うて食せず。いかなる故に、此場にいたりてゆづり合給ふや。これにてたらずば猶

の根なるべし苦味ありて藥用に供せらる
ゑぐみ—ゑぐき味
今朝七ツ時—今朝の四時
夜の四ツ—夜の十時

もすくなくなりぬれば、すみらといふものをほりて根を食せり。葛の根、金槌の類は、其根をつきくだき、水にさらし、夫をだんごに作りて、鹽煮にして食せり。春のころにいたりては、鹽もけしからず高直に成りしかば、これをも求めかねて、海邊に出て潮を汲來りて、其潮にて右の金槌團子を煮て食す。すみらといふものは水仙に似たる草なり。其根を多く取あつめ、鍋に入、三日三夜ほど水を替、煮て食す。久しく煮ざれば、ゑぐみありて食しがたく、三日ほど煮れば至極柔らかに成、少し甘味も有樣なれど、其中にゑぐみ殘れり。余も食しみるに、初一ッはよく、二ッめには口中一ぱいになりて咽に下りがたく、はや三ッとは食しがたきもの也。されど食盡ぬれば、皆々やう〳〵に是を食して命をつなぐ。哀成事筆に云盡すべきに非ず。余一日行勞れて、中にも大に奇麗なる百姓の家に入て、しばらく休息せしに、年老たる婆一人なり。いかゞして人のすくなきやとたづぬれば、父子嫁娘皆今朝七ッ時よりすみら掘にまゐれりといふ。夫は早き行やう也といへば、此所より八里山奥に入らざればすみらなし。淺き山は既に皆ほりつくして、食すべき草は一本もさむらはず。八里餘も極難所の山を分入り、すみらをほりて此所へ歸れば、都合十六里の山道なり。歸りも夜の四ッならでは得歸り著ず。朝七ツも

戰はしめて見物する事なり。甚だ猛勢なるものなり。よくつき合ふものとぞ。もし退かずして難儀に及ぶ時は、竹箒を其中に入るれば忽ち左右へわかれ離る。外のものにて分んとすれば、いよ〳〵勢附き、多く疵附死する事もあり。斯猛勢なるものといへども、唯眼を用心する事甚し。竹箒の和らかなるが目のあたりにさへぎれば、力業にあらそひがたく引退くとぞ。是も上方には珍らしき遊なり。唐土には、鬪牛とて、牛を突合せて遊ぶ事見えたり。唐近き國なれば其風なりけらし。

○饑饉

近年打つゞき五穀凶作なりし上、天明二年寅の秋は、四國九州の邊境饑饉にて、人民の難澁いふばかりなし。余などが旅行の道路盜賊の恐ありて、冬深き頃などは所々逗留して用心せり。さて春になりても、諸國とも米穀ます〳〵高直に成り、余など途中白米一升を大かた百四十文ばかりを出して求たり。國々城下までも、多くは麥飯、粟飯、琉球芋、大根飯の類を食し、取つゞきたり。村々在々には、かずねといひて、葛の根を山に入りて掘食ひしが、是も暫くの間に皆ほりつくし、金槌といふものをほりて食せり。是

金槌―イケマといふ草

極めて—必ず

心おくれて—心臆して

といふ穴崩れて、其中より大なる蛇の頭の枯骨出たりしを、人々恐れて、本社の神體とあがめたりとぞ。むかし物語も跡かたなき事にもあらずや。余も幸の事なれば、此嶽の絶頂にのぼりみばやとおもひ、竹田にいたり、一宿して姥が嶽への案内を頼しに、所の人いふは、今年は格別の凶年饑饉ゆゑ、此邊盗賊夥敷おこりて、殊に姥が嶽邊は山中にて人家もなく、强盗の類甚だ多しとの風聞なれば、他國の人の徘徊し給ふべき所にあらず。强て行給はゞ、極めて變事あらん。此所の者だにおそれて、近き頃は彼邊へ往來ずる人も稀なりと、ひたすら留るにぞ、余も心細く、ことに此頃道中筋にてかしこに切取あり、爰には旅人を鐵砲にて打たりしなど、日々夜々に聞て、明白なる街道さへ覺束なきやうに皆人殊に言はやし、余などが遊歴をも留る人のみなる折からなりしかば、そゞろに心おくれて、姥が嶽には得登らずやみぬ。其近きあたりまでたづね入しに、今にいたりては殘多し。

○牛合

薩摩鹿野谷といふ所には、牛合といふ遊あり。上方の鷄合の如し。牛を雙方より出して

をだ巻—うみ麻を圓く巻きたるもの

時、三升にても、五升にても、入用ほどづゝ造る事なれば、甚だ自由にて、是又風流のものなれば、大に賓客を饗應に足る。他國に此法なきはいか成ゆゑにや。又西國にて酒の賣買一升二升とはいはず、一ぱい二はいとて賣る事也。其一ぱいと云もの大抵四合二三勺ばかりなり。球琳郡などは酒下直にして、一杯の價錢八九文より十二三文程なり。此所は格別下直の地也。薩摩は餘ほど高直なり。一ぱい二はいの名は琉球までも皆斯の如しとなり。阿蘭陀までも又斯の如くなるや、渡り來るフラスコ、丸きは一杯入、角なるは三杯入、唐日本などの一升二升にては、其器相應せざるやうに見ゆ。

○姥が嶽

姥が嶽は豐後の國竹田の城下南四里にあり。山の色黑く、雜樹生ひ茂り、拔群に秀て大なる山なり。この上には昔大蛇ありて人に交り、子を生じ、其子成長して後尾形三郎維義と名のり、九州にて威を振ひし事世のしる所なり。をだ巻に針を附てしのび來りし男の行方を尋ね、此姥が嶽が窟に入て大蛇成りし事を知りたりし事、むかし物語にて唯うはのそらに聞居りし事なりしが、此あたりにて聞けば、近年の大洪水に大蛇の住たりし

焼酎ー原本焼酒に作る

諸の悪邪妖怪皆隠伏、太陽西にいりて夜陰の分にいたれば、山河草木にいたるまで其氣皆をさまりしづまりて、妖魔ほしいまゝに起る。今山を焼て陽氣を得、猛獸の害をまぬがれしも、其ゆゑなきにもあらざりし。

○濁酒

九州の邊地には、濁酒とて、京都の甘酒の如くにして、其色薄黒く、其味辛く酸きものあり。下賤のものは大方これを飲也。味は咽をも通りがたきほどにて、甚だ強く酔ふ者也。常の酒を清酒といふ。斯る清酒濁酒、唐土にも有と聞及ぶ。其類ならんか。薩州には焼酎とて、琉球の泡盛やうの酒あり。京都の焼酎のやうに強からず。國中七八分は、皆此焼酎にて酒宴する事也。常の酒は祝儀事などの贈もの、あるひは儀式の宴會などにのみ用ふ。是は皆京大坂邊より積下す酒にて、其價尤高直也。彼國にてたま〳〵造る酒は、甚下品にして、飲難し。夫ゆゑに、此焼酎を多く用ふる事なり。琉球芋も酒に造る、味甚美なり。其外民家にては、黍、粟、稗の類も、皆焼酎に造るよしなり。余も其法を傳へ、彼地にて其道具を求め歸りて、今にいたり折々は我家の飲料を造る。其時

虞淵―日の入る處の名

行方―原本行衛に作る以下大方如此

行勞るゝ―原本行勞れるに作る

○陽氣

火は誠に陽氣の本體にして賑かなるもの也。余かつて肥後の深山を分通れる頃、前後五七里がほどは人家絶はてて、木こりの道もいと細く、落葉降敷谷陰を打通つゝ、小高き嶺に頭をめぐらせば、日もはや虞淵に沈みて、黄昏告る鐘もなく、四方の眺蒼茫として、峯の松風のみ物凄きに、其色は見えねども、狼の足跡おびたゞしくありて、今も出べく覺ゆるに、猶行先は程遠く、道さへ覺束なくて、事とはんにも我身ならで誰答ふるものもなし。そゞろに心細く成り來て、我家に在りて暖に著、飽まで食し、透間の風もいとへるを、行方定めぬ遠方に行勞るゝも、旅好めるひが心よりとはしりながら、今狼に失はれんも計がたしと思へば、いとはかなく、きえも入ぬべく覺えて、たゞずみしが、あたりの芝いとよく枯赤みたれば、ふと心附て、火打取出しつゝ、其芝に火を放ちたるに、山風ことにはげしくて、炎四方にもえ上れば、今迄淋しく侘しかりつるが、此陽氣に心ひらけけん、氣勃然とおこり、何となくたのしくて、腰に附たる握りめし取出てあぶりくひ、小唄諷ひつゝ、夜をかけて恙なく山を下りぬ。げに太陽東に登り晝と成て、諸

本宮新宮ー共に東牟婁郡に在り本宮は今國幣中社也

ふ。故に熊野の新宮本宮を今にいたり蓬萊山といふ。されば本宮新宮の寶藏、神寶には前秦の文書なども有りとぞ。其徐福の塚は新宮の町の濱手の畑中にあり。古木五六株ありて、石碑に秦徐福墓と彫附たり。其船より初て陸にあがりたりし地は、新宮より六七里も東にて、波多須村といふ所なり。此所の古老の云傳に、徐福十二月晦日波多須村の矢賀の磯へ著船して、此邊に暫住居して、後に本宮新宮那智のあたりに移り住り。波多須村の矢賀丸山といふ所に、蓬萊山といふ楠ありて、小き社もありしに、三十年ばかり以前の洪水に、社も楠も流れ失ぬとなり。波多須村の近きあたりに在し時、木の本の山中疊堂といふ所に遊びけるに、此疊堂といふ所は奇巖聳え立て、數十丈高き石壁連り、見事なる所也。徐福の舊地に近ければ、徐福の事を作りて、五言絶句の詩を石面に大書して歸りしに、其後月日過て雨露に消去らんことを、此あたりの人々惜み、石工に命じて彫附られしとぞ。一時倉卒の拙詩千歳に殘らんこといと恥しけれど、又世に珍らしき跡留れるもうれし。唐土にはかゝる事も多く聞ゆれど、日本には甚稀々にて、余いまだ他邦にては見及ばず。

に此海を通ふ船にては、三味線をひくことを船頭かたく留めて赦さず。若此邊にて此禁を用ひず三味線を彈ば、かならず波風大に起りて、船危き事あり。三味線は猫の皮にて張たるものなれば、鼠のいむ故なりとぞ。都方にては、近き頃の價の安き三味線は、唯狗子皮にて張事なり。此島の鼠はむかしよりの事のみ知れるにや。又隱岐國の北の海中にある竹島には、猫のみ多く有て、世間の猫よりは格別に強くして、鼠を取る事もよしといへり。かゝる猫のみ住る島もありといへば、鼠ばかり生ずる島も有ことにや。

○徐福

もろこし秦の始皇帝と申せしは、豪邁の英主にて有しに、後にはからき政を行ひ、其上長壽延年の事をこのみ給ひ、あまねく不老不死の仙藥を求給ひしかば、徐福と云人、からき政の世を遁れんとて、帝を欺き、某仙人の住る蓬萊の島をよく存知候へば、彼島に渡り、不老不死の藥を得て獻じ奉らんとて、童男童女五百人に、五穀の種、耕作の農具をとりそへて船に積、海上に浮み、唐土を逃れ出て日本にわたり、熊野の浦にあがりて耕作をなし、童男童女を養育して、子孫まで熊野の長となりて、安穩に繁昌せりといひ傳

徐福―秦時代の方士也始皇の命により不老不死の藥を求むとて童男童女を率ゐて海上に浮び遂に歸らず或は日本に來るといふ說あり

をさ〳〵
大方

難波にもをさ〳〵劣らず、京の端々よりは、今一際まされるやうに覺ゆ。常の言葉はあく迄訛ありて、怪敷ばかりなるに、端歌勝れたるはいか成ゆゑにやと、そこらの人に尋れば、この國は三味線殊にはやりて、法師たるものは皆難波に登りて學ぶ事なり。學び得て歸りても、四五年も程經れば、また生國の訛出る故に、又難波にのぼり來りて稽古のさらへする事なりとぞ。難波にても、名ある法師に學ぶことゆゑ、いづれも節調子ともに格別の事にいたる。難波の外にては、三味線のことは薩摩のみなりといふべし。不思議至極のことなり。其外の國は、極邊土は元よりなり、程近き國々にても、いやしく拙き事耳に觸べくもあらず。是は其國の音聲出て、ふしも調子もあらき故なるべし。其外、横笛、篳篥などの調子も、京都の音には似たる國もあらず。水土によりて音律の替ることはいちじるしきものなり。

○鼠島

肥後と天草の島との間に、海中に小き島あり。いかなることにや、此島には鼠むかしよりおびたゞしく住るとぞ。元より小き島なれば人も住ず、此鼠のみなりといふ。此故

みにて、哀に靜なるきはは絕てなし。心留る所もあらざりしに、今宵の音はいかなる人や彈つらん、筑紫のはての、殊にかゝる片山里に、床しくも聞ゆるものかな。今一ッともと待居たるに、龍田川邊といふ歌ひとつひきたり。こゝろうるはしきに、其姿も見まほしく、起出て、宿のあるじにいかなる女にやとたづぬれば、隣家の娘なるが、三とせ四とせ長崎にありて、近き頃かへり來れるなりといふにぞ、扨は長崎も名高きほどの甲斐はありぬ。下の關、博多など、むかしより、其名高き遊里にて、日夜糸竹に遊ぶ地なるに、唯其所に至りて目のあたり其聲を聞けば、誠に田舍びて、我身の故鄕に遠ざかりしを感ずる心のみ起れる。然るに、今長崎にて學びたりしといふ音を聞に、都近き心地して、耳珍らしく覺ゆるもいと嬉し、やがて長崎に行身なれば、彼地に入らば何事も都近き心地やせんと、末たのもしくて、今宵は思ひよらざる調の音に、旅のうさをはらしぬ。其後日を經て長崎に入り、またしも糸竹の調聞しに、難波を出しよりこのかたの音におほくもことならず、嬉し野にて聞しには似もよらず。其女の勝れたるにやありけん、またまなびたる師の難波人にや有けん、又其折のあはれ深きより一しほにおぼえしにや。亦其後程を經て薩摩に入りしに、琴、三味線、鼓弓ともに、端歌は此國かくべつにすぐれて、

西遊記續編卷之三

○嬉し野

肥前の國嬉し野を通れるころは日影もまだ高かりしかど、此里によき溫泉ありと聞しかば、先宿を求めて、夫をも心見んと、賤しき伏屋に宿りぬ。都て民屋なれば、茅の軒端いといぶせし。誠に聞し如く、溫泉は勝れたり。都近きに有らば、いかばかり賑はしく繁昌ならんに、斯邊鄙なれば、其事もあらず、惜むべし。夜に入ぬれば、宵の間より門さし込てふしぬ。けふはいたうもつかれざれば、とみにも眠らず、こしかた行末思ひつづけたる折節、隣れる家に三味線の音きこゆ。しらべいとよく叶ひ、聲うるはしく謳ひすましたるに、耳あらたまりぬる心地して、枕をもたげこれを聞くに、鳥部山といふ歌ひとつ彈て止ぬ。かしましくいたづら彈もせず、心ありけなり。難波を出て後は、一里にても都遠ざかるに附つゝ、殊に拙く聞にくきものは音律のことなり。國々遊里なども多く、其外にも三味線の音はたゆる所もなけれど、調子もおほよそに、たゞかしましきの

嬉し野―藤津郡西嬉野村に在り

いたうも―原文いとふもに作る

月いづこ、鐘はしづめる海の底。

といふ發句あり。すべて海上を通ふ船の鐘を積ことといむ事なり。鐘は龍神の愛するものなれば、是を積船は必ずくつがへると云傳へておそれあへり。是らの事もあれば、求琳の事も、龍神の鐘を持かへるが取落せし成べしと沙汰せり。余も又別に考ふる事あれど、をこがましければ略しぬ。

こゝろ一つもり、考へ宗像の宮一筑前國宗像郡に在り今は官幣大社也

鐘の上にいたり、鐘に附たる綱を船に嚴敷まとひ附て、彼つみたりし石を海中へ擲捨たりしに、船漸々に浮に附て、鐘もやう〳〵うごく程こそあれ、案に違はず震動雷電して、風おびたゞ敷おこりて、雲は墨をときしが如く、大波山を碎けば、なにかは以てたまるべき。船も人もみぢんに成、鐘も龍頭くだけてよこざまになり、又海底に沈みたり。夫より大浪岡にあがり、人家田地大に破壞し、人民の歎大方ならず。ふしぎなるは、其潮につれて翁の面一ツ上り來りたり。其面希代の作にして、中々世間のものにあらず。太守には尙も爭ひ給ふべき氣色成しかど、人民の歎なればとて、諸臣諫めしにより、且は龍神より鐘の替のこゝろにて、希代のものを打上し事なれば、太守にも思ひとゞまり給ひて、鐘は終に人間の手に入らず、ことに横さまになりて、龍頭さへくだけたれば、ふたゝび上んたよりもなくなりぬ。面は奇異のものなればとて、宗像の宮に納めて、今に彼宮に傳れりとぞ。鐘は此崇福寺に納るべかりしを、斯龍神の愛せると云ふにより、永く海底のものとはなれりと語れり。少しむかし物語めきて仰山には聞ゆれども、さる事も有べし。其外越前の國敦賀のほとりにも鐘が崎といふ所有て、海底に鐘あり。芭蕉翁なども彼所に遊んで、

新古今集―土御門の朝、後鳥羽の院宣によりて成りたる歌集にて二十巻あり

しに、いつの代の事にや、何がしとかやいへる國の守ありけるが、菩提寺を取立、いまだほどよき鐘もなければ、新に造り鑄んよりは、海中にある鐘こそ名高き鐘なれば、引上て此寺に寄附せんとありしを、諸臣皆此鐘は龍神のをしみ給ふと古來より申傳へ候へば、今更引上給はんこと恐有と諫めしに、元來勇將なれば聞入給はずして、我用にて我領内にあるものをとるに、龍神とて惜やうやある。はやくも海より引上よとて、數十艘の船を浮べ、鐘の龍頭に大綱をおびたゞしくかけ、海より岡に引つけんとて、千人力を以てえい〳〵聲を出して引たりしに、其鐘少し動くや否や、大空俄にかき曇り、天地闇夜の如く成て、大風波起り、まき上んとせし船碎け、綱きれて、人も大半潮に溺れて漂ひければ、終に其事とげざりけり。太守猶もいかり給ひしかども、諸臣強て諫め留め申せしかば、止事を得ずして其儘に捨置給ひぬ。其後三四代目の太守、勇氣殊に勝れ給ひぬるが、此鐘の事をきこし召、何條事や有べき。其日に折あしく風の吹ければこそ不思議にも思ひつれ。たとひ龍神いませばとて、領主にいかで敵すべきや。此鐘引上得ざるこそ口惜けれとて、諸臣の諫を用ひず。用意を丈夫にせばやとて、髮の毛を入てよりたる大綱をおびたゞしく鐘の龍頭にまとひ、船數艘に大石を數多積入て船の脚をふかくしづめ、彼

…しく物せらる〻に—誠に親密に待遇せらる〻に

惣錄—法儀を掌り僧事を錄し論爭を裁斷する職

艮—東北

萬葉集—孝謙帝の頃に成りたる歌集にて二十卷より成り我國最古の歌集也

福岡の龜井道才の肉弟にて、才德すぐれたる僧也。余古き交にて、此度も尋ね訪ひしに、久敷相見ざるに、はる〴〵も訪ひ來りし事よと、世にしたしく物せらる〻に、思はずも日を移しぬ。此寺は九州の惣錄なり。京都大德寺、江戶東海寺ともに、住職の僧此寺に住する事とぞ。筑前の太守の菩提地にて、境內八町四方、名におふ千代の松原の眞中にあり。北は海を受て誠に淸淨無塵の勝地なり。詩を賦し、禪を談ぜしいとま、當國の奇事をとひしに、其座に在ける人の曰、此國の海中に鐘あり。其處を鐘が岬といふ。織幡山の艮の方、岸を離る〻事纔に五町ばかりの所にあり。船にて其處にいたればよく見ゆるよし、里人いふ。是はむかし三韓より撞鐘をふねに積て渡せしに、龍神鐘を望み、此海にいたりて浪風俄に起り、船くつがへりて、鐘は終に海底に沈みぬ。其三韓よりわたりし事は古き事にや。萬葉集の歌にも、「千早振鐘がみさきを過れども、我は忘れず志賀のすめ神、よみ人しらず」と出たり。又新古今にも、「白浪の岩打波やひゞくらん、鐘のみさきの曉の空、衣笠內大臣。」又家の集、「音に聞く鐘のみさきはつきもせず、なくこゑ響くわたりなりけり、俊頼。」又大名寄に、「聞あかす鐘の岬のうき枕、夢路も浪に幾夜へだてぬ」など、諸集に見えたり。龍宮のものとて人々おそれ、誰取揚んとせし人もなかり

奪はるゝ—原本奪はれるに作る

たる物は子供の拾ひし物ばかり也。人々集りて能く見るに、釣鐘のふちの所のかけ残りたるにて、石の如く、金の如く也。ふしぎなるものかな、いかに巻上たりしとて、猶落残れるもあるべしとて、打集りて唯其庭を尋ねさがせしかども、夫といふべきものもなく、いかなる事と知る人も候はずといふにぞ、何卒其子供の拾ひしものを一見せばやと申せしに、則村掛の役より、早速其村の庄屋へ申送り、其物早々城下へ持参すべしと下知ありしに、日を移さず役所へ持出たり。余が旅館へ送り來れば、すは珍敷ものこそと、これを見るに、小き箱に入て、幾重も紙に包たり。開き見るに、甚だ微少にして、一方は銀色に、一方は栗色の漆にて、金物の漆ぬりたるがはげ損じたるにて、とかう論ずべきものにも非ず。興覺て戻しやりぬ。是は役所より急に申附たるにより、奪はるゝ事もやと疑ひて、かくしつる事とおしはかりぬ。持來りし者に、子供の取得たりし大なるはいかゞにやと問しめぬれば、夫は其節に出かせぎの者來りて、珍敷ものなれば我に得させよ、名を聞糺して又返し與ふべしとて子供をすかし、日向の方へ携へ候ひぬと答へたり。持來るべき様にいひやり様も有べかりしを、殘多き事なりき。又筑前に遊びし時、博多の崇福寺に暫とゞまりてこのあたりを一見す。此寺の住持は宗曄禪師とて、

たるものにて、水干したるものと見ゆ。取得たる獵師は實物のやうにいひ居れども、其類何とも知れざるものなれば、誰格別に賞玩するにもいたらず。何國より流れ來れる物にや、何國の船より落せしものにや、つひに何ともしる人なし。

○龍鐘を愛す

余が求麻にありし日、ある夕方暴風吹おこり、枝をゝり、砂をあぐ。暫時にして空晴れ、風止たり。所の人龍卷なるべしといふて止ぬ。龍卷とは、上方にていふ龍の天上すると云こと也。其後二三日經て、城下より六里東の方のきのへといふ村の者來り、かたりけるは、さても過し日の龍卷は、我村にふしぎの事こそ有つれ。十二三歳の男子二人障子をひらき手習して居たりしに、俄に風雨起りて眞黑になりたりしかば、すは龍卷ぞといふほどこそあれ、何とは知らず庭の眞中の飛石の上にどふと落て、微塵に碎けて飛ちりたり。其音の夥敷事たとへんものなし。唯大なる釣鐘を微塵に打碎きたる樣に聞えし。其碎けたる拍子に、其虧飛て手習仕居たる机の上に落たるを、すかさず拾ひ取ぬ。はや忽ちに空晴、風やみて、ものの落たりしと聞えし跡にも怪敷ものは一ツもなし。唯殘り

水干―水籤也、粗き粉末をば水に澱ませて取去り細粉のみを得る法にして漂去ともいふこなるはメリケン粉の類にや

つひに―原本つゐに作る

に子曰君子成人之美不成人之惡小人反是とあるをいふ

熊野浦—紀伊國牟婁郡一帶の沿岸

八ツを入たり—輪八ツを入れたる也

かくの如きことをみれば、生涯口を閉るより外なけれど、人の善もかたらざれば傳らず、しるさゞれば殘らず、嗚呼いかゞはせん。

○流れ物

熊野浦は南方へ遠く出たる土地ゆゑ、格別暖氣にて、のどやかなる所也。されど南には國もなき大海なれば、波高く、風強く、磯邊のあらき事は、中國などの海とは格別のものなり。かゝる大海の事なれば、折々大風波の後などは、常に見なれぬ珍敷もの流れ來る事ありとぞ。椰子の實、又は椰子の木抔は、毎々波に打上るとぞ。何れの國より來る事にや。又近き頃獵師甚八といふもの、沖中へ五六里ばかりも釣に出しに、なにか波に浮たるものを見附、引上見れば桶なり。悦び取歸りて能く見るに、桶高さ二尺五六寸、まはり一尺五六寸、中ふくらにて太鼓の胴の如く、桶がはの木の厚さ一寸餘、鐵にて輪を作り、八ツを入たり。輪の幅一寸二三分、甚丈夫にしたる桶なり。胴中に小き穴あり、小兒の握拳をやう〳〵に入るゝ程なり。チャンにて塗りふさぎたり。桶の小口には、松葉のごとき文字を彫附たり。胴中の穴より見るに、内に白き粉入りたり。蕎麥粉に似

言ひたることは之を取消さんとしても取返のつかざるをいふ

人の毀譽云々ー晉書に劉毅云丈夫蓋棺事方定といひ趙甌北の詩に蓋棺論自定といへる類なるべし

君子は人の美をなすー論語顔淵篇

睦ぶ人にても、あしき事は傾きたすくまじと心得居れど、唯世の人の始終調ひがたければ、余も脊中に汗出る事は出來ぬ。されど、余がごときは、誠に名もなく、徳もなく、位もなく、强て余が詞を取用る人もなければ、唯みづから恥るばかりにて事はすめり。若位高く、勢ありて、かくの如くみだりに毀譽したらましかば、いかばかり世の害を引出すことの有べき。されば上にまします人々の、常々に御心を勞し給ふことは、草間の小民の知る所にあらずかし。古に、人の毀譽は死して棺の蓋を覆うて後に定るといひ置し、それに違はずとぞ思はる。西國にて幼少の女子孝行の聞ありけるを、其あたりの儒士感心して、其事實をくはしく文章に記し、普く人にひろめて勸善のためにもなれかし、且は孝行の名も世に聞えよかしと出されけるに、其女子成長の後、淫奔の婦人にて、嫁せし後、外に密夫と通じ出奔せし事のありき。儒士初に記せし文章を破り捨て怒られしかど益なくて、世の人の笑ひ草となられたり。此儒士の心根はいと殊勝にて、君子は人の美をなすといふ意にも叶ひ、善に感ずる事の深ければこそ、むづかしき世話をもいとはず、文章をも作りたるに、人の行の始終を全うする事のかたき事は、昔より同じ事にて、名なき女子はかくれ行て、儒士のみ人の笑ひ草となれるは、歎かはしき事にあらずや。

駟も舌に及ばず—論語顔淵篇に出づ、一たび

あやまりすくなきやうにあらしめ、普く世間の病者の益にもならんやうとの事なり。それに附ては、諸國をめぐれば、異病奇疾をも多く見及び、奇方妙藥をも傳授を得て、醫事の修行漫遊の益少からず。猶其あまりには、文雅の事、武備の事はもとより、よき人を見ては我身の手本として見習ふ樣に心得、あしき人に逢うてはみづからかくの如き事やなきと顧み愼む種となせる事なり。其よしと思ひ、あしきと思ひし事、多年漫遊の間には數々ありて、心やすき人には語りも傳へ、又世に殘すまじとおもふ書には書もしるせる事あり。今にいたりて、其譽たりし人も、つく〲見れば、其行初の如くにもあらで、操届かぬやう成もあり。又毀りたりし人も、いつよりか行も改りて、余などが口にてとかう論ずまじき樣にみゆるもあり。過し年既に人にも語り傳へ、文にも書しるせし事の、今見れば、よく違たれば、余も他人より見給はゞ、彼人をあしゝといひしは、彼人に恨にてもありや、又彼人をよしといひしは、彼人にえこひいきありやとも見えて、余が定見の淺々しきをもにくみいやしみ給ふべし。實に駟も舌に及ばずと。筆に殘し、詞に出せし事は取かへしがたき事、昔日も今も同じ事にて、これらの事をおもひ出れば、脊中に汗出る心地す。拙き身にも、たとひ恨ある人にても、よき事は掩ふまじ、親しみ

桃花源云々ー桃源は湖南省常徳府桃源縣に在り。このの事は陶淵明の桃花源記に委し

此地別に君とよぶ者もなく、年貢を納るといふ事もなく、皆穀物は其地廣きにより手柄次第に作り取なり。又賦役といふ事もなし。夫ゆゑ、人の心すなほに、衣食もあまりて、爭ひ怒る事もなく、上古の世に似たり。又平家傳來の寶物甚だ多し。樂器、刀劔、世に珍敷ものありといふ。他の人は一向に入る事を許さず。又他の人入ても、宿を取べき所なく、難儀に及べりとなり。唯醫藥の事におろかなる故に、醫者は入る事をゆるし、入込ても彼地にて甚だ重んじ愛する事とぞ。余も此ものがたりをつく〲聞て、兼てより其地に至り見んとおもひし事なれば、神馳、魂飛如くの心地せられしかど、道といふもなく、殊にいろ〱の嶮絶の所ありて、彼所の人に同道せざれば、隈本の者だに至る事能はずといふにぞ、力及ばずしてやみける。唐土のむかし、秦の始皇帝の虐政をさけて、桃花源に隠れ住み、其子孫繁昌して、數百年の後はじめて人間に通ぜしに異ならず。日本せましといへども、また人跡通はざる地も邊土にはおほかりぬ。

○毀譽

余が四方に漫遊せし主意は、諸國の風土氣候を親しく身にうけ考へて、著す所の醫書に

太閤—豐臣太閤秀吉

隈本—熊本のことにて昔は隈本とも書きたる也此には細川家を指す

たりしが、足利の末にや、太閤の始にや當りけん、川上より椀の流れ來れるをふと見附て、此山奥に人住けりと知りて、やう〳〵に尋ね入て、始て此五ヶ村の人此世に通ぜり。彼方の人の世間へ出初て人交せし事は、元和、寛永のころにもや。此あたりにては、隈本名家なれば、此手に屬したきよし申立て、公にも其由聞屆られ、肥後の支配と仕給ふ。されど本國の外なれば、何方の領分といふにもあらで、唯支配といふのみなり。夫より此方、多年隈本より鹽幾十俵を賜ふ。彼方よりは、五人の頭分のもの、替り〳〵年始の禮詞をつとむる爲に、隈本に出る也。熊の皮數十枚、禮物として年毎に獻上す。昔時より彼地に五人の頭分あり。故に其地を五つにわけて、各一ヶ所づゝ是を司り保つ。此故に、世間より五ヶ村といふ。其人皆質朴にして、武をはげみ、男子皆長き大小を横たふ。みづから平家高貴の人の御末也と高ぶりて、世の人を輕んず。其地鹽なし。近ごろまでは數百年が間、彼地の人は一人も鹽氣を食ふ者なかりしが、近ごろ隈本より賜る鹽をわかちて食す。其外も格別家富る者は、肥後より鹽を買入て食す。故に甚だ拂底にて、中々末々までは行屆かず。然れども鹽は食して藥也といへるにや、百姓の家々に、皆見鹽とて紙に少しの鹽を包み、臺所の柱にかけ置て、家内みな每朝此鹽をみる事也。

よべ——昨夜

たるも見ゆ。邊土は人民にいとま多きゆゑ、叮嚀なる細工をしても用は足りぬにや。

○五ヶ邑

隈本の旅人宿に逗留せし頃、五ヶ村のことを尋しに、宿の者いふは、それは殘多きこと也。この國慶事の祝儀の爲に、よべまで五ヶ村の頭分の者一人、百姓數人を召連て、此家に數日逗留致せしに、今少し早く來り給はゞ、同宿して語り合給ひ、面白き物語もあるべきものをと口々にいふにぞ、いと本意なくて、せめてもと此地の人に五ヶ村のこと尋問ふに、壽永年中平家の人々京都を落、須磨の屋形をも義經に破られ、又讃岐の八島の軍に打まけ、長門の國赤間が關の海中に一門殘らず入水と披露して、其實は肥後の國の極山中に隱れ給ひぬ。其後、世の中鎌倉に歸して、平家の人々は永く山中の土と朽果給ひぬ。其隱れ給ひし處、今の五ヶ村也。南北凡二十里許、東西一二里より三里ばかりもあり。東は豐後、北は阿蘇、南は求麻、西は隈本なり。何方より入るにも皆二十里餘ありて、其嶮岨中々いひ盡すべきにあらず。更に道とてもなし。夫ゆゑに、平家の人々の子孫年々に繁茂して數千萬人に及び、年月は數百年が間一向人間の通路はたえはて居

孟宗竹

人の孝子を選びて名づく、元の郭居業の選なりといふ

えつり—壁の下地

來唐土より渡り來れりといふより、薩州にては唐孟宗と呼なり。猶この外種々の奇竹多し。苦竹と稱する竹も冬笋を生ずれども、細うして味苦きゆゑ、食用には湯煮して苦味を去り用ふ。其外四方竹とて四角の竹あり。珍らしければ、余歸る時此四角なる竹を杖にして携へかへれり。又鹿兒島城下大龍寺には、七股の竹あり。彼地にても奇なりとて庭に植て見ものにせり。都て暖國には竹よく生育す。寒國は竹にあしく、信濃の國には竹一本も生ぜず、甚だ不自由成事也。桶の輪には竹にあらざれば叶ひがたきゆゑ、三河尾張より輪につくりて送り來り、甚だ高直也。壁のえつりは山茅を用ふ。大なる茅ある故に、多くは竹のかはりにこれを用ふ。他より思ふとは格別にして、又相應にかへ用ふるもの生ずるも天地の妙なり。それより北方、越後、出羽、奥州も、南部領邊は人民一生竹を見ざるもの有。太き竹は絶てなし。夫故人家の邊に南國の如く竹藪といふものなし。山中に笹あり。是も熊笹にて竹の用に立べきものに非ず。南國にては、竹ほど人家の重寶に成るものはなく、一日なくて叶はぬやうに覺ゆれども、斯の如く竹なくてもさのみ不自由なる樣にも見えず。唯桶の輪のみ、何方にても難儀に見ゆ。津輕、秋田邊にては榎の木の皮の樣に見ゆるものを曲て、樺にてとぢ、桶として用ふ。又太き木をくりぬき

鸜鵒の詩―李白の作に「宮女如花滿春殿、只今唯有鸜鵒飛」などあり

上さば―原本登さばに作る

廿四孝―古今の二十四

多く詩に作りて、皆都遠く離れたる情を述たり。日本に鸜鵒有事を聞ざることにていぶかしけれど、彼醫家も博物の人なれば、考ふる處もあるにや。

○孟宗竹

薩隅の邊に唐孟宗竹といふ竹あり。人家に多し。常の竹よりは薄く、節低く、葭に似たり。然れども甚だ太くして、、なるものは二尺廻以上に至る。花生等に用ひて、甚だ見事なり。此竹冬筍を生ず、味甚だ美也。寒中にも平皿一ぱいの筍を生ずること、他國にはいまだ見ず。京都にも、甚だ細く指ばかりなるは早春に出して料理に用ふれども、名計珍らしくて、味は宜しからず。孟宗竹の筍は大にして、しかも和らかに、味夏の筍におとらず。若此筍を京都に送り上さば、希代の珍味なるべけれども、道路三四百里を隔てをれば其事叶はず、をしむべし。風の透間のなき樣に包みて送れば、漸々長崎まては無事にして屆けりといふ。夫より遠方へは損じて送りがたしとなり。此筍元來常の竹の子よりも格別和らかなるゆゑ、尤損じやすしとなり。孟宗竹の孟宗は古人の名也。親の爲に冬筍を得たる事、廿四孝に見えたり。此筍寒中にも出る故に、孟宗竹といへり。元

隈本—熊本也

あつもの—羹也、熱物の義にて吸物をいふ

初にこれを試むるに、馬場の眞中に羆の皮を敷て馬をすゝむるに、松前生の馬は恐れてあゆまず、南部生の馬は皮の上をもよくあゆむとぞ。

○鷓鴣

九州には珍しき鳥多し。筑後には、筑後鳥とて、其かたちひよ鳥の少し大なる程にて、尾長く、羽色眞黑にして、羽の下に少し白き處もあり。是誠の鵲成べし。筑後に尤多し。肥後にも折節見ゆる。又肥前肥後邊の海上に、脛高く、口ばし長く少し鼠色にて、翼に白き點紋ある鳥あり。舟人にとへば、しやくといふ鳥也といふ。余肥後の隈本にて、ある醫家を訪たりしに、折ふし彼家へ鳥を送り來れり。主持出て、余に此鳥をしり給ふやとはる。先に此邊の海上にて見し鳥にて、上方にては見侍らざる鳥也といへば、あるじ笑うて、此鳥は唐土の南方にありといふ鷓鴣なり。船人などは云ひ誤りてしやくと覺えたり。上方の人にはめづらしかるべければ、料理すべしとて、やがてあつものとなしぬ。其味誠に美にして、いと珍らしかりき。又其翼をこひて歸りしに、旅の日永くて、途にて鼠の爲に奪はれぬ。此鳥いよく\鷓鴣なりや。唐土にては南國のみにある鳥にて、

選む―原本例の撰むに作る

三疊―原本三帖に作る

て選む品は、加賀の熊膽を最上とす。信濃は少し大也。蝦夷松前より出るは格別大なり。然れども、皆加賀の膽には劣るといふ。熊も又松前は甚だ大にして、就中羆などは殊に大にして、よく牛馬を摑裂て喰ふ。人を害する事も大かたならず。其猛勢あたるべからずとぞ。彼地より來る熊の皮をみるに、毛甚だ深く、皮大にして、毛の色金色なるも有。毛至て厚きものは、人の手を五ッ重ねて猶よく毛の中に隱るゝあり。皮の大さも疊三疊を隱すもの有。虎の皮三枚の大さあり。他國にはかゝる熊はたえてなし。都ての獸を考ふるに、南國は柔弱にして、北方は猛勢なり。熊にかぎらず、狼などにても、薩州などは土人曾て狼を恐れず、獵犬もよく狼をとると云。中國にては狼を恐るゝ事甚し。其猛惡の勢、皆人のよく知る所也。馬も、中國の馬は動もすれば人を咬。九州の馬は、いかほど強き馬にても、人を咬事なし。又琉球抔には熊狼などの如き猛獸は生ずる事なしといふ。寒暖によりて萬物の違ありけるにぞ。故に松前邊にては、乘馬にても、小荷駄馬にても、野外に出て其山の近きあたりに羆居れば、匂を嗅得て、その馬恐れ立すくみて、小便おのづから出て一歩もあゆむ事能はず。斯の如くなれば、武家などの乘馬は多く南部の馬を用る事とぞ。奥州地には羆無きゆゑ、南部生の馬は知らざるゆゑ羆を恐れず。

西遊記續編卷之二

○熊膽

肥後國球琳に遊びける頃、彼地の高き人病み給ふことのありて、予に治療を求められけるに、熊膽を川ふる藥なりければ、請求めて、一具を拜領せり。其膽に紙札ありて、皆越村新兵衛と書附たり。いかなる事ぞと聞くに、獵師熊を取りたる時は、其旨を案內するに、彼人來りて見分して其熊を解しめ、其膽に取得たる獵師の名を書附て、獻ぜしむる事也。故に少しも贋物の氣遣ひなきなり。余が得たる膽、重さ纔に一匁三分、加賀などより出る膽とは甚だ小し。此地の產は皆小し。尤眞物の事なれば、氣味は甚だ上品にして、賣買にある熊膽とは格別のもの也。委細を尋るに、此地に木熊土熊とて二種あり。土熊は土の穴の中に住て、其體大なれども鈍し。木熊は枯木のうつろに住、其體小くして健かなり。よく樹木の上に登る。其故に木熊の膽は小けれども氣味猛なり。土熊の膽は大にして鈍しといふ。又木熊の膽の中に琥珀手といふ物有。是も又上品なり。京都に

高き人―高貴なる人

など附たるを數多引上ぬ。色々の器に作りなして、皆人のもてはやせるを乞ひ得て歸りての後の日、我にひとしき心の友にわかち贈るとて、彼國にて聞しむかしがたり書添るなり。

橋杙—原本例の橋杭に作る。

とみに—急に

の橋杙の朽残れる木の切を珍らしともてはやしぬるが、此扶桑木にくらべぬれば、ものの數かは。京都にかへりて塘雨主人に此切を贈りて書遣りしを、又こゝにしるす。

扶桑木畧記

此色黑き木のきれは扶桑樹なり。千早ぶる神代の御時、今の伊豫の國に大木有て、梢は大空を拂ひ、根は海山にまたがれり。是が故に日出る頃は筑紫をも覆ひ、入るときは陸奥の果までもかげろひて、年のみのりを妨しかば、國民歎き惡みて集り切しかど、限なく大なるが故に、とみにもきりはたさず、日ふるまには愈あひて、其事ならざりしかば、終に火もて燒からして後に切たふしぬ。其後幾千歳經て、人のしろしめす御代になり、景行の帝肥後の熊襲御征伐の時、此國の溫泉尋ねさせ給ひて、豐後へ渡らせ給ふに、尙扶桑の朽木海上二三十里程にまたがり倒れたり。官軍皆此木の上をあゆみて、船せずして筑紫の地にわたり附給ひぬ。其後のことは書もつたへず。此頃古き事好める人出來て、其跡たづねしに、木のありしといふあたりを掘穿てば、其根尙朽殘りて、そこ爰より取出しぬ。又またがりありしといふ海の底に網を下して探りたるに、潮にされ、貝

眞名―漢字也、假名に對していふ

能因法師―平安時代の歌人にて俗名は橘永愷といひ橘諸兄十世の孫也

のことなれば、誰かいひいだす者もなくて過ぬるが、近き頃より海をさぐり、山を穿て、其木の朽殘れるを取出し、もてはやすこととなりぬ。殊に珍敷く唐土の書傳にも見えぬることなれば、此一塊はるぐと此長崎に持下り、ついでよくば唐土にも渡さばやとおもふなり。夫故に此傳記も眞名に書そへたりとて示さる。誠に其木色黑く漆にぬりたるがごとく、木理明らかに見えて和木の樣にもあらず。たとへば黑檀に木理あるがごとし。其記傳をよめば、上古よりの由來掌に見るがごとし。余も驚て、扶桑のことはかねてしも聞つる事なるが、今のあたり見ることの珍らしければ、歸路には必ず四國路を經て、其生ひ居たりし跡をも見ばやと約して別れぬ。其後余も九州を廻り盡して四國の地へ渡り、先彼古跡をたづねしに、其扶桑木のありし地は、伊豫郡喜多郡の二郡に根はびこれりとぞ。城下にても此木の事をめで問ひければ、吉田久太夫といふ人より、此木にて作れる硯の大さ一尺餘あるを惠まる。其外小き切はし數々乞ひ得て歸りぬ。誠に長崎にて明月上人に聞しに違はず。世にはかゝる珍敷物もありけり。古きもののかぎりといふべし。諸書に傳たる扶桑木の大さ、誠とも思はざりしに、今のあたり其根の殘り、其枝の海底にいちじるしきをみれば、そらごとともいふべからず、むかし能因法師の長柄

の高僧にて大菩薩の號を許され天平二十一年二月寂す年八十二

一刀三禮―三度佛を禮拜して一度刀を下すこと

内典、外典―佛家の見地に佛教の書を内典といひ儒教の書を外典といふ

なる楠あり。枝葉生たる木に、南面に馬頭觀音の像を彫附たり。傳へ云ふ、行基菩薩の一刀三禮の作なりと。誠に楠は命長き木也。其實否は知らねども、行基菩薩の比より今の世にいたるまで恙なく存在する事珍らしといふべし。道傍に見えて、彼あたりには名高き觀音の像なり。

○扶桑木

扶桑の事は、山海經、淮南子、大荒經の諸書に出たり。上古の世限なき大木有て、日影を覆ひ、朝は此木より西の國は是がために影ろひ、夕は此木の東日輪を見ずと。此木を扶桑と名附て、其生たる國をも又扶桑國といふ。則日本の事なりといふ事、和漢久しき云傳へなり。予が長崎に遊びしころ、安祥寺の多門院といふに宿りしが、此院に始より伊豫の國の沙門明月といふが、これも旅宿してあり。此僧は内典の事はもとより、外典のことにも通じて、猶其餘詩文章をもよくして博學の人なりしかば、同し宿に、ことに親しく語り合しが、ある時嚢中よりくろき木を取出して、これは日本の上古にありし扶桑木の朽殘れるなり。其木の生ひ居し地は、我伊豫の國なりけれど、數千歲のむかし

謄寫か

國造ー上古一國の行政を主宰せし役人を國造といひしによりて國守なかく呼びし也

行基菩薩ー聖武帝の頃

は八百比丘尼の手づから植し杉三本ありしに、近年の大風に一本折れたるが、其木にて一の宮の本社御普請ありしとて、其殘木のきれを彼國の國造余に贈られしを、香箱に作りて、今に余が家に藏む。八百比丘尼いつの頃の人にや。何にもあれ、千年の古木といふ。伊勢の國多氣山中の大杉、谷の杉は格別大木にて、天下無雙の物一本ありて、國司の頃より前つかたにや、大杉大明神とこの大木を祭り來れるに、近年枯失けると也。肥後國阿蘇山の麓にも、神代の杉今にありといへり。余見ずして過ぬ、殘多し。伊勢神路山の杉の古りたるは、皆世の人の知る所なり。唐土にも、孔子御廟前の、聖人御手づから植給ひしといふ柏樹、折ふしは枯れ、又折ふしは若芽出で榮えしが、近年新渡の唐紙半枚に石摺にしたる柏樹の圖記にくはしくみえたり。孔子の時分より今にありといふは二千年に餘りて久敷事なるに、不思議のもの也。日本にも伊豫の扶桑木、近江の栗田郡の栗の木など、今にあらばいと珍らしかりぬべきに、切り倒しぬることは殘念の事なりき。

○小田の木佛

肥後の國薗木のこなたに、小田といふ所有。道の傍にちひさき寺有て、其表にいと大い

身木ー幹也
うつぼーうつろ、うろ
川芎ー繖形科に屬せる植物、高さ一二尺葉は芹に似て香氣強し根葉共に藥用とするもの也
又ーまたの

たきものと、世にいひならはすもことわりなり。されど老木のゆゑにや、身木に朽入りて枯れんとすること度々なるを、神主歎き、身木の朽たるうつぼの中に、煤古く附たる麥藁を入れて、是を燒て療治を加ふるに、其しるしありて枯れんとする枝葉再び蘇生り、翠の色恙なし。如此なること近年度々なれども、其たびに療治をくはへて、今猶めで度榮ゆ。諸木とも藥灸など治方多き中に、松は川芎を煎じて根に度々灌げば、枯れんとするもの再びよみがへるといふ。又常々鐘乳石を細末して根に埋めば、其松よく榮ゆとなり。蘇鐵は鐵を根本に入れ、身木にも金釘を多く打てば甚榮ゆるが如く、諸木とも夫に相應せる藥種有べし。灸は何の木にもよくきく物也。煤附たる古き麥わらを燒たるも、大なる灸をしたる理なるべし。曾根松などは千年の古木なれば、何卒して長く榮ゆる樣に願敷もの也。其外都ちかきあたりにも、辛崎の松、堺の難波屋の庭前の松など、甚見事なる松にて、目を驚せり。されど格別古木とは見えず。奥州武隈の松、阿古屋の松などは、むかしの木にはあらず、追々に後世に植繼しものといふ。其外にも、奥州に義經の腰かけ松などいふ見事なる松あり。熊野に西行の植しとて法師の松といふあり。是等は又年新らしければ、其木にもやあらん。其外、楠杉などには折々古木あり。隱岐國に

曾根松

はしたーはしためにてやはり下女の事也

菅丞相因緣の地ー菅原右大臣道眞の緣故ある土地

附やうの所にいたり、そらにてはしかとおぼえざりしに、座につらなりしもの大かたは皆覺え居て予に語り聞せ、猶色々委敷法ありとて、鳥の附樣の圖を出して示せり。町家の人だに斯の如し。誠に恥べきことなりき。其外手近き事は倘更にて、何事も故實に隨ひ、人皆かたく守り居て、假初の事にも等閑にはせず。是は、此國四方にきびしき關所を居られて、出入易からず、他國の人も入來らず、自然に隔りて、繁花の風にも押移されざる故也。近き年はやう〳〵に他國の人も往來するやうに成て、器物抔も好事の家には當世の品を調へ持るも間々あり。又下女はしたなどは、今に丸ぐけの帶なれども、妻娘などは帶も幅廣くなり、髮形も漸上方を學ぶ家もあり。

○曾根松

播州曾根は高砂より程ちかし。菅丞相因緣の地ゆゑ、天滿宮を祭れり。宮居の前に年ふるき松の木あり。まことに龍蛇の如く横さまに臥廣がりて、千年の古色あり。其むかし菅公筑紫へ御配流の時、暫此地にあらせたまひ、御手づから松を植おかせたまひけるに、其後年々に繁茂して、其松今に存在するといふ。誠に松は諸木に勝れ、齡長くめで

宗和—金森宗和雪齋の意匠に始まりたる膳にて所謂宗和足の膳也

官家—宮廷

を得、かへり來る船路に、彼青が島へ船がゝりけるに、島中に唯九人、是も他國より吹流されて、船碎け、歸らんやうなくて島に留り居けるを、たすけのせ歸れりとの沙汰を聞けり。されば船の往來さへ無き遠き島なりとぞ思はる。

○古朴

繁花の地は人の氣も輕薄にて、年々月々に今様當世の風に移り、家居器物髪形言語等にいたるまで、むかしの風はいづれへか失て、美麗のみに長ずる事なり。邊鄙の地は是に違ひ、何事も質朴にして外を飾らず、古代の風儀、見るもたのもしげなり。邊國にても、城下町家などは、都の風にも押移るものなるに、薩摩などは格別の遠國故にや、城下にも猶古風殘れり。器物も、酒の銚子といふものなし、皆錫の德利なり。膳も宗和などいふ膳は一つも見えず、皆二枚脚の木具なり。扨多くは皆土器類を用ふ。唯京都にて官家に交る心地す。其外、元服の儀式、婚姻の禮法甚嚴重にして、古法ある事余などが知らざる事のみ多し。其外にも、狩の作法、犬追物の式等は、薩摩に殘れる事世の人も知る所也。余彼國に有し時、或町家の好により、兼好が徒然草を講ぜし事ありしに、鷹の鳥の

世のたづき ―世渡りの方法、世にながらふるてだて

いふ所に、伊豆の沖の青が島の人漂著して、其中に出來次郎といふ若者病しかば、余が友喜多氏療治をくはへて、日久敷行かひければ、いろ〳〵の物語を聞りとて、余に語れり。青が島をヲガ島と唱ふ。其島は伊豆の八丈が島より遙に南の海中にあたる小島なるが、人は多く住けるに、十三年以前島の山大に燒出て、島中火となり、人畜燒死ける。其中に身分宜敷百姓の船を持たるが、家内十餘人其船に取り乘り、火中を遁れ出て、無難に八丈が島にわたり、此年月居住したるに、青が島近年は火消て無事に成りしと聞て、故鄕なつかしく、八丈が島をいとま申て、またもとの船に家内男女皆々取り乘り、家内の雜具竝に農具まで取そへて、今年青が島へ戻る海上難風に逢て吹流され、熊野浦へ著たるなり。其百姓の嫡子を出來次郎といひしなり、珍敷名也。八丈が島にても、出生の子も有て、幼少の童子をも具せりとぞ。一島皆燒はてたる跡へ、年經て唯一家のみ立歸りて、何をなして世のたづきともし、又何を樂しみともせんとにや。いかにふるさと戀しければとて、數百里はなれたる沖の小島に、人もなく、牛馬も無きに、我家内ばかり歸り住たく思ふは、外よりはいと不審なる事也。其上又いつか燒出んもはかりがたきに、あはれなるは人心なりけり。其後土佐薩摩邊の人の南海に吹流され、年經てやうやう船

三藐院殿—近衛信尹とて近衛流書風の祖也慶長十九年十一月薨す年五十

坊の津—薩摩國川邊郡今の西南方村の内に在り

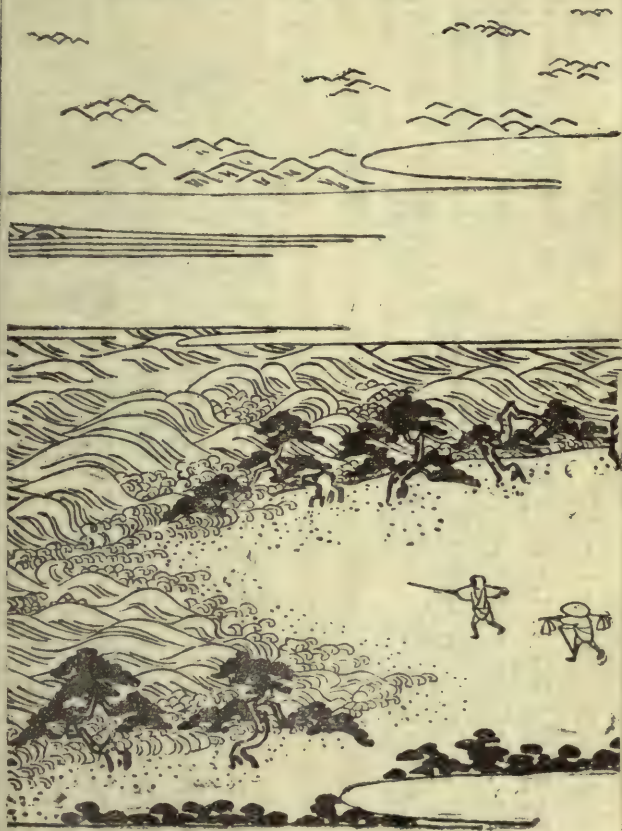
吹上の松は眞砂に埋れて、老木ながらの小まつ原哉。

是は三藐院殿の坊の津へ左遷まし〳〵て暫滯留おはせしとき、此和歌聞し召て、かんぜさせたまひしとぞ。また自らよみて、蜑乙女なりと宣ひしとも云傳ふ。余も例の出次第に「秋風の眞砂が上に渡るなり、夕日うすづく吹上の濱」と口ずさみて過つ。三藐院公の御借座はわづか暫の間と聞しに、此公ましませし餘風にや、今にいたり此國は和歌をこのむ人も多く聞ゆ。

花にあかし紅葉にくらす折々は、住ばやと思ふ山ぞ多かる。

と詠しは、近き頃曾山氏なる人のよみける歌とぞ。余が如き諸國名勝の地に西となく東となく遊ぶには、いつも此歌思ひ出して、心留る景地のみ多し。猶此外にも耳に留る歌ども多く聞しかど、旅の日の事繁くて忘れぬ。誠に名公の餘風遠く殘れりと、其むかしこそゆかしけれ。

○ヲガ島

余が熊野に遊びけるは、冬のはじめなりけるが、其年の夏の頃かとよ、彼地の二木島と

などまであらはれぬれば、海邊のもの皆々あな珍らしと見物に出たるに、しばらくの間に沖より大浪よせ來りて、逃べく間もなくて流れうせぬるもの多かりしといへり。西國の求麻川にても、大雨の後、川水俄に干て河原となりたるを、不思議の事珍らしと見物に出て、大水川上より俄に押來り、流れ死せることあり。これは洪水にて、川上の山崩れ、川中へ落埋りて、暫は川水をせき留けるが、やがてせき破れて大水俄に落來りしなりしとぞ。されば海も川も、不時にゆゑなくして俄に水引去るは、跡にて大水必來る事ありと、用心すべき事なり。

○吹上の濱

諸國に吹上の濱といふは數多所あり。海風荒く、遠淺の濱に、白砂を吹上る地をいづかたにても吹上と名附るなるべし。就中すぐれたるは、薩州西南の濱の吹上なり。其海元より限なき大洋にて、風荒ければ、白砂をうづ高く吹上、又是を吹ちらすゆゑに、其砂の高低さだまらず。殊に濱長く、數十里を一目に望む潔白の海上にて、白砂一點の塵もなく、風景無雙なり。此吹上の濱の蜑乙女のよめるとて、むかしより彼地に名高き和歌あり。

山津浪―二九九頁に出でたる山汐の如きをいふ

しとなり。漢文にては益少かりぬべし。諸國にて碑をも多くみつれども、長島の碑の如きはめづらしく、いと殊勝に覺えし。其津浪の事、其あたりにてたづねしに、あまりふるき事にてもなければ、語り傳へて今におそれあへり。それより段々浦々にて尋るに、浪よせたりし浦もあり、又さのみ高くのぼり來らざる湊もあり。同じ南面の熊野の浦にて、かく違あるはいかなるゆゑぞと其地理を考ふるに、幅狹く海の入込たる、常々に勝手よしといふ湊は、皆其時津浪來りて、人家皆々流れたり。海の幅廣く常々は船のかかりあしく、しかと湊ともいひがたきほどの所は、其時津浪高からず、人家流るゝほどの事はあらざりしとなり。されば海幅狹くふかく入こみて、つねぐ〵船がゝりよく、風のおそれもなしといふべき湊は、別して大地震の時は用心すべき事にこそ。大雨後の洪水又は山津浪なども、山ちかくの地に多きものにて、大坂などのごとき四方皆川々多く、つねぐ〵も水危きやうなる土地には、洪水のうれひはかへってなきものなり。四方へ水のさばけよきゆゑ、激怒のいきほひなき成べし。大海よりよせ來る津浪も亦是に同じと見えたり。すべて津浪は一旦沖のかたへ俄に潮引去りて後、其返大に登り來るものとぞ。寶永の津なみも、一たん海水ことの外に引去り、つねぐ〵見えざりつる海底の岩

西遊記 續編 卷之一

○碑文

未刻―午後二時

唐土には墓碑のみにかぎらず、橋普請、堤普請、其外堂塔古戰場など、多く石碑を建て、其事を千歲の後までも記し殘せる事多し。日本も近年は別して其事多くありて、皆文人の文筆を振舞ふことなり。然るに唐土は文字の國なれば名文奇句もありて、其手柄多けれど、日本は漢文にては俗に通じがたく、しるもの少し。唯風流文雅の慰ばかりとなれば漢文もよけれども、有益の事を専に主意とする碑には、世俗通用の文や勝るべき。余熊野海邊の長島といふ所に遊びしに、佛光寺といふ禪宗の寺あり。其寺に石碑あり。碑面に津浪流死塔と題せり。裏に手跡も俗樣にて、文も俗に聞えやすく、寶永四年丁亥年十月四日未刻大地震して、津浪よせきたり、長島の町家近在皆々潮溢れ、流死のものおびたゞし。以後大地震の時は、其心得して、山上へも迯登るべき樣との文なり。いと質體にて、殊勝のものなり。誠に此碑の如きは、後世を救ふべき仁慈有益の碑といふべ

きはめ―原本きわめに作る

數日夜をへておくにいたること、奇妙の事なり。唐土人も好事の癖ありて、其限をきはめたるも希有の人なり。世界の氣かよひがたく、陰陽の化なき穴中なれば、魑魅魍魎其外大蛇毒むしの類も、生あるものは住がたきゆゑにや、反而奥深き穴中に恐しきものの居たる事は聞えず。されど暗黑の穴ふかく入るは、心細きかぎりなるべし。

人間―この世の中の意

……

說鈴―清の汪琬の著、昭代叢書に收む、雜錄也

錢塘―支那浙江省杭炒府にあり

の案内者して數人を案内せしかども、かの二段目の懸崖を下りし事はなく、語りも傳ざりしに、喜庵好事の癖にて、膽勇あり、かねて文字の力もある人なれば、しひてすゝみて三段目の廣き所までは入りしに、猶其奥を探らんとすゝみしに、嚮導の老人大におそれて、松明の用意少ければ、萬一穴の中にて松明盡なば、再び人間に歸る事叶ふべからず。猶この奥にはいかなるものが住居らんもはかりがたき所なれば、速にいで給へとて、先に立て逃出しかば、喜庵も力なく出て歸れり。此事を記に作り、畫にも圖して、余に示せり。余は道のつもり惡敷て、其地にいたり得ざりし、殘念なりき。いとめづら敷洞穴也。又美濃國郡上の山中にも、天馬の窟とて、甚ふかく奇異の洞穴ありて、數十町奥までも至られ、其奥に石馬ありといへり。先年其洞中の圖をみたりし事のありし。また近江國多賀の山中にも鐘乳石多くある穴ありといへり。昔にて富士の人あな、伊豆國の伊藤が崎のほらあななど、名高き穴なれども、今にては埋れけるにや、入りたる人ある事をきかず。唐土にては、說鈴といふ書に出たる雲南にある洞穴、ふかさ五百里と見えたり。錢塘の人其洞あなの限を極めて、行ぬけて、又地上に出たる事を載たり。五百里といへば、たとへ六町一里にしても日本道五六十里あるべし。數日の餱を携へ、穴の中に

・つひに―原本ついにに作る

其穴入り口ははなはだ大にして、暫入れば行當りて石壁あり。その石壁に小きあなあり。其小きあなをくゞり入れば、甚大にひろきところに至る。此所は少しの日光もなく、暗黒ははなはだしき所也。案内の者松明を多くともし入ることなり。其所の廣さ凡四五十間四方も有るべし。此所に上より鐘乳石夥敷下り居る。又御釜の臺、魚の棚などいふ所あり。皆自然の石にて其形をなせり。段々奥の方に入り行くに、又行當に石壁あり。其石壁の上に横さまに小穴あり。やう〳〵匍匐してくゞり入る程の小あなあり。其あなをやうやうにしてぬけ出れば、又廣き所に至る。此所は二段になりて、高き所あり、又低き所あり。遙に瀧の音聞ゆ。松明をふり立てだん〳〵に進みゆくに、切岸の如き懸崖あり。其がけをやう〳〵にしてつたひ下れば、瀧の流の川ありて、水、足首をひたす許なり。其川を渡り越えて、猶すゝみゆけば、又ゆき當りて石壁あり。其壁上に又小穴あり。それをもくゞり抜れば、又廣き所あり。此所は初の二箇所よりは大に狭くして、纔に五六疊じきばかりと見ゆ。又其向うの石壁に小穴あり。是よりおくはつひに恐れて入りたる者なし。其奥はいかなる所なりや、いまだ知る人なし。余が友喜庵先年此地に遊びて、其近邊の案内知れる老人を嚮導として其穴に入りしに、嚮導の老人も、若き頃より此穴

なまどろすといふによりて黒奴を黒すと呼びたるらし、まどろすは阿蘭陀詞也

かぴたん—阿蘭陀語也カピタンの譯、船長のこと

乾隆帝—清國の高宗帝をいふ

人の雜人大勢道の左右に出て行列を見物し、あるひは立かゝりて行列の中迄も押入り、あるひは木にのぼり、塀に攀て、高聲にわらひのゝしり、いかやうに制しても一向聞入れず。無禮至極なりしかば、こなたよりきびしく咎め給ひしに、猶承知せずして、彼國にては乾隆帝南巡の時だにも行列近く立つどひて見物せり。天子にてさへかくのごとし。それ以下の人の事、さして無禮にはあらずと答へ居けるとぞ。天子の巡幸に左樣なる事、上下和順にして美事なりといへども、法度のみだりなる事は思ひやるべし。すべての事に唐土は文弱の風儀にて、下賤のものには法度の嚴肅なることは行れがたきならはしと聞ゆ。かへつて阿蘭陀などは法度正しきといふべし。朝鮮人などにても、來朝の時、下賤のものども、道中筋にても尾籠なるふるまひするにても、其國の風儀思ひやりぬべし。

○鐘乳穴

備中國水田領の山中に、俗にかねち穴と稱する洞穴あり。かねちとは鐘乳といふ事也。其洞あなの中に鐘乳石の多くあれば名附しなり。松山城下よりは七八里をへだてたり。

黒す又ろす—黒すまどろすの誤、黒奴や水夫の意、水夫

といへども膳椀を別々に備へたるは、唐土などにては思ひもよらざる事といへるとぞ。誠に是を聞ては、日本の風儀正きをよろこぶべき事なり。禮儀正しき中にて、たま〳〵上方の如く、卓子料理も打和してよけれども、此事常に成りてはいとみだりがはしき事なるべし。唐人の感心するも尤の事なり。すべて是に限らず、日本の正敷事は唐人などの不及事多し。日本の内にては、數百千里をへだてたる所の文通にも、いかなる祕みつの事にても、又金銀を贈ることにても、紙一重の封にて糊附にしたる麁略のものにても、いさゝかの間違なく届く事を、唐人聞て、いと不審がりて驚くこととぞ。日本にはいか成横著無頼のわるものにても、馬かた船頭の如き下賤のものにても、封じたる狀をみだりに開くことは決してなき事也。金鐵にて錠をおろしたる器よりも、糊づけに封じたる狀は堅きなり。是等の事常に成り心附ざればこそあれ、唐人などより見ば、驚て感心すべき事なり。近き頃長崎の官に下向し給ひし御人、唐人館阿蘭陀館巡見のときに、阿蘭陀館はさつぱりと掃除し、無用の雜人一人も出居る事なく、黒す又ろすなどいふ下賤のものは、いづかたにおしこめ置し事にや、一人も目にかゝらず。唯かぴたん以下の役人たるものばかり出迎て、禮儀嚴重にて、尾籠の事聊もなかりしに、唐人館にては、唐

の神社とて、一村の神に祭れり。此村はなはだ盲人を忌む。座頭たる者は他所よりもいり來る事ならず。もし是ををかして入る時は、たちまち大なる祟ありて、難儀に及ぶとなり。世にいふ如く、悪七兵衛景清後に盲人に成りしゆゑにや。

卓子—支那風の食卓をいふ、正しくはシッポクといふべき也

簡約—原本間約に作る

○卓子

近きころ、上方にも唐めきたる事を好み弄ぶ人、卓子食といふ料理をして、一ッ器に飲食をもりて、主客數人みづからの箸をつけて、遠慮なく食する事なり。誠に隔意なく打和し、奔走給仕の煩はしき事もなく簡約にて、酒も獻酬のむづかしき事なく、各盞にひかへて、心任せにのみ食ふこと、風流の宴會にて面白事なり。寺院にも黄檗宗などの寺には、不茶とて、精進ながら卓子料理することなり。是日本にてはめづらしきことに思ひて、至て心易き朋友中ならでは行ひがたき事なるに、唐土にては世間常のことなりとぞ。それゆゑに長崎に來れる唐人、日本の常々貧家といへども膳椀みな別々にひかへて、おのれが箸にては香の物一ッもとらざるを見て大に感心し、扨も日本は禮儀正しき國なり。家内のしたしき中にてさへ、日夜飲食の事にかくのごとく禮をみださず。貧家

佐々木巖流云々—宮本武藏父の讐佐々木巖流を撃ちし事をいふ、此島もとは船島といひしが此事ありしより土人巖流の墓を築きて巖流島といへり

て、心地も常ならねば、面白風景も詠つくさず、辛うじて渡り著ぬ。誠に潮の流るゝ事もすさまじきものなり。又此渡の中流に岩山の長きが一ッ、水の上纔に出たり。是を與次兵衛瀬といふ。通船の恐るゝ瀬なり。いかなるゆゑに名附しやと問ふに、太閤秀吉公朝鮮御征伐の時、肥前の名古やまで御出陣ありしに、此海をわたり給ふとて、汐先に押ながされ、御座船此瀬に流かゝり、すでに砕けて海中に沈んとせし所を、四方よりたすけ船馳來り、助け乘奉り、無難に渡り著給ひしとぞ。其時の船頭を與次兵衛といひしが、大かたならぬ不調法なれば、卽時に此瀬に上り、切腹して失たり。其後此瀬を與次兵衛瀬とは名附しなり。太閤の御座船だに流れたりしこと、其汐先の强きをしるべし。又此下に巖流島あり。此島は佐々木巖流宮本武藏仕合の地なり。其事は世の人口に溢るる事なればしるさず。

○景清が母

景清が塚日向の國に、　。世の人皆しる所なり。然るに、いかなる故にや、景清が母は珠琳の人吉の城下より五六里程東の切幡村に祭れり。此所に景清が娘の墓も有り。切幡

○與治兵衛瀨

中國と九州と分れたる地は、長門の國と豐前國なり。赤間が關と內裏とさしむかひて、纔に一里の海をへだてたり。小倉へは筋違にて三里なり。此所兩國の山迫たれば、海の幅狹く、さし潮引しほともに、其汐先甚急にして、誠に大河の如し。其故に、此所の渡海は汐の滿合たる時にのみわたる事なり。汐先には渡海なし。余が赤間が關にいたりし時は、渡の時刻を過て便船一艘もなく、明日まで逗留すべしといふ。いたづらに時日を移さん事も心うくて、纔なる海の面なれば、何とぞして渡るべき手だてやなきと人に問ふに、獵船をかり切りて渡り給はゞ、今半時が程は猶わたらるべしといふ。さらばとて、いそぎ獵船をかり、余僕と二人、船頭二人、都合四人乘りて渡りぬ。初の程はさもなかりしが、中流に至れば誠に大河のごとく、逆卷大波漲り落つ。常々手なれし船頭なれど、急流に押落されて、遙に筋違にこそ渡りぬ。其水勢唯川のごとくにて、海のやうにはあらず。小舟なれば木のはのごとくゆらめきて、坐すべくもあらず。僕はとく病臥しぬ。余も急流の目ざましきにいと珍敷おもひて詠め居たりしが、あまりに強くゆられ

內裏―豐前國企救郡大里のことにて昔は內裏とも大裏とも書けり
汐先―汐のさして來る時

落來る。何事かといふ程こそあれ、大水山を碎き、石を飛し、樹木を拔てまくり落る。其水先に當る所は、人家田地の差別なく、唯一刻の間に大海へ突出せり。さばかりの嶮岨なる高山の峯より、海を切り落せるが如き大水、眞さかさまに落來る事なれば、其勢の急なる事たとへんものなし。人馬ともに逃るいとまもなく、しかと見定めたる者もなしとかや。予も其地に渡りし時、其後をみたりしに、其水筋は大なる谷となり、其傍の田地の中、或は小だかき岡の上などにも、大さ二丈三丈、あるひは五丈六丈にも及べる石ながれ殘れり。かゝる大石の事なれば、人力に動かす事もあたはず、田畑などもさまたげられながら其まゝ捨置けり。是を見るにも、まことにかゝる大石の水の爲にながれ下れる事、其時の水勢思ひやられたり。今も櫻島の小兒のうたふ歌をきけば、「島のおたけがどろ〳〵鳴るぞ、村丈はよにげ、山汐が來る」とうたへり。其ときのおそろしかりけん事、みるがごとくなり。

すべて高山大やけの後は、多くは大水溢れいづる事あるものなり。天明癸卯信州淺間がたけ大燒の時の洪水もおびたゞしかりし事、みな人のしるところなり。その委敷事は又別卷にしるせり。

村丈はよにげ―村中早く逃げよの意、むらぢよはむらぢう、はよは早の訛と思はる、むらぢよに村丈の充字は當らず

關羽―蜀漢の劉備に仕へて節を全うしたる人後世祀りて關帝となす

安永年間云云―安永八年の出來事をいふ

ふとむは、唯此清正公一人なり。誠に清正の人となり、義を先としていつはりを行はず、勇にして頗る仁慈の心あり。其頃の武士の中にては殊にすぐれてぞ見えし。誠に人心の義に感ずるは和漢とも同じ事にて、唐土にても人多き中に、關羽のみ今に神と祭り、諸國とも尊むあまり、日本の地まで關帝堂といふものを建てゝ、長崎邊の人は甚尊信する事なり。清正も其事跡は異なれども、其勇敢義烈の氣象、關羽の風あれば、人心の歸する所ありて、後世までも其神を祭れるにや。

○山汐

安永年間、薩摩の櫻島山大に燒て後、山上より大水溢れ出て、田地民家大に損ぜり。所の人これを山汐といふ。抑此櫻島といふは、海中にありて、麓のめぐり七里、山の色黑く、一峯に聳て、比叡山二ツばかりも重ねたる如くに高し。ふもとのめぐりに人家田地ありて、富饒の所なり。其峯の燒たりし事は希代の珍事にて、くはしき事は別卷にしるせり。其燒漸鎭りて、人々も再び活たる心地して悅あへる所に、或日又山の峯震動しておびたゞし。すはや又燒上るかと見る程に、山の峯より雪をとけるが如き物眞逆樣に

鉅鹿氏―鉅鹿氏部とて本姓は魏氏長崎の人也

たふとむ―原本とふとむに作る

りて埒の明ざる事を、東海の墓普請といふ。此人は唐土より明の亂世をさけて日本に渡れる人なり。大福有の人なり。今にいたり其子孫東海徳十郎と名のりて、唐人の通事なり。長崎に遊ぶ人は必此はかをみるべき事なり。目を驚す事なり。又近き頃まで京にありて、明樂の師範せし鉅鹿氏の先祖の墓も、長崎の西山といふ所に有り。其製東海氏の墓のごとし。されど大に劣れり。石碑の如き物に、明故伯毓禎魏公六府君 故考健侯魏公九府君 墓道、如此ほり附たり。前の石階に衍瑞東南の四字を大字にゑりたり。又其一段下に椿林鐘秀の四字、大字を横に彫たり。此墓小なりといへども、世上の墓にくらべては、大國の君の墓所といふとも及ぶ所にあらず。其ほか唐人の墓は大かた大にして美麗なり。

○清正公

肥後の國熊本に、加藤清正の靈を祭りて清正公の社といふ。熊本にては別ての大社にて、一國の尊敬はなはだし。宮居のありさまより、社頭の木立まで神さびたれば、年ふるく祭り來れる事とぞ思はる。誠に天正のむかし、天下大に亂れ、英雄豪傑きそひ起り、武勇の大將かず〳〵ありし中に、今の世にいたるまで神靈をあがめ、縁もなき人の祭りた

天の四郎―天草四郎時貞の事、天草亂徒の首魁也

銀五十貫目―八百三十三兩餘

るものにて、珍敷ものなり。又大なる池あり。池の傍草うるはしく、駒多し。此牧にても、年ごとに駒多く育といふ。かく高き山の絕頂に廣き牧あるも奇妙の地なり。下には東へ向ひ、島原の方に道す。城下まで下り坂五里なり。其道より天の四郎が籠りし原の城など見ゆる。今の城下よりは南の方にて、やはり此山の裾なり。東南の方に海をへだてて程近く天草の島なり。予も島原の城下に一宿して、又ふねに乘り天草に渡れり。

○東海氏の墓

長崎春德寺の山上に東海氏の墓あり。其廣大美麗なる事日本第一といふべし。其墓の體、日本の墓の作りやうとは大にちがひ、山の半腹を穿ち、向うは石垣の如く疊あげ、中をたひらにして石の机あり。石の門あり。石の宮あり。四方の垣もみな石を彫りて、種々の花鳥を細密にほりたり。石の柱、石の門、皆鳥獸草木を彫附、あるひは文字を彫たり。其外いろ〳〵の道具みな石にて作れり。其構廣く、其細工精密にして、筆の書つくすべきにあらず。はじめて造り立たる時の費銀五十貫目いりしといふ。其後猶心に飽たらず、二三十年が程は常々石工をやとひ、墓普請せしとぞ。それよりして長崎の諺に、手間い

堂上家―公家

沙彌―僧行の未だ熟せざる初心の僧

幽に聞ゆ。此寺を一乘院といふ。むかし文武聖武兩朝の御歸依深く、其頃は殊に繁昌し猶近きころ天草の亂迄は、寺も多く四十八院までありしが、賊徒此山に據りしに依て、公よりこぼち捨られ、今は纔に此一乘院ばかりこそむかしの俤を殘せるとぞ。今の院主より六代前までは、京都より堂上家の公達を下し住持有けるよし。いかなる御家の公達にてかありけん、かゝる鄙のはてに來り給ふ、其名も聞まほし。一乘院を尋ねしに、院主迎へ入れて、いろ〳〵物語し、風雅の人筆の跡のこしたまはれといふ。予も拙しと辭せしかど、强て求るにいなみがたく、七言絶句一首を作りて與ふ。院主よろこび、晝飯など出してもてなす。それより沙彌案内して地獄めぐりす。焦熱地獄あり、叫喚地獄あり、藍屋地獄あり、餅や地獄あり、鍛冶や地獄あり、酒屋ぢごくあり。其外かず〳〵みなそれ〴〵の模樣ありて、多くは皆熱湯の池なり。其湯墨よりもくろく、雷のごとき聲して湧上り、或は石ほどばしり、煙卷、炎燃て、其おそろしきこと書つくすべきにあらず。東國にては、越中立山、津輕の燒山、皆地ごくありといふ。此類なるべし。もしあやまちて落入らば、たちまち爛れ死すべし。久敷みるべき所にもあらず。十箇所許めぐりて沙彌にわかれ、下山す。眺望はいふもさら也。此峯には瓔珞躑躅といふものあり、見事な

り。其形羊に似て色黑く、毛ながきもの也。薩州鹿兒島にも是あり。隅州の内にはやぎの牧ありて、多く育てりといふ。何の用になすものにや知らず。打見たる所は、唐めきておもしろきもの也。南都の町々、軒下に鹿猿多く人になれたるが如く、國々土地土地にて禽獸にもかはりあり。

○地獄

肥前國雲仙が嶽は西國の名山なり。山のふもと皆海にて、纔に北の方ばかり縷のごとく陸に連れり。高さ三里、唯一峯に秀でゝ、甚見事なる山也。唐船などの長崎へ渡るにも、大洋の中にて、此雲仙が嶽を目當とするとて、予も長崎より歸る時に、千々輪灘を船に乘り、此山の麓の千々輪といふ村に著て一宿す。此里は天草一揆の時、賊徒の中に名高かりし千々輪五郎左衞門が在所なり。此千々輪より山に登る道嶮敷、水なくして誠に難所の山なり。やうく、晝過ころに絶頂に登り著く。絶頂は平地にて、民家そこゝに見え、田畑も多く、折しも稻心よく實り、其中に幅三間ばかりの川ながれたり。天外の一小世界にして、實に地上の仙境ともいふべし。向うをみれば茅葺の佛院みえて、撞鐘の音

天草一揆――三代家光の時大阪落武者天主教徒と共に兵を擧げたるをいふ

なるまじけれど｜斯る橋は大河には架す可からざれどと也

ふつゝかなるーいやしげに見にくき

石橋なり。他國の石橋といふは一枚石にてかけたるものなるに、長崎の石橋は小き石を切りて、石がきの如く疊て兩方より合せたるなり。長き橋はふた筋に水を通ずるなり。是を目がね橋といふ。唐繪にゑがく所の橋は大かた此風なり。下より水溢るれば崩るゝ事もあれども、上よりいか程重き物をのするといへども動き破るゝ事なしといふ。誠に大河にはなるまじけれど、長崎の川は大かた京都の堀川程の大さなり。萬代不壞の橋なり。もとは唐人來りて作れりといふ。彼地は柔らかなる石たくさんなるゆゑにや。京などにても、此ごとき橋を作らば破損の憂なくしてよかるべきものを。

○家猪

安藝國廣島の城下、其繁華美麗なる事、大坂より西にてはならぶ地なし。其町にぶた多し。形牛の小きが如く、肥ふくれて、色黒く、毛はげてふつゝかなるものなり。京などに犬のある如く、家々町々の軒下に多し。他國にては珍らしき物なり。長崎にもあれどもすくなし。是は彼地食物のやうにするゆゑに、多からずと覺ゆ。唐土などには多く飼そだてゝ、食用にする事なり。琉球にも多しといふ。又長崎にたま〳〵やぎといふ獸あ

時雪封じて生類は住事なりがたきゆゑ、毒蛇猛獸ある事なし。唯鳥獸草木の種類の多きは、天下此霧島山に勝るところはあらじとぞ覺ゆ。又山中に溫泉の湧所も數十箇所あり。硫黄のいづる谷もあり。水精は馬の脊越邊の谷底に、日かげにかゞやきて遙に鏡の如く、或は月出の如くみゆるもの所々にあり。其大なる事思ひやるべし。しかれども、絶嶮のところにて行がたく、殊には其邊神變ふしぎ多き邊なれば、砂一粒といへども山神のいかりに觸るゝとて、とる人なし。又黑尊とて、千丈の黑岩谷そこよりはえぬきたるあり。奇絶言語に及ばず。其外いろ〳〵の珍奇いひつくすべからず。此山中に一月も二月もありてみめぐらば、面白き事限あるべからず。されども中々仙骨を得ざれば叶ひがたき事也。すべて天下の高山は、役の小角、釋の泰澄などの開山多きに、此霧しまやまのみ佛者のいまだ手を附ざる所にして、唯開山は伊諾伊册の二神とやいふべき。誠に珍敷山なり。

○目鏡橋

長崎の橋はすべて唐風の作りやうなり。兩岸より切石を疊上て、橋杙なしにかけ渡せる

役の小角—文武帝の頃の行者にて能く神通力を得て鬼神を驅使したりと稱せらるゝ人

泰澄—是亦文武帝の頃の高僧にて神融禪師の號を賜はりたる人、神護慶雲二年三月寂す年八十六

杙—原本杭に作る

いふ將軍家宜に仕へたる碩學にて幕府の爲に獻策する所少からず享保十年五月卒す享年六十九

なり、二神垂跡の義、天の逆鉾の義など、皆予ふかく考ふる所有りて、一說あれどもこと長ければ別にしるして、此書に略す。西の峯も高さは東の峯におとらず、雲間に聳えぬれども、神跡にあらざるゆゑに、世の人のぼる事なし。唯此山の高く、しかも廣く、大なる事無量なり。麓のめぐり三十六里、山の中に大なる池五六十もあり。中にも大波の池、紫の池などは、めぐり三里もありて、湖水のごとしといふ。此山には蟒蛇多く住て、池の邊最多く、樵者といへども池の邊には行事なし。もし池近くを通る時には、無言にて通るとなり。人語のひゞきを聞けば、大蛇かならず出て人をのむといふ。又野馬といふものありて、形馬のごとく、髮長くして地に引き、おそろしき姿の獸なれども、人を害する事はなしと也。わが山にのぼりし時も、初に案内のもの此事をいひて、もし見給ふとも驚き給ふべからずといひし。予もし見ば珍らしかるべしと思ひしかども、折惡敷て出ざりき。其ほか種々の毒蛇、惡獸、大蜘蛛、大蝦蟇等、夥しと也。是は南國ゆゑ、かゝる高山深谷なれども、雪封ずる事なく、常に暖氣なるうへに、格別に廣くて、人跡かよはざる幽僻のところ多きゆゑに、物生じやすく、冬も蟄せずして、かゝるものども多しと見えたり。北國にも、越中立山などは、高く廣き事霧島におとらざれども、四

暴虎馮河の勇—虎を搏ち河をかちわたりする如き危險を事ともせざる匹夫の勇
ゐこん—原本いこんに作る
白石先生—新井白石、名は君美と

えてひた下りに下るに、遙の下に先達若ものかすかに見えて、大さ豆のごとし。嬉しくていそぐほどに、下るとはなしにすべり落て、須臾の間に二人の前に著ぬ。恙なかりし事のみともに悦び、其夜くれ過る頃、宮居の傍の坊にかへりぬ。元來急峻なる山なれば、百五十町の間なれども、下には甚速にて、暫時に下る事なり。今度の登山暴虎馮河の勇なりしかども、もし馬の脊越より下り來らば、生涯のゐこんなるべからんものを、よくも絶頂を極めたりぬ。宮居より左右に分れて、西のみね、東の峯といふ有。登る所は東の峯なり。東西唯二峯のみなれば、登りかゝりてより絶頂に至るまで、唯一筋に登る事なり。他國の高山は多くは登る所もあり、又下る所もあるものなるに、此山のみ水筋にも從はず、唯登りにのぼるのみなり。ふじ抔の登に似たりといふべし。山の高き事思ひやるべし。かく二峯東西に對し聳えたるゆゑに、昔より高千穗の二上嶽といふ。神書にいふ所の山是なり。別に今世の人の高千穗の峯といふ山此國にあれども、甚の小山にして、神書にしるせる山にあらず。高千穗の峯といふは此霧島山なる事、種々の慥なる證據あり。此山に登るものはおのづから知るべし。白石先生をはじめ、諸先哲、唯今世に稱する所の高千穗を神代の舊跡といはれしは、身其地に遊ばざるゆゑに、眞跡をしらざる

石突―鎗長刀鉾等の柄の末端をいふ

千辛萬苦して馬の脊越八町が間走りぬけたるに、先達がいひし如く、それよりは眞直に登る所あり。此ところにいたれば、天地又常の如くにして奇怪なし。唯いきを限に登る程に、つひに絶頂にいたれり。絶頂は尖りて、纔の地面に天の逆鉾あり。是を見得しときのうれしさ何にかたとへん。逆鉾のありさま、全體は唐金の如くに見えたれども、風霜にさらせるものなれば、青く鏽てしかとしれがたし。長さ一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程にて、さかさまに地中にたち、其石突の端の所に、南面に鬼面のごときもの見ゆ。是も風霜にされたれば、鼻目しかとは見えがたし。土中に入りたる先の方は、何程深く入りたるやしるべからず。唯絶頂に此鉾一本のみにて、外に堂宇等のごときもの一ツもなし。神代の舊物なりや、其程はしらずといへども、實に三百年五百年位の近きものとは見えず、天下の奇品なり。もし銘なども有るやと、くはしく見しかども見えず。しばらく此絶頂に徘徊するに、天氣晴明にして、四方目の及ぶ限さえ渡り、其心地よき事今に忘れがたし。されども、かゝる所は久敷留るべきにあらざれば、いそぎ下りたるに、馬の脊越にいたれば、又初の如く、天地晦冥して、怪異益はなはだし。こと〴〵く筆に盡すべきにあらず。殊に山上の有さまは人間に洩さゞる山法なり。恙なく馬の脊越をこ

燒飯―道明寺糒の炒りたるものなるべし

足をはかりに―足のつゞく限り

も叶ふべからず。登山も是迄なり。これより下山すべしといへば、力及ばず、本意なくそれより下に向ふ。扨夫より纔に十町ばかりを下れば、天氣晴朗にして、風おもむろに、四方の眺望始の如し。しばらく休息して、燒飯など食し、こゝろを鎭めしかば、若ものもけしき常のごとく、さきにはいかにしてかばかりは恐しかりつるにやと、三人打わらふ程なり。われつら〱おもふに、かゝる事のありて妨にもなるべからんかとて、凡庸の人を同道せざりしなり。然るに今若ものが爲に、予までも絶頂をきはめずして、是より下山せん事、生涯の遺恨なるべし。何とぞして一人なりとも登りたきものをとおもひめぐらして、先達にこれより絶頂までは道程いかほど有ると問に、馬の脊越の長さ八町、それを過て急にのぼるところ十町ばかりもやあらんといふ。それなれば纔の道なり。紛れ道やあると問に、兩方谷なれば紛るべき道なしと答ふ。さらばあまり殘念なれば、予は獨歩して絶頂に登るべし。此ところに若ものを守り居て、われが下り來るをまちくれよ。これより下は案内なくては一あゆみもすゝめがたければ、かへすがへすも賴なりといひすてゝ、とゞむるをもきかで、足をはかりに登りたりしに、件の馬の脊越に至れば、天地たちまち變じて初の如し。先達がをしへに任せ、折々はうつぶしになりて風をさけ、

とられ、はなたれ―共に吹飛ばさるる意也

の如く、佛神の如き事もあり。あるひは足下より虹たちのぼり、たて横にたなびきて、織りなせるが如くなる事もあり。又天地ともに金色になる事もあり。其外奇怪ふしぎなかなかいふもおろかなり。靜に是を考ふるに、是皆谷一面の猛火によりて、又陰氣もあつまり來り、火の上に雨そゝぎ、雲霧覆ふがゆゑに、水火相激して震動雷電し、又水火薰蒸によりて、種々の形みゆるなり。又硫黃焰硝の氣あるうへ、それに水そゝぎたるゆゑ、種々の匂もいづる事なり。又折々一陣の風ふき來る事あり。此ときは先達教へて急にうつ臥に倒ふさしむ。匍匐にならざれば、風の爲に此身をとられて、猛火のうちに舞ひ落るなり。折ふしは風の爲に取らるゝものあるゆゑに、此山にては紛失する人多しといふなり。予も殊に此かぜを恐て、少しの風にも急にうつぶしになり、地に取附て風にはなたれざるやうにせり。しばしにて又忽に風もやみ、天はるゝ事もあるなり。須臾の變幻定ある事なし。此ところに取かゝりしより、さしも勇氣の若もの大に恐れ、足戰きて立事あたはず。われと先達と前後より介抱して、いろ〳〵と耻しめ、勵し、しばしが程は引行しかど、後には目見えず、顏色變ぜしかば、いかんともしがたく、ほとんど難儀に及びしに、先達いふやう、けふは山も格別にあらし。殊にかゝる人引具し行ん事いかに

馬の脊ごえ
ー原本馬の
脊ごへに作
る

て、衆山は波濤の如く、大海は青疊をしきたるがごとし。其中に櫻しま山突然と秀でゝ、盆石をおきたるがごとし。絶頂より白き煙四時に立のぼりて、香爐のごとし。景色無雙、筆につくしがたし。さて件の草ばらの山をのぼる事又五十町、それより上は草もなく、唯栗ほどのやけ石計なり。こゝに至つて登ます〱急峻なり。扨このあたりよりうへ、段段のぼるにしたがひ、天地の氣しきやゝ變じ、不時に下の方より雨そゝぎ來り、あるひは風よこさまに巻來る。又眺望のいとまなし。それより二十町ものぼりて、馬の脊越といふところにいたる。また御鉢めぐりともいふ。このところはのぼらず、唯平にゆくといへども、左右皆谷にて、劔の刃の上をゆくごとく、足のふむところ纔に馬のせなか程なれば、馬の脊ごえとはいふなり。足をはこべば、栗のごとくなる燒いし左右のたにへなだれ落る。其行ところの狹きをしるべし。さて左の方は萬仭の谷にて、底は雲にて眼及ばず。右の谷はふかさ三四町、あるひは五六町にて、谷にみちて猛火燃えあがる。此馬の脊越にかゝりて後は、唯何となく震動して、地軸唯今くだけをれて、此山微塵に成るやうに覺ゆ。また腥きえもいはれぬ氣ふき來り、あるひは墨の如くなる雲うづまき來り、同行のものさへも一向にかくるゝ事もあり。あるひは前後左右に異形の雲煙あらはれ、鬼神

選み—原本撰みに作ること例の如し以下大方同じ

二神—前にいへる册諾の二神也

道すぢ—原本道すじに作る

して、旅宿へ集會の人の中にて選みしに、旅宿の近きあたりに、年若き勇壯の男子ありて、われこそ其山へ同道すべしといひしかば、則打つれて唯二人、霜月八日といふに薩州鹿兒しまを立て、日向國におもむく。薩隅日三州は、嚴寒のときといへども、雪霜を知らぬといふほどの暖國なれば、かゝる高山へも霜月に登らるゝ事なり。ことに此年は格別だんきの年にて、此ごろやうやう綿入一ッ著するくらゐの事なりしかば、少し時節もおくれしかど、おもひ立しなり。扨海陸二日路をへて霧しま山に入、數十町のぼりて、霧島の宮居の前に著く。二神垂跡の地なれば、宮居今にいたり殊に美々敷、此近國にての大社なり。伏拜みて黄昏に及びぬれば、傍の山下坊といふ坊に宿す。この坊にて先達の案內者を宵の間にやとひ、明朝夜の間より登山す。雜樹生ひしげり、日かげだに洩れざるほどの山を、しかとしたる道すぢも見えざるに、唯案內者のあとに從ひ、ひたのぼりに登る。その間奇樹異草名もしらず、目なれぬものはなはだ多し。これは南方暖氣の山なれば、生くさの品類も多きなるべし。全體、草木、北國の山などとは格別に種類多し。かくのごとき所を五十町のぼりつくせば、それより上は樹木一本もなし。唯芝の如き草のみ生ひたり。其ところにいたれば四方豁達とうちはれ、薩隅日の三州一望の中にいり

册諾—伊弉册伊弉諾の二神

天の登ぼこ—天の瓊矛也、ぬぼこと訓ずべきを日本書紀にかくとぼこと訓ぜることに據りたるものらし、俗訓也

西遊記　巻之五

○天の逆鉾

むかしあめつちいまだひらけざりし時、册諾二柱の御神天の浮橋の上より霧のうみを眺め下し給ふ。小島のごとくに見ゆるものあり。二柱の御神天の登ぼこを以て是をさぐり見給ふに、國なりければ、則此ところに跡をたれ給ふ。是霧島山と名づくる由來にして、其鉾を逆しまに下し給ひしが、今に至り其まゝに此山の絶頂にたちて有るを、天の逆鉾といふ。誠に神代の舊物にして、奇絶の品又外に是を比すべきものなし。人々皆珍らしと尊びて、拜せんことを希ふといへども、此霧島は格別の高山にして、殊に火もえ、風動き、其外種々の神變不思議怪異珍奇多く、登るもの不時に紛失する事抔毎度の事ゆゑに、薩州の人といへども恐れて絶頂に至るものすくなし。予久敷この逆鉾の事聞居てゆかしく思ひ居つれば、鹿兒島逗留の時節志を起して登らんとす。然るに山中奇怪多しと聞けば、召連し僕などは、凡庸の者なれば、もし恐れて紛失などせば悪かるべしと思案

舜水先生―朱之瑜のこと、明の浙江餘姚の人にて明滅びて後我國に來り寛文五年水戸光圀に聘せられて賓師と成る天和二年四月歿す年八十三

なれるならんか。何分にも、君臣の禮は嚴重にて、殺活の權柄をも司る事にあらざれば、風儀の厚くなる事はあらじ。明の亡人舜水先生常陸に居られし時、纔に百石二百石の侍にて一人召つかへる奴僕も、其主を敬するをみて、大に感心して、明朝も君臣の禮儀かくの如く正しくば、かくの如く義を知る人の少くて空しくほろびはすまじきものをとて、涙をながされしとぞ。明末などは主從の禮はなはだみだりにして、家來たる者主人より先に立て歩行し、主人と同席し、主人と同食し、畢竟傍輩のごとくありしとぞ。我邦武家の君臣の禮正しきをみば、舜水の歎息せられしもまことなり。かゝる事を思ひ合しては、日向邊の主從の恩義厚きはうらやましき事なり。東國にても、甲州上州の邊かくの如くにて、富有の農民は家の子といふものを多くかゝへ居れり。何ごとに附ても、古風淳朴なることは田舍にのみ殘れり。

居る―原本いるに作る以下同じ
三都―江戸京都大阪
惡聲―惡評判

きほひにて、無理に人をふくせしめ居る事になれば、月々年々に、忠孝よりも、禮儀よりも、金銀を尊く覺ゆる風俗になりゆくなり。武家はかく別なれども、三都の町家は、たとへ其奴婢いかやうの無禮不法をなしても殺す事は扨置、こぶし一ッを與る事もならず。もし怒に乘じて打たゝきなどする時は、公邊殊の外むづかしくなりて、其主人なんぎを蒙り、つひには家をも破る程に至る。此ゆゑに、いかなる無禮不法ありても、主人は身を思ひ、家をおもひて、奴婢に屈し居り、奴婢は此事を知り居るゆゑ、主人を恐るゝ事なく、いかやうの事をなしても、其家を追出さるゝばかりにて、其隣家に奉公しても、前の主人よりさしかまふ事ならず、主人家は笑ひそしられて、家の惡聲を世間に弘むるばかりなり。名は君臣なれども、畢竟は寄合の傍輩同樣の交ゆゑ、主人の威勢年々に薄くなり、奴婢の心月々につのりゆく。それゆゑ奉公はらくなる事になりて、百姓たるものの子も皆々都會へ出るやうになり、田地を耕す苦勞をまぬがれんとするゆゑ、田地年々に荒れ、都會の遊民は月々多くなり、世けん自然に困窮にも及び、奴婢の給銀もむかしとは以の外に高料になりて、其働は前々の十分の一にも不及事なり。かくのごとく君臣の禮儀下々より亂れ來れるゆゑ、おのづから中人以上にも其風うつり及びて、禮儀廉恥の風儀薄く

にわが家と心得、大切に忠を盡すゆゑ、主人もまた我子のごとく覺えて、恩愛ふかし。まことに主從の心厚くみゆ。今上方にては人を賣買事はきびしき御制禁にて、世の中にもおそろしき事のやうにおぼえたるは、人を賣買といふ事は遊女ならではなき事にて、其上其買出すといふに、其親々納得して買たるにはあらで、人の子をかどはかしきたれる者なれば、その親々歎きかなしむ事ゆゑ、御制禁とはなれるならん。日向邊の人の賣買はこれには似も寄らで、其親も悦び、其子も悦ぶ事なり。上方の如く、賣與ふべき事ならねば、夜中に幼き子を捨て、折あしく人なければ、狗猫の食となるのあはれなるにははるかに勝れり。また上方の主從といふは名ばかりにて、近來は主の方より反而奴僕のきげんをとりてめしつかひ、奴婢よりは反而主人を下目にみて、つとめてやると心得、春秋の出代時をまちかね、半年々々にて主從あたらしくなり、其前の主人にゐる内より、先のあり附どころを約束し置て、出たるあとにては主人家の事をそしり笑ふ事、讐敵の如し。奴婢かくのごときの心ゆゑ、主人も召使ふ内は、隨分おもてむきは奴婢のきげんをとりて逃さらざるやうにすれども、内心はわが家の奴婢をかたきのごとく思ひ居るなり。かくのごとくなるゆゑ、主從の恩義年々に薄くなり、君臣の禮もみだれて、唯金銀のい

爲を先とし、我身の事を後にすべしとて退きぬ。

○奴僕

日向邊の農民、富有なる者は、一生買切にしたる奴僕を多くもてり。いかなる事ぞと問に、米良、五箇、其外此近國の山中より出る奴僕の親たる者へ、鹽一俵、米五升許をあたへて、其子を一生ふつゝに買切る事なり。山中の者は賑なる地へ出る事を面目たのしみとして、親たるものも子の出世する事のやうに覺え、子たる者も悦すゝみて出る事なり。かくのごとくして、一生を買切りたる奴僕は、たとへ打殺しても、其主人の心任にして、親もとより一言のうらみいふ事なし。男女ともに此通の奉公人甚多し。田地多く持たる農民は、多く召かゝへ置ゆゑに、其者ども私に通じて出生する子をもふかくは禁ぜず、主人よりも厚く世話して養ひそだつるなり。これを庭の子といひて、譜代相傳の奴僕にて、わけて其家を我家とこゝろえ居て、眞實忠勤をつくす事なり。主人家の娘を嫁せしむる時には、かならず此婢女を添てつかはすなり。もし其奴僕主人の氣にそむく時は、主人のこゝろ次第に賣拂事也。一生を托せる家の事なれば、其主人家を賓

ふつゝに―悉くの意にて、ふつにの轉訛したる俗語也

譜代―原本普代に作る

托―原本詑に作る

君子思云々ー憲問篇に曾子曰君子思不出其位とあるをいふ

祿ー原本錄に作る

商賈ー原本商價に作る

榮耀ー原本榮曜に作る

つとめ行へば、其しるし忽あらはれて、其人に屬する人の安堵する事なり。いかなる人にても、人の爲に成事は其身に附てあるものゆゑに、是を仁斯至とはいふなり。其人々の身の分に附て、いかやうにも誠は盡さるゝものぞ。論語にも、又、君子思不出其位とも教給ひて、我身の分より外の事は思ひ志すまじき事なり。そこの如く、仁は我等如き匹夫にては行はれずと思へば、仁を行んと欲すれば、我分より外の望出來て、終には惡人ともなりぬべし。此所手近き事なれども、大儒先生もかく手近く人々の分上に附て說聞せ給ふ事まれなれば、學問の益多からず。醫者も人の疾苦を眞實に救んと志せば、人また其恩義をかんじて家富み、名もあらはる。武士も君の爲と志して勤むれば、其忠顯れて祿も增し、位もすゝむ。商賈も先祖よりの家の爲、家屬の爲、一類親屬の爲にもと志して其業を出精すれば、其誠通じて利德を得、家富み、身も安し。今の世の輕薄風なるは、醫は美服を著し、人の上席に坐する事を志して醫となり、武士は祿を增し、位を昇らん事をこゝろざして奉公をなし、商賈は身一分の榮耀安樂をこゝろざして金銀を貪る。皆仁の道に違ふが故に、わざはひを蒙るもの多し。そこにも此所をよく〱心得て、仁をうしなひ給ふべからずといへば、一座みな歎服して、今日より志をあらため、人の

吾欲仁云々 ―論語述而篇に吾欲仁斯仁至矣とあるをいふ

ども、手近くいふ時には、禽獸の如く我身勝手にせずして、人の爲に成るやうにする事を仁といふなり。故に論語にも、吾欲仁則仁斯至とはの給ひしなり。そこの詞のごとく、天下國家を治身にならざれば仁は行はれぬものならば、いか程仁を欲するとも斯に至る事はあるべからず。匹夫にても仁を行ふ道あればこそ、孔子もかくはの給ひしなり。わが醫を行ふも則仁を行ふなり。若治療を求る人ありて、其疾苦を救へば人の爲に成る。もし又治療を求る人なくても、醫學を修行する、則仁を行ふなり。醫學上達して精妙に至れば、人に敎へて、其人々に世間の人の疾苦を救はしむ。もし從ひ學ぶ人なくば、書物にあらはして後世末代の人に告げをしへて、後世の人民の疾苦を救はしむ。しかれば我醫術を行ふも、又机にかゝりて醫書を修行するも、見臺によりて醫書を講ずるも、誠を盡して眞實にさへすれば、是みな仁を行ふなり。醫業のみにかぎらず、神主の神明に祈請して人の福德を祈るも、坊主の佛道を弘通して人を善道に導くも、武士の其君に忠勤して其國を安んじ、人民を安堵せしむるも、商人の商賣を出精して家を富し、親屬をやすんじ、出入の者を惠むも、職人の其業に勉めて家内のものを養ふも、皆何れも仁を行ふといふべし。然ればこそ、何人にもあれ、其人其身の分々に附て、誠を盡し

―自分の身分

そこ―其許足下

をこがまし―原本おこがましに作る

上無邊の見識出て、反而尋常の俗人にだも及ばざること、今の世のうれひなり。予も年若き時は客氣ありて、著實の風に遠かりし事を、やう／＼に三十に近くしてわきまへ知れるもいとおろかなり。薩州に遊びし時、日夜旅宿に來客ありて、色々の事を雜談しける折ふし、一人の才子いひ出しけるは、わが輩學問に志て、日夜聖經賢傳を讀學ぶといへども、畢竟は益無き事にこそ。たとひ學問成就したりとて、論語などに教給ふ仁などいふ事は、解し得とも行ふ事は叶ふべからず。唯文字をよくよみ覺え、人に物知りと稱せらるゝばかりの事にこそ。先生も口には聖經を尊信し給ふやうなれど、推量するに、眞實に尊信し給ふとも見えず。さればこそ行は醫療の事のみをなし給ふのみにて、仁など行はんとこゝろざし給ふ事は露見えず。又たとへ志し給ふとも、行ひ給ん日はあるべからずといふ。余驚き、そこには扨も迷ひ給ふ人かな。さるにても世間大かたはそこのごとくこそ思ひ居給ふべけれ。そこには中心に思ふ事をあからさまに云いだしたまふは、すなほなるともいふべきにや。をこがましき申事ながら、我おもふ所をくはしく語り聞せ申べし。しばしのいとまをかきて心靜に咄し給へ。又聊の益にもなるべき事も有りぬべきか。それ仁といふ事は、大にしていふ時は天下を安んじ、人民を救ふ事なれ

目より稍高く眉の邊までの高さにあぐるをいふ、故に此は周圍の山山が阿蘇山より目八分に登ゆるをいふ也

堤のごとき山きれて、川流れ出たり。傳へ云、上古の世は、此地湖にて、阿蘇山はみづうみの中の島なりしが、阿蘇の明神むかし此國の守なりし時、西の方の山を切り通して水を落し、湖を干て田地となせりと。誠に此地の樣子をつらく見るに、湖なりし事虚説にはあらじと思ふ。又人智の古今なき事を感ず。それより山を下り、ふもとの本社ふしをがみ、神主は詩歌のすき人ときけば、音づるゝに、いなみもせずいと親しくもてなしぬれば、ひと日ふた日留る。其家の事尋しに、神孫たゞしく天正の頃までは三十五萬石を領せるが、豐後の大友氏の爲に零落せりとぞ。今にては其おもかげにもあらず。然れども、位は貴く、二位まですゝめる例なり。ふるき家なれば、色々珍敷事も多かり。殊に下野の狩といふありて、其狩の法今に傳へり。むかし鎌倉家の時、富士の牧狩の催有りしかど、狩の法式たしかならざりしかば、梶原をして此阿蘇の大宮司の家へ尋させられけるとなり。今に其時の景時が尋の書面持傳へり。

我身の分上

○仁斯至

我身の分上を知らず、心志に根脚なければ、聊か才氣を具し、頗學問に通ずる程、向

渡せる―山かづらはまさきの葛にて結びたるかづらをいへど古歌に「まきむくのあなじのひばら春來れば霞をかけて山かづらせり」とあるに基き霞の棚引く意とせる也

目八分の山―目八分とは物を捧げ持つに顔の八分目卽ち

り。とく起出て、もゆるところにいたる。大なる穴あり、是をみかどといふ。中のみかど、北のみかど、法性崎と名附く。都合三箇所なり。當時さかんにもゆるは法性崎なり。たとへばふいごの口のごとし。黑煙天を覆ひ、時々火出て、其音のおびたゞしき事、唯今此山みぢんに碎る心地す。其勢は筆に書つくすべくもあらず。しばし見居たれど、我身も山とともにくだけさるべき心地して、あくまでも見つくしがたし。少し下れば、大なる堂あり。內に額あり、壽安鎭國山と書り。是はもろこしの帝より、むかし此山の靈異なる事を傳へ聞給ひて、此五字をもて山を封じ給ひしなり。堂は傾き損じたり。人はもとより住べき所にあらず。むかしは是より下つかたに寺院多くありしといふ。すべて絕頂は海濱のごとくにして、硫黃の氣にて白く見え、石は皆金くその如くにして、土砂ある事なし。しばし下れば、土見え、草ありて、はじめて世界の景色あり。西の方にはるかに雲仙が嶽あり。北の方に豐前の彥山を望む。其外の眺望は四方の山にへだてたり。此阿蘇の山は目八分の山四方を圍みて堤を築きたるごとく連りめぐれり。其眞中に、此阿蘇山のみ基を別にして一峯秀たり。奇妙の地形なり。此山の四方のふもとを阿蘇谷といふ。幅二三里ほどづゝにして、平田あり。唯西の方のみ少しばかり四方の圍の

の身

一すく—一宿

あわたゞし—原本あはたゞしは作る

著ば—原本付ばに作る

山かづら引

かゞはせん。唯予が如き逸民は、彼人の言葉にも感ずる事多ければ書しるしぬ。

○阿蘇山

今よひは阿蘇の大宮司のもとに一すくして、あすこそは峯にのぼらんと心ざせしに、晝過る頃より風の色少しあしう見ゆれば、あすになりて雨ふり、登山の緣をうしなはん事もやと思ひめぐらすにぞ、心あわたゞしう成り來て、今よりもと思へど道なし、すぐさんもほいなければ、山の北の麓の的石といふ里に入りて、あないの人を賴て、山の北おもてより登る。木こりのみ行かへば、道いと細くけはし。絶頂に至り著ば、日既にくれはてぬ。晝參詣多き時に商ふためと、旅人などの行くれたるが宿る爲に茅屋あり。唯むしろもてかこひたるばかりにて、床とてもなし。此内に入りて宿る。名高き峯に登つめて、空もいと近う、星探るべき程なるに、夜あらしの吹わたる音も物すごくて、一山人倫たえ四方寂ばくたるに、夜ふくるまで目もあはず。又もゆるあたりも程遠からで、地震ひ、山動く。世にある心地にはあらず。夜あけぬれば、きのふおもひしには異なりて、山かづら引渡せる間に、朝日の影いと花やかなり。夜半のわびしさ引かへて、心いさめ

時などは、中々にいはんかたなくあはれなりしとぞ。此長谷川といふ人、もと薩摩侯の伏見の館の下役人たりしが、文學のきこえありとて召寄られし人なり。都近くのゆかりの人にて、殊に文雅の事このめれば、彼人のよころこびさもあるべし。彼人等の上手にて、月花の折々には誰聞事もあらざるに、獨しらべて興をやり、又常には庭に築山をつくり、みづから木を刻みて堂塔の形をうつし、是は都東山なり、こなたなるは北山なり、比叡なり、愛宕なり、此堂は清水なり、大佛なり、此社は祇園なり、北野なり、此中央なるは大内なりなどこまかにうつし作りて、物しらぬ蜑乙女などにさししめして語りきかせ、都にある心のみにうさをはらしぬるとぞ。其心の内おもひやりぬべし。又ある時長谷川に語られしは、扨も世のなかのたのしみといふは、富るにもあらず、貴きにもあらず、唯いづれの國にもあれ、おもふ所にさはりなくていたり遊び、山水の風景に心をはなたば、又思ふこともあらじと涙ぐみて聞えし。長谷川も此言葉身にしみて、耳に殘れりと、又予に傳へ語られき。げにかの人は身の上なれば、一しほに其歎息も多かるべけれ。又世の中廣き、人々も世事のわづらひにつながれて、井の中に一生を終ふるは、罪なきさすらへの身ともいふべし。君父のつとめに任ぜる人は、其道重ければい

乙女—通俗此文字を充つれども當らず少女に作るべき也

身の上なれば—身の上が身の上なればの意にて流人の身なるをいふ

罪なきさすらへの身—罪なき流人

らずしてといふ事にて勢力ある後援者を有せざる意

人の惠む—人を惠むの誤か、さらずば其次のさへはだにとあるべき也

院家—門主の隱居

かわかぬ—原本かはかぬに作る

ばかりのさへありて、皆人のきそひあらそふ富貴のみちは少しそむけつゝ、須磨の秋、吉野の春、唯心にまかせて時におくれず、又思ふ人あれば千里の遠きをも必尋ね訪ん事こそ、いと興深からんとは我のみ思ふかもしらず。されど又同じ事いひし人なきにもあらず。薩州にて親しく交りし友人長谷川藤兵衛といふ人は、文雅の人なるが、近きころ小琉球の奉行にて、彼地に三とせまで住ぬればめづらしきことも多かるべしと尋しに、海山の氣色のことやうなるはいふもさらなるが、又殊にあはれなりし事のありしとて語られしは、彼島に何某とて流人あり。もとは京都の大寺の院家なりしが、おほやけの罪を犯せる事のありしにや、三十年ばかり前つかた、國の守へおほやけの命下りて、此島へ送り來りしなり。此人ふみの道に廣く、詩作り、歌よみ、其外絲竹の遊、茶道のわざまでかしこきに、此島に來りてのちは、漁夫樵者の外は誰かたらふ者もなく、夜ごとの月のいろにのみ都の空を思ひ出て、かわかぬ袖に明しくらすにぞ、薩摩より此島に在番のため五人づゝの武士交代して渡れるを、人らしとて待かねて語れるのみなり。廣き島に言葉のかよふ程なるは、わづか五人の薩摩をのこ、其淋しさ思ひやりぬべし。(註)それゆゑ長谷川氏の在番の時は、親にもあへる氣しきして、殊に悦び睦び、夜晝行かひ、別の

梓にちりばむ―出版印行したるをいふ

身のよせ重からで―身の後見重か

のを拜見せしめらる。このことつひに國中にかくれなく、人みな兄弟の子どもの孝行を稱美し、兄を孝太郎とよび、妹をお孝と名附ける。われ近年醫術修行のため諸國にあそび、薩摩の國にしばし逗りうの折ふし、增田熊助なる人此ことを稱歎せらるゝを聞はべれば、人の子の手本ともなれかし、かつは國守の御仁政のあまねきを仰ぎたてまつり、また得能氏仁慈の心深きをかんじ、その言上書のうつしをこひもとめて、ありしまゝをかきしるし、梓にちりばめぬ。嗚呼わが母にも去年おくれぬ。世上の人々、父母存生の內孝心おこたりたまふべからず。

○流人

つかさ位高きも、其程々に附て、國の政、家の政に寢食のいとまなく、又は世のそしり人のねたみを受る事もすくなからず。家富るものは其寶うしなはじと、彼を恐れ是をあやぶみ、又出入る人の求に應じかねて、はては人の恨身一ッにあつまる事多かる。富貴は皆人のほつする所にて、予も是をにくめるにはあらねど、もし唯世の中のたのしみを論ぜば、身のよせも重からで、寶もたず、衣食の事はいづれの境に居れるにも、人の惠む

はうび―原本ほうびに作る

五〆文―今五十錢といふに同じ

て、ねんごろにいひなぐさめて通られければ、跡に從ひし庄屋三島喜左衞門、此小兒は當村の太郎八と申ものにて、しかじかの孝子なりとつぶさに語りければ、得能氏感心有りて、其夜の旅宿にて、又此事を尋られけるに、宿の女房よく知り居て、くはしく物語しける。其次第庄屋の申所にすこしも相違なければ、其夜近邊の百姓を召集めて、此事を聞糺されしに、孝行いよ〳〵相違なかりしかば、翌日得能氏自身太郎八の家にいたり、其やうすを見分し、又其父母に尋ねとふに露たがはざりければ、早速こまやかに書附て太守へ言上ありしに、太守も奇特におぼしめし、御はうびとして、兄太郎八に米二十五俵、いもと萬龜にぜに五〆文をぞたまひける。母もそのころ病やゝおもり居けれども、あまりありがたさに、人々にたすけられて起あがり、たまものをいたゞきしとぞ。右御褒美たまひけるとき、近むらの百姓馬數十疋におはせ、太郎八が家にはこびきたりしかば、これが孝子への御褒美なりと、遠近の人々たちつどひ褒め羨ざるはなし。得能氏よりも錢一〆文をあたへられしかば、庄屋、むらやく人、其ほか近かきあたりのてら〳〵まで、おもひ〳〵にそれ〴〵のものをあたへおくりぬ。得能氏勸善のためにとて、そのほとりの男女に命じて、太郎八が家にゆきてよろこびをいはしめ、また上よりのたまも

子供―原本子共に作る
心得して―用心して、
覺悟して

扨眠る前には母の氣分にてもあしく、よび起す時ははやく目のさむるやうに心得してぞふしける。又冬など寒き夜はみづから帶をとき、母の足をふところに入れ、抱きてあたゝめ、又母氣分あしくいたみなどさし起りくるしむ時には、兄弟打より脊中をさすり、手に取附、みづから藥を口にふくみ母に飲せ、泣かなしみ、をさな心の氣遣ふ樣子、かたはらより見るには、其病人よりもかへつて兄弟の子供の方あはれにて、あたりの者共も力をそへて介抱してぞ遣しける。母の、かくのごとく子供のかいはうにて、貧しき中にもつひに不如意の事を覺えず、病中に六箇年の月日を送りしに、其病日々に重りて、今年の五月むなしくなりぬ。兄弟の子供の歎中々いはんかたなく、さてあるべきにあらねば、親類打より葬送の事をいとなみしに、兩人の子供かなしみなげきて、今生にての母の顏をみる事是までなれば、葬送の期を一日なりとものべたしとて、晝夜母の尸の側をはなれず泣沈しかば、此體を見聞人々淚を流さざるはなし。去年八月十八日、郡奉行得能左平次とかや、勸農の爲に村方巡行の時、小山田村の道のかたはらに十二三才の小兒草を刈て居たるを見

から芋―唐芋にて薩摩芋をいふ
しまひて―原本しまいてに作る

からず。今年まで六箇年が間床に附、ぜん〳〵に病につかれ、起臥さへ自身にはならざるに、ふたりの子ども、幼少ながら、常に母の側に附そひ、おきふしの手つだひより、食物の事にいたるまでこまやかに氣をつけ、母の不自由になきやうにこしらへ、病中の事なれば、母に心をつかはせ、又は腹立せてはあしかるべしとて、たとへいかやうの無理なる事ありても、あい〳〵とのみきげんよく返事して、すこしも母の氣にさかはぬやうにせり。元來小百姓の事なれば、少しばかりの田畠なるが、太郎八幼少ながら耕作の事をもつとめける。留主のことは妹にいひふくめて氣を附させける。妹もまたかひ〴〵敷心をつくし、其孝養兄におとらず。太郎八も夕方早く歸り、先づ其まゝにて母のそばへ寄りそひ、手を握り、顔をなで、其日の母の氣色くはしく尋ね、又我田地のやうす、其日にありし事をもかたり聞せ、粟の穗又はから芋などを出して母に見せ、とかくして覺えず時を移し、つひに夕飯をもわすれし事多かりしとなり。夏の夜など、百姓のわら屋、殊に蚊屋の中一しほあつければ、母も不便におもひ、再三太郎八に蚊屋の外へ出て夕飯たべよといへど、噺すまざる間は飯をくはず。噺しまひて夕飯をくひ、又蚊屋の中へ入りてそばに附そひ、しづかに母を扇ぎ、心よく世間噺などして、其身も打くつろぎたるや

にや、冬に至れば里に出て綿入を一ツづゝもらへり。春に成り、暖氣を得れば、脱捨て裸體に成り、一年に一度づゝ衣類の爲に里に出しが、近き頃に至りては仙術も追々に成就せしにや、衣類も無くて住けり。山に入りて後、予が球磨に遊びし年まで、凡四十年餘といへり。是も近來は不思議の仙術多く、殊に百歳に餘れる、行歩健にて飛がごとし。九州に此二仙人有り。中國邊にてはたえて無き事也。京都白川の山中には白幽先生ありしが、今は若州の山中に移れりといふ。仙術の事もろこしのみに限らず、廣き天下には種々の異人も多かりき。

○孝行

孝子太郎八竝妹萬龜は、薩摩國鹿兒島郡小山田村といふ所の百姓治右衞門が子なり。太郎八當年十四才、まん龜は十二才なり。幼少の時よりふたりとも孝心にして、生れ附柔和に、兩親の事かりそめにもわするゝ事なかりし。去る酉の九月、兄太郎八は九才、妹萬龜は七ツのとき、其母產後いまだ日數たゝざりしに、時節の事なれば、稻取入のため田へ出て働しに、血の道の病さしおこり、それよりいろ／＼養生せしかども、さらに心よ

去る酉の九月—安永六年の九月

仙骨を得ず—全く俗塵を超絶する能はず

人倫—倫は類の意也

がらにも世の人に相見る事我道の妨なり。まして再び世に出ん事思ひも寄らず。此後はいかなる事ありとも尋來る事なかれとて走り去れり。武右衛門も是非なく別れ歸りぬ。其後は山深く住居て、ほのかにも人にまみゆる事を嫌へり。まして言葉をかはす事などはさらに無く、山に入りて後も、今まで既に百何十年といふ上に成れり。されど行歩健にて、老たるとも、若きとも知れず。彼邊にては、人皆仙人なりと敬ひ、飛行自在其外種種の奇妙多しといへども、其事は知らず。誠にきりしま山は天下の名山にして、高き事雲に聳え、麓のめぐり三十六里、中に藥草奇玉多く、大なる池數十、又火燃る谷有り。仙術修練の地是に過たる所有べからず。予も此山中に三日在りしが、百分が一も見つくさず。一月ばかりも籠りて見めぐらば、猶奇所を尋得べく、殘多かりしかど、いまだ仙骨を得ず、むなしく歸りぬ。又肥後國球磨郡の人吉の城下より十里ばかり奥に、たら木といふ所あり。此所に吉村專兵衛といふ百姓あり。年六十許の時、家業不如意にて、世の中うとましく、ふと仙術に志して、此たら木の山奥に入れり。城下だに深山のおくにて、他所より見れば仙境のごとき地なるに、又それより十里もおく、誠に人倫も稀なる地なるを、猶避逃れて深山に入れり。飲食は木の實などを食せし。唯寒氣には堪がたかりし

下凡の人―凡人
一人の―原本獨りのに作る

ぬ。都近くの者ならましかば、百里に餘れる海山を、いかではるぐ〵尋來るべき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにも猶あまりあり。

○仙人

おほよその人皆才徳の事に限らず、もし長生を得んと欲せば、深山に入り、飲食を斷ち、思慮をやめ、淫事を斷じ、衣服を除きて、性命を養ふ時は、下凡の人といへども、二三百歳の壽は保つべし。當時霧島山に一人の仙人有り、其名を雲居官藏といふ。もとは武士にて平瀬甚兵衛といひしが、聊不平の事ありて、官祿を捨て、世をのがれ、山奥に隱れて人にまみえず。其後數十年へて、霧島山に住めりといふこと親屬の方へも聞え、甥の得能武右衛門といふ人はるぐ〵と霧島山に尋入り、數日尋もとめて、やう〵にめぐり逢たり。其形、木の葉の衣に、髪髯おのづからに生ひ茂り、人の如くには見えず。されど武右衛門も厚く心にかけて尋入りたる事なれば、言葉をかけて近附寄り、今一たび世に返り、人の交もあれかしと理をせめていひしかど、さらにうけがふ色無く、はや世を逃れて幾年かへぬ。近き頃は仙術もやゝ成就して、姓名も雲居官藏と改めたり。よそな

大師樣へ—原本大師樣ハに作る

もむき給ひし御醫者はこなたなりやと問ふ。いかなる用ぞと聞けば、備後國より六兵衛といふ百姓一人のぼり來り、下に市の字の附たる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋くれよ。去々年しか〴〵の事にて高恩にあひぬれば、御禮のために來りたり。其御名は聞ざりしかども、荷物の下げ札に市の字を見及びたりといふ。手がゝりも無き尋やうかなと存候へども、其志の殊勝にも候へば、先試に標札をみめぐりて、市の字を見當候へば御尋申なりといふにぞ、其事有りといへば、則歸りて、其次の日彼六兵衛同道して來りつつ、備後疊をみづから持て禮物とし、扨も過し年は不思議の御緣にて、妻なる者御療治に逢ひ、命は無きものと覺悟致し居候ひしを、其日よりしるしを得、仰置れし日限の如くに、かゝる難病平愈して、再び常體の人となれる事、殊に近所の者の行逢ひより始りて御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村の評判にこそ致し候へ。京を尋たりとて逢奉るべしとははからず候へども、命たすかりし御高恩、一言の御禮も申さゞる心の中も安からず。もし逢奉る事なくば、東寺にても參り候て、弘法大師樣へ御禮申かへるべしと存じ極めて參り候ひし也。先は尋當りて日頃の本望に叶ひ候なりとて、眞實顏色にあらはれたり。余も嬉くて、しばしもてなぐさめて歸しやり

なりとも此くるしみをたすけ給はりて、横にふしてやすらかに臨終を得さしめ給はゞ、上も無き御恵と、涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立てうつぶし居れば、足は柱のごとく腫氣ありて、顏も亦眼ぶちはれ、額も浮きて、活たる人のごとくにもあらず。肛門は牡丹花のごとく、長さ五六寸もぬけたり。一しきり〳〵腹はり來る時の苦の聲隣を動し、聞者すら堪かねたり。病體は誠にかくのごとく危く甚しけれど、其脈に見所有ければ、いそぎ藥を與へ、猶且藥湯を以て腰より漬し、種々の療術を用ひしかば、大小用の通利出來て、初て横さまに成ことを得たり。猶品々の療治をくはへ、此以後に用る藥方を委敷書しるして、用ひかた抔迄もくはしく傳へ置て、其家を辭して、數里の深山をわけ出て三原の城下へ著ぬ。三原にて此物語をせしに、扨もあやふき事なりき。御心に誠有ぬればこそ佛神の助も有りて、まことの事に逢ひ給ふならめ。多くは、かくのごとき事は盜賊のいつはる事にて、旅する人を人なき深山に連行、さし殺して金銀衣類を奪ふ事珍らしからず。此後はかならず楚忽のふるまひし給ふべからずといひけるにぞ、初て心附て恙なかりし事の嬉かりき。それより諸國をめぐり、二とせをへて京へ歸り居たりしに、或日六條の旅宿のあるじたづね來り、一兩年以前九州へお

日影—原本日陰に作る
とかう—とかくの音便かれこれと

えたりしかば、余も此道修行の事なれば、いとやすき事なりとうけがひて、彼者共のしりへに従て、尾の道の二三里許こなたより右の方に分入る。鹿狼の通ふ如き細道を、谷に下り、峯にのぼりて、ゆけどもゆけども程遠きに、日影もやゝ傾き、腹饑、足つかるれば、僕腹立て、程もしれぬいたづら事とつぶやく。とかうなだめて行ほどに、やうやうに至り著ぬ。とある山あひのいと淋しき人里なり。本郷といふ所なりと。其家に入れば、病者は五十許なる女にて、其夫を六兵衛と云。案内のものしかぐの由をいへば、家内皆驚き悦び、去年の冬より淋病の心地なりしが、次第に強く、露ばかり落る便事に、其痛忍びがたく、内よりは頻に通じの心きざして腹裂る心地して、くるしみたとへんかた無し。日々月々に病つのり、春の頃よりは一しほにて、横に臥ば下ばらひとしほさくるが如く、立ばくるしく、坐すれば堪がたし。それゆゑ晝夜唯炬燵のやぐらに兩手をつかへ、立ながらうつむきて居る事のみ少し心やすらかなるやうなれは、春以來は片時も坐せず、臥さず、唯晝夜食事にも、眠るにも、此通なり。其くるしみ中々いふもおろかなり。近き頃は殊にあしければ、命の限も遠からじと、一日も早く臨終をのみ待侍る也。何とぞ一日命の事はたすかるべくも思ひ侍らねど、都の人と承ればゆかしくこそ候へ。

西遊記　巻之四

○篤實

備後國を通し時、百姓とみえし年老し男二人、ふと道連に成り、山の名、里の風俗など尋問ひて行たりしに、我野服を著し、方頂巾を戴しをあやしみて、いかなる人にて、いづくよりいづくへ行給ふにやと問ふに、都方の醫者なるが、醫術修行の爲に諸國に遊歷するなりと答へしかば、扨も頼もしき御人や。我等が住里は向うの山の奥なるが、親しき家の女房に奇妙の難病ありて、早二年に成り、近きあたりに住候へば聞もいぶせく、其家にもいろ〳〵と醫療盡さざることもなけれど、露ばかりのしるしもなく、今は早命だにあやふく見え候ひぬ。かく山深き片田舍にて名高き醫師も候はず。あはれ都近くも有ならばなど、親類の者は歎き居候ひぬ。けふははからずも京都の御醫と承候へば、親類共が常々の詞も思ひ出し候ひて、あはれにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をもなぐさめたまはらばやと、誠の心言葉に出て、又餘義もなく見

野服―常人の衣服
方頂巾―角頭巾のことうしろにしころの如きたれのあるもの

玉洞丹丘—玉洞また玉渓ともいふ今の朝鮮國の全羅北道珍山郡の地丹丘また赤山といふ今の忠清南道石城郡の地共に仙境と稱せらる

得べき事も候べしといふにぞ、塘雨驚き、今にては天下皆小兒の手習ふはじめに、いろはとこそ覺えつれ、此あたりにはいまだいろはといふものを知り給はずや。誠に源氏物語などにこそ、難波津淺香山を手習ふ初とせる事見えしかど、今にてはいとむづかしく覺ゆるを、扨も昔めきたる事を望み給ふ人かなとて、則二首の歌を書てあたへつれば、これぞ悴どもの手に叶ひぬべけれとて、一しほに悦びける。塘雨京に歸りての後、此事を余にも語りて、邊土田舍にこそかゝるふるめかしく、昔覺えしことも有つれ、いろは書出してそゞろに心恥かしく覺えしと、毎度いひて興じぬ。誠にかゝる所こそ、延喜天曆の遺民ともいふべし。澆季輕薄姦佞の風を露しらざるは、玉洞丹丘も外にてはあらずと知られぬ。いと風流にも、また淳朴にもありし事なり。

難波津淺香山―難波津に咲くやこの花と淺香山影さへ見ゆるとの二つの歌にてこれを手習の初めとせる事古今集の序にも出づ、二九頁参照

○いろは

我友塘雨日向の國の片田舍に宿し夜、ともし火の下によりつゝ手帳取出し、ひるの事ども書しるし、詠じ出せし發句など獨ごちてありしかば、其家のあるじそば近く居寄りて、御客人に頼申度事ござ候へ。今見受候へば、物よく書給へるにこそ。悴どもの今は十二三歳にも及び候ひぬれど、家貧しく、朝な夕なの煙立べきいとなみに我身のいとまさへなければ、物教べき手だてもなく、殊更近きあたりに手よくかく人稀なれば、けふよあすよと此年月いたづらにこそ打過候へ。かくて有べき事にもあらず覺え候へば、御客人の物よく書給ふこそいとゆかしけれ。何とぞ悴どもに手本書て得させ給へといとわりなく云にぞ、殊勝の志ある人かな。それがしも手よく書といふにもあらず候へど、子供衆の手習ふはじめ程の事は書ても參らすべしといひて、いろは四十八文字を筆ゆるやかに書とゝのへて出しければ、あるじ見て、是はむづかしの事を書給ふものかな。恥かしき事ながら、悴共はいまだ筆取そめし事も候はねば、けふぞ手習ふはじめに候へば、先づ難波津淺香山こそ書て得させ給へかし。其後にぞいろはといふものをも手習ひ

段々―さま〴〵にといふ意

きには似もやらず、いんぎんに會釋し、扨きのふは卒爾なる事申て各を驚し參らせし也。近頃御わびを申事よ。猶それに附て、此上御苦勞を賴申度事こそあれ。其仔細は昨夜所の者共一同に、夢中に此神の示現を蒙り奉りし也。けふは思ひもよらず珍らしき神樂舞を見物して、面白く慰みけるを、汝等來り妨げて興をさまし、猶彼等をも叱り驚しける奇怪さよ。早く彼舟に行て、彼等に安心なさしめよとの御告ありし也。左あれば、此後猶神の御咎も計りがたし。何とぞ各きのふの失禮は御ゆるし有りて、猶神慮をもなぐさめ奉らん爲に、今一度まげて神樂して給はるべしとひたすらに賴むにぞ、船の者共も今更空耻かしく、段々辭退すれども聞入れねば、ぜひなく又々いざなはれつゝ彼島に上りて、眞顏に成りて神樂舞をはじめたれば、所の者共大に悅び、老若男女つどひ來り謹で見物し、事終りたれば、酒肴など設けて叮嚀にもてなされて、其上に味噌鹽水薪などをも運び送れり。其翌日は風も直りたれば、帆を卷て馳たりしに、紀の路の海も遠州灘も一瞬の間に、無難に江戸に著たり。老人數度の囘船に、かゝる神感のいちじるしく又をかしき事はあらざりしと、始終くはしく語れり。

眞鍮にて造り形鐃鈸に似て小なるもの

ゆふだすき―楮の皮にて製したる布のたすき

月次の祭―月々の例祭

沖がゝり―沖に錨を下して舟を止めおく事

べき所ならねば恥憚る事なく、心一ぱいのたのしみをなして、前後をも忘れ、次第に高聲に成りけるに、其音陸地までも聞えやしけん、所の庄屋などおぼしき者ども、小舟に棹さし來りて、大に怒り云やう、汝等は知らずや、此島には昔より荒き神のまし〳〵て、常には漁人の舟さへも寄せず、まして一草一木にてもかすめ取れば大に祟有りて、近在近鄕までの大難儀に及ぶ事なり。それゆゑに所の人といへども、月次の祭の外には此島に渡る事なし。汝等は何國の者共なりや、かゝる無禮を仕出して神前をけがし、神威を輕しめ奉るにやと怒り罵りければ、皆々肝をつぶし、左樣の事とは存ぜず、船がゝりの退屈のあまり、太鼓を見附しよりふと興に乘ぜし事也。幾重にもゆるさせ給へとて、初のたのしみを引替て、皆々頭をかゝへ、我先にと船をさして逃入り、猶其島を遠く離れて沖がゝりし居けり。さるにてもいまだ風も直らねば、其夜も其所に懸り居けるが、翌朝早朝にきのふ來りし舟と見えて、猶其外にも數艘漕連れ出來る。こは又いかなる事をか云ひ出して、咎に來りけるやらんと、皆々恐れ、聲をも立てず、舟底にすくみ居けるが、彼舟よりよや〳〵と呼起せば、こは〴〵答へて一人出迎へたるに、先の役人ともおぼしき者、其所の者共を大勢引連來りて、舟をつなぎ寄せ、きのふの荒々敷けし

寅卯の方―東東北

針を立て―羅針盤の針を定めて

大事と乗る事―此句の次に誤脱あるべし、或は也の一字を脱したるか、然らずば次の然字誤なるべし

銅拍子―一種の樂器、

よく覺えたり。今より四五十年以前までは、此宮崎郡一圓に公領にてありしかば、年々に年貢の米を此地より直に江戸に積事なりしに、我も度々其船に乗りて渡海せり。此所の赤江川の港口より舟を出し、寅卯の方に向ひ針を立て走るに、土佐、阿波、紀伊、伊勢の方を左に見なして沖遠く乗るに、遠州灘も唯一乘に打過て、大坂へ至る日數にては、心安く江戸に入る事也。勿論右の方は國あるべしとも思はれず、唯針先を大事と乗る事、然るに或年いつものごとく港を出して馳し所、土佐國淸水か、又は蹉跎の岬かとも思ふあたりに小島を見附て、是非なく船をかけたりしが、數日風も直らず、彼島に掛り居たりしかば、水やある、用意すべしと、人々船より島に上り尋廻りたるに、此島人住よしもなく見えて、唯草木茫々たり。其中に小き社一ツあり、近き日に祭にてもや有けん、拜殿に太鼓二ツ殘れり。人々煙草のみて、拜殿に休み居けるが、此太鼓を見て一人の云やう、此頃數日の舟懸にいと退屈せり。此所に幸の太鼓あり。いざや神樂舞して遊んには、神も見ゆるし給ひてんとて、手ん手に竹を切て笛とし、藥鑵の蓋を以て銅拍子とし、紙を塗て烏帽子とし、浴衣手拭それ〴〵に狩衣ゆふだすきの學をなし、彼太鼓を打立て、なまりたる田舍聲を一調子はり上て、大勢一同にうたひはやし、誰見る

生れ附といへども、短命病身ならざる事あたはず。是山中と海邊の壽夭の違の根本なり。長崎は天下第一に魚肉たくさんにて、野菜の類よりも下直なる程なれば、人皆日々魚肉に逢ひて飽滿、且又唐人の飲食を見習ひ、何の肉にても油あげになし、厚味にして食す。其上金銀の通利格別に宜敷、人皆歡樂にして世を渡る。其故に日夜唯飲食のみを樂として、身を働き氣血をめぐらす事なし。是皆腫物の類の多き根本なり。京都は人皆家業を專一につとめ、身を働き、海無き國なれば、魚肉格別高料にして、貧賤の者は求めがたし。故に他國に違ひ、常に麁食也。癰疔の類すくなき所以なり。然れども、繁華の地ゆゑ濕毒の憂は日々に多く、貴賤おしなべて病ざる者無きに似たり。もし保養をよくせば、京の地も長壽を得べき所也。

○神樂

余が友人塘雨、余に少し先達て日向國宮崎郡中村に遊びしに、其地に增右衞門とて、齡既に百歲に及び、性質律義にて物に怒らず、柔和にして人に愛せらるゝ老人あり。或時塘雨が旅宿に來り物語りしけるは、某近年の事は反而忘れがちなるが、若年の時の事は

三雙倍五雙倍—雙正しくは層に作る

濕毒—梅毒性の病氣をすべていふ

○壽夭

余諸國をめぐり試るに、山中の人は長命なり。海邊の人は短命なり。京都の人は癰疔の如き腫物類は甚稀なり。長崎には甚多くして、京都の三雙倍五雙倍ともいふべし。其由來を考ふるに、食物の事にあり。山中の人は魚肉なければ常に芋大根の類のみを食す。もし年始節句其外祝ひ日といへども、富る者も纔に鹽肴乾物には不過。其上に高山深谷に登り下りて耕作に身を勞し、纔に麥飯に饑をしのぐ。麁食にして身を動す故に、長命にて無病なり。海邊の人は魚肉に飽滿て、飯のかはりにも魚を食し、船の出入有りて諸國の運漕よろしければ、飯は其米自由なるゆゑに、貧しき者もつひに麥飯などは食せず。其上に山坂の働の苦勞は無く、船にて往來やすらかにして、魚鹽の利ゆたかなれば、自然と身も安くして美食にくらす故、病身にして短命なり。猶又山中は人の往來不自由にして、淋敷質朴なれば、賣女遊里も無く、濕毒傳染の憂もなし。海邊は何方にても諸國の通路よければ、賑に華麗にて遊女あらざる所も無く、人ごとに濕毒もうつり、且又鹽風に濕氣を受て、内外より病を作り養ひ、心氣を勞し、腎をつからし、いかなる壯實の

遊びしは三月なりしが、折よくておびたゞしく居たり。又此靈泉も奇妙の水にて、もし是を汲得て飲時は、萬病を愈し、長生不老なりといふ。さも有ぬべしとぞ覺ゆ。

鼷鼠ーむぐらもちの古名

○麝香鼠

薩州鹿兒島城下に麝香鼠といふものあり。多く水屋のもと、床の下などに住て、其形鼷鼠に似て、其糞甚臭し。少しじやかうの匂に似たり。故に麝香鼠といふ。食物をむさぼり、器をやぶりそこなふ事常の鼠より甚し。膳椀飯びつなどに此鼠一たび入る時は、其匂留りて、幾度洗ひ滌むれども去らず。此鼠又座近く出る時は、其にほひ鼻を穿てたへがたき程なり。其鳴聲甚大にして、雀の聲に似たり。それゆゑ中山傳信錄には、琉球の鼠は雀の聲ありと書置り。此鼠もとは琉球の船より渡り來り、今にては城下町々家家に甚多き事と成れりといふ。長崎にも唐船より渡り來りて、町家にも多くあり。されど薩州程は多からず。其外の國にてはたえて無き鼠なり。一説に阿蘭陀人は此鼠を以て煉り合せじやかうを造る法ありといふ。誠に祕法あらば、麝香にもなるべき程の強きにほひある鼠なり。

數箇年―原本數か年に作る

行あたりの所より右へ曲り、口の廣さ三四間ばかりの穴あり。此中はくらき事夜のごとし。しばらく心をしづめ、岩角に取すがりて此中を見るに、向うへは十間ばかりもや有らん。下は其岸より前の方へくり込て、切岸よりもおそろし。其深き事はいか程ともしりがたし。上の方もいかほど高きや、うつろにしてしるべからず。猶久敷心をしづめ底の方を見るに、遙の底に鏡のごとくきらめくもの有り。是水なり。其深さ凡二三十間も有べきや。目くるめき、足ふるひて、久敷は見とゞめがたし。こなたへ退て、大膳に是を問ふに、此水は靈泉にて、時によりて增減有り。水の底は深き事むかしより知る者なし。水までも三十尋の繩を下げて、猶とゞきがたしとなり。此岩戸の中、明神の御座所なり。誠に奇怪の所、其樣子筆の及ぶ所にあらず。余既に數箇年の旅に奇境絶跡眼をふれざる事もなけれど、いまだかくのごとき奇妙の所を見ず。往來たやすき所にあらば、いと名高くて、見ぬ人もあるまじきを、かゝる深山幽僻の地なれば、其名さへしる者なし。余別に其記をあらはせしかど、今又こゝにしるすなり。九州に遊ぶ人必此所を見るべし。

此一足鳥、時節によりては、こと〴〵く蟄伏して、一羽も見えざる時ありといふ。余が

石鐘乳―鐘乳石ともいふ、方解石が石灰洞内に氷柱の如く垂下したるもの、つらゝいし

瀬に至る。神の瀬の神主緒方靱負、其子大膳、案内して其窟に至る。窟は求麻川の北側にて、山に入る事半道ばかり、其道いと細く、苔の緣は道を封じ、岩間の清水ひやゝかにして、行先心ぼそげなり。やゝ谷深く入程に、いたく遠からで、岩戸の口にいたり附ぬ。打見るより心驚けり。誠に、たとへば獅子の口の張りたるごとく、南向にて、高さ廣さともに、十四五間ばかりもあらん。上よりは石鐘乳の甚大にして柱のごとく或は人のごとくなるが、つらゝの下りたるやうに、口より奥に至るまで透間なく下れり。其石鐘乳の間に鳥有りて、飛ありく。脊中黒く、腹白く、尾みじかく、全體燕に似たり。此鳥唯一足なり。世界の中に唯此岩戸の中計に生ずる鳥なりといふ。奥より口にいたるまで、數百羽むらがり飛て、程近くまでも飛下る。されど甚すみやかにして、いかなる形としかと見定めがたし。此の岩戸の神のつかはしめなりといひ傳へて、むかしより、もし此鳥を取る時は、此近村色々の祟起りて、大風洪水疫癘の類大變きそひ出て、民のなげきいふばかりなし。ゆゑに此地の人甚相おそれて、つゝしみ敬ふ。誠に此外に日本國中に一足の鳥ある事をきかず。唐土にても又めづらし。希代の鳥といふべし。扨此岩戸の中へ入る事二三十間ばかりにて、行當れり。此あたりまでは口廣きゆゑに明し。此

垂水—肝屬郡垂水をいふ

緒〱—原本結〱に作る

勝手—都合よしとの意

となして、其高直なる事金玉に勝れり。日本にも此玳瑁あり。肥前島原領の海中、其外薩州の南海、大隅國垂水の海中にも是あり。其龜纔に徑一尺餘にして、それより大なるものなし。故に其甲甚薄く、櫛に作りがたし。唯手箱などの飾に用ふ。又珊瑚珠も熊野の海中より出づ。是も甚小にして、緒〆などの玉には造りがたし。これを以て見れば、蠻國より渡り來る珍寶も、皆此國をくはしく尋求めなば、あらざるものも有べからず。唐紙も近年薩摩にて製す。甚見事にて、渡り來るものより遙に勝れり。然れども價高直にして、賣買には、唐土より來るもの勝手なりとて、京地などへはいまだのぼり來らず。孟宗竹の笋を水に漬て腐らしめ造るといふ。其外細工物などに至ては、唐物に擬して作るに、彼方の物よりはこなたの物大かたは勝れり。太平久敷して、人の工も段々に委敷成れり。

○一足鳥

肥後の國八代の求麻川をさかのぼる事八里にして、神の瀬の岩戸といふ所あり。天下の奇所なり。余が此岩戸に遊ぶ事、其前より聞えたるにや、庄屋大島喜左衛門出迎て神の

手ざすーかしらかひ手ふ

り。杣人など山深く入りて木の大なるを切り出す時に、峯を越え谷をわたらざれば出しがたくて、出しなやめる時には、此山わろに握り飯をあたへて頼めば、いかなる大木といへども輕々と引かたげて、よく谷峯をこし、杣人のたすけとなる。人と同じく大木を運ぶ時に、必うしろの方に立て、人より先に立行事を嫌ふ。めしをあたへて是をつかへば、日々來り手傳ふ。先使終て後に飯をあたふ。はじめに少しにても飯をあたふれば、飯を食し終りて逃去る。常には人の害をなす事なし。もし此方より是を打ち或は殺さんと思へば、不思議に祟をなし、發狂し、或は大病に染み、或は其家俄に火もえ出など、種々の災害起りて、祈禱醫藥も及ぶ事なし。此故に人皆大におそれうやまひて、手ざす事なし。此もの唯九州の邊境にのみ有りて、他國に有ることを聞かず。冬より春多く出るといふ。冬は山にありて山操といひ、夏は川に住みて川太郎といふと、或人の語りき。然れば川太郎と同物にして、所により時によりて、名の替れるものか。

○玳瑁

玳瑁は南方蠻夷の海中に生じて、其甲を阿蘭陀人持渡り、婦人の頭の飾、櫛かうがい

事の瀧にして、數町の外に響き、余が遊し時も、晝の八ツ過の事なりしが、瀧の中より虹數十條起り、錦を織れるが如く、殊に見事なり。瀧壺最深し。此中に大なる龜年久敷住るよし、甲のわたり四五尺許なり。此地の人は每度見る事ありとぞ。予漫遊の間に見たる瀧にては、是を第一とす。然れども、格別の邊土なれば其名をだにしる人なし。をしむべし。其後又肥後國求麻の山中にて、かなめの瀧といふを見たり。龍門の瀧よりは小なれども、又見事の瀧なり。瀧の上より十間餘の材木を流し落すに、瀧壺甚深くして、其材木眞逆樣に瀧壺に入るに、ことごとく瀧壺に沈み入りて、しばらくして再び浮上るといふ。されば瀧壺の深さ何十間といふ底をしりがたしと也。誠にさも有ぬべく見ゆる瀧なりき。

○山童

九州極西南の深山に、俗に山わろといふものあり。薩州にても聞しに、彼國の山の寺といふ所にも山わろ多しとぞ。其形大なる猿の如くにて、常に人の如く立て步行く。毛の色甚黑く、此寺などには每度來りて食物を盜みくらふ。然れども鹽氣有るものを甚嫌へ

龍門の瀧の圖

唐土の龍門の瀧—山西省絳州龍門縣に在る河水の落る口

の纜を解やいな、陸より船の中の人に水をかくる事なり。船の人々笠をへだてて水を防ぐ。此まぎれに、急流の事なれば數十町下り過て、沸をそゝぐひまなく、はや見送りの人影を見うしなふ事也。余が發足の時も、其如くなりき。誠につきぬわかれに落くる沸せきかねて、取る手さへはなちかねたるに、水をそゝぎて船を飛す。陸地の別に異にして、物いひかはすひまもなく、速にてよけれど、又更に心ぼそくあはれなり。

○龍門の瀧

瀧は紀州那智山の瀧天下第一、其次に日光山の裏見のたきといふ。那智のたきは日本のみならず、唐土にても是程の瀧はなきよしなり。其外は、中國九州四國の間に少しの瀧はあれども、大なる瀧はたえてなし。那智日光の二ツのたきは、余いまだ見ざれば論ずる事あたはず。唯隅州加治木の北に、龍門の瀧と名附るあり。昔唐人加治木の港に入船せし頃、甚此瀧を愛して、常々此所に遊び、唐土の龍門の瀧を見る心地せりとて、此瀧をも龍門の瀧と名附けるとぞ。幅五六間、高さ二十間許とも見えたりしが、其地の人に聞ば、高さ五十間に、幅十間ありとぞ。是は唯仰山にいふなるべし。然れども、誠に見

李太白—唐代の詩人

巫峽—四川省より湖北省に流るゝ河の兩岸の名

東武—江戸をいふ

渡より下つ方は、兩山けはしく峙て、峯は頭の上に臨み、流殊にせまりて細く、怪巖峨々として屛風をたゝめるが如く、壁を附たるが如く、龍の騰るが如く、獅子の踞るが如く、或は雜樹影茂れる中に入るかとすれば、松杉森々たる岸に臨む。或は山吹の散かゝりたる、躑躅の咲そろひたる、山櫻の已が梢とあらはれ出たる、千景萬色眸をめぐらすにしたがひ、兩山唯走るが如くにして、李太白が輕舟既過萬重山と詠ぜし、かゝる境にもおもひ出らる。彼巫峽の急流は唐土第一にして、舟の下れる事疾鳥迅雲も及ばずといふも、いかで是には過ん。余も興に入りて一絕句を作る。別に記行有り。程なく八代の井手といふ里に著ぬ。誠に舟中の心よき事、今も忘れ難し。日向より求麻に入りしも、兼て聞つる急流を船にて下るべき爲なりけるが、日頃の望たりていと嬉し。求麻の地は極深山の中にて、廣大の平地也。別に一世界のごとく、仙境ともいふべし。他國に出入る路、日向の嘉久藤口と、此求麻川筋と、二道のみなり。此川の傍に山路あれども、絕嶮にて、殊に細し。されば相良侯にも、東都御參勤の時も、此川を船にて下らるゝとなり。家中の面々も皆船なり。誠に數百里の海上をへて東武に出る事なれば、家中の人人も、其妻子親友など、此川ばたに出て見送りの時、殊にあはれなる事なり。其時に船

もとよりの急流、見送りの人々は霞の中に入りて、招く扇もはや見うしなひぬ。盃一ッ二ッめぐらすひまに、渡と云所まで下りぬ。人々はつきぬ名殘なり。歸の陸路も遠ければ、此所より上り給へとすゝむるに、いづくまでといふ限もなければ、人々も襟をうるほして上りぬ。余もしばし船を離れて、又一ッ二ッくみて別る。これより下水逆巻落て、殊にすみやかなり。船はいと小さく細く作りて、首尾に梶を附たり。是は眞逆樣に大岩に流れかゝりたるとき、あとばかりの梶にては船の廻る事遲きゆゑに、先にも梶を附たるとなり。常に先の梶を第一に動し居て、岩角を避、思ふ方に船をめぐらす。又中程に楫を持て一人立り。是は舟を前後左右に動かす爲なり。此三人の船頭しばらくも油斷せず舟を操る。浪殊に逆巻所にいたりては、船の兩方に高き板を立つ。是は浪の舟中へ入らざるやうとなり。十六里の間に四五箇所はいたつて艱嶮の所ありて、浪の高き事山の如く、怒れる岩角浪の間におびたゞしく峙出づ。かゝる所にては、領主などの通行の時は、瀨越とて、其前後四五町或は八九町ばかりも船を離れて山に登り、此嶮惡の瀨を越し終りて、又船に乗り給ふとなり。余はいと珍らしく覺えぬれば、興に乗じて其瀨をも船に乗なりがら下りぬるが、其目ざましき事筆の及ぶべきにあらず。

一ッ二ッくみて―一二獻傕して

四五箇所―原本四五か所に作る

といふ。其道を考へ知りて、其所へ弓をしかけ置、絲を踏ば、弓發して貫く機關なり。狼猪なども皆此弓にて多く取得るとぞ。誠に邊國には種々の怪敷ものも有けり。但し九州には、天狗の沙汰甚稀なり。薩州鹿兒島邊にはたえてきかず。四國には天狗多しといふ。伊勢の邊には別て多し。皆高山には是有る樣子なり。かゝるたぐひも國々の風土によりて多少あるか。

○求麻川

相良の御舟―球磨の領主相良氏の御舟

肥後國求麻川は九州第一の急流なり。源遠く那須椎葉山五箇村より出て、四十里ばかりも流れたり。殊に大河にて、求麻郡の眞中をつらぬき、求麻の人吉の城下を過て、八代に至り、肥後の海に入る。余が歸路には、相良の御舟にて此急流を下りぬ。船はもとより輕し、人も纔に余と僕と二人に、船人三人、都合五人乘なれば、一しほに飛が如く、八代まで十六里の川を纔二時に下り著たり。其頃は三月のすゑなれば、春水殊に多きに、人吉御城下靑井の宮の前より船に乘れば、送別の人々おびたゞしく打集り、名殘の恨いふもさらなり。高橋雨森右田の三士は、猶船に乘り移りて、酒肴など携へ、纜を解ば、

ふすま—寢具をいふ

山かつら引渡し—註二七四頁に出づ

飫肥領—南那珂郡に在り伊東氏の所領

まゝに詩歌數々書附く。陸には猶いさかひやまで、大勢打合ひぬれど、川中にへだゝり居れば、あやふくもあらず。されど夢むすぶべくもあらねば、夜もすがら月と喧嘩とをながめ居たるが、明方近き程には露おきそひて、風いとひやゝかに、ふすま戀しう思ひしかど、すべきやうもなくて、苫引かづきて臥ぬれど、目もあはず。とかうする間に、夏の夜のみじかき明やすきならひなれば、山かつら引渡し、鳥の聲花やかなれば、草鞋引むすびて、食もせず舟よりぞ立ぬ。誠に旅路のならひ、あはれにも又をかしかりき。

○山女

日向國飫肥領の山中にて、近き年菟道弓にてあやしきものを取たり。惣身女の形にして、色殊の外に白く、黒き髪長くして、赤裸なり。人に似て人にあらず。獵人も是を見て大に驚きあやしみ、人に尋けるに、山の神なりといふにぞ、後のたゝりもおそろしく、取すてもせず、其まゝにして捨置ぬ。見る人も無くて腐り果けるが、何のたゝりも無かりしとなり。又人のいひけるは、是は山女といふものにて、深山にはまゝ有るものといへり。總て彼邊にては、菟道弓といふものを作りて獸を取る事也。けものの通ふ道をウヂ

たななし小舟―小舟には棚無ければ單に形容していへるまでなり

て、打合しに、こなたの親力強くて打勝て歸りぬ。しばらく有りて、さきの家の近きあたりのをのこども大勢集り來て、打負たる意趣をはらさんと、纔にせまき家の庭に込入りぬ。こなたにも又近きあたりより若きもの大勢救ひ來りて、はじめは詞戰に其かまびすしき事いはんかたなし。しばしがほどは田舍人のいさかひ又めづらしと傍に見居たりしが、次第に大勢集り來て、纔の家に數十百人こみ入りたれば、余が居たりし所も奪はれて坐し居つべくもあらず。兩方たがひに怒りのゝしりて、棒庖丁の類を攜へ來り、既に打かゝりぬれば、ゆゑも無きにそば杖に打れ、疵附ん事のおそろしくて、いそぎ走り出たるに、案内は知らず、立入るべき所も有らず。喧嘩はます／＼はげしく、すべきやうも無くて、かなたこなた立まひ居たりしに、年老たる者一人出來て、旅の人不慮の事にあひて力なくもおはすらん。むかうに見ゆるは我舟なれば、いそぎ彼舟に乘り給ひて休足し給へと、ねんごろにいひて、多葉粉の火などもてなし吳らるゝに、力を得て乘りうつりたり。獵船と見えて、いとちひさく、笘少しふきかけたり。月はくまなくすみ、小夜風すゞしく吹渡りて、さし捨たるたななし小舟、引汐にゆらめきて、行末もさだめぬに、宿りとめたるはいと心ぼそけれど、又風景のおもしろきに心なくさみて、出る

しるべ—知邊、知合

西遊記 卷之三

○長江の旅泊

肥前國大村の御城下をかなたこなた見物し終り、夫より小船をかり、海に浮んで長江といふ所に渡りぬる船の内より、はや夜に入りぬれば、案内を知らぬ旅の空に、夜に入りて宿求んもおぼつかなしといへば、船頭のしるべの家有りとて、川の岸なる所へ送り入れぬ。いと貧しくいぶせきふせ屋なりしかども、一夜の宿、あるじの妻心よくもてなすに嬉しくて、手洗ひ足そゝぎなどして打くつろぎ、夕の食なども取したゝめて休らひたるに、其家南おもてにして、しかも大なる川を前に受て、海づらさへ遠く打のぞめば、風景のおもしろきに、六月二十日頃の月海上にさし出て、さゞ波のきら〳〵しきは黄金をちらすが如く、濱風また涼しくて限なき興に入り居たるに、此家の子の十一二ばかりなるが、他の家の子に頭打れたりとて、こなたの父親又さきの子の頭を強く打ぬ。さきの父親又怒りて、こなたの子をうてば、後にはたがひに親と親とのいさかひと成り

朝鮮御陣―豊臣秀吉の朝鮮征伐をいふ

兄弟かきに云々―詩經小雅常棣に出づ

集れば早必咬合て喧しきに、大勢獵に出る時などは、諸方の犬を皆々各繋ぎて牽行事なるに、町を出るまでは、側近く寄れば必咬合て騷けれ共、既に山に入ると、其犬ども常常はいかやうに中悪敷よく咬合ふ犬にても、甚中よく成りて、綱を解き離して犬の心任せに馳廻らすれども、犬同士咬合ふ事無く、互に助合て山を働くなり。是向うに猪鹿といふ敵あるゆゑに、犬ども皆一致の味方に成りて、中よき事とぞ。是に依ていふに、むかし朝鮮御陣の時、彼地にては、日本人いかなる者も皆一致に成りて、相互に助け合ひ、至極親しかりしとぞ。向うに異國人の敵あるゆゑに、日本人同士は格別に親厚く成りける事、尤の事なり。一家の中にても、親子兄弟夫婦等の中あしく爭ひ怒る事は内證事にて、畢竟は榮耀我儘などともいふべきにや。もし盜賊にても入らば、いかなる中悪敷家内にても、一致に成りて防ぐべし。此故に、詩經にも、兄弟かきにせめげども、外には其あなどりをふせぐとも見えて、他人の親しきよりは中悪敷骨肉の方厚かるべし。此所を心をひそめて考へ辨へば、おのづから友愛弟順の道にも叶ひて、親しきより以て疎に及ぶの敎をも知るべし。人畜の別なく、同種の親、同根の愛は天地自然の道なり。

て羽つかれば、枯木の枝を海面に浮めて、その上に下り立て、羽をやすめ、又其枝をくはへ飛來る事とぞ。それゆゑ北海邊にては、秋の初、雁の渡り來りし時は、海濱に枯枝おびたゞしく落あるなり。秋の頃は、海濱の人雁の捨置たる枯木の枝をひろひ集めて、風呂を焚て、漁人集り浴することなり。是を北海邊にては雁風呂といふ。微少の禽獸といへども、相應の智はあるものなり。

○獵犬

薩摩は武國にて、若き人々山野に出て、鳥獸を獵ること他國よりも多し。すべて山野に獵するには、よき犬を得ざれば不叶事なり。彼邊の犬常の人家に養ひ飼ものは、長低く、上方の犬よりも少し小なり。常に座敷の上に養うて、上方の猫を飼ふが如し。至極行儀よく、上方の犬よりは柔和なり。異品といふべし。又獵に用る犬は、格別に長高く。猛勢にて、座敷に養ふことなく、上方の犬を飼ふ通りなり。其猛勢なる事は上方の犬に十倍せり。先年虎の餌の爲に彼國の犬を入れしに、其犬虎の咽に咬み附て、虎を殺せし事、世間の人の物語にある如くなり。かゝる猛勢なる犬ゆゑに、常々は二三疋寄り

たのしむ事なり。是等の事にならひてや。

○渡り鶴

琉球近き島に、屋久島といふ島、大なる島にて、むかしは日本の外なる一箇國として、國史などにも屋久國人來朝するなどと見えたり。此島に八重嶽とて、高さ十三里の高山あり。此山より良材を産じて、世に稱する薩摩杉などいふ木も此山より出るとぞ。又此島よりよき硯石を出す、甚上品なり。余も一面を得て珍藏せり。すべて南國の鶴、春に至り、北方に渡らんとする時は、數千里の北海を一飛に越え行事ゆゑに、羽つかれて海中に落んことを恐るゝゆゑにや、此屋久島の八重嶽を廻りて空高く飛上り、虚空に至りて、それより北に向ひて飛渡るなり。中途にて羽つかれて次第に落るといへども、高くより飛事ゆゑに、容易に海面まで落る事なくして、朝鮮の地方へ附く事とぞ。この八重嶽の絶頂より、猶々舞々して虚空に入事なれば、人の目も及ばざる高くに入りて、はじめて北に向ふなり。雁などにても、小鳥類にても、北地より日本へ渡り來るには、中途にて羽つかれて海中に落んことを慮りて、鳥ごとに枯木の枝をくはへて來るなり。海中に

浪花ーなには卽ち大阪

○魂祭

七月の魂祭は、何れの地にてもあるが中に、長崎は殊にすぐれて仰山なり。長崎の地の墓所は、皆四方の山の半腹にありて、町よりもよく望み見ゆるに、盆中は各灯燈をともす事なり。はか一ッにちやうちん二ッ三ッ、富るものは墓ごとに十二十の灯燈をともせり。元來數千萬の墓有るに、又數雙倍の灯燈なれば、幾千萬といふ數をしらず。夜に入れば四方の山皆火と成て、其見事なる事浪花の天神祭よりも勝れり。扨十五日、十六日、家ごとに墓參とて、人々あらそひて美々敷酒肴を携へて墓の前にいたり、先祖への馳走なりと稱して、終日終夜酒宴を設。魚類はもとより、三味線尺八のたぐひを携へ行て舞ひうたふ。又隣の墓所にも此通りなれば、京地などにて花見などに行しごとく、隣家の人と打混じて、たがひに酒を送り、肴を取かはして、大に酒興に入る事なり。他國の魂祭の如く、愁傷の體はさらになし。珍らしといふべし。長崎にては、其地に渡り居る唐人、折ふしに官府のゆるしを得て、五十人六十人打連立崇福寺福濟寺などいへる唐寺に詣でて、ボサ祭といふ事をなして佛を祭り、其跡にて大に酒宴を催し、終日

白子ー津市を去る四里の海濱に在り不斷櫻を詠じたるは宗祇の「冬の花かみ世もきかず櫻かな」など最も有名也

しかりぬ。又伊勢國白子といふに、子安の觀音とて名高き寺あり。其寺内に、不斷櫻とて常に花咲る櫻あり。是は都近ければ、古今ともにその名高く、歌人俳人もつとも吟詠多し。唯三月は殊に花多く、其餘は花すくなし。冬などは纔に尋求めて見附る程なり。然れども常に其はなたえせずして咲る事、世にたぐひなき名木なり。又薩州には崎島とて冬の内より咲る櫻あり。余が遊びし年は殊に暖なりしゆゑにや、寒中に櫻多く咲たれば、珍敷て、所の人にたづねたるに、崎島櫻とていつもかくのごとしといふ。正月はじめには眞盛也。彼國は人家に多くうゑてめづらしからず。崎島とは琉球の領分にて、琉球より南の方二三百里へだゝれるよし、誠に南國なればかくもあるべし。此さくらも都近くへ移しうゑなば、必かく早くは開まじ。薩州は日本の地なれども、極めて南に片寄れば、格別暖氣にして、草木も大小異なり。梅なども冬葉落ずして、花をひらくものあり。梅に葉花と同時に見る事、上方にてはめづらしき事也。其外蘭も地にうゑてよく榮え育つ。蘇鐵は、佐田の岬邊には、一山のこらず蘇鐵なるあり。又山川といふ所には、龍眼肉の樹、又は橄欖樹など榮え茂れり。是らは南國暖氣なれば珍らしともいふにたらず。伊豫國、伊勢などの櫻は、不思議の事どもなり。

折こせば—折りて贈れば

俳人—原本何れも誹人に作る

せちに聞えければ—切に云ひたるゆゑ

それもまだ　色別そむる　ころにはや、若葉催し
ほころぶを、散さぬ風の　たよりもて、心は人の
見せばやと、折こせばこそ　けふ見そめつれ。

反歌

初春の初花櫻めづらしき、都の梅のさかりにぞ見る。

猶此外に都鄙の詩人歌人俳人など、見る人ごとに吟詠して賞翫す。余が彼國に遊びしは四月の頃なりしかば、花の時におくれて見ざりき。殘多き事なり。彼國の人にこの櫻の由來を聞に、むかし山越の里に老人有けるが、年殊に老て、其上重き病にふし、頼みすくなくなりけるに、唯此谷の櫻に先立て、花をも見ずして死になん事のみをなげきて、今一たび花を見て死しなば、浮世に思ひのこす事もあらじなどせちに聞えければ、その子かなしみなげきて、この櫻の木の本に行て、何とぞ我父の死し給はざる前に花を咲せ給はれと、誠の心をつくして天地にいのり願ひけるに、其孝心鬼神もかんじ給ひけん、一夜の間に花咲亂れ、あたかも三月の頃の如くなりけり。此祈りける日正月十六日なりければ、其後は今の世にいたるまでも、猶正月十六日に咲けるなりとぞ。其の由來も又正

先太守—前の國守
睦月—一月

には吉雄氏にて死せしと也。予が長崎に遊し比は、蠱龍既に死せし後にて見ざりき。本草綱目には、だりよう長一丈に及ぶものは、氣を吐て雲を起し雨を致すといへり。さもありぬべしと覺ゆ。

○十六日櫻

伊豫國松山の城下の北に山越といふ所あり。此所に十六日櫻とて、毎年正月十六日には此さくら滿開して見事なり。松山より花見とて、貴賤群集す。寒氣面をそぎ、餘雪梢を封ずる比に、此さくらのみ色香めでたく咲出れば、遠近の人ともにもてはやして、殊に其名高し。過し年、先太守より、和歌の御師範京都の冷泉家へ此花を贈り給ひし事あり。其時冷泉殿より御返事の御和歌あり。

十六日ざくらといふ花を　頃しも睦月半のたよりに打こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく、驚くばかりの初花櫻の花になん。賞翫の辭、

きえのこる　雪かと見れば、年々の　むつき半に
さくといふ　初花櫻、はつ春の　柳の木のめ、

打具して―相伴ひて

相國―大政大臣の唐名、此には平清盛をさしていへり

フラスコ―ホルトガル語、頸の長き硝子の德利

り著、やがて宮内の八幡宮へ詣られしかば、留守氏も康頼の室隠し置べきにあらざれば、康頼を我家に請じ入れて、夫婦の對面ありけり。それより霧島にまうで、夫婦打連て歸洛有けるとなり。其頃より今に代々子孫相續して、殊に今にては留守氏社中の惣頭と成り、繁榮なり。げに邊鄙には却て古き家も有けり。

○鼉龍

薩州硫黄が島の海中に、時々鼉龍出づ。其形今世に繪にかける龍のごとくにて、口大なり。長さ一丈二丈のものも有り。甚猛烈なるものにして、人を見ればすなはち食ふ。島にても甚是をおそるといふ。近世阿蘭陀より、鼉龍の子の長一尺ばかりなるを、藥水に漬して、四角に大なるフラスコに入れて渡し來る。藥水に漬し置たれば、其色合形狀取たる時のまゝなりといふ。小なりといへども、其形ゑがける龍のごとくにして、甚おそろしき姿のものなり。此五六年前に、長崎阿蘭陀通事吉雄幸右衛門、阿蘭陀より鼉龍の長さ四尺ばかりにて活たるを取寄せたり。甚勇猛にして、人を見れば食んとするの氣色あり。久敷飼置しかど、用心にもてあませし程なり。養行とゞかざりしにや、つひ

桑幡―原本桑幡桑畑とありて一定せず

宰相、司澤―最勝寺、澤の誤なるべし

俊寛康頼成經―法勝寺執行俊寛僧都、平康頼藤原成經の三人平氏を滅さんとする陰謀に與して配流せられし也

大隅國宮内正八幡は大社にして、宮殿いと美々敷、靈驗もいちじるしくして、たふとき宮なり。社家四氏あり。桑幡、留守、宰相、司澤といふ。桑幡氏などは、今まで七十餘代相續して、由緒殊に正敷、むかしは惣頭なりしが、今にては留守氏惣頭なり。すべていづれもなみならぬ家柄なれば、國守よりのもてなしも薄からず。又其家居などもあしからず。いにしへ俊寛、康頼、成經の三人、硫黄が島へ配流の比、折しも此留守氏位階昇進のため京へ登りしに、康頼の室硫黄が島に近き國の人のぼり來りしと傳へ聞て、ひそかにみづから留守氏の旅宿に尋來り、夫康頼はしか〲の事也。大隅の國は硫黄が島に程近しと承る。もし今生のおもひ出に、彼島にひそかにたづね渡り、今一度相見るべきたよりも有べきやとおもひ入侍れば、女の身のわきまへなくも尋ね侍るなり。あはれよきはからひも有ならば、よきに頼奉ると、誠あまりて去りがたく見ゆれば、留守氏もこれを感じ、さあらば我にしたがひて下り給へ、折よき船にひそかに渡しまゐらせんとて、打具して大隅にくだりぬ。其後いかなる事か有けん、けふは風のたよりあしく、けふは波あらしなどいろ〱にいひなして、一とせ近く我家に留置ぬ。いく程なく、京にも相國の怒とけて、康頼成經の二人は歸洛といふにぞ、既に大隅國加治木までかへ

ほる。千辛萬苦して、やう〳〵もとの二道にわかれたる木葉ふりしきし所まで歸り上りぬ。此所よりは道急にしてのぼりがたければ、下置し綱に犬をからめ附て、其綱を下より引動かせしかば、上には待まうけたる事なれば、いそぎ手ん手に綱をたぐりあげしに、犬ばかりを引あげたり。驚きあやしめど、此犬かく上り來るからは、大右衞門も恙なしとさとりて、又綱を下しやりぬ。今あげたりし犬又しきりに穴に飛入らんとするを、人人繩もてきびしくからめ附て入れず。此犬主人のいまだ上り來らざるを以て、氣遣ひて又穴の內に入らんとせし也。大右衞門も綱の下り來るを見て、みづから腰をからみて引動かせしに、人々悅びいそぎ引あげて、再び死せるもののよみがへれる心地して、恙なかりしを悅あへり。鹿の行末はつひにしれず。うたがふらくは、此穴の內住所なれば迯入りしを、犬の追ひ入りしにや。大河より奥は犬も翼なければいたり得ずして殘れりと見えたり。犬よくものいはば、其時のやうすもしるべきにと、人々をしみあへり、すべて薩州領の人は、かくのごとく生死をかへり見ず、勇猛の氣諸國に勝れたり。

○康頼夫婦對面

覺ある一腰
―信用する一刀

彼風穴、いかなる變事あらんもはかりがたし。纔に一疋の犬のために、此身を輕んずる事ひが事なりと、口々に諫め、妻子などは泣沈みて留しかど、大右衛門さらに聞入れず、皆々にいとまごひをなして、彼風穴におもむきぬ。ぜひなくも皆々從ひ行ぬ。大右衛門は腰に細引の綱を附、覺ある一腰を帶し、左の手に松明をともして、もし空の底より此綱を引かば、急に引あぐべしと約束して、つひに穴の中にぞ入にける。すぐさまに下る所も有り、又斜に行所も有りて、やゝ深く下る程に、地やはらかにて綿のごとく平なる所にいたり著ぬ。松明を以てこれを見れば、木葉落入りて年久敷なり、朽たるが積りてかくやはらかなるなりけり。此所より奥は、穴少し細く成りて、左右にわかれたり。いづれの方にか入るべきと、地に耳を附て聞試るに左の方の穴の底と聞えて、かすかに犬の鳴やうに聞ゆ。さらばとて、左の穴に入る。其深き事限なし。漸々に入るにしたがひて、犬の聲たしかに聞ゆるにぞ、悦びいさみていそぎ下る程に、其犬大右衛門が踞に飛附けり。是我主人の來るを知て、力を得て悦べるなり。其所に落附て見るに、我犬は恙なし。其地しばらく平にして、向うには大河流れり。怪敷ものあらば出來れと怒りのゝしりしかど、答ふるものも無れば、久敷居るにもあらずとて、犬を抱やう〳〵に匍ひの

行方―原本行衛に作る以下同じ

す。昔より其奥を知るものなし。ある年那須大右衛門といふ武士、飼なれし犬を引つれて狩に出しが、ふと殊にすぐれて大なる鹿一ッを狩り出し、追かけしに、其走る事風の如くすみやかにして、逸物の獵犬なりしかど追附かねて見えしが、とある山ぎはにいたり、鹿犬ともに見うしなひ、いかに尋れども、さらに見えず。聲のかぎり犬を呼しかど、つひにかへり來らず。大右衛門大に怪しみ、日暮るまで草をわけてたづねさがせしかど、たづね得ずしてむなしく家に歸りぬ。年久敷飼置し寵愛の犬なれば、行方しれずとて、扨置べきにもあらず。殊に又大右衛門こそ鹿に犬をとられしと人に指さゝれんも口をしきわざなりとおもひめぐらすに、その夜もいね得ず、明日をおそしと再び飯野にいたりて又たづね求れども、いづくをそれといふべきたよりもなければ、唯茫然としてあきれ居たりしが、つくゞゝとおもへば、此見渡し廣き野原にて、見うしなふべきやうやあらん。唯いぶかしきは此風穴の中なり。鹿の逃入りしにしたがひて、我犬も追ひ入りしならん。さあらば、いかなるあやしき事かありて、我犬の害にあひしもはかり難し。いで此穴に入りて實否を見とゞけんものをと思ひ、いそぎ家に歸り、繩よ、松明よと、しきりに穴に入るべき用意をなす。妻子朋友此體を見て、大に驚き、むかしより底のしれざる

わきまふ―辨ずの訓にて、うめあはすの意也

はざりければ、大に驚き、はからずも希代の名器を得たりと珍重たゞならず。此事唐人に聞えければ、早速彼方へいひ送り、價は何程にても望み次第に出すべく、且又朝廷へ申おくりつれば、のぞみの品は何にてもわきまふべければ、此太鼓所望したき由唐人よりしきりに乞求めしかども、河間大に祕藏して、此太鼓我手に有る事天より我にあたへ給ひしなり。むなしく淸朝へかへさんは我のみならず、日本の恥辱なりと、千萬金をもかへり見ず、强く申切てさし置ぬ。其後河間氏幾程もなく身上不如意に成りしかば、此太鼓を質物となして、銀子三十貫目を借り得、又年久しく過ぬ。其後河間氏もいよ〳〵おとろへて、此太鼓は久敷長崎の質屋にありしが、先年東より下向し給ひし御人、大金を出して、此太鼓を質屋よりうけ出し、東都に携へ歸りて、今にては御祕藏となれりと、長崎の人をしみ語れり。誠にめづらしき事なり。河間氏利に迷はざりしによりて、かくのごとき珍寶も長く日本の物とは成れり。

○飯野の風穴

日向國霧島山の西北の方に飯野といふ所あり。こゝに大なる穴有りて、時々風を吹出

り。猶深山僻地には種々の奇石珍玉あらざるもの有べからず。今唯其見る所をしるすのみ。

○孔明の陣太鼓

唐土、當代になりて清朝と國號をあらため、世々賢明の帝王出給ひて、年々月々に四海太平の化をたのしめるに附て、これまで埋れ居たりし種々の奇書珍器出る其中に、諸葛孔明南蠻の孟獲を征伐の時、かの地にて用ひられし陣太鼓八ッの內、なかば旣に官府に集りぬ。猶のこれるを、天下に詔をくだしあまねくさぐり求め給ひしかど、いづれの所にかくれたるやしれざりしかば、委敷圖寫して、日本の地長崎までも尋來りしに、その比全盛の唐通事職河間氏の家に、年比久しく炭取となし用ひ居たり。かゝる珍器とはしらずして、臺所の用につかひ居たりしが、此圖を見るに附て、つく〴〵とおもへば、我家の炭取こそよく似たりとて、洗ひ清めてくはしく見るに、胴の裏に篆書の銘有り。皮は唐金の如き金を薄く打延して張たり。獸皮は用ひず。是は南蠻溫濕の地ゆゑに、獸皮は用ひがたきゆゑにやといふ。其外胴の模樣一々清朝よりたづね來りし圖に寸分も違

唐通事職―支那語の通辯役

して且やはらかなり。薩摩は石密にしてやはらかなり。すべて南國は石皆やはらかにして、いはゞ下品なり。琉球の石などは殊にやはらかにして用ふるにたらずといふ。

肥後國八代に白濱といふ所有り。皆大石にして、その色雪のごとし。海邊皆此石にて、遠くより望み見れば、布をさらせるがごとし。城下の町々にも皆此石あり。甚明徹潤澤にして、玉の種類なり。俗に是を肥後瑪瑙といふ。誠に瑪瑙に類して愛すべきものなり。

薩州の島々には水精多し。霧島山の峯にも水精多し。予も是を見る。靈山なるゆゑに人皆おそれて取らず。同國大口村には黑水精あり。道路に皆これあり。信州和田峠の星石によく似たり。

肥前國大村には靑黃赤白黑の五色の海石あり、甚美なり。大村領の寺院又は大家などは、其塀皆此五色の一尺わたりばかりなるを積まじへ、しつくひにてつなぎ、高く築上て、ねり塀となす。甚見事なるものにして、世間に稀なり。

琉球の屬島より霰の如き細石を出す。うるほひなく、唯潔白にして奇品なり。備中より出る石是に似たり。其外但馬國に臼石あり。肥前の佐夜姫の化石等、又世に珍敷ものな

やはらか―原本凡てやわらかに作る

磬―楽器の名

赤馬關の硯石は世の人皆知れる所なり。土佐にも此石に似たる有り。其色青きもの上品なり。赤馬よりは細密にして潤澤有り、上品とすべし。然れども密に過て、小硯にはよけれども、大文字などの書用には墨おりがたくして又あしきにや。

長崎の山より、近き比蠟石を出す、新渡の唐蠟石よりは潤澤ありて上品なり。しかれども、出る事少くして、世間の用には足りがたし。

大隅國の石は密なれども、甚柔なり。彼國石燈籠、或は手水鉢、石碑、佛像等皆此石を用ふ。いかやうの巧なる細工にても施すべし。又よく水氣をふくむゆゑに、苔むして、其うへ數百年の久しきにもたふべし。彼地にて五百年に近き石塔を見たり。薩摩國、琉球國等、皆石碑には此石を用ふ。予も彼地にて老母の石塔を造らせ、琉球の毛瑞鸞が手跡にて、碑面の文字を彫り、船につみて京へのぼせたり。三百餘里の海上を經て、恙なく京へ著ぬ。老母を葬りし黒谷に建置ぬ。その石やはらかなりといへども、是をうてば磬の音あり。珍石也。

攝州のみかげ石は、その石麁なりといへども、堅き事にいたりては日本第一といふべし。故に長崎或は薩州などにても、石碑に此みかげ石を以て作る人有り。長崎は石麁に

心地して、又人間の世界にあらず。それより山を下れば、黒の濱、白の濱といふ所あり。山二ッ三ッを隔たり。白きは雪の如く、黒きは漆の如く、海邊皆かくの如くにして、色異なるをまじへず。海底までもかくの如くにて、白の濱は潮までも白きやうに見え、黒の濱は又黒みわたれり。掘り穿ても砂土なし。其きよらかなる事たとへんものなし。唐土の書籍に、手淡池といへるは此入海をいふなるべし。集眞島といへるは出崎の山をいふなるにや。凝霞臺は出崎の山の絶頂に、肥後侯より異國賊船の遠見に置れたる番所あり。渺漫たる大海に突出て、高く聳えたる山のいたゞきに築き立たるは、誠に凝霞臺ともいひつべし。やゝ久敷見めぐりて、黒白の石をひろひつゝふくろに入て携へ歸りしかど、百千里の長途なれば、荷重きに僕つかれて、少しづゝすつるに、京に歸り著く比は、やう〳〵に十許ぞ殘れり。

國々に皆名高き奇石名玉も多し。紀州那智の濱は數里が間黒白自然の碁石有り。一説には、唐帝へ献ぜしは那智の石なりと云。是亦豐後の産におとらず。

備後國には其色雪のごとき白砂あり。他國には無き品なり。盆石を好む人は、此白砂を珍重す。盆石の砂には備後に限れりといふ。

八紘譯史—清の錢塘陸次雲の撰にて三巻より成れる地理書なり

妻木こる山がつ—薪木を伐り出す山人

○冷暖玉

もろこし玄宗皇帝の御時、日本より黒白自然の碁石を献ず。其石冬は暖にして、夏はひやゝかなり。故に冷暖玉といふ。日本に手淡池といふ有り。其池中に集眞島有り。其島上に凝霞臺有り。此臺邊皆此冷暖玉なり。帝も希代の珍寶なりとて、甚是を愛し給ふと云。此事、八紘譯史など、其外唐土の書籍に多く見えたり。予が九州に遊びし時、豐後に其所有りと聞て、すなはち行て見る。佐賀の關より東南の方に入る。木こりの山路いと荒て、行先おぼつかなきに、藤、山吹ちり残りて、いと深く霞こめたり。妻木こる山がつに道をたづねて、日影もはや午に過る頃、山を皆のぼりつくして、はじめて朗なる所に出たり。遥にむかうの山の麓に藍をとけるがごとく、いと清らかに青み渡りたるは入海なり。海に添うて漁村あり。磯なれし小松の間に、漁夫の住家軒を竝べたり。行かふ人は豆の如く、つなげる舟は木葉に似たり。しばらくこれに對すれば、げに畫中にある

の陶宗儀の撰にて三十卷より成る元の法制至正末の兵亂などを敍し又書畫文藝に關する事をも載せたり

今人家正門適當ニ巷陌橋道之衝一、立ニ一小石將軍一、或植ニ一小石碑一、鐫ニ其上一曰ニ石敢當一云云。薩州は日本の極西南に在りて唐土に近く、むかしは船の往來も自由なりしかば、彼地にてかやうの事を見及び來りて此地に作り置しにや。又田畠の中に、石にて衣冠の像を彫りて据ゑたり。田夫に問へば、田の神なりといふ。是も彼の輟耕錄に見えたる石將軍の類にして、日本の衣冠の像に作りたるものにや。皆他國にては見ざる物也。伊勢などには、石を將棊の駒の形に作りて、山神と彫附て、村里の出口には必あり。是も他國にはあまり多く見ざるものなり。石敢當は京高辻天滿宮の社前に昔はありしといひし人あり。今はなし。

川三代の將軍家光

捕る—原本とらゆると訓ず

治世に武を不忘云々—易の繋辭に君子安而不忘危、治而不忘亂、是以身安而國家可保とあるをいふ

輟耕錄—明

設け、扨騎馬數十騎、歩卒百人、四方を圍て牧の駒をかり立て、棧敷の前にかり出し、騎馬の士其志す荒駒を乘り伏る事也。其樣荒に荒たる牧の駒を追詰て、或は脊より脊に乘り移り、くつわをはますもあり、細引を打懸けて引留るもあり、竹の輪を打かけて取留るもあり、思ひ々々の働誠に目ざましき壯觀なり。其隊伍の備、歩卒のかけ引、軍陣の修練にして、いと正敷事也。此事奥州相馬にもありて、年々其日限極り居て、他國よりも見物集る事也。大抵は其趣似たる事也。中土には、土地狹く、牧といふものもなく、野飼の馬も稀にて、かゝる兵馬調練もなし。人皆かしこけれども、年々柔弱の風に移ることとなるに、邊土は物事おろかなる代には、又かく古風なる事もありて、治世に武を不忘、聖人の敎にもかなへるわざも多かりけり。

○石敢當

薩州鹿兒島城下町々の行當、或は辻、街などには、必其高さ三四尺許なる石碑あり。石敢當といふ文字を彫附たり。いかなるゆゑぞと所の人に問ふに、昔より致し來れる事にて、いかなるゆゑといふ事を知らずといふ。後に輟耕錄を見しに此事出たり。其文曰、

あふる—原本あほるに作る

犬追物—古昔行はれたる騎射の一種、柵内に犬を放ちて之を追ひ射る也

大猷院—德

の爲に飽に飽て飼立たる事なれば、古に聞えし駿足にもをさ〳〵劣るまじく見ゆ。乘人も互に勝負を爭ふことなれば、爰をせんどと勵む。馬の競ひ爭ふことは人にも十倍す。さればにや、出し口にて少しの後あれば、早とても勝まじきと思ふやいな、纔十間廿間にて馳止り、打どもあふれども馳る事なし。或は中途にて、馳後れたるは横さまに切れて、見物の中に馳入る事あり。是其力の劣れるを恥てなり。又相當の力ある馬の相連て馳行に、纔に後るゝ樣なれば、其馬先の馬に追すがひ、横さまにひたともたれて押かゝるにて、先の馬強く押されて少し横に寄る所をつと馳拔るなど、馬にも色々に智慧ありて見ゆ。扨馬は立替々々乘るに、乘人は纔十人許にて、二百間許の馬場を、三遍づゝ、百五六十疋の馬を朝より暮に及ぶまで少しもひるまず乘ること、誠に馬上の達者ともいふべし。又薩州には犬追物などいふ馬術射術の式あり。折々其稽古をなす事也。他國には稀なる事にて、弓馬の家に犬追物などは極祕とする事なり。薩州にては、其祖先島津三郎兵衛尉忠義、鎌倉將軍の時犬追物の申次を勤し例に依て、御當家　大猷院樣御上覽の御時、東都に於て、島津家より犬追物を勤られしより、今に至て傳來して彼家の事とすと也。又牧の荒駒を捕る事あり。奇代の見物事也。牧の中に諸士の棧敷を夥敷

襷—原本襷に作る、襷はしたおび也

流鏑馬—馬を馳せながら鏑矢にて的を射る式

抑廻る。其間神樂を頻に奉る。太鼓の響、人馬の聲夥敷して、一村に震ふ事也。此事濟で、流鏑馬を始む。いといさましくて、古風なる事なり。其流鏑馬競馬などといふ事も、近世上方には稀なる事なるに、此邊には諸神社皆あり。殊更日向の宮崎郡下北方村にある神武天皇の宮に行ふ流鏑馬競馬は、最嚴重なり。其地方七八町許平地にして、古松森々と生ひ茂り、無雙の境内なり。宮居は中央に東向に立給ふ。馬場は宮居の南北に開きて、幅十五六間許、長さ二百間に餘れり。北より南へ向ひて乘る事なり。例年九月廿七日當日なり。前の廿三日より足揃をなす。村々より奉る馬の遲速に從て番々を定む。大凡例年馬の百五六十疋許なり。馬の上中下を分ちて、五疋づゝを一組となす。扨其當日には、左右に土俵を築上て、棧敷を構へ、見物人爰にあり。早朝より始つて暮に及ぶ。各三遍づゝ乘るなり。北の馬の出し口に大綱を引て、五疋の馬の足を揃へ、出入無き樣に構へ、乘人は狩裝束の如くに出立、襷をかけ、誠に勇々しげなり。馬主の寄り人馬一疋に五六人づゝ口綱を取り、互に片唾を呑で相圖を待つ。馬は一しほ人よりも勇んで、はや馳出ん／＼とはやり出す。行事の人聲をかくるやいなや、綱を切て一同に馳出す。五疋の足音震動し、乘人のかけ聲樹木に響きて夥し。馬はもとより此日のはれ

姚江―浙江省紹興府に在り、原本桃江に作る

東鑑―吾妻鏡とも書く鎌倉幕府の日記也全部五十一巻より成り、將軍六代八十七年間の事を錄す

ふ事をしるべからず。昔の人の知らぬ火と名附置しももつともの事と覺えし。唐土には姚江の神燈など是に似たる事もありとぞ。扨夜明るまでかくの如くにして、旭出れば火の光漸々に薄く成り行て、星とともに消滅す。むかし火の前の國、火の後の國と名附られしも、ゆゑ有ることとなり。中古の世火の字をいみて肥前肥後と改られしとぞ。又和歌の言葉などにも、知らぬ火の筑紫など書り。九州に遊ん人は、かならず此折を考て行べき事なり。

○權馬

薩州日州の邊は、都遠ければ都て古代の風殘れる事多し。諸所の神社に權馬といふ事あり。權馬といふ名目東鑑にも見えたりとぞ。其權馬といふ事、いかなる事と所の人に問ふに、何にても心願ある人、其思ひ崇ふ所の神社に權馬を奉るといふ。其式小荷駄馬野飼馬を不選、數十百疋取集め、鞍あぶみ皆具して、其上に幣を切かけ、口取の者馬一疋に三人程づゝ附て、皆白衣に襷かけ、神樂の太鼓を相圖に、其馬を一度に追立、鳥居前より拜殿を廻る事三遍、數十百の馬、數百人の口取、いやが上に折重り、我先にと一同に

國城崎郡
但馬湯のこと、又城崎湯と稱す
八ッ―午前二時
灯燈―通常は提燈と書く

今年はじめて見る人は、今宵はいかなる事ぞ、知らぬ火は、出ざるや、但しはそらごとなりやなど、口々にいふ。予もあやしみ居たりしが、八ッ近きころに、遙向うに、波を離れて赤き色の火一ッ見ゆ。暫して其火左右にわかれて三ッになるやうに見えしが、それより追々に出る程に、海上竟り四五里ばかりが間に、百千の數をしらず。明らかなるあり、幽なるあり、滅るあり、燃る有、高き有、低き有、誠に甚見事にして目を驚かせり。其火の色皆赤くして、灯燈の火を遠くのぞむが如し。たとへば大坂の天神祭を夥敷集て見に異ならず。實に諸國より來り見るもいたづらならず。所の人に問ふに、年によりて、多きことも、少き事も定らずとぞ。今年はすぐれて多く出たるも、予が幸といふべし。廣き海中に出る事なれば、天草に限らず、肥後地よりも何れの浦にても皆よく見ゆるなり。しかれども、いかなるわけにや、高山にのぼる程多く見事に見ゆるとて、此山なども群集せるなり。此夜は、此あたりの者、海中に龍神の燈明を出し給ふなりとて、おそれみて渡海の船を禁ず。獵船といへども、此一夜は乘る事なし。過し年、肥後の士ひそかに小舟に乘りて彼火の出る所にいたり見るに、唯其火前後に遠く有りて、我船近くは一ッも見えざりしとぞ。予も今宵のあたり見しかど、いかなる火とい

なしふ—原本おしゆに作る、以下大抵然り

有馬—攝津有馬郡に在る溫泉也

但馬—但馬

たる山あり。高さ七八町もや有らん。此あたりにての高山なるが、此峯よろしと、莚打敷て坐す。眞向うに肥後國有りて、唯一望につくす。宇土、熊本は少し左に見えたり。右に日奈久、向うに八代、其間の海上わたり五六里より七八里に過ぎず。南北は入海數十里にして、其限見えず。案内の人指さして、右なるは鼠島なり、左は大島なり、それは三ッの島、これは幾島と、數々をしふ。げに海上三里ばかりに、いとちひさき、島島見ゆ。知らぬ火はいづれに出るやと問ふに、島々見ゆるあたりといふ。初の程は人里も遠くいと物凄き島山なりしが、追々に知らぬ火見物の人々出來りて數十人に及ぶ。皆此近國より二日路三日路をも來りて見物する人々なり。程なく海の面もやゝ夕煙引渡して、人顏もさだかならねば、所々松どもあかして、酒など取出し、思ひ々々に、小唄、淨瑠璃、太鼓、三味線、或は謠、狂言など、各藝を盡して戯れ遊ぶ。夜陰の事なれば、誰とはしれず、殊に諸方より集りたる事なれば、遠慮はなし。彼座に登り、此莚に連り、隔なくむつびかたらふ事、有馬、但馬など、溫泉の場の交の如し。今年は例よりは殘暑も強けれども、かゝる海邊の高山に、殊に空は心よく晴たり、小夜風おもむろに吹ていと涼しければ、夜の更くるもしらず。はや夜半にもなりしかど、知らぬ火のさたなし。

北氷洋に産する海獸の名

口ばしばかり求て歸れり。肉は油を取るといふ。あまり大魚ゆゑに、食用には成りがたしといふ。扨はからざる得ものに心なぐさみて、數里の海上も程近きやうに覺えて、はや天草の地方に近附り。天草の砥石山などいふ所を右に見なし、三角といふ所より山の間に船さし入て行く。左右六七町に過じと見え、水清く、山峙て、風景又他に異なり。北へくじけ、南へまがりて尋入るに、綠につゞく小松の間に、藁屋の軒いと靜なり。何人の住けらしとゆかしくも見る。右の方は波打際所廣く、砂子の淸き事霜を置るが如くなれば、いざや此所にて船しばしといへば、やがて渚に船さし附て碇おろす。船頭いふは、此濱邊にはちひさき蛸多し。おりたちて取り給へといふに、潮は淺し、砂は淸し。皆々おりて蛸見ありく。田舍には珍らしからぬ事も、京都に住る身はいと心なぐさめり。船頭は例の鉾打かたげつゝ船さし行しが、程なく二尺に近き鱸一ッ突得て歸れり。取あへず料理て煮る。鮮けくして、味の美なることさらにもいはず。やゝ時移りぬれば、船さし出していそぐに、暮近きに天草の惣象といふ所にいたる。此所は少し民家あり、多くは漁夫なり。此村にあがりて、しらぬ火見る所の案内を賴みしに、百姓一人心ようけがひて、いたくけがれぬ莚一枚携へ、先に立てのぼる。東の海の岸にさし出

ウニコオル　―羅甸語也

に連りて、天草の島青みわたりたり。此海は、高山の麓ゆゑに、殊に深くて百五六十尋も立るとぞ。のれる船は獵船なれば、かゝる事もよくしり居て語り聞す。もつともおもしろかりしは、此船頭けふも鉾といふものを以て魚を取れり。其鉾の形鎗のごとく、柄の長さ三間、先は鐵にて作りて三ツにわれ、カヘリ有りて、長さ一尺程なり。石づきの所に長き綱を附たり。船頭此鉾をつかふ事妙にして、海上に浮める魚は、小きものといへども、これを突事鳥さしの鳥をさすがごとし。大なる魚の船に遠きは、此鉾を投るに、矢を射るよりも慥なり。けふも鉾を持て船ばたに立居たりしが、むかうの波間に黑く見ゆる物あるを、やがて件の鉾を投かけたりしに、其魚高く躍てのがれ行く。船頭したり顔に彼綱をたけ長くゆるしやる。船をもあやどりて其魚に從ひゆき、しばらくして靜に綱を引寄せたるに。其魚彼鉾のカヘリにとぢられて、段々船近く寄り來る。船頭鉾の柄を取上るまゝに、船の中にはね上たれば、其たけ八九尺餘の魚の、形細くして口吻恐ろしく、京都にてさよりといふ魚に似たり。早魚といふものなりとぞ。口ばしの長さ二尺六七寸も有らん、末鋭く、膚鮫の如く、唯獸の角の如く、魚に有べきものとは見えず。かの一角の魚吻なりといふも、此魚にて信ぜり。あまりめづらしければ、船頭に此

雲仙嶽―肥前國高來郡島原半島に聳ゆ、又溫泉嶽に作る

○知らぬ火

筑紫の海に出る知らぬ火は、例年七月晦日の夜なり。むかしより世に名高き事にて、今も九州の地にては、諸國より此夜は集り來りて見る事なり。京都の人に見る事のすくなきは、盆後のゆゑなるべし。京より九州に下る人々も、多くは皆商人の類なれば、盆前に京都へ歸るやうにのぼり來り、又下る時も京都にて盆をしまひて後下るゆゑに、八月に入りてやう〳〵九州に下り著く。此ゆゑに、七月晦日の比は、上方の人の彼地に留り居るもの甚すくなし。予はかゝる奇異の事のみ探らんためばかりに下れる事なれば、盆後早く長崎を立出て、雲仙が嶽にのぼり、それより島原に出て、城下より舟に乘り、天草に渡り、天草の惣象といへる山の峯にて、知らぬ火を見物せり。先島原にて、知らぬ火見るはいづれの地よろしきやと尋とふに、肥後國宇土、八代、松ばせの邊の浦々よし、又殊によく見ゆるは天草の島なりといふにぞ、さらば天草に渡るべしと、便船尋るに、邊土ゆゑに便船もなければ、ちひさき獵船をかりて渡る。此日天氣殊にのどやかにして、海上風靜なれば、四方の眺殊によし。雲仙が嶽はうしろに成り、むかうはるかに東南

親王より青山と名くる琵琶を得たり、壽永三年一の谷に戰歿す

のぼりての世―上代

見流なる人の家に招かれ、種々馳走の上、寶生といへる法師をよびて琵琶をひかせり。遠近、五倫、花の香、小町、玉章、似我、墨繪、老曾の森、鴛鴦の夢などいふうた、數數ひけり。先其うたの名も雅にして、其章もまた古めかし。其音のひゞきは春の鳥の霞の中に囀るがごとく、谷の淸水の岩ほにむせぶに似たり。其しらべ高きは冬の嵐の枯残る松に渡るがごとし。京都などにて聞つる平家琵琶などには似もよらず、彼白樂天が琵琶行はじめて思ひ合せり。又崩といふものあり。是は薩州のむかし、伊東大友などと、合戰の事を語るにて、其聲もはげしく、琵琶の手も繁手なり。はじめのうたとは格別に異なるものなり。もつとも是は新敷聞ゆ。はじめのうた殊にめづらしく覺えて、唯京都に此聲無き事の口をしければ、予も一ッふたつ習ひ歸りて京都にも傳へんとおもひしかど、殊にむづかしく、たやすく習ひ得べくもあらねば、殘多かりしをもだしぬ。此夜の雅興すてがたくて、別に琵琶行一篇を作りて日記にしるせり。又彼うたの章をも書寫して歸りぬ。のぼりての世の事に心あらん人は、彼琵琶京都にも傳へよかしと思ふのみ。

但馬守—次に出でたる平經正也

經正—平經正とて經盛の子、和歌に巧に又琵琶を善くせり、守覺法

いふ人有りて、當時第一の名人なるよし、夜ふけ月淸きに、獨琵琶を彈ずれば、浦千鳥集り來る事常のことなりと聞にぞ、其人ゆかしくて彼地に尋いたり見るに、始羅郡の砂淸き浦にほとりして、茅の軒端物さびしく住なせり。かくといひ入るれば、とく迎へ入れて相見る。其人むそぢにあまりて溫潤の質也。打つけに琵琶のぞみたれば、遠くたづね來りしにかんぜしにや、又好める道ゆゑにや、いなめる色もなく、木の下といふ名器を取出して、ひとつふたつ彈ぜり。其たへなる事はさらにもいはず、誠にいにしへ但馬守など堪能の名を得て水神も感ぜしなどいふを、今の京都の琵琶に思ひくらべてはいぶかしく疑しかりけるが、今日此國の琵琶を聞て、はじめて水神の感ぜしも理なりと覺え、年ごろのうたがひは皆はれにき。京都のむかしの聲は皆此あたりに傳り殘りて、今にてはかへつて京都はむかしの聲たえたりとこそしらるれ。又過し年江州竹生島に詣でし時、經正の彈給ひし琵琶の撥なりとて見侍りしが、水牛にて造り、本のかたはくりて、末は三味線の撥のごとく、廣さ纔に一三寸には過ざりし。此國の撥とは天壤の相違なり。竹生島にあるは後世の僞物なるべしやとおもふ。予もあまりめづらしさに、撥一つ求得て、都のつとに持歸り、人に見すれば、皆目を驚せり。又鹿兒島にありし時、森本

隱士彈琵琶の圖

用ふ—原本用ゆに作る、一定する爲に改めたり

をこがまし—原本おこがましに作る

り珍奇の事にも思ひ取らで等閑に打過せしなり。かへす〴〵も残多き事なりぬ。

○琵琶の妙手

都の琵琶は、唯平家物語をうたふに、其聲の調子を引出すために琵琶を用ふ。又雅樂の琵琶は、太鼓に類して、畢竟は拍子のみなり。律は絲の事なれば有りうちともいふべし。唯此二種あれども。もて遊ぶ人稀にして、感ずる人も又稀なり。俗間には絶てなし。九州には琵琶法師といふもの夥敷有りて、琵琶を彈じ、路頭に立て米をもらふ。其うた、其律、かまびすしくして聞に堪へず。又琵琶は地神經をひく。三味線法師などの賤しき者によはひすべきものにあらずなど、をこがましくいひのゝしりて、竈祓するも有り。薩摩大隅の二國もつとも多し。されど此二州なるは他國とは大に異なり。其形も平家琵琶などよりはちひさく、撥は黄楊木にて作り、甚大にして扇をひらけるが如し。年若き武士皆琵琶をもて遊ぶ。彼二州は名だゝる勇猛の風あるに、裾高くかゝげ、長き刀を十文字に横たへたる荒をのこの、夜な〳〵琵琶ひきあるく其風情おもひやるべし。其調正しく、其うた雅にして、他の國の琵琶とは似もよらず。殊に大隅國には池田甚兵衛と

蚺蛇膽ー蚺はうはゞみ也、古昔支那にて其膽を醫藥とせり、嵆康の文に蚺蛇珍於越土と見ゆ

○猪の狩倉の大蛇

是も予が遊びし前年の事なりし。求麻の城下より六里ばかり離れて猪の狩倉といふ所あり。此所の百姓二人山深く木こりに入りしに、其ふとさ四斗桶ばかりにて、長さ八九尺ばかりなる大蛇、草のしげれる間よりさはと出て追來る。のがれ得べうもあらざれば、二人ともに取てかへし、木こる那刀もて命をかぎりに働しに、つひに大蛇を打殺しぬ。この事予が求麻にいたりし比いまだ半年許の後なれば、右の打殺せし所にいまだ骨は朽殘り、其時の俤をも見つべければ、いざや行て見んと、求麻の本草者右田助右衛門誘ひしかど、もはや蚺蛇膽は腐りぬべし。骨のみ見る事も益なし。是ばかりの大さの蟒蛇は此邊にてはめづらしからずとて、等閑に打過しぬ。此蛇も榎木の蛇と同種類なるべし。かく短く太き蛇もあるものにや。

蚺蛇膽、蚺蛇骨、皆醫家の珍重する奇藥なり。予いまだ是までに其眞物を見る事をだも得ざれば、膽骨ともに得たくて右田をもすゝめしなり。今にておもへば、獨にても行て見るべき事を、彼地の人々のとかくめづらしがらざるにて、それに聞なれて予もあま

蟾酥―がまのあぶら

求麻郡―今は球磨郡に作る、古來球磨、球麻、玖摩、求麻などに作れり此書の充字亦一定せず

ず。生はなまとよむべしとこそ、いきたるには活の字を書なり。醫書などにも、蟾酥など取るには活蟾と書たり。右の罪人にもかねて此事を聞しめば、かゝるわざはひはあらざらましを。

○榎木の大蛇

肥後國求麻郡の御城下五日町といへる所に、知足軒といふ小菴有り。其菴の裏はすなはち求麻川なり。其川端に大なる榎木あり。地より上三四間程の所二またになりたるに、其またの間うつろに成りゐて、其中に年久敷大蛇すめり。時々此榎木のまたに出るを、城下の人々は多く見及べり。顔を見合すれば病む事あるとて、此木の下を通るものは頭を垂て通る、常のことなり。ふとさ二三尺まはりにて、總身色白く、長さは纔に三尺餘なり。たとへば犬の足のなきが如し。又芋虫によく似たりといふ。所の者是を一寸坊蛇と云。昔より人を害する事はなしと也。予も毎度其榎木の下にいたりうかゞひ見しかど、折あしくてやつひに見ざりき。

といふ意を含めたる也瑞齒は年老いて生ずる齒をいふ

なさく〳〵ー大抵といふ意、原本おさく〳〵に作る

何くれー何やかの事ども

○牛の生皮

鹿兒島に遊びける頃、めづらしき罪人有りけり。城下を去る事遠き田舍の百姓何某といへる者、慾心深く愚かなりしが、かねぐ〳〵何者にか聞けん、牛の生皮は價たつときものなりとて、親しき友一人かたらひて、牛をいきながらに皮を剝取りぬ。其くるしみ鳴事たとへんかたなし。剝終りて其皮を賣けれど、格別の重寶になるものにあらずとて、誰買求る人もなかりし。此事村役人聞及て、けしからざる心根の者なりと、にくみて城下へ訴へ、城主にもいたくにくませ給ひて、二人共に獄屋にめしこめられ、つひに刑をくはへられにけり。仁政禽獸に及べりといふべし。世の人生の字を心得違ひてよりこのかた、狐狸犬鼠、甚敷にいたつては人までいき膽を取るなどいふ事ありて、上も無き妙藥のやうにもてはやし、折節は心強き惡人ありて、禽獸の腹をいきながら剖破り、其苦痛をあはれまず、膽を取得て悅ぶ事、おろかなりといふべきや、なさけなきといふべきや。近江の藤樹先生も考へ置給ひし事あり。生膽の生は、生鯛生栗などいへる生と同じ事にて、干からびざるものを生といふ。生栗と書るとて、栗の實にいきたるは有べから

時習館ー熊本藩の子弟を教養する學校
都のつとー都へのみやげ
大貳ー太宰大貳即ち太宰府の次官
我黒髪も云々ー我黒髪も白くなりて瑞齒の生ずるまでに年老いたることよといふ意に緣語をかりて白川の水汲む

非ずとて、熊本の官府にもて出づ。すなはち時習館に下し給ふ。館の學士打集りて其事を書記し、且其像を摸寫し、石にゑり、紙に寫し、そこゝもてはやしぬ。其頃予も熊本にありしに、人々より此物語聞侍りしかば、其圖をこひ得て、都のつとはなしぬ。

此檜垣の女は其名高くして諸書に見たり。後撰集十七卷に、筑紫の白川といふ所に住侍けるに、大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに、水たべんとてたちよりて乞ければ、水をもて出てよみ侍りける。

　年ふれば、我黒髪も白川の、みづはくむまで老にけるかな。

又扶桑拾葉集第二卷に、檜垣が家の集を載たり。又大和物語に、純友が討手の使に、大貳小野好古下りて、檜垣の女が家のありしあたりを尋て、いみじうあはれがれりと見えたり。又謠本にも、むかし筑前の太宰府に、檜垣の庵しつらひて住し白拍子、後におとろへて此白川のほとりに住しなりと見えたり。檜垣の女はまことに賤しき白拍子なりしかど、風雅に長じ、一世に名を施し、猶千秋の後を期して、かく人跡絶たる所に、我像をみづから造りて籠置る事、丈夫にもをさ〳〵おとらざる志なりけり。興範、好古の何くれなど、其故なきにしもあらず。

西遊記　巻之一

橘南谿子著

天明癸卯—天明三年、距今百二十七年

ふご—畚と書く、物を盛りて運ぶ籠

○檜垣女

天明癸卯の春、肥後國岩戸の觀音の巖窟の中に、或人願の事ありて五百羅漢を石もて彫刻て安置せしに、其事やう〳〵成就して、猶窟の額にも安置せばやと人にはかりしかど、たやすくもいたり通ふべき所ならねば、石工をふごといふものに入れて、繩もて山の峯より釣り下して、辛うじて其額に至り、岩をゑりうがちたりしに、一所やはらかなりしかば、いぶかしくて、くはしく見るに、石の筐一ッを埋たり。とりいだして、人人集り開きみるに、内に一重の石筐あり。其蓋に檜垣女形自作といふ六字を彫附たり。蓋をひらけば小き像を入れたり。像は陶器のやうにも見ゆ。わたくしにはからふべきに

難儀—原本例の難義に作る
築上る—原本つきあげると訓ず

町々の家に水入りて難儀なるに、一年々々に水高く成り、町家水底に成るゆゑに、年々月々に置土して、地を築上て家を造れり。纔に四五年前までは地面高く家居見上る様なりしも、早四五年過ると傍より段々地面を築上るゆゑ、初に高かりし家も低く成りて、水の淀み留るやうになれり。かく成りゆかば、數十百年の後は町家も田地も難儀に成るべきやうにぞ思はる。天地さへかくの如くに變じもて行けば、況や人世の事は遷りかはるべき道理なり。あやしむに足らず。

北宋仁宗帝の世我紀元千七百二十年頃

堯天舜日の化―支那の聖天子堯舜の世の如き政化

堤の上にありし並木―原本し文字なし

問に、邵公曰、昔此地に此鳥なし。今始て至るは、氣の南よりして北するなり。主る所有るべし。客曰何をか主る。邵公曰、天下多事にして宗朝衰へんと。果して後に南遷の變ありしとなり。今我朝は上に明君ましく、人民堯天舜日の化を樂しむ時なれば、地氣の北より南すること尤の事なり。是についてみるに、近年段々諸國の川底埋もり、淺く成る事甚し。是は太平日久く、人民繁茂するゆゑ、家居器物も昔よりは年々月々に多く成ゆゑ、深山幽谷の材木も、今は斧斤入らざる地もなく、多くは切あらしたるゆゑ、雨降たびごとに山々谷々の土砂流れ出て、次第に川に出て淺く成にや。京近邊にても、近江國の湖水など四方へ廣まりたる事、四方ともに數十町に及べりとぞ。白髭明神の鳥居も昔は陸地にありしが、今は湖水の底深く入て見えず。竹生島の瑪瑙石の橋も今にては水底數丈の下に成れり。是湖水の底に土砂流れ入りて淺く成りしゆゑ、水四方に溢れて、湖は廣く成り、水面は高く成たるなるべし。淀川などにても、昔とは水面大に高く成り、淀伏見の間の堤なども、むかし堤の上にありし並木の松今は堤のすそにあり。堤の外の田地よりは、川中の水面高き事數尺に及べり。七八十年前よりは七八尺を違へりといへり。伏見の町にも余多年住せしが、余覺えて纔二十年ばかりなる間にも、年々

○地氣

天下太平の氣は北よりして南すといふ。余が友塘雨安房國那古寺に參詣して、觀音の舞臺に出て眺望せしに、前には房總の海廣く、西は伊豆の岬まで目近く見渡し、景色面白かりければ、暫坐してながめ居たりしに、所の老人傍に來りて四方山の物語せしに、其老人いふやう、扨も天地は不思議なるものなり。某幼き時より每日此舞臺に來り遊びしに、其頃は此舞臺の下まで海にて波打寄せ、釣する小舟など行かひて面白かりしが、いつしか此如に陸地に成りて、濱となり、松ども生ひ出て、大に景色變ぜり。見給へ、海までは十町許も隔りぬといふ。誠に舞臺の造り樣はかけ作りにして、海にも臨みたるやうすなれど、下の方は砂濱にて松生ひ、海までは遙に隔れり。いと怪しと語れり。余も西遊の時に、播州高砂邊に遊行せし頃聞しに、高砂の海に小き島あるに、其島漸々に陸の方に寄り來るといふ。二三十年前とは大に近く成れりとぞ。これもかの房州の地の理なるべし。すべて地氣の北よりして南するは、天下太平の瑞なりといふ。宗朝の嘉祐の末に、邵康節先生、客と洛陽の天津橋上に杜鵑を聞て、慘然たり。客何ゆゑと

那古寺—北條町の北一里に在り、觀音を安置せる有名なる寺也

嘉祐の末—

わぶる―原本わびるに作る

を考へ出して後は、不便利なる大昔の鍬先は皆追々に打直して、今のスキ鍬となしたるゆゑ、昔の鍬先日本には一本も殘り居らざるなり。すべて蝦夷人は日本人を神明のごとくおそれたふとめるゆゑに、此鍬先に限らず、日本の古物を稀々には數百千年持傳へて寶物とし居るなり。刀劍の具、目貫、鍔の類、或は蒔繪の漆器など、甚祕藏して寶物となし居るなり。是皆日本古代の細工物にて、たま〳〵に彼地へ傳へたるを、今に珍重し居るものなり。蝦夷象眼なども彼地にて作りたる物にあらず、又滿州韃靼より渡り來りたる物にもあらず、日本より昔蝦夷地へ入たるを、今又買出し來り、再び日本にて重寶する事なり。是等の類にて考へ合するに、鍬先も日本神代の耕作の道具なる事疑有べからず。扨夷人はいかなる故にさほど寶物ともてはやすといふに、或は人と爭論し、又は罪を犯し、過をなしたる時、寶物一品二品、或は三品四品、其罪の輕重によりて是を出し與へてわぶる事なり。いかやうなる罪にても、寶物さへ出せば一命を助かりて身を保つ事なり。其故に別して寶物を愛するなり。其中にかの鍬先などは持つたへたる家も、蝦夷地に幾軒とて、明白に聞え知れ、又格別に靈妙ある寶物の事にて、此物を持たる家は其所の頭とも仰がるゝ程の事故に、罪償ふ事などには用ざるなり。

小く—原本少くに作る
仔細—原本子細に作る

此鍬先甚古き物にて、幾千百年のものともしれず。書物なき國にて古き傳來しれざれば、何れの時のものにて、何の用になす物ともしれず。一說には源義經蝦夷地に渡り、威を振ひ、夷人甚尊敬しけるゆゑに、義經主從の兜の鍬形を今に傳へたるなりともいふ。然れども、余彼邊の人に聞しに、兜の鍬形よりは大にして、鐵にて作り、尤丈夫なる物といふ。さすれば兜に立べきものにあらず。余深く思ひ考ふるに、日本神代の頃の耕作の具なるべし。開きたる所を兩方の手に持ちて田畑を耕せしものなるべし。それより後世に至り、人心段々世智かしこく成り、耕作もせはしく成りしより、便利なる事を考へ出して、其かねを小くなし、それに木の柄を附て今の鍬となせしなるべし。今の鍬も木の柄を取り捨れば鍬形に成るなり。耕作第一の具にして、人民飲食の根本となるものゆゑに、質朴の神代の事なれば、此物を上無き寶として貴けるを、蝦夷人の大むかし、其仔細は何ゆゑといふことを知らずながら、日本人の寶とするにて貴き物と心得て、纔に二十本三十本許も彼地へ傳へたるを、今に至り寶物となし居るなるべし。蝦夷地は昔より田畑なく、耕作せざる國なれば、無用なる鍬の事ゆゑに唯何といふわけ無き寶物にて、反而今に傳り居るなり。日本は耕作の事第一なるゆゑに、今の鍬の如き便利なる道具

白玉を削れるがごとく、見るより目覺る心地す。又山の姿のよきは鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彥山、海門嶽なり。皆甚富士に似て、一峯秀出、畫がけるがごとし。又景色無雙なるは薩摩の櫻島山なり。蒼海の眞中に唯一ッ離れて獨立し、最嶮峻なるに、日光映ずれば山の色紫に見え、絕頂より白雲を蒸がごとく烟常に立登る。たとへば靑疊の上に香爐を置たるがごとし。大抵海內の名山是等に留るべし。其山內の奇絕は又別に書あり。今此所には仰望む所を論ずるのみ。

○鍬先

蝦夷島は文物いまだひらけず、物事質朴のみにして、唐日本の大昔のごとし。金銀米錢といふものもなく、綾羅錦繡といふものもなし。唯むかしより持傳へたる寶物あり、鍬先といふ。金鐵にて作りたる兜の鍬形のやうなるものなり。蝦夷地周廻八百里といふ。島中に纔に此鍬先を持傳へたる者三五家に不過といふ。此鍬先に甚神靈ありて、病氣或は災難などある時に、是に祈誓すれば甚奇特ありて、しるしを得る事なり。故に此鍬先を持傳へたる者は、島中の者より尊信して、自然に其所の頭のやうに成り居る事とぞ。

佛神垂跡—佛神が衆生濟度の爲に出現すること

參差たる—高低相交りたる

山、其次日向の霧島山、肥前の雲仙嶽、信濃の駒が嶽、出羽の鳥海山、月山、奥州の岩城山、岩鷲山なり。是に次で豐前の彥山、肥後の阿蘇山、同國久住山、豐後の姥が嶽、薩摩の海門嶽、伊豫の高峯、美濃の惠那嶽、御嶽、近江の伊吹山、越後の妙高山、信濃の戸隱山、甲斐の地藏嶽、常陸の筑波山、奥州の幸田山、御駒が嶽等なり。其餘は碌々論ずるに不足。伯耆の大山、上野の妙義山は余いまだ是をみず、其高低を知らず。出羽の羽黑山のごとき、其名甚高けれども、其山は甚低し。都の鞍馬山程にも及びがたし。湯殿山も叡山よりは低かるべくみゆ。是は佛神垂跡の地ゆゑに、參詣の者多きによりて其名高きなり。山の姿峨々として嶮岨畫のごとくなるは、越中立山の劍峯に勝れるものなし。立山は登る事十八里、彼國の人は富士よりも高しと云。然れども越中に入りて初て立山を望むに、甚高きを覺えず。數月見て漸くに高きを知る。是は連峯參差たるゆゑなり。最も高く聳えたがひに相爭ふ程なる峯五ツあり。劍峯も其一なり。其外にも峯々甚多く連り、波濤のごとく連り、皆立山なり。此ゆゑに、たとへば都の北山を望むがごとし。遠くより見るに、何れを鞍馬山とも稱しがたきがごとし。是を見ても、人多能なる者は反て其名を失ふを愼むべし。白山は唯一峯にて、根張も大に、殊に雪四時ありて

して高く聳え、是に應じ海甚深し。越中立山の沖に當れる海深さ三百尋の餘に及べるにても知べし。山高き所は其の海必深し。南方は石やはらかなるゆゑ、土地に骨無く、山嶽高く聳ゆることあたはず。南蠻の諸國高山無く、海また甚淺し。地球の中にて、凡日本程山高く海深き國は稀なり。此事萬國の地理を論ぜる書に委し。日本の内にても、南方の山は平穩にして巖石なく、樹木茂れり。土地だにかくのごとくなれば、人の氣も剛柔の相違あり。獸も北方は猛惡のもの多し。鷹、鷲の類も、北方のものに慓悍の氣あり。毒有る物、香有るものは、北方には稀にして、南方に多し。唯中部の地は四時の氣候正しく、生類も中和の氣を受得て剛柔の偏なく、萬物ゆたかに備りて實に王者の住所なり。

○名山論

余幼より山水を好み、他邦の人に逢へば必名山大川を問に、皆各其國々の山川を自賛して天下第一といふ、甚信じ難し。既に天下を巡りて、公心を以て是を論ずるに、山の高きもの富士を第一とす。又餘論なし。其次は加賀の白山なるべし。其次は越中の立

柑欄―通常は橄欖と書く、木犀科に屬する熱帶植物

龍眼肉―龍眼の實、龍眼は無患子科に屬する熱帶植物

此ゆゑに、冬も蟲蟄せず、蜘蛛、蚊虻、蛇虺の類四時有り。亦草木も是に應じ、蘇鐵、蘭の類も自然生の山有り。人家の庭にも直に植てよく繁茂す。櫻に冬より咲花あり。梅も落葉せず、葉ありながら花咲く。葉と花と一度に見る事は珍敷事なり。柑欄、龍眼肉、皆實のる。松、竹、榮ゆ。北國は是に異なりて、高山深谷は四時雪消せず。冬は氷柱軒端にくだりて水晶簾のごとく、氷厚く堅きこと玉石のごとし。大河急流といへども皆氷りて、車馬水上を往來す、此ゆゑに、足袋、頭巾、冬春の二季はしばらくもはなすべからず。火燵のみならず、圍爐裏甚大にして、晝夜盛に火をたく。又九十月の頃より春三四月の頃までは、毎日毎夜天氣曇り、雪ふらざれば雨降、霰あり。北風また常に烈敷して面をむくべからず。此處に秋冬春は蟲絕て無し。夏も甚少し。草木も皆色白く、其種類も南方よりは甚少し。竹絕て無し。松も又甚稀なり。梅、櫻、桃、山吹、藤、躑躅、梨、李、石榴抔、雪消て後に開くゆゑに、皆四五月の頃に一樣に花咲なり。梅は若葉出ると花咲と一度にして、葉花を一度にみる。南國の梅は葉不落して花咲き、北國の梅は葉出て花咲く。氣候の相違かくのごとく甚し。此ゆゑに、北方は寒烈の氣にて水までも堅く、南方は暖和の氣にて石までもやはらかなり。北方は巖石堅剛なり。ゆゑに、山嶽峨々と

なりけると思ひしに、反而彼大工是を憂て死せる事、唯眼前の好否に泥て、大利の得失をしらざりしなり。恨らくは我來る事おそく、渠が去ること早くして、其愁死を救はざりし事をこそと仰有りしが、果して此寺門今に至りて風火の災を迯れ來れるこそ不思議なれ。

○氣候

凡國々東西は幾千里隔れりといへども、日の行道同じければ、氣候大抵ひとし。南北を違へば纔にても寒暖大に變ず。大概は極星の高低にて、居ながら其國々の氣候は知るべし。其内、山の向背にて少しづゝの寒暖も有り。先日本にて論ずれば、日本は一ツの島山にして、其島山の絶頂といふは信濃國なり。それより四方へなだれ下り、東西の國あり、南北の國あり。南面北面それ〴〵の向き〳〵あり。薩摩、大隅、日向の地は甚南にありて、最暖氣の國なり。雪霜氷の類は其方角によりて全く無き所あり。それゆゑ、彼地いかなる高山深谷といへども、三冬にわたりて雪有る事無し。又人家に火燵といふものなく、足袋、頭巾の類用ふるに不及。尤冬は天氣常に晴朗にして、風亦强からず。

極星―北極星

三冬―三箇月間の冬

無下に——
概に

扨彼門造り果てゝ、遷都近く成りて又御覽して、朕初惡敷見て、一尺切れというてけり。一尺五寸切らすべかりしを、今五寸切べし。高く見ゆると仰有ければ、大工等大に恐怖して申やう、此門は本の門のやうに建合せ候を、一尺切れとの勅定ながら、仰のまゝに切候ひては無下に低く成り、遠く見上るに高やかなるこそきら〱と候へ。かゝる離れ家の平かに見えたらんは見苦しと思ひて、五寸を切りて候を、今五寸と仰有るは、初に御覽じたがへるにあらず、五寸隱して切り候はぬを、御目の程恐れ感じ奉りぬと申上ぬ。帝今切らば遷都の間にもあはじ。さらば其通にて有べし。但し風にても荒ければ吹倒さるゝ事もある者ぞと勅定なりぬ。大工等いみじく強く造り候上に、猶又五寸切て候へば、さらに危き事候はじと申けり。扨都うつりの後、末の世に至り、三度ばかり吹倒されたるとこそ。されば門閣の高低尺寸を爭ふ事かくのごとし。今東都は南に海を受、北に山嶽遠く、東西も猶平原の國にして、風行高からざるの地なり。且亦年々まさる繁榮、一寸の空地も無く、甍を連ね、簷をならぶれば、たま〱失火ある時に救ひがたくして大火に及ぶもむべなり。然るに、彼寺門高さ一尺を減じて建たる事、風の患を避け、火の災を逊るゝこと、土地に應じて大幸の差圖と覺えつるまゝ、いかなる宏智の者の好

檀越—檀那とおなじく施主

肝に砭して—ぎよつとして肝に針刺さるゝ如く感じたりと也

柏原院—桓武天皇

今更せんかたなしと後悔し居けるが、住山の諸僧をはじめ、大小の檀越及び同職の工匠まで誰一人難ずる者なく、唯此門の美麗をのみ稱しぬれば、獨我心にのみ籠めて日月を過しに、或日此門前を過しとき、又も顧れば兎角一尺低しと心に懸りてたゞずむに、跡より誰ならん、是も大工と見えて、二人連にて來り、此大門の手を盡して出來たるは、誠に工ある匠の仕業にみゆるに、門の大さに應じては高さ一尺を誤りたるはいかにと語る。彼造りし大工肝に砭して、扨は人の目にも見えぬる事よと、脊中に汗し、甚慚愧し、宿に歸りて後も朦々として心の中に快からず、つひに病となり、既に死せんとして、しか〴〵のよし妻子に語り、死後も猶此事殘念なりといひて終りぬとぞ。それゆゑ大工仲間にても、誤の規範として語り傳へ申事なり。近世は其誤を恐れ、何事も珍らしき作事、或は堂塔、或は樓閣、皆他所にあり來るを手本とし侍るなりと語りけるを、つぶさにかくと啓しければ、法親王聞し召、左にこそ有けるよ。我思ふ所ありて尋つるに、それとは異にして、しかも奇談を聞つる事なり。其ゆゑいかんとなれば、古昔京都の大内裏造られたる時、朱雀の南に羅城門を建られしを、柏原院叡覽ありて、此門一尺高し、必風にあたりて破損あるべし、柱一尺を切つめよと勅定ありて、歸らせ給ふ。

イケマー生馬、蘿藦科に屬する植物の名

一品法親王―一品は親王の位にて法親王は皇族の僧となりて後親王宣下を蒙りたるものの稱

甚肥大なるもの多しとなり。

廣徳寺の門

東都下谷に廣徳寺といへる禪院あり。此門格別に大なる門にもあらず、又彫琢の工を極しといふにもあらざるに、甚名高く、東都の人やゝもすれば口くせにも廣徳寺の門くといふ。余も行てみるに、京都抔の寺門に比すれば質素狹小にして、寺町の寺々の門にも是程の門は多し。何ゆゑと問に、上手の大工の作なりといふ。其後梅朧主人の書し新齋夜話を見しに、此門の事を載たり。珍敷事なれば今又こゝに書寫す。過し元祿年中、東叡山一品法親王、ある日淺草觀音へ詣でさせ給ふとて、廣徳寺の前を過させ給ふに、御輿の内より此寺の門を御覽じ、供奉の人を召し、此寺の名を問せ給ふ。しかぐと啓しぬ。御歸山の後、御側衆に、けふ路傍に見たりし廣徳寺の大門は、建ざま他に異なり。いかさま其ゆゑあるべし。吾山に出入する大工どもに尋よと仰ありしまゝ、彼是問たりしに、一人の大工申やう、誠に傳へ承る事の候。往時此門建たりし大工の、成就の後、つくぐ見るに、此門の高さ幅に應じては一尺低しとみゆ。是全く初に考へ定むべきに、

出羽國秋田領、城下より東南の方近道を行て十八里の所に、阿仁といふ所あり。此阿仁に銅山あり。當時此山より夥敷銅を掘出す事なり。掘入る穴の中をシキナイといふ。甚奥深く掘入ることとなり。入る者皆サヾイ殻に燈をともし持入るなり。扨數十町奥深く掘入り、世界の風氣通はざる所に至りぬれば、其燈火たちまちにきゆるなり。燈火きゆれば、人も亦呼吸の氣息たちまちに絶て死するなり。此ゆゑに、燈火きゆる所に至れば、急に迯歸る事とぞ。此事、我醫事に、大に考に成る事にして、人の生死物の生滅の妙を知べし。余も此穴の中に入り、試んと欲せしかども、甚嶮難の山路十八里、其上往來の人宿といふも無く、殊更穴の中は金石の毒氣ありて、他邦の人、常に其氣に馴ざる者は、毒氣にあたり死する者多しといひ、又其國の禁制にて、旅人などはみだりに銅山のあたり徘徊する事を許さゞれば、無據もだしぬ。右のごとく奥深く入れば死すれども、又奥深く銅多くして、入らで叶ざる時は、穴の小口より下に樋を伏せ、風氣廻るやうにして、幾十町にても入るなり。是を風廻と云。かくのごとくして入れば、何程入りても燈火きゆる事なく、人も死する事なしとなり。是亦其妙用を知るべし。其外此阿仁の山は上品の岩、緑靑、孔雀石等を産す。猶石藥の類は種々の珍奇多し。イケマ抔も

考に成る―参考に成る
もだしぬ―其のまゝにして止めたり
孔雀石―銅の酸化物より成る鑛物

なれば、余も指の頭程の舍利母二ッ三ッを得て歸れり。全體の色は薄黑く、土の化したる石のごとくにして、その中に米粒のごとき小舍利夥敷孕めり。誠に奇なる石なり。又此舍利濱の先に今別といふ所あり。二三里も隔れり。此所の濱を瑪瑙濱といふ。此濱に入る前後に自然の石門あり。甚奇境なり。夫より內凡半道餘、瑪瑙石の濱なり。尤常體の石も半まじれり。凡石も、瑪瑙も、大さ大抵拳の程より、雞卵、或は小きは蠶豆のごとし。皆々甚明徹にして、京都にて緖〆にするものなり。世に津輕玉といひ、又は寶石ともいふ。人馬往來する濱なれば、足元に玉石みちく、殊に日光にきらめきて目眩する許なり、其うるはしきに心留りて通行べくも覺えず。程よきはひろひ取りて袖に入る程に、兩の袂やぶるゝ許なり。されど長き旅路携へ歸りがたく、每夜三ッ四ッづゝ人に與へ、京まで携へ歸れるは纔ばかりなり。かくのごとき濱京近くにあらましかば、守る人も嚴敷、門戶杯もありて、みだりに見る事だにも許さまじきを、かゝる人無き邊地なれば、道行人の取に任せ、誰一人禁ずる者なし。珍敷地なり。

○銅山

舎利石——一種の白石、白骨の如きゆゑに此の名あるが如し。

十分が一にも足らず。此碇が關は何人の城跡にやと所の者に尋るに、是も何人といふことを知る者なし。所の人も唯城跡と計覺えたり。今に土中より太刀轡等種々の兵器を掘出す事多しとなり。されば纔に三四百年か、五六百年には過ぎざらん事を、文華無き國なれば、書傳ふる人も無くなれりける事にこそ。

○舎利濱

奥州外が濱にホロヅキといふ所有り。此海邊に舎利濱あり。小石濱なるが、其中に舎利石まじれり。白きあり、飴色なるあり。大さ豆のごとく、米粒のごとく、明徹滑澤甚愛すべし。其所を通りし日は天氣殊に朗なりしかば、濱邊に坐し、舎利石をひろひ、甚樂めり。回國修行の者抔は、此舎利石をひろひ、大に尊信する事なり。殊に奇なる事は、此濱の磯近く海中に廣さ五十間程の舎利母石あり。此舎利母石より常に舎利を産し、其舎利おちて此濱に打あげ、古今絶せず此所に舎利多しとなり。其舎利母石水面より餘程深く沈み居て、濱邊よりは見えがたし。此邊の漁父に頼めば、海底に沒入して、玄翁にて打破り取あがる事なり。此故に此舎利母石を得る事は頗難し。されど珍敷もの

城郭—原本城墎に作る

日本紀—日本書紀とて元正天皇の世に舍人親王等の撰したる漢文の國史也

して、或は川を前に受、或は兩山相對し、或は數里一望に見はらし、すべて皆山の上甚平にして、古城の跡嚴然と備れり。然れども、他所の城跡に異りて、地面甚廣大にして、十町二十町に連れり。或は中に一山高く、四面は山の姿堤のごとくめぐれる有り、或は山連り、屈曲して、所々に通路の道を開けるもあり。山は何れも皆上平にして、人作にて山を引ならしたるものなり、天然の山の姿にはあらず。此あたりにて何人の城跡にやと尋るに、知ものなし。又古書傳記にも、此あたりにかく廣大の城郭を構へ住たる人を聞かず。日本紀などに、上古蝦夷を征して鎭府を置しやうにも見えず。何にもせよ、人力を費したる事豐臣太閤などの十倍にも至るべし。日本古今いまださる人を聞かず。按ずるに、上古の世、蠻夷の住たる時、彼人に格別の豪傑ありて、かくのごとき事をなせしや、いぶかしき事の限なり。博物の人に見せば、考ふる所もあらんや。是迄人の沙汰せざる所なれば、書しるせり。又津輕地に入りて、碇が關の山の小口に城跡あり。是も飛根などのごとく、山を引ならし、前は大河を受たり。矢倉の跡、或は城門の跡など嚴然と殘りて見ゆ。此城跡も、他國の名高き古城の跡抔よりは格別に大なれども、飛根のごとく數里に連り、四方にはびこれるにはあらず。飛根にくらぶれば

河太郎—河童に同じ形三四歳の童兒の如く面虎に似身に鱗甲ありていと恐ろしと云ひ傳へたる想像上の動物

夜大勢來り集り、色々の事をいふに、皆々床の下にても口まねす。上より己は古狸なるべしといへば、狸にはあらずといふ。然らば狐なるべしといふに、狐にもあらずといふ。猫かといふに、然らずといふ。鼬、河太郎、獺、鼹鼠など、色々の名を、出るに任せて問に、いづれにもあらずと答ふ。然らばおのれはぼた餅なるべしといひしに、なる程ぼた餅なりといふ。それよりぼた餅化物と異名して、其近邊大評判に成れり。此事城下に聞えければ、奇怪のことなりとて、吟味の役人大勢來り、一夜此家に居て試るに何の聲もせず。役人歸れば、其翌夜は又聲ありていろ／＼の事をいふ。其後も毎度役人來りしかど、其來れる夜は一度も物を云はず。故にせんかたなくて其まゝに打捨置しが、一月ばかりして、其後は何の聲もなく、怪事は止にけり。何の所爲といふことも知れず、いかにしてやみたりといふことも無くて、おのづから終りぬ。

○飛根の城跡

出羽國秋田城の東邊、既に津輕地に近き所に、鶴形、飛根などいふ所あり。此邊津輕地を界たる所にて、山の姿、川の流、頗る要害の地形なり。然るに、此邊山甚高からず

原にては旅の人毎年一兩度づゝは雪吹に倒るゝことあり。今日は幸によみがへりて目でたしと云。此所に逗留すべき家にもあらざれば、とくと手足も動くやうに成りて、厚く謝禮をのべ、此次の町の柏野といふ驛に泊り、いろ〳〵と服藥せしに、身體常に復しかねて二日餘逗留保養して、やう〳〵に金澤に入れり。初て北地の雪吹に逢て命をうしなはんとし、其恐ろしき事を知れり。初の程は養軒危きやうに見えしかども、彼は無難にして、余は既に死せんとせり。余は事に臨んで氣は彌剛になれども、天禀虚弱の身、かかる烈敷事に堪ることあたはず。養軒は其氣は少し怯なれども、身體充實して丈夫なれば、二年の旅中全く恙無くしてあまたの危險を凌げり。誠に北地は南方の人の信じがたき事のみ多かりき。

天禀―原本てんりんと訓ず

○床下の聲

越前國鯖江の近邊新庄村に、百姓の家の下にて、何物か聲ありて人のいふことの口まねす。家内の男女大に驚き、急に床板を引明て見るに、何事も見えず。又床をふさぎ、人に物いふ時は、何事にても床の下より口まねす。後には村中の沙汰となり、若き者共毎

雜水―普通には雜炊と書く

様に降り、三重の合羽も紐切れ、袖破れて、不動尊の火炎のごとく頭より上に舞ひ上り、目も開くべからず、息もつきあへず。されども勇を振ひて七筋八筋の川をこし、横ざまに進みつゝ、養軒の顔を見るに、色失はつて今も死すべく見ゆ。甚是を氣遣ひつゝ、千辛萬苦して、旣に川原を八分許も來る程に、余も何とやら夢の心地に成りて、手足も働きかね舌も動きがたし。養軒も段々聲をかけて來るに、答へんとは思へども聲出ず。歩行の勢も何とやら怪しければ、養軒驚き、うしろより抱き樣子を問へども、しかと答ふる事あたはず。養軒も驚き、色々と介抱して、川原のはたに有る十軒許ならべる藁家に、やう〳〵抱きながら入りたり。こゝはコロバといふところなり。家のあるじ余が體をみて、旅の人又雪吹に倒れ給ひけるや。いそぎ帶を解て火にあぶるべしとて、大に松葉を燒く。養軒とも〴〵手傳ひ、余を介抱す。其時眼は隨分たしかに見え、心も正しけれども、手足不叶、物云ふことあたはず。暫する程に、惣身大に振ひ出づ。養軒ますます驚き、うしろよりしかと抱き、藥を用ひ、火にてあぶる。あるじもいろ〳〵と介抱して雜水などを食せしむ。半時許にてやう〳〵少し手足働き、舌も廻り出て、殊に精神も慥なれば、先死ぬまじきよしをいひしに、養軒も少しく安堵せり。亭主のいふは、此川

東遊記後編　巻之五

極月—十二月

鉢木の佐野—謡曲鉢木に最明寺時頼が佐野渡にて雪に悩みし事を載す故に鉢木の佐野といへる也

○手取川の風雪

極月十二日、雪降けれど、加賀國小松の城下を立て、安宅、篠原などいふ所を過ぐ。是は街道より少し濱手に寄れり。篠原は今の松原にて、彼齋藤實盛の討死の事など思ひつづけ、安宅にては誰をあたかの關守もなしなど口ずさみて來る程に、雪いよ〳〵降しきり、風ます〳〵烈し。粟生といふ所へ來れるに、寒苦殊に甚しかりければ、かの鉢木の佐野の夕暮の事など思ひ出せり。殊に粟生と水島との間に手取川といふ大河ありて、川原幅一里、其中に七筋八筋の川流れたり。此雪吹には河原は越し難し、逗留したまへとすゝむる人あれど、まだ晝過る頃なり、極月の事なれば日々雪は降べし、いつかのどやかに越すべき、ふゞきとて何程の事かあらん、勇氣を振はゞ此川原一ッ越さでや有べきと思ひあなどりて、晝飯丈夫に食し、身には鎧合羽、腰巻合羽、袖合羽と三重まで著し、扨川原に出たるに、風の烈敷事つるぎのごとく、雪は氷りて矢のごとく、下より上に逆

夢溪筆談—宋の沈括の撰、古今の雜事を載錄す二十六卷より成り別に補續三卷あり

入りて、倒に土間にうつる。其影大抵四五尺許にして、九輪寶鐸等まで歷々として甚明白なり。又別に戸板を持て其穴に急にむかふれば、塔影短く小にして明白なり。斜に向ふれば、塔の影大にして朧なり。小なるは二尺許にうつれり。其奇なる事目を驚せり。晴雨となくいつにてもかくのごとくうつれりといふ。但晴天の日朝日塔を照して明らかなる時は、此家にうつる影も亦甚明なりとぞ。此家は塔より東の方に當り、然るに朝日照す時に反て東の方の家に影入るも奇妙の事なり。唐土にも塔影の穴より入る事はありて、人の奇とする事にや、輟耕錄夢溪筆談などにも論じ置り。此東寺の塔影を見たる後よりぞ、諏訪の塔影のうつるも虛言なるまじき事をさとれり。

鄒衍―支那戰國の末頃の人、以爲らく儒者の所謂中國は天下に於ては十分一のみ中國名づけて赤縣神州といふ中國外赤縣神州の如きもの九ありと、其の書今は傳はらず

くろ〻の穴―くろ〻の穴の訛

怪しむべからず。莊子の鯤、鵬などは寓言にて、莊子も實にありとは思はれず。鄒衍が赤縣神州の如きもの九ッ有りといひしも虛妄の空誕と云しかど、今蕃國の圖を見れば、唐土などのごとき國十も二十もありて、九ッなどは數ならず。此おきな有る時は鯤も大なりとするに足らず。實に文物開けし御代に生れ逢たるはありがたき事なり。

○塔影

信州諏訪明神には、世俗に七不思議ありといふ。其七ふしぎの一ッに、上諏訪の塔の影下諏訪明神の拜殿にうつるといふ。余も彼地にて色々尋ね見しかど、え見附ずして歸れり。虛說にやと思ひ居しが、其後天明五年乙巳秋、京都東寺の塔の影大宮の民家にうつると沙汰せしかば、朋友四五人かたらひて行てみしに、丹羽又右衞門といふ百姓の家なり。折しも其日は少し小雨降て鬱陶しく、殊に夕暮に及びて、けふは影はうつるまじきやと思ひながら其家に入りて、影見たきよしを賴しに、此頃人々大勢見物に來り給ひていと迷惑なれど、餘義なき御賴なれば見せ申べしといひて、入口の戸を閉ぢ、其外家内の雨戸をさし、内を暗くせしに、入口の戸のくろゝの穴の七八分ばかりなるより塔の影

べつ大なるありて、蠻人の說を聞たるばかりにてまことしからざる物ありといふに、余もまのあたり親しく東海の人に聞くに、東蝦夷の海に、おきなといふ魚あり。其大さ二里三里にも及べるにや、つひに其魚の全身を見たる人はなし。春は此魚南に出て、秋よりは北へ歸る。蝦夷の獵船は每度出逢事なりとぞ。其魚きたる時は、海底雷のごとく鳴りて、風無きに波浪起り、鯨東西に逃走る。かくの如くなる時は、すはおきな來りたりとて獵船も早々に逃歸る事なり。稀に海上に浮たるを見るに、大なる島いくつも出來たるごとくなり。是おきなの背中尾鰭などの少しづゝみゆるなりとぞ。二十尋三十尋の鯨を呑事、鯨の鰯を呑がごとくなるゆゑ、此魚來れば鯨東西に逃走るなり。誠に東蝦夷の海は、即日本奥州の東海にして、東の方へは數萬里の間に國なく、世界第一の大海なれば、かくのごとき大魚も生ずるなるべし。二里三里五里にも及ぶ大魚ありとは信じがたきやうなれども、又あるまじともいふべからず。唐土などは海に遠き國ゆゑに、昔の文人學者など二十尋三十尋の鯨南海にある事をいと怪しみ、不思議に思ひたるやうなり。海に遠く住るゆゑなり。日本などは四方に海近き國なるゆゑに、小兒といへども鯨あることを怪しむ事なし。されば數萬里打開きたる大海には、かくべつの大魚ある事も

君錦先生—清田絢、伊藤龍州の男にて漢學者也天明四年九月歿年七十八

願心ある人、梨を穴の内へ入れて祈念するに、早其間に穴の中にて梨を咬み食ふ音聞ゆ。人皆恐れて眼をふさぎ、つひに其形を見たる者はあらず。諸の願望叶はずといふ事なし。上方にても梨をたちて、虫喰歯の痛を治せんと立願する人あり。遠方ながら奇効ありと云。君錦先生孔雀樓文集の中にも、此事をのせて、慥に聞えたる事を云へり。余も信州に遊びけるとき、此山に登りて奇を探り、且又權現に梨を獻じたく思ひしかど、時寒氣の頃にてえ登山せずやみぬ。昔は諸國人身御供などいふ事もあり。又其外にも人民の食する食物或は肉類などを直に食する神社多かりし樣にかたり傳ふるに、多くは武州鴻巣明神の由來の如き事にて、毒蛇惡獸、神明の寶殿により居て、食を貪る事なりけるを、人智ひらけ、文華盛に成りて後は、毒蛇惡獸の策やぶれ、今にては人食を直に食ふ神社は、狐を祭れる社の外にはたえて無き事なるに、九頭龍權現のごときは奇の奇なる事なり。

○大魚

北狄の地、夜國のおき、クルウンランドなどいふ國の海には、鯨夥敷、其中にはかく

に、細川越中守と小き札に書て、守札となし居れる所を見たり。細川侯は當時の大名なれど、近き頃其國政の勝れたる事既に日本國中に聞えて、其名を書て守札とす。

生駒山―大和國生駒郡北生駒村の西に聳ゆ

○戸隱山

戸がくし山は、信濃國の北の方によりて、越後へ出る方にあり。信州は惣體山國にて、連山波濤のごとくなるに、此戸隱山は基を別にして、京近邊にていはゞ生駒山を望むがごとくなる山なり。手力雄命を祭れりといふ。天照太神天の岩戸にこもらせ給ひける時、衆神寄玉ひて神樂を奏し玉ひければ、太神岩戸を少し内より開き給ひてさしのぞかせ給ふ所を、手力雄命岩戸の戸を引放ち拋捨玉ひしが、此戸隱山に落たり。それより戸を隱したる山といふことにて、かく名附たりとぞ。世俗のいひ傳なり。扨此山に大なる洞穴あり。其穴の中に大蛇あり。九頭龍權現と名附て、此山の鎭守の神なりとぞ。頭九ッ有る龍にて、神變不思議の靈神なり、社人毎日穴の中に神供を備へて、其まゝうしろをかへり見ず退き歸ること也。翌日は其神供の物一ッも殘らず無しと也。少しにても火のけがれたる食は其まゝにて、食したまはずといふ。又甚梨を好み給ふ。誰にても

大内―大内裏、宮中

二本松―岩代國安達郡に在り今は二本松町と稱す

三王―伏羲神農黃帝

衰ありて、殊に花街柳巷のはやり事に移され、新奇の事に走るゆゑ、大内の外には古雅なる事稀なり。是等の祭禮を好古の士に見せまほしく覺えし。

○漢文帝

奥州二本松邊より白川へ來るあたりの驛々、民家の戸口に、漢孝文皇帝守護牘と板行にしたる紙の札を張れり。扨も珍敷札かなと思ふより、心を留て其あたりの家々を見るに、家ことにあるにもあらねども、十軒目、廿軒目程には、まゝ此札をはれり。其家に立寄て、此札は何方の社より出る事にやと問ひしに、下野國日光山邊より例年神主くばり來るといふ。それは何といふ社なりやと尋しかど、百姓の老婆にてくはしき事はしらずと云。いか成ゆゑにて文帝を祀れるにや。社は何と名附け、何村の氏神なりや、聞まほしく覺えし。祭り來れるには外に深き由來も有べけれど、何にもせよ、此文帝は唐土にても世々の天子の中に三王以後の聖天子とも呼れ給ふ仁慈深き君なれば、彼國には一しほにたふとび祀るべし。我日本にまで勸請して、民家の戸々に、守札に張れる事、仁徳の有難き事を見るべし。又越前路を通りし頃、何れの地にてや、民家の戸ごと

選び—原本例の撰びに作る
今様—近代風

雞冠　小兒四人舞
拔頭　大人一人面舞
破魔弓　小兒四人舞
兒納會利　小兒二人面舞
能拔頭　大人一人面舞
花籠　小兒四人舞
大納會利　大人二人舞
太平樂　小兒四人舞
退出　陵王　大人一人舞

小兒は大抵十三四才許の者を選び集め、大人も例年舞覺えたる者、皆其一月も前より、天津社の拜殿にて、毎日拍子合せをする事なり。舞の手今樣の事をまじへず、昔より習ひ傳へたるまゝを律儀に守り來れるゆゑに、其古雅なる事甚し。何れの頃より始れる事にやと所の人に尋しかど、さだかにしる人なし。三四百年前暫斷絶せしに、此あたりの老婆一人舞の手を覺え居て、中興せしといふ。三都の地、繁華の所は、物事時々の盛

氏神―一族の祖先を祀りたる神をいへど後世産土神と混同していへり

宿の主諫て、松島の景は舟行にあり、陸路よろしからず、まげて我詞に從ひ給へといふにぞ、舟買て遊べり。誠に宿の主のいひしごとく、陸路にては景地一ッも見るべからず、其上海上も泉水のごとくなれば、いかなる風雨の時といへども危き事は有べからず。松島にあそぶ人は、是非ともに舟行すべき事なり。又富山に登るべき事なり。

○舞樂

我國を神國といふ事ゆゑなきにあらず。世間すべての事の古風殘れるは、多くは祭に見ゆ。殊に邊鄙田舍は物事質朴にして、其氏神などの祭禮といふもの最古雅なる事多し。越後國糸魚川に、彼地にて一の宮と稱する宮あり。實は一の宮にはあらず、天津社といふなり。毎年三月十日祭禮なり。此祭に兒の舞といふ事あり。是を見るに皆古樂なり。舞の面抔古物多し。横笛太鼓を以てはやす事なり。音律に不拘、拍子許にて、邊鄙の聲甚野調なり。舞はふつゝかならず、雅樂の趣あり。例年十二曲を奏す。其曲名

振鉾　　小兒四人舞

按摩　　小兒面舞

入道―法心と號す在俗の時眞壁の郡守に仕ふ一日郡守事を以て履にて平四郎を蹴しかば平四郎憤然として世を厭ひ海を踰えて宋に入り佛鑑禪師に參して悟入し後歸朝して瑞巖寺の開山となる

西湖―支那の浙江省の孤山の麓に在る湖

道なり。此松島の町よりは景色見えがたし。景色は唯舟行の間なり。扨兼て仙臺の人の云しには、松島に遊ぶ人は必富山に登るべし。松島の景は富山に留れりと聞しによりて、又富山に至る。東北に當りて其道五十町有り。富山と云は觀音の靈場にて、田村將軍の開山なりと云。高さ十町ばかりもありて、此邊にては第一の高山なり。此山の絶頂の南邊に富春山大仰寺といふ寺あり。此寺の書院の庭より東南の方を見れば、松島の全景一望の中に備る。大抵東西二三里に南北六七里許とも見えて、八百八島連れる風景畫に書る西湖の圖に甚似たり。遙に眼をめぐらせば、東洋限もなく、誠に天下第一の絶景筆紙に盡すべきにあらず。人によりて松島は俗景なりと云も、あまりに奇麗にして畫圖のごときゆゑにいふなるべし。余既に天下をめぐり盡して、名勝の地至らざる所も無きに、實に此松島の風景に比すべきもの又他所に見る事なし。此庭に一生をもをへたき心ちすれど、千里外の旅の身さてあるべきにあらねば、親しき人に別るゝ心地して寺を下り、又松島にかへり、松島より陸地をへて鹽竈の杉坂に歸る。松島と鹽竈との陸路は山に隔られて景色見えず。初思ひしは、舟にて行んは海上危くも有べし、殊に景色を見るには、歩こそ心靜にしてよかるべけれと、既に陸路より松島に遊んとせしに、

見佛禪師―高僧也松島に栖むこと十六年法華を誦すること六萬遍能く鬼神を使役して靈驗を示す鳥羽帝其の德を聞き佛像寶器を賜ひて旌表す終る處を知らず

眞壁平四郎

に數百に餘れりと思ふ。鹽竈の千賀の浦より松島迄二里半の間、泉水のごとく海亦甚深からず、五六尺或は七八尺許に見えて、底甚明なり。かくのごとく、島の間皆入海なれば、風ありといへども波立事なしといへり。此島々の松皆赤色にして、枝皆下に垂れ、作れる松のごとし。故に其景色艶美にして猛からず。扨舟を雄島に附て、上り見るに、雄島頗る大なり。此島は見佛禪師の座禪の地なり。堂宇今に連れり。島の南の邊に高さ一丈に餘れる碑有り。元の僧寧一山鎌倉建長寺に住持せし時、見佛禪師の爲に書する碑にして、字體は草書なり。苔封じて文字見えがたき所多し。世の人石摺にして珍重する石碑なり。其外、此雄島には、芭蕉の朝な夕なの吟をはじめ、俳諧者流の發句の碑、或は騷人の詩碑等甚多し。然れども此佳景に對すべき作有ぬとも覺えず。扨雄島見めぐりて、大なる橋を渡り、他の島にのぼり、又其島より橋にて松島に渡る。今松島と名附る所は陸地にて町家軒を竝べたり。多くは皆旅館なり。松島の町は耕作の地少ければ農人にもあらず。又此地は瑞巖寺の下にて、殺生禁制の所なれば漁獵の者にもあらず。他の街道にあらざれば商家にもあらず。大かたは唯松島の景色遊覽の人を宿して渡世とする事なり。瑞巖寺は町の西北にあり、禪宗にて大地也。開山は世に名高き眞壁平四郎入

尤よく似たり。其外、

筆捨島　沖唐戸島　松の島　水島
兩犬島　鍋島　親船島　屋形島
二子島　鐘かけ島　蛇島　鼓島
大鼓島　青海島　汐干島　松が浦島
橋かけ島　旗が島　内裡島　后島
都島　二王島　鹽燒島　物言島
主水島　柵島　箕輪島　鎧島
籠島　化粧島　鞍懸島　あぶみ島
貝の島　伊勢島　小町島　毘沙門島
大黒島　夷島　ふくら島　雄島
旭島　翁島　千貫島　經の島

猶此外に、船頭色々の島をさして教へしかど、書しるすまに船行過て、四方の景色を見洩さじとするに心のいとまなくして、十分の一もしるし得ず、八百八島有りと云。誠

ないふ

六調子―三味線の調子の名、本調子よりも一段高き調子也

名だたる―名に高き

似たり。其かまびすしさいふもさらなり。亂酒放逸こなたの座敷まで安からず。扨も無慚の法師原やと、うとましくて其夜は明ぬるに、いざ船かりて乘らんといふに、彼遊女そのまゝに携へて、衣かなぐりすて、鉢巻横ざまにしめて踊り狂ふにぞ興さめて、此法師らと同船せば、あたら松島の風景もいかでかのどやかに見るいとまあらん、あら不祥の法師やと思へば、詞かはすさへ口汚るゝやうにて、同船の事はやめたり。それより唯二人、鹽竈の浦より松島の雄島まで二里半の所を、賃錢纔に四百文にて小船一艘を買切漕出す。天氣殊にのどかにて、風さへ靜なるは、天幸を得たりといふべし。東に向うて行に、岸より纔に五六町の所に小き島あり、辨天島といふ。夫より十八町にしてかの名だたる籬が島あり。右の方に東宮濱といふ里あり。向うの沖の切戸の出崎を湯が崎と云。左の方を崎山と云。皆漁家なり。籬が島より左に折て、舟の頭北の方に向ふに、東の方に島々連れり。大なる島近く隔りて、其島の切戸より東海を見る。其大なる島より外にある島々、我舟の過るに從うて北よりして南に移る。小き切戸より數々の島を繰出す事の、のぞきからくりを見るごとく、又芝居抔の引道具をみるがごとし。其島皆甚大ならずして、色ゝの形あり。多くは皆其形を以て島の名とす。地藏島烏帽子島等は其形

恐ろしき事なりき。誠に此道筋三里が程には人家もなく、高き芝原にて、細き道筋數々附り。病なくとも狼の出べき土地とぞ覺ゆ。猶其先の宿々も彼商人と一組になり、皆々馬に打乘て、用心堅固にして行しに、五六里が程過しかば、鬼の沙汰もやみぬ。誠に人を取食ふものゆゑに、此あたりにては狼を鬼といふなるべし。古風なる事なり。程過て今に至ればをかしき物語ともなりぬれど、其時の物あんじ筆の及ぶ所にあらず。

○松島

五月八日、奥州松島見物のために、鹽竈の町杉坂といふ所の津國屋和助といへる旅館に宿す。あるじいふは、明日の松島御見物は幸の御友こそあれ。初より奥の座敷に泊り給ふは禪僧にて、四五人連なり。明日は舟かりて松島見物せんと宣ふ。同船して見物し給へといふ。それこそは能き連なれ、旅の僧、物語も珍らしからんと樂しみ居たるに、奥の座敷僧にも似ず振舞て、高聲に笑ひのゝしりけるに、初夜過る頃にはこの町の妓婦四五人を召來りて、酒をも肉をも呑食ひ、出家の小唄、淨瑠璃、さすがにふしつたなく、殊に奥なまりにて聞も苦し。妓女のひける三味線は薩摩などにある六調子といふに

病なくとも—狼に病附くことなくともと也、前に狼に病附てといへるに應ず
初夜—午後八時
奥なまり—奥州なまり

虎を手打にする—論語に所謂暴虎馮河死して悔無きの類をいふ

さゞめき—騒ぎ立つの意にて大いに元氣附きたるさまをいふ

の獸の爲に勇を振むこと、誠に虎を手打にするのたぐひにして、志有る者のすべき事にあらず。されどさしあたりたる事にせんかたもなく、殊にあすのみに限らず、行先は連山波濤のごとく見ゆれば、あの中を越え行んに、いかなる此上の猛獸か出んと、あらぬ思を費して、程なく夜はあけぬ。中々に打立べくもあらねば、件の男をよびて、此里に馬あらば二疋かりて與へよ。賃錢はいとはじとひたすらに賴しに、駄賃馬は此あたりにはなし抔としぶ〳〵にいひつゝ出行しが、程なく歸りて、馬二疋しかぐ〳〵の賃にてさきの宿迄かり來れり。其上此近隣に秋田へ越ゆる商人兩人宿り居て、鬼に恐れ、是も馬二疋をかりて居たりしが、そこたちの事をいひたれば、よき道連なり、同道して給はらんやと、某に賴めりと云。扨はよき味方を得たり。此方よりこそ賴たきものをと、それより彼商人と申合せ、彼兩人にこなた兩人、馬四疋に馬士四人、手ごとに長き棒を携へ、鹿狩なんどに出る樣に出立て、小うたうたひ、連大勢のいきほひさゞめき出たれば、少しは安堵して、よべ思ひ煩ひし程にもあらず。されどもしや出來らんかと、四方に眼をくばり行過しに、運よくて無難に向うの宿に著たり。聞こゆるあたりにては、彼きのふ石にてたゝき碎し狼の顋ばかり落殘れり。其體は何方へ取去しや見えず。見るだに

みて物語るさまをいへるなるべし

ともしれず。さらば其鬼はいかなる形ぞ。額に角を見て、腰に虎の皮のふんどしせりやといへば、男かぶりをふりて、左様のものにはあらずと云。然らばいかなるものぞといへば、唯犬のごとくにして少し大なりと云。せい高く、口大なりやと問へば、其ごとしと云。扨は狼にてはあらずやといふに、狼ともいふと聞しと答ふ。養軒顔を見合せ、扨は大かたならぬ恐なりといふにぞ、先程よりの詞ども俄に誠に成りし心地して、おそろしき事いふばかりなし。段々くはしく聞に、此小佐川の人も六七人も喰殺され、きのふも此向うのウヤムヤの關の者に飛かゝりしに、彼者強勇の男にして、ひしと組附、一身の力を出してつひに狼を組伏せたりしに、身に寸鐵も無れば、組伏せはふせながら、いかんともしがたし。やう／＼にかたはらの石をひろひ、其石を以て狼の頭をたゝき碎て殺しぬ。されど其身も數か所手負て、家に歸りて死せりなど、此間の事共恐ろしき限取集ていふにぞ、是は狼に病附て、白晝にも數十疋出て人を害するならん。我々、禽獸の爲に、此邊境に來りて命を失ん事、いか許口惜しき事なりと思ひめぐらせば、其夜は目もあはず。是より歸らんにも危し、行ん事も猶さらなり。此里に住はつべき身にもあらず。盗ならば衣服をも與ふべし、仇ならば智略をも施すべし。いかにせむ、異類

おぼつかなければ－氣にかゝる故

かき附やうに－せき込

ぼつかなければ、あやしのわら屋に入て、日あるうちにむかうの宿までゆき著べしやと問に、此あるじもおどろきし體にて、旅の人は不敵の事を宣ふものかな。此先はかばかり鬼多きを、いかにして無事に行過給はんや。きのふも此里の八太郎くはれたり。けふも隣村の九郎助取られたり。あなおそろしといひて、時刻の事は答もせず。同じ様にも人をおどろかすものかなと笑ひて出つゝ、又人に問に、又鬼の事いふ。あやしくも猶をかしけれど、三人まで同じ様に恐れぬるに、何とやら誠しやかにも成りて、養軒何とか思へる。詞もあやし、殊に日足もたけぬと見ゆ。雨猶そぼ降てけしきも心細し。さのみ行さきいそぐべきにもあらず。人里に遠かりなばせんかたも有まじ。猶くはしく尋問て、鬼の事いはゞ今夜は此里に宿りなんといへば、養軒も同意して、それより家ごとに入りて尋問に、口々に鬼の事いうて、舌を振はして恐る。扨はそらごとにあらじ。古郷を出て三百里に及べば、かゝる奇異の事にも逢事ぞ。さらば宿求んと、あなたこなた宿をこひて、やう／＼六十に餘れる老婆と、二十四五許なる男と住る家に宿りぬ。足すゝぎて、圍爐裏によりて木賃の飯をたき／＼も、又彼鬼の事尋れば、老婆恐れおのゝきて、何事かかき附やうにいふ。邊土の女、其言葉一しほに聞取がたくて、何事をいふ

小佐川—羽後國由利郡上濱村の大字、普通は小砂川と書く

雨中なれば云々—雨降りて薄暗けれど、案外時刻はなほ早きかも知れずと思ひての意

○羽州之鬼

出羽の國小佐川といふ所に至らんとする比は、早申の刻も過つらんと覺えて、山の色もいとくらく、殊にきのふよりしめやかに雨降て、日影もさだかにはしれず。先の宿までは又三里もあれば、とても日の内にはいたりがたからんや。されど雨中なれば思の外に時刻移らぬ事もやあらんと疑ひて、行逢ける老夫に先の宿迄ゆくに日は暮ましやと問に、眉をひそめ、道をさへいそぎ給はゞ行著もし給はんなれど、見れば遠國の人々にこそ、此程は此あたりに鬼出て人をとり食ふ。初は夜計なりしが、近き比に成りては、白晝に出て、此道行かふ者は人馬の差別なくくはれざるはなし。是迄の道も鬼の出ぬる所なるに、くはれ給はざりしは運强き人々也。是より先は殊さら鬼多し。旅するも命のありてこそ。何いそぎの用かは知らねども、日暮に及んで行給んは危しと云。養軒も聞より笑ふ。いかに邊土に來ぬればとて、人を驚かすも程こそあらめ。鬼の人を取り食ふ抔は昔噺の草双紙などに有事にて、三才の小兒も今の世には信ぜざる事なり。其鬼は靑鬼か、赤鬼か、虎の皮の犢鼻褌は古きや新きや抔、嘲り戯れつゝ暫來て、猶時刻のお

池田の長―池田の宿の長者

熊野―平家物語には熊野は母の名にて女の名は侍從とあり

東遊記後編　巻之四

○熊野御前

東海道筋天龍川の東岸に池田といふ所あり。此所は熊野御前の古郷なり。傳へ云、熊野は池川の長の娘なりと。そのむかし京に出て、内大臣平宗盛に仕へけるに、池田に殘れる熊野が母病重しと告こしければ、いとまを得て老母の病をとひたしと頻に願ひしかど、宗盛の寵愛深かりしかば猶も許さで、彼謠曲に作れるごとく、一日花見の酒宴に召具せられけるに、熊野は君の寵も花の盛もこゝろならで、かくなんよみける。「いかにせん都の春もをしけれど、なれし東の花やちるらん。」宗盛此歌を聞て、感に堪かね、其座よりいとまたびけり。熊野は數ならぬ女なりしかど、其至孝の名今に朽ずして、其里に至れば人をして昔をおもはしむ。さばかり盛なりし平家も暫の榮花にて跡かたもなし。纔に池田の里と天龍川の水のみ昔の俤にて、富貴榮曜いづくにかある。唯をしむべきは名にして、名の實は忠孝なり。

專ら乞食の徒をいへり

在にも富る家にはみづから行て、かゝる折こそ慈悲を加へ給へとて頻に勸化し、晝夜かけめぐりもらひ來れる程づゝ、毎日々々饑人を救ひけるに、兼て此和尚を信仰の人追追加勢して世話せり。始終饑人に與へ施せしものをつもり見るに、凡米百八十俵に、金六十兩を此和尚の力にて施しける。此和尚常々は人に物を乞事なく、其日限の事のみして、明日の貯もせず、法儀堅固の僧なれば、諸人ともに信仰歸依して、皆々多くの米錢を寄附して、饑人を救はせける。此二事、鶴岡より酒田へ下る川舟の乘合にて、鶴岡の人々口々に話して稱美しければ、矢立の墨にて書附歸れり。誠に鶴岡は莊內と稱して米穀澤山の國にして、元來大富國なり。富るが故に人の心も溫和にて、かゝる仁慈の事も多かりきと覺えし。

へ出る事ならずば、櫛も無用なり、かんざしも無用なり。無用の物には心も殘らず候へば、是らをも賣拂ひなば、又餘程の人をも救ふべしとて、つひに皆々賣て救ひぬ。其娘十二才に成りけるが、同じ年頃の小娘饑つかれ食を乞ひて門に立しに、其體誠にあはれにて、餘寒の嵐烈しければ、衣服ゆたかなるさへ堪がたきに、小娘はやう〳〵解物のひとへ一ツを身にまとひ、振ひこゞえたる有樣、母親見かねて我娘を呼び、其方は綿入二ツを重ねてあたゝかに著たるが、あの子は誠に不便なる有樣なり。年の程も同じ位なれば衣服も程よかるべし。最早段々暖氣にも成事なれば、あまり寒からずば其綿入一ツぬぎてあの小娘にとらせまじやといへば、娘心よげにとくしんして、上に著たるよき方の綿入を與へたり。父母ともに涙を流して悅べりとぞ。又鶴岡の町はづれに沙塚といふ所あり。此沙塚に道心者あり。禪宗なるが、道德も學問もありとて、是まで年來大地の住職をも方々よりすゝめしかど、皆辭退して、沙塚に小き草庵を結び、毎日たくはつして其日を過し、衣服は木綿より外は著ず、古び垢附ば信者より新に作りて與ふるに、是迄著せしふるき衣服はすなはち乞食非人に與へて、一ツも別に貯ふることなし。其名をしれる人なくて。皆唯沙塚の和尚とのみ呼來れる。此和尚彼饑饉の時、鶴岡の町々其外在

解物―袷なるを引解きて一重となしたる類なるべし

大地―大寺

非人―元來罪人の事なりしが後は

鶴岡―羽前國西田川郡今鶴岡町と稱す

中老頭―昔時四十歳前後の年寄を中老と稱し其中の名望ある者を選びて中老頭といへり

天明卯年の凶作に、奥州津輕南部最饑饉して、足腰の立る者は四方に走りて食物を求む。羽州秋田、隣國の事なれば饑人の來る事數萬人、秋田の地も亦凶年の事なれば救ひ足る事あたはず。其饑人溢れて又鶴岡に來る。路頭饑人にて押あへりとなり。食を得ざる者はたちまち其地にて餓死するに依て、鶴岡の人も各身上の限力を盡して救ひし事なり。其中にわきてあはれに聞しは、鈴木今右衞門といふ者、本は鶴岡の中老頭を勤し者なりしが、少々の貯も出來しかば、近き頃は役義を引て、自ら耕作して渡世しける。此人元來慈悲心深く、此度も身代の限出し饑人を救ひけるに、猶夥敷き餓死を見るにしのびず、所持の田畑竝に諸道具等迄ことごとく賣拂ひて、其力の限救ひける。其妻も又心立よき女にて、自分の衣服の類を大かた賣拂ひて救ひけるに、晴の衣服纔に二ツのみぞ殘れり。しばしが程は此二ツ殘し置しが、或日此二ツの衣服も賣りて救はんと云。今右衞門是を聞て、女は殊更衣服などを愛するものなるに、是をも賣りて饑人を救はんと云ふは殊勝の事なり。然れども、男と違ひ、又外へ出る時は著替の一ツは無くて叶はざる事なりといひしかば、妻、さればこそ此著替をも賣べく存ずるなり。著替あればこそ外へ出る心もあれ。外へ出るによりて櫛もかんざしも入用なり。今著替を賣りて外

これより姨捨山といへりとなり

みたらし―御手洗

はいかなることぞといふに、冬のはじめ、一夜湖上大なる音して物を引通るごとし。夜明て見れば、氷の上を一文字に格別の大石大木などを引通りたるがごとく、氷左右にわれ分れて一筋の道附たり。是神渡濟みたりと云。此後は人馬往來して過無し。二月の末又此事あり。其後は渡をやむる事なり。傳へいふ、諏訪明神は狐を眷屬とし給ふなり。狐は氷を聞ものなれば、此神渡は明神の使しめの狐の所爲なりと云。又諏訪に溫泉ありて、諸人入湯する所なり。湖水の中にも溫泉あり、常は知れず、唯氷りたる時は湖中にて其溫泉の湧いづる所ばかり氷らずして、氷に所々穴ありて湯氣のぼる。又下の諏訪の拜殿の板壁のふし穴より、上の諏訪の塔の影さし渡し一里を隔てゝさし入る。又上の諏訪明神のみたらしのほとりは、四季ともに毎日少し許にても雨降らずといふことなし。又明神の廻廊の板敷釘を用ひず、人歩行するに音なし。其外不思議數々あり。東海道にある天龍川は、其源この諏訪湖より流れ出る。小湖なれども底深く、魚鼈甚多くして、此邊利益ある水なり。

○鶴岡慈悲

れば一人の男幼少の時より親の如くにしける姨の年老いたりけるを妻の勸によりて或月明の夜其處の高山に捨てけるが年頃の恩を思ひ出でて悲しく「我心なぐさめかねつ更科や姨捨山にてる月を見て」と詠みて又迎へ來れり

件の洞の中へ入れ置て歸るに、明朝は其膳部皆食ひ終りてありとなり。此權現の靈驗いちじるしき事言葉につくし難しと云。誠に奇異の事なり。

○諏訪湖

信州諏訪の湖は周廻三里の小湖なり。然れども亂山重疊の中にありて、景色は無雙の地なり。此湖邊より湖上に富士山の北面を見る。富士山峭直にして寶永山を見ず。富士の形は此湖上より見るも又奇なりと云。扨此湖に、世俗にいふ七不思議といふ事あり。其中にも殊更奇妙の事とするは、此湖水冬に至れば寒國の習にて一面の氷となる。厚さ數尺に及び、金鐵のごとくにして平地に異ならず。霜月より翌年の二月までは、人馬皆氷の上を往來して少しも恐るゝ事なく、下の諏訪、上の諏訪、其間三里の所なるを、冬は氷の上を一文字に通行する故、纔一里に成りて甚便利なる事なり。いかなる重き荷物を附たる馬車にても、むかしより氷破れて水底に落入りしためしなしとは不思議なりと問ひしに、冬の初に神渡といふ事あり。其神渡ありて後は氷破るゝことなし。春に成り又神渡あり。其後は氷いまだ厚しといへども、恐れて一人も渡るものなし。其神渡

戒壇―原本戒檀に作る

姨捨の古跡―姨捨の傳説は諸本異同あれど大和物語に據

人は靜なり、堂は廣し。甚幽寂にしていと有難し。此時信心の人は涙を流さざるはなし。余も諸方の佛院にも參詣せしが、此所に勝るものなし。每夜かくのごとく誰々の參詣するといふ事もなけれども、如來開帳の時刻にはいつにても堂に滿るの參詣ありとなり。又戒壇めぐりといふ事ありて、本尊の御座の下と覺しき所を、穴の中に入りて闇中にめぐる事なり。先達の僧案內して先に立、件の穴に入る、三遍廻りて出るなり。其間念佛を唱ふるなり。此戒壇めぐりの時も、信心無き者は色々の變異ありといひ傳ふ。此寺かく繁昌ゆゑに、門前の町家も、旅亭抔大なる家多くして甚賑かなる町なり。

善光寺のこなたに、犀川、筑摩川とて甚の大河二ッあり。此二ッの川の間を川中島と云。むかし信玄謙信の古戰場なり。戰ありし所は八幡原と云。通り筋の少し脇なり。又此近邊姨捨山あり。更科あり。姨捨は低き山なり。山の二三分目に堂あり。其堂の近邊に高二十間橫十四五間許の大岩あり。遠方よりもよく見ゆる、是姨捨の古跡なりといふ。又此邊より東北の方五六里の遠さに、戸隱山を見る。此邊にての高山なり。余は戸隱山へは遊ばず。其あたりの人に聞に、戸隱の山中に洞穴あり。其洞穴の中に昔より大蛇住り。是を九頭龍權現と云。唯今に至り、往古より戸隱の社僧每朝九頭龍權現へ御膳を供ふ。

藤維則寫

雨落—あまだれを落すところ
初夜—午後八時
四ツ—午後十時
丑刻—午前二時

合り。

○善光寺

信州善光寺は格別の靈場なれば、世の尊信する寺にて、諸國より參詣の人甚多し。堂塔も廣大美麗にて、田舍には珍敷寺也。本堂雨落より雨落まで、奥行三十六間、横幅十九間、檜皮ぶきにて八ツ棟作りなり。其檜皮ぶきなる事は、信州全體大寒國ゆゑ、瓦にては凍破るゝゆゑなり。常竝の町家、百姓家にも、瓦葺といふものなし。扨山門より本堂まで、二百間の敷石にて見事なり。善光寺にまゐりて、本堂に通夜すれば、我親敷せし人の死去りしにも再び逢るゝとて、毎夜夥敷通夜人有り。余も參りて通夜せしに、誠に廣き堂に參りたる事なれば、甚物靜にて、燈明の光も細々と人顔もさだかには見えず、念佛の聲幽に聞えていと殊勝なり。初の程は人も少々にてさびしきが、初夜も過ぎ、四ツにも成り、夜半にも及ぶ頃には、いつともなく段々に人多く成り數十百人に及ぶ。是を亡者の參るなりと云。扨丑刻過る頃に、毎夜如來の開帳あり。寺僧遙の脇より絲を引て戸帳を開く。暫してやがて閉帳す。夜は更ぬ、燈火の影はほのくらし。

金賣吉次―京都の兩替商也名は末春、奥州下向の途次牛若丸を伴ふ牛若長じて義經となるに及び召されて士となり堀彌太郎光景と改む

ば菜園にある箒木のしげれるに似たり。其モミの木と箒木と二つは、雜樹茂れる中に格別に秀で、まぎれなく見ゆ。是卽むかしより名高き薗原山のはゝき木なり。かく明白に見ゆるものの、其木の下に行て見る時は影もなしとなり。唯モミの木は、こなたより見るごとくに在りとなり。それゆゑに、昔よりありとは見えて逢れぬともいひ、あるがごとくにして實は無き源氏物語の類にも用ひ來りつる事とぞ。箒谷の見る所よりは廿町許をも隔てたり。所の百姓のいひ傳へには、天照太神の御時より有る神木なりと云。又余に敎へし者のいひしは、此はゝき木は奥州の金賣吉次の通行せし時よりある木なりといひし。いづれにもせよ、坂上是則の頃より名高き木なれば、むかしよりの名木なり。今にてはかく邊鄙の中の邊土なれば、見る人も甚稀なれども、昔は此道筋奥州への本街道にて、彼鎭守府抔へ下る京都の官人衆も見及ばれぬる事なりとぞ。此邊に浪合抔いふ所も程近く、王平、勝負平も古戰場といふ。又是より東に風越の嶺などいふ名所もあり。古歌なども見ゆれば、今の如く入り込たる極山中にてはあらざりしと覺ゆ。又箒木の有る山の後に、伏屋といふ小村もありとなり。古歌の詞を今は里の名とせりとぞおもはる。何れにも奇妙の神木、世に珍敷ものなりき。友人蝶夢師も見に行しとて語り

ろに作る

坂上是則—平安時代の歌人

妻子—普通は妻籠と書く西筑摩郡の西部に在り

くはしき事は、別に音律の書にあらはしたれば、此記には略せり。

○箒木

坂上是則の和歌に、「薗原やふせやに生ふるはゝき木の、在りとは見えてあはぬ君かな」とよみし箒木といふ木、信濃國薗原山にあり。在りと見えながら無きといふより、源氏物語抔にも、箒木の巻に、一部の趣意にて、紫式部も心をこめしと云。其事餘り奇怪なるゆゑ、もしやそら言にもやと思ひ居しが、信州に遊びし頃、まのあたり見て驚く。東都へ行木曾街道の驛に妻子と云あり。其妻子の驛より、木曾街道を離れ、間道に入る。是は飯田の城下へ出る山道にて、其間十里深山幽谷計にて、樵者の行通ふ細道なり。薗、廣瀬抔いふ在所を過て、箒谷といふ所あり。此箒谷といふ所より、箒木を見る所なり。扨木曾峠と云大なる峠の手前なり。此邊王平、勝負平抔いふ少しづゝの平坦の地あり。扨此箒谷の道の右の方は甚深く大なる谷にて、底に谷川の音聞ゆ。其谷を打越して向うに、雜樹隙なく生ひ茂りたる山あり。其山の七八分目とも思ふ程に、モミの木の高く大なる一本秀て見ゆ。其モミの木に傍て、左の方に木葉眞丸に茂りたる木あり。たとへ

又調—十二律の一にて亦律の調也
據らざる—原本寄らざ

聞知る事もよくせず、又鐘は黄鐘に鑄るといふ事だも知らずして、みだりに鑄る事に成りし故に、鐘に穴あるは奇妙の事と思ひて、何の爲にせしといふ事をしる人もなくなり來れりとぞおもふ。さればこそ、日本國中に黄鐘の調に叶へりと聞ゆる鐘をいまだきかず。又穴ある鐘を外にて見る事なし。余も尾上の鐘を見し頃は、穴ある事をいぶかしく思ひしが、常宮の鐘を見、刀田山の鐘を聞て、初て其調子の爲にせし事を悟りき。今より後、鐘を鑄る人、穴をさへ穿たば、其黄鐘の調子にせん事いと心やすき事なるべし。又或人の攝州南長柄村鶴滿寺の鐘古き鐘なりといひし。是は程近き所なれどいまだ見ず。其調はいかなりや。又一とせある神道者の神前の鏡は雙調の物なりとて、諸方求けれども、其調子に叶へる鏡なかりしかば、余が知れる人新に鏡を鑄けるに、數十度鑄改しかども、つひに雙調の最中には叶はざりしかば、やむことなくて雙調に近き鏡を磨り減らして、雙調に合せたり。是等も又彼鐘に穴を穿てる事に相似たりし。余東遊せし頃、かく思ひてしるし置けるが、其後天王寺の鐘を聞て、古鐘にあらざる事を知りし。長柄の鐘を見て、唐土南北朝の北燕の物にて、其律眞の黄鐘なるを感心し、又近き頃黄鐘調の鐘を鑄さしめて數十度に及びて其法をさとり、強て穴にも據らざる事を知れり。其

全く—完全に
尾上—播磨國加古郡に在り刀田山の所在地也

作報舍　　　　寶淸軍師　　　　龍碎軍師
史六　　　　　三忠舍知　　　　行道舍知
成傳古　　　　安海哀大舍　　　哀大舍
節州抗　　　　皇龍寺　　　　　覺明和上

かくのごとし。朝鮮文にて甚讀難し。此音を聞ん事を思へど、撞事禁制といふ札を掛たり。入相には寺僧出て撞よしをきけば、入相には必聞べしと思ひしに、言葉石の爲にさゐが嶽に登りて、夜に入りて此寺に歸り下りしかば、入相を過て又鐘の音をきかず。殘念いふばかりなし。よつてつら〳〵思ふに、此鐘に穴を穿てる事黃鐘の調にせんためなるべし。鐘を鑄て後、跡より穴を穿てば、穴の大小によりて調子高低すべし。黃鐘に合する所まで穴を廣め、黃鐘の最中にて穴をとゞむ。全く鐘を黃鐘に鑄んと欲せば、數十遍鑄改るとも其最中に至る事は難かるべし。彼西園寺の鐘を幾度も鑄かへられしも、初より全く鑄んと心得し故なるべし。跡より穴を穿たば、一度にてよく調ふべし。されば古き鐘にして穴あるは、皆必黃鐘の調子なるべし。尾上刀田山の鐘、此常宮の鐘など、古人心を用ひし鐘と見えたり、近き世は、僧徒律の事不案内に成り下りて、

兼好―南北朝時代の法師にて歌文に長ぜし人也
黄鐘調―十二律の一にて律の調也

○黄鐘調

撞鐘は黄鐘の調子に鑄るものなりとぞ。兼好が徒然草にも、大坂の天王寺の六時堂の鐘は黄鐘の調なる事をいへり。余も天王寺に行たれど、鐘を撞の時にあらできかず。又過し年西遊して、播州の刀田山鶴林寺にて、律に叶へりとおもふ鐘を聞り。此事委しく西遊記にのせたり。是も聖德太子の時の鐘なりき。今度又越前敦賀の常宮に詣でしに、此鐘尋常の物ならずと人々いふに、近く寄りて見れば、龍頭の傍に穴ありて、全體の形古雅なり。銘をみれば朝鮮の文なり。豐臣公の頃、大谷刑部此地に主宰として在りし時、朝鮮國より奪ひ來りし鐘を此宮に獻ぜしと云傳ふ。其銘文に曰、

大和七年三月日菁州蓮池寺鐘成内節傳合入金七百七十三迠古金四百九十八迠加入金百十迠

成典和上　忠門法師　縍絲甜法師

上座　則忠法師　都乃法味法師

鄕村主　三長手　朱蕉吠余

淇園子―皆川淇園は儒者にて書畫を能くせり文化四年五月歿す年七十四

と云所、宮崎といふ所まで十餘里の間に竟りて、黑龍登れるを見しと云。又鐵脚道人退冥の手代、越後の名立の沖を船にて通りし時、海底に大龍の蟠れるを見しといふ。蟠龍を見ることは此手代に限らず、彼海底には折々あることなり。是等は皆慥なる物語なりき。奇怪の事なり。過し年、淇園子の劄記を見しに、其中に、或人江戸より船にてのぼりしに、東海道の沖津の沖を過る時に、一むらの黑雲虛空より彼船をさして飛來る。船頭大に驚き、是は龍の此舟を卷上んとするなり、急に髮を切て燒べしとて、船中の人々のこらず頭髮を切て火に燒しに、臭氣空にのぼりしかば、彼黑雲たちまちに散失たりと載られたり。是も亦珍らしき事なり、唐土の書にて見れば、蟄龍の登るは必雷の震するを待事なり。龍の伏する所へは雷落ると見ゆ。日本にては、龍と雷の相應ずる事を聞ず。余近頃阿蘭陀のエレキテイルを作りて、其クサリの先を茶碗に入れ、此茶碗に水を入れ置て車をまはし、其茶碗の上に指を近附れば、其水自然に逆卷登勢あり。上に應ずる物なければ其水登る事なし。其氣の上下相應ずる事、小器の中といへどもかくのごとし。況や天地の大なる其氣も、亦それに應ずれば登龍のごとき事もなしとは云べからず。

韃地—韃靼地方

洛陽長安—洛陽は周の成王の定めたる都にて今の河南省河南府城也、長安は周の武王の時始めて營みて鎬京と稱し唐の時長安と改む今の陝西省西安府也

韃地の砂漠に似たるもむべなり。唐土の北京も四十度程の地なれば、其砂漠も四十二三度の内外なるべし。又日本にて極南の地は大隅國佐田岬なり。是三十一度弱の所なり。是を以てみれば、日本も南北十二三度に及ぶ國なれば、小國とも云ふべからず。京都は皆人のしる如く、三十五度强なり。江戸は三十六度强なり。唐土にても洛陽長安抔三十五六度の地と云。齊魯三十六七度の所と云。殊に唐土にても、日本にても、中和の所なり。三十五六度の國は四時の氣候正しくして、人物も聖賢を出し、草木もよく暢茂す。南に過れば、その氣温暖にして物をとらかし、石までも柔にして、山岳も高からず穩なり。北に過れば、其氣寒冷にして物を凝らし、水までも氷り、山岳も峨々と聳えて高し。陰陽薫蒸の鹽梅至極奇妙なるものなり。

○登龍

越中越後の海中、夏の日龍登るといふ甚多し。黒龍多し。黒雲一村虚空より下り來れば、海中の潮水其雲に乘じ、逆巻のぼりて黒雲の中に入る。其雲を又くはしく見れば、龍の形見ゆることとなり。尾頭などもたしかに見え、登潮は瀧を逆に懸るがごとし。又岩瀬

天學―天文學

佐井チコペ―共に北郡にありチコペは奥戸也

○北極星

北極星出地の高下によりて、地球の南北を知る事なり。地上にて眞直に二十五里程を隔つる時は、天にて一度を違ふ故に、北極星の度數を知れば、居ながら國の南北を知り、又國の寒暖を知る。醫者も國々の氣候をしらざれば、其國の陰陽の變化を盡さず。故に疾病をも察する事あたはず。扨古人天學に精しき人萬國の度數をしるし置、又日本にても諸國の度數詳にしるせるものあり。余も漫遊のついで、猶みづから北極の度數を測試て、後日の考の一助とせんと、旅中にても用ふべき測量の器を新に工夫し、造り出して、携へ行、國々にて測り見しに、先越中富山にて見る所、北極星地を出る事三十六度半強なり。出羽國秋田四十度半なり。奥州津輕碇が關四十一度四分なり。同青森四十一度七分なり。同三馬屋四十二度二分なり。南部盛岡の四里北に澁民と云所あり、此所四十度七分なり。殊に三馬屋は日本極北の地なれば、別して丁寧精密に測りて、分厘を不違所四十二度二分なり。猶南部地の佐井、チコペの邊は、其鼻大に北に出たれば、四十三度にも至るべし。其地に至り得ざれば測らず。誠に津輕地は寒氣甚敷、海濱皆

山と谷との日受によりて人の顔異形に見ゆるものなり。飛州の中に、人の往來する谷道に、人の顔長くみゆる所あり。其谷をしばし行過れば、顔色常のごとし。此道を通り馴ざる人は大に驚く事なれども、所の人は常々に見なれてあやしむ事なしと云へり。外の國にてはいまだ聞及ばず。いと珍敷事なり。

○齋藤五郎兵衛

越前國敦賀より西北に當りて一里許、常宮參詣の道に、縄間村といふあり。海邊にて、多くは皆漁家なり。此村の庄屋を齋藤五郎兵衛といふ。此家は齋藤別當實盛が生れし家本なりとぞ。其時より今に代々家相續して、齋藤五郎兵衛と名乘、家柄なれば、所の庄屋を勤て、實盛が遺物等今に多く所持せりと云。誠に邊鄙の百姓には浮沈盛衰なく、數百年の家を保てる者多し。余も常宮に參詣せし時、彼家をも尋て、實盛が舊物も一見したく思ひしかども、常宮の歸りは夜に入りて、其事とゝのはず過たり。あまり邊土ゆゑ、此名をしれる人だにもなし。埋れ居るも本意なき事なり。

庄屋―徳川時代に領主が土民の中より命じて一村又は數村の事を治めしめしもの、村長の事

東遊記後編　卷之三

○四五六谷

四五六谷は越中飛驒信濃三國の間へ入り込る谷なり。富山へ落る神通川を逆上り、又其支流を尋てのぼるに、甚深遠にして、其奥を究る者なし。近き年飛州舟津の人兩人、此谷の奥を究んとて、三日の糧を用意して、段々川にそひて入りしに、其食も乏くなりぬれば、魚を釣り食うて猶數日の間尋入りしに、ふと伴ひし者の魚を釣り居る顏を見やりたるに、異形の化物なり。大に驚きて聲をかけたるに、魚を釣り居たる者も驚きてふりかへり見るに、其呼たる者の顏亦異形に變じて恐しさいはんかたなし。たがひにかくみゆるからは、此地に變こそ有るらめとて、いそぎ迯歸れり。遙迯出て、たがひに顏を見るに、何の變もなく常々のごとくなれば、此奥こそ山神の住所ならめ、人の入る事を忌嫌ひてかゝる變をあらはせしならんと恐れて、其後は奥深く入る者なしとなり。此事を其頃語り合ひしに、飛驒の高山の人其座に在りていふ樣、それは山神の變にはあらず、

舟津―吉城郡船津町

如く一登蓮法師といふものますほの薄まそほの薄といふことを攝津の渡邊の聖の許に雨中人の止むるをも顧みず尋ねに罷りたりしをいふ、徒然草に出づ

なり。されど其父既に七十才に餘り、子とては唯一人の養軒を、修行の爲にはおのれが愛を割て、師に千里外に從はしむる其志、人の親たる者のよき手本なり。是ぞ眞の子を愛するといふべし。さればこそ、此度も東遊の事を日向へ申送りし計にて、其許をまたずして發しぬ。それより東北のこらず遊歷して、東都まで歸り著ぬる日は、我身の事よりも、先養軒が旅中病る事もなくて恙なく從ひたりしを嬉しくぞ思ひし。

選める—原本撰めるに作る
増穂の薄の

は日向より來り居し養軒を具せり。此養軒は、余が西遊せし時、肥後の球磨にてあるじとせし青井信濃守の家に儒學修行の爲に來り居りしに、五十日が間同居せしかば、其時醫の術を少し傳へき。余が青井を辭し去る時、養軒從ひ來らんとせしかど、其父日向國にありて、いまだ漫遊の事を乞はず。其主君東都にいまして他邦に移る事を願はず。君父に不請して師に從ふの道なしといひしに、理に伏して、肥後に殘り留れり。其後養軒日向に歸り、此事を父に語り、殘念なりといひしかば、父玄誠怒りて、汝いさみなしといふべし。好事は得難うして失ひやすし。其時直に從ひて九州にも四國にも押渡り、稽古の功を積ん事こそ老父が悦ぶ事なれ。唯一封の書をだに送らば、何ぞ我許を待ん。主君へのいとまは老人よく取成して願ひなば、肥後に行たるも、四國に渡るも、主君のいとまの出し事は同じ事なれば、など相濟ざる事の有べき。よしなき事を思ひ過し、時におくれし事かへすぐもいさみなき事なりと、強くしかれり。其故、又其次の年に至り、再び遊學のいとまを願ひ、京師に登りて余に從ひしなり。されば今度も此養軒を選める事、其父の詞の勇なるを感じ、且は養軒が生れ附、右の注文によく叶へるを以て具せしなり。誠に其父の詞のごとく、物學ぶ事は增穗の薄のごとくならざれば成就し難きもの

給へる父もいませり。今程はいかゞ居給ふやらん。こなたの事をも思ひわすれはし給はじなど、取集ていひ出れば、養軒も打しをれて、此程過來つる危かりし事共語り合ひ、此行先何卒して危き事を侵さず、命全うして、京へも歸り、又國許の老父にも逢たきものを、最早旅もよき程ならずや抔、少し心弱くさしうつぶき居たる折ふし、時鳥頻におとづれしかば、養軒矢立を取出し、

相携千里遠京畿旅館夜深燈影微
窓外杜鵑聲切々請君細聽不如歸

養軒もとより文字の才乏しく、殊に詩歌の道はいまだ學びもせず。されど實境に在りて實情を述るに、余も是を吟じて覺えず悵然として、是より歸をいそぐ事とはなりぬ。初家を出んとする時、門生子皆從んと請ふ。然れども召具するには、其人にあらざれば難儀に及ぶ事なり。第一大勢は悪しゝ、一人に限るべし。扨數百千里の行程なれば、心弱き者、足弱き者、多病の者、皆あしゝ。辛苦をいとふ者あしゝ。大酒する者あしゝ。短慮なるものあしゝ。其父母愛に過る者あしゝ。其主許さゞる者あしゝ。是等の事をえらめば具すべき者甚得難し。西遊の時は越中より來り居し文藏といふ者を具す。此度

纓ニ滄浪之水濁兮可ヨ以濯ニ我足ニとあるを引く

しをる―原本しほるに作る

其人―然るべき人

洞庭湖―湖南省岳州府に在り支那第一の湖にて楊子江に注ぐ

青草湖―同じく湖南省岳州府にあり楊子江に注ぐ

滄浪の水云々―孟子離婁に有レ子歌曰、滄浪之水清兮可ニ以濯ニ我

地狭く、たとひ廣き所にても土地に高下あれば、川水急に流れて、左右へくぼみ入のいとまなし。唐土なども、繪圖を以て考ふるに、洞庭湖、青草湖抔、すべて湖といふ者、則越後の潟と同じ趣なり。此故に皆長江に傍て湖あり。北方の地は地面に高下ありて山多く嶮岨なるゆゑに、黄河に湖ある事なし。日本にては、唯越後のみ潟あり。其他には無し。但し出羽の八郎潟、常陸の霞浦抔、少し似たれども其實は又異なり。

○養軒が詩

飛馬川の波浪、尾國の雪、羽州の鬼、津輕の饑渇、其外千辛萬苦身の上も危き事度々なりしかど、旅中の艱難はかねて思まうけし事なれば、召具せし養軒もつひに難儀の事を云ざりしが、奥州の地にて、或夜あやしのわらやにやう〳〵と宿をかりて、足すゝぐべき湯もなければ、うらの谷川を滄浪の水と見なし、夕暮よりしめやかに降すさむ雨の音に、あすの途さへあんじ過し、眠る心ちもあらざれば、兩人さしむかひて、扨も都を出しは去年の秋なり。いつしかに年暮、春も去りて、今ははや四百餘里を隔てたり。誠にそこの故郷よりは六七百里に餘れる行程を隔てたるも、思へば心細くやはあらぬ。年老

璞也、連城の壁ともいふ
合浦の珠—合浦は支那の名珠の産地なるより凡て名珠を合浦の珠といふ也
折ふし—往々
蚌珠—蚌より出づる珠也、蚌は蛤の類

聞及ばず。唯越後に在ける頃、新潟の人の語りしは、此近きあたりに福島潟といふかたあり。此潟に珠をふくめる貝あり。其大さ三四尺わたりもあらん。月明らかなる夜は、折ふし其貝口を開くに、其珠大さ拳の程もあらんと見えて、暁の明星の出たるごとく、光明赫やくとして水面にきらめく。人是に近づく時は、忽ち口を閉て水底に沈み、或は口を開きながら水上を矢を射るごとくに去る。其貝出る所定らず。何時見るにも其大さ同じ程なれば、唯一ッの貝と思はる。折々見るものあれども、昔よりある貝にして殊に光あるものなれば、人恐れて取事なし。又あまり程近く見る事なければ、何貝といふ事をしる事なし。唐土抔にていふ所の蚌珠にやと沙汰するのみなり。

此福島潟といふは、越後にて尤大なる潟にて、徑六七里に餘りて、江州の湖水を見るがごとし。其外にも鎌倉潟、白蓮潟、鳥屋野潟などいひて、越後には潟と名附るもの甚多し、他國には無きものなり。此越後は唐土の江南の地に似て、廣大なる國にて、しかも疊を敷たるがごとく甚平坦なる土地なり。其中に大河流る。其土地甚平なる故に、川の流急ならず。所々にて河水兩方へくぼみ入りて溜り水となる。是を彼地にては何方何方といふ。皆甚大にして、二里三里四方、或は五六里四方なるものあり。他の國は

卞和が玉—韓非子卞和篇に出づ、楚人卞和といふ者の荊山に得たる

○龍鱗

越後糸魚川の近在、黒姫山の麓、姫川の岸に、水に臨みて大なる岩出たる所あり。先年姫川大洪水の時、水引て後、獵師彼岩の邊へ行しに、何とは知らず白く滑なる脂のごとき物多く附居たり。又岩の角の所に、大なる鱗とみゆるもの五六枚附たり。其大さ五六寸づゝあり。何物か洪水に押出され來りて、此岩角に強くすれて、鱗落ち脂も殘れるなるべし。誠に此姫川は瀧のごとくなる急流にて、大河なれば、其洪水の勢は、いかなるものも押流さるべし。彼獵師其鱗を取歸り、今に所持せり。人皆龍の鱗といふ。

○蚌珠

山から出るを玉といひ、水に生ずるを珠といふ。唐土にはむかしより卞和が玉、合浦の珠などいひ傳へて、名高き玉ども數々聞え、限無き世の寶ともてはやし、君子溫潤の徳などにも比せり。我朝には、昔より格別に名高き玉を聞かず。神代に曲玉などいへど、今古塚より掘出せるを見るに、格別珍愛すべき物とも見えず。又珠玉を產する山川をも

小道かといひて、幾里ありと答ふ。惣て古風なる事多し。

○錦木

錦木の古跡は、南部領と津輕領との境小湊と云所の傍にあり。かい道より東南の方へよほど入込たる所なり。其跡にツキと云木の檜木に似て殊に大木なるが一本殘り有しが、四五年以前に雷火にて其木燒失せりとなり。又南部三の戸の西の方の在中に、錦木の古跡とて、巡見使なども一見の地ありと云。何れが誠の古跡なるにや。都て名所古跡も仙臺より上方の地に甚多し。津輕、南部は甚少し。出羽の國にても、秋田邊は古人の遊びし事もなしと見ゆ。唯西行一人は極邊の地にも遊びしにや、外が濱、岩城山等の和歌殘れり。其外の名所は纔に津輕野、善知鳥宮、けふの里、此錦木の塚など許なり。東の壺の碑、野田の玉川などは、南部の內とも云。南部、津輕、秋田邊は、むかしは皆夷人の住家なりけると覺ゆ。やう〳〵此一二百年許こそは、かく全く日本の地と成れりといふ人あり。

錦木―藻鹽草に云、凡夷俗求婚、先立錦木其女之門、曾有男女許嫁未成婚而死里人哀之、作塚合葬故名

津輕野―中津輕郡和德村の內

善知鳥宮―青森市の西に在りて外濱の古祠也祭神不詳

野田の玉川―九戸郡野田村の內

廣漠—原本廣莫に作る

し。然るに田名部の地の北海へ出張たること五十里許もあるよし。是にても中國西國の一ヶ國の地面よりも廣し。然るに其高纔に五千石と云。是にて人民の少きを知るべし。惣て南部の地は海廣く、山深く、平地も右に云ごとく廣漠なれば、新に開きだにせば、上上の田畑幾千百萬石を得べし。唯極邊土ゆゑ、人民みたずして、當時纔に十二萬石の地と定られたり。しかも其土地は甚肥たり。唯耕作の人なきを惜むべし。又南部の地に、南より段々、一の戸、三の戸、五の戸、七の戸、八の戸、九の戸、野邊地とて、戸の字の附たる地多し。戸の字を皆へと讀なり。皆三里五里或は七八里を隔て、山に據り、川を受て、要害の地なり。多くは城跡と見ゆ。今にても、戸の字附たる所は皆町作にて賑なり。往古蝦夷を防し關所木戸なりと覺ゆ。それゆゑ、今に至りても猶其名の殘りたるなるべし。其内野邊地といふは、北の終なり。又南部の地は、今も六町を一里と云。余初宿より宿の間を尋るに、或は廿五里、三十二里抔いひしに驚しが、後には馴て常に成たり。道平なる所などは、馬に乗りて道をいそぎし事ありしが、南部の地にては、一日に七八十里、又は百里も經行せし事ありき。仙臺領津輕領も、南部に近き地は多く六町を一里と云、六十町を大道一里と云。其地の人に里數を尋るに、其人大道か

七の戸—陸奥國北郡七戸村
さはる—原本さわる
野邊地—北郡今の野邊地町
八つ幸田山—青森の南七里許にあり通常は八甲田山と書く

○三本木臺

夫南部の地は廣大無邊にして、何れの國といへども此地の廣きに比すべき所なし。殊に七の戸邊に三本木臺といふ野原あり、唯平々たる芝原にて、四方目にさはるものなし。此原東西凡二日路、南北半日路程ありと云。其間に人家もなく、樹木も一本も見えず、實に無益の野原也。雪中には、此邊の人といへども四方に目印なければ方角知れず、五七日も往來やむ事ありとかや。此外にも野邊地といふ所より七の戸迄來るにも、五十町道四里半ありて、東西は猶廣し。此所も唯一面の芝原なり。此原は少し高ければ四方の山々見ゆる。西に八つ幸田山あり。西南には十三四里を隔てゝ三の戸嶽見ゆ。東南は廿里許をへだてゝ八の戸嶽みゆ。又遙の南五十里隔てゝ盛岡の岩鷲山見ゆ。かくのごとく、四方豁然として數百里一望に歸し、廣遠なる事大海を望がごとし。右岩鷲山見ゆるにて、其地の廣平なると、岩鷲山の高きを思ふべし。又一の戸より沼宮内まで、一驛の間道中記にしるす所七里なり。か様に宿より宿へへだゝり、人馬の繼無き所他の國にはあらず。全體此邊人民甚少し。野邊地より北を田名部といふ。田名部の地は高五千石のよ

盛岡―原本
森岡に作る

○駿河名

奥州南部の地は、日本東北の極ゆゑ、殊に野鄙なり。然れども、其人甚質朴にして、又甚神佛を信ず。就中伊勢太神宮を深く信じ、いかなる貧しきものも、男女とも參宮せざる者なし。余盛岡近所にて馬に乘しに、其馬かたの物語に、我祖父代々駿河と名附といふ。余も驚きて、馬かた抔をする身の父の、いかなればかゝる國名を名乘る事ぞ。御身の父祖はいかなる家筋の人にやと問ひしに、馬かた答へて、此名には深き由來こそ侍れ。某が祖父參宮せしとき、道すがら諸國の景色土風を見及びけるに、其中に駿河國程よきはなしと思ひけるが、歸りての後も猶彼國ゆかしく覺えけるまゝ、みづからの名を駿河と附て、一生を終ぬ。我父も亦、其父の名なれば、同じく駿河と名乘りぬ。某も又、駿河と名乘べきを、在所の庄屋あまり大なる名なりとて、いなみけるまゝ、某ばかり又助と申なりといへり。余も覺えず馬上に笑を催せり。誠に是等の事にも、彼地の質朴なることと思ひやりぬべし。

物をそこなひければ、マチンを飯にまじへ、鼠に飼ひ、二三疋も取りて庭先に捨たりしに、其夜近所の狐の子來りて、彼鼠を食たるに、マチンをあたへたる鼠なれば、狐も其毒にあたりて死たり。親狐其家のあるじを大に恨み、姉娘に取附て、色々とうらみ口ばしり、數日なやみてつひに死せり。又其次の娘にとり附て、唯一月ばかりの間に、三人の娘死しぬれば、父母甚歎き悲しみ、其夜庭先へ立出ていひけるは、鼠を捨たるは汝が子にあたへ殺さんとの事にはあらざるに、汝が子むさぼり食ひて死したり。是元來汝が子のあやまりなるを、此方のしわざのやうに心得、此方の愛子三人までを取殺すとはいかなる事ぞや。畜生とは云ながら、あまりなる事かなと恨かこちけるに、彼親狐此道理につまりしにや、其翌晩庭先に老狐二疋死し居たり。百姓夫婦是を見て、昨夜此方より恨をいひし道理にせめられ、かくみづから死したりと見えたり。不便のわざなりとなげき、つひにそれより無常を觀じ、夫婦とも剃髪し、田地を賣り、家業を捨て、四國西國へ巡禮に出たり。此春其者此邊へも來りしと、越後所々其はなしありけるまゝ書附侍る。

マチン―馬錢、東印度に生ずる馬錢科に屬する植物の種子にて有毒なる藥品也

巡禮―國々を巡りて諸所の神社佛閣を禮拜すること

時は、五十里程またゝく間に流れ下りて、大海へ出て、汐の勢少しゆるき所に至りて船をとゞむ。五十里より前方にて船を留る事は、人力にては及ばずとなり。其汐は初にもいへるごとく、常に西より東へ落るのみにて、其理解しがたき事なり。かくのごとき所ゆゑ、我も松前へ渡らんと三馬屋にしばし逗留せしかど、順風なくして得渡らずして歸りぬ。毎日順風なる事もあり、又二十日三十日も順風なき事もあり。それゆゑに、反つて此渡海にては昔より難船なしと云。南部の田名部のサイ或はヲコペの邊より、松前の箱館邊は甚近くして、天氣よければ海を隔てゝ衣類のほしてあるも見ゆると云。南部のサイ、ヲコペの邊は、三馬屋などよりも大に北東へ出たる地なり。三馬屋より北の方に藍のごとき山々遥にみゆる、是蝦夷地の山といふ。又田名部のヲコペの邊の山なりといふ。其邊實に日本の東北の限なれども、湊にあらざる故、他國の人は名をだにしらず。

○狐の義理

越後村上の近在に、百姓夫婦に娘三人持てり。天明巳年の事なりし由、家内に鼠荒て

タッピー龍飛、一に立火又達比とも書く

かば、數日逗留し、あまりにたへかねて、所持の觀音の像を海底の岩の上に置て順風を祈りしに、忽風かはり、恙なく松前の地に渡り給ひぬ。其像今に此所の寺にありて、義經の風祈の觀音といふ。又波打際に大なる岩ありて、馬屋のごとく、穴三ッ竝べり。是義經の馬を立給ひし所となり。是によりて此地を三馬屋と稱するなりとぞ。扨此所より松前へ海上十里なり。此三馬屋の西北に當りて、タッピとて突出たる山あり。是より七里なり。されども松前への渡海は、皆三馬屋より渡るなり。此渡たやすからず、海中に別に大河のごとく漲り流るゝ潮筋三筋あり。南をタッピの汐といふ。其次を中の汐と云。北を白神の汐と云。皆幅は纔なれども、其流の急にして汐先の勢五十里に及べり。晝夜とも常に西北より東南へ落て、さし引往來なく、あだかも海中に三ッの大瀧をかけたるがごとし。下の方、松前の箱館と南部のヲコベの間の海にては、其汐合して一筋と成り東へ落るゆゑ、いよく急なり。松前三馬屋の前の海底には、大なる巖あるゆゑ、其汐三ッにわかるゝといふ。松前へ渡る船は、至極の順風の强時を見合せて、帆を十分に張り、件の汐の所に至れば、むしろ抔を海中へ抛入て、其ひまに矢を射るごとく横に乘切る事なりとぞ。少しにても風たゆむ時は、此汐に押落さるゝなり。もし落さるゝ

入江を傳ひて乘しに、其間廣き所は二里に餘る所もあり、狹く入込所は纔に二三十間の所もあり、是は本州筋にあらざるゆゑなり。流甚靜にして流れざるが如し。此日殊に晴天にて、兩岸の景色うるはしく、入江々々には蓮の莖甚多し。夏月には水面一樣の花にて、見事なる事いふばかりなしとぞ。新潟の町より舟を浮め、荷華を賞し、又は納涼など、甚繁華といふ。扨船中より四方を見渡すに、西南より東北へ六七十里を見渡して山なし。西北には二十五里の所に佐渡山見ゆ。東方に奥州會津の山見ゆる。かくのごとく、四面打開きたる地にて、北海の廻船出入の大湊なれば、越後第一の繁華の地にて、青樓多くしてにぎやかに、又越後一國の米不殘此湊に出るゆゑ、諸大名藏多く建。唯北方雪國の事ゆゑ、冬に成ぬれば河水氷閉て、舟の通行絶え、陸地も雪深く、海上は十月より三四月頃までは廻船も出る事あたはざれば、夏一季住べき國といふべし。

荷華—蓮の花をいふ

○三馬屋

奥州三馬屋は松前渡海の津にて、津輕領外が濱にありて、日本東北の限なり。むかし源義經、高館をのがれ、蝦夷へ渡らんと此所迄來り給ひしに、渡るべき順風なかりし

三馬屋—東津輕郡三厩灣の西偏にあり

越後國新潟は信濃川其外の川々落合て海に入る所なり。海口近くの一二里の所は、川幅廣き事一里二里ばかり、渺々として湖のごとく、入海のごとし。岸より岸まで水甚深く、淺瀬といふものなし。千石二千石の大船といへども、いづくまでも自由に出入りす。誠に川湊にては、日本第一ともいふべし。川幅の廣きも天下無雙ともいふべし。此河を信濃川といふは、此川の水上は信州犀川筑摩川にて、其國善光寺の邊にても、既に東海道天龍川程の大河なり。それより新潟までは五六十里をへて、其間大小の川々流れ入るゆゑ、かくばかりの大河となる。されど越後は地勢平坦なるゆゑ、流甚穩にして、淀河などよりも靜なり。惣じて越後路石無く、皆ニコ土ゆゑに、川の兩岸も柔にて崩入り次第なり。されども水勢ゆるきゆゑに、大に崩る事もなし。其水は常に黃色に濁れり。余は三條と云所より新潟迄十里の所を、此信濃川の堤通り來りしゆゑ、此川の體委敷見及たり。長岡の城下より此新潟迄十六里を、四百石積程の川舟、常に一日づつに上下す。誠に運漕に便利なる事も海內又かゝる川なし。其大なる事日本第一なるに、其名高からざるは、北陸僻遠の地にありて、殊に其川平穩にて奇ならざるゆゑなるべし。余新潟の町より又小船をかりて芝田の木崎といふ所迄五里の間を、此川の入江

ニコ土―軟き土

長岡の城下―古志郡長岡町をいふ城趾は本町に屬し多く公園となれり

道元禪師—越前永平寺の開祖、建長五年八月寂年五十四

東遊記後編　卷之二

○龍燈

越中新川郡に眼目山といへる寺あり。眼目山と書てサックワ山と讀む。其わけは知らず。宗旨は禪にして、道元禪師の弟子大徹禪師の開基なり。此大徹禪師此山を開かれし時、山神龍神助力して色々の奇特ありしよし。今に至り、毎年七月十三日の夜は、眼目山の庭の松の梢に燈火のぼる。一ッは立山の絶頂より飛來り、一ッは海中より飛來り、皆松の梢にとゞまる。是を山燈龍燈といひて、此あたりの人は例年見る事なり。世に龍燈とて海中より火の出るは多けれども、此寺のごとく、山燈龍燈一度に來りて松の梢に留るは、希有の事なりといふ。越前の敦賀常宮の庭にも、龍燈の松とて、例年正月元日の夜かゝる事あるを、其あたりの人は皆見る事なり。

○新潟

し。此二ツは北地の人の恐るゝ事なり。日頃は唯等閑に閒居たりしが、今日の氣遣、思ひ出すも肝ひゆる心地す。扨此夜、宿の主に、此先にも雪ありやと問に、此先に木ノ股渥美川などいふ所殊に嶮岨にして、雪も亦深しと云。扨はいかゞせん、此所に雪消るまで逗留せんやなど色々思ひくるしみて、亭主にはかるに、亭主のいふには、是より西北に岩川といふ所あり。是へ出るに間道あり。是は海邊なれば雪至て少し、此近邊唯一里半許雪の中なり。岩川に出れば出羽の濱通の街道なり。されども三里餘のまはり道なりといふ。何三里は物かは、十里二十里にても廻るべし。命有りてこそとて、其翌朝夜をこめて、又案内者を頼み、雪いまだ凍れる間に岩川へと志し出るに、いかにも海邊近くなれば雪少し。岩川へ恙なく出て、扨初て虎口をのがれたる心地して、酒など汲で悦ぶに、きのふのつかれを覺え、足腰痛出てあゆむべくもあらず。抑此葡萄峠は羽越の界にて、山の間甚深く、雪中のみならず、四時ともに旅人の難儀する所なり。此峠昔強盗出て旅人あまた殺害し、今も往來の人恐るゝ所なり。

岩川に出れば：あゆむべくもあらず―原本之を缺く異本に依て補ふ

此峠昔強盗―此句以下異本之を缺く

強盗出て―原本強盗を出てに作る

あやふき—原本すべてあやうきに作る

人ともにばら〳〵に成り、唯走りにはしり十町餘をはしり出て、やう〳〵廣みへ出づ。川音もやゝ遠ざかり、先命をひろひし心地して、暫休らふ。此所にて漸三人一所に成り、互に恙なかりしを悦びぬ。夫より程なく尾國といふ所に著て宿をかる。扨落著て後、兩人互に顔を見るに、其色土のごとくにて、動悸もいまだ靜ならず。誠に今日のあやふき事、中々筆には書盡すべきにあらず。命を保てるは是ぞ天助ともいふべし。惣て雪國にはナダレといふ事あり、又アワといふ事ありて、年々人の損する事なり。アワといふは冬多し。ナダレは三四月の頃にあり、アワといふは、雪最中降時分に山上の木の梢より雪泡一ッ落るとき、其アワ段々ころび落るに從ひ、雪こかしをするごとく次第に大に成り、麓に至る頃は大山のごとくに成りて落下る。是に當るものは、大木も根こぎに成り、折惡敷通りかゝる時には、人馬ともによけさくるにいとまあらず、みぢんに打砕かるゝ事なり。ナダレといふは、春の末に成り、地中より陽氣出るに從ひ、數丈積たる雪の下よりゆるみ附て、山上よりナダレ落るに、其勢に動かされて、其邊の雪一同に崩れ落て、川も谷も埋む事なり。人馬の響又は人聲にてもなだれ落る事ありとなり。是にうたるゝ者卽死するのみならず、數十丈の雪に埋まれて、雪消盡す迄は知る人もな

宙―原本中に作る

力草に―力を添へ身を支へる料として

おほひ―原本おふひに作る

足を踏附て、靜に下らば何事かあらんといひつゝ、すゝまんとするに、はや其まゝすべり落て、宙を飛ごとく、夢の心ちに一町ばかりもころび落たりしに、雪に埋残れる木の梢へ落かゝりて留りたり。手足いたみ、腰などうちたれど、そのいたみをも覺えず。やうやうと其梢をぬけ出たれど、猶下の谷數百仭の切岸下るべきやうなし。されど又是まで落たる事なれば、返り登らん事は猶さらなり、いかゞせんと思ふうち、力草に持居たりし木の梢、其手少しゆるむやいな、又雪の上をすべり落るに、中程よりは首の方逆様に成り落て行く。余の梢にかゝり居たる内に、養軒は早先に落下りたれば、其上へ落重りたり。されども幸にけがなし。其所少し足留りぬれば、養軒と手を取合て上の方を仰ぎ見るに、雪山頭の上におほひかゝれば、今や其ナダレの落て、命をうしなはんかと思へば、恐ろしく息もつぎあへず、又眞逆様にすべり落るに、千仭の谷底迄唯夢のごとくに落著たり。谷底にてはいよ〳〵上の山落かゝるやうに覺ゆれば、唯ナダレの恐ろしく、何とぞ一足も早くのがれ出んと、其まゝ谷底を走り行に、谷の底は谷川流れて、歩む足の下に雪を隔てゝ岩打波の音夥敷ひゞき聞ゆ。雪を踏ぬき谷川へ落入らん事もおそろしけれど、それよりも唯上よりナダレの來らん事危ければ、前後をかへり見ず、三

儀にか及ばん。唯早天雪凍て堅き間に、案内者をやとひ越すべしと用意して、十九日まだ明はてぬより立出、案内を先に立、道をいそぐ。誠に聞しに勝りて、數丈の積雪、山は白銀をもて作れるごとく、樹木も見えず。されど案内者有れば道もたど〳〵しからず。雪も凍て落入るの恐もなくして、程なく頂に至れり。此所に矢伏明神とて神祠あり。此所は山の懐なる故にや、雪もやゝすくなく覺ゆ。神祠の後に巖穴あり、明神の住給ふ所なりといふ。此巖穴の上の方に甚高き絶壁あり。巖の高さ三十丈餘有りと云。其巖の邊に古木の杉數十本有るに、其杉の梢やう〳〵岩の半に及べり。此邊は誠に唐畫を見るごとく、奇絶比類なし。雪は一しきりづゝ降來り、寒氣誠に甚し。夫より中村、中次、荒川、小股、小鍋等の村々を通るに、降雪もやみ、空もはれ、天氣殊にのどかなるが、積れる雪は行先いよ〳〵深く、數丈に餘れり。村々にて案内をやとひ行に、晝過る比より雪又少しゆるみ、所々踏ぬけて、落入る事昨日のごとし。扨尾國といふ所の前にて大なる峠を登り、夫より下る所あり、甚嶮岨にして、下るべき所なし。案内の者も何れの筋を下らんとためらふうち、雪にすべりて遙の谷底へ落ぬ。余其跡に續きて歩みしが、此體を見て、案内の人のあゆみやうこそあしけれ、雪少しやはらかになりたれば、一足づゝ

ふけ田―深田

著き―原本付きに作る此外なほ此類多し何れも改めたり

るに、誠に老婆がいへるごとく、鹽の町の出離より雪殊に深く、山川道路唯一面の白雪にて、村離半道許に人の行通ひし跡もありて、目印もありしが、それより先は道筋もわからず、方角をも取失ひて、行べき先をわきかねつゝ迷ひ行に、折々は雪を踏ぬきて川の中へ落入り、腰許も雪の中にあり。或は切り岸などの所に行かゝり、雪崩れ落て深き所へこけ込などして、養軒と互に助け合つゝ、谷筋の平なる所を道なるべしと志て行程に、谷川、池、澤、ふけ田などの中へ落入りては、倒るゝ事数十度に及べり。されども積雪至て深ければ、川の上といへど、身體全く落入ることなし。かく千辛萬苦して、纔に二里の場を半日かゝり、日暮に至りやう〳〵葡萄の驛にたどり著たり。誠に老婆の詞に從ひ、鹽の町に一宿し、早朝の雪堅きうちに案内者をやとひて來らば、かゝる危き事には逢ふまじと後悔しながら、先恙なくて著しを悦び、湯をつかひ、爐にあたり、寒氣を防ぐに、足より血の流るゝに驚き、思へば、今日度々踏ぬき落入りし時疵附たりしが、其節は血も凍てはしらず、痛をも覺えざりしが、今湯に入り、火にあたゝめて、初て血の出けるなり。其疵の痕今に黒く残れり。扨此夜つく〴〵思ふに、今日の所だにかくのごとし。明日の道は名におふぶだう峠にて、北地第一の雪所なれば、いかなる難

浪華津淺香山―浪華津は王仁の詠めりといふ「浪華津に咲くや此の花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」、淺香山は采女の歌に「淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」といへる歌をいふ

八ツ過る―午後二時過

するとかや。是等の事にて思へば、西國と東國との文華の格別なる事甚し。九州の山中、いろは假名いまだしらざる所には、當時も浪華津淺香山の二首を手習ふ事なり。古風をうしなはざる事思ひやるべし。兎角日本は西より開けたりと見ゆ。

○葡萄嶺雪に歩す

天明丙午三月十八日、余越後國平林といふ所を立出、早朝少し雪降る。夫より二里餘にて村上の城下に至る。此所の問屋にて、是より馬を借らんと云に、是より先は雪深く馬足立難しといひて、馬を出さず。三月末の事なれば、いかに雪國なればとて馬足の立がたき程の事はあらじ。是は人馬不自由なる故、かくはいふなるべしと疑ひながら、せんかたなく歩み行に、村上より一里、猿澤の驛の邊既に雪多し。それより又一里、鹽の町といふ驛にて中食するに、其家の老婆いふには、是より先は雪甚深くしてたやすくは行がたし。今宵は此所に宿り給へといふ。養軒顔を見合せて、いまだ日中にも至らざるに、宿せよといふ、老婆の此家にとめむと思ひていふなるべし。殊に天氣も晴たり。此先の葡萄の驛迄は纔に二里の道なれば、八ツ過る頃迄には行著べしと、あざ笑ひて出た

結繩の約―上古文字の未だあらざる時代に繩を結びてしるしとせし事をいふ

○心經原文

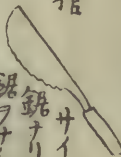
摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色卽是空空卽是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行色無眼耳鼻舌身意無識聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅密多故心無罣礙故無有恐怖遠離一切顚倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅密多是大神咒是大明咒是無常咒是無等等咒能除一切苦眞實不虛故說般若波羅密多咒卽說咒曰

羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶

般若心經

右心經の本文なり、引合せて讀べし。是等の事を用ひて、假名文字もいまだ知らざる所は、南部盛岡の城下より七八十里も北西にあたりたる田山村抔いへる極山中の邊鄙なり。誠に古の結繩の約ともいふべし。蝦夷地も唯今に文字無く木に刻を附て覺印と

心經注解

マ
眼ノ心ゝ

カ
カワゝ

般若

孕

田

キヤウ
行人如此ナレと判斷と云

レン

措

サイ
錫ナリ
錫ヲサイト云

レン

尾ゝ

九

シキ
菱居ゝ

ヤクワ
焼麩ゝ

フ
ヤカヌ麩ゝ

僧

ク
クグとト云草アリ

注解

○東之
天
歳徳之
○東之
節分之
八専
彼岸
土用
社日
地火
卯
正月小
朔日
朔日
二月大
庚申
種マキヨシ
朔日
五日
九日
十日
十五日
二十日
八十八夜

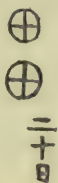
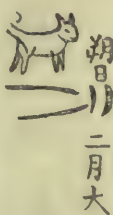
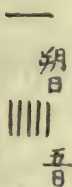
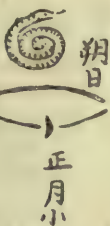
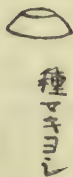
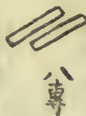
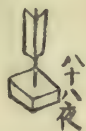
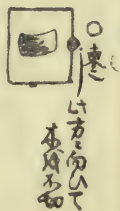
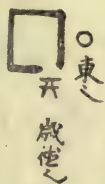
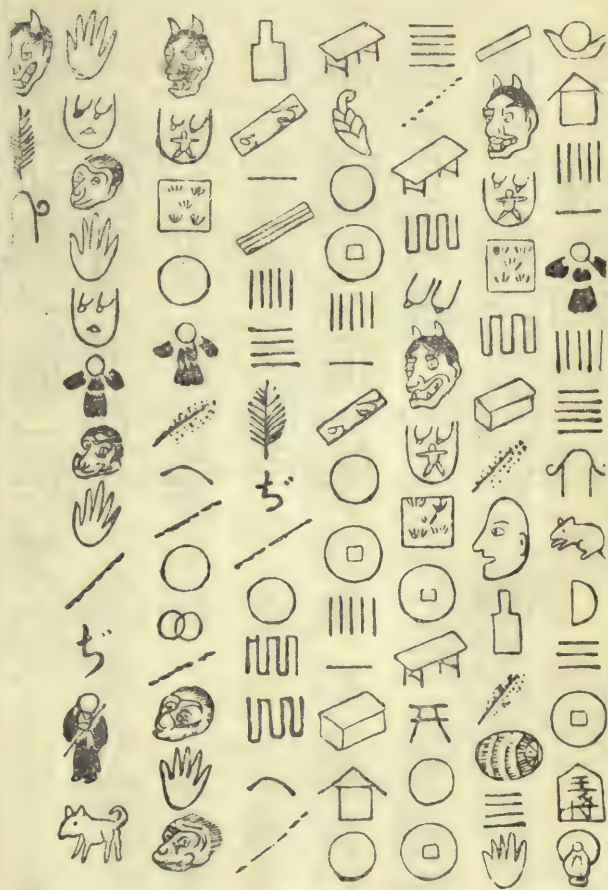
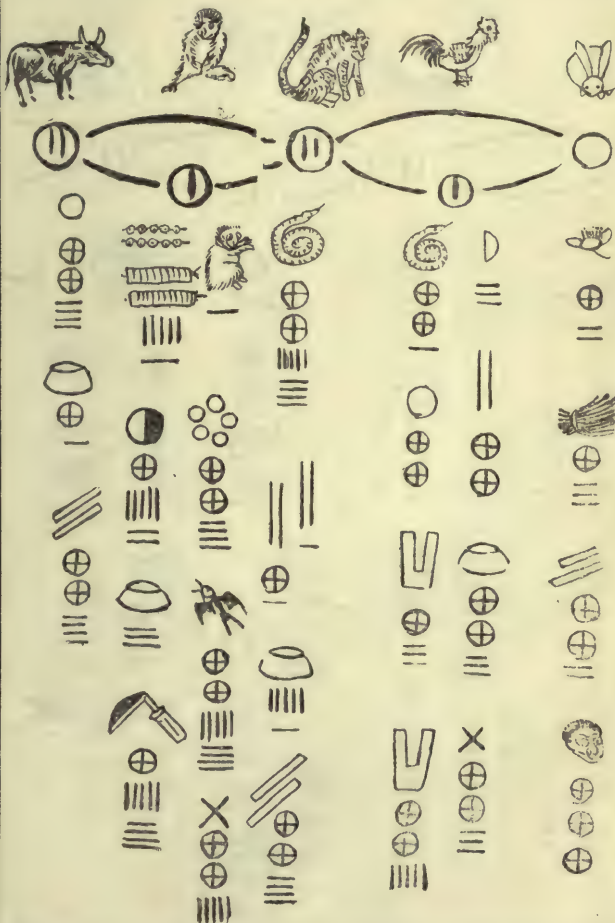
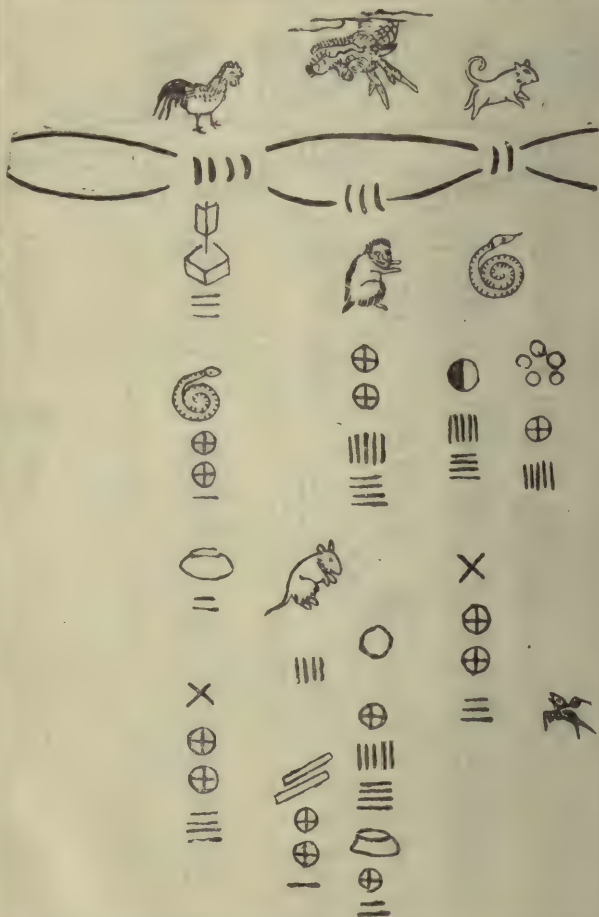
回向

右のこと也然れども彼地の方言あるゆゑ繪にては甚合點し難き事多し註解あり

ぢ
ぢ

盲心經

し。唯早く王化に服して風俗言語も改りたる所は、先祖より日本人のごとくいひなし居る事とぞ思はる。故に禮義文華のいまだ開けざるは尤の事なり。南部の邊鄙には、いろはをだに知らずして、盲暦といふものありとぞ。余が通行せし街道にはあらねども、聞しまゝをしるす。又般若心經などをも、めくら暦の法にて誦すると云。其圖左のごとし。

盲暦

扶木集―正しくは夫木抄に作る、藤原長清の撰、勅撰集に漏れたる歌を集む

清輔―藤原清輔とて平安末葉の人治承元年に歿す

えぞ世の中を―蝦夷に得ぞをかけていへる也

あれば、是に對する東の碑有べき事なり。又扶木集、清輔朝臣の歌に、「石ぶみや、つがろのをちにありときく、えぞ世の中を思ひはなれぬ。」又西行の山家集に、「みちのくは奥ゆかしくもおもほゆる、壺の石ぶみ外の濱風」などあれば、是等も東の壺碑にやと思はる。

○蠻語

天地開けしよりこのかた、今の時ほど太平なる事はあらじ。西は鬼界屋玖の島より、東は奥州の外が濱まで、號令の行屆ざる所もなし。往古は、屋玖の島は屋玖國とて異國のやうに聞え、奥州も半蝦夷人の領地なりしにや。猶近き頃まで夷人の住所なりしと見えて、南部津輕邊の地名には、蠻名多し。外が濱通の村の名にも、タツピ、ホロヅキ、内マツペ、外マツへ、イマベツ、ウテツなどいふ所有り。又田名部の地方にも、ヲコペ、ヲヽマ、シリヤなど、其外村々在々の名多くは此類なり。是皆蝦夷詞なり。今にても、ウテツなどの邊は風俗もやゝ蝦夷に類して、津輕の人も、彼等はエゾ種といひて、いやしむるなり。余思ふに、ウテツ邊に限らず、南部津輕邊の村民も大かたはエゾ種なるべ

十二月殁年七十八

爾雅―辭書の一種にて周公の作と稱せらるれど詳かならず

沙汰―うはさ、評判

掘出せりと云。頼朝の時分にも見ることかたきものを、今千年の後に至り、文字も明白に、其石少しも損ぜずして、人々是を見る事誠に不思議の事なり。碑の體、自然石にて、文字を彫たる方計平にみがきたり。高サ五六尺、厚サ貳三尺、臺石なし。外に小堂ありて是を覆ひ、四方を格子にして、人のみる樣に構へたり。石少し赤み帶て、火を經たるものゝやうにも思はる。此碑の事は、世上の人普く知る所なればくはしくはしるさず。又或人のいひしは、壺はつぼと讀字にはあらず、音悃にて、街中の碑を壺碑と云と、爾雅の注にも出たりと云。いかゞあらん。又東の壺碑といふものあり。是は此多賀城よりは七八十里許東北の方、南部の野邊地の近在に壺村といふ所あり、其村に壺山といふ山有りて、此山に石碑あり。村民其碑を尊敬し、社を建て、是を祭り、氏神として往古よりみだりに開く事なし。碑面文字あり。上の方に大字に東といふ字を彫附たりと云、其文はいかなることならん。士民尊敬して、石摺などにする事をゆるさず。故に知る人なし。近年好事の士、此碑を摺り傳へんことを求れども、極遠方の事故、遊ぶ人も稀にて、いまだ世に弘まらず。余も彼地を往來せしかども、其比其邊盜賊の沙汰頻りなりしかば、取急ぎて打過し故、其村へもいたらず。今に殘念なり。多賀城の碑に西と云大字

天平寶字六年—淳仁天皇の御宇、紀元千四百二十二年
廣澤—細井廣澤とて有名の書家也
享保二十年

○壺の石ぶみ

名におふ壺の石ぶみは、奥州仙臺の東北多賀城の古跡にあり。卽仙臺より松島に至るの道筋にして、街道より纔に二町四十間入り込所なり。南都の墨屋松井某、享保中に道じるしの石を立て、甚明白なり。往昔蝦夷王化に服せず、奥州も大半は其種類の有にして、猶其上にも折々襲ひ來りし比、京都より將軍を遣されて是を鎭めらる。これを鎭守將軍といひ、其居所を鎭守府といふ。此多賀城四達の地にして、其府なり。天平寶字六年大野東人といへる人多賀城を修理し、此石碑を建、四方の路程を記し、見雲眞人にこれを書しむ。今に至りては千年に餘る古物なり。殊に其字體甚古雅にして、廣澤が換鵝百談にも稱美し置けり。多賀城修理後數百年過て、秀衡鎭守將軍たりし頃は平泉に居住して、此城は廢し、壺碑も失て、鎌倉殿の和歌よみ給ひし頃は名のみ殘れる趣なり。近世伊達政宗より三代目吉村中將の時、此邊方々と尋求られしに、今の碑を土中より

といふことなし。然るに或人ためし見て、彼上人こそ夜ふけてひそかに米數升を水にて飲むと沙汰しけるに、人有て厠をうかゞひ見しに、米糞山のごとく堆くありければ、扨こそとて、其後は信仰も失せぬ。上人も堪へがたくて、夜にまぎれて何方ともなく迯れ去れり。猶其跡にても、婦女子の類は、米糞上人とて稱し尊びけるとぞ。近き頃の奇特不思議も、多くは此米糞上人の類のみなり。

利疾—赤痢痢病ともいふ

優婆塞—有髮のまゝ佛道に歸依したるもの

も、此病の中に、何ぞ外の病の傷寒時疫利疾等のごとき死生にもかゝはる程の大病を煩ひて、其愈かゝりの時には必よく食するものなり。病後一年も過て、氣力常のごとくに復すれば、又漸々に不食に成るものなり。此病はじめは米穀を忌嫌ひ、かき餅、或は豆腐、或は蕎麥等のごときものばかりを少しヅヽ食し、或は酒などばかりを呑居て、漸々に何も食せざるやうに成るものなり。怪しむに足らず。又一生涯食はよくしながら、糞せざる人もあり。其外奇病怪症天下の內には種々の事ありて、余も見及び、聞及べり。是は我本業の事にて、第一に心を用ひしことなれば、別に病の事にかゝりし事ばかりの珍奇のことのみを書集て、醫話と名附て數卷となせり。此一事は塘雨物語りて、其書集し書にも載たれば、こゝにはしるせしなり。然れども、かゝる奇怪のことには、多くは姦民の人を迷はして金銀をむさぼることあり、十に八九は信じがたき事なり。むかしもいつの御宇にかや、一人の優婆塞斷食して佛道を修行し、奇異の靈驗ありと、備前國より奏聞す。帝奇特に思召れ、則召上せて神泉苑に住せしむ。洛中洛外の男女貴賤群集して、信仰參詣す。數日の後は諸國よりも追々に馳登りて參詣するに、其所願成就せずといふことなし。効驗天下に聞えて、上王公より下庶民に至るまで、尊信せず

少食―原本小食少食一定せず

香川氏―京都の名醫香川修庵をいふか

十年來の斷食虛事にはあらず。此尼十四五才の比より少食なりしが、十六七許にて同村に嫁しけれども、病身なりとて不縁し、歸りて其後は尼になりて此庵に住り。段々少食に成り、後には一月に二三度ほど少し食すればよしといひ、其後は段々に不食して、數月の間に少し食することになりて、近き頃は絶えて食せざるやうに成れり。唯折々少しづゝ湯を呑計なり。かくのごとく斷食なれども、身體格別につかるゝ事もなく、近き年も信州善光寺に參詣せし數十日の旅行に、一飯も食せずして、歩行も相應にして、無難に歸庵せり。其心より強てつとめて斷食の行をするにもあらざれども、自然にかくのごとくなれば、人皆不思議に思ひて信仰し參詣することとなり。怪敷事を行て人民を迷す人なりやとて、官よりも疑かゝりて吟味の事もありしかど、唯病氣ゆゑのことなれば餘儀なしとて、そのまゝにあるなり。塘雨あやしみて余に語れり。この病昔の醫書には見えざる事なれども、近き年は世間に多き病なり。香川子も此病を論じて、彼家にては新に不食病と名附たり。余も數人を療せしかど、しかと手際よく愈たることなし。婦人に多くあり。男子にも一兩人を見たり。婦人は人に嫁して、出産にてもする事あれば、其一兩年は常のごとく食して、數年の後はまた不食す。男子にても、婦人にて

巨海村―幡豆郡西崎村の内に在り
西尾―幡豆郡今の西尾町

いと難有事なりきと語れり。いつも其時刻は巳刻頃に限れり。信心深き人は拜み、信心無き人は拜む事なしと云。是は天氣の晴曇にもよるべきにや、頗る似よりたる事なり。

○不食病

三河國巨海村天祥山長壽寺といふは、其昔は魏々然たる大伽藍なり。鎌倉の右大將頼朝の息女足利義氏に嫁して、義氏の室となり給ふ。此ゆゑに義氏三州に封ぜられて西尾に居住し、吉良氏の始祖となる。此室沒後堂宇を建立し、寺領をも寄附せられし、則此長壽寺なり。然るに吉良氏衰敗に及びて、寺も段々零落し、今はやう／＼名のみ残りて、一宇の小庵に地藏尊ばかりを安置し、一人の尼僧ありて香花を供ずるばかりなり。此庵に住する尼、二十年來斷食の行をなして、奇妙の人なりと、其あたり評判して、參詣信仰の人群集す。余が友塘雨其邊漫遊の折なりしかば、わざ／＼と其地に至り、參詣して其容體を見る。顔色は少し青ざめたれど、惣身の肉は中人よりは少し肥たるかたにて、言語は少しどもるやうなり。塘雨怪しみ、其あたりに旅宿して、其やうすを聞くに、二

影向—神佛の其姿を現ずること

人家やある、船やあると馳來れば、海底の岩に船碎けて破船に及ぶ。翌朝浦々より船を出し、彼破船せる荷物道具を取り掠む。さればこそ、今に至りても、此邊の古き家は、天井板敷なども多くは船の古板もて作りたり。かゝる惡風俗のならはしも、佛法の惠によりて柔和の心に變じけるは、誠に太平の德化、山の奧海のはてまでも及びて、よき敎の行わたりたるゆゑにこそ。此事余の朋友塘雨といへる人、余に少し先達ちて、俳諧の修行、山水の遊觀の爲に、天下を漫遊せし日、まのあたり見及びて歸りての後、笈埃隨筆てふ書をつくり、諸國の奇事をしるし、余にも示し、且又くはしく物語れりしが、其人近き頃かくれければ、其書も散り失ぬべく、其物語も聞知る人もあるまじくなりゆかん事もをしくて、今此書の中に其一二事を書くはふるものなり。因に云、余過し年、大坂籠屋町の人檜皮屋佐兵衛といふ者に聞り。其人弘法大師の舊跡を尋て四國遍路せし時に、阿波國より土佐國に越るあたりに、影向の瀧といふ瀧あり。朝巳刻ばかりを影向の時刻として、其頃其瀧に參詣する事なり。其地深山の谷合なるが、朝四ツ時の比朝日東方より出て瀧の水に輝き映ずれば、瀧の眞中に光明赫やくとして金色の不動尊現じ給ふ。暫時にして又もとの瀧ばかりとなる。かの佐兵衛も參詣して親しく拜み奉れり。

豆州手石三尊窟の圖

参らう｜原本参らふに作る、其他音便のうとあるべきをふとしたる所多し

ば、佛のいます岩あらはるゝゆゑ、佛體見えて穴の內明らかになるなり。それゆゑ、三月節句頃大潮干の頃は、佛を高く拜み、岩根高くあらはれ、佛體に浪打かゝり夥事なければ、佛體常にあらはれて、穴の內明らかなりとぞ。其頃に入る者、佛のいます岩根に、舟より上りて巖壁を探り見れども、手にさはる佛體もなく、又それと見るべき形もなし。其岩根を少し退けば、佛體明らかに拜まれさせ給ふとぞ。いつの頃よりかゝる奇異の靈跡ありと問ふに、昔は此穴の中恐ろしとて入る者なかりしが、七八十年以前、蜑なる者ふと鮑さゞいなどを探りて入りしに、人探らぬ穴の事なれば、夥敷得物ありしより、段段奥深く入りて、つひに此佛體を見出せしなり。此邊昔は甚の惡風俗にて、人の心おそろしかりしが、此靈異を拜みしより、佛法を有りがたき事と知り、自然に人の心柔和になり、今にては淳淳の風俗となれりとぞ。昔の物語を聞くに、正月年禮に來る者、先づ唱へて、イナサ參らうと云。あるじ答へて、寄せて御座れ、古釘で祝ひませうと。是を年始の祝言とす。是をいかなるわけと問ふに、イナサとは此海上の惡風なり。此風吹時は、此邊の者ども手ん手に松明を持ち、或は脊に戸を負ひ、火を燃して濱邊を往來す。沖に行かふ船難風に苦みて、入るべき湊やあるとうろたへ居る時、此火の光を見て、

しもにくらかりし穴の内忽白晝のごとく明らかに成り、打上る浪、玉ちる水までも、皆金色となる。船中一同に驚き、あつといふ程に、又忽眞の闇となりて見る物なし。人々是はと忙然たる所に、又しばらくして金色の光發する事前のごとし。此時心を留めて見るに、向うなる屛風を立たる如き石面に、三尊の彌陀あり〳〵と現じ給ふ。中尊の御長は壹尺五六寸ばかり、上は後光の形にして、下は雲に乘給ふ像なり。前に並び給ふ觀世音と拜み奉る御像は一尺一二寸許、又少し前にはなれて勢至菩薩と見え給ふは七八寸に過ず。世に云來迎引接の尊體現然と慥にをがまれさせ給ふ。誠に目出度ありがたきこと心肝に銘ず。其不思議さ筆頭舌端の及ぶ所にあらず。船頭やがて舟を出すに、塘雨は猶今一度拜まんと、うしろに向ひて居たりしが、暫の内に又初の如くなりしに、其見る所少しも違はざりし。扨穴より外に出て見るに、天日いまだ正午にあり。出て後、同行の者に問ふ。皆拜みたる體相は同じけれども、或は佛の御長を四五尺と見たるもあり、或は二尺三尺ばかりなりと、色々に云。又光明の赫々たるにあまりに恐れ驚きたる者は、佛體をしかと見定ざりしもありしなり。扨其隱れつ顯れつするはいかなるゆゑぞといふに、佛のいます岩に浪打かゝりて佛を覆へば隱れ、浪遠く引退きて岩根まで出れ

朔望―ついたち十五日

高き時は舟を入れがたし。故に此巖窟に遊ぶ者、潮引つめて巖窟のあらはれ出たる時を考ふることなり。余が友塘雨霜月の初に此地に遊びしに、折ふし風強く浪荒かりしかば、天氣を見合せ、潮を考て、十五日まで逗留し、十五日にぞかの窟中に遊びし。是は常の小潮にては又入りがたければ、朔望の大潮を待居けるなり。其日は殊に空はれ、風をさまりて、海上波なく疊の上の如くなりしかば、其比彼地に有り合せし諸國の旅客六人、船頭二人を合せて、都合八人、晝前より纔の小き獵船に棹して、海上十町許をへて彼巖窟に臨む。舟人やがて舟を取直し、艫の方より逆しまに窟中にさし入る。是は穴の内狹ければ、舟のふり廻しならざるゆゑ、出すべき時に順になるべき爲なり。扨六七間も入る程は、穴の口にあかりさすゆゑ、物の色目さやかに見ゆ。それより右の方に折り廻れば、日の光も屆かず、闇夜のごとし。穴の口狹けれども南海を受たれば、浪殊に高く、穴の内の岩石に當り碎て、水玉飛散り、雨の降ごとく身にそゝぐ。舟二たけ三たけばかり入るよと思ふ比には、向うの方岩高くして、舟をゆり上ゆり下す。くらさはくらし、浪の音は穴の内にひゞきておびたゞしく、その恐ろしさはいはんかたなし。同行の者ども各念佛するばかりなり。然るに、忽然として向うの巖壁きらめくよと見る程に、さ

有名なる佛師也

辰巳—東南

奥州に送ると云。佛像に玉眼を入るゝ事此時より始れりとなり。是等の事にても、當時平泉の盛なりし事おもひやるべし。秀衡抔の頼朝をだにあなどり居たりしもむべなり。是に附ておもふに、今の世程太平の久敷事もあらず。それに依ては、金銀も世の中にたくさんに成りぬと見ゆ。平泉の盛なるにてさへ、右の贈物に金は纔百兩と見えたり、外の物の多きにはつり合はず。又俊乘坊南都大佛殿建立の時も、鎌倉よりの寄附纔に金五十兩と聞及べり。今にては、常の町人の分限にても千金萬金の寄附するものすくなからず。されば今の世程金銀も澤山にて、よろづゆたかにおごれる時は、昔より無きことといふべし。

○三尊窟

伊豆國は駿河相摸の二國にはさまり、箱根より南海中へ二十五里出張りたる國なり。故にいづるの詞を以て國號とすると云。志摩國鳥羽の湊より此國の下田の湊まで七十五里の海を遠州灘と稱して、日本第一の大洋とす。此下田より西の方に手石浦といふ所あり。爰に奇異の巖窟あり。山の辰巳に向うて差出たる出崎にありて、岩屋の口狭ければ、潮

天台大師—傳教大師
顔魯公—顔眞卿
將來の物—携へ來りし物
金岡—巨勢金岡とて醍醐天皇頃の有名なる繪師
牧溪—南宋の僧にて繪を巧にせし人
運慶—後鳥羽天皇より順德天皇の頃の人にて

り。是は余見ることを得ず、殊に殘念なりき。又天台大師の影像一幅、地は竹布といふものにて、畫は唐人にて、其名知れず、讃は顔魯公の筆といふ。是も當寺第一の寶物として、見ることを許さず。慈覺大師唐土より將來の物なりと云。其外金岡の畫の十三佛、牧溪の觀音等、種々寶物多し。基衡も又最佛法に歸依し、毛越寺、圓隆寺、嘉祥寺等を造立す。佛工運慶をして、丈六の藥師如來、及び十二神將、其他佛像若干を造らしめんとして、まづ運慶方へ使者を遣し贈物す。其品、

一金百兩　　一鷲羽　百尾
一七間間中徑の水豹皮　六十枚
一安達絹　千匹　　一希婦細布二千端
一糠部駿馬　五十疋　　一白布　三千端
一信夫文字摺　千端

猶此外に奥羽の産物珍奇を盡して取揃へ、運慶に贈る。運慶是を得て大に悦び、又奥州の練絹を稱美す。使者歸りて此由をいひしかば、基衡又練絹を三艘の船に積て、別に運慶に贈る。運慶悦び、みづから件の佛像をつくり、玉眼を入て、三年の間に功を終り、

聞ゆる—原本聞ふるに作る

宋板—支那の宋時代の板行

音、勢至等の佛像を安置し、壇中には三人の棺を納む。中は淸衡、左は基衡、右は秀衡なり。秀衡の棺の側に、和泉三郎忠衡の首桶を納めて、今に祭に配す。淸衡は大治元年丙午七月十七日逝去、其子基衡保元二年丁丑三月十九日逝去、其子秀衡文治三年丙未十二月廿八日逝去すと云。此堂に納る所の什寶數々多き中に、淸衡の納めしとて、紺紙に金泥銀泥にて楷書行書まぜ書の一切經あり。是は淸衡存生の時、自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切經書寫の事を司らしむ。三千日が間能書の僧數百人を招請して供養し、是に書寫せしめしとなり。余も此經を拜見せしに、其書體楷法正しく、行法亦精妙にして、漢土の諸名家を集めて書せしむるとも、中々是に勝るべからずと思ふ。彼時分日本にもかばかりの能書多きに、今の世に誰一人聞ゆる無きは、誠に歎息するにも餘有り。其後四海戰爭の事に、穩なるいとまなく、文華地に墜たる故なるべし。其人の不幸ともいふべし。數多き一切經の事なれば、なるべき事ならば、一二卷ヅヽも世間に出したき事にこそ。經の箱は、黑漆に螺鈿にて經の題號をしるしたり。其箱も亦古雅甚し。此外にも、基衡納めし紺紙金泥の楷書の一切經あり。是は世間普通の經のごとし。又秀衡の納めしは、宋板の折本の一切經なり。此外に玉軸の法華經壹部、小野道風の筆跡な

大夫—原本太夫に作る

回祿して—燒失して

莊嚴せり—裝飾せり

ちりばめて、全盛を盡せり。此事堀河院鳥羽院等の叡聽に達し、遂に大治三年丙午按察使中納言顯隆卿を勅使として此國に下し給ひ、御願文の草稿は右京大夫敦光朝臣、清書は冷泉中納言朝隆卿にて、今に此寺の什物とす。猶此外に、右大將賴朝の御教書、又北條相摸守貞時、北畠中納言顯家、淺野彈正少弼長政、豐臣關白秀次公等の文書數々有りとなり。みだりに見る事を許さず。扨右の堂塔伽藍建武四年回祿して、纔に經藏一ケ所、金色堂一字を殘せり。是も星霜久敷移り、段々破壞に及びしを、百八十餘年の後に至り、正應元年鎌倉將軍惟康親王歎き思召、北條貞時に命じ、此二ツの堂に、又別に新に覆ひ堂を造り風雨を避け、修營を加へしめ給ふ。其後今に至り、時の國主より代々覆ひ堂を修理して風雨を防ぐ。此ゆゑに、今日に至り、淸衡建立の金色堂、竝に經藏嚴然と殘りて、むかしの俤有り、就中金色堂は殊の外美麗にして、日光山の外世間此に比すべきもの稀なり。こと〴〵く布ぎせにして、厚く漆ぬり、其上に金箔を押て、堂中一樣の金色なり。長押の地紋には、螺鈿珠玉をちりばめ、中壇四隅の柱は七寶を以て莊嚴せり。既に五六百年を經てあれば、螺鈿も貝落ち、珠玉も缺損じ、金箔も斑なれど、元來結構丁寧なれば、今に猶あたりをかゞやかす許なり。中壇の上には阿彌陀、觀

芭蕉の發句—夏草やつはものどもが夢の跡

金賣吉次—註、一五〇頁に出づ

慈覺大師—傳敎大師の弟子にて比叡山第二世の座主

の發句のごとし。此あたりは龜井六郎が塚、鈴木の三郎が塚等あり。皆古松一本づゝありて明白なり。辨慶が古跡もあり。又中尊寺の鎭守白山宮のうしろより少し西へ行けば、物見の亭の古跡あり。此所より見おろしよろし。向うに見ゆる山を陣場張山と云、二ッの地名となれり。是は頼義義家、貞任宗任追伐の時、陣を張れる所と云。又それより手前に見ゆる野を長者が原と云。金賣吉次信高が屋敷の跡とて、今に郭石少し殘れり。又東北の方に高く見ゆるはたばしね山なり。西行の「聞もせずたばしね山の櫻花、吉野の外にかゝるべしとは」とよめる山なり。櫻多かりしが、今にては歌のごとくはあらず。余が京を出る時、佐々木長春、陸奥にはたばしね山とて、櫻多き山有りといへり。花の頃ならば、必尋ねて見るべしとて、和歌などおくられぬれば、奥州の地に入りてより、日日尋求めて、やう〳〵此所にて尋得ぬれど、花無くて本意なし。されど一しほに昔思はれて、例の腰折などつゞる。それより中尊寺に詣でて、諸堂順拜す。此中尊寺は弘台壽院とも云ひて、東叡山の末寺、開基は慈覺大師にして、其後年歷て鎭守府將軍藤原淸衡中興なり。淸衡は秀衡の祖父にして、此時既に奥羽二州の太守、勢殊に盛なりしかば、此中尊寺を中興して、堂塔四十餘宇、禪房三百餘宇を建立すとなり。其結構金銀珠玉を

東遊記　巻之五　末

○平泉

當今の城郭—當代の太守の城

奥州平泉は、むかし奥羽二州の太守鎭守府將軍秀衡父祖三代居住の古城跡なり。仙臺の城下より行程二十四里餘北の方にして、前に北上川衣川を受け、うしろは高山幾重ともなく重り、實に要害の地なり。秀衡清衡抔建立せる中尊寺今に存在して、昔の俤まのあたりに見えてあはれなり。此山を關山といふ。麓の街道に昔關所ありて、衣が關と名附く。此故に、此山を關山といひて、中尊寺の山號とせり。此近邊の里を、今にても上衣下衣といひて、民家あり。衣といふ里に流るゝ川ゆゑに衣川とも名附け、衣の里の關所ゆゑ衣の關ともいふなるべし。安部貞任が籠りし衣川の城は、此中尊寺よりは一二里ばかりも山に入りてあり。又義經の住給ひし高館は、直に此關山の下にて、纔に街道一筋をへだて、中尊寺より五町に近し。高館の跡は甚狹く纔の所にて、中々當今の城郭抔の如き跡とは見えず、唯暫時義經の住し屋敷の跡といふべし。今は草木生茂りて、芭蕉

上方―原本上み方に作る

東奥紀行―長久保玄珠の著にて一卷あり

上に題目あらはるゝとなり。

一、逆樣竹は、むかし親鸞上人、此國へ配流の時、携へ來り給ひし杖を、さかさまに地にさし、我說所の法世に弘らば此杖の竹再び榮ゆべしといひ置給ひしに、其杖さかさまながらに枝葉しげり、其後其根に生ずる所の竹、皆逆樣なりしとなり。今は其古跡のみ、鳥屋野といふ所に殘れり。

一、八ッ房の梅は、文田といふ所にあり。一ッの臺に花實八ッ咲みのる。不思議のものとてもてはやせしに、近き頃は座論梅とて上方にも多くなりぬ、是等をあはせて、七不思議とはいふなり。猶此外に、三度栗とて一年に三度實のる栗あり、又繫ぎ榧とて、親鸞上人絲につなぎ持給ひし榧の實を植られしに、今に至りかやの實に絲の透りたる穴ありといふ。又七ッ坊主八ッ瀧とて、八ッ時分に見れば瀧の如く見え、七ッ時分には坊主の形に見ゆる山ありなど云。其山を問へばさだかに知れず。大抵方俗のいひ傳へにして、委敷は辨じがたし。

一、弘智法印の遺骸甚奇物なり。諸方へ持出て開帳をもなし、又東奥紀行にもくはしく其事を載て、既に印板に行るれば、今こゝに略す。

おのれと—自然と、ひとりでに

寺泊—越後國三嶋郡に在り、今の寺泊町

て、冬に用ふとぞ。

一、鎌鼬といふことあり。是は越後の國中に、いづれの所にも、打節有事也。老少男女の差別なく、面部又手足抔を太刀にて切りたる如く、おのれと切るゝ事なり。疵の大小定らず、或は竪、或は横にて、見事にきるゝなり。されど骨の切るゝことなし。又格別血の出るといふにもあらず、唯寒熱強く發し、時疫傷寒のごとく、其時、其地の傳來にて、古き暦を黒燒にし、さゆにて用るに、數日の間に平愈し、疵の後も見えずなほるといふ。此鎌鼬に出合ふ事、或は何方の堤、又はかしこの辻など、其所大抵は定りてあり。然れども、何のわざといふことも知れず。此事越後にも限らず、奥州出羽佐渡などにもありといへば、北地陰寒の瘴毒人にあたるにやといふ。又或人の說には、鎌鼬にはあらず、かまへ太刀なり。此氣のするどなる事、太刀を構へて切るごとなるゆゑにいふと、是は僻說なりとぞ思はる。唯深き理屈もなく、むかしより云ひならはしたる名にてあるべし。廣大和本草などには、此漢名を考へ出せり。さる事にや。

一、波の題目といふは、寺泊の海中にあり。むかし日蓮上人佐渡へ配流の時、海上に書給ひし妙法蓮華經の文字今に殘りて、法華信心の人、船に乗りて其所に至れば、波の

ありといふ。余は入口の所四ッ五ッを見る。池の大さ四疊敷許、或は五六疊七八疊敷許にて、あまり大なるは無し。其池の水中に油わき出て、水と油は別々にきは立て見ゆ。水中にある時見れば、其色飴色なり。日に映じては五色にきらめけり。其上に小屋をかけ、雨の入らざるやうにして、此あたりの里人各此池を領して、毎日油を汲取り、猶少し水の交りたるを、カグマといふ草を以てしぼり取る時、油と水とたやすくわかるゝとなり。よく湧池は、毎日油二斗ばかりヅヽを得るといふ。此油灯火に用ふるに、松脂の氣ありて甚臭し。故に臭水と名く。灯火の光は甚明らかなれど、油のへること速にして、しかも少し臭氣あれば、價は常の油の半なりとぞ。然れども、此所より毎日數十斛の油出るゆゑ、此國にては多く此油を用ふ。誠に地中より寶のわき出るといふべし。されば、此邊の人は、他國にて田地山林などを持て家督とするごとく、此池一ッもてる人は、毎日五貫拾貫の錢を得て、殊に人手もあまた入らず、實に永久のよき家督なり。此ゆゑに池の賣買甚貴し。今年も油よく湧池一ッ拂物に出たりといひしまゝ、いかほどの價にやと尋しに、金五百兩なりしといふ。扨其カグマといふ草はいかなる草ぞと問ふに、京都にてシダ裏白草などいふものの類と聞ゆ。其草を夏の間に多く苅、貯置

五貫拾貫―一貫は今の拾錢也

印矩ー印を捺すに用ふる定規、木にて作れる小き曲尺の如きもの

たゆるー原本たえると訓ず

芝田ー新發田と同じ越後國北蒲原郡に在り

陰火なるべしやと疑ひて、懐中に有りし印矩を取出し、件の火に近けしに、常の火のごとく印矩少しやけこげたり。歸京の日のもの語の種に、やけ殘りし印矩持歸れり。其昔はいつのころより出そめしと尋るに、正保二年酉三月此家にてふいごを吹しことあり。其時ふと地中より出しこのかた、今天明六年丙午の年に至り、百四十二年の間一日も絶ることなく出るなり。初て出し時に、挽臼をふせしかば、是を取らば、もしや絶ることも有べきやと氣使ひて、此家普請などある時といへども、此挽臼を動かすことなしといへり。誠に數代の間、此家のみ油火を川ふることなく、又少しの物をば煮、或は燒にも事足りて、大なる寶といふべし。又此如法寺村より十里あまり東北に、カラメキ村といふ有り。此所にも出ると云ふ。余は如法寺村にて委敷見たりし故、其カラメキ村へは行かず。かゝる事唐土にてもありて、あの方にては火井と名附るといへり。日本の地にては、他國には無き事なり。

一、臭水の油は、芝田の城下より六里ばかり東北に黑川といふ村あり、其黑川の東南五六町ばかりに蓼村といふあり、其所に鯛名川といふ小川あり、其川端に少しの岡有りて、杉林なり、其所に小き池有りて、其池に油湧くことなり。其油のわく池、此地に五十餘

りて、唯海は廣く深き所を選りて乘るやうになりたり。理はよく知れたることなれども、實境に逢ざれば心得違ふ事も多きものなり。

選り—原本撰りに作る

○七不思議

越後國彌彦の驛より南に入る事五里にて、三條といふ所あり、甚繁華の地なり。此三條の南壹里に、如法寺村といふ所あり。此村に自然と地中より火もえ出る家二軒あり。百姓庄右衛門といふ者の家に出る火もつとも大なり。三尺四方程の圍爐裏の西の角に、ふるき挽臼を居ゑたり。其挽臼の穴に、箒の柄程の竹を壹尺餘に切りてさし込有り。其竹の口へ常の火をともして觸るれば、忽竹の中より火出て、右の竹の先にともる。又強く吹消せば、卽きゆるなり。其火常の燈火のごとし。長さ壹尺ばかり、ふとさは竹の筒程にて、たとへば二三百目の蠟燭をともせる如く、光明甚強し。此火有るゆゑに、庄右衛門家にはむかしより油火は不用、家内隅々までも晝のごとし。挽臼に差込置たる竹を續げば、其火何方迄も行きてともるなり。されど水の如く前後左右へわかれては不出、唯一方のみなり。外へ氣の洩れざるやうに竹を續ぎて導けば、遠くまでも及ぶな

彌彦—西蒲原郡に在り今彌彦村といふ

此邊の海にては、海苔、和布、鹿角菜の類を多く生じ、海邊の民是を取りて產業とす。又海鼠を生ず。此海に生ずる海鼠は、金砂を服したりとて金海鼠と稱して、乾し堅めたるを萬邦に傳へて、人皆珍重す。京などにても、眞の金海鼠は甚得がたく、得れば甚珍重す。誠に其形他邦の產よりは小く、味格別なり。此島は誠に日本の正東に當りて、海中に突出たる所なれば、日本の東の極といふべし。南部津輕の地方は奧州の奧なれども、仙臺より眞北に向うて入るゆゑに、數百里入れども東には出でず、北に入るなり。此邊は仙臺より程近けれども、海を離れて東に出たる地にして、誠に是より東は限無き大海にて、三千里五千里には國ある事なき所なり。波の大なるも尤の事なり。すべて海中の難所といふは、打開きたる大海にはあらず、唯山と山との幅狹くなりたる所を迫門といひて、潮勢も急に成り、波浪も逆立て渡りがたきなり。幅狹き所、底淺き所のみ恐ろしく、余なども初は海を渡らば、隨分里數短く、幅狹き所の、しかも底淺き所をこそ選むべしと思ひしが、赤間關の渡を越えて、其潮勢の猛なるをおそれしより、松前の渡り場の急潮を考へ合せ、諸國の迫門を乘りて、底淺ければ浪逆立、幅狹ければ潮急なるを知る事なり。是も草鞋に附たる砂金を陸地へ渡すまじき權現の思召ゆゑとぞ。

選む—原本撰むに作る

十町許の間の中程に至れば、山の如き大浪來る。晴天無風の時といへども、必此大浪は寄ることなり。此浪を彼地の方言に、御殿隱といふ。天氣靜なる日は、此大波を一ツ越えてすむことあり。又少し風波ある日は、大波を四ツも五ツも越ゆることなり。此所の船は常々此浪をこゆる事を覺え居るゆゑ、浪來れば其浪に上り、浪引時は其浪につれて、自由に船を操る。然れども、他邦の人は、いかなる丈夫なる心の者にても、此危さに堪かぬるなり。島には寺院一宇ありて、辨財天鎭座の山なり。絕頂まで四十八町といふ。島めぐり、六町一里の詞にて、三十四里といふ。峯上に權現の社あり。箱崎とて天女出現の靈窟もあり。峯を向うへ越ゆる所に水晶石といふ有り、高さ數十丈、廻も數十丈にして、全體六角の白石なり。明徹にすきとほるといふにてもなし。然れども奇品なり。其石上に一本の松自然に生じて、海風に多年もまれたれば、木立、枝ぶり、人作にて造りなせるが如く、景色たぐひなし。此金花山は山中皆黃金なりといひ傳ふ。げに今にても、海砂皆金色に光り、波に映じていと見事なり。山中も岩石に金砂吹出て、道路の間も皆金色に見ゆ。權現の黃金を深くをしませ給ふといひて、旅人取去る事を堅く禁ず。又歸路に船に乘らんとする時は、其山中にてはきたりし草鞋を脫捨て、船に乘

金華山の圖

東洋圖

が、大波浪に足のみ打切られて、大風雨に日本の海まで流れ來りしなるべし。北方には小人國ありて、身の長ヶ三尺許といふ。さすれば南方に大人國無しともいふべからず。唯格別に大にして、人情も世界とは相違せるゆゑ、いまだ其國の通路ひらけず、其仔細明らかに知れざるなるべし。近き年は、段々に、阿蘭陀萬國を乘り廻りて、諸蠻夷の國國に通路ひらけたれば、つひには大人國も知らるべきにや。

仔細―原本子細に作る

○金華山

奥州金花山は、日本に黄金の出初し山にて、其むかしこがね花咲とよみし所なり。其地又日本東方の限にありて、景色無双の地、實に仙境ともいふべし。仙臺より東の方に、東海廻船の入る大湊あり、石の巻といふ。頗る繁華の地なり。其石の巻の渡波といふ所より、磯を傳ひ、山に登り、大なる峠を越え、行程十餘里にして、山鳥といふ所に至れば、船渡しの小家あり。金花山向うに見えて、是金花山への渡り口なり。晝より後は浪高くして渡りがたしとて、皆朝とく船を出して渡るとなり。其渡り纔に三十町許にて、向うの山手に取るやうに見ゆれども、迫門の事ゆゑに、浪甚高く、大に危き海なり。此三

こがれ花咲―萬葉集巻十八大伴家持の作、すめろぎの御代榮えんとあづまなる陸奥山に黄金花咲くとあるをいふ

迫門―海峽

外にも村里の氏神などに祭れりといふ神體、格別に大なる骨などあり。又古塚などを開きたるに、大なる頭骨を掘出せしこと、奥州邊にては多く聞り。西國北國邊にてかゝることを聞し事なし。奥州にては、かゝる骨を、頼朝の頭又は田原の又太郎の頭など、其外往古の鬼神の骨なりといひはやせど、つらく思ひ見るに、全くさせることにはあらじ。むかしの人とても、今の人にかはることなければ、名高き人にてもさほど大なることはたえて無き理なり。余萬國圖を考へ見るに、日本の東の方數千萬里の外に、巴大溫といふ國あり。俗にいふ大人國にて、其國の人は長ヶ數丈に及び、過し年、阿蘭陀人諸國をめぐりしついで彼國に至り、水を取らんが爲に陸にあがり見るに、砂原に足跡あり。其形數尺にして、人間の如くにあらざりしかば、恐れて迯歸れりといふ事もあり。又其國に漂流せし人つひに歸りしことなしとも見えたれば、必日本の東方に當りて大人國ありて、其國の人は身のたけ二三丈にも及びたることと聞ゆ。殊に奥州邊ばかり大骨打あげて、西國北國に其事なければ、必定彼巴大溫の國の人、漁人などの舟の覆りて海中に死せし骨の、昔も大風雨に日本の東海邊に寄り來りしを取上て、あやしみ恐れて神にも祭り、塚にも納めしと覺ゆ。今度の南部領の大なる足も、彼國の人の漂流せし

いとましてー暇乞して也　湯殿山ー羽前東田川郡月山の半腹に在り

をしらず。さて有べきにあらねば、大行院に歸るに、主僧も浮島を見たることを賀して、浮島の發句などを乞へり。其翌日はいとまして立出るに、江戸の旅人四五人湯殿山登山して歸るさ、此浮島を見物せんとて來れるに逢、きのふのことを語れば、是非今一度伴ひ申べしといふにぞ、いまだ餘興も盡ざれば、又同道して再び彼池邊に至り見るに、きのふ見し數々の島もなくなり、纔に二ッばかりぞ浮み居て、少しも動く氣色みえず。塘雨は益信じて、やがてぞ遊行すべし、見給へといひて待居けれど、さらに動くべき色もなければ、旅人大に退屈し、いたづらなる所にひま入りては明日の道のつもり悪し、はや行べしとて、むなしく去れり。いと殘多きことなりき。

○大骨

余が奥州に遊びし頃、南部の内宮古近邊の海濱に、ある大風雨の翌日、人の足ばかり長さ五六尺ばかりなるが、肉はたゞれながら指もいまだ全うしたるが流れ上り居たり。魚類かと見に、人の足に相違なし。いかなればかく大なるものぞと、其あたりの人驚き怪しみ、其頃其邊專らの取沙汰なりき。余是を聞て考ふるに、南半田村の大骨といひ、其

たゞに—徒に
晝のまうけ—晝食の支度

赴き—原本趣きに作る

ほがらかにて、たゞにやむべき心地もせざれば、朝とくより晝のまうけなどを懐にし、けふは終日池に臨みて、ぜひ其不思議をも見居けんと、例の二木の松の本に箕居して、池の面を見渡したるに、きのふ見たりし二ツの小島見えず。こは怪し。さるにても動けばこそと、空頼母しく、出るまゝの發句など口ずさみ居ける程に、こなたの岸根少し動くやうに見ゆるにぞ、さればこそと目もはなたず詠居るに、一ッの島とわかれて浮み出つゝ、靜に池の中にはなれ行くさまいと目ざまし。又しばし有りて、向うの岸根はなれ出て、こなたに浮み來る。かくてそこゝより浮み出る程に、池の中に數々の島出來て、遊行往來す。其さま、物有りて島を負ひ廻るがごとし。目さめ、心動きて、悦しさいはんかたなし。中にも彼奥州島にてもや有らん、二三丈餘にも及びていと大く、其島の上には小松生ひ茂り、藤の花咲かゝりて、つゝじに色を爭ひながら浮み出て遊行するさま、不思議といふもあまりあり。面白さ限なくて守り居るに、其島直に岸に附にもあらず、右に寄り、左に赴き、心のまゝに遊ぶ。又跡より出來る島、先の島に行あたるに、よの常ならば俱に押行べきに、左はなく、先の島おのづから傍によけて、行べき島を通すなど、誠に心あるさまなり。終日見居たるにも、いかなるゆゑといふこと

天下太平の象なり。沈みて見えざれば必變を示すとなり。塘雨が遊びしは五月上旬の事なりしが、俳諧の交厚ければ、大行院主のもてなしを得て、一ト日池邊に出て見るに、水面藍よりも青く、水際には蘆萱生ひ茂り、いとゞさへ山深く人跡絶たる土地なるに、いと物凄く靜にて、世外の思を觀ぜり。時夏の半なれど、此邊深山にて寒氣強ければ、藤、山吹、躑躅など、折しり顏に咲亂れて、鳥の囀までのどやかなるに、心なぐさみて、今や島々の浮出るかと目もはなたで詠居けれども、水面には唯三四尺許と、七八尺許の小島二ッのみ有りて、さらに動く氣色もなく、外に島々の數々有るやうにも見えず。日暮るゝまで守り居けれども、それといふべき事もなし。早日影も西山に傾き、鳥は樹に宿し、雲は高峯に歸れば、いと物すごくなりゆく程に、空しく大行院に歸りぬ。主僧待得て、島遊を拜み給ひしにやと問に、いや其事も無りしといふにぞ、主僧日によりて遊び給はぬこともあるなり。猶逗留して、又の日こそ拜み給へといふ。塘雨いと怪しみて、島の浮遊ぶといふはそらごとなるべし。世に云傳ふること、さてもなき事をも珍敷やうにいひなして人を迷はしむるは、世に多き習なり。此池の不思議も其たぐひなるべしと、いとほいなくて其夜は臥たり。其翌日起出て見るに、天氣殊に

みたらし―御手洗

形相―現象

朝、白鳳年間、役行者の開基にて、蒼稲魂神勸請の地なり。此山にみたらしの大池あり。大沼と名附く。是は池の形大の字に略似たるをもて名附しとかや。此池に奇妙の靈異あり。世間未曾有の奇事なれども、かゝる僻遠の地なる故、尋入る人も稀々にて、知る者すくなし。いかなる事ぞといふに、池の中に六十六の島ありて、其島時々に水面を遊行す。島の數六十六といふは、日本成就の形相といふ。其昔行基菩薩も此池に至り、實方中將も此浮島を見物し給ひしとぞ。實方遊び給ひし時、

四ツの海波靜なるしるしにや、おのれと浮て廻る島哉

と詠置給ひしといひ傳ふ。池のほとりに古松二株あり。一株を實方中將の島見松といふ。實方此松に倚りて島を見給ひしとなり。其時明神感應ありて、池水を卷上て松の根までそゝぎしとて、一株の松を浪上松といふ。浮島常は池の岸に引附て、渚のやうに見ゆ。其中にて最大なるを奥州島と名附く。其餘の島々も皆國々名ありしかど、今はまぎれて、何國といふこと、しかとわからず。唯一所池の中へ突出たる岸根を、芦原島といふ。此島ばかり動かず、昔より同じ所にあり。又池の向うの方の右の方によりて浮みたる色黑き木の株のごときものあり。是を浮木と名附て、天下の吉凶を占ふとぞ。浮たる時は

人にくはしく尋問に、大野の城下より、山道九里にして細き谷川あり。其水の流に、諸器物何にても半月或は一月程入置時は、皆石と成る。筆紙下駄草履膳椀の類にても、皆石となるとぞ。余京都にて、先年、木の枝に雪の積れるが其雪ともに石となりたるを見たり。半紙壹束をわらにてつかねたるが、其わらともに化して石と成りたるをも見たり。是皆此谷にて作りたるものとぞ。其頃思ひしは、極陰の地ゆゑ水中に寒氣の時久敷漬置て石と化するにやと考へしが、左にはあらず。夏日にても同敷石となるとぞ。それはいかにして化することぞと委敷尋究るに、谷川の水上より沫のごとき物流れ來りて、漸々に其物に粘著して石と成るとなり。然れば、其谷の奥に玉液有りて流れ出、物に附て石となるにやと思はる。蠻夷諸國の事を書し書を見し事の有りしが、其中にも、蠻國の内に諸物の石に化する地あることを載たり。此谷も其類にや。

○浮島

出羽國山形より奥に、大沼山といふ所あり。其山主を大行院といふ。修驗道にて俳諧の數寄人、俳名を鷹窓といふ。此山の緣記を聞けば、人皇四十代のみかど、天武天皇の

辨柄—紅殼に同じ

辰砂—水銀と硫黄との化合物にて多く土狀をなす

極月—十二月

く朱色なり。此邊の海中の魚皆赤しと云。谷にある所の朱の氣によりて、海中の魚或は石までも朱色なること、無情有情ともに是に感ずる事ふしぎなり。余もあまり珍らしさに、谷川を傳ひ、奥深く入りて見るに、朱彌多し。土を掘りて見るに、其色益あざやかなり。大なる朱石を打碎き、少ゝ袖にし歸る。其石乾く時は、朱色少し黒みありて、辨柄の色のごとし。此谷の入口には柵ありて、人の入ることを禁じ、守る人ありて、領主の益とせられし事なりしが、卯の年の饑饉に、外が濱わけて甚しく、此あたりは人種の盡たりともいふ程の事にて、守るべき人もなければ、又盗取る人も無し。余が遊びしは僅に三年の後なりしが、柵も破れて守る人なく、通路自由なり。よき時節に來りしともいふべし。極上品の朱砂辰砂には及ばずとも、人近き國にあらばいかばかりの益ならんかし。

○化石溪

越前國大野領分の山中打波村といふ所に、何にても石に化する谷あり。余も彼地に遊ばんとせしかども、折節極月なりしかば、通路雪に閉られて至る事あたはざりき。其邊の

虎杖—いたどり
烏頭—とりかぶとの根
車前草—おほばこ
獨活—うど
仙臺萩—千代萩也、葉の形エンジユに似、高さ二三尺に及ぶ草の名

く頭上に覆ひかゝるとなり。ふとさも壹尺貳尺廻りのもの多しとぞ。秋田津輕邊極て北地ゆゑ、松なく、竹なく、其外の草木にも無きもの多し。鳥類も中國のごとく多からず。唯虎杖、烏頭、車前草、獨活、仙臺萩等甚多く、且肥大にして、上方にては見ざるものにて、目を驚せり。又熊笹甚多し。深山は皆是なり。彼地にては根曲り竹と云。蝦夷地にてはシャコタンと云。蝦夷にあるは最大にしてふとし。長八九尺、ふとさも杖程なるもの多し。奥州の内にて黑き狐を見たり。上方には無きものなり。蝦夷地には有るよし兼て聞り。純黑なる狐の皮は最珍重する事なり。我見たりしは、あまり見事なる黑色にてはなかりし。

○朱谷

奥州津輕の外が濱に平舘といふ所あり。此所の北にあたり、巖石海に突出たる所あり。是を石崎の鼻といふ。其所を越えて暫行けば、朱谷あり。山々高く聳たる間より、細き谷川流れ出て、海に落る。此谷の土石皆朱色なり。水の色までいと赤く、ぬれたる石の朝日に映ずるいろ、誠に花やかにて、目さむる心地す。其落る所の海の小石までも多

事によりて ─事につきての意か

東遊記 巻之五

○秋田蕗

世に秋田杉と云寫木有りて、秋田の蕗の事によりて書けるものも有り。我秋田を過しは三月の末にて、其蕗いまだ不出といふ。唯大指のふとさ程なるは、諸方にて食せり。それすら上方にてはいまだ見及ざる蕗なり。但其性甚薄く、たとへば竹に似たり。上方の蕗のごとく、中まで實したるものにあらず。それゆゑ、鹽漬又は糟漬抔にしては薄く平たくなりて、見たる所にも賞翫なし。故に京都大坂抔へは送り登す事稀なり。彼地にて聞に、六七月の比盛に出るとなり。最大なるは、秋田城下より十里許隔りて、長木が澤といふ所ありて、其澤に生ずる蕗長六七尺に及び、ふとさ平皿に滿る程なり。かの秋田杉にいふ所のものは此所の物なりと云。實に寒國なれば、三月頃は一切の青葉いまだ不出、蕗のふときを見ざりし事殘念なり。惣じて秋田に限らず、仙臺、南部、津輕、松前の蕗皆大なり。就中、蝦夷地に入りては、馬上にて往來するに、蕗の葉傘のごと

實方―藤原實方也―一條天皇頃の人、從四位上左近衞中將に至り陸奥守に貶せられ長德四年任所に卒す

かづき―被衣、俗にかつぎといふ物也

市女笠―中高なる塗笠

○阿古屋松

實方中將の尋訖給ひけるといふ阿古屋の松は、昔は奥州と聞しに、今は出羽の内に屬して、山形の城下より坤の方とも覺て、二里ばかりを隔てたり。其地を千歳山と云。其松今も昔の色見えて、常盤の陰榮え茂りて、誠に目度度木にてぞ有ける。塘雨が遊びしは五月五日あやめの節句なりしが、此邊より山形あたりの婦女子、近所あたりに行かふに、布にてつくり、藍もやう有る物を疊みて、必人ごとに手に持り。怪しく思ひて人に問に、所の人答て、昔は是をかぶりて往來したるに、いつの頃よりか、近世の風にて、手に疊みて持許になりしなり。是は上方にいふかづきなり。されど下女なるものはかづくまじき身分ゆゑ、今も手に持事だもなし。唯家童子なる者のみ持ことなりと云。實も、昔繪の卷物などに、女の物詣する圖などに、市女笠きて、單のかづき打かぶりたるが、吾妻からげしたるなど思ひ合されて、ふるめかし。すべて奥州筋には、童の事をワラジといふ。されば人の妻女を家童子といふも古代の詞なるべし。すべての事の昔の俤残りたるは、都遠き片田舍にありといふべし。

ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行て聞侍りしに、親には孝をつくすべし、主人は大切にするものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふ事常々語り給ふにより、今日の金子も我物にあらざれば取べき理無しと心得し迄のことなりといひすてゝ歸りぬ。飛脚はそれより京へのぼり、いつもの宿に到り、扨も此度は辛き命いきのびて、各方にも對面することなりぬとて、有し次第をくはしく語るに、折ふし其家の裏に、熊澤治郎八田舍よりのぼり居て、學文修行最中の事なりしが、此物語を聞て、其人こそ誠の儒といふものなりとて、其翌日すぐに江州に到り、小川村を尋て、隨從を願はれしに、人に敎申べき程の學德なしとて、さらに隨從をゆるし給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたゝずみて歸らず。藤樹の老母是を氣毒がり、よしや先内へ入れ申せよとありし故、いなみがたくて内へ入れ、つひに師弟の契約をせられしよし。其後藤樹を備前より招き給ひしに、其身は病身なりと堅く辭し、門人熊澤といふもの有り、御役にも立べき者なりとて熊澤を出されけり。いづれも格別の事どもなり。長物語なれど、藤樹先生の事跡くはしくしらぬ人も多ければ、見聞及所を書附ぬ。江州に遊ぶ人は、必彼講堂見るべき事なり。

講釋―原本釋を尺に作る

貳分—今の五十錢

鳥目—青錢のこと

百兩なくば我一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。さればそこの高恩中中言葉のいひ盡すべきにあらねども、先當座の御禮までにおくり奉ると、涙を流し悅ぶに、馬方大に驚きし顏色にて、そなたの金をそなたに取納給ふに、何の禮といふことあるべきとて、手にだに取らず。色々にこしらへいへども、さらに受ずして歸らんとする故、やむことを得ず、拾兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々とへらして、つひには金貳歩となし、せめて是許は我心の悅びなれば受給ふべし。左無くては我心もすみ申さず、今宵もいねがたしと、理を盡し、詞を盡しいふにぞ、此金を受申程ならば貳百兩をも留め置申べし。かくかへし申からには、聊にても謝禮を受るは我心にあらず。さりとて餘儀なくのたまへば、さらば、鳥目貳百文を賜はるべし。是は今夜やすむべき所を是迄追かけ來れる賃錢なり。是は我とるべき錢なれば申請べしといひて、貳百文にて酒をかひ、其家の人にふるまひ、我も醉程のみて歸らんとす。飛脚も感に堪かね、さるにても、そこはいかなる人にておはすと問ふに、名ある者にあらず、又何一ッ知れる者にあらず。唯我在所の近所に小川村といふ所あり。此村に與右衛門といふ人おはして、夜

熊澤—熊澤蕃山とて有名なる儒者也元祿四年七月廿七日卒す年七十三

輕尻の馬—本馬の荷の半量を一駄とする駄馬の稱

十二歳なりぬ。此講堂の建しも死去二三年前の事なり。先生の嫡子德右衛門、常省先生と稱す。多病なりしかど、壽は七十二歳まで保てり。其人子無して中江氏の子孫絶え、今は無し。對馬の家中に兄弟の家ありて、今に中江を名乘るとの噂なりと周助語れり。されども其餘敎近鄕に深く染み入りて、殊更此小川村の百姓は、年若き者といへども每夜集會して手習し、かりそめにも酒など打のみ、亂舞音曲などをすることなく、まして博奕などはいふまでもなし。故に、いかなる輕き者といへども物書ぬものはなしといふ。誠に此邊の風儀溫和淳朴にして、見る所聞所感に堪ず。あり難き事どもなり。前の尾張肥後の物語、相違なき事を知る。熊澤先生は其門人なれど、其功蹟をいへば、いふべき所もすくなからず。されども其人も今時は得難しとぞ思はる。此人藤樹先生に從ばれし初を尋るに、其頃加賀の飛脚金子貳百兩を預り持て京へ登るに、江州河原市より輕尻の馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬かたは河原市へ歸り、馬のすそを洗んと鞍を解しに、鞍の下より財布一ツ出たり。取あげ見れば金貳百兩あり。馬かた大に驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそと思へば、其儘榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至り、對面し、委敷尋問に、相違無れば其金を取出し返しけるに、飛脚は死したる者のよみかへりたる心

大洲侯―大洲の藩主加藤泰興

官祿―原本官錄に作る

備前―備前の池田侯を指す

内の神主常法の如し。扨悉く見終り、周助宅へ戻り、いかなればかく此堂を司り給ふと問に、父祖代々門人にして、殊に昔よりかく隣家に住み、今にては先生の子孫も無ければ、かくは預り來れるなり。殊更今にてはよき門人もなくなりぬれば、毎月六度づゝ村民を集め論語を講ずるも、某を無理に其人に當られて、勤申なり。又春秋の釋菜も、村中集り勤るにも、某を頭取とせるゆゑ、かく鍵をも預り居る事なり。講堂の修覆は領主より力を添られて、領主も折々參詣あるに、禮服を著せずしては堂中へ入り給はずとなり。夫より先生の出處を尋るに、先生三十餘にて伊豫の大洲侯の招に應ぜらる。先生の老母、船をきらひ四國に渡り得ず、江州に殘り居て、先生をあんじしたはるゝ故、やむことを得ず、強て官祿を辭しいとまを願はれしに、侯惜みてゆるしなければ、願既に三度に及びて後、願書を出し捨にして、大洲を忍び出て、歸り去れり。定て追手を向られて、重く罪せられんかとて、直には江州へも歸り得ず、京都に深くかくれて住居ありしが、元來孝心より出たる事ゆゑ、侯も罪し給はず、何のさはりも無くいとまをたまはりぬ。それより江州に歸り、老母を養はれしなり。其後、諸國の諸侯より招ありしかど再び仕へられず。備前の招にも門人の熊澤を出されし。幾程無くて死去あり。纔に四

神主—位牌

縁がは—原本椽がはに作る

釋菜—畧儀の釋奠にて孔子及び其門人を祭る儀式

せばやとおもひて、大溝の東の加茂といふ所より南へ入る事八町にして、小川村に至る。農夫老婆までもくはしく道を教へ、迷ふ事もなくて講堂の前に出たり。雨戸とざしあれば、其となり志村周助といふ醫者の許へ案內して、講堂を拜し度由いひ入るゝに、まづ玄關へ上り給へといふ。草鞋がけなれば、唯かりそめに講堂の案內をといへど、强て足そゝぎの水など持來るまゝ、やむ事を得ず、草鞋脚半など解て玄關へ上るに、周助出迎ふ。四十ばかりの惣髮なり。茶煙草の世話も行屆きたり。余講堂を拜見し、神主をも拜し度由乞へば、周助奥に入り、禮服を著て、講堂の鍵を手に持、いざ來り給へと引連て行く。扨講堂を開きたるに、堂はかやぶきにて、間數四間あり。書院南面にて十五疊縁がは有り。向うと西脇に押入あり。此書院講場なり。其次對客の間八疊に床あり。其次拾疊、其次臺所なり。正面縁側の上に藤樹書院といふ四字の額あり、分部昌命拜書とあり。十疊敷の間に、朱子の白鹿洞の規則を板に書てかけたり。さばかり相違の學風なるに、此文をかけられたるも殊勝に覺ゆ。押入の內に深衣を著せる繪像あり、釋菜の時の圖と云。其前に厨子あり。其內に神主あり。上箱に、先生姓中江、諱原、字惟命、號頤軒、稱藤樹先生、慶安元年戊子八月廿五日卒、葬邑東北玉林寺の三十八字あり。箱の

なほざりに―かりそめに、つひ一す

ざる無し、親をうやまひ子をしたしむ事をわきまへしりたるは先生の御蔭なれば、必おろそかに思ふべからずと、我父母も常々をじへ候ひぬと語る。士人も初は唯なほざりに一見の心にて來りしが、此農夫がやうすを見聞するに、今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。其後余肥後にて村井氏に親しく交りしに、ある日村井外より歸り語りしは、扨も今日は珍敷墨跡を見たり、此國の家老何某の方へ、近き頃江州より聟養子に見えし有り。其方へ用事ありて行て、物語の序にふと思ひ出て、そこの御里方の御領分に中江藤樹といひし人ありしよし、御存知にもや、其手跡などは所持し玉はずやと語り出しに、彼人座を改め、藤樹先生の御事は、我父祖以來尊敬いたし候ひて、老父我を愛するのあまり、遠方へかく參るに附て、兼て祕藏の一軸を出して得させぬ。御所望ならば見せ申すべしとて奧に入り、禮服に改め、一軸を携へ出て床にかけ、遙に引さがりて拜せられぬ。其尊敬かくばかりなれば、我も手あらひ口そゝぎなどして拜してやみぬ。分部侯にありては、畢竟領地の一農夫なるを、かくまで敬せらるゝ事、代々賢を愛し德を敬ひ給ふことも有り難く、又藤樹先生も眞の大儒なることもはじめて知りぬと申されし。此二事耳に殘りあれば、此度よき序なれば、墓にも謁し、講堂をも一見

にて見及たりし故一ッ携へ歸りたくも思ひしかども、長途荷物の重きをいとひ、やめたり。唯其圖はくはしく寫し歸れり。

○藤樹先生

大溝―高嶋郡に在り分部侯の陣屋のありし所

先生は俗稱中江與右衛門といひて、江州大溝の在中小川村の產にて、分部侯の領地の百姓なり。王陽明流の學者なりしが、其德行近時の學者の及ぶ所にあらずとぞ思はる。先年余聞し事あり。尾州の一士人用事ありて此邊を過ぎ、先生の墓所小川村に有りと聞て、畑うつ農夫に尋しに、畑道なれば知れ申まじ、案內して奉らんとて、先に立て行く。程なく小き藁屋に至り、しばし待せ給へとて內に入り、やがて出るを見るに、木綿の新敷ひとへ物に、布の小紋の羽織を著たり。彼士人驚きて、扨々叮嚀なる男かな、墓だに教へ得さすれば滿足なるにと思ひもて行うち、墓所にいたりぬ。彼農夫竹垣の戶を開き、いざ入りて拜し給へといひて、其身は戶外に拜伏せり。士人大に驚き、扨は衣服を改め著せしは我爲にはあらで、先生を敬するにてありけると心附、扨も汝は藤樹の家來筋の者にてやあると問へば、左には候はず、されど此村の者は一人として先生の御恩を蒙ら

北極出地の度數―土地の北極の方へ斗出したる度數の意

とし、日色迄も薄し、青天白日といふ氣色にあらず。余秋田に居たりし時、浪華の中田公超此二三年此秋田に來り住す、舊相識なりしかば暫同居せり。或日庭先に奴僕の古き縞ばんの洗濯して竹竿にかけたるありしが、中田是を指して、此色の空の色に似たるを見給へ。我此地に來り二三年に及べるに、秋天晴朗の時といへども、つひに碧瑠璃のごとき色を見ず。至極の晴たる日、此ごとく白みたるばかりなり。天色の上方に異なるを、そこには心附ずやといひし。余は唯暫の逗留故、空の晴たるにあはざるとのみ思ひ居しが、是より後心を附て見るに、實に中田が詞の如し。此邊だにかくあれば、增て蝦夷地方は陰風常に烈敷、胡塵空に滿るがゆゑ、「胡沙吹かば曇りもやせん」とよみしもうべなり。すべて津輕秋田邊は、北に面したる地面故陰風最甚し。南部の地は北極出地の度數は大抵同じ事なれども、東向の地なるが故に、日月の色も、空のもやうも、風のけしきも、中國畿内に格別かはらざるやうに覺ゆ。たとへば能登國は加賀越中よりも遙に北へ出たれども、南面なる故、反而賀越よりも暖氣なるが如し。其向き方角によりて、氣候も相違すると見ゆ。又秋田津輕の邊の村民の子供、榎木の皮の如く見ゆる木の皮にて、末開きに卷て吹ものあり。其聲甚大なり。是胡笳の遺製なりとぞ。所々

爲家—藤原爲家とて定家の子、鎌倉時代中葉の歌人

胡笳—夷狄の笛

上方—近畿の國々をいふ

猶其まゝに奥州まで負ひ行たるにや。

○胡沙吹

「こさふかば曇りもやせん、陸奥の蝦夷には見せそ秋の夜の月。」此歌は爲家卿のよめるなりと云傳ふ。すべて蝦夷人は種々の奇術ありと云。其中に、口より霧のごときものを吹出し、或は敵に逢ひ、又は猛獸に出會たる時、此霧をはき、我身を隱し、其難をのがるる事あり。是をコサ吹といふなり。又或說には、蝦夷人木の皮を卷て笛を造りて是を吹。これをコサ吹と云。コサは卽胡笳なり。笛聲に山氣動き登りて、月も曇るといふ。不思議なる事と思ひしが、今度北地に遊びて其趣を合點せり。凡北國は惣體風吹ざる日はまれなり。殊に出羽の邊に至りては、北風猶更烈しく、海邊沙塵常に起り、虛空も濛濛として、靑天白日を見る事少し。又外が濱邊は極陰の地なるゆゑにや、海氣常に空濛として霧の籠るがごとく、松前邊の海中も平常海霧甚多して、船の往來するにも每度難儀に及ぶ事あり。是をモヤといふ。惣じて羽州より津輕の邊は、空の氣色上方とは違ひたるやうに覺ゆ。至極の晴天といへども、空の色靑みすくなく、白み勝にてどんみり

鼠關—羽前國西田川郡今の念珠關村の内に在り

平泉—陸中磐井郡に在り其城跡は平泉驛高屋の北、高館跡の南に遺れり

りも東の限なれば、堺の關といへる有りて、甚嚴しき事世の人のしる所なり。扨夫より東には、越後と出羽の國堺に鼠關といへる有。是は海邊なり。山より行には葡萄峠と云ありて、此山中にも小き關數々あり。此羽越の堺も實に天嶮にして、前にしるす通りなり。それより出羽の秋田領と奥州津輕領の堺に、矢立峠と云あり。此所にも兩所の關所有りて、出入甚嚴重なり。先大抵、北邊にては、此三箇所を隔絶の天嶮といふべし。義經いかに奇妙の武將といへども、此地を通らざれば奥州に入ること叶ふべからず。其内矢立峠は、秀衡の居城平泉よりは奥なれば、通行に及ばざれども、前の二箇所は是非に通り拔けざれば、其外にとては通ふべき道なき事なれば、定て心をくるしめ給ひぬらし。平坦の加賀越前だにもかゝりし上は、其餘の危さいふまでもあるまじきに、恙なく越え〳〵て、既に鼠關を出れば、羽州の地なれば、懷に入ぬる心地ぞしぬらん。此三瀨にいふ所は、鼠關を出て六七里、つるが岡までは四里の所なり。安堵して姿を改め給ひしも、げにとぞおもはる。其笈今に殘る所七ッあり。軍書には十二人の作り山伏といへるに、其數の足らざるは仔細も有るべし。又秀衡の古城跡平泉の中尊寺に、龜井六郎が笈なりとて、今に唯一ッ殘れり。七人の衆は此三瀨にて笈をおろし、龜井抔は

平泉寺衆徒ー平泉寺の僧徒、平泉寺は越前國大野郡に在り今は村の名となる

三瀬ー西田川郡今の豊浦の内に在り

名附るー原本なづけると訓ず

人の作り山伏と成りて下り給ふに、越前にて平泉寺衆徒に圍れ、笛を吹きてやう〳〵に其難をのがれ、安宅關にては辨慶の精忠の爲に、富樫の左衛門が情を得て、誠に安き心もなく、辛うじて出羽の國三瀬といふ所まで落著給ふ。此所は奥州の領地にてもや有けん、最早妨げ防ぐ者もなければ、各初て安堵して、少し足を休め、作り山伏の姿も是迄なりとて、皆山伏の姿を解き、此所の氏神の社に詣でゝ、恙なかりし歡を申て、各の笈共を社頭に殘し置て去り給ひぬとぞ。今に此三瀬の社に、義經主從の負ひ給ひし笈七ツ殘れり。此社第一の寶物として祕藏す。此地は格別の邊土なれば、聞及ぶ人もなく、平家もの語盛衰記等にもしるし洩せり。誠に余も北國を經て奥羽の二州に入りしに、所所國々に昔の關の跡殘れり。其古跡は誠に關所有べき地勢にて、今太平なればこそかく通行するも妨なしと思はる。其中にも、殊に天然の險絕にして、其國隔絕し、此道筋ならでは通ふべき所もなく、扨亦此道といへども、一人是を守らば萬夫も過る事あたはじと思はるゝ所は、越中越後の堺なり。俗に親知らず子しらずと名附る地なり。此所は越中立山の麓の海中へ流れ出たる所なれば、其險岨は云はでもしるべし。故に、今も此所は御領地にて、市振といへる關をすゑられて、往來の人を正す事なり。同じく賀州よ

惣髪―月代を剃らず、全髪を頂に束ねたる髪の結方

そのかみ―昔

に、駒返と名附く。馬は兩方の驛より牽來り、荷物は其纔の所を人夫にて送り越すことなり。歌村より一里半にして、靑海といふ驛あり。此所は山下を通りぬけて少し廣みなり。市振より靑海まで、四里の所難所なり。風波の時は、王侯の勢にても越ること成難し。誠に一人是を守れば萬夫も過ることあたはざるの要害の地なり。故に市振は御領所にて、關あり、往來の人を改る。余醫者にて惣髪なる故に、別して叮嚀に吟味ありき。誠に左もあるべし。他所と違ひ、一方は大海、一方は萬仭の高山南の方へ數十里連り聳えたれば、廻りても通るべき道なし。天險とはかゝる所をいふべし。かほどの難所なれども、夏の頃天氣格別晴朗にして、風波靜なる日は道路に少しの高低もなく、絲を引たるごとき波打際の事なれば、難所ともしらず、唯風景のよき所とのみ思ひて通行する人多しとなり。

○義經の笈

そのかみ、源九郎義經、兄頼朝の怒に逢ひ、身の置所なきまゝ、古き親しみなれば秀衡を頼んとて、忍びて奥州に下り給ふに、東街道は途の守り嚴しければ、北國路を十二

もし北風強き時は、數日を歴るといへども、通行ならずとなり。去々年も、越後の商人越中に越るとて、此所を無理に通りかゝり、中程にて波風殊に強くなり、件の穴に迯入たるに、穴際まで大波打かけて、走り過べき隙なく、八日が間其穴の中に居、やうく波風靜り、命たすかり、其穴を出たり。其間の饑渴、心遣ひ、いふに詞なしと語れり。波高き日無理に通りかゝり、穴中に避隱れて出べき隙なく、二日三日穴に居る人は年々多き事とぞ。余が通行せし時は、雨天にて波風はさのみ強からざりしかども、上の山は傾くがごとく聳え、寄せ來る波は足を引去れば、其恐しき事今に忘れず。余が友富山の佐伯某此所を通りしには、其身は肩輿に乗り居しが、人足二三十人にて其肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴へ隱れ、走りぬけては穴に隱れて、やうくに過しと語れり。惣じて此邊の人足は、波を避けて走ることに妙を得たり。されば此地の人夫大勢を召連れ行時は、大抵の波風には滯ることなしといへり。扨此親不知を過て、少し山のふところに人家ある所を歌村と云。其村を過、又波打際を行けば、駒返と云難所あり。此所は波風無き時といへども、常に山の根へ波打かけ、通路なりがたきゆゑに、絶壁の中半に岩を穿ちて細き路を附、旅人通行す。其間纔の所なれども、馬上なりがたき故

肩輿—駕籠をいふ

駒返—通常こまがへしと訓ず親不知の東に在り

東遊記 巻之四

市振ー越後國西頸城郡に在り

○親不知

越中越後の堺に親不知子不知といふ所あり。北陸道第一の難所として、あまねく人のしる所なり。越中立山の裾、北海へ張出たる所にて、市振といふ驛より歌といふ所迄を山の下と稱して、二里半あり。立山の裾なる故に、斷巖絶壁にて路徑も附がたき故に、波打際を旅人通行する事なり。一方は壁を立たるごとき山、一方は大海なり。風無く波靜なる日は、旅人通行する道幅七八間或は十間許あり。又所によりて、半町一町もある所あり。然るに、風起り波荒き時は、直に彼絶壁の所へ波打かけて、通路なし。右二里半のうちに、一ヶ所長さ五六町の間、別て道幅狹き所あるを、世に親不知子不知といふ。甚難所にして、親も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其間、絶壁の根に岩穴ありて、十間程づゝ置て其穴いくつも有り。波の打よする時は、通行の人此穴へ走り入て、波の引時を見合て走り過、又波來れば次の穴に入て是を避く。

玉葉集―爲兼の撰進したる勅撰歌集

萍水の身―浮草の如く行末定めぬ身

知りたりしに、初君別を惜しみて和歌をよむ。其和歌、今に町の中程の南側に石碑に彫附て殘れり。碑面を見れば、「物思ひ越路の末の白浪も、立歸る日の有とこそきけ、遊女初君」とあり。是は爲兼の心をなぐさめてよめりとぞ。賤しき身にも限なくやさしきことなればとて、後に玉葉集にも入れられたりとなり。又日蓮上人佐渡が島配流の時も、此寺泊にて七日が間風を待給ひけるとて、其舊跡の寺も殘れり。誠に越後國すらむかしより鬼住國といひならはし、我等ごとき萍水の身だにも住はつべき國とはおもひもよらざるに、高貴の身として、越後國をだに海を隔てたる佐渡が島に左遷し給ん心の内いかゞあらん。初君が歌を見るに附ても、其時のことおもひやりて、そゞろに旅の袂をぬらしつ。

悔い―原本悔ひに作る

五更―朝の四時

出雲崎―越後國三島郡にあり

ながら悔い怪みて、何卒して一刻も早く恙なくてもとの湊へ戻れかしと、心中に祈念し、是より以後は、此事心肝に刻みぬれば、いかなる事ありとも、海の船には乗るまじと獨り心に誓ひ居たり。されども波靜まらず、西にゆられ、東に漂ひする程に、心神惱亂して、誠に諺にいふ、三年の壽命も促りし事を覺えたり。然るに天の冥助ありて、風又東北より吹出て、五更の頃不思議にもとの直江津の湊に入りぬ。其時の嬉しさ、誠に蘇生の心地ぞせり。いそぎ松屋にあがり、よもすがらの心勞に身もいたくつかれぬれば、其翌日は終日寢て休息す。誠に此直江津よりは佐渡國まで三十五里の海上なるに、かゝる小船に乗り、まだ春淺きに、限知られぬ北海に浮み、此天氣に逢ひしに、恙なくてもとの湊に歸り著ぬるは、不思議の事ともいふべし。すべての常なみの佐渡わたりの湊口は、出雲崎といふ所を第一とす。出雲崎は佐渡の渡り口の町なれば、繁華の地なり。海上も程近く、纔に十八里を隔てたり。又出雲崎より四里東北に寺泊と云所あり。此所も頗る繁華の地なり。此寺泊は佐渡へ第一に近き地にて、十六里の海上なり。此ところむかしは佐渡の渡り口の湊、此寺泊なりき。むかし爲兼大納言、佐渡國へ配流の時、此寺泊の驛にて數日風を見合せて逗留し給ひける時、此里の遊女初君といふを相

上弦の月―新月より満月に至る間に太陽よりの角度九十度となりたる頃の月、即ち陰暦七八日頃の月也

海なり。北に見ゆる雲動きなば、中途より急に何方へも船を著べし。佐渡山近くなりても、風起れば佐渡に取附事難うして、北溟に吹放たるゝなり。若き者元氣にはやりてあやまちすなと、繰返しいましめて歸りぬ。氣味わるき事をもいふものかなと思ひながら、帆に任せて北海四五里が程出る所へ、北の方の雲と天と接せし所いと黒く成り、上弦の月入る程に、其色ますくあやしくて、風やゝ替れば、水主どもも氣遣ひて、夜明る頃には西風や落ん、東風にや替らんと、口々に評議す。是を聞くに彌おそろしく、又晝の程北海を見しに、海中より水氣の揚りし事抔思ひ合せて、是は必明日は雨風や起らんと思ひめぐらすに、安き心もなし。其内に風やゝ起り來て、波逆立、船のゆる事箕をひるがごとし。岸遠くは離れたり。殊に夜更ぬる事なれば、四方皆渺茫としてたよるべき所見えず。船頭に、何方にもせよ船を陸に著けよといふに、此あたりには著べき所なしといひて、船頭さへ船をあやどりかねて見ゆれば、今にもあれ雨降りきたり風いよいよあれ來らば、此船忽に覆らんものをとおもへば、心のうちやるかたなく、立ても安からず、居りても安からず。此時に日比の五戒思出て、けふはいかなれば此船に乘りてかゝる難海に浮み出し事ぞや、日比書附し五戒はいかにして忘れぬることぞやと、我

なり。然るに、越後國直江津に到りけるは三月八日の事なりしが、今町の旅館松屋といへるに入りぬれば、越中にて親敷交りし松軒といふ人、此間より此の松屋に逗留して居られつれば、旅中の邂逅心なぐさみて打語らふに、松軒いふは、今宵此町より佐渡に渡る船あり、よき便船なればみづからは渡るなり。そこにも佐渡が島一見し給ひなんや。よき道連なればとも〴〵に彼島の名所探らんとすゝむるにぞ、天氣は晴たり、風は靜なり、又かくよき便船も有まじければ、今宵出る事ならば、いざや彼地に三五日逗留して風土をも見んものをと、例の不了簡出て、何心なく暮過る頃より船に乘りぬ。纔に水手四人乘れり。客といふは松軒主從余師弟のみなり。その外に荷物少々積入て、いと小き船なり。殊に北海は冬より春に至り浪風荒て、海上に船の往來なく、やう〳〵四月初比に至り、船を出す事なり。此比は天氣打續き長閑なればとて、いまだ三月の上旬なるに、初て佐渡に渡らんとする船なり。是は諸方ともいまだ佐渡に渡りし船なき折なれば、其内に荷物を積渡れば格別の利をも得る故に、危きを侵して渡れる船なり。扨初更過る頃湊を出しに、年老し船頭一人送り來て、船中の水主共に云樣は、北の空に雲少し見ゆ。又月の色も勝れねば、いかに此程天氣よければとて油斷はならず。佐渡に渡るは大事の

初更―夜の八時

向うに―原本すべて向ふにとあり

樓をむすぶ事いまだきかず。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、此樓臺を見るべき事なり。

○佐渡わたり

我が旅行の時は、いつにても五戒を立て、道中記の初に大に書附て、毎日是を見て、堅く愼むことなり。其五戒と云は、渡海馮河夜行異食賤妓なり。是皆旅行の人の最身をあやまち病を得るのもとなり。志ある人は、懼るべき事は深くおそれ、身を全くして長生を得るこそ、藝術をも成就して人を救ひ、後世を惠むことも有べし。此五戒の事も常々はよく心得て侵すまじと思へども、其時に臨み、足つかれ、天氣靜なれば、船に乘るべき心も起り、川越しに無理の賃錢をむさぼらるゝ時は、是許の川何程の事かあらんとも思ひ、途の繰合によりては日暮ても宿をとりかね、人の馳走の志を無下にせん事を氣の毒におもひては、喰なれぬ異物をも箸を下し、旅路深きつれぐ〵には、瘡病る浮れ女にも一夜を契るなど、是皆其時に當りては、兼ての心の外になりて、跡にては大なる災を得る事なり。此故に、毎日目にふるゝ道中記に書附て、かりそめにも侵さじと愼事

蜃樓—蜃氣樓の事にて是は無風平穩の日に溫度又は濕度の關係より大氣の密度の層々相異なる時に光線の屈折につれて地上の物體が空中に映じて現るゝ也

例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯つひに見ざる人多し。余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して蜃樓を見るべしと人々にすゝめられ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし比は正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せん事あまり永々しければ、殘念なりしかども見ずして越後にこえたり。越後の糸魚川にて、松山茂叔に此事を語りしに、此人も糸魚川の海中遙に山の出來たるを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて、折々見ることなりといひしと語られき。余初唐人の作れる詩抔を見て、思ひしは、蜃樓は大洋にある事にて、陸地近き入海にはなきことのやうに心得しが、魚津の地理を見るに左にはあなず。魚津は北海に臨める地なるに、向ふの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屛風のごとくに見る魚津の海は、東よりの入海なり。海中より蒸登る陽氣向ふの山に映じて、色々の形を見るなり。向ふに當なく、數百千里見はらしたる大海にては、陽氣のぼるといへども、向ふの當無れば映ずることなくして、人の目に見えがたしとぞ覺ゆ。伊勢の桑名の海にも、三十年五十年の內には、たま〳〵蜃樓を結ぶ事ありといふ。是も向ふに尾張三河の山を受けてあるゆゑなるべし。又安藝國にてもたま〳〵はありと云。是も向ふに山あり。其外の國にては蜃氣

蘇東坡—宋代の詩人建中靖國元年歿す年六十六

魚津—下新川郡に在り

城郭—原本すべて城廓に作る

矢間—矢を射出す窓

中に住で氣を吐て樓臺を結ぶなりと。色々の說あり。蘇東坡杯も南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚珍しがりて、賞玩することとぞ。我國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此蜃氣樓は甚稀なり。唯越中の魚津といふ所に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收り、海上霞渡りて、一面の鏡の打曇れるがごとき日に、此蜃氣樓をむすぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶ事あり。誠に唐土の人のいへるごとく、海上に煙のごとく雲のごとく次第にむすび來りて、遂には樓臺のごとく、或は城郭の如く、人馬往來せるがごときも、歷々然として見ゆ。北地に我親しく交りし宮島式部太夫と云社人は、折よく魚津にて是を見たり。初は幕を引るがごとくなりしが、しばらく見る間に、城郭のごとく、矢倉高塀やうのものも見え、矢間などのごときものも見えしが、又暫する間に、松原の如く、繪に書ける天の橋立などのやうに見えし。夕暮に及び風少し出たれば、漸々に消失て跡かたもなくなりしなり。富山よりは纔に六里を隔てたる所なれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶもしれがたく、又むすびたる時急に人して告しらすにも、其間には消失て見るべからず。此ゆゑに、魚津近所の海邊の人は、

て、毎年正月十五日に新敷作り改むることなり。所の神の事なれば、中々麁略にはせず。たとひ御巡見使又は御目附等の御通行の節も此まゝにて、若きものの戯などにあらずと云。また其しめ繩に紙を結びて多く附たり。是はいかなる故と問へば、これは此あたりの女、よき男を祈りてひそかに紙を結ぶことなりと云。誠に邊國古風の事なり。京都の今出川の上にある所の幸の神といふは、いかなる神にてましますや。すべて田舍には、色々の名は替あれども、陰莖の形の石、陰門の形の石を神體として、所の氏神抔といはひ祭りてたふとびかしづく所多し。日本の古風にや。神代の巻にいふ所、或は鶺鴒の古事抔ふるくいひ傳ふる事多ければ、神道の祕事にはかゝる事も有べしとぞおもふ。

○蜃氣樓

唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる蜃樓といふことあり、又海市ともいふ。海上に雲のごとくに氣立のぼりて、樓臺城郭の形をあらはし、其中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、是大海の底にある大なる蛤の氣を吐て空中に樓閣のかたちをあらはすなりと。又蜃といふは、其形龍のごときものにて、海

安壽姫―岩木判官正氏の娘なり、一説に田光の海の童女なりともいふ、俗說也

渥美―原本握美に作る實は溫海也

り。珍らしき事なり。青森、三馬屋、そのほか外が濱通り、港々最甚敷丹後の人を忌嫌ふ。あまりあやしければ、いかなるわけのありて、かくはいふ事ぞと委敷尋問ふに、當國岩城山の神と云は、安壽姫出生の地なればとて、安壽姫を祭る。此姫は丹後の國にさまよひて、三庄太夫にくるしめられしゆゑ、今に至り其國の人といへば忌嫌ひて風雨を起し、岩城の神荒給ふとなり。外が濱通り九十里餘、皆多くは漁獵又は船の通行にて世渡ることなれば、常々最順風を願ふ。然るに差當りたる天氣にさはりあることなれば、一國こぞつて丹後の人を忌嫌ふ事にはなりぬ。此說隣境にも及びて、松前南部等にても、港々にては多くは丹後人を忌て送り出す事なり。かばかり人の恨は深きものにや。

○幸の神

出羽國渥美の驛のあたりの街道の兩方に、岩の聳えたる所には、幾所ともなく、必岩より岩にしめ繩を張り、其しめ繩のもとに、木にて細工よく陰莖の形を作り、道の方へむけて出しあり。其陰莖甚大にして長七八尺ばかり、ふとさ三四尺周も有べし。あまりけしからぬもの故、所の人に尋れば、是は往古より致し來れる事にて、さいの神と名附

しるしなく、鎖の奇特を失ふと定めたり。誠にかくのごとくなれば、正大の誓約いと有難き鎖なり、聖人の道といへども此上や有べき。實に武道の奥義といふべし。法華經の水火も燒溺する事あたはずと說き、老子の虎豹も牙を觸るゝ事なしと敎へしも、亦是に外ならず。瑣末の技藝の上にても、其妙所に至りては有難きこと多し。されど余其人に交りて親しく聞し事ならねば、誤りしるせし事もあるべきにや。

○丹後の人

奥州津輕の外が濱に在りし頃、所の役人より、丹後の人は居ずやと、頻に吟味せし事あり。いかなるゆゑぞと尋るに、津輕の岩城山の神甚丹後の人を忌嫌ふ、もし忍びても丹後の人此地に入る時は、天氣大に損じて風雨打續き、船の出入無く、津輕領甚難儀に及ぶとなり。余が遊びし頃も打續き風惡しかりければ、丹後の人の入りて居るにやと吟味せしこととぞ。天氣あしければ、いつにても役人よりきびしく吟味して、もし入込居る時は、急に送り出すことなり。丹後の人津輕領の界を出れば、天氣たちまち晴て、風靜に成なり。土俗のいひならはしにて忌嫌ふのみならず、役人よりも每度改むる事な

難儀─原本難義に作る

出來る—原本できると訓ず

おくれを取事—敗らるる事

は狐狸に魅せらるゝ者を治し、其外奇効目を驚す程のこと出來るものなり。其法皆正木の修行のごとく、又熊澤先生の書集られし書にも、敵をうたんとする人の、其家に忍び入らんとすれば、内に寢入りたる當才の小兒啼出して、其父目を覺す。折悪しゝと暫ひかへぬれば、小兒もよく寢入て家内靜なり。又討入らんとすれば小兒啼出す。再三かくのごとくして、つひに討事を得ざりし。是其殺氣の無心の小兒に徹せしなりとぞ。其理の論は格別、先正木の修行に心を用ひられし事を感ずべし。又彼鎖所持の者は、いかなる強敵に逢時にもおくれを取事なく、又いかなる猛獸盜賊といへども、此鎖を所持する人には近附ことあたはずと云へり。是はいかなる事にてかくはいふ事なるやと尋しに、何人にもせよ、正木の門人と成り、鎖を受んと願ふ時、先誓約をすることとぞ。其誓約の辭、君に不忠なるまじ。親に不孝なるまじ。朋友に信を失ふべからず。虚言いふべからず。高慢の心を起すべからず。大酒すべからず。禮義を失ふべからず。公事にあらずして、みだりに血氣にはやり夜行すべからず。猶此外數々の條目ありて長し。是に一ツもそむくことあらば、摩利支尊天の御罰を蒙りて武運に盡べしとなり。初にかくのごとく誓ふことゆゑに、もし此辭にそむく者は、たとへ鎖幾條所持するといへども、其

退る―原本しりぞけると訓ず

なし多くして、信じがたきこともあるに、旅中にて彼門人に親敷交りて、其修行のあらましを聞しに、誠に感ずべく、たふとむべき事なり。此段之進の父祖にや有けん、幼年より劔術に心を寄せ、日夜寢食をわすれて修行せし頃、一夜寢間の襖を鼠の咬音に目覺て、疊をたゝきて追たりしに、鼠迯去れり。暫して少し寢入らんとする頃、また鼠來りて襖を咬む。又目覺て追へば、鼠迯去る。心ゆるみて寢入らんとすれば鼠襖を咬む。かくのごとくする事三四度に及びて、段之進思ふやう、我氣みたずして彼鼠に徹せざればこそ、眠るに從うて鼠襖を咬なりとて、起直り座を正して、一心に氣をあつめ、鼠の方を守りつめて居たりしに、鼠つひに來らず。其後は鼠の音する度に、かくのごとくするに、鼠咬ことあたはず。後にはけたを走る鼠をも、氣を集てにらみぬれば、落る程に成れり。今に至り其門人氣を煉る事を稽古するに、鼠の物を咬にてためす事ありといふ。門人の中にも、二三人はよく鼠を退る程に至れる人ありとなり。いかなる猛獸といへども、先此方の氣を以て制す。敵人といへども立向より先づ氣を以て勝事なりとぞ。此事は奇妙のやうに聞ゆれども、さることもあるべしとおもふ。我學ぶ所の醫術にも壓勝の法といふ事ありて、氣を以て禁ずるに、癪氣を開かしめ、或は腫物を押散らし、又

正木の劍術能諸邪を防ぐ

軍家の上洛に從ひて、正宗も上京の折に、禁裏にて若き人々立つどひ、仙臺侯の國許は人の言葉をかしと聞侍る、國言葉にて歌よみて見せ給とありし時、正宗とりあへず、「東から眞赤な月がずばぬけて、いづこの雲にのたしこむらん」と詠りとぞ。又年老ける後の作に、馬上青年過、世平白髮多、殘軀天所許、不樂是如何と。さして文名もなき大將の詩には感ずべきことなり。さればこそ、此餘風子孫に傳へて、吉村卿と聞えしは、殊に歌仙の譽高し。今の大守左中將重村卿も、和歌の聞えあり。去年の中秋東武にての作とて、「馬車途さりあへぬ世の塵に、曇りて月の高き山の端」と。是等も軒冕の氣象なく、其人となりおもひやられて有難くぞ覺ゆ。誠に御先祖正宗卿文武の大將にて、其餘風今に存せりといふべし。

―さゝずとも誰かは越えむあふ坂の關の戸うづむ夜半のしら雪

軒冕の氣象―高位高官の人の氣風

○正木劒術

正木段之進といへるは美濃國大垣の家中にて、歷々の武士なり。此人劒術の妙を得て、此門人となる者へは鎖を授くることなり。京都抔にも此鎖を傳授したる人多し。其外江戸抔には尤多く、諸國とも門葉多し。此段之進劒術の事に附ては、世間色々の奇妙のは

大垣の家中―大垣の藩士

行著―原本行附に作る此類多し

なかく―却て

つゞらなり―原本つゞら下りに作る曲折多き峻坂

闕雪の和歌

り二月三月の頃までは、此甲田山の絶頂をさして雪の上を眞一文字に登り、磁石を立て、南部地は東南の方と志し、其方角のあたる方をさして、眞直にすべり落る事なりとぞ。常なみの木道を廻り行時は、五十里七十里或は百里にも餘る所を、纔に一日二日の間に行著なり。此外、津輕の外が濱邊、蟹田、蓬田邊よりも今別、三馬屋邊へ、雪中には眞直に山を越えて、甚近くて行るゝ事なり。其餘一里二里五里七里の程ちかき所は、かくのごとく雪の上を越て、近道となる所甚多し。常々は皆雜樹或は熊篠など生ひ茂りて通ひがたき所なり。北地數十丈の雪積り、殊に嚴寒の國なれば、雪皆積るより氷て甚堅く、いかに踏とも落入るといふ事なし。南國の雪の樣子とは大に違ひたるものなり。寒中に彼地に遊ばざれば信じがたき事なり。仙臺御先祖正宗の和歌に、「中々につゞらをりなる道たえて、雪に隣の近き山里」といへるも、兼ては解しがたく覺えしが、是等の事を見聞て、初て此歌を感ぜり。後の正宗卿も戰國の最中に生れ、殊に東方の夷にて、其比に勇猛の名高く、叱咤の威當る者なく、今に至り天下一二の大諸侯と呼るゝ基を開しも、唯兵馬の力のみと思ひしが、やさしき詩歌などにも志有りて、誠に文武兼備豪傑の大將といふべし。集外歌仙抔に出たる闕雪などの和歌は、世の人も知る所なり。又ひと年將

越の所は彼地の人も祕するといへり。常の道を廻りて行ば、富山より松本へ六七十里にも餘れる所を、一日か二日の間に行道なり。此事唯寒中より早春の間にすべき事にて、常の時はなりがたしとぞ。其仔細は、人跡絶たる極深山のことなれば、草木生ひ茂りて行べき道をさへぎり、あるひは斷岸絶壁の所ありて、羽なければ飛がたく、あるひは猛獸出て人を食ふ。數十丈の雪積る時には、斷岸絶壁の所も皆一面の雪と成り、たとへころび落たるにも、雪の上なれば其身損ずる事なし。又大樹喬木といへども皆雪に埋れて、一面の平地のごとし。猛獸又皆逃隱れて穴に住めば、人を害することなし。此ゆゑに、寒氣に堪へ忍びて命全ければ、谷嶺池川の差別なく、眞直に越えらるゝことなり。此事を越中にてくはしく聞しかど、あまりけしからぬ事ゆゑ、唯昔物語のやうに聞流して居たりしが、それよりだんく出羽奥州に入て、見るに、聞くに、立山のざらく越の事初て誠の事と思ひ悟りぬ。津輕領の青森といふ所の南に當りて、甲田山といへる高山あり。其峯參差として指を立てたるがごとくなれば、土俗八ツ甲田といふ。叡山愛宕抔のごとき山を三ツも五ツも重ね上たるがごとき高山なり。津輕領の人勇氣たくましき者、又は罪を得てすがたをかくす時抔、津輕の關所南部の關所ともに拔んとするに、極月よ

仔細—原本子細に作る
參差として—高低相齊しからずして

東遊記 巻之三

佐々成政―織田信長の臣にて後天正十六年正月十四日豊臣秀吉の爲に殺さる享年五十

近習計―原本近習斗に作る

法度の事―禁制の事

○文武の餘風

佐々成政越中を領せし時、敵に圍れ、勢屈して、外に味方の助無れば、我城をだに守り兼し折ふし、きつと思案をめぐらし、濱松は兼てのちなみなれば、みづから行て救を求んと欲すれども、四方皆敵に圍れて出べき道なく、折節極月二十七日の事なれば、夏の日だにも雪消ぬ越中立山、麓より峯まで數丈の雪封じて、禽獸さへ通ひ得ざる時なれば、敵も油斷して立山の方はかこまず。成政纔の近習計を召具し、忍びやかに城を出て、雪深く埋みたる立山の絶頂へ、雪の上を眞一文字にかけ登り、又絶頂より南をさし、谷嶺をいとはず雪の上をすべり落ければ、信州松本へ落著たり。それより濱松に越えて、恙なく救を得たりとなり。雪中に立山を眞直に越たる艱難、中々言葉につくすべからず。其越たる跡を、成政がざら〳〵越といひて、唯今にも、勇氣の者は、越中富山より信州松本へ、一二日が間に越る事なり。されど是は法度の事なりとて、其ざら〳〵

石の寶殿―印南郡龍山の西北なる丘腹に在り社殿の形したる石也

り。是は明神の鹽をやき給ひける時、其鹽を背負たりし牛なりしが、後に石に化したるなりと云傳ふ。然れども是は尋常の物に見えて、奇とするにたらず。唯釜は誠に上古の舊物にして、神物ともいふべし。播州の石の寶殿と此釜は實に奇物なり。

潮水ゆゑ—原本鹽水ゆゑに作る
汲替る—原本くみかへると訓ず
用ふる—原本用ゆるに作る、今一定する爲にかく改たり

ひ廻して、其中に釜四ッを竝べたり。是を見るに、誠に希代の神物なり。釜の内皆各潮水を貯ふ。其潮の色赤きあり、青きあり、紫あり、四ッの釜皆潮水の色を異にす。潮水ゆゑに、此釜の鐵氣出て水の色を變ずるにや。毎年七月十日早曉、社人齋戒沐浴して此潮を汲替る事なり。此釜は神物ゆゑに、何事にもせよ、此國に變異ある時は、此釜の中の水色たちまちに變じて奇色をあらはす。往古より毎々しるしありといふ。釜の大さわたり四尺餘、深さ纔に貳三寸、或は四五寸に不過、皆少しづゝの大小淺深ありて、四ッともに同じからず。皆甚淺くして、足無く、鍔無く、其形たとへば家々常に用ふる所の丸盆のごとし。全體鐵にて作りたるものにて、其厚さ三寸許もあり、不相應に厚きものなり。實に神代の舊物にして、五百年千年の物にはあらず。傳へ云、鹽竈明神上古の世此地に降臨まし〳〵て、初て此釜を鑄給ひ、海潮を煮て鹽を取ことを人民に敎給ふ。今に到るまで天下鹽を食ふ事を得て、明神の德を蒙る。今に其時の釜の殘れるなりと。誠にさもありぬべく見ゆるものなり。されど釜甚厚くして、中々物を煮るの用に立べくもあらず。上古は世富るゆゑに、薪澤山に、人民閑暇なれば、是程の物も用に立けることにや、いぶかし。又釜殿の三四軒程東の町家の裏に、牛石とて牛の臥たるごとき石あ

宰府天神―太宰府の天滿天神

火袋―油皿を入れ置くところ

繁花の地にて、家數も千軒に餘り、遊女などもありて、仙臺邊の人の遊興の場所なり。海に添ふ地ゆゑ、船も入りて殊に賑なり。鹽竈明神の宮居甚廣大美麗にして、去年京を出しよりいまだ見ざる所なり。一國の人甚尊信して、月參或は講參抔とて、九州の人の宰府の天神に詣るがごとし。其ゆゑに、旅館なども大にして又多し。酒魚物に至るまで富り。此社の門を入りて、左の方に鐵の燈籠あり。網の蓋ありて、其上に九輪のごときものあり。塔に似たり。臺も鐵にて作れり。此臺と火袋の所鐵にて、眞の古物と見ゆ。蓋より以上は新物なり。拟火袋の前面の上に鑄附たる和泉三郎忠衡敬白の文字あり。秀衡鎭守府將軍たりし時、其子の三郎寄附せしと見えたり。其時の俤見えて、むかし忍ばしくおもはる。此燈籠の前に、杉板に書附たる假名文章、此燈籠の事をしるせるを懸たり。召具せし養軒讀て、拟もよき文章なり、東北國にて此頃見及ざる事なりといひて、大に感ず。いかなることをか書ると讀て見るに、芭蕉翁の奥の細道といへる書に出たる、此燈籠の事書る文章なり。養軒は和文の事も知らず、俳諧の道はさらなり、芭蕉といへる名をだに覺えぬ程の者なるに、よきものは誰が目にもよきと見ゆ。それより町に下りて、釜殿に到る。本社とは四五町をへだてたり。神代の釜とて、玉垣ゆ

たる度合をいふ

朝六ッ比―午前六時頃

置れし鎖なりといへり。誠に此鎖容易の事にあらじ。又奥州南部の城下にも舟橋あり。是も大なれども越中の船橋に不及。舟橋のある所天下に右三ヶ所なり。其内越中を第一とすべし。其外、常の橋の長きものは、世人のよく知る所の東海道の岡崎の矢矧の橋なり。其長貳百八間ありと云。是を天下第一とす。橋の巧をつくして奇妙なるは、周防の岩國の錦帶橋なり。唐畫の如くなるは、長崎の目鏡橋なり。危きは甲州の猿橋、高くして奇なるは越中の相本の橋なり。其外、邊國山中に懸渡せる所の小橋には、朝六ッの橋、かづら橋など、奇妙の橋少からず。朝六ッの橋は飛驒國の山川にかけ渡せる石橋にて、いかなる暗夜といへども、其橋の上に到れば少し明らかになりて、人顏も朧に見え、たとへば朝六ッ比のあかりのごとし。故に、土俗むかしより朝六ッの橋と名附くとかや。物知れる人のいひしは、此橋の下には名玉あるゆゑなるべしと、誠にさもありぬべく覺ゆ。

○鹽竈

奥州仙臺の東北四五里に、鹽竈といふ町あり。鹽竈明神を祭る地故、其所の名とす。甚

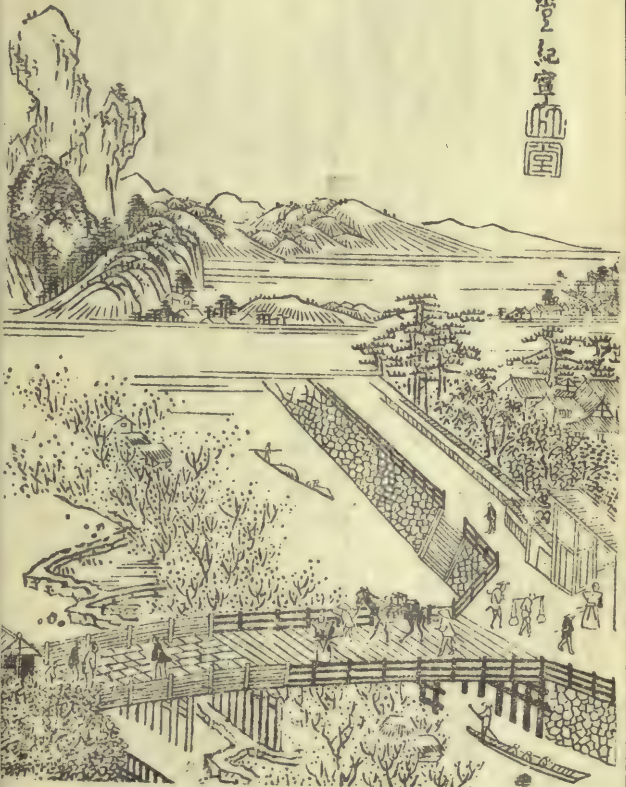
常體の―普通一般の

橋杙―原本橋杭に作る

舟の足にせかれて―舟足の爲めに水堰き止められてと也、舟の足とは舟底の水中に沒し

海へ落る川ゆゑなり。かくのごとく、毎度洪水あり、其上に急流なれば、常體の橋を懸る事叶ひがたき川なり。されば舟橋を懸渡すことなり。先東西の岸に大なる柱を建て、その柱より柱へ大なる鎖を二筋引渡し、其鎖に舟を繋ぎ、舟より舟に板を渡せり。其舟の數甚多くして、百餘艘に及べり。川幅の廣き事おもひやるべし。其鎖のふとく丈夫なること、誠に目を驚せり。鎖の眞中二所程繋ぎ合せし所ありて、其所に大なる錠をおろせり。洪水の時切る所なりと云。兩岸の柱のふときこと大佛殿の柱よりも大なり。追々にひかへの柱ありて、丈夫に構へたり。鎖につなぎて舟を浮めたることゆゑに、水かさ増るといへども、其舟次第に浮上りて危き事なく、橋杙なきゆゑ橋の損ずることなし。然れども、誠に格別の大洪水の時は、此舟の足にせかれて、兩方の町家へ川水溢れのほるゆゑに、やむことなくて此鎖の中程を切ることとなり。其舟左右に分れて水落るゆゑ、水かさ減ずることとなり。然れども、此鎖を切る時は、跡にてまた鎖を繼事莫大の費用あることゆゑに、格別の洪水にて、町家の溺るゝ程の時ならでは切る事なし。此舟橋も亦一奇觀なり。もろこし黄河などにも、晉の時分、舟橋を懸られしといふ事聞及べり。いかなる大河急流なりとも用ひらるべき橋なり。越前福井の舟橋の鎖は、柴田勝家の造り

越前福井九十九橋の圖

竹堂紀寫

○九十九橋

越前國福井の町の眞中に大なる川流る。此川にかけ渡せる橋をつくも橋といふ、九十九橋と書り。其大さ三條の橋程も有りて、半までは石橋なり。石橋の大なるもの、天下是に勝るものなし。半より木の橋なり。是は常なみの橋なり。石と木を續合せたる橋は珍敷橋なり。いかなる故と尋に、皆石橋となす時は、大洪水の時全體ともに崩れて其再興大かたならず、半を木の橋にせる事は、大洪水の時木の所ばかり落て、水淀まざるゆゑに、石の所は恙なくして、橋の全體損ずることなし。故に跡の造作心易しとなり。大なる橋は、何方の橋もかくなしたきものなり。橋を普請の時も、石の所は千歳不朽なれば、唯木の所半分の手間にて濟事なれば、別して心やすかるべし。又福井の東に舟橋あり。越前にては名高けれども、是は越中の神通川に渡せるものに不及。越中の神通川も富山の城下の町の眞中を流る。是又甚大河にして、東海道の富士川抔に似たり。水上遠くして然も山深く、北國のことなれば、毎春三四月の頃に到れば雪解の水殊の外に増來りて、例年他方の洪水のごとし。常に南風に水增り、北風に水減ず。是は南より北の

いろ〳〵いなみける—様々に辭を設けて斷りたりと也

細き土地なりき。

○米山

北地の人、越後を二ツに分ち、上越後下越後といふ。上越後とは高田領糸魚川領等をいふ。其東に米山といふ高山ありて、其西の麓に關所あり。其所を鉢崎と云。又柹崎といふ所ありて、鉢崎に並べり。此柹崎は、むかし親鸞上人此所に行暮て宿を乞ひ給ひしに、宿のあるじ心悪敷ものにて、いろ〳〵いなみけるとぞ。是を柹崎のしぶ〳〵宿といひて、其家の在りし跡今に殘れり。今にてさへ北地邊境中國には似もよらざるを、其頃はさぞかしと、思ひやらる。扨米山といふは登り下りにて三里の山にて、此あたり第一の高山なり。誠に越後を二ツにわけたる山なり。此山高しといへども、奇妙の山にて、山上七八分までも山中に田作して水かゝりよしとなり。故に米山と名附ると云。余は唯通り道一筋の事にて、山中に入らざれば委しきことは見及ざりしかど、高山にて米穀の生ずるは珍敷事なり。西國にては肥前の雲仙嶽、三里登りて、絶頂に水田有りて、農家あり。其外はいまだ聞ざることなり。誠に是等をや寶山といふべき。

せしまでは覺え居しが、其跡は唯夢中のごとくにて、海に沈し事もしらざりしとぞ。誠に不思議なるは、初の火事のごとく赤くみえしことなり。それゆゑに、一驛の者ども殘らず歸り集りて死失せしなり。もし此事無くば、男子たる者は大かた釣に出たりしとなれば、活殘るべきに、一ツ所に集めて後崩れたりしは、誠に因果とやいふべき。あはれなることなりと語れり。余其後人に聞に、大地震すべき地は、遠方より見れば赤氣立のぼりて火事のごとくなるものなりと云へり。松前の津波の時、雲中に佛神飛行し給ひしなんどいふことも、此たぐひなるべしや。

此名立の驛は、古人佐渡へ渡り給ひし時一宿し給ひし所なりとぞ。神主竹内太夫といふ者の家に古き短册を所持せりといふ。其歌に、

都をばさすらへ出て、今宵しもうきに名立の月を見る哉。

是は菊亭大納言爲兼卿、佐渡配流の時、此驛にてよめる和歌なりといふ。或説に順德院の御製とも云。余は其短册みざりしかばいづれともしらず。されども、歌の體、臣下たる人の作にもやと思はる。又名立の次に長濱といふ濱あり。「黃昏に往來の人の跡絕えて、道はかどらぬ越の長濱」などいへる古歌もありと聞り。誠に此あたりは都遠く、よろづ心

地方ー陸地の方

も草木無く、眞白にして壁のごとく立り。余も此度下名立に一宿して所の人に其有りし事どもを尋るに、皆々舌をふるはしていへるは、名立の驛は海邊の事なれば、惣じて漁獵を家業とするに、其夜は風靜にして天氣殊によろしくありしかば、一驛の者ども、夕暮より船を催して、鱈鰈の類を釣に出たり。鰈の類は沖遠くて釣ることなれば、名立を離るゝ事八里も十里も出て、皆々釣り居たるに、ふと地方の空を顧れば、名立の方角と見えて、一面に赤くなり、夥敷火事と見ゆ。皆々大に驚き、すはや我家の燒うせぬらん。一刻も早く歸るべしといふより、各我一と船を早めて家に歸りたるに、陸には何のかはりたることもなし。此近きあたりに火事ありしやと問へど、さらに其事なしといふに、みな〳〵あやしみながら、まづ〳〵目出たしなどいひつゝ、圍爐裏の側に茶などのみて居たりしに、時刻はやう〳〵夜半過る頃なりしが、いづくともなく唯一ッ大なる鐵砲を打たるごとく音聞えしに、其跡はいかなりしや、しるものなし。其時うしろの山二ッにわれて、海に沈しとぞおもはる。上名立の家は一軒も殘らず、老少男女牛馬鷄犬までも海中のみくづとなりしに、其中に唯一人、ある家の女房、木の枝にかゝりながら、波の上に浮みて命たすかりぬ。ありしこと共、皆此女の物語にて、鐵砲のごとき音

白龍も云々
—貴人も微行する時は賤者の爲に辱めらるゝ
譬、事は說苑に出づ

そのとも知らで、樣々のくりこと聞たくもあらずとあらゝかにいふにぞ、さないひそ、あこも我もかゝる姿にて旅行するなれば、人皆乞食順禮と思ふは尤左もあるべき事、あやしむにたらず。白龍も魚服すれば豫且があみにかゝり、虎豹犬羊のつくり皮誰かよく是を辨ぜん。彼男深切に思へばこそ、かくもいふなれ。其言葉のくどきこと、鄙びたるは、其人がら尤左も有りぬべし。咎るに足らず。是よく人情世態を知るの學問なりといひ諫てやみぬ。かくて富山に到れば、折しも頻に雪降て、前路もふさがりぬれば、しばしといひて逗留せしに、逢迎の人多くなり、診視を乞ふ人にいとまなく、客舍晝夜群集せしに、一夕茶話の席、かの男の事語り出たるに、富山の人も手を打て笑ひぬ。

○名立崩

越後國糸魚川と直江津との間に、名立といふ驛あり。上名立下名立と二ツに分れ、家數も多く、家建も大にして、此邊にては繁昌の所なり。上下ともに南に山を負ひて、北海に臨たる地なり。然るに、今年より三十七年以前に、上名立のうしろの山二ツにわかれて海中に崩れ入り、一驛の人馬鷄犬ことぐく海底に沒入す。其われたる山の跡、今に

にては皆にても作る
品よくば—様子よくば
難儀—原本難義に作る
そこたち—其許達、あなた方
しんばう—原本何れもしんぼうに作る

従ひ、一里許も行程に、彼男いふやう、旅の人はいづくよりいづくへ越し給ふや、又何の用にか出給ふ。余答へて、我々は都がたの醫者なるが、富山の方へ志てまかるなりといへば、富山は此所より程近し、彼地に逗留もし給はんやと問にぞ、品よくば、しばし足をも留べしと答るに、彼男いふ、此さむ空にさぞ難儀に思ひ給ふべし。されど人はしんばうこそ肝要なり。そこたちも深くあんじ入らずとも、富山に足を留め給へ。富山は繁昌の地なれば、程なく有り附も出來ぬべし。過し年、玄格といへる醫者、都方より富山へ來り給ひしが、此人しんばうも強く、醫者も上手にて、其家業大に行れ、其上、近き頃は、町醫ながら五人扶持を上より賜はり、目ざましき繁昌なり。是といふもしんばうのよきゆゑなり。そこたちも玄格老程にこそなくとも、などか身の片附出來ぬ事やあるべき。必色々の所へさまよひありかずとも、富山にてしんばうし給へと、くり返し〳〵いふ。扨もしんせつなる御人かな。いかにも敎のごとく守るべしといひもて行に、程なく小杉に到りぬ。水茶屋に少し休らふに、彼男も同じく休居て、彼道すがらいひしことを、又くりかへし〳〵いふ。其顔色言葉もおほへいなれば、門人養軒、初より聞ぬ顔にて居たりしが、あまりに度々にこらへかねて、此男は慮外ものよ。いかなるも

く脚半と改む

ならひ―原本ならいに作る

山岡頭巾―なぐそ頭巾からむし頭巾などともいふ苧屑にて製る北國

さしくべたるに、火のあつきを覺えず。やゝ暫して漸々に氷解け、水滴り出て、はじめて足袋草鞋ともにとくべし。わらぢの氷り附て、石の如くになり、とけざる事は毎日かくの如し。北地にては珍敷ことにはあらず。又餘に氷りたる足を、急に熱湯抔に浸せば、血のめぐり損じて、足こと〴〵く腐るといへり。唯初はぬる湯にて洗ひ、漸々にあつき湯にて浸すをよしとするなり。

○小杉の感

越中の小杉といふ所を過しは十二月廿日頃にて、北國のならひ、降り積し雪に行べき途さへ覺束なきに、我輩二人古びたる雨合羽に、同敷よごれ破れたる脚半打かけなどして、破れ笠打かうむり、持もなれぬ荷物しどけ無く背負ひ、手足こゞえ歩みかねたるさま、あはれにも、見苦しくも、人目には全く乞食順禮抔とこそみえめ。人里遠く、行先おぼつかなき折しも、此邊の百姓と見えて、四十許なる男紺の木綿のわた入の裾高くかゝげ、上に簑を著し、山岡頭巾にくさげに打かぶりて、行過るあるを呼かけ、小杉への道をしへてたべといふに、我も其方へ行者なり、跡に附て來り給へと、足早に行跡に

脚半—原本脚半脚伴一定せず今悉

栖事ならず、唯庭にのみうづくまり居るなり。是も亦珍敷事といふべし。すべていかなる寒國といへども、指の落るといふは足の指の事なり。手の指の落るといふ事はあらず。我輩南國に生れて、かゝる寒氣は聞も及ばぬことなるを、明け暮れ雪の中を歩行するにて、幾度か、かくてぞ指も落べしとおもひしが、不思議に春に到りても恙無りしは、神明の冥助といふべし。足にははゞきとて菅にて編たるすね當のごときものを附け、足先は足袋をはき、其上に爪掛とて藁にて指先を厚く包みて、其上に草鞋をはく事なり。身には幾重も合羽を著し、頭には頭巾の上に深き笠をきる。頭巾は冬より春に到り一日もはなつ事なし。雪深く道の上三四尺以上も積りたる時は、爪先濡れずして反て凌やすし。雪纔に四五寸許の時、雨風交りて、道路泥田のごとくなる時は、脛までも濡れて、其爪先たとへ幾重包みても雪水しみ透りて、其つめたさ頭迄も徹り、唯今も早足首は切れ失ぬべくぞ覺ゆる。横さまに降る雪吹にて、頭巾の間より眉ぬれて、其露眉毛に氷り附、眉毛の先白くツラヽの如く下ることあり。夕ごとに、宿屋に著ても、草鞋脚半其儘には解けず。彼地の者、其足圍爐裏にくべ給へといふにぞ、初の頃はあやしくをかしかりしかど、餘に脚半のとけざるゆゑに、敎のごとくに任せて、ゐろりに足

俳人にて笈埃隨筆の著者也

北溟―北海

みえたり―原本見え見へ一定せず

脱疽―手足の末端次第に腐れゆく病氣

しに、海の底より潮巻上り來て、川上遙にゆり上り、懸り居し船など、大に驚き大變なりと騒ぎあひ、海嘯といふものならんや杯いひたると語りし。其年月此頃に當れり。すべて北海邊は、此時皆何方も海の底大に潮湧返りて騒動せしと、何れの國にてもいひしなり。彼松前の波先の響北溟一面に動きしとみえたり。誠に希代の珍事なりき。又後世の心得にもなるべき事なり。

○寒氣指を落す

北國の人餘に寒氣をこらへ雪を侵せば、血凍り、氣のめぐり絶えて、春に至り少し暖氣を催す比、足の指皆紫色に變じて、やがて腐り落るなり。いかに療治を加れども治しがたきものなり。余も此病人を度々見たりしかども、やはり脱疽の種類なるべし。いかに寒氣甚しければとて、指の落る事やあらんと思ひすてゝ居たりしが、北地に嚴寒に遊びて、其まことなる事を知る。人のみならず、畜類までも指の落る事あり。出羽國秋田領の内、大葛村の鷄、ひと年寒氣強かりし冬、庭に追放し置しに、其翌春に到り、鷄の足の指こと〴〵く腐り落ぬ。鷄の命は恙なくて今に存在すれども、足の指無ければ枝に

塘雨―百井塘雨或は五井塘雨ともいひ京都の

犀象のたぐひに打乘り、白き裝束なるもあり。赤き、青き、色々の出立にて、其姿も亦大なるもあり、小きもあり。異類異形の佛神空中にみち〳〵て、東西に飛行し給ふ。我我も皆外へ出て、毎日々々いと有難くをがみたり。不思議なる事にて、まのあたり拜み奉ることよと、四五日が程もいひくらすうちに、ある夕暮沖の方を見やりたるに、眞白にして雪の山のごときもの遙に見ゆ。あれ見よ又ふしぎなるものの海中に出來たれといふうちに、だん〳〵に近く寄り來りて、近く見えし島山の上を打越して來るを見るに、大浪の打來るなり。すは津波こそ、はや迯よと、老若男女我さきにと迯迷ひしかど、しばしが間に打寄て、民屋田畑草木禽獸まで、少しも殘らず海底のみくづと成れば、生殘る人民、海邊の村里には一人もなし。我々も遙に見しに、其浪數千里の沖より來りて、其高きこと雲のごとく、磯近き迄は、浪といふ事思ひもよらざりしなり。されど唯一寄せにて直に引たり。いかなるゆゑといふ事しる人なし。扨こそ初に神々の雲中を飛行し給ひけるは、此大變ある事をしろしめして、此地を迯去り給ひしなるべしといひ合て、恐れ侍りぬと語りぬ。其座にありける四五十以上の老人は、皆まのあたり見覺えて、口口に語りぬ。此事にて思ひ合すれば、我友塘雨諸國行脚の時、石見の國にて海邊を通り

四方山―四方八方、山は充字也

上方―原本上み方に作る

○松前の津波

奥州津輕領三馬屋といへる所は、松前渡海の湊にて、其間纔に七里を隔てたり。兩方の山々の鼻相臨める所は、三四里許にても達すべし。此三馬屋に逗留せし頃、一夜此家の近きあたりの老人來りぬれば、家内の祖父祖母抔打集り、圍爐裏にまと居して、四方山の物語せしに、彼者共語しは、扨も此二三十年已前松前の津波程おそろしかりしことはあらず。されど佛神はあらかじめよくしろしめして、其告もありしかど、おろかなる人間、其時まで露しらずして、海邊の者皆死うせしなり。定て上方にても聞及び給ひてんと云。膝すり寄りて、いかなる事にて有りしやと問ふに、其頃風も靜に、雨も遠かりしが、唯何となく空の氣色打くもりたるやうなりしに、夜々折々光り物して、東西に虛空を飛行するものあり。漸々に甚敷、其四五日前に到れば、白晝にもいろ〳〵の神々虛空を飛行し給ふ。衣冠にて馬上に見ゆるもあり。或は龍に乘り、雲に乘り、或は

士となりて、形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも此人々のごとく歸りなばなど泣沈みぬるを、兄弟の妻女其心根を推量し、我が夫の甲冑を著し、長刀を脇ばさみ、いさましげに出立、唯今兄弟凱陣せしと、其俤を學び老母に見せ、其心をなぐさめしとぞ。其頃の人も、二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや、其姿を木像に刻みて殘し置しとなり。嗚呼兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。其人につれそひし婦人又希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり。余此物語を聞、此像を拜するに、そゞろに落淚せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かくあれはてたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、彩色も落失せ、僧だに守らで、香花を供する人も無く、年月に荒れ行き、つひには跡かたもなくなりはて、是等の事をも語り傳ふる人もなくならんを、誰ありてあはれといひて、一錢の參物をだに供する人も無きは、世には忠孝に感ずる人のすくなきにや。あまりにあはれに覺えしかば、委敷書附歸れり。

學び―眞似て

參物―賽物

縁—原本椽に作る椽は音でん訓たろきにてえんの充字とすべからざれば改めたる也
赴き—原本趣きに作る

○甲胄堂

奥州白石の城下より壹里半南に、才川といふ驛あり。此才川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も不住、明き寺となり、本尊だに何方へ取納しにや、寺には見えず。庭は草深く、誠に狐梟のすみかといふも餘あり。此寺中に又一ッの小堂あり、俗に甲胄堂といふ。堂の書附には故將堂とあり。大さ纔に二間四方許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此小堂の破損はいふまでもなし。やうくに縁にあがり見るに、内に佛とても無、唯婦人の甲胄して長刀を持たる木像二ッを安置せり。いかなる人の像にやと尋るに、佐藤次信忠信二人の妻なりとかや。其昔、義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞、秀衡にいとま乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我子の次信忠信を御供に出せり。其後義經京都へ攻登り、平家を追落し、一の谷八島などにてさばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、はじめつき從ひて出たりし龜井片岡など皆無事にて歸國せしに、次信は八島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命をおとし、兄弟二人とも他國の

の背の受筒に差したる小旗也

さゝいが嶽—さゝえが嶽の訛也

七八合目—麓より七八分目

て〻敦賀の町と向ひ合せたれば、南おもての地にて、風景殊に勝れ、此あたりの人の遊興の所なり。宮は仲哀天皇を祭れり。大社なり。遊行上人など、此國を經歷の時も、必此社へ詣でらる〻事なりとて、遊行上人代々奉納の和歌など有り。此宮のうしろに高き山あり。凡京の比叡ばかりにも見ゆ。さゞいが嶽と名附く。此山に登ること二十八町にして、言葉石の下に到る。三十年許前までは知れる人も無かりしが、ふと木をこるもの〻己が言葉のひゞくを怪しめるより、こ〻かしこいひ傳へて、敦賀よりも人々登り見る事に成り、今にては若狹侯も遊覧の所となりたり。石の高さ十三間、横二十間といふ。山の七八合目とも思ふ所に、南おもてに有り。甚大なるものなり。其間十五六間も隔て〻、此石に向ひ呼に、言葉の應ずること、石の物いふかと怪しまる。人衆すくなくて來る時は、何となくものすごしといふ。かやうの石、伊勢國にも有り。彼地にては鸚鵡石と名附く。關東又は九州邊にては聞も及ばず。其日は天氣も晴れ、殊に親しき友人大勢にて、杯酒のたすけもあれば、一しほの興にぞ有ける。すべて此邊は勝地多く、此山の北東の裾を色の濱といふ。西行芭蕉なども遊べる地にて、ますほ貝名高し。今も沙子にまじりて有り。むかしにならひ、人々歌などよみ、松ともして旅宿に歸りぬ。

に、もし月輪を打はづす時は、たとへ鐵砲の玉熊の身を貫くといへども、忽ち飛かゝりて、つかみ殺すなり。鎗は、獵者其鎗に取附居る故に、飛かゝる事あたはず、されば命を失ふこと無しとなり。唯手負の熊には、中々近附がたきものなり。手負ざる間は、おだやかなるものゆゑ、近附こと甚自由なりと語れり。誠に漁者は水に勇に、獵師は山に勇あり。盗賊は又利欲に勇あり。皆其習ふ所に勇ありと思はる。

○言葉石

予が越前國敦賀にありし頃は、十月の初なりしが、例よりは暖かにして、北國ながらも、小春のしるしとて、打續き天氣うらゝかなれば、彼地の人々にいざなはれ、其地にて、人の言葉石といふを見にまかりぬ。敦賀の町を離れ、西の方に出れば、きれいなる松原あり。是を一夜松原といふ。むかし神功皇后の御時、唐土より賊船多く襲ひ來りしに、此海濱に、此松一夜の間に生ひ出て、梢に鷺の多くむれ集りしを、敵の目には夥しき軍兵の旗差物と見えて、驚き恐れ、逃去れりといひ傳ふ。誠に松の木立より、眞沙の白きさま、北國には珍敷土地なり。夫より五十町許にて、常宮といふあり。入海を隔

小春―陰暦十月の異稱

旗差物―旗及び指物、指物は昔鎧

加越熊突の圖

月輪—熊の喉にある三日月形の白毛

に得歸りし扶桑木に似て、彼木にも劣らずぞ覺ゆ。

○熊突

加賀越中は、世に名高き熊多き所なり。熊膽なども此邊より出るを極上の品と定む。余越中に在りし時、飛驒境の山中の人に出會て、熊を取ることを聞に、其獵者も亦勇猛なり。冬に到り、雪降積る時は、熊皆穴に入り住む。其時獵者ども、薪木を多く持行て、熊の住る穴の中へ投入るゝに、熊怒りて其薪をうしろの方へ押やる程に、穴の奥の方次第につまりて、其熊段々に穴の口の方へ出、つひには穴皆つまりて、熊穴の外へ出る時、長さ一間許の手鎗を持て、月輪のあたりをねらひて突くなり。熊突れながら、其鎗をかなぐり捨んとして引程に、彌鎗深く身を貫く。獵者は始終其鎗をはなさず取附居て、加勢の獵者を待つ。加勢の獵者走りかゝりて、まさかりを以て、熊の頭を打て取ることなり。もし鎗を突損じぬれば、熊の掌にて鎗の穗先を握るに、丈夫なる鎗の身三ツ四ツに折れ碎く。左あれば、獵者もつかみ殺さるゝとなり。余是を聞て、かく手詰の危き働をせんよりは、など鐵砲にてはうたざるといへば、鐵砲は猶あやふしといふ。いかにといふ

桂川―山城にあり
杙―原本杭に作る
腰折―拙劣なる和歌

り。桂川に似たり。仙臺に逗留せし時、名取川近しと聞けば、埋木やあると尋求しに、方々より持來り贈られしかど、皆松木と見えて、纔に百年二百年のものなり。いと新敷、岸根に打し杙抔のやうなるものゝ根にもやとおもはる。古歌などによみ置し埋木は、かゝるものにはあらじと、猶あなたこなた尋探りしに、奥田直輔といへる人あり、家富て、文字に長じ、且仁慈の心深ければ、多くの金銀を出して、井手の川などを掘り、民を賑し、又は堤を築き、橋を渡しなど、いろ〳〵人民の助けになることのみをなして、鹽竈邊などには、新渠の碑など嚴然として、皆人の知る所なり。此奥田氏、名取川の堤を治めて田作の水難を防し時、川の底より地深く掘出せし木あり。予に親しかりければ、携へ來りて、是ぞ名取川の埋木てふものにてもや、君に贈るなりとて出せるを見るに、實に前に見しものには異にして、數千年を經にける木と見え、其性は何ともしれねども、色黑く、是を磨けば光澤有りて、唐木抔のやうにぞ見ゆ。石炭海松などとは格別にして、木理あざやかにして、誠に是やむかしよりいひ傳へぬる埋木なるべしとおもはる。いと珍敷、嬉しくて、例の腰折などよみて謝しつゝ、嚢に取納めて持歸り、手づから小き香箱に造りて、常に左右に置き、昔の事思ひ出て、我家の寶の一ッとせり。過し西遊の時

洞に及ぶ時、小船に乘り替て、洞穴の中へ船をさし入る。半道許にして、自然と洞の中明らかになり、漸々に潮淺くなり、船すゝみがたき時、船より下りて、猶奧深く入るに、次第に洞穴廣く、細かなる沙清らかにして、後には潮も到らず、陸地と成り、遙向うを見れば、天地明らかにして、遠山連り、樹木うるはしく、人家のごときも見え渡る。其景色別に一世界と覺ゆ。此地に遊ぶ人は、猶奧深く尋到り見んと心ざし行事なれど、此邊まで入りぬれば、さすがに行先もおぼつかなく、歸路を失ん事も恐ろしく、又乘捨置たりし船をも思ふがゆゑに、かの洞の廣くなるあたりより先へは、つひに到り見る人なく、足早に歸り出るとなり。此邊の人の考には、其見え渡る遠山も、人家も、別の世界にはあらず、男鹿山の內か、又は秋田邊なるべしと。さも有りなん。されど兎角山の姿此國にて見馴ざるやうにおもはるれば、所謂仙境にてもあらんといふ。我遊びしは八月の頃ならねば、此洞中へ入り見ざりし、いと殘多し。

○埋木

仙臺のこなた一里半に、名取川あり。名取郡を流るゝゆゑ、名取川と名附。甚大河な

出羽國秋田の城下より北東に、海中へさし出たる地あり。遠く望めば島山のごとし。是を男鹿山といふ。堺の住吉の浦より淡路島を望むがごとし。此地は、同じ出羽國にても、格別の地にて、種々產物も多く出る中に、材木の內殊更杉の木多く、世上に秋田杉といふは、此山より出るをいふ。風景も他に異にして、其中に蔦雀の岩屋などの奇は、世上の人も知る所なり。此男鹿山の中に、赤神山といふあり。此山上に祭る所の神五座、內一ッは漢の武帝を祭り、一ッは蘇武を祭る。外の三社は我邦の神なりと云。此地の海向ひは匈奴の地にして、蘇武が牧羊は此男鹿山と云。いつの頃よりいひ來ることにや。されど珍らしき事なり。附會の說ながら、此邊の風土氣候にては、蘇武が事もさもありなんといふやうに思はる。夏の頃は、秋田湊野代邊の人、船に乘り、島廻とて、此山の麓をまはり、色々の奇境を探る事なりとぞ。されど、少しにても風波あれば、至り難き所なり。又庄內と秋田領の境にも、女鹿といふ所もあり。男鹿と相隔たる事二三十里なり。男鹿女鹿といふことも、由來あることのよし、彼國の人語れり。扨此男鹿山の內にて、第一の奇境といふは、蔦雀の岩屋なり。山の麓海面に近き所に洞あり。八月の頃、海潮高き折を見合せ行事なり。潮洞穴に及ばざる時は、絕壁にて至りがたし。潮高く此

堺—和泉國泉北郡に在り

蔦雀の岩屋—男鹿山の西崖に在り

蘇武が牧羊云々—蘇武漢の天漢の初匈奴に使して留められ匈奴の爲に北海に徙されて羝を牧せしことあるをいふ

道はかどらぬ―たそがれにゆききの人の跡たえて道はかどらぬ越の長濱、讀人不知

北風動地―唐の詩人岑参の白雪歌送武判官歸といふ七言古に北風撼地白艸折云々とあるなどをいふにや

は常に沙に埋れ、すゝめども唯退くやうにのみ思はれ、道はかどらぬ越の長濱とよみしもおもひ出られぬ。殊に九月の頃より三月末までは、日として風吹ざることもなく、沙塵常に天を覆ふ。唐詩にいへる、北風動地とはかゝる景色ならん。其吹ちらす沙、風の吹廻によりて所々に吹たまり、或は堤のごとく、塚のごとく、日々に其形變ず。其上、北地の草木は、皆秋の末より春の末までは青き葉は無く、渺々たる沙漠に、白草の風に動く體、かの塞外沙漠の事作れる詩にいふ所に少しも違はず。げに北極地を出ること四十度にあまりて、塞北の地にひとしければ、かゝる風色の相似たるも怪しむにたらず。日本のうちに、かゝる所ありとは聞も及ざりしが、昔より北地に遊ぶ人は、皆夏ばかりなれば、草木も青み渡り、風も南風に變り、海づらものどかなれば、恐ろしき名にも立ざる事と覺ゆ。我北地に至りしは九月より三月の頃なれば、途中にて、旅人には絶て逢事なかりし。我旅行は醫術修行の爲なれば、格別の事なり、唯名所をのみ探らんとの心にて行人は、必ず四月以後に行べき國なり。

○蘇武社

飛散る事おびたゞし。初の程は彼印をたよりとし、又は人馬の足跡あるひは草鞋馬の沓などのある方へ道をいそぎしが、次第に風吹つのりて、沙を吹起すにぞ、天地も眞黒に成り、目當の柱の見えざるのみか、我うしろに從ひ來る養軒さへ見えわかねば、互に聲を合せ、手を携へて行程に、後には前後をだにわきまへず。もとより路を尋ん人も無く、心もそらにまどひて、せんかたなきまゝ、能々思ふに、かくみだりに行迷ひなば、いかなる所にか迷ひ到らんもはかりがたし。されば心をしづめ、沙上に安坐して、いつまでなりとも風沙のをさまるまで、此所を動かじなどいひつれども、又とやかくするうち夜にも入りなばいかゞせんとおもひめぐらせば、心安からず。とやせん、かくやあらんとたゝずみ居たるに、午過る頃より小雨降出たり。雨のしめりに沙しづまり、印の柱も見え出たり。嬉しき事限り無し。されども風猶やまざれば、笠も何方へか吹散りぬ。雨は横さまにふり、合羽は頭より上に舞上り、惣身ひたぬれにぬれて、其うくつらき事いひもつくすべからず。されど沙しづまりしゆゑ、路にも迷はず、唯急ぎにいそぐ程に、申の刻ばかりに吹浦へ著ぬ。惣じて此所のみに限らず、越後出羽の二箇國は、街道北海にほとりして、百六七十里が間は、一日も沙原を通らざることなし。歩行するにも足首迄

申の刻—午後四時

吹浦砂磧の圖

應瑞

書し書なり。作者は仙臺の人にて、佐久間洞巖とて、享保時分の人也。名を義和、字を子巖、太白山人と號し、徂徠などの知音なり。其子は今の仙臺の儒官にて、姓を新井と改め、彥四郎と稱す。名を義質、字を子敬、滄洲と號し、齡既に七十年なり。右の書、寫本なるがゆゑ、彼國にさへ多からず、他邦には書の名をだに聞知れる人なし。予は仙臺の士奥田直助といふ人の家にて一見しつるに、主人いへるは、過し年、京都の白木屋彥太郎方へも一部書寫して贈れりと。何とぞ世に弘めたき書なり。彼十府の里はよく〳〵尋るに、案内村と鹽竈との間にて、街道より左に入る所に其古跡あり。菅薦も今は名のみのこれり。

○吹浦砂磧

三月廿二日、出羽國酒田を朝とく起出て、吹浦といふ里を心ざし行く。其間六里にして、路傍に人家なく、又田畑も見えず、左は大海、右は鳥海山にて、過る所は渺々たる沙場なれば、道路もさだかならず。此邊の人だに迷ふ故にや、其間三五十間程づゝに、柱を建て道の目印とせり。酒田より一二里も來ぬらんと思ふ頃より、北風強く吹起り、沙の

のゝしる—いひさわぐ
養軒—南谿が弟子の名

とふの里は、いにしへ菅ごもの出し地にて、奥州の名所なり。仙臺の北東の方一二里の所にあり。此あたりは、玉田、横野、冠川、をだえの橋、多賀城、壺の石ぶみ、鹽竈の浦、野田の玉川、末の松山など、名高き名所二三里の間に集りつどへり。五月八日、朝とく仙臺を出て、原の町といふ所へ出て、それより案内といふ所へ來り、道行人に尋るに、知らずとのみ答ふ。此案内村には、酒食の店も多く見ゆれば、立よりて尋るに、店に立まはる女どもの、豆腐はこなたにあり、湯豆腐もかけんよし、奥へ入らせ給へといふにぞ、とうふにはあらず、尋るはとふの里の事なりといへども、其豆腐は御望に參らすべし、先入らせ給へと口々にのゝしる。養軒と顔見合て、扨も、所には住ぬれど、無下に心なき賤の女かなと笑ふ。すべて此十府に限らず、何れの國にても、其所の人に名所古跡を尋るに、よくしりてをしふる人は稀なり。能々心がけて、せつ〴〵尋求めざれば、行過て見殘したる地多し。殊に殘念なりしは、東の壺の石ぶみなりき。されば、何事も筆まめやかに書附たる書物抔あるは、世の人の大なるちからなり。此國などは名所も多き國なれば、書集たる書などは無きことにやと尋ねしに、仙臺の家中に觀跡聞老志といへる書あり、巻數廿許にも餘りて、奥羽兩國の名所古跡古事古歌に到るまで、委敷

在り

方外—僧侶醫師繪師などの稱

本草—本草學の略にて古の植物學

しに、竹の根盡く蟬に變化して、既に生氣備はれり。動搖して早地上に出かゝりたるもあり、いまだ半は竹にて半蟬に變じかゝりたるもあり。色々ありて、其數百千に及べり。初は小僧奴僕なども珍らしがりしが、あまり多きゆゑ、後にはもてはやすこともなく、住持は生類を害せんことを憐れみ、又土に埋み、蟬に化せしめられしとかや。珍らしさに、余も兎角して二ツ三ツを求得て、携へ歸れり。其中に、背中より竹生ひ出たるも有り。京に歸りて人に語るに、草の根の蟲に變ずること多きもの也、竹の蟬に變ずるもあるなりといへり。誠に、冬は蟲に成り、夏は草になるものも、本草などにも見えぬれば、是等も其類にてやあらん。されど、時によりて無情の物有情に變じ、又有情の無情に變ずるなど、常理の外なり。嘗て竹の半變じて魚となりかゝりたるをみしことあり。又近江の人の語りしは、長濱にて、山の芋を掘來り料理しけるに、中に釣針のありしことあり。其掘りし所、昔は湖水の傍なりし所といへば、此薯蕷はうなぎと變じたる事疑なしといへり。其物語りし人も貞實の人なりしが、いかゞありしや。

○十府の里

は片瀬の東南にて鎌倉に入る門戸に當る地

府中―南條郡に在り、今武生町といふ

坂本―近江滋賀郡比叡山の東麓に

かく先祖由來のある地ゆゑなるべし。鎌倉と名附し初は、昔大織冠鎌足公、鹿島參詣の時、此地の由比の濱に宿し給ひける夜、靈夢によりて、祕藏し給ひし鎌を當所大藏山の松岡に埋み給ふ。此ゆゑに鎌倉郡といふ。又大藏山を鎌倉山とも名附し也。其外神社佛閣甚多く、古跡舊蹤種々の名ある所ひしと竝べり。あげしるすにいとまあらず。余も二三日も四五日も逗留して、所々見廻り、寺社の舊記などをも一見せば、面白きことも多かるべきに、唯戸塚より入り來りて、其日鎌倉を草々に一見し、直に江島へ出ぬれば、何のいとまもなく、見殘して過ぬ。殘多し。

○竹根化蟬

越前府中の南二里に、粟田部といふ所あり。田舍ながら町作にて、此邊にての賑なる里也。古昔繼體天皇大跡部の皇子にて渡らせ給ひし時、此所に御座ありし故、地名を大跡部といひしを、後世あはたべといひ誤りたるにこそ。此所に粟生寺といふ寺あり。天台宗にて、坂本西教寺の末寺にて、頗る大地也。此寺の住持は、余が方外の親友ゆゑ、北遊の時も廿日許逗留せり。其前年の事なりし由、此寺の北面にある藪を掘開く事あり

つ、扇がやつなどと、谷々の名甚多し。頼朝卿の屋敷跡は、八幡宮の東の方にあり。此地少し平坦なれど、三四丁四五丁に過ず。其外の谷々のせまきことおして知るべし。屋敷跡の少し上の方に、頼朝卿の塚あり。今の薩摩侯の寄附の大なる石の手水鉢あり。其岡の東の上の方に、薩摩侯の先祖の墓所もあり。此あたり、薩州より寄附の物品々あり。猶近きうち造營も有べきよしなりとて、鎌倉の人々悅び居れり。八幡宮の東の方に、滑川とて細き流あり。青砥左衞門錢を落せし川なりといふ。其時の事は郊外のやうに聞えしが、其頃は、今の世の如く町家などは無りしにや。義經の腰越も、鎌倉を去る事、京と大津許も有べしと兼ては思ひ居しが、僅に一里許にも足らず。今の江戶のごとくならば、町の眞中なるべし。昔は何事も微々なる事にて、鎌倉といへども今の四五萬石の大名の城下程にも無き事と思はる。凡鎌倉は、高山も無く、大河も無く、要害の地ともいふべからず。唯小き山數里四方に連りて、波濤の如し。其間の谷々も甚せまく、打晴たる平地は絕てなし。但源氏にはゆゑある地なれば、頼朝の都し給ひしにや。伊豫守頼義鎭守府將軍に任じ、安倍の貞任征伐の爲に東國下向の時、石淸水八幡宮を此地に勸請し給ふ。其後に相摸守に任じ、鎌倉に下向ありて、此所にて義家出生し給ふとかや。

義經の腰越　|義經兄頼朝の勘氣に觸れ鎌倉に入るを得ず腰越に於て一通の歎狀を呈して陳辯せし事世に名高きを以てかくいふ也、腰越

東遊記 巻之一

橘南谿子著

○鎌倉

男山―石清水八幡宮
大刹―大寺
いてふ―本文いてうに作る
由比が濱―原本何れも由井が濱に作る

鎌倉は東武通行の人の見る所にして、珍らしからねど、又したしく其地に遊べば、昔の佛、山川別ては神社佛閣に殘りて、懷古の情にたへず。先鶴岡の八幡宮に詣づ。其壯麗男山につぐべし。佛寺には建長寺など最大刹なり。鶴岡、南面のきざはしを登れば、大なるいてふの木あり。昔、此宮の別當公曉、將軍實朝公を弑したる所なりと云。八幡宮の正面通、一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居あり。其鳥居筋を眞直に下れば、由比が濱に出る也。一の鳥居より由比が濱まで十八町なり。すべて鎌倉は皆山にて、地面甚狹し。纔に谷の間々に屋敷々々を構へ住居せし事と見ゆ。其故に、比企が谷、大藏がや

巻五

東西遊記目錄終

西遊記續編

卷一

卷二

卷三

卷四

卷三

卷四

卷五

巻五

巻五末

東遊記後編

巻一

巻二

巻三

東西遊記目錄

東遊記

卷一

卷二

卷三

卷四

南谿誌

凡例

一予醫學修行の爲に漫遊する事前後合せて五年、東西南北到らざる所なし。然るに、此書唯東西遊記と名附るものは、京を日本の中央とし、二つに分ちて東西とし、南北は其中にこむるもの也。

一予が漫遊、もと醫學の爲なれば、醫事にかゝれることは、雜談といへども別に記錄して、同志の人にも示す。唯此書は旅中見聞せる事を筆のついでにしるせるものにして、強て其事の虛實を正さず、誤りしるせる事も多かるべし。見る人其杜撰をとがむることなかれ。

一此書中にしるせる事々に就て、思ひ考ふることも多けれども、わざと此書中には愚按を加へず、議論取捨は見る人の心にあるべし。

らに千里の外をしるは、又なきたまものならずや。まいて、おのれは若きより遠遊のねがひはありながら、其かたはしにも及ばで、今はいたづらに頭の霜を重ね、閨の埋火をたのむのみなれば、わきて此記に心酔せりとなんこたへ侍りき。つひにこれをしるして橘君によせ侍るは、序ともなりなましや。

閑田子蒿蹊

なる書といふべし。さるにある人のいふ、此君子、人の爲にはかるはよし、自かへりみるにはいかに。其山川跋渉の間、幾たびか死地に入られたりしは、王陽がにくむ所、命をしるものは巖牆のもとにたゝざるのいましめにもたがへりと。予いふ、然り、しかれども、志ところあるものはまたかからでは其志成べからず。孔夫子の宋に窘み、陳蔡に戹し給ひしも、道を天下に施してんの志によりてなり。佛徒にしては玄奘三藏のごとき、流砂の難を犯されけるにこそ、其願はなりけらし。今橘君も其身をわすれて、醫療の術を極め、ひろく世を救ひ、遠く後にほどこさんの志なれば、其間には北方の强もまじるべけれど、其過はみづからしりて、門生の詩にも感悟せられたれば、他の口を入べからず。およそ此筆記を得て、居なが

ば、其山もまたしられず。中頃に能因西行の兩法師などこそけしかるさかひへも執行せられぬと聞ゆれど、紀行こまやかならず。後には宗祇法師あれど、是も名だゝる所計をあらく〳〵しるされたれば、其けしきさへ明らかならず。まして風土人情をや。わづかに熊野山中の小兒が米をしらず、越路の雪に妖怪のあらはれしなどいへるたぐひのみぞ、僻境のおもむきをしるのよしにはありける。こゝに此東西遊記は橘君子の著す所にして、其質かのかたきことどもをかね備へて、危を犯し、嶮を凌ぎ、年月を重ね、實をもて錄するところなり。其勇其志感ずるにあまりあり。はた仁義を基とせる物から、所々忠孝の人の行狀を記し、政の善惡をもおもはしむるは、一言半句の間にも人を勸るの微意みゆるなん、世に希有

東西遊記序

史遷が跡を追て、名山大川を探るは、丈夫のしわざなるべし、しかはあれど、官ある人は身を意にまかせず、處士は路費にとぼし、いかにともすべからずとなん、謝肇淛がなげきはさることなり。はた是にくはふるに、いとかたきことなんかずかずあるべき。まづ心剛に、身健ならざればあたはず。舊記をしらざれば勝地の感なし。文筆にともしければ錄すべからず。かく取あつむることのかなはねばにや、こゝにはさる人もしるせる文もいとまれなり。むかし郡縣の政なりし代、國々の守掾などにてくだれりし人々、歌よみしたる所々は、名所とて今も聞ゆれど、時うつりて、ありしにもあらぬが多く、國々の風土記といへるも大かたにほろびたれ

之疑、則是起沈痼也。其醫人之效亦捷矣。不必事於刀圭間。此豈與世之紀游蔓詞彌文、徒資風月之談、供觴詠之具而已者、可同日而語也哉。君其勿多讓焉。是爲序。

寛政乙卯秋八月

愚山松本愼

東西遊記序

石州別駕橘君、以攻醫漫遊四方。足跡殆遍天下。其所記載、率皆修治之案、經驗之方、而政有嘉績則必咨焉、人有卓行則必訪焉。及登名山、覽古蹟、歷問殊俗、搜采異聞者數十卷、名曰東西遊記。好事家往々傳誦之、至有謄寫而藏以爲帳中之祕者。書賈因屢請刻。君終弗肯久之。一日俄語余曰、此書之行非吾意也。何者、蓋家業著述猶未脫稿者巨多。而首用兎園册災木、恐致有識之誚。而會坊間射利之徒有謀私刻。於是不獲已遂授剞劂、將奈之何。盍爲吾書一言以辨於卷端。余乃竊謂曰、夫橘君爲人、志於道、勵於行、旁好唐詩、及國風。考鐘律試星度。其爲醫也、固亦隱乎小伎爾。而況此書就其中特又緒餘者乎。然善讀是編者、可以興起感發秉彝之良心、則是還元氣也。破井蛙之見、釋夏蟲

東西遊記に讓らず。唯憾む、版本いづれも假名遣竝に漢字の用法等に頗る誤謬の多きを。これ或は筆工の誤にて、原著者の關知せざることなるべし。
今本書を出版するに當りては、つとめて各漢字の送假名を一定し、句讀點の統一を圖り、假名遣を正し、漢字の誤謬の著しきを改めたり。その中、送假名、假名遣及び漢字の改訂は、前後の用例を考へてその正しきに從ひ、前後に用例の乏しきものは特に原文を首書して參照の便に供せり。語法に關しては一も改訂を加へたるものなし。

明治四十三年十月

校訂者　永井一孝

緒言

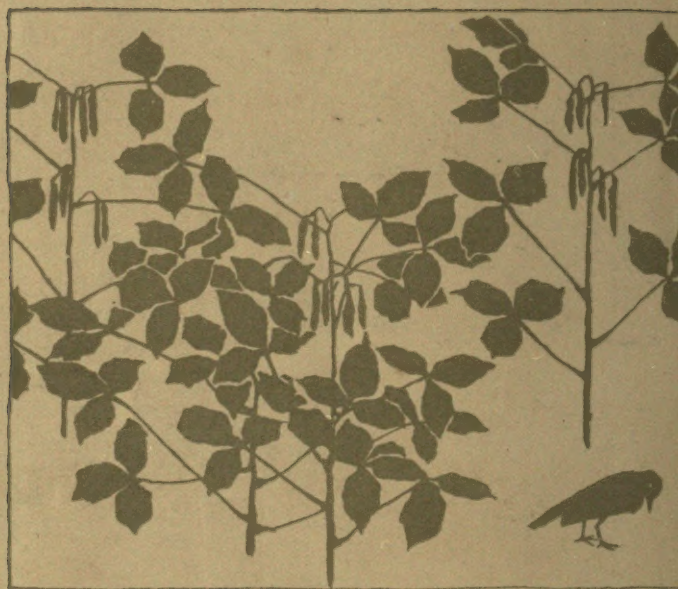
本書は橘南谿の著、西遊記五巻、續西遊記五巻、東遊記五巻、續東遊記五巻及び北窻瑣談前後編八巻を收む。

南谿、姓は橘、名は春暉、宮川を氏とす。別に梅華仙史の號あり。京都の人、醫を業とし、傍ら文學に通じ、音律を明かにす。漫遊は特にその好むところ、天明二年の秋より翌三年の秋にかけては山陽を經て九州及び四國をめぐり、四年の秋より六年の夏にわたりては東海東山北陸の諸州に遊びぬ。その間に見聞せる奇事異聞を錄したるもの、すなはち東西遊記正續編なり。文章平淡にして技巧を弄せず、讀み去り讀來る中に言ふべからざる妙味を感ぜしむ。北窻瑣談は隨筆なりと雖も、文章の妙亦必ずしも

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

東西遊記　全

北窓瑣談　全

Tachibana, Nankei
Tozai yuki 5th ed.